

仙台市文化財調査報告書

伊古間遺跡

—仙台市宮城美道町伊古間の古墳群調査報告書—

1995年3月

仙台市教育委員会

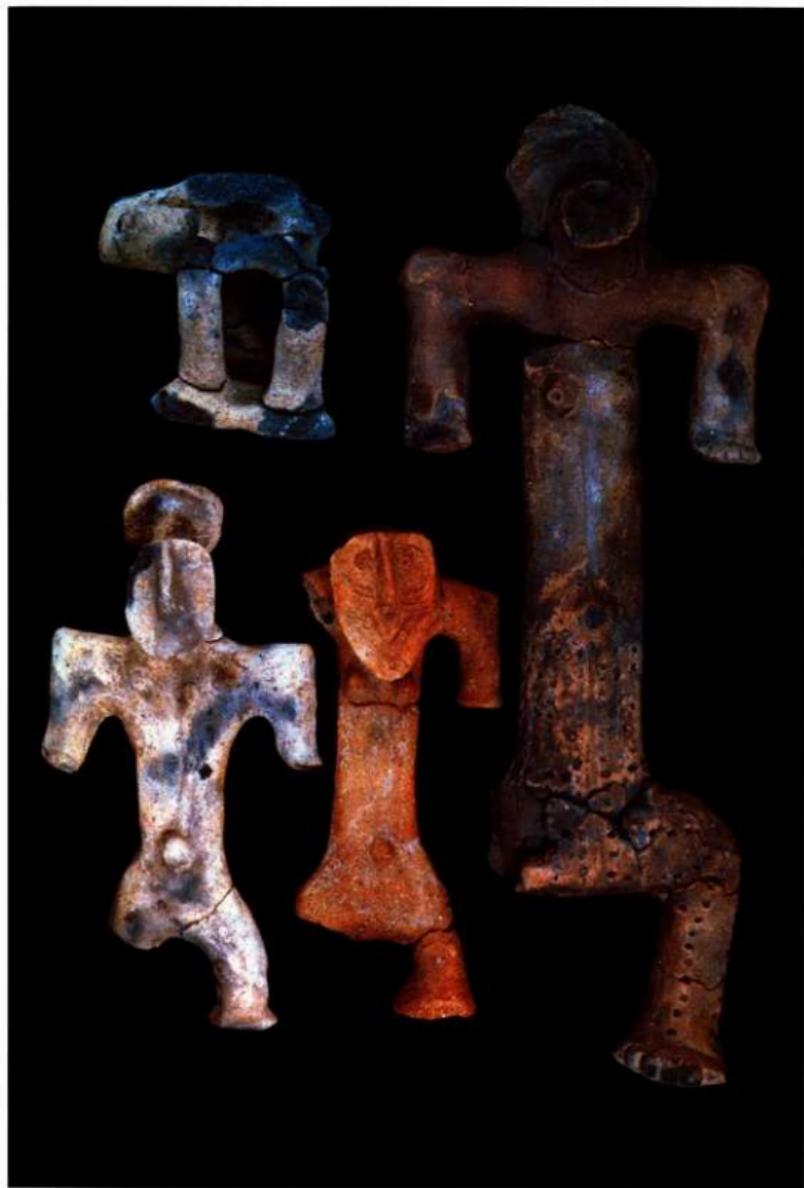
仙台市文化財調査報告書第193集

伊古田遺跡

—仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ—

1995年3月

仙台市教育委員会



原色图版 1 遗物包含层出土土偶



原色図版2 S114住居跡出土土器



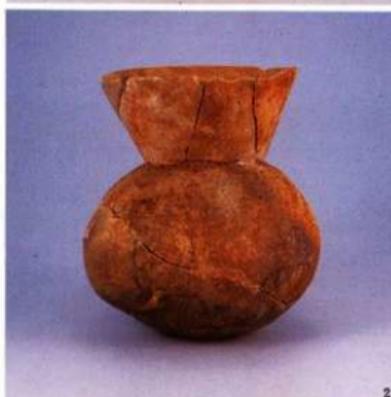
1



3



4



2



5

原色図版3 1~3 S114住居跡出土土器
4·5 緑釉・灰釉陶器

序 文

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しまして多大のご協力をいただき、誠に感謝にたえません。

昭和63年7月の高速鉄道南北線の開通は、当市にとりまして新しい時代への幕開けとなる画期的な事業でありました。翌平成元年4月には、全国で11番目の政令指定都市となり、以後21世紀へ向けての数々の事業が推進されております。

この高速鉄道の工事に際しては、我々の祖先の生活を語る多くの遺構や遺物が発見されました。本書にまとめました伊古田遺跡の調査におきましては、平安時代や古墳時代の集落の他、縄文時代後期の土器捨て場が見つかり、そこから日本最大級の土偶が出土しております。

発掘調査により得られた多くの成果は、地域の歴史をかたる貴重な資料でありますので、今後さまざまな場で公開し、充分に生かしていきたいものと考えております。

最後になりましたが、調査と整理にご尽力をいただきました皆様と、また本書の作成にあたりご助言、ご指導下さいました各位に対し、心から感謝を申し上げ、序といたします。

平成7年3月

仙台市教育委員会

教育長 坪山繁

例　　言

- 1 本書は仙台市高速鉄道建設に伴う遺跡調査報告書の第3冊目であり、伊古田遺跡の発掘調査成果についてまとめたものである。
- 2 遺跡の調査と本書の作成にかかわった職員は次のとおりである。
　　藤原信彦 吉岡恭平 斎野裕彦 荒井格 主沢光明 渡部紀 佐藤美智雄 千葉仁 高橋勝也
　　斎原・実測作業は藤原、吉岡が中心になって行なった。原稿執筆と編集は渡部が行ない、吉岡がこれらを補佐した。石器の観察と分類は吉岡が中心に行なった。
- 3 報告書作成にあたり、下記の方々にご指導をいただいた。(順不同・敬称略)
　　松本秀明・佐藤和彦・柳沢和明・原河英二・佐々木和博・阿部博志・手塚均・東北歴史資料館
- 4 石器石材は蟹澤聰史氏(東北大)に鑑定していただいた。
- 5 灰釉陶器と綠釉陶器は柴垣勇夫氏(愛知県陶磁資料館)に鑑定していただいた。
- 6 陶磁器の鑑定は文化財課 佐藤洋がおこなった。
- 7 鉄坪の観察には文化財課 平間亮輔の協力を得た。
- 8 大形土偶4点の実測は小川忠博氏の撮影により写真実測を行なった。その際の写真を遺物図版として掲載している。
- 9 野外調査および整理作業の参加者は、「高速鉄道報告書I」(1989)に記載している。
- 10 本遺跡の調査成果については、既に報報としてその内容の一部が紹介されているが、本書の記載内容がそれらに優先するものである。
- 11 調査の諸記録・実測図・写真・出土遺物等の全資料は、仙台市教育委員会が一括保管している。

凡　　例

- 1 図中の方位は真北を示す。磁北は7°20'西偏する。
- 2 遺跡地名表に用いた地形図は、国土地理院発行1/25000「仙台西北部」「仙台東北部」「仙台南西部」「仙台南部」である。
- 3 土層の色調の記載には、「新版標準土色帖」(小山・竹原:1973)を用いた。
- 4 遺構内層位の略号としてℓ1・ℓ2などと記載する場合もある。
- 5 遺構の略号は以下のとおりである。
　　住居跡-S I　　土坑-S K　　溝-S D　　河川跡-S R　　ピット-P
- 6 遺物登録にあたっては、以下の記号を用いた。
　　縄文土器-A　　土器器(非クロ)-C　　土器器(クロ)-D　　須恵器-E
　　陶器-I　　磁器-J　　土製品-P　　剝片石器-K a　　疊石器・磨製石斧-K c　　鉄製品-N
- 7 図の縮尺は原則として、遺構を1/60、土器・疊石器を1/3、土製品・石錐を1/2、剝片石器を2/3とした。
- 8 本文中使用の「灰白色火山灰」(庄子・山田:1980)の降下年代は、現在10世紀前半頃と考えられている(白鳥:1980)。
- 9 焼け面、ピットの柱痕跡、石器の表面等の表現としてスクリーントーンを用いた。焼け面のうち色の濃いスクリーントーンは、焼けの程度が比較的強いことを示している。

本文目次

I 調査に至る経過	1
1 調査に至る経過	1
3 調査要項	4
II 遺跡の立地と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	8
III 調査の方法と概要	11
1 調査の方法	11
2 調査の概要	13
IV 基本層序	14
1 各調査区の層序	14
2 各層の対応について	18
V 検出された遺構と遺物	27
1 古墳時代以降の遺構と遺物	27
(1) 住居跡	27
(2) 掘立柱建物跡	76
(3) 土坑	76
(4) 溝跡	89
(5) 焼土遺構	90
(6) 小溝状遺構	93
(7) ピット	93
(8) 河川跡	96
(9) 遺構以外の出土遺物	100
2 繩文時代の遺構と遺物	103
(1) 遺物包含層	103
(2) II・III区出土遺物	205
(3) 河川跡とその出土遺物	224
(4) 土製品	249
VI 考察	260
1 古墳～平安時代の遺構と遺物について	260
(1) 土器について	260
(2) 遺構について	276
2 繩文時代の遺物について	279
(1) 包含層出土土器	279
(2) 石錐	287
VII まとめ	289

図表目次

第1回 遺跡の位置	1	第40回 S I 10住居跡	52
第2回 全体の調査区配置図	2	第41回 S I 10出土遺物	53
第3回 遺跡の位置	5	第42回 S I 11住居跡	54
第4回 名取川下流域の地形分類図	6	第43回 S I 11出土遺物 (1)	55
第5回 挂川改修前の地形図	7	第44回 S I 11出土遺物 (2)	56
第6回 岸辺の遺跡分布図	9	第45回 S I 12住居跡 (1)	58
第7回 調査区の配置	10	第46回 S I 12住居跡 (2)	59
第8回 グリッド配置図	12	第47回 S I 12出土遺物 (1)	60
第9回 地区の名称	13	第48回 S I 12出土遺物 (2)	61
第10回 断面図作成位置	15	第49回 S I 13住居跡	63
第11回 基本層序A	19・20	第50回 S I 13出土遺物	64
第12回 基本層序B	19・20	第51回 S I 14住居跡	66
第13回 基本層序C	19・20	第52回 S I 14住居跡遺物出土状況	67
第14回 基本層序E	19・20	第53回 S I 14出土遺物 (1)	68
第15回 基本層序D	21・22	第54回 S I 14出土遺物 (2)	69
第16回 基本層序F	23	第55回 S I 16住居跡	70
第17回 土層の掲示	24	第56回 S I 17住居跡(1)	71
第18回 古墳時代以降の遺構配置図	25・26	第57回 S I 17住居跡(2)	72
第19回 S I 1住居跡	28	第58回 S I 17出土遺物	73
第20回 S I 1出土遺物	29	第59回 S I 18住居跡	74
第21回 S I 2住居跡	30	第60回 S I 18出土遺物	75
第22回 S I 2出土遺物	31	第61回 S I 19住居跡	75
第23回 S I 3住居跡	33	第62回 樹立柱礎物	77
第24回 S I 3出土遺物 (1)	34	第63回 S K 1～8土坑	79
第25回 S I 3出土遺物 (2)	35	第64回 S K 9～21土坑	81
第26回 S I 4住居跡	36	第65回 S K 22～28土坑	83
第27回 S I 4出土遺物	37	第66回 S K 29～31土坑	84
第28回 S I 5住居跡	38	第67回 土坑出土遺物 (1) SK 4	85
第29回 S I 5出土遺物 (1)	39	第68回 土坑出土遺物 (2)	86
第30回 S I 5出土遺物 (2)	40	第69回 土坑出土遺物 (3)	87
第31回 S I 6出土遺物	41	第70回 土坑出土遺物 (4)	88
第32回 S I 6住居跡	42	第71回 土坑出土遺物 (5)	89
第33回 S I 7住居跡	44	第72回 溝跡	91
第34回 S I 7出土遺物	45	第73回 S D 6出土遺物	92
第35回 S I 8住居跡	46	第74回 II区の焼土と柱穴状遺構	93
第36回 S I 8出土遺物 (1)	47	第75回 小導孔状構造・ピット (1)	94
第37回 S I 8出土遺物 (2)	48	第76回 ピット (2)	95
第38回 S I 9住居跡	49	第77回 S R 4河川跡断面図	97
第39回 S I 9出土遺物	50	第78回 S R 4出土遺物 (1)	98

第79回	S R 4 出土遺物 (2)	99	第12回	遺物包含層出土上器 (3)	143
第80回	遺構以外の出土遺物 (1)	101	第12回	遺物包含層出土土器 (4)	144
第81回	遺構以外の出土遺物 (2)	102	第12回	遺物包含層出土土器 (5)	145
第82回	遺物包含層の範囲	104	第12回	遺物包含層出土上器 (6)	146
第83回	土器片出土点数	105	第12回	遺物包含層出土土器 (7)	147
第84回	グリッドの分割	106	第12回	遺物包含層出土土器 (8)	148
第85回	遺物包含層下の地形	106	第12回	遺物包含層出土土器 (9)	149
第86回	遺物包含層出土土器 (1)	109	第12回	遺物包含層出土土器 (10)	150
第87回	遺物包含層出土土器 (2)	110	第12回	遺物包含層出土土器 (11)	151
第88回	遺物包含層出土土器 (3)	111	第12回	遺物包含層出土土器 (12)	152
第89回	遺物包含層出土土器 (4)	112	第12回	遺物包含層出土土器 (13)	153
第90回	遺物包含層出土土器 (5)	113	第12回	遺物包含層出土土器 (14)	154
第91回	遺物包含層出土土器 (6)	114	第12回	遺物包含層出土土器 (15)	155
第92回	遺物包含層出土土器 (7)	115	第12回	遺物包含層出土土器 (16)	156
第93回	遺物包含層出土土器 (8)	116	第12回	遺物包含層出土土器 (17)	157
第94回	遺物包含層出土土器 (9)	117	第12回	遺物包含層出土土器 (18)	158
第95回	遺物包含層出土土器 (10)	118	第12回	遺物包含層出土土器 (19)	159
第96回	遺物包含層出土土器 (11)	119	第12回	銅代模様式器	159
第97回	遺物包含層出土土器 (12)	120	第12回	遺物包含層出土土器 (20)	160
第98回	遺物包含層出土土器 (13)	121	第12回	遺物包含層出土土器 (21)	161
第99回	遺物包含層出土土器 (14)	122	第12回	遺物包含層出土土器 (22)	162
第100回	遺物包含層出土土器 (15)	123	第12回	遺物包含層出土土器 (23)	163
第101回	遺物包含層出土土器 (16)	124	第12回	遺物包含層出土土器 (24)	166
第102回	遺物包含層出土土器 (17)	125	第12回	遺物包含層出土土器 (25)	167
第103回	遺物包含層出土土器 (18)	126	第12回	遺物包含層出土土器 (26)	168
第104回	遺物包含層出土土器 (19)	127	第12回	遺物包含層出土土器 (27)	169
第105回	遺物包含層出土土器 (20)	128	第12回	遺物包含層出土土器 (28)	170
第106回	遺物包含層出土土器 (21)	129	第12回	遺物包含層出土土器 (29)	171
第107回	遺物包含層出土土器 (22)	130	第12回	遺物包含層出土土器 (30)	172
第108回	遺物包含層出土土器 (23)	131	第12回	遺物包含層出土土器 (31)	173
第109回	遺物包含層出土土器 (24)	132	第12回	遺物包含層出土土器 (32)	174
第110回	遺物包含層出土土器 (25)	133	第12回	遺物包含層出土土器 (33)	175
第111回	遺物包含層出土土器 (26)	134	第12回	遺物包含層出土土器 (34)	176
第112回	遺物包含層出土土器 (27)	135	第12回	遺物包含層出土土器 (35)	177
第113回	遺物包含層出土土器 (28)	136	第12回	遺物包含層出土土器 (36)	179
第114回	遺物包含層出土土器 (29)	137	第12回	遺物包含層出土土器 (37)	180
第115回	遺物包含層出土土器 (30)	138	第12回	遺物包含層出土土器 (38)	181
第116回	遺物包含層出土土器 (31)	139	第12回	遺物包含層出土土器 (39)	182
第117回	遺物包含層出土土器 (32)	140	第12回	遺物包含層出土土器 (40)	183
第118回	遺物包含層出土土器 (33)	141	第12回	遺物包含層出土土器 (41)	184
第119回	遺物包含層出土土器 (34)	142	第12回	遺物包含層出土土器 (42)	185

第16回 遺物包含層出土砾石器 (8).....	186	第20回 I 北区出土土器 (2).....	230
第16回 遺物包含層出土砾石器 (9).....	187	第20回 I 北区出土土器	231
第16回 遺物包含層出土砾石器 (10).....	188	第20回 S R 1 出土土器	231
第16回 遺物包含層出土砾石器 (11).....	189	第20回 S R 1 断面図	232
第16回 遺物包含層出土砾石器 (12).....	190	第20回 S R 5・6・7 断面図	233・234
第16回 遺物包含層出土砾石器 (13).....	191	第20回 I 南区 7 層出土土器 (1).....	236
第16回 遺物包含層出土砾石器 (14).....	192	第20回 I 南区 7 層出土土器 (2).....	237
第16回 遺物包含層出土砾石器 (15).....	193	第20回 I 南区 7 層下部出土土器 (1).....	238
第16回 遺物包含層出土砾石器 (16).....	194	第20回 I 南区 7 層下部出土土器 (2) 他	239
第16回 遺物包含層出土砾石器 (17).....	195	第21回 I 南区河川跡出土土器 (1).....	240
第16回 遺物包含層出土砾石器 (18).....	196	第21回 I 南区河川跡出土土器 (2).....	241
第16回 遺物包含層出土砾石器 (19).....	197	第21回 I 南区河川跡出土土器 (3).....	242
第16回 遺物包含層出土砾石器 (20).....	198	第21回 I 南区河川跡出土土器 (4).....	243
第16回 遺物包含層出土砾石器 (21).....	199	第22回 遺構出土の绳文土器	243
第16回 遺物包含層出土砾石器 (22) 石錐	200	第22回 遺構山上の制片石器	244
第16回 遺物包含層出土砾石器 (23) 石錐	201	第22回 遺構出土の砾石器 (1).....	245
第16回 遺物包含層出土砾石器 (24) 石錐	202	第22回 遺構出土の砾石器 (2).....	246
第16回 遺物包含層出土砾石器 (25) 石錐	203	第22回 地区・層位不明の土器	247
第16回 遺物包含層出土砾石器 (26) 石錐	204	第22回 地区・層位不明の制片石器	248
第16回 遺物包含層出土砾石器 (27) 石錐	205	第22回 地区・層位不明の砾石器	248
第16回 III区出土土器 (1).....	207	第22回 土偶 (1).....	250
第16回 III区出土土器 (2).....	208	第22回 土偶 (2).....	251
第16回 III区出土土器 (3).....	209	第22回 土偶 (3).....	252
第16回 III区出土土器 (4).....	210	第22回 土偶 (4).....	253
第16回 III区出土剥片石器	211	第22回 土偶 (5).....	254
第16回 III区出土砾石器 (1).....	212	第22回 土偶 (6).....	255
第16回 III区出土砾石器 (2).....	213	第22回 土偶 (7).....	256
第16回 II区出土土器 (1).....	214	第22回 土製品 (1).....	257
第16回 II区出土土器 (2).....	215	第22回 土製品 (2).....	258
第16回 II区出土土器 (3).....	216	第22回 土製円盤	259
第16回 II区出土土器 (4).....	217	第22回 ミニチュア土器	260
第16回 II区出土土器 (5).....	218	第22回 I 群土器集成図 (1).....	262
第16回 II区出土土器 (6).....	219	第22回 I 群土器集成図 (2).....	264
第16回 II区出土砾石器 (1).....	220	第22回 II 群土器集成図	266
第16回 II区出土砾石器 (2).....	221	第22回 III 群土器集成図	268
第16回 II区出土砾石器 (3).....	222	第22回 III 群土器集成図 (1).....	269
第16回 II区出土砾石器 (4).....	223	第22回 III 群土器集成図 (2).....	270
第16回 II区出土砾石器 (5).....	223	第22回 底跡口徑比の比較	272
第16回 深掘り区および河川跡	225・226	第24回 小堀土器の法量比較 (1).....	274
第20回 I 北区深掘り断面図	227・228	第24回 奇堀土器の法量比較 (2).....	274
第20回 I 北区出土土器 (1).....	229	第30回 遺構の時刻別分布	278

第23回 鑄造土器の分布状況	281	第59回 石錐の重量分布図	288
第24回 遺物包含層出土土器集成図(1)	283	第1表 調査一覧表	3
第24回 遺物包含層出土土器集成図(2)	284	第2表 ピット集計表	96
第24回 遺物包含層出土土器集成図(3)	285	第3表 四群上春の出土状況	271
第24回 遺物包含層出土土器集成図(4)	286	第4表 口縁・部鉢片の割合	282
第24回 遺物包含層出土土器集成図(5)	287	第5表 底部江戸の割合	282
第26回 石錐の長軸分布図	288		

写 真 目 次

写真1 遺跡周辺の空中写真	295	写真31 S I 12細部	309
写真2 遺跡周辺の空中写真	296	写真32 S I 13住居跡	310
写真3 I 北区全景	297	写真33 S I 13細部	310
写真4 III区全景	297	写真34 S I 14住居跡	311
写真5 基本順序	298	写真35 S I 14細部	311
写真6 試掘トレンチ	299	写真36 S I 14	312
写真7 S I 1住居跡	299	写真37 II区調査状況	313
写真8 S I 2住居跡	300	写真38 S I 16住居跡	313
写真9 S I 3住居跡	300	写真39 S I 15住居跡	314
写真10 S I 2ピット1断面	301	写真40 S I 15細部	314
写真11 S I 3細部	301	写真41 S I 18住居跡	315
写真12 S I 4住居跡	301	写真42 S I 19住居跡	315
写真13 S I 5住居跡	302	写真43 S B 1遺物跡	316
写真14 S I 5細部	302	写真44 S B 1柱穴	316
写真15 S I 6住居跡	303	写真45 作業風景	316
写真16 S I 6細部	303	写真46 土坑(1)	317
写真17 S I 7住居跡	304	写真47 土坑(2)	318
写真18 S I 8住居跡	304	写真48 土坑(3)	319
写真19 S I 8断面	305	写真49 溝跡	320
写真20 S I 8遺物出土状況	305	写真50 焼土遺構	321
写真21 S I 9住居跡断面	305	写真51 III区小溝状遺構群・ピット	321
写真22 S I 9住居跡	306	写真52 I 北区ピット群	322
写真23 S I 9住居跡	306	写真53 IV区ピット群	322
写真24 S I 9細部	306	写真54 S R 4河川跡	323
写真25 S I 10住居跡	307	写真55 遺物包含層(1区)	324
写真26 S I 10カマド	307	写真56 遺物包含層(III区)	325
写真27 S I 11住居跡	308	写真57 遺物出土状況	326
写真28 S I 11細部	308	写真58 遺物出土状況	327
写真29 S I 10・11住居跡	308	写真59 遺物包含層下の状況	327
写真30 S I 12住居跡	309	写真60 作業風景	327

写真61	現地説明会	327	写真39	III区各層出土遺物 (2)	362
写真62	河川跡 (1)	328	写真40	II区各層出土遺物 (1)	362
写真63	河川跡 (2)	329	写真41	II区各層出土遺物 (2)	363
写真64	I北区櫛觸	329	写真42	I北区各層出土遺物 (1)	363
写真65	深掘りトレンチ	329	写真43	I北区各層出土遺物 (2)	364
写真66	S I 1・2・3住居跡出土遺物	330	写真44	I南区7層出土遺物 (1)	364
写真67	S I 4・5・6住居跡出土遺物	331	写真45	I南区7層出土遺物 (2)	365
写真68	S I 7・8・9・10住居跡出土遺物	332	写真46	I南区7層下部他出土遺物	365
写真69	S II 1住居跡出土遺物	333	写真47	I南区河川跡出土遺物 (1)	365
写真70	S II 2・13住居跡出土遺物	334	写真48	I南区河川跡山上出土遺物 (2)	366
写真71	S II 14住居跡出土遺物	335	写真49	達構出土遺物	366
写真72	S II 17・18住居跡 S K 4・5土坑出土遺物	336	写真50	地区・層位不明の遺物	366
写真73	S K 8・16・17・23土坑出土遺物	337	写真51	土偶 (1)	367
写真74	S K 25・27土坑 S D 6調跡		写真52	土偶 (2)	368
	S R 4河川跡出土遺物	338	写真53	土偶・土製品	369
写真75	S R 4河川跡 遺構以外の出土遺物	339	写真54	土製品	370
写真76	遺構以外の出土遺物	340			
写真77	遺物包含層出土土器 (1)	340			
写真78	遺物包含層出土土器 (2)	341			
写真79	遺物包含層出土土器 (3)	342			
写真80	遺物包含層出土土器 (4)	343			
写真81	遺物包含層出土土器 (5)	344			
写真82	遺物包含層出土土器 (6)	345			
写真83	遺物包含層出土土器 (7)	346			
写真84	遺物包含層出土土器 (8)	347			
写真85	遺物包含層出土土器 (9)	348			
写真86	遺物包含層出土土器 (10)	349			
写真87	遺物包含層出土土器 (11)	350			
写真88	遺物包含層出土土器 (12)	351			
写真89	遺物包含層出土土器 (13)	352			
写真90	遺物包含層出土土器 (14)	353			
写真91	遺物包含層出土土器 (15)	354			
写真92	遺物包含層出土小器細部	354			
写真93	遺物包含層出土剝片石器 (1)	355			
写真94	遺物包含層出土剝片石器 (2)	356			
写真95	遺物包含層出土剝片石器 (3)	357			
写真96	遺物包含層出土礫石器 (1)	358			
写真97	遺物包含層出土礫石器 (2)	359			
写真98	遺物包含層出土礫石器 (3)	360			
写真99	遺物包含層出土礫石器 (4)	361			
写真100	III区各層出土遺物 (1)	361			

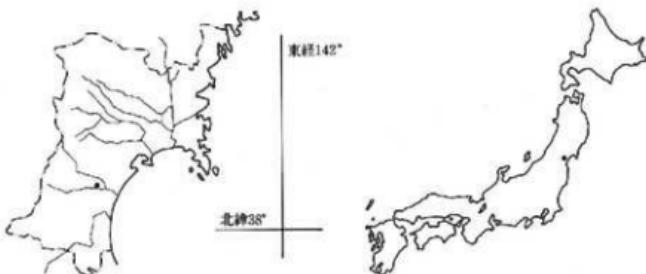
I 調査に至る経過

1 調査に至る経過

仙台市は古くから東北地方の中枢都市としての役割を担ってきており、平成元年4月には政令指定都市に移行し、現在も発展を続けている。それに伴う都市整備の一環として、昭和63年7月より、高速鉄道南北線が運行を開始しており、渋滞のない交通手段として、市民生活に欠くことのできないものとなっている。

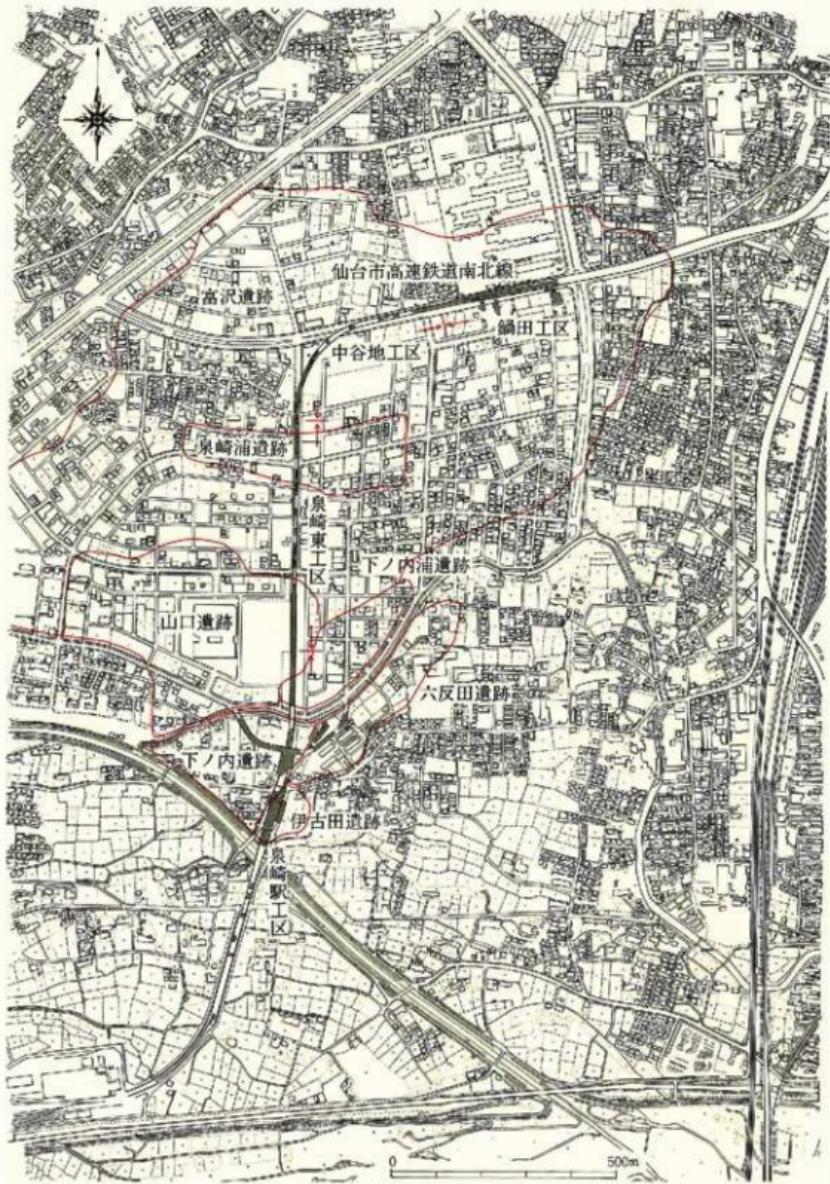
高速鉄道南北線は、仙台駅を中心に南北に長く、北は泉中央駅から南は富沢駅に至るルートである。建設工事はその地形によって、山岳トンネル工法・シールド工法・開削工法・高架方式の4つの手法が用いられている。

仙台市教育委員会は、高速鉄道建設に先立ち、路線内及びその周辺の分布調査を行った（仙市教：1980）。その結果、北部の台ノ原・瓦山地区で五本松遺跡・堤町窯跡等、南部の富沢・大野田地区で泉崎浦遺跡・山口遺跡・六反田遺跡・伊古田遺跡等が位置していることが判明した。特に南部地域は多くの遺跡が分布しており、なおかつ沖積地の特徴として重層的に文化層が存在するため、周知の遺跡以外にも新たに遺跡が発見される可能性が大きい地域である。そのため仙台市教育委員会は、開削工法で建設される長町南駅（旧名称、鍋田駅）以南については遺跡の発掘調査を行うこととし、仙台市建設局高速鉄道建設本部との協議に入った。そして、昭和56年4月の下ノ内遺跡の調査より本格的な発掘調査を開始し、以後昭和61年の六反田遺跡の調査をもって、野外調査を終了した（第1表・第2図）。



第1図 遺跡の位置

1 調査に至る経過



第2図 全体の調査区配置図

第1表 調査一覧表

遺跡名・所在地	時代・漢字	調査期間	調査面積	担当者	行政区	報告書
宮沢遺跡 太白区東 崎1丁目 長町南 3丁目他	扇形地 中谷地耕作区 鳥居原地区 散布地・水田跡	第1次 S57.9.1~12.11 第1次 S57.8.25~12.23 第2次 S58.4.13~12.27 第1次 S57.10.6~1.9	約800m ² 約1830m ² 約500m ² 未記	吉岡、吉野、高橋(脚) 土坂光則、高橋勝生、 吉野利彦、荒井裕、 渡辺誠	牛谷地工区	仙台市文化財調査報 告書第126号
		第1次 S57.10.5~12.23 第2次 S58.2.3~2.12 第2次 S58.4.13~12.27 第3次 S59.3.5~3.23 第4次 S59.4.11~6.28 第4次 S60.4.10~8.9	約1300m ² 約1900m ² 約750m ² 約710m ² 未記	吉野、荒井、高橋 高野、荒井、渡辺忠志 高野、吉野、高橋	鶴田工区	仙台市高麗紙遺跡調査 報告書第1号 宮沢遺跡 (1989)
		S57.9.1~12.25 S58.5.5~2.6	約1200m ²	田中利和、吉岡	鶴田工区	
		第1次 S56.8.25~12.26 第2次 S58.4.13~12.23 第3次 S59.4.11~11.19	約3000m ²	吉野、吉岡、牛浦、 高野、丁賀仁、吉野、 高橋(脚)	鶴田工区 高橋工区	
六反田遺跡 太白区大野田字五反田、 六反田他	扇形地 山門跡 水田跡	第1次 S56.9.7~12.26 第1次 S57.1.6~1.18 第2次 S59.9.9~11.28 第3次 S61.4.22~12.26	約1200m ²	吉野、吉岡、高橋、 高野、吉野魚文		
		第1次 S56.6.17~12.26 S57.1.6~1.13	約3700m ²	佐藤勝、佐藤裕、桂 家、渡辺忠(脚)、仙台 美智雄、吉野、工藤 好司、高野(脚)、井 本英	高橋工区 二久	仙台市文化財調査報 告書第136号 仙台市高麗紙遺跡調査 報告書第1号解説書 II (1990)
		第2次 S57.4.12~12.25 第3次 S58.4.13~12.8 第4次 S59.4.11~5.26	未記			
		第1次 S58.4.15~12.27 第2次 S59.3.5~3.23 第3次 S59.4.25~8.11 第3次 S61.8.4~9.5	約2100m ²	桂家、佐藤(脚)、吉 野、吉野、荒井、工 藤、千葉、高橋(脚)	鶴田工区	本書
伊山田遺跡 太白区大野田字伊山田	扇形地 集落跡					
泉崎遺跡上区	扇形地	S57.4.12~7.1 450m ²	東久保(脚)、水田跡	吉野、吉野、荒井、高橋(脚)	宮沢・泉崎遺跡	本調査へ移行
中谷地T区	扇形地	S57.6.4~8.11 710m ²	水田跡	吉岡、土浜、高橋(脚)	宮沢遺跡	本調査へ移行
中谷地工区	扇形地	S58.5.25~6.30 28m ²	未記	吉野、荒井		
鶴田工区	扇形地	S57.7.5~10.4 350m ²	水田跡	吉野、荒井		
泉崎駒工区	扇形地	S57.10.25~11.28 280m ²	未記	桂家、吉野(脚)		
泉崎駒工区	扇形地	S58.4.13~4.19 85m ²	未記	桂家、吉野(脚)		
中谷T区	扇形地	S57.10.25~11.4 72m ²	未記	桂家、吉野(脚)		

(試掘)

工区名	調査面積	面積	発見状況	担当者	遺跡名	参考
泉崎遺跡上区	S57.4.12~7.1 450m ²	東久保(脚)、水田跡	吉野、吉野、荒井、高橋(脚)	宮沢・泉崎遺跡	本調査へ移行	
中谷地T区	S57.6.4~8.11 710m ²	水田跡	吉岡、土浜、高橋(脚)	宮沢遺跡	本調査へ移行	
中谷地工区	S58.5.25~6.30 28m ²	未記	吉野、荒井			
鶴田工区	S57.7.5~10.4 350m ²	水田跡	吉野、荒井			
泉崎駒工区	S57.10.25~11.28 280m ²	未記	桂家、吉野(脚)			
泉崎駒工区	S58.4.13~4.19 85m ²	未記	桂家、吉野(脚)			
中谷T区	S57.10.25~11.4 72m ²	未記	桂家、吉野(脚)			

2 伊古田遺跡の調査に至る経過

高速鉄道南北線の南の終着駅として建設されるのが富沢駅（旧名称、泉崎駅）である。建設予定地は伊古田遺跡の範囲内にあたるため、発掘調査を行うこととした。対象地域は駅舎の建設部分と、東側の駅前広場に相当する市道「下ノ内・塚田」線の部分である。駅舎部分は昭和58年4月より昭和59年8月にかけて、市道部分は昭和61年8月から9月にかけて調査を行った。調査に際し、生活道路に接する調査区では、安全確保のためあらかじめシートパイルを打ち込んだ。また、調査時の排土の運搬にはペルトコンベアを使用した。これらの設営には、建設工事担当業者の協力を得た。

3 調査要項

- 遺跡名 伊古田遺跡（宮城県登録番号01191、仙台市登録番号C-196）
所在地 仙台市太白区大野田字塚田
調査目的 高速鉄道南北線建設に伴う事前調査
調査面積 約2100m²
調査主体 仙台市教育委員会
調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係（昭和61年4月より文化財課調査係）
主 事 篠原信彦 吉岡恭平 T.藤哲司 斎野裕彦 荒井 格
教 論 佐藤美智雄 千葉 仁
派遣職員 高橋勝也
調査期間 昭和58年4月15日～12月27日 （試掘 昭和58年4月13日～4月19日）
昭和59年3月5日～3月23日
昭和59年4月11日～8月11日
昭和61年8月4日～9月5日
調査協力 仙台市建設局高速鉄道建設本部 仙建工業・奥田建設共同企業体
調査参加者、整理参加者については「高速鉄道報告書I」（1989）に記載している。

昭和59年（1984）10～11月に、今回の調査区の約70m東の地点を、共同住宅の建設に伴い調査している（第7図）。古墳時代のものと考えられる円形周溝、小溝状遺構群、ピットを検出している（金森・渡辺：1985）。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

仙台市域の地形は、北西部の丘陵・山地と南東部の平野（宮城野海岸平野）とに大別される。海岸平野のうち、広瀬川と名取川にはさまれた低平な地域は郡山低地と呼ばれており、西縁は地質構造線、長町一利府線で丘陵・段丘地域と接している。郡山低地は名取・広瀬の両河川およびその間を流れる荒川の影響を強く受けしており、旧河道、自然堤防、後背湿地があちこちに見られる（第4図）。

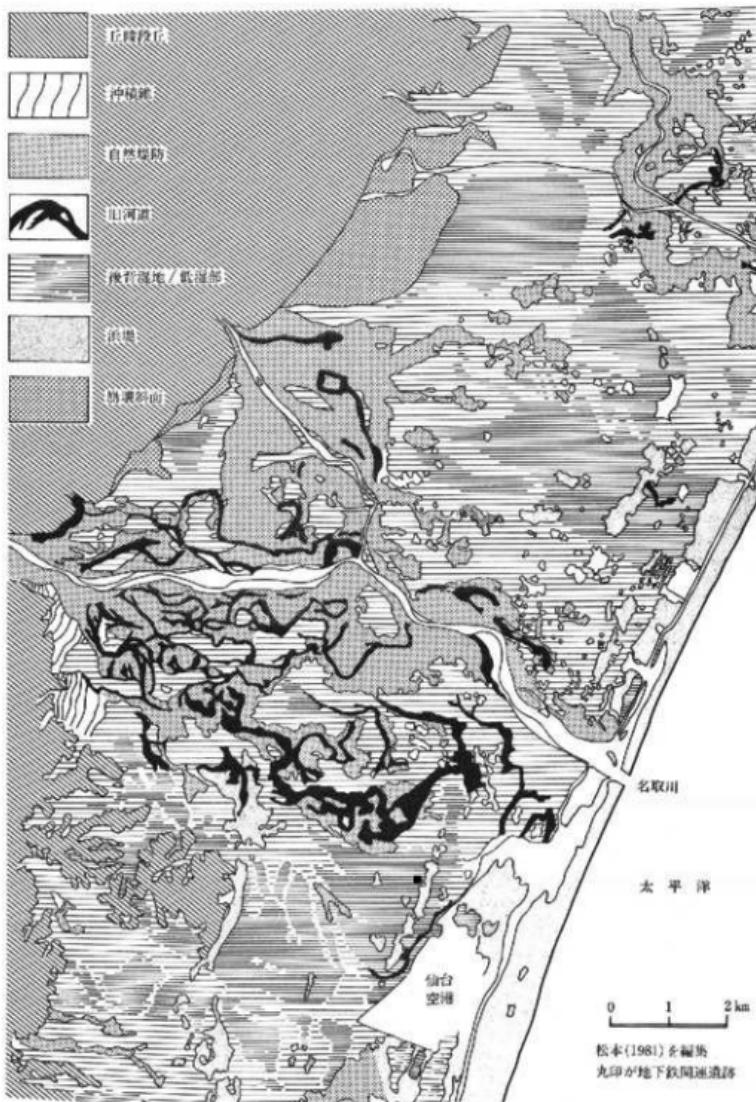
伊古田遺跡はJR長町駅の南西約2kmに位置する。郡山低地の南部にあたり、名取川の北側、荒川の旧流路の南側に位置する。荒川の南側の自然堤防と、名取川の北側の自然堤防にはさまれた平野（後背湿地）に立地する（仙台市科学館編「仙台市地形区分図」による）。遺跡の構成土壌は、河川堆積土である砂、シルトが主体を占める。標高は12.4m前後であり、西から東にむかひ若干の傾斜が見られる。調査前の状況は、水田および畑地であった（第5図）。

なお、周辺地域を含めた地形環境については、仙台市報告書126集「高速鉄道報告書I」（1989）、同149集「富沢遺跡」（1991）に詳しいので参照されたい。

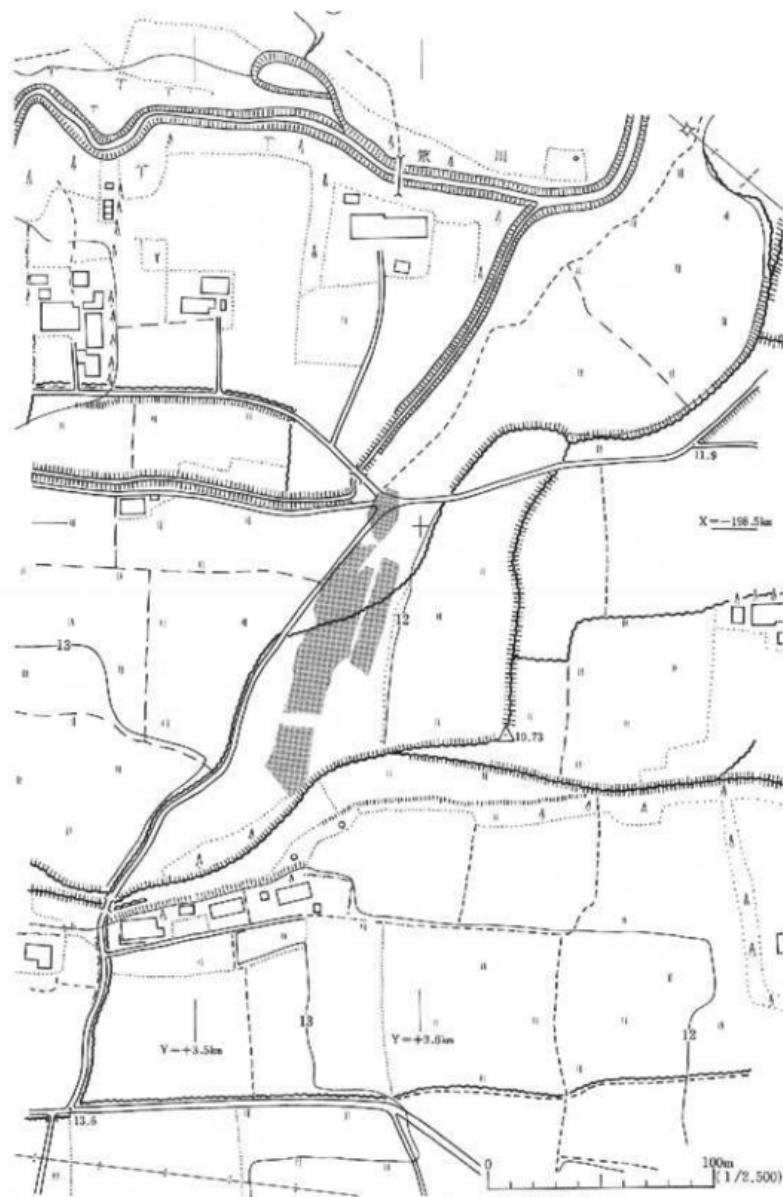


第3図 遺跡の位置

1 地理的環境



第4図 名取川下流域の地形分類図



第5図 斎川改修前の地形図（トーン部が調査区）
昭和33年測図仙台市都市計画図（1/3,000）を再トレース

2 歴史的環境

伊古田遺跡周辺の歴史的環境については、広域的な視点からは「高速鉄道報告書Ⅰ」(1989)に詳しいので、ここでは近接する遺跡を中心に簡単に述べたい(第6図)。

当遺跡周辺における最古の人類の足跡は、青葉山遺跡、山田上ノ台遺跡、北前遺跡で発見された前期旧石器時代にさかのぼる。3遺跡とも段丘上に位置する。後期旧石器時代では、当地の北1kmに位置する富沢遺跡(6)30次調査地点で石器や生活跡が樹木などと共に発見され、低地にも当時の人居跡が進出していたことがうかがえる。

縄文時代は、早期前葉以降の生活跡が下ノ内浦遺跡(4)、山口遺跡(5)をはじめとして残されているが、特に中期から後期にかけての痕跡が濃厚であり、上野遺跡(17)、北前遺跡、山田上ノ台遺跡、下ノ内浦遺跡(2)、下ノ内浦遺跡、山口遺跡、大野田遺跡(11)などから多くの遺構や遺物が発見されている。

弥生時代になると当遺跡北側の富沢遺跡では、後背湿地という地形的特質を生かして水田が営まれた。特に、中期の梯形圃式期の水田が広範囲で見つかっている。また、下ノ内浦遺跡からは石庵丁を副葬した墓壙が発見されている。

古墳時代には、五反田古墳(8)、春日社古墳をはじめとする多くの円墳が築かれ、大野田古墳群(9)を形成する。その多くは埴輪を伴うものであり、おおむね5~6世紀に築かれたものである。古墳時代の水田跡は、富沢遺跡の北部に特に良好に残されている。7世紀中頃には、北東約2kmに郡山遺跡(28)が成立する。ここは名取郡もしくは陸奥国関連の国家的施設と考えられ、この遺跡の成立をもって当地域は律令体制に組み込まれたと考えられよう。

平安時代になると遺跡数が増える傾向にあり、集落跡、水田跡と共に各所で発見される。特筆される点は、富沢遺跡の水田において真北方向の畦畔が109m前後の間隔で検出されることから、条里型土地割の存在が確認されることである。現在のところこれらを確認し得るのは荒川以北である。中世の遺構は近年明らかになりつつある。北側の下ノ内浦遺跡からは多くの柱穴群が発見されている。東600mに位置する王ノ塙遺跡(10)からは、堀で囲まれた屋敷跡が発見され、鎌倉~室町時代のものと考えられている。西1kmには富沢館跡(16)があり、室町時代のものとされている。富沢遺跡では、水田跡と共に建物跡も見つかっている。

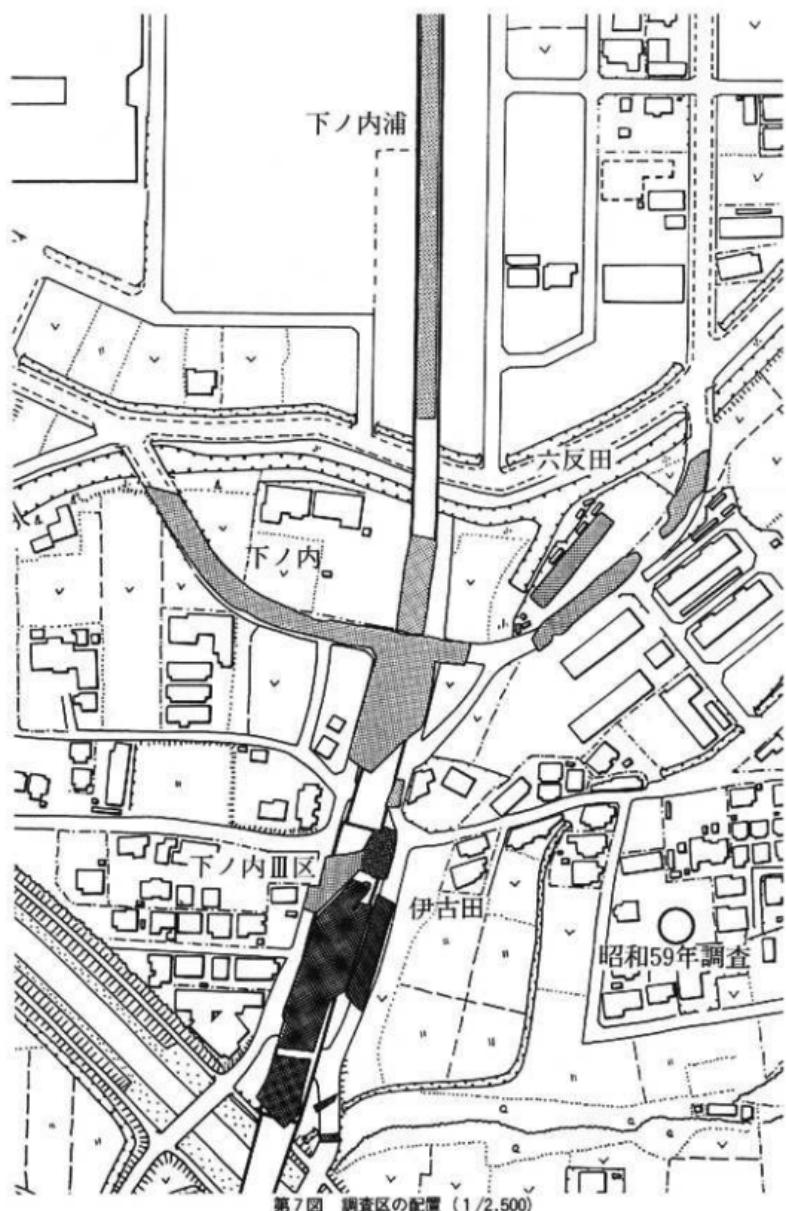
近世の当地域は名取郡北方大野田村となり、安永元年(1772年)完成の「封内風土記」によれば、戸口45戸、神社2、観音堂1、王塙と称す古墳が1とされている。明治22年には西多賀村となり、昭和7年に仙台市に編入された。それまでの水田、畑地といった歴史的な景観に変化が生じ始めたのは昭和51年に荒川の流量調整のための新荒川が完成したことと、昭和48年以後、富沢地区の区画整理事業が行なわれてからである。



No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代
1	伊古田遺跡	自然堤防 編文(後・晩)・古墳・奈良・平安		16	葛沢遺跡	自然堤防 編文(後)	中世
2	下ノ内遺跡	自然堤防 編文(後)・古墳・奈良・平安・中世		17	上野遺跡	段丘 編文(中)・奈良・平安	
3	六反田遺跡	自然堤防 編文(中・晚)・奈良・古墳・奈良・平安		18	山田条里遺跡	段丘 編文・奈良・平安・近世	
4	下ノ川原遺跡	自然堤防 編文(早・中)・奈良・奈良・平安		19	船渡前瀬遺跡	段丘 編文・奈良・奈良・平安	
5	山口遺跡	自然堤防 編文(中・晚)・奈良・古墳・奈良・平安・中世		20	三神寺遺跡	段丘 編文(早・晚)	
6	宮代遺跡	後背高地 日石製(後)・編文～近世		21	芦ノ口遺跡	段丘 編文・古墳・平安	
7	泉崎浦遺跡	後背高地 編文(後)・奈良・古墳・平安・近世		22	裏町古墳	段丘 古墳	
8	五反田古墳	自然堤防 古墳		23	土手内遺跡	丘陵 編文・弥生・奈良・平安	
9	大野田古墳群	自然堤防 古墳		24	茂ヶ崎城跡	丘陵 後・古墳	中世
10	三ノ瓶遺跡	自然堤防 編文(後)・弥生・古墳・奈良・平安・中世		25	愛宕山根穴群	丘陵斜面 古墳(末)・奈良	
11	大野山遺跡	自然堤防 編文(後)・古墳・平安・中世		26	長町駅東遺跡	丘陵斜面 古墳・奈良・平安	
12	元安遺跡	自然堤防 弥生・平安・中世・近世		27	西台棚遺跡	自然堤防 編文(後)・弥生・古墳	
13	長町排水道跡	自然堤防 古墳?		28	曲山遺跡	丘陵斜面 編文(後)・弥生・古墳・奈良・平安	
14	牧家古墳	後背高地 古墳		29	北日城跡	自然堤防 編文(後)・弥生・中世・近世	
15	金岡八幡古墳	後背高地 古墳		30	南小泉遺跡	丘陵斜面 編文(後)・弥生・古墳・奈良・平安・中世	

第6図 周辺の遺跡分布図

丸印は古墳



第7図 調査区の配置 (1/2,500)

III 調査の方法と概要

1 調査の方法

調査区は、富沢駅（旧名称、泉崎駅）の駅舎部分と、東側の市道部分に合わせて設定した。グリッドの設定にあたっては、建設局で設置した高速鉄道七北田起点より13K900杭を基点とし、高速鉄道中軸線を基準線とし、3m×3mのグリッドを組んだ。名称は、東西軸をアルファベット、南北軸をアラビア数字とし、A 1、B 2………と呼んだ（基点は33・34ライン、C・Dラインの交点になる）。中軸線上の3点に関しては、平面直角座標系Xによる座標測量値が明らかであり、以下に記載する。グリッド基準線は国土座標北から15°45'50"東偏している（第8・9図）。

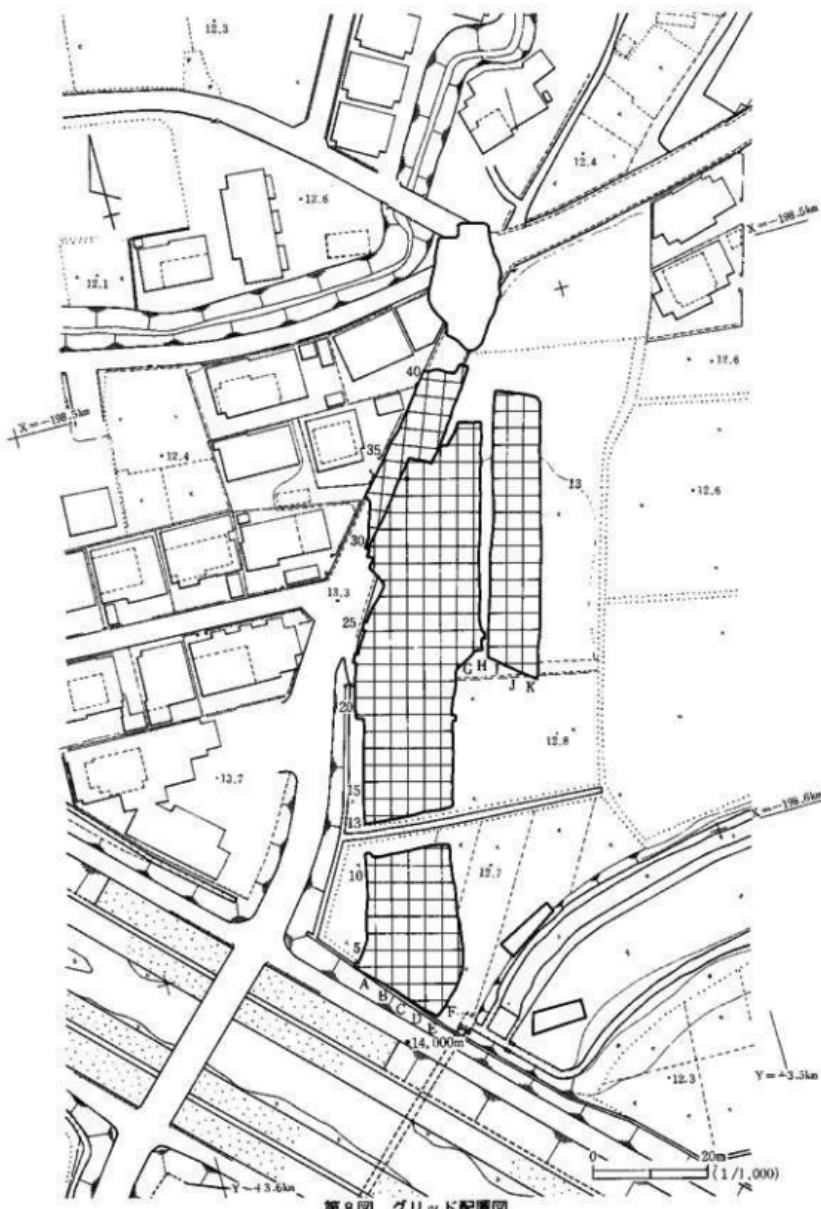
	七北田基点からのキロ程	X座標	Y座標
A	13k883m910	-198509.662	+3569.176
B	13k913m910	-198538.533	+3561.026
C	13k973m410	-198595.796	+3544.826
基点の計算値	13k900m	-198525.146	+3564.805

調査の大地区名として、1年次のものをI北区・I南区、2年次をII区・III区、3年次をIV区と呼んだ（第9図）。

III区のグリッド設定の際に測量を誤り、基準線が約5°23'東偏してしまった（座標北からは21°8'東偏）。実測、遺物の取り上げが誤ったグリッドのまま行われていたため、今回の報告においてもそのまま記載している。また、II区は工事中に発見され緊急調査を行った地点であるため、グリッドを設定せず平板測量を行った。

調査にあたっては、盛土・表土は重機を用いて除去した後、遺構検出面まで層位的に掘り下げた。遺構は輪郭を確認した後、土層観察用アゼを残しながら掘り下げた。遺構の実測は、グリッド基準杭により簡易造り方を組み、縮尺1/20で図化した。遺物出土状況は1/10、河川跡など大きな遺構は1/100で図化した。遺物の取り上げにあたっては、基本的にはグリッド単位で層位毎に取り上げたが、縄文時代の遺物包含層では、1グリッドを9分割し1m四方で取り上げた部分と、1点ずつ出土位置とレベルを記録した部分がある。写真は、35ミリモノクロ・カラーリバーサルを基本とし、6×7版を一部併用した。

1 調査の方法



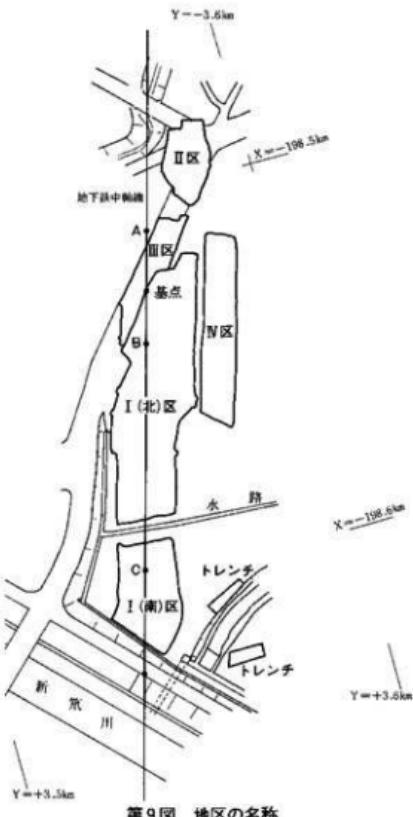
第8図 グリッド記図

2 調査の概要

昭和58年度 まず工事に関わる仮設道路の部分の調査を4月13日から19日に行ったが、遺構遺物とも発見されなかった。4月15日より道路から水路までの表土除去を行い、遺構の検出に努めた(I北区)。搅乱が多く精査は難航したが、古代の住居跡などが発見された。7月27日より水路以南に調査区を広げた(I南区)。9月に入り、I北区北部の12号住居の下層より縄文時代の遺物包含層が発見された。14号住居からは古墳時代前期の遺物が多数出土した。9月～10月は古代の遺構検出面の下層を掘り下げ、河川跡や縄文時代の遺物を発見した。12月6日より、縄文時代遺物包含層の掘り下げを開始し、後期の遺物が多数出土した。12月27日に中断し、翌3月5日再開、包含層の掘り下げを続け、3月23日に終了した。

昭和59年度 4月11日より包含層の調査を再開したが、4月13日、北側の道路交差点部分の工事中に遺構が発見されたため、急きょ調査を行った(II区)。II区は道路下ということもあり搅乱が多かったが、住居跡、土坑などが検出され、5月26日に調査を終えた。5月4日には、包含層より日本最大級の土偶が出土した。5月18日より北西に隣接する道路部分の盛土を除去し、III区を設定した。道路敷の下とあって下水管等の搅乱が多かったが、住居跡、土坑等が検出され、下層には縄文時代の遺物包含層が広がっていた。7～8月は包含層の掘り下げを行い、多量の遺物が出土した。7月21日に現地説明会を開催し、8月11日に野外調査を終了した。

昭和61年度 I北区東側の市道部分の調査を8月4日より開始した(IV区)。大部分が搅乱を受けており、わずかに南端の6×8mの範囲で遺構が検出された。土坑4基、ピット4基の調査を行い、9月5日に終了した。



第9図 地区の名称

IV 基本層序

1 各調査区の層序

調査区の層序については、数地点で断面図が作成されているが、各地点どうしの土層の関係が明記されていなかったため、調査区全体を覆う基本層序は作成しえなかつた。そこで、まず各地点の層序を述べ次に地点間の関係を述べたい。実測地点は第10図に示した6地点である。

A II区中央部（第11図 A-A'）

- 1層 道路盛土および旧耕作土
 - 2 a層 褐灰色（10Y R5/2）シルト 厚さ約8cm。酸化鉄を多量に、炭化物を少量含む。
 - 2 b層 黄褐色（10Y R5/6）粘土質シルト 厚さ約10cm。酸化鉄、炭化物を少量含む。遺物を含む。（2 a層と2 b層の上下関係は不明である）
 - 3層 褐色（10Y R4/4）粘土質シルト 厚さ約30cm。調査区に広く分布する。
 - 4層 暗褐色（10Y R3/3）シルト質粘土 厚さ約10cm。一部に分布する。
 - 5層 褐色（10Y R4/4）砂質シルト 厚さ約50cm以上。広く分布する。
- 以下標高8.4mで疊層に至る。

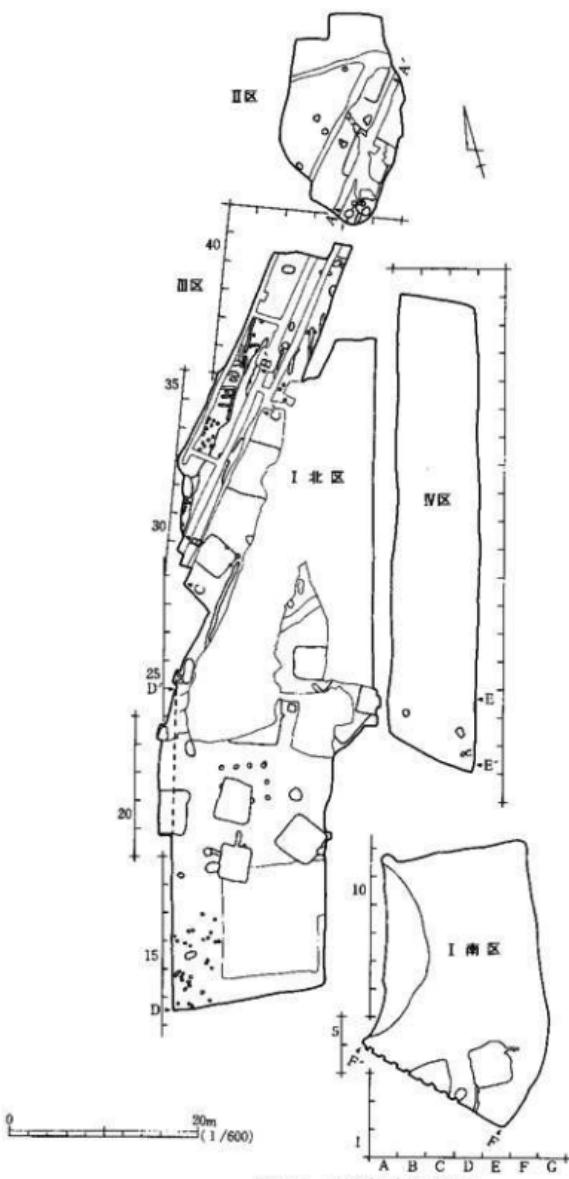
2 b層上面で古代の遺構が検出される。5層より、縄文土器が出土している。

B III区中央部（第12図 B-B'）

1・2層 耕作土

- 3層 暗褐色（10Y R3/3）シルト 厚さ約20cm。調査区に広く分布する。
 - 4層 灰黄褐色（10Y R5/2）シルト 厚さ約15cm。広く分布する。
 - 5 a層 暗褐色（10Y R3/3）シルト 厚さ約30cm。広く分布する。
 - 5 b層 暗褐色（10Y R3/3）シルト 厚さ約10~20cm。5 a層下の一部に分布する。
 - 5 c層 暗褐色（10Y R3/3）シルト 厚さ約10cm。5 b層下のごく一部に分布する。
 - 6層 黒褐色（10Y R3/2）シルト 厚さ約20cm。広く分布する。南から北へ傾斜しており、断面図で見ると北端は南端よりも約40cm下がっている。
 - 7層 褐色（10Y R4/6）シルト 厚さ約20cm。広く分布する。
 - 8層 褐色（10Y R4/6）シルト 7層よりも砂を多く含む。厚さ20cm以上。広く分布する。
- 以下標高8.1cmで疊層に至る。

地盤が全体に南から北へ傾斜している。3層上面で古代の遺構が検出される。6層は縄文後



第10図 土層断面図作成位置

1 各調査区の層序

期の遺物包含層である。6層出土土器とII区5層土器が接合している。

C I北区とIII区の境 (第13図 C-C')

1層 褐色 (10YR4/4) シルト マンガン粒を含む。厚さ約15cm。調査区に広く分布する。

2層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト マンガン粒、炭化物を少量含む。厚さ約10cm。広く分布する。

3層 暗褐色 (10YR3/3) シルト マンガン粒、酸化鉄を含む。厚さ約10cm。広く分布する。

4層 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト マンガン粒を少量含む。厚さ約15cm。広く分布し、北に向かい厚くなる。

5層 暗褐色 (10YR3/3) シルト マンガン粒を含む。厚さ10~20cm。広く分布し、北に向かい厚くなる。

6層 暗褐色 (10YR3/4) シルト 黄褐色砂が混じる。マンガン粒、炭化物、焼土粒を含む。厚さ約10cm。南側に分布する。

7層 暗褐色 (10YR3/4) シルト 黄褐色の砂が混じる。炭化物を少量含む。厚さ約10cm。南の一部に分布する。

8層 黒褐色 (10YR3/2) シルト 7層が混じる。炭化物を含む。厚さ25cm以上。広く分布する。層の下面が乱れる部分がある。

9層 暗褐色 (10YR3/3) シルト 厚さ25cm以上。広く分布する。

10層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト 黄褐色砂が混じる。炭化物、酸化鉄を少量含む。ごく一部のみ検出。

1層上面で古代の遺構が検出される。6・7・8層が繩文後期の遺物包含層であり、上記の断面Bの6層に対応する。

D I北区西壁 (第15図 D-D')

1層 にぶい黄褐色 (10YR3/4) シルト 耕作土 厚さ20~60cm。調査区に広く分布する。

2層 にぶい黄褐色 (10YR6/4) シルト 耕作土の一部か。厚さ20~30cm。広く分布する。

3a層 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト マンガン粒、酸化鉄を多く含む。厚さ約5cm。南部のごく一部に分布する。

3b層 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト マンガン粒と多量の酸化鉄を含む。厚さ約10cm。南部に分布する。

4a層 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト マンガン粒、酸化鉄を含む。厚さ約15cm。南端部に分布する。

4b層 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト 3b層よりも酸化鉄を多く含む。厚さ約10cm。南端部の一部に分布する。

5層 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト マンガン粒を多く含む。厚さ約10cm。南端部に分布する。

6層 褐色 (10YR4/4) シルト 黄褐色砂が混じる。マンガン粒を含む。(図では7・8層が記載されているが、6層中の色調の異なる部分と考えられる。) 厚さ約30cm。

9層以下を深掘りしているが、各土層の詳細については河川跡の項で述べたい。

6層上面で古代の遺構が検出される。15・16グリッド付近の17層から縄文土器が出土しており、III区6層出土土器とほぼ同時期とみられる。このことから、17層とIII区6層が対応するようである。

E IV区東壁 (第14図 E-E')

IV区は大部分が搅乱を受けており、かろうじて4m程度の壁面で層位を確認した。

1層 褐色 (10YR4/4) シルト 耕作土 厚さ約15cm。広く分布する。

2層 黒褐色 (10YR3/2) シルト 焼土粒を含む。厚さ約10cm。一部に分布する。

3a層 暗褐色 (10YR3/4) シルト マンガン粒、焼土粒を含む。厚さ約20cm。広く分布する。

3b層 暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト 厚さ40cm以上で、溝状に下がる。4層を掘りこんだ小河川の堆積土の可能性がある。

3c層 褐灰色 (10YR5/2) 粘土 3b層同様に小河川堆積土か。

4層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂 厚さ40cm以上。4層以下は、砂層と砂利層が続き、標高9.6~9.9mで躍層に至る。

3a層上面でピット、4層上面で土坑が検出される。4層上面が古代の遺構面と考えられる。

F I 南区南壁 (第16図 F-F')

1層 褐色 (10YR4/4) シルト 耕作土 厚さ30~60cm。調査区全体に分布する。

2a層 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト 褐色土が混じる。マンガン粒、炭化物を含む。厚さ5~10cm。広く分布する。

2b層 褐灰色 (10YR6/1) 粘土 黒色土が少量混じる。酸化鉄を多く含む。厚さ約10cm。西端に一部分分布する。

2c層 褐灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト 黒色土が混じる。マンガン粒を多く含む。厚さ約7cm。西端に一部分分布する。

3層 黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト 灰黄褐色の小ブロック (5~10ミリ) が混じる。炭化物を多く含む。厚さ約10cm。広く分布する。

4層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト 黒色土、褐灰色土の小ブロックが混じる。マンガン粒、炭化物粒を含む。厚さ7~15cm。西半に分布する。

5層 褐色 (10YR4/4) シルト 褐灰色土が混じる。マンガン粒を多く含む。炭化物を含む。

2 各層の対応について

厚さ約7cm。東半に分布する。

6層 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト マンガン粒を多く含む。 厚さ7~12cm。東半に分布する。

7層 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト マンガン粒を含まない。 広く分布する。

7層上面で古代の遺構が検出される。また、7層の下層より縄文時代の河川跡が検出されている(下層の層位については、河川跡の項で詳述)。

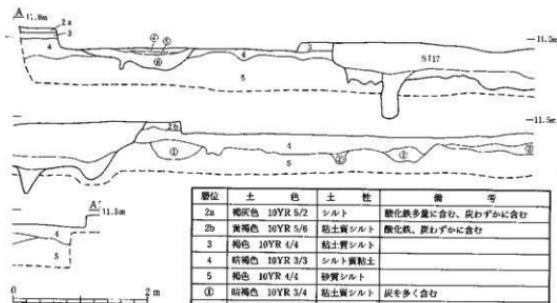
2 各層の対応について

本来であれば現場にて土色、土性をもとに各層の対応を調べるべきであるが、それができなかつたため遺構、遺物の関係より考えたい(第17図)。

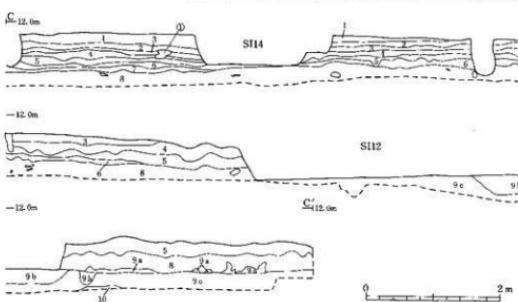
本遺跡で多く検出された古代の遺構の検出面をとりあげてみると、A(II区)2b層、B(III区)3層、C(III区)1層、D(I北区)6層、F(I南区)7層となる。土色は差異はあるものの褐色系のシルトである。南端の調査区では河川の影響により砂質シルトとなる。遺構の時期は古墳時代前期から平安時代にわたっているが、同一面で検出されている。検出面の標高はIII区が12m前後で一番高く、南に向かって下がっている。I南区で11.4mである。

縄文時代の遺物包含層はB(III区)6層、C(III区)6・7・8層であり、A(II区)5層、D(I北区)17層が同一時期と考えられる。

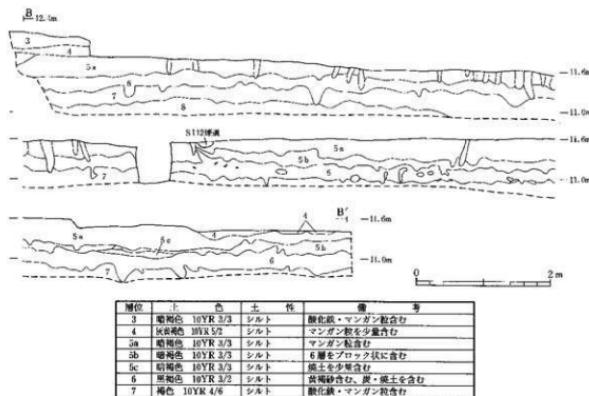
以下本文中の基本層序の記載においては、各地区ごとの層位を用いている。混乱を招くかも知れないが、ご容赦されたい。



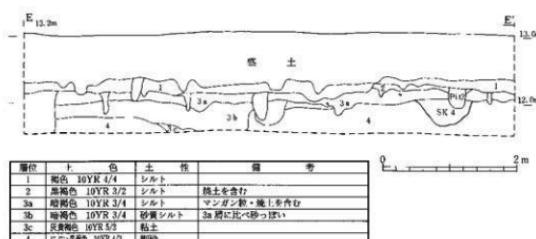
第11図 基本層序A



第13図 基本層序C

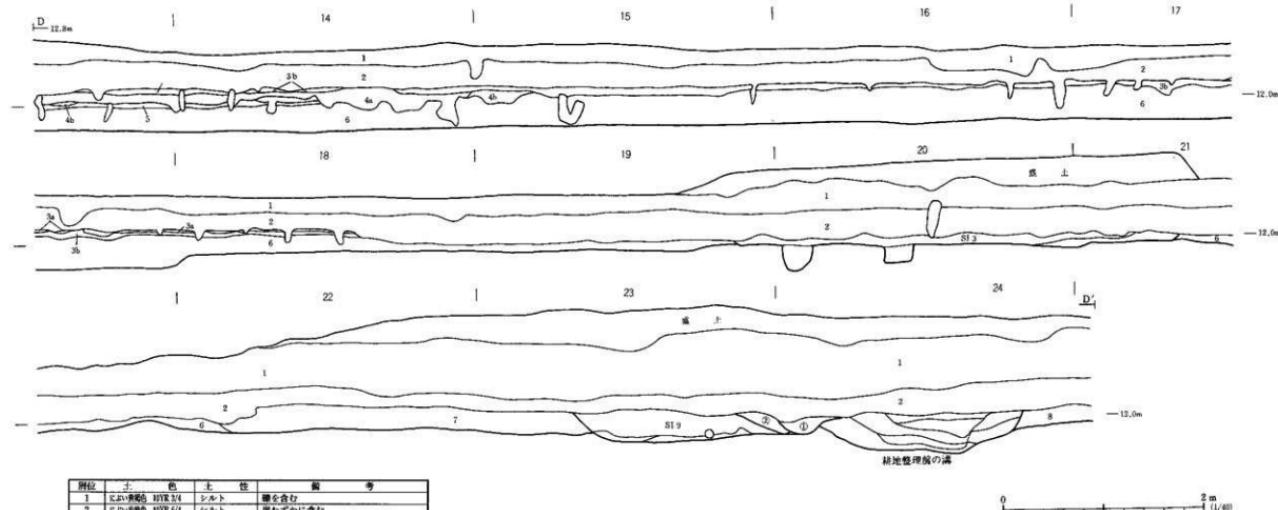


第12図 基本層序B



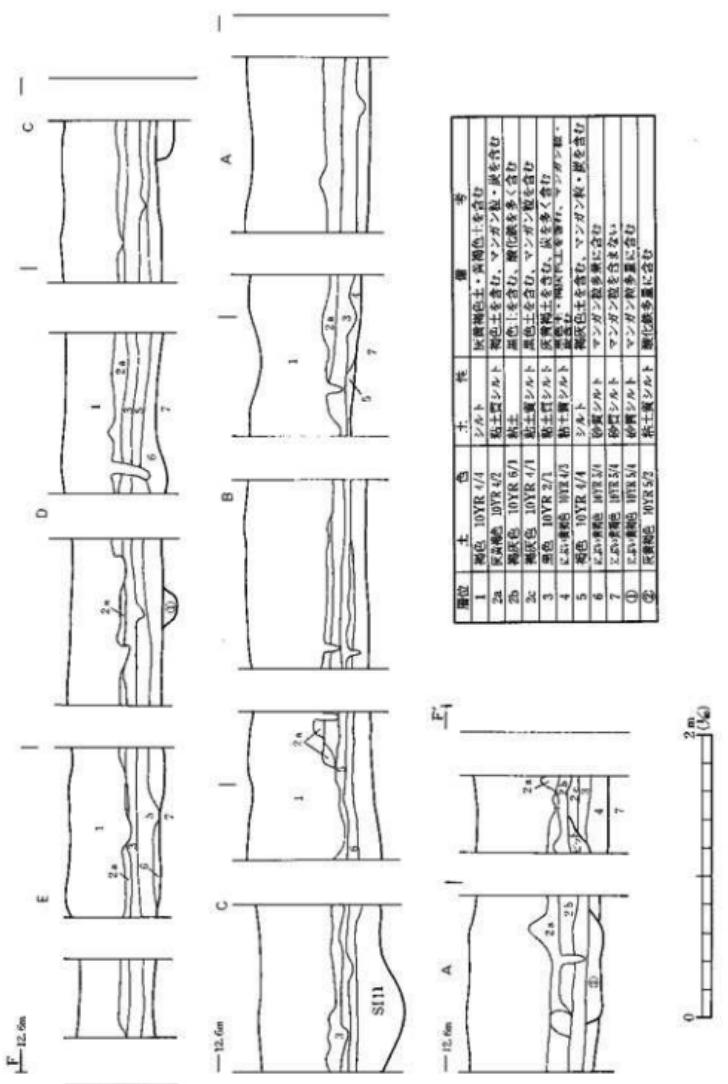
第14図 基本層序E

層位	土色	土性	備考
1	褐色 10YR 4/4	シルト	マンガン粒含む
2	灰褐色 10YR 3/3	シルト	マンガン粒・炭を含む
3	暗褐色 10YR 3/3	シルト	マンガニン粒・鐵を含む
4	深褐色 10YR 4/2	シルト	マンガニン粒含む
5	暗褐色 10YR 3/3	シルト	マンガニン粒含む
6	褐色 10YR 4/4	シルト	炭を多く含む、炭塊を含む
7	暗褐色 10YR 3/4	シルト	表面の砂を含む、炭わざかに含む
8	褐色 10YR 3/3	シルト	7層上を含む、炭含む
9a	褐色 10YR 4/4	シルト	マンガン粒含む
9b	深褐色 10YR 4/2	シルト	黄褐色砂を含む、炭含む
9c	暗褐色 10YR 3/3	シルト	黄褐色砂を含む、炭わざかに含む
9d	褐色 10YR 4/4	シルト	黄褐色砂を含む、炭わざかに含む
①	深褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	酸化鉄を多く含む



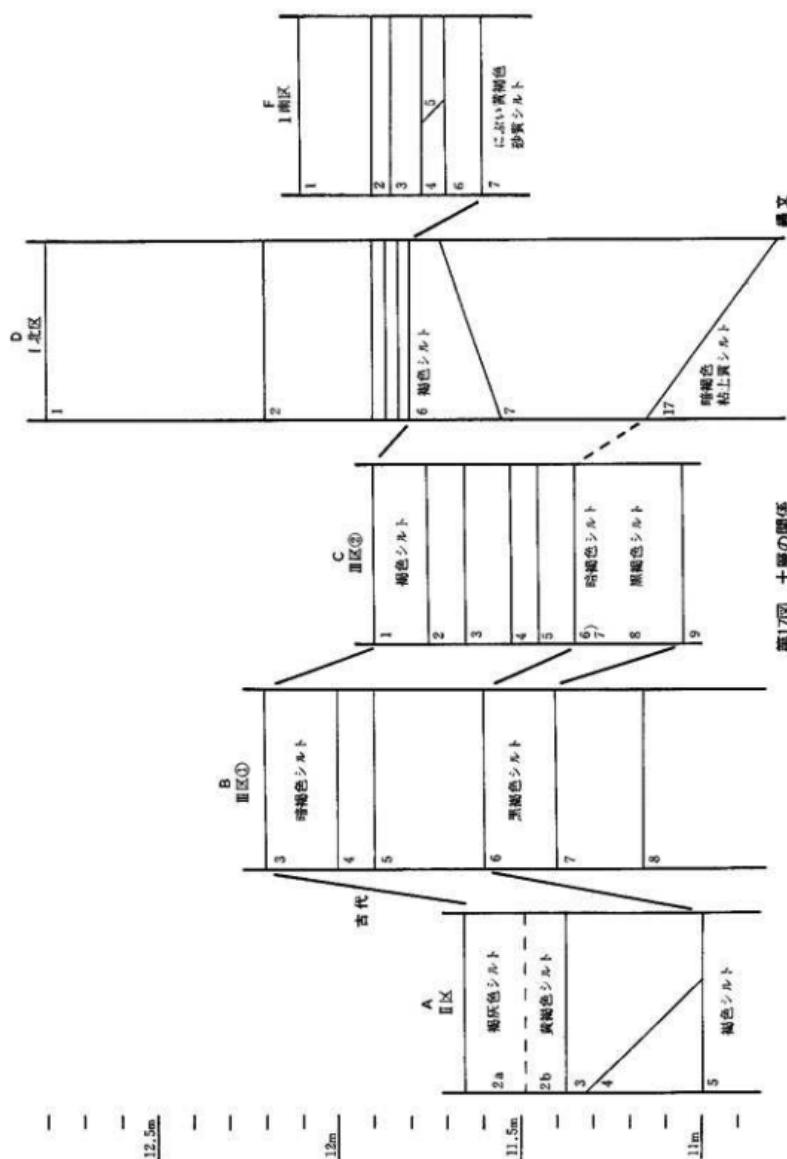
附則	土	性	範	考
1	赤褐色	HIVR 1/4	シルト	黒を含む
2	赤褐色	HIVR 1/4	シルト	黒を含む
3	黒褐色	2 SV 5/1	シルト	酸化物、マンガンを多く含む
4	灰褐色	HIVR 6/2	シルト	多孔性の酸化物とマンガンを含む
4m	灰褐色	2 SV 5/1	シルト	酸化物、マンガンを多く含む
4n	黄褐色	2 SV 5/1	シルト	酸化物、リヨン鉱を多く含む
5	黑褐色	HIVR 1/4	シルト	マグнетイットに多く含む
6	褐色	JOYVR 4/4	シルト	マグネットイットを含む
7	褐色	JOYVR 4/4	シルト	黄褐色、マンガンを含む
8	暗褐色	HIVR 3/3	シルト	マンガントロウを多く含む

第15図 基本層序D



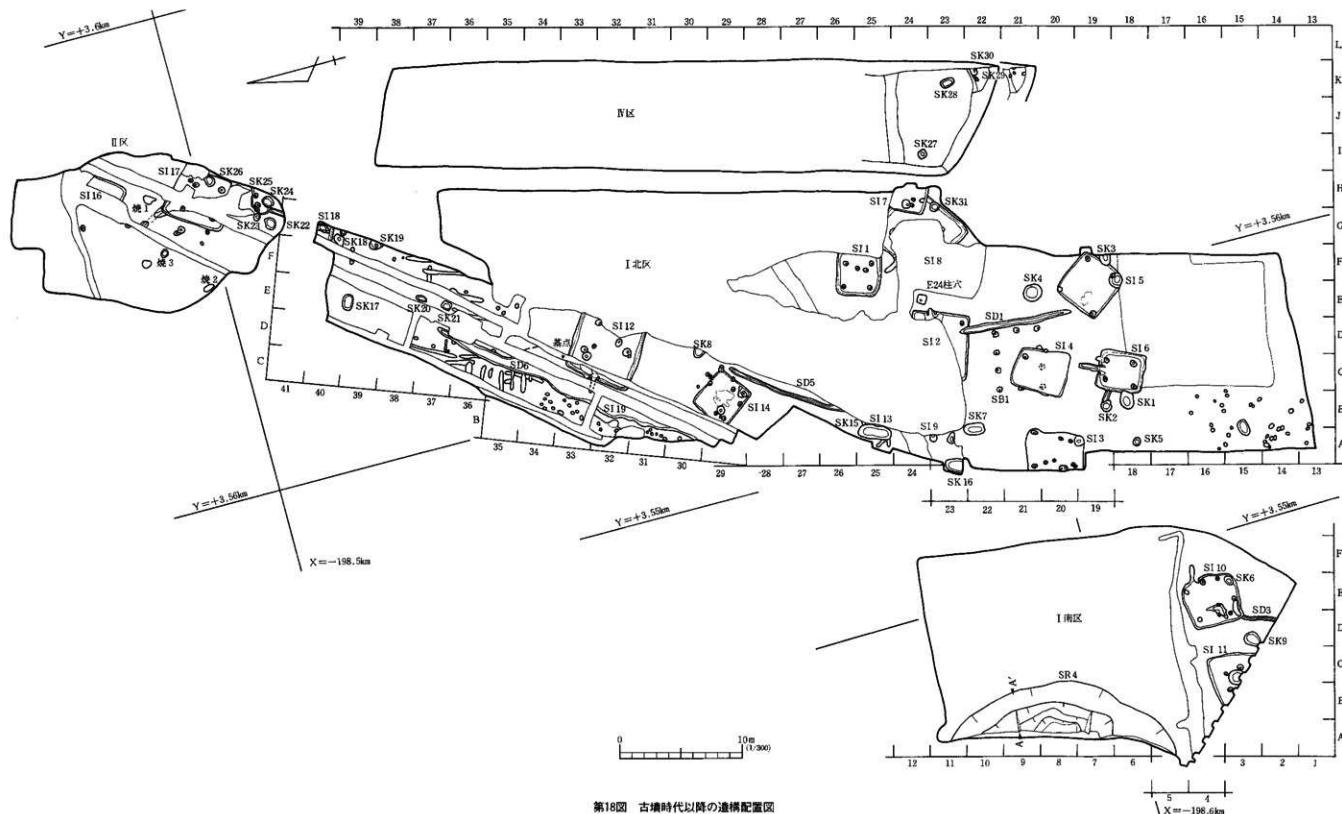
第16回 基本圖序 F

2 各層の対応について



第17図 土層の関係

V 検出された遺構と遺物



第18図 古墳時代以降の造構配置図

V 検出された遺構と遺物

1 古墳時代以降の遺構と遺物

(1) 住居跡

S I 1 住居跡 (第19・20図)

〔位置・確認面〕 I 北区 E・F-25・26グリッド 6層上面

〔平面形・規模〕 東端を攢乱で破壊されているが、南北3.5m、東西3.3m以上の方形と考えられる。

〔堆積土〕 3層認められた。

〔床面〕 基本層6層を床面としている。ほぼ平坦で堅い。壁際に周溝が巡る。幅15~20cm、深さは5cm程度である。

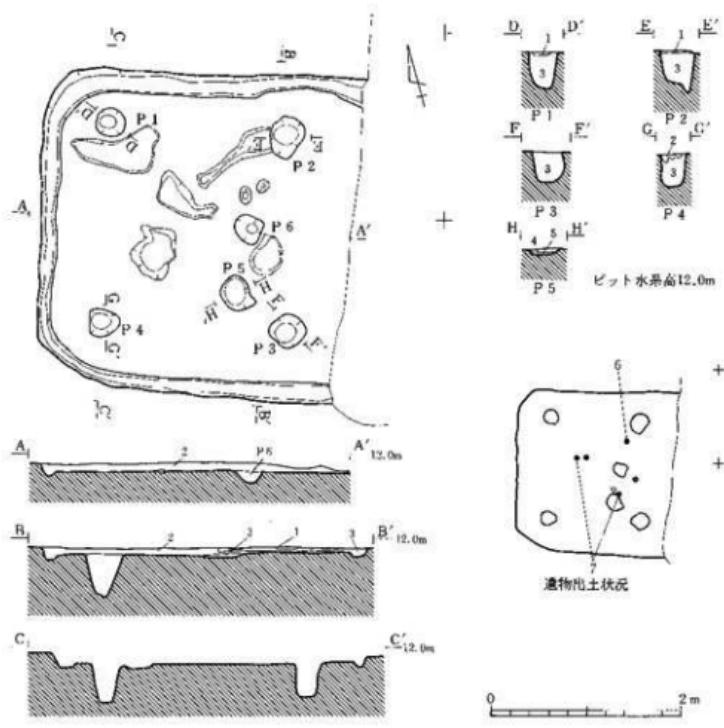
〔壁〕 基本層6層を壁とする。周溝底より10~15cmである。

〔柱穴〕 床面よりピットと浅いくぼみが合わせて13個検出された。そのうち、P 1~P 4は深さが30cm程度あり、住居の四隅に位置していることから主柱穴と考えられる。P 5は深いものだが、焼土が堆積している。他のくぼみは不整形で浅いものである。

〔出土遺物〕 堆積土出土遺物 ロクロ使用の土師器壺(2)・椀(1)・高台壺(3)・甕、非ロクロ土師器壺、須恵器壺・甕、赤焼土器壺・高台壺(4)・高台皿(5)、鉄製品(形状不明)が出土している。1は体部に丸みをもち、高台がつく。内外面ともヘラミガキされ黒色処理される。2は同一個体と考えられる高台部があり、丸みを持つ器形から1と同様に椀となる可能性が高い。内外面ともヘラミガキで内面は黒色処理される。 床面出土遺物 ロクロ使用の土師器壺、ロクロと非ロクロの土師器甕、赤焼土器壺(7)・高台壺(6)が出土している。6は体部が直線的に広がっており4に器形が似る。全体に摩滅が著しく、一応赤焼土器としたものである。

〔小結〕 床面出土の土器の特徴から、平安時代の住居跡と考えられる。カマドは破壊された東辺に位置したと考えられる。

1 古墳時代以降の遺構と遺物



層位	土色	土性	備考
1	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	燒土を少量含む
2	暗褐色 10YR 3/2	シルト	マンガン鉱を少量含む
3	褐色 10YR 3/4	シルト	マンガン鉱を少量含む
1	褐色 10YR 3/3	砂質シルト	灰を少含む P1・2
2	褐色 7.5YR 4/1	砂質シルト	灰を少含む P4
3	褐色 7.5YR 3/4	粘土質シルト	上部は褐色の灰土が混じる P1・2・3
4	灰色 5YR 3/0	砂質シルト	燒土 P5
5	褐色 10YR 4/1	砂質シルト	P5

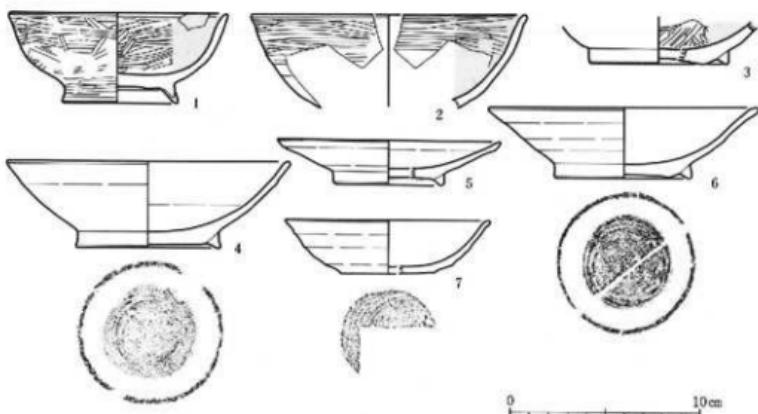
第19図 S I 1住居跡

S I 2住居跡 (第21・22図)

〔位置・確認面〕 I 北区 C・D・E-23・24グリッド 6層上面

〔重複〕 S D 1溝跡より古い。

〔平面形・規模〕 大部分が攪乱により破壊されているが、東西5.2m 南北4.6m の長方形と考えられる。



番号	種類	分類	層位	特徴	口径	底径	高さ	残存率	寸法
1	土師器碗		1層	ロクロ→内: 切削系切り・高台接合 外面: ヘラミガキ・黒色貼装	11.6	6.1	4.9	4/5	D1
2	土師器杯(碗?)		1層	ロクロ→内: ヘラミガキ・黒色貼装 外: ヘラミガキ	14.7			1/6	D3
3	土師器高台杯		1層	底: 切削系切り・高台 外: ヘラミガキ・黒色貼装 外: ロクロナデ		7.5		1/2	D7
4	赤褐色土師高台杯		1層	底: 切削系切り・高台接合 外面: ロクロナデ	15.0	7.6	4.6	2/5	D4
5	赤褐色土師高台碗		1層	底: 切削系切り・高台接合 外面: ロクロナデ	11.8	5.9	2.4	1/4	D6
6	赤褐色土師高台杯		1層	底: 切削系切り・高台接合 外: ロクロナデ	14.4	7.0	3.8	3/5	D3
7	赤褐色土師杯	A	床面	底: 切削系切り・高台	10.9	5.0	2.9	3/4	D9

第20図 S11出土遺物

〔堆積土〕2層確認された。

〔床面〕基本層6層を床とする。ほぼ平坦である。

〔壁〕基本層6層を壁とする。20~25cmの高さで、傾斜は急である。

〔柱穴〕床面南東隅よりピットが1個検出された(P 2)。35×25cmの楕円形で、深さ30cmある。柱穴の1つであろう。

〔カマド〕東壁北寄りに1基検出された。燃焼部は幅1.1m、長さ50cm、煙道は大部分が削平されており、長さ25cm、幅20cm残る。煙道底は傾斜している。

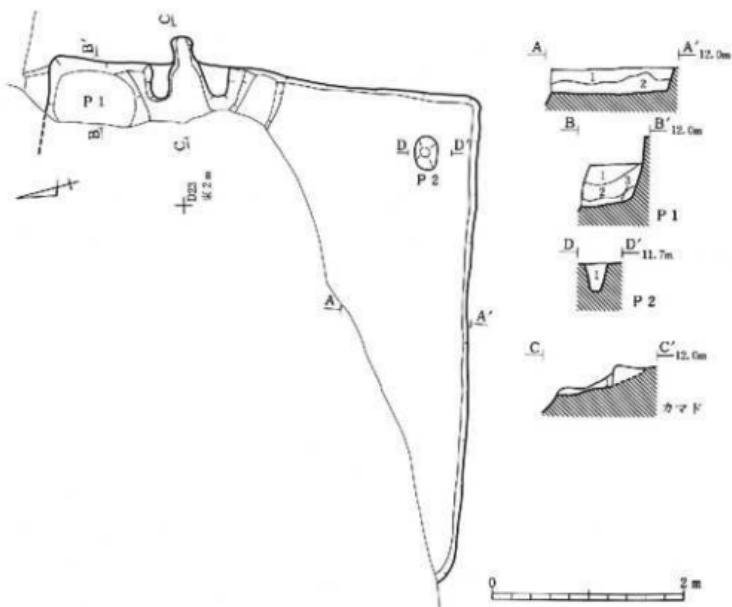
〔貯蔵用ピット〕カマド北側に長さ1m、幅60cm以上、深さ25cmの土坑(P 1)があり、貯蔵用ピットと考えられる。堆積土は3層に分かれ、下層に焼土と炭を含む。

〔出土遺物〕堆積土出土遺物 ロクロ使用の土師器碗(7)・壺、非ロクロ土師器甕、須恵器甕(8)・壺(11)が出土している。カマド内およびカマド付近出土遺物 ロクロ土師器碗(4~6)が出土している。4は回転系切り後体部下端に手持ちヘラケズリ調整される。内面は、ヘラミガキ、黒色処理される。ピット1出土遺物 ロクロ土師器碗(1~3)・壺(10)、非ロクロ土師器甕、須恵器甕が出土している。2は切り離し後体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ

1 古墳時代以降の遺構と遺物

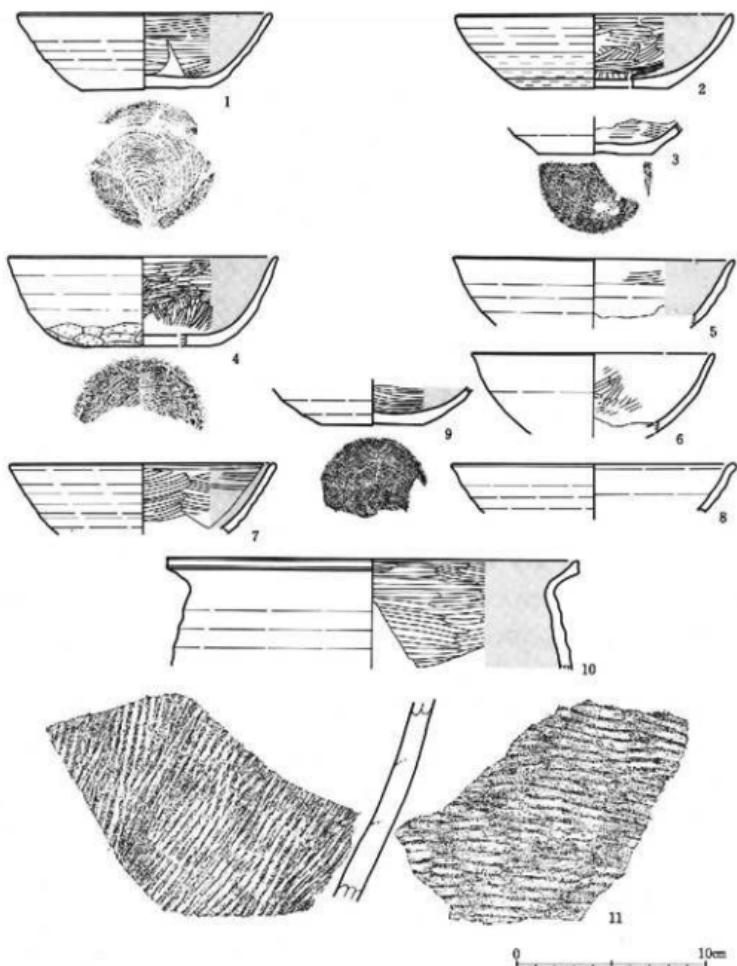
が施される。1は回転糸切り後無調整の土師器坏である。いずれも内面はヘラミガキ・黒色処理が行なわれる。10は土師器甕で内面ヘラミガキ・黒色処理が行われる。小片も含めて全体の出土遺物の中に赤焼土器は含まれない。

(小結) P 1 およびカマド付近出土土器の特徴から、平安時代の住居跡と考えられる。



部位	土 色	土 性	備 考
カマド	褐色 10YR 4/4	シルト	炭を少量含む
	にせい黄褐色 10YR 5/4	シルト	炭をわずかに含む
P1	褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	焼土ブロック・灰を全体に含む
	褐色 10YR 4/4	シルト	炭を部分的に含む
	にせい黄褐色 10YR 5/4	シルト	焼土ブロック・灰を含む
P2	褐色 10YR 4/4	シルト	焼土粒・灰を含む
	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	

第21図 SI 2 住居跡



番号	種類	分類	層位	特徴	口径	底径	壁高	残存率	登録
1	土器部	B	P1	底：圓錐形切り 内：ヘラミガキ→黒色施漬 外：ロクロナデ	13.5	6.8	4.2	1	D24
2	土器部	A	P1	底：円錐形カズリ（底下凹）内：ヘラミガキ・黑色 外：ロクロナデ	14.8	7.8	4.0	1/4	D26
3	土器部	B	P1	底：切り崩し不明 内：ヘラミガキ 外：ロクロナデ	6.0			1/2	D161
4	土器部	A	カマド付近	底：圓錐形切り（底下凹）内：ヘラミガキ・黑色	14.4	6.4	4.8	1/4	D25
5	土器部	カマド付近		内：ヘラミガキ→黒色施漬 外：ロクロナデ	15.0			1/6	D27
6	土器部	カマド付近		内：ヘラミガキ 外：ロクロナデ	13.0			1/4	D29
7	土器部	I種		内：ヘラミガキ→黒色施漬 外：ロクロナデ	14.2			1/6	D28
8	陶器部	I種		内：ロクロナデ	15.2			1/6	E1
9	土器部	B	深底	底：圓錐形切り 内：ヘラミガキ→黒色施漬 外：ロクロナデ	5.4			1/3	D155
10	土器部	B	P1	内：ヘラミガキ→黒色施漬 外：ロクロナデ	22.0			1/6	D39
11	遺物		I種	外：平行印8 内：平行当て具状					E3

第22図 SI 2出土遺物

S I 3 住居跡（第23～25岡）

〔位置・確認面〕 I 北区 A-19・20・21グリッド 6層上面

〔平面形・規模〕 西端が調査区外であるが、南北4.7m、東西3.3m以上の方形と考えられる。

〔堆積土〕 上面がかなり削平されており、2層のみ確認された。

〔床面〕 基本層6層を床面とする。ほぼ平坦で堅い。特に焼土周辺が堅い。

〔壁〕 基本層6層を壁とする。上面削平のため残りは悪く、3～5cm程度しか残っていない。

〔柱穴〕 床面から10個のビットが検出された。うち、カマドに附属するとみられるP 5・7を除く8個が柱穴に関係しそうである。P 8・11は深さ5cm程、P 2・3・4・6・9・10は深さ20～30cmであり、後者のいずれかが柱穴として機能していたのであろう。

〔カマド〕 東壁際南寄りと床面中央に焼け面がある（焼土1・2）。焼土1は95×50cmの範囲に厚さ約15cmの焼土が認められ、両脇にビット（P 5・P 7）がある。その形状からカマドの上面が削平されたものと考えられる。焼土2は径40cmの円形に厚さ5cm程の焼土が認められる。

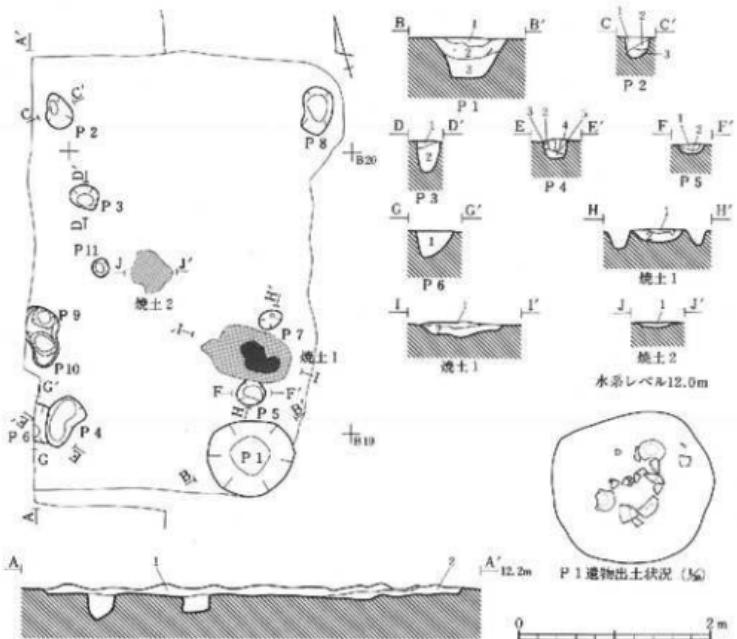
〔貯蔵用ビット〕 焼土1のの南脇、住居の南東隅に、90×80cmの円形で深さ40cmの土坑があり、貯蔵用ビットと考えられる。堆積土は3層に分けられ、2・3層に炭・焼土が混じり、遺物が出土した。

〔出土遺物〕 堆積土出土遺物 堆積土出土と記名されるが、堆積土が非常に薄いためほぼ床面上出土と考えてもよいであろう。ロクロ土師器壺(15)・甕、非ロクロ土師器甕、赤焼土器壺(16・17)が出土している。17は小片だが、底径が大きく器高の低い器形のものである。 P 1

出土遺物 主に2・3層から出土しており、ロクロ土師器壺(1～3・5～7)・高台壺(4)・甕(14)、非ロクロ土師器甕、赤焼土器壺(8～11)が出土している。比較的大きな破片が多い。土師器壺の切り離し技法の分るものは、回転糸切り後無調整である。内面はヘラミガキ・黒色処理が行なわれる。4は土師器高台壺で、底部から直線的に立上り口縁部が外反する。14は小形の甕で口縁端部が上部につまみだされる。 P 3 出土遺物 ロクロ土師器壺が出土している。

P 4 出土遺物 ロクロ土師器壺(13)と赤焼土器壺(12)が出土している。土師器壺は底部回転糸切り後無調整のものである。

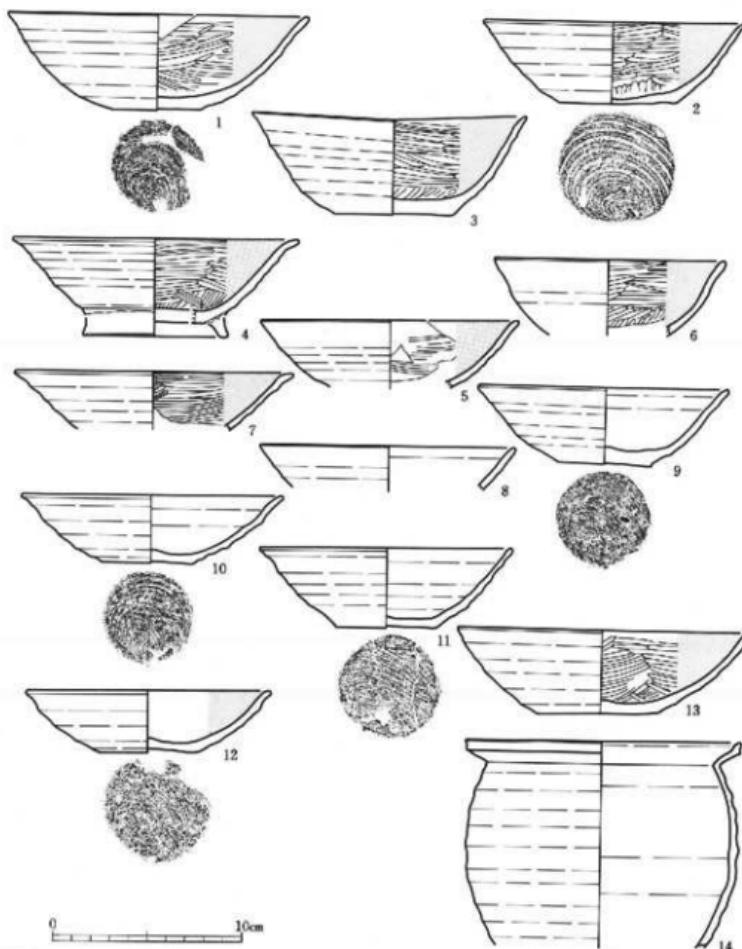
〔小結〕 堆積土および貯蔵用ビット出土の土器の特徴から、平安時代の住居跡と考えられる。



層位	土色	土性	備考
P1	暗褐色 10YR 3/3	シルト	マンガン粒・酸化鉄・炭を含む
	褐色 10YR 4/4	シルト	マンガン粒・炭を含む
	褐色 10YR 6/4	シルト	黒褐色土をわずかに含む
P2	黒褐色 10YR 3/2	シルト	焼土・炭・にほい黄褐色土を含む
	暗褐色 10YR 3/3	シルト	炭を含む
	暗褐色 10YR 3/4	シルト	黄褐色砂とマンガン粒を含む
P3	暗褐色 10YR 3/4	シルト	にほい黄褐色粘土・黄褐色砂・マンガン粒を含む
	褐色 10YR 4/4	シルト	黄褐色砂・マンガン粒・砂を含む
	にほい黄褐色 10YR 4/3	シルト	黄褐色砂・焼土・炭を少量含む
P4	暗褐色 10YR 3/2	シルト	マンガン粒・炭を少量含む
	にほい黄褐色 10YR 5/4	シルト	
	暗褐色 10YR 3/3	シルト	炭をわずかに含む
P5	褐色 10YR 4/4	粘性高いシルト	焼土・炭を少量含む
	暗褐色 10YR 3/4	シルト	純土を少量含む
	褐色 10YR 4/4	シルト	純土をわずかに含む
P6	にほい黄褐色 10YR 4/3	シルト	マンガン粒・焼土・炭を少量含む
焼1	明赤褐色 5YR 5/8	焼土	
	暗赤褐色 5YR 3/2	焼土	明赤褐色焼土・マンガン粒を含む
焼2	暗褐色 (5YR 3/1)	主体で褐色 (7.5YR 4/3)・黒色 (10YR 1.7/1)	現在の焼土

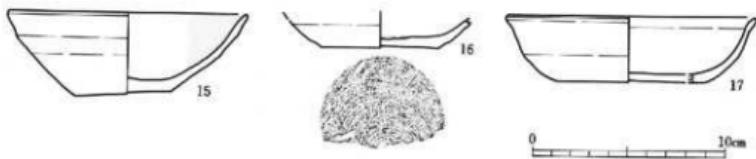
第23図 SI 3 住居跡

1 古墳時代以降の遺構と遺物



番号	種類	分類	層位	特徴	口径	底径	脚高	残存率	状態
1	土器器	B	I型+II型	施: 刮削・糸切り 内: ヘラミガキ・黒色鉢底 外: ロクロナデ	15.8	4.7	5.2	3/4	D34
2	土器器	B	P1	施: 刮削・糸切り 内: ヘラミガキ・黒色鉢底 外: ロクロナデ	13.7	6.2	4.4	2/3	D33
3	土器器		P1 E 2	底: 切り削し凹形 内: ヘラミガキ・黒色鉢底 外: ロクロナデ	14.6	6.2	5.4	約1	D32
4	土器器		P1 E 3	底: 切り削し凹形 斜面剥離 内: ヘラミガキ・黒色 頂: ロクロ	15.2	(5.4)	4.5	1/3	D40
5	土器器	P1	E 3	内: ヘラミガキ・黒色鉢底 外: ロクロナデ	13.7			1/5	D47
6	土器器	P1	E 3	内: ヘラミガキ・黒色鉢底 外: ロクロナデ	12.2			1/4	D42
7	土器器	P1	E 3	内: ヘラミガキ・黒色鉢底 外: ロクロナデ	14.8			1/5	D41
8	赤燒土器	P1	E 3	両面: ロクロナデ	13.6			1/5	D49
9	赤燒土器	B	P1 E 2	施: 刮削・糸切り 両面: ロクロナデ	13.0	4.9	4.2	約1	D39
10	赤燒土器	B	P1 E 1+2	底: 刮削・糸切り 両面: ロクロナデ	13.9	5.0	3.7	1/2	D39
11	赤燒土器	B	P1 E 3	底: 刮削・糸切り 両面: ロクロナデ	13.4	5.5	4.3	1/2	D37
12	赤燒土器	B	P4 E 1	底: 刮削・糸切り 両面: ロクロナデ	13.0	9.2	3.3	1/3	D44
13	土器器	A	P4 E 1	底: 手捻らへタケヌリ 内: ヘラミガキ・黒色鉢底	15.4	6.3	4.5	1/2	D35
14	土器器	A	P1 E 2+3	両面: ロクロナデ	14.4			1/2	D45

第24図 S I 3出土遺物(1)



番号	種類	分類	層位	特徴	口径	底径	基高	残存率	基盤
15	土師器坏	B	1層	底:切り離し不明 内:ヘラミガキ→尾色鉢脚	12.7	5.1	4.5	2/3	D38
16	赤燒土器坏		1層	底:回転糸切り 内面:ロクロナゲ		6.2		1/2	D43
17	赤燒土器坏	B	1層	底:回転糸切り 内面:ロクロナゲ	13.2	7.6	3.5	1/4>	D48

第25図 S I 3出土遺物 (2)

S I 4 住居跡 (第26・27図)

〔位置・確認面〕 I 北区 B・C・D-20・21グリッド 6層上面

〔重複〕 S B 1 建物跡より新しい。

〔平面形・規模〕 南北4.4m、東西3.5m の長方形である。

〔堆積土〕 2層確認された。2層は西・南壁付近に分布し、1層はそれ以外の部分に分布している。

〔床面〕 基本層6層を床面としている。ほぼ平坦である。

〔壁〕 基本層6層を壁とする。高さは10~15cmである。

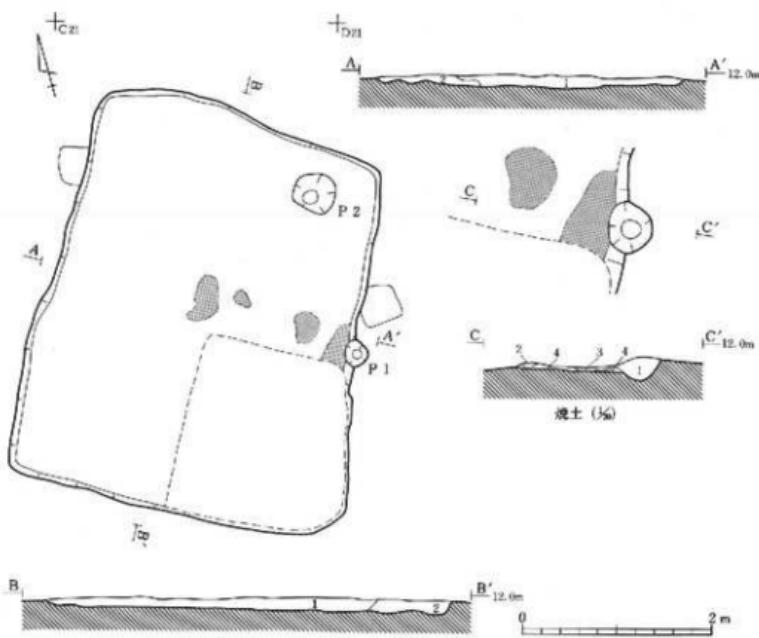
〔柱穴〕 床面北東隅にピットがある(P 2)。径40cmの円形、深さ33cmであり、柱穴の可能性がある。他にピットは検出されなかった。

〔カマド〕 東壁中央から住居中央にかけて焼土が点在している。東壁に接するものは40×30cmの範囲に厚さ3cm程の焼土が分布する。さらに、東壁と焼土を切る形で径20cm深さ10cmのピット(P 1)がある。これらは位置と形状から、カマドが削平されたものと考えられる。他の焼土も薄いものである。

〔出土遺物〕 堆積土出土遺物 ロクロ土師器坏(3・4)・甕、非ロクロ土師器坏・甕、須恵器蓋・壺・甕、赤燒土器坏が出土している。土師器坏は、底部切り離し技法が回転糸切り後無調整である。カマド堆積土出土土器 焼土付近から出土したもので土師器坏がある(1・2)。底部からやや丸みをもって立上り、口縁部が短く外反する器形である。1は底部回転糸切り後体部下端に手持ちヘラケズリが施される。2は底部回転糸切り後無調整である。

〔小結〕 焼土付近出土土器の特徴から、平安時代の住居跡と考えられる。

I 古墳時代以降の遺構と遺物



	層位	土色	土性	備考
焼土	1	暗褐色 7.5YR 3/4	シルト	多量の炭とわずかの鉄土を含む
	2	褐色 7.5YR 4/4	シルト	少量の炭とわずかのマンガン鉱を含む
	1	暗褐色 10YR 3/4	シルト	炭・鉄土を含む P.1
	2	赤褐色 5YR 4/6	細土	黒褐色焼土を含む
3	暗赤褐色 5YR 3/2	焼土	赤褐色焼土を含む	
4	褐色 7.5YR 4/4	シルト	炭・鐵土・砂を含む	

第26図 S I 4 住居跡

S I 5 住居跡 (第28～30図)

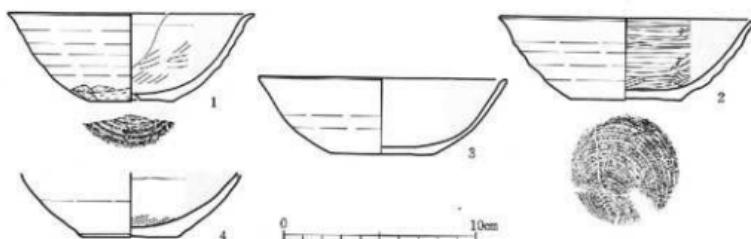
〔位置・確認面〕 I 北区 E・F-18・19・20グリッド 6層上面

〔重複〕 SK 3 土坑より古い。

〔平面形・規模〕 南隅を搅乱で破壊されるが、北東-南西4.1m、北西-南東4.2m の方形である。

〔堆積土〕 2層に分けられる。

〔床面〕 基本層6層を床面とする。ほぼ平坦である。



番号	類 型	分類	置 位	物 型	口径	底径	壁高	残存率	寸法
1	土師器坏	A	カマド #1	底:焼粘土切り 内:手持ちヘラケズリ 内:ヘラミガキ→褐色	13.0	4.7	4.7	1/4	D59
2	土師器坏	B	カマド #1	底:焼粘土切り 内:ヘラミガキ→褐色	13.6	5.8	4.4	4/5	D58
3	土師器坏	B	1編	底:焼粘土切り 内:ヘラミガキ (?) →褐色	13.1	5.2	4.1	3/5	D60
4	土師器坏		1編	底:焼粘土切り 内:ヘラミガキ (?) →褐色	11.6	5.3		1/2	D61

第27図 S1 4出土遺物

〔壇〕基本層6層を壁とする。高さ10~18cmである。

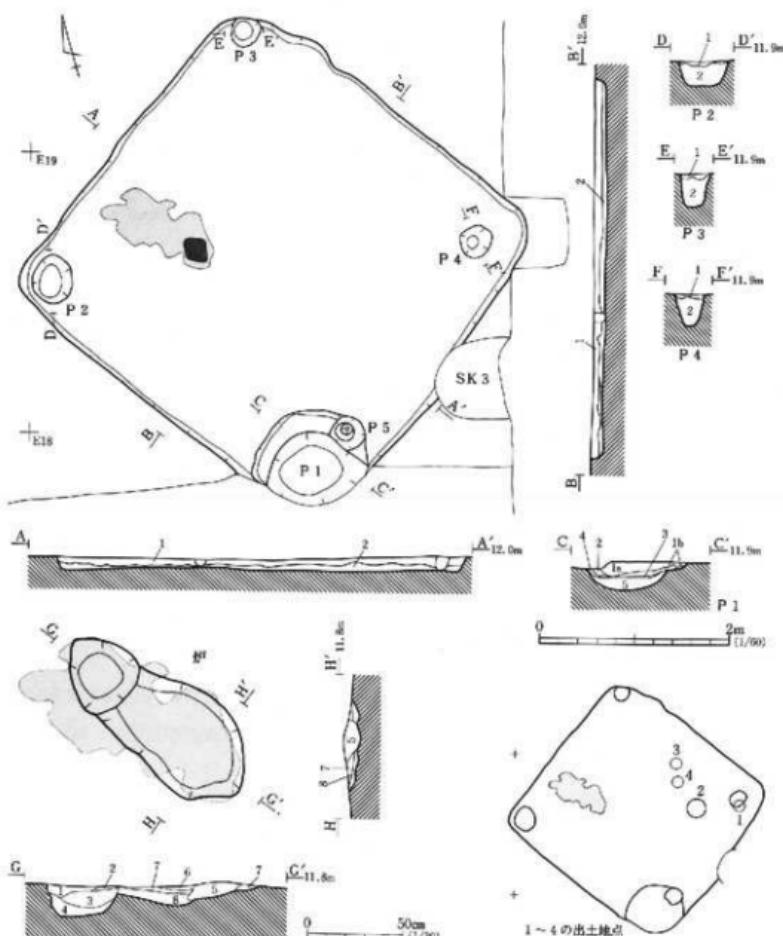
〔柱穴〕住居の四隅にそれぞれピットがある。南隅のP 1は、116×100cmの楕円形で、深さ18cmである。これと切りあう形で径30cm深さ33cmのP 5があるがP 1とP 5の前後関係は不明である。西隅のP 2は、50×40cmの楕円形で深さ25cm。北隅のP 3は、径30cmの円形で深さ34cm。東隅のP 4は、径30cmの円形で深さ30cmである。P 2~P 5の4個は、大きさ深さ共に共通していることから、これらが柱穴と考えられる。

〔炉〕北西壁寄りの床面に焼け面がある。130×60cmの範囲に焼土が広がり、東端に特に堅く焼け縮まった部分がある。焼土の下は、120×55cmの楕円形で深さ10cm船底状に掘りくぼめられ、西端がさらに16cmの深さのピットとなる。

〔出土遺物〕堆積土出土遺物 ロクロ土師器坏・壺、非ロクロ土師器坏・壺(1~5)、赤焼土器坏(6)、砥石(7)が出土している。1~4の4個体は堆積土中よりまとめて出土した。いずれも胴部は球形に張り、口縁部が外反する。1は内外面に、2~4は外面にハケメが施され、4は体部中央にヘラケズリが加わる。6は検出面出土、7は砥石片で、表裏面と側縁に磨面が残る。

〔小結〕住居に伴う遺物がないものの、カマドを持たない点や堆積土一括土器の特徴から、古墳時代前期の住居跡と考えられる。

1 古墳時代以降の造構と遺物

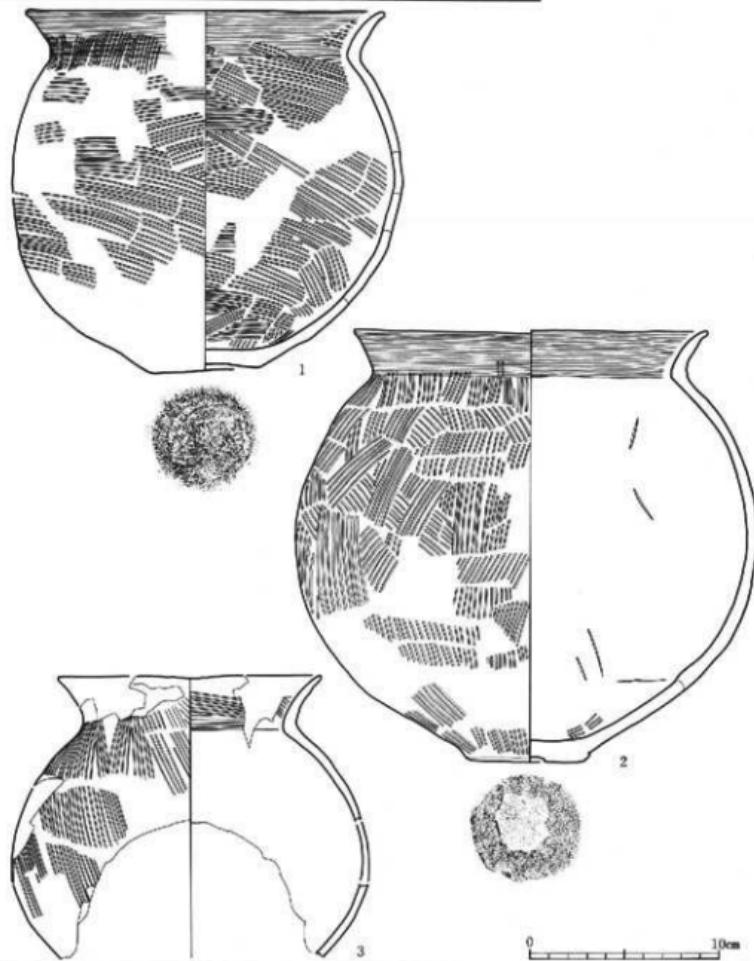


層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 10YR 3/4	砂質シルト	
2	黒褐色 10YR 2/3	砂質シルト	炭をわずかに含む
P1	1a 暗褐色 10YR 3/3	砂質シルト	明赤褐色・炭をわずかに含む
	1b 赤褐色 10YR 3/3	砂質シルト	炭をわずかに含む
	2 暗褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	
	3 黒褐色 10YR 2/3	粘土質シルト	炭を少量含む
	4 暗褐色 10YR 4/4	砂質シルト	
P2	1 暗褐色 7.5YR 4/4	シルト	礫化炭をわずかに含む
	2 暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	に上部・黄褐色粘土を含む
P3	1 暗褐色 7.5YR 4/4	粘土質シルト	に上部・黄褐色粘土・炭をわずかに含む
	2 暗褐色 10YR 3/4	砂質シルト	に上部・青褐色粘土・炭を層状に含む
P4	1 暗褐色 7.5YR 4/4	粘土質シルト	
	2 暗褐色 10YR 3/4	砂質シルト	に上部・青褐色粘土をわずかに含む

第28図 SI 5 住居跡

(土層観察表つづき)

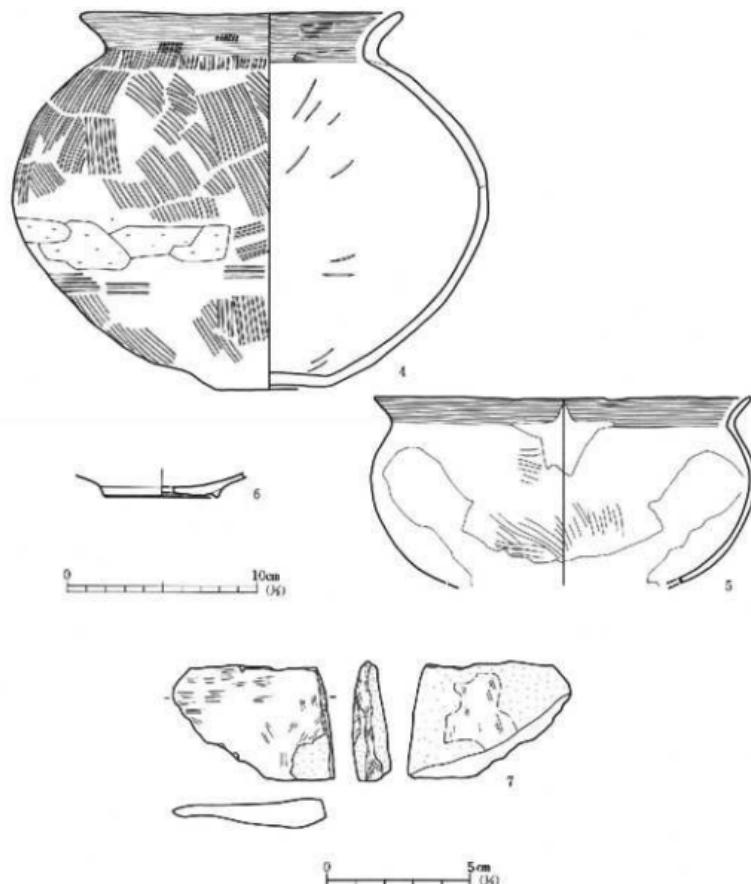
層位	土色	土性	備考
1	にかい黄褐色 10YR 4/3	シルト	炭わずかに含む
2	灰青褐色 10YR 4/7	シルト	炭・焼土を少量含む
3	にかい黄褐色 10YR 5/4	シルト	焼土ブロック・多量の炭を含む
4	灰青褐色 10YR 5/2	シルト	焼土を含む、3層より多量の炭を含む
5	棕 5YR 6/8	焼土	
6	略褐色 10YR 3/3	シルト	焼土・炭をわずかに含む
7	褐色 10YR 4/4	シルト	焼土ブロック・炭をわずかに含む
8	にかい黄褐色 10YR 4/3	シルト	焼土ブロックを多量に含む



番号	種類	層位	特徴	口径	底径	高さ	残存率	登録
1	土師彩葉	1層	口外：ハケメ→ヨコナメ　底外：ハケメ　口内：ハケメ→ヨコナメ　底内：ハケメ	19.0	5.8	19.3	1/2	C4
2	土師彩葉	1層	口外：ヨコナメ　底外：ハケメ　口内：ヨコナメ　底内：ヘラナメ→ハケメ	18.8	6.3	23.0	約1	C2
3	土師彩葉	1層	体外：ハケメ　口内：ハケメ	24.0			1/2	C5

第29図 SI 5出土遺物(1)

1 古墳時代以降の遺構と遺物



第30図 S I 5出土遺物 (2)

番号	種類	層位	特徴			口径	底径	高さ	残存率	遺物
4	土師器裏	1層	口外：ヨコナデ 係外：ハテメ・ケズリ 口内：ヨコナデ 係内：ヘラナデ			17.1	6.0	39.1	1/2	C3
5	土師器裏	2層	口外：ヨコナデ 係外：ハテメ→ミガキ (?) 口内：ヨコナデ 係内：ミガキ (?)			20.0			1/4	C6
6	赤燒土器萬古环	横溝面	器：同様丸切り→萬古輪合				6.0		1/3	D74
番号	種類	層位	最大長	最大幅	厚さ	石 材	特徴			登録
7	砾石	2層	6.5	4.3	0.9	28.6g	砂岩	表面に磨痕あり。表面している		Kc286

(単位cm)

S I 6 住居跡（第31・32図）

〔位置・確認面〕 I 北区 B・C・D-18・19グリッド 6層上面

〔重複〕 S K 1 土坑より古い。また、西壁で溝状落込みと切り合うが、それとの前後関係は不明である。

〔平面形・規模〕 南北3.6m、東西3.2m の長方形である。

〔堆積土〕 5層確認された。4層が床面を覆うものだが、カマド部分に厚く堆積する。5層は周溝堆積土である。

〔床面〕 掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦で、中央部とカマド周辺が堅い。掘り方は深さ13~22cmで、埋土は2層認められる。

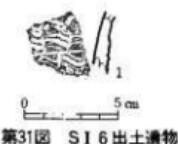
〔周溝〕 カマド部分を除いて周溝が巡る。幅10~40cmで、西壁部分が狭く、他が広い。深さは15~20cmである。

〔柱穴〕 床面の四隅にピットがある。P 1は径40cm、深さ13cm、P 2は40×30cm、深さ12cm、P 3は径33cm、深さ15cm、P 4は径50cm、深さ18cmである。いずれも柱痕は認められないが、その配置からこれらが柱穴と考えられる。

〔カマド〕 北壁中央に燃焼部と煙道が検出された。燃焼部は幅80cm、長さ60cmの大きさで、両袖と焼け面が残存している。袖部は褐色およびぶい黄褐色のシルトで構築される。焼け面は径30cmの範囲で、よく焼けている。煙道は幅36cm、長さ160cmあり、底は燃焼部との接続部が高く、その先は平坦で先端部がやや下がる。燃焼部の下層東寄りに80×60cmの不整梢円形のピットがある(P 5)。18cm程の深さで船底状に掘り下げられている。

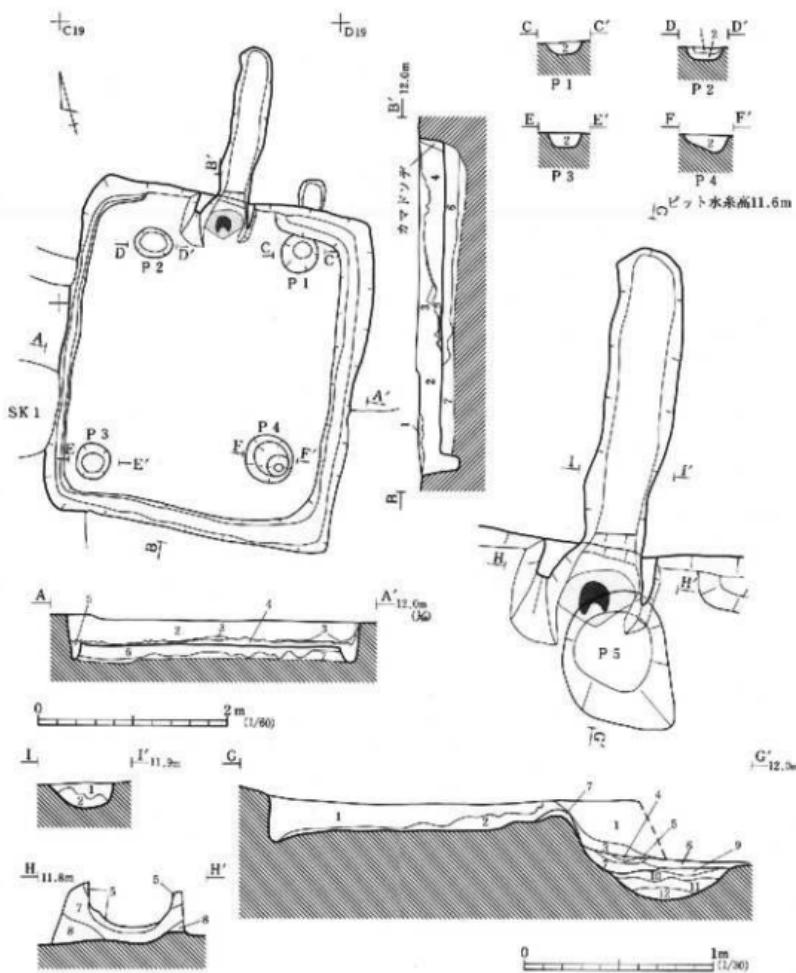
〔出土遺物〕 床面出土遺物 非ロクロ土師器壺・甕、ロクロ土師器甕、赤焼土器壺が出土している。いずれも小片で図示できない。層位不明遺物 土師器・須恵器片が出土しているが、詳細は不明である。1は出土層不明の須恵器片で、平行する波状沈線が施される。

〔小結〕 床面からロクロ使用の土師器が出土していることから、平安時代の住居跡と考えられる。



第31図 S I 6 出土遺物

1 古墳時代以降の遺構と遺物



部位	土色	土性	備考
1	暗褐色 10YR 3/4	砂質シルト	燒土・灰を多量に含む
2	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	灰黄褐色をわずかに含む
3	黒色 10YR 2/1	泥	
4	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	灰黃褐色を含む
5	にじみ褐色 10YR 5/4	砂質シルト	
6	褐色 10YR 4/4	シルト	マンガン粒を含む
7	褐色 10YR 4/6	シルト	黄褐色砂・マンガン粒を含む
8	黒褐色 10YR 3/2	粘土質シルト	燒土・灰を多量に含む E2
9	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	P1~P4

第32図 SI 6 住居跡

(土層観察表つづき)

	層位	土色	土性	備考
カ 堆積土	1	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	灰青褐色粘土・わずかの炭を含む
	2	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	炭を多量に含む
	3	暗褐色 7.5YY 3/4	粘土質シルト	純土・ロック・炭を多量に含む
	4	暗赤褐色 5YY 3/3	焼土	
	5	褐色 7.5YY 4/3	焼土	
マ 耕作土	6	暗褐色 10YR 3/4	砂質シルト	
	7	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	にい・黄褐色粘土を含む
	8	にい・黄褐色 10YY 4/3	シルト	同色の粘土を含む
	9	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	焼土・土をブロック状に含む
P5	10	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	焼土・炭をわずかに含む
	11	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	焼土・炭を多量に含む
	12	暗褐色 10YR 4/3	粘土質シルト	焼土・炭をわずかに含む

S I 7 住居跡 (第33・34図)

〔位置・確認面〕 I 北区 G・H-24・25グリッド 6層上面

〔重複〕 S I 8 より新しい。

〔平面形・規模〕 南西隅のみの検出であり、平面形、規模とも不明である。西壁2.6m、南壁2.2mである。

〔堆積土〕 2層認められる。

〔床面〕 基本層6層およびS I 8 堆積土を床面とする。ほぼ平坦で比較的堅い。

〔壁〕 基本層6層およびS I 8 堆積土を壁とする。15~20cmの高さがある。

〔柱穴〕 床面からピットが3個検出された。P 1は径70cm、深さ45cmで中央が一段下がる形態である。P 2は径20cm、深さ23cm、P 3は32×20cm、深さ20cmである。大きさと位置から、P 1が柱穴の可能性がある。

〔出土遺物〕 堆積土出土遺物 ロクロ土師器壺・甕、非ロクロ土師器壺・甕、須恵器壺(3)・壺・甕、赤焼土器壺(2)・皿(1)、鉄製品、青磁碗(龍泉窯)が出土している。3の須恵器壺は、切り離し後底部に回転ヘラケズリが施される。鉄製品は棒状の小片である。床面出土遺物 土師器甕(4)が出土している。体部が球形にふくらみ、外面にハケメが施される。

〔小結〕 床面出土の遺物が甕であり、明確な時期決定ができないが、後述するS I 8 よりも新しいことから、古墳時代後期頃かそれ以降の住居跡と考えられる。

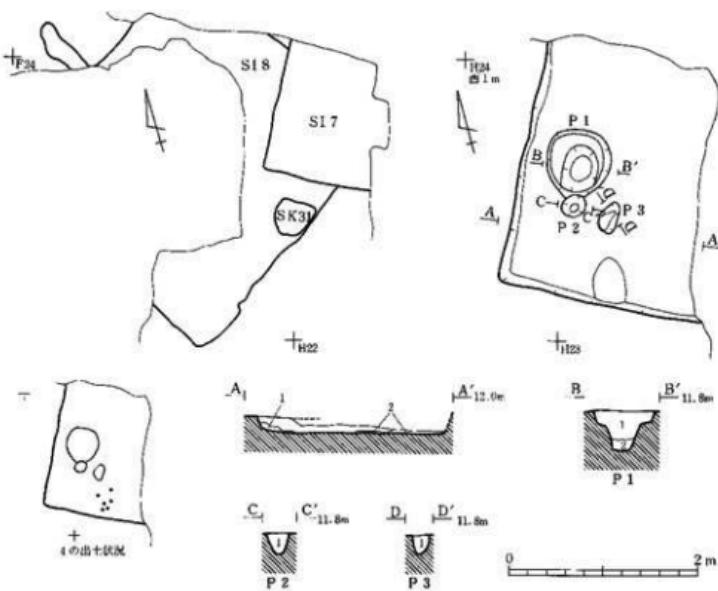
S I 8 住居跡 (第35~37図)

〔位置・確認面〕 I 北区 F・G・H-23・24・25グリッド 6層上面

〔重複〕 S I 7 とSK31より古い。

〔平面形・規模〕 大部分が搅乱で破壊されているが、北西-南東5.5m、北東-南西6mの方形である。

1 古墳時代以降の遺構と遺物



第33図 S17 住居跡

〔堆積土〕5層に分けられる。1層はかなり厚く堆積する。2・4・5層はカマド付近に見られる。3層は床面直上に広く堆積する。

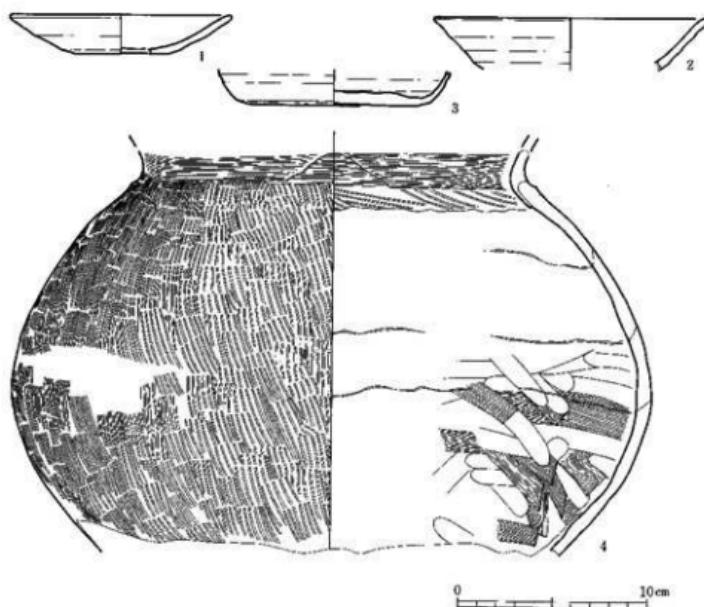
〔床面〕南隅以外の部分に残存している。基本層6層を床面とする。ほぼ平坦で堅い。

〔周溝〕北壁以外に周溝が巡る。幅12~40cm深さ10~15cmである。また、東壁とP1を結ぶ幅30cm深さ10cmの溝がある。

〔壁〕基本層6層を堀とする。北壁で32cm、東壁で17cm、南壁で24cm、西壁で9cmである。

〔柱穴〕床面からピットが3個検出された。P1以外は全体が不明である。P1は55×40cm、深さ65cm、P2は深さ62cm、P3は深さ42cm、P4は深さ23cmである。ピットの位置と深さからP1~3が柱穴と考えられる。

〔カマド〕北壁に燃焼部の一部と煙道が残る。カマド袖は東側のみ残り、褐色土で構築される。



番号	種類	分類	層位	特徴	口径	底径	高さ	現存	登録
1	赤陶土器皿		I層	底: 切り離し不明	11.7	5.0	2.1	1/4>	D77
2	赤陶土器皿	B?	I層		14.6			1/4	D76
3	須恵器壺		I層	底: 切り離し後回転ヘラケズリ			9.0	1/4>	ER
4	土師器壺		床: I層	口沿: キコナギ 底面: ハケメ I層: キコナギ 床面: ハケメ・チヂ・ヘラナギ				1/2	C11

第34図 SI 7 出土遺物

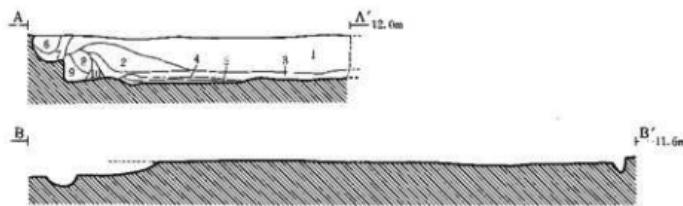
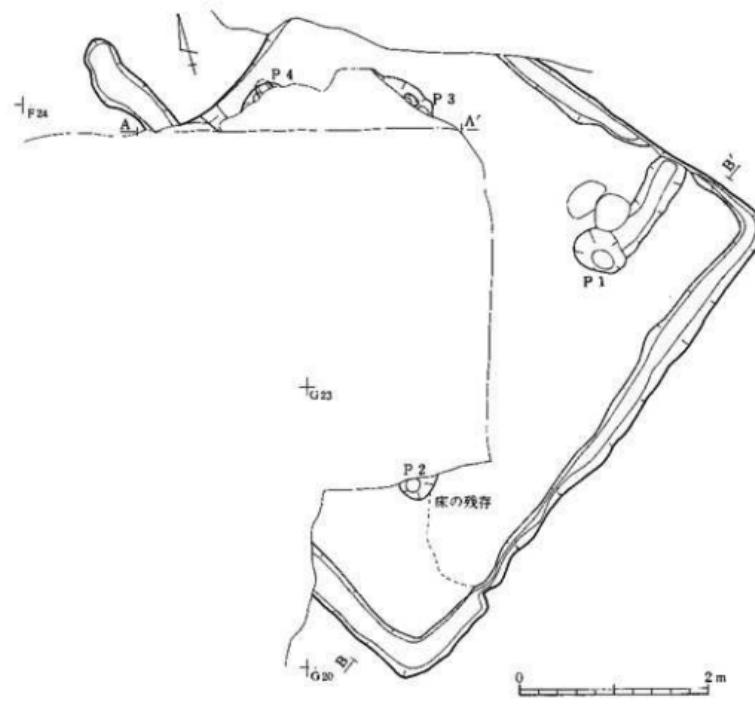
煙道は幅30cm、長さ130cmで、底は先端部でやや浅くなる。

〔貯蔵用ピット〕 カマド東側のP 4が貯蔵用ピットであった可能性がある。

〔出土遺物〕 堆積土出土遺物 ロクロ土師器壺・高台壺、非ロクロ土師器壺・甕(2)、須恵器高台壺(1)、磁器徳利(肥前・18世紀頃)が出土している。1は見込部が摩滅しており、転用窯と考えられる。2は口唇部に連続する圧痕が施される。 床面出土遺物 カマド東側より土師壺が3点出土している(3~5)。いずれもロクロを使用しておらず、長胴形である。3はSI 7の1層出土破片と接合した。 層位不明遺物 6は端部の折れ曲がった鉄製品で、釘と考えられる。

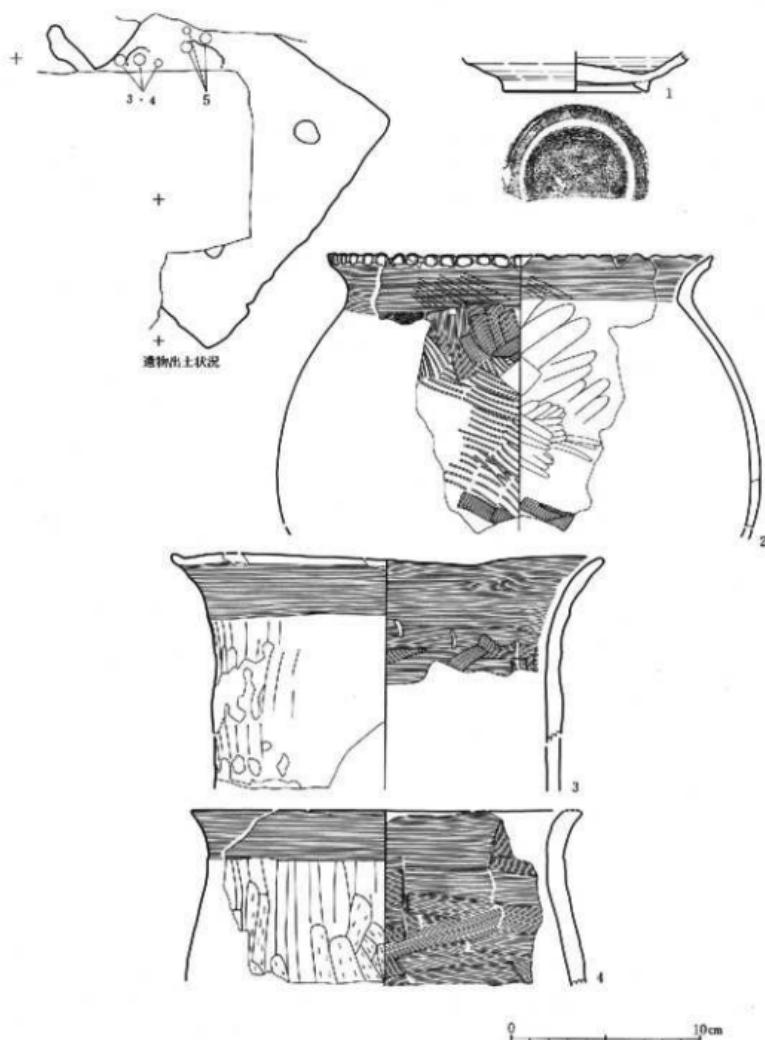
〔小結〕 床面出土土器は甕のみであり明確な時期決定はできないものの、長胴化した器形の特徴から、古墳時代後期頃の住居跡と考えられる。

1 古墳時代以降の遺構と遺物



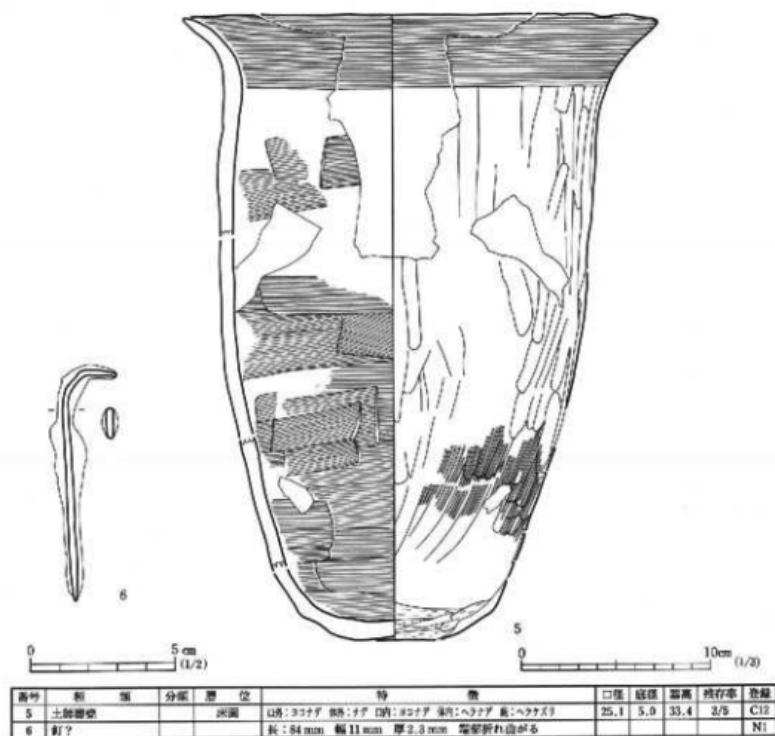
層位	土色	土性	備考
1	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	炭を少額ふくむ
2	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	粘土・炭を少量含む
3	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	
4	黒褐色 7.5YR 2/2	砂質シルト	
5	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	粘土を含む
6	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	炭を含む
7	黒褐色 7.5YR 2/1	砂質シルト	粘土・炭を多量に含む
8	褐色 7.5YR 4/4	砂質シルト	粘土・炭を多量に含む
9	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	
10	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	粘土・炭を含む

第35図 S18住居跡



番号	種類	分類	層位	特徴	口径	底径	高さ	保存率
1	圓底器高台环		1層	内: 切り落し痕跡點ヘラケズリ→萬世縞合 出込み割序層	7.7		1/2	E8
2	土師器蓋		1層	口外: ヨコナゲ・ヘラナゲ・ヨコナゲ 内外: ヘラナゲ・ヘラナゲ	20.4		1/2	C16
3	土師器蓋	底付	1層	口外: ヨコナゲ 脊付: テテ 口内: ヨコナゲ 内: ヘラナゲ	23.0		3/4	C10
4	土師器底	底部		口外: ヨコナゲ 体外: ヘラナゲ・ヘラケズリ 内: ヘラナゲ	20.8		1/5	C12

第36図 SI 8 出土遺物(1)



第37図 SI 8出土遺物(2)

SI 9 住居跡(第38・39図)

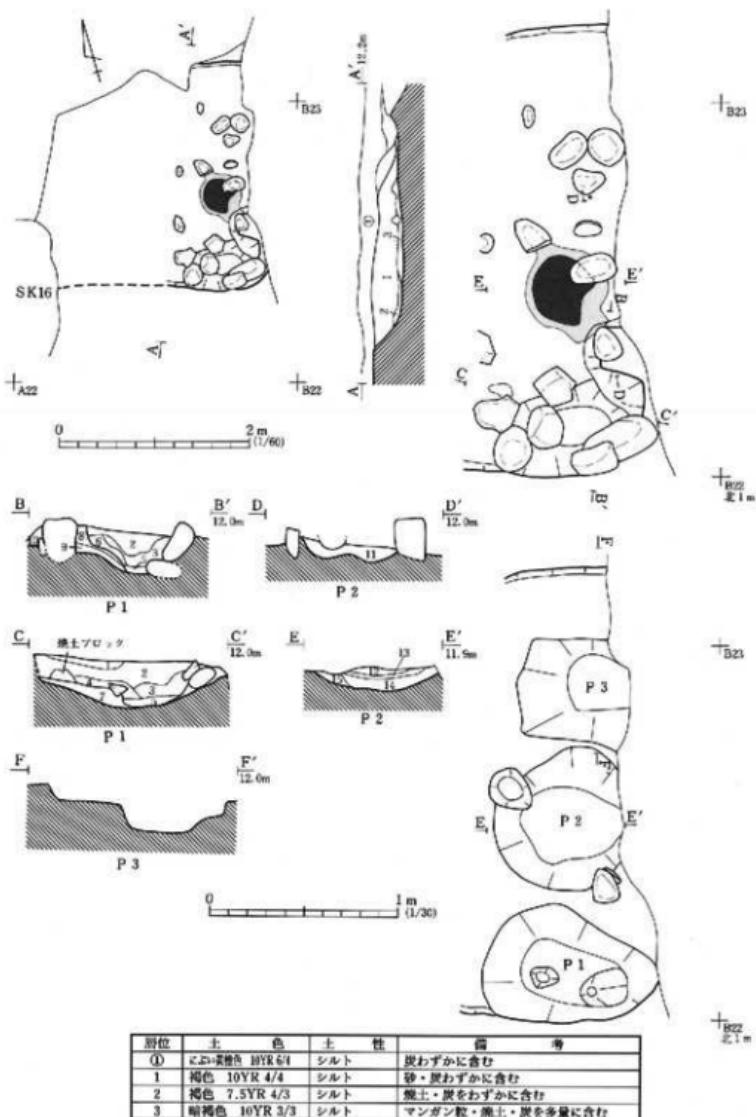
〔位置・確認面〕 I 北区 A23・24グリッド 6層上面

〔平面形・規模〕 東西を欠くため平面形、規模とも不明である。南北2.5m、東西2.4m以上である。

〔堆積土〕 3層に分けられる。2・3層が床面上に堆積し、1層は厚く堆積する。

〔床面〕 基本層6層を床面とする。やや凹凸がある。

〔壁〕 調査区壁面で確認される壁は高さ30cmあり、傾斜は緩やかである。調査区内では削平が著しく4cm程しか残っていない。



第38図 S I 9 住居跡

(土層觀察表つづき)

剖位	上 色	土 性	備 考
P1	褐色 10YR 4/4	シルト	砂・炭を少含む
	褐色 7.5YR 4/3	シルト	粘土・炭を少含む
	にじく黄褐色 10YR 5/4	シルト	焼土ブロック・炭を多量に含む
	にじく黄褐色 10YR 5/3	シルト質粘土	焼土・炭を含む
	黄褐色 2.5YR 5/4	粘土質シルト	焼土・炭を含む
	暗褐色 7.5YR 3/3	シルト	多量の焼土・少量の炭を含む
	暗褐色 10YR 3/2	シルト	焼土・炭を多量に含む
	暗褐色 10YR 2/3	焼土	
	褐色 10YR 4/4	シルト	炭わずかに含む
	にじく青褐色 10YR 4/3	シルト	焼土・炭を多量に含む
P2	暗褐色 10YR 3/4	シルト	焼土・炭・炭を多量に含む
	明赤褐色 5YR 5/8	焼土	堅い
	赤褐色 5YR 4/8	焼土	
	暗赤褐色 5YR 3/6	焼土	
	極暗赤褐色 5YR 2/3	焼土	

(柱穴) 柱穴と推定されるピットは検出されなかった。

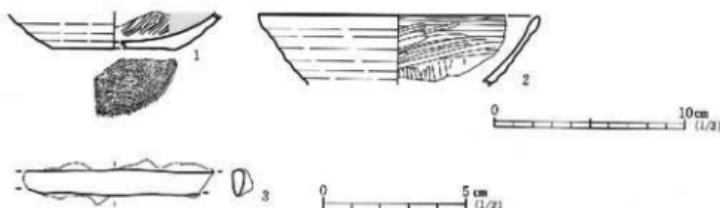
(カマド) 床面の施設として焼け面とピットがある。焼け面は東側中央にあり、径40cmの円形の範囲がかなり強く焼けており、両脇には礫が2個設置されている。焼け面の下層には径80cm深さ12cmのP2がある。焼け面の南隣には95×65cm、深さ25cmのP1があり、南壁に礫が張り付けられた状況である。堆積土8層の内側の面が焼けている。北側には50×60cm以上の長方形で深さ13cmのP3がある。その他に床面には長さ20cm程度の礫が散在している。

以上のような形態から推定すると、中央の焼け面はカマドの燃焼部と考えられ、両脇の礫はカマド袖の補強材の可能性がある。P3はカマドに附属する貯蔵用ピットとも考えられよう。P1は中央のカマドを作り直したもの可能性がある。

(出土遺物) 堆積土出土遺物 ロクロ土師器壺(2)・甕、赤焼土器壺、鉄製品(3)が出土している。3は刀子と考えられる。 床面出土遺物 ロクロ土師器壺(1)、非ロクロ土師器甕、赤焼土器壺、須恵器壺が出土している。

焼け面堆積土出土遺物 ロクロ土師器壺・甕、非ロクロ土師器甕、赤焼土器壺が出土している。

(小結) 床面出土遺物の特徴から、平安時代の住居跡と考えられる。



高さ	幅	厚	分類	層位	特	備	口径	底径	断面	登録
1 土師器壺	B	底面	底: 回転条切り 内: ヘラミガキ→黒色地				6.4		1/4	D84
2 土師器壺		2層	内: ヘラミガキ				14.8		1/4	D82
3 刀子?		2層	残存長: 66mm 幅9mm 厚4mm							N2

第39図 S19出土遺物

S I 10住居跡（第40・41図）

〔位置・確認面〕 I 南区 D・E-3・4・5 グリッド 7層上面

〔重複〕 S K 7 土坑より古い。南西隅に S D 3 溝があるが、前後関係は不明である。

〔平面形・規模〕 南北4.5m、東西4mの長方形である。あまり整った形ではない。

〔堆積土〕 2層に分けられる。両層とも似た土である。

〔床面〕 基本層7層を床とする。ほぼ平坦で南に向かいわずかに傾斜する。

〔壁〕 基本層7層を壁とする。高さは約15cmである。

〔柱穴〕 床面からピットが9個検出された。P 1は50×40cm、深さ28cm、P 2は径30cm、深さ32cm、P 3は55×40cm、深さ30cm、P 4は径25cm、深さ22cm、P 5は径30cm、深さ5cm、P 6は径20cm、深さ14cm、P 7は径25cm、深さ10cm、P 8は径40cm、深さ25cm、P 9は径30cm、深さ30cmである。ピットの配置と深さから見て、P 1・2・4・8・9が柱穴と考えられる。いずれも柱痕は検出されていない。

また、P 1からS D 3溝の方向に幅20～40cm、深さ6cm程の溝がのびる。中央西寄りの床面には深さ5cm程の不整形の落ち込みがある。

〔カマド〕 東壁北寄りに検出された。燃焼部は幅110cm、長さ75cmである。カマド袖は左右ともごく一部のみの検出である。手前には50×20cmの細長い礫、内部には径15cm程の礫がある。いずれもその場に設置された状況ではなく、カマド構築材が崩落したものであろう。床面はよく焼けている。燃焼部の下層には径1m、深さ20cm程の掘り込みがある。煙道は長さ120cm、幅25cmあり、底はほぼ平坦で深さ13cm程である。

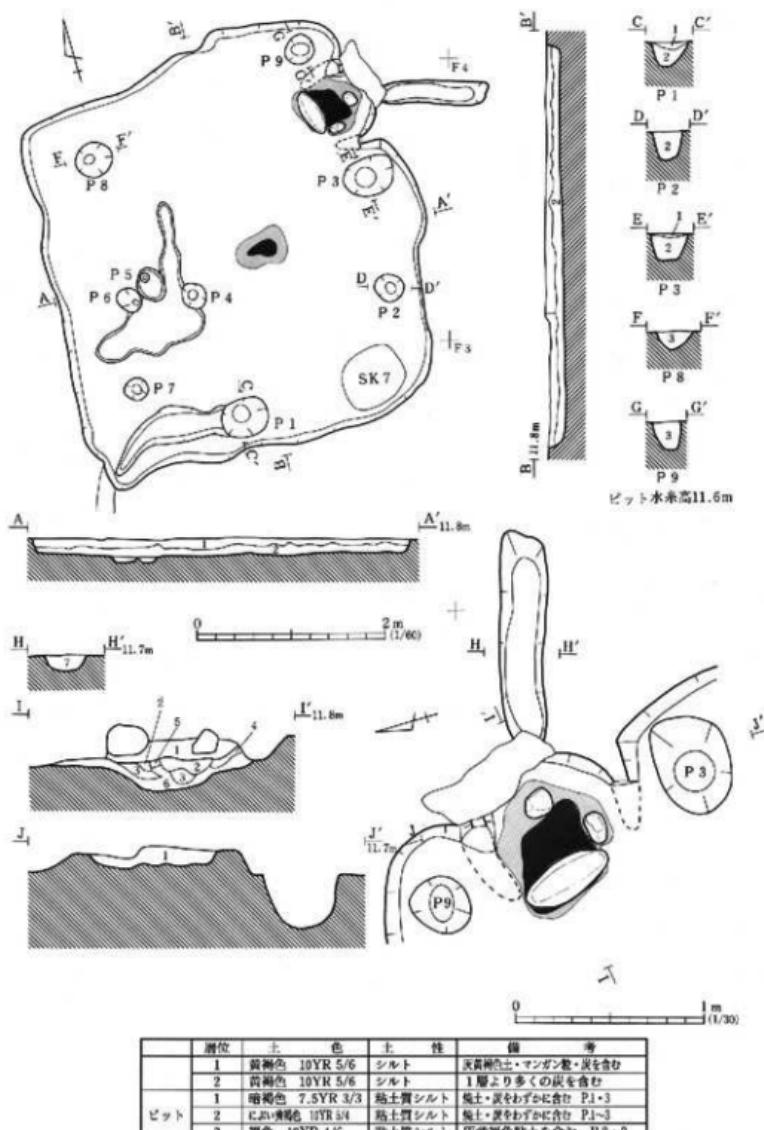
また、住居中央に60×40cmの梢円形の範囲に焼け面が見られた。よく焼けている。

〔貯蔵用ピット〕 P 3は、カマド南側にあり、住居内で一番大きなピットであるのでこれを貯蔵用ピットと推定した。しかし、特に遺物は出土しなかった。

〔出土遺物〕 堆積土出土遺物 ロクロ土師器坏(1～4)・甕、非ロクロ土師器甕、須恵器坏・甕(8)、赤焼土器坏(5・6)が出土している。1は底部回転糸切り後体部下端に手持ちヘラケズリが施される。2～4は回転糸切り後無調整のものである。 ピット出土遺物 ロクロ土師器坏、赤焼土器坏(7)が出土している。 床面出土遺物 ロクロ土師器坏の小片が出土している。

〔小結〕 床面、ピット出土遺物の特徴から、平安時代の住居跡と考えられる。

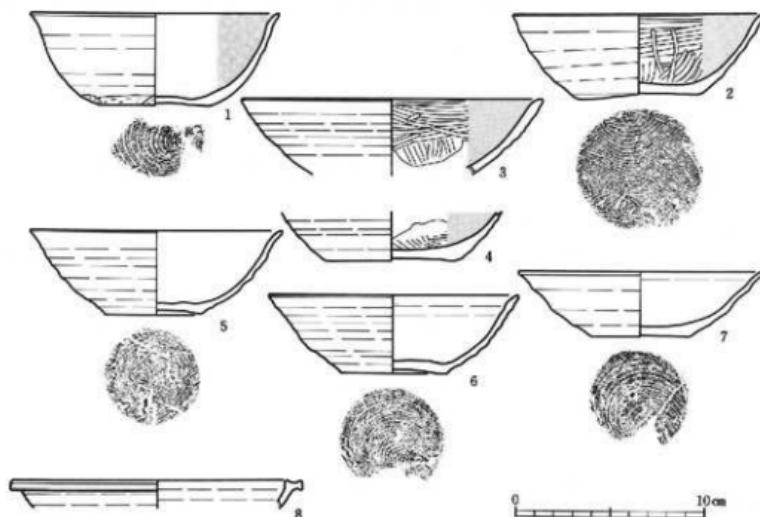
1 古墳時代以降の遺構と遺物



第40図 SI 10住居跡

(土層観察表つづき・カマド)

	層位	土色	土性	審
堆積土	1	暗褐色 7.5YR 3/4	粘土質シルト	燒土ブロック・炭を含む
	2	橙色 5YR 5/8	焼土	
	3	赤褐色 5YR 4/6	焼土	
機器土	4	明褐色 10YR 6/6	シルト	燒土・皮を多量に含む
	5	明褐色 7.5YR 5/6	シルト	燒土を多量に含む
	6	(記載なし)		
	7	にこり青褐色 5YR 4/6	砂質シルト	燒土・瓦をブロック状に多量に含む
	8			



番号	種類	分類	層位	特	口徑	底径	高さ	残存率	登録
1	土師器	A	2層・カマド層	底：回転木切り 内下：手捻ヘラキテリ 内：マツフ、褐色鉢	13.1	6.6	5.0	1/2	D89
2	土師器	B	2層	底：回転木切り 内：ヘラミガキ→黑色鉢底	13.4	6.4	4.6	2/3	D88
3	土師器		2層	内：ヘラミガキ→無色鉢底	16.0			1/5	D94
4	土師器	B	2層	底：回転木切り 内：ヘラミガキ→黑色鉢底	6.6			1/4	D93
5	赤陶土器	B	2層	底：回転木切り	13.3	9.1	4.6	1/4	D90
6	赤陶土器	E	2層	底：回転木切り	13.2	5.6	4.2	1/3	D91
7	赤陶土器	B	2層	底：回転木切り	13.6	5.4	3.5	1/4	D92
8	瓦		2層	周面：クロナデ	15.6			1/5	E8

第41図 SI 10出土遺物

S I 11住居跡（第42～44図）

〔位置・確認面〕 I 南区 B・C-3・4 グリッド 7層上面

〔平面形・規模〕 南側が調査区外であり、北・東壁の一部のみ検出している。北壁で3.8m、東壁で4 mある。

〔堆積土〕 2層に分けられる。1層は全体に、2層は東側に分布する。

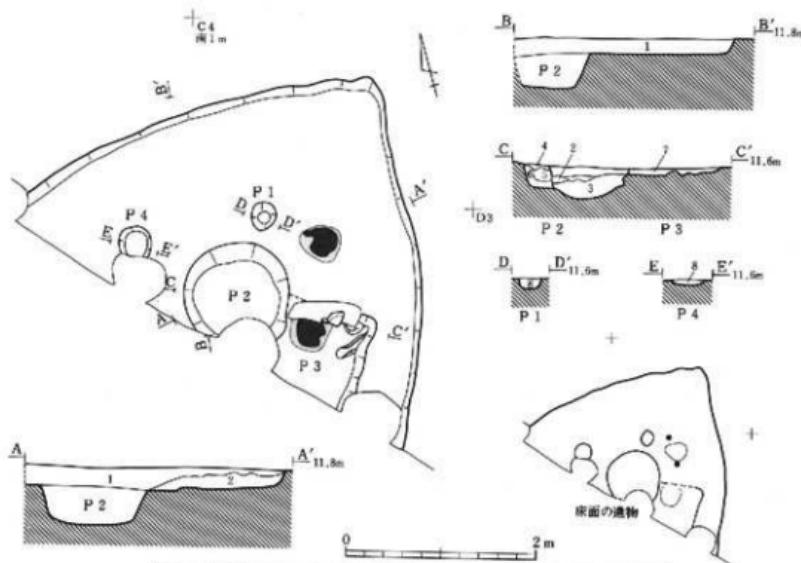
〔床面〕 基本層7層を床面とする。ほぼ平坦だが、東側がわずかに下がる。

〔壁〕基本層7層を壁とする。平均13cmの高さである。

〔柱穴〕床面からピットが2個検出されている。P1は径30cm、深さ10cm、P4は径35cm、深さ5cmであり、いずれも浅く柱穴の可能性は少ない。

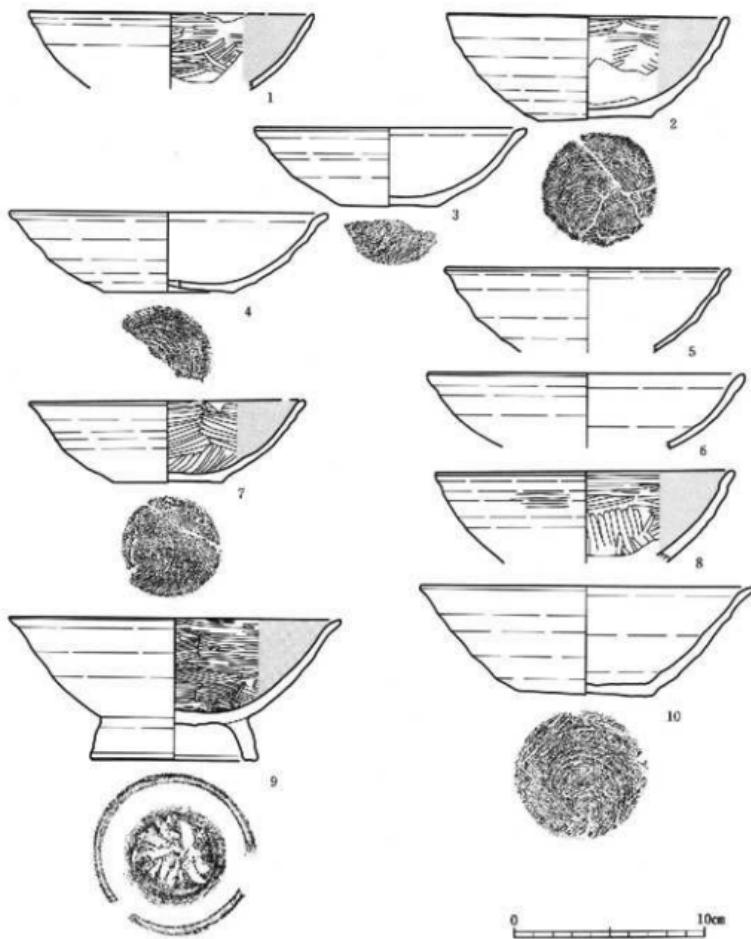
〔カマド〕住居内にカマドと考えられる施設はない。ただ、東寄りの床面に径40cmの範囲で焼け面が見られる。よく焼けている。

〔床面の施設〕床面中央にP2、その東側にP3がある。P2は径110cmの円形で深さ32cmであり、床の中央がくぼむ。P3が埋まっている後掘り込まれている。P3は一辺90cm以上の方形と見られ、深さ10cm程である。北寄りに一辺40cmの方形の焼け面があり、そばに疊がある。



層位	土色	土性	備考
1	褐色 10YR 4/4	シルト	褐色土上ブロック・マンガ根・瓦含む
2	暗褐色 10YR 3/4	シルト	マンゴン根・根・多量の瓦を含む
1	暗褐色 10YR 3/4	砂質シルト	オリーブ褐色粘土・根土・瓦を含む
2	にじむ褐色 10YR 5/4	砂質シルト	オリーブ褐色粘土・根土・瓦を含む
P2	3	暗褐色 10YR 3/4	砂質シルト オリーブ褐色粘土・にじむ褐色粘土を含む・根土・瓦を含む
4	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	3層と同じ
5	にじむ褐色 10YR 4/3	砂質シルト	オリーブ褐色粘土をわずかに含む
6	にじむ褐色 10YR 4/4	砂質シルト	オリーブ褐色粘土を含む
P3	7	にじむ褐色 10YR 4/3	粘土質シルト 施土・炭を層状に含む
P4	8	褐色 10YR 4/4	砂質シルト オリーブ褐色粘土・にじむ褐色粘土を含む

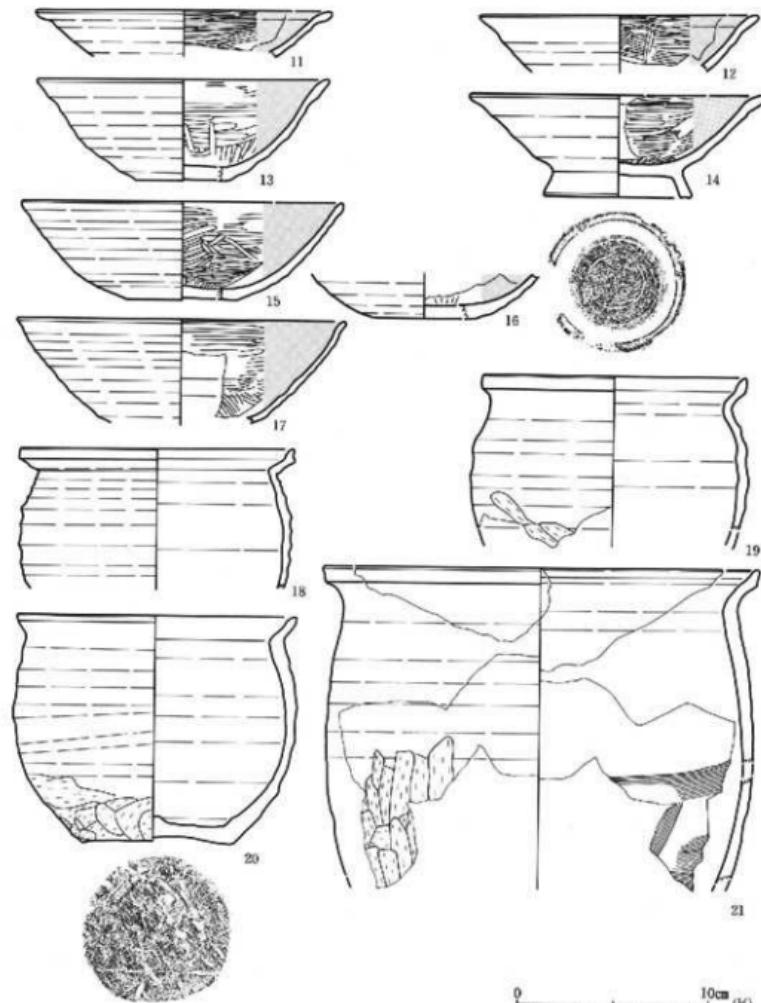
第42図 S111住居跡



番号	種類	分類	場所	特徴	口径	底径	高さ	既存率	登録
1	土師器片		1層	内：ヘラミガキ→黒色處理	15.0			1/4	D113
2	土師器片	B	2層	底：圓輪赤切り 内：ヘラミガキ→黒色處理	14.9	6.0	5.7	2/5	D103
3	赤焼土器片	B	2層	底：圓輪赤切り	14.4	5.1	4.2	1/4	D105
4	赤焼土器片	C	2層	底：圓輪赤切り	16.8	6.8	4.3	1/3	D104
5	家焼土器片	B(?)	2層		15.5			1/4	D106
6	赤焼土器片	C(?)	2層		16.8			1/6	D107
7	土師器片	B	底曲	底：圓輪赤切り 内：ヘラミガキ→黒色處理	14.5	5.6	4.4	約1	D102
8	土師器片		底曲	内：ヘラミガキ→黒色處理	15.8			1/3	D109
9	土師器蓋台片		2層+底曲	底：青白釉合+オモエ→ロクロリテ 内：ヘラミガキ→黒色處理	18.0	8.8	7.9	3/4	D100
10	赤焼土器片	C	底曲	底：圓輪赤切り	17.6	7.2	5.8	約1	D101

第43図 SI 11出土遺物 (1)

1. 古墳時代以降の遺構と遺物



番号	類 型	分類	幅 位	特 徴	口徑	底径	高さ	残存率	文様
11	土師器	P1	# 1	内：ヘラミガキ→黒色處理	15.6			1/5	D111
12	土師器	P2	# 2 13	内：ヘラミガキ→黒色處理	14.7			1/6	D114
13	土師器	B	P2 # 1+3	内：凹輪条切り 内：ヘラミガキ→黒色處理	17.0	5.6	9.3	1/6	D106
14	土師器高台环	P2	# 1+2-3	外：凹輪条切り・凸台撮合・ナデ 内：ヘラミガキ→黒色處理	15.6	7.8	5.5	1/5	D120
15	土師器	B	P3 # 2	外：凹輪条切り 内：ヘラミガキ→渦状處理	15.4	5.6	5.5	1/4	D110
16	土師器	B	P3 # 1	外：凹輪条切り 内：ヘラミガキ→黒色處理		5.2		1/4	D121
17	土師器	P3	# 1	内：ヘラミガキ→黒色處理	17.4			1/5	D115
18	土師器	A	1 横	内面：ロクロナデ	14.5			1/2	D117
19	土師器	A	2 横	外：ロクロナデ下部ヘラケズリ 内：ロクロナデ	13.9			1/2	D118
20	土師器	A	冰皿	底：切り残し不明 体：丸・直：ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	14.9	8.4	12.2	4/5	D115
21	土師器	B	2 横	外：ロクロナデヘラケズリ 内：ロクロナデ	23.2				D116

第44図 SII 11出土遺物(2)

〔出土遺物〕 堆積土出土遺物 ロクロ土師器壺(1・2)・甕(18・19・21)・瓶、非ロクロ土師器甕・須恵器甕・甕、赤焼土器壺(3~6)が出土している。土師器壺は底部回転糸切り後無調整のものである。19・21の甕は体部下端にヘラケズリが施される。 床面出土遺物 ロクロ土師器壺(7・8)・高台壺(9)・甕(20)、非ロクロ土師器甕・赤焼土器壺(20)が出土している。7は、底部の切り離しが回転糸切り後無調整の壺である。9は大形の高台壺で、高台は高い。20は小形の甕で、体部下端にヘラケズリが施される。 ピット出土遺物 P 1 ロクロ土師器壺(11)・甕、非ロクロ土師器甕が出土している。 P 2 ロクロ土師器壺(12・13)・高台壺(14)・甕、非ロクロ土師器甕・赤焼土器壺が出土している。 P 3 ロクロ土師器壺(15~17)・甕、非ロクロ土師器甕・赤焼土器壺が出土している。

〔小結〕 床面出土土器の特徴から、平安時代の住居跡と考えられる。

S I 12住居跡（第45~48図）

〔位置・確認面〕 I 北区 C・D・E-31・32・33グリッド 6層上面

〔増改築〕 カマドが2基あることから、改築されていると考えられる。

〔平面形・規模〕 東端を搅乱で破壊されるが、南北5.5m、東西4.5m以上の方形と考えられる。

〔堆積土〕 7層に分けられる。5・6層は壁際に堆積し、1~4層は住居全体にほぼ水平に堆積する。7層は周溝堆積土である。

〔床面〕 掘り方埋土を床面としている。掘り方は深さ25cm程あり、底面はほぼ平坦である。埋土は2層に分けられ、上層の褐色シルトが貼り床となる。床面はほぼ平坦である。

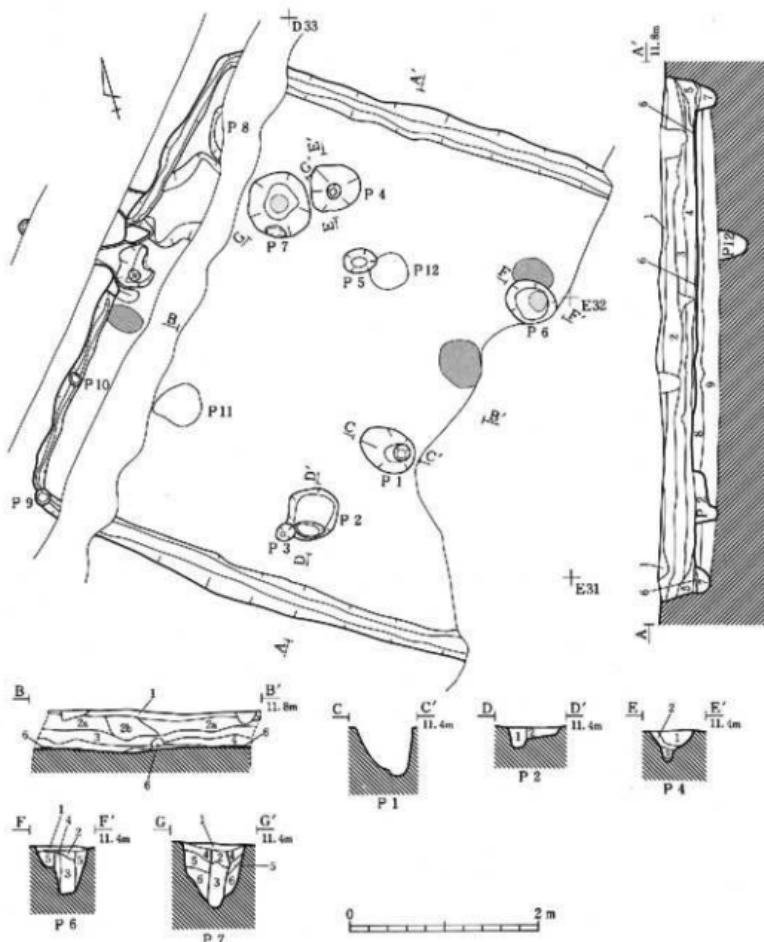
〔周溝〕 カマド以外の壁に周溝がある。幅は西壁部が狭く10~18cm、深さ9cm、北・南壁部が幅25~30cm、深さ14cmである。

〔壁〕 基本層6層を壁とする。検出面がかなり下がっている部分もあるが、周溝底から測り、西壁で23~40cm、北・南壁で48~53cmである。傾斜は急である。

〔柱穴〕 床面から8個のピットが検出された。P 1は60×45cmの楕円形で深さ45cmである。P 2は60×50cmの楕円形で南側が一段下がり深さ22cmである。径20cmのP 3と切り合う。P 4は径50cmの不整円形で深さ34cm、P 5は35×25cmの楕円形で深さ20cm、P 6は径50cmで、深さ50cm、P 7は径65cmの円形で、深さ70cmである。P 8は長さ60cm以上の楕円形と見られるが、深さ不明である。以上のピットのうちP 1・P 6・P 7には柱痕跡が認められ、また規模も大きいことから柱穴と考えられる。

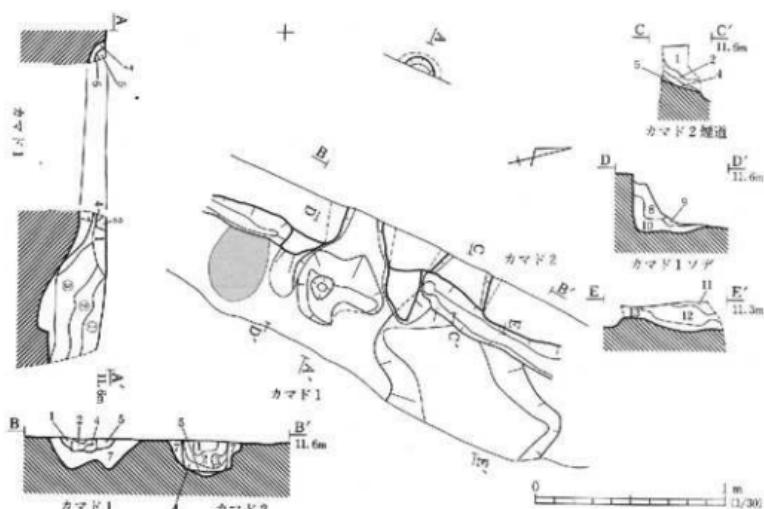
西壁の周溝内にP 9・10がある。径10cm程の円形で、深さはP 9が15cm、P 10が18cmである。

掘り方除去後にP 11・12が検出された。P 11は径45cm、深さ35cm、P 12は径38cm、深さ40cmである。



層位	土色	土性	備考
堆積上	褐色 7.5YR 4/4	シルト	礫土を含む
	赤褐色 10YR 5/6	シルト	礫土・炭・砂を少量含む
	褐色 10YR 4/4	シルト	炭を含む
	赤褐色 10YR 4/3	シルト	炭・黄褐色砂を含む
	暗褐色 10YR 3/3	シルト	炭・黄褐色砂を含む、堅りつい
	褐色 10YR 4/4	シルト	炭・にぶい黄褐色砂を含む
溝	褐色 10YR 4/6	シルト	炭を多量に含み、一部礫土が亂じる
貼り床	褐色 10YR 4/4	シルト	マンガン粒・酸化物・炭を含む
掘り方	灰褐色 10YR 4/2	シルト	マンガン粒・酸化物を少く含む

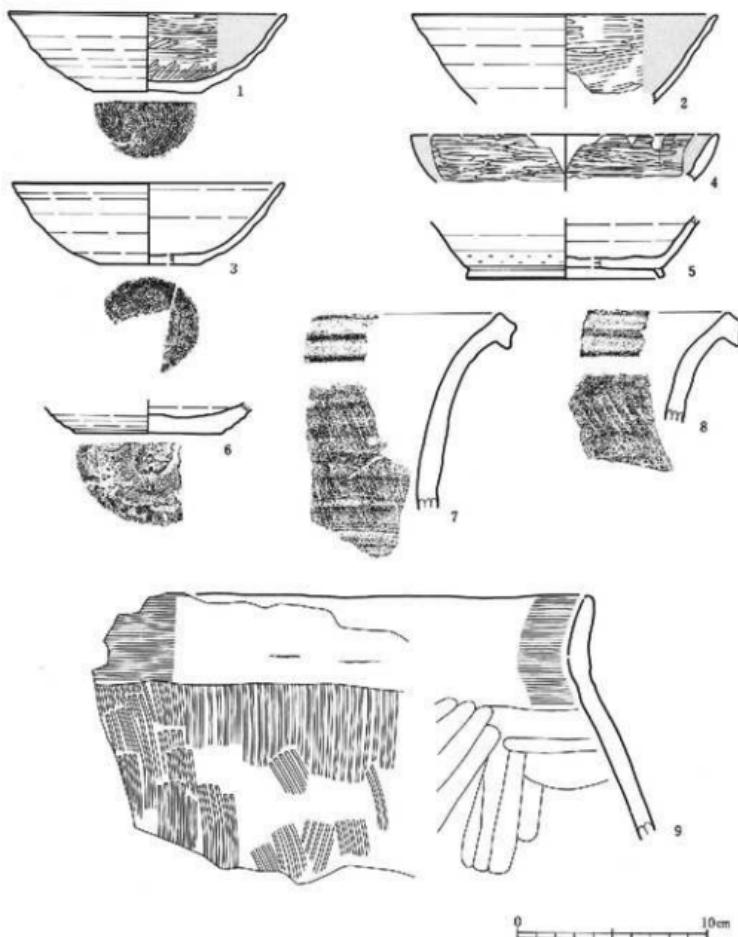
第45図 SI 12住居跡



層位	土色	土性	備考
P2	暗褐色 10YR 4/3	シルト	黄褐色砂・炭を含む
	褐色 10YR 4/4	シルト	黄褐色砂を含む
P4	黄褐色 10YR 5/6	シルト	黒化鉄・マンガン鉄・炭を含む
	褐色 10YR 4/6	シルト	酸化鉄・炭・鉄土を含む
	褐色 10YR 4/6	シルト	マンガン鉄を含む
P6	褐色 10YR 5/1	シルト	黄褐色砂を含む
	褐色 10YR 4/4	シルト	暗灰黄色土をブロック状に含む
	褐色 7.5YR 4/3	粘土質シルト	粘性あり
	暗褐色 7.5YR 3/4	シルト	炭・焼土を含む
P7	暗褐色 10YR 3/4	砂質シルト	黄褐色砂を含む
	黄褐色 10YR 5/6	シルト	炭・焼土をブロック状に含む
	暗褐色 10YR 3/4	シルト	炭をわずかに含む
	暗褐色 10YR 3/3	シルト	炭・焼土をブロック状に含む
	褐色 10YR 4/6	シルト	炭をブロック状に含む
	褐色 10YR 4/4	シルト	炭・焼土を含む
	P.25 暗褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	炭・焼土を含む
カマド 煙道	褐色 10YR 4/4	シルト	炭・焼土を少量含む
	洪積泥 30YR 5/2	シルト	焼土を多量に含む
	暗褐色 7.5YR 3/3	シルト	焼土と多量の炭を含む
	褐色 7.5YR 2/3	焼土	
	褐色 10YR 5/1	シルト	焼土を多量に含む
廻り方	P.25 暗褐色 10YR 5/2	シルト	炭を多量に含む
	暗褐色 7.5YR 3/4	シルト	明瞭褐色砂を含む
住居の 堆積土	褐色 10YR 4/4	シルト	焼土を含む
	P.25 暗褐色 10YR 4/3	シルト	焼土を含む
	P.25 暗褐色 10YR 4/5	シルト	焼土をブロック状に含む
カマド ソデ	褐色 10YR 4/4	シルト	炭を少量含む
	褐色 10YR 3/4	シルト	炭・焼土を含む
	褐色 10YR 4/4	シルト	炭をわずかに含む
	褐色 7.5YR 4/3	シルト	焼土をわずかに含む
11 12 13	褐色 10YR 4/4	シルト	焼土をブロック状に含む
	暗褐色 10YR 3/3	粘土質シルト	焼土をわずかに含む

第46図 SII 12住居跡 カマド

1 古墳時代以降の遺構と遺物



番号	種類	分類	層位	特徴	口径	底径	深さ	残存率	登録
1	土師器	B	1層	底: 刮削余切り 内: ヘラミガキ→黒色赤理	14.5	5.6	4.3	1/2	D126
2	土師器		1層	内: ヘラミガキ→黒色赤理	16.0			1/5	D121
3	赤燒土器	B	1層	底: 刮削余切り (?)	14.4	5.2	4.4	3/5	E10
4	土師器		P1	内: ヘラミガキ→黒色赤理 口外: ヘラミガキ→黒色赤理	16.2			1/6	C17
5	須磨石馬台跡		3層付近(?)	面: 刮削ヘラケズリ - 馬台腰台ナダ 先下: 刮削ヘラケズリ	10.5			2/3	E15
6	須磨石		頭り方	底: ネギカ切り	7.6			1/4	E11
7	須磨石		1層	外: 平行タタキ→ロクロナダ 内: ナダ				1/4	E12
8	須磨石		1層	外: 平行タタキ→ロクロナダ 内: ロクロナダ				1/4	E13
9	土師器		体面	口外: ロコナダ 体外: ハクメ 口内: ロコナダ 体内: ナダ				1/4	C70
番号	種類	層位	上径	下径	厚さ	上乳孔	下乳孔	底	石材
10	鉢形車	周溝	2.63	3.75	1.81	0.69	0.72	38.5g	蛇紋岩 帶斑あり

第47図 SII 12出土遺物 (1)

(単位: cm)

(カマド)西壁中央部に新旧2基検出された。古いもの(カマド2)は北側にあり、煙道のみ残存している。幅30cm、長さ18cmである。底面は住居側に傾斜しており、深さは18cm～25cmである。カマド2は廃絶後は燃焼部が壊され、周溝がつくられている。

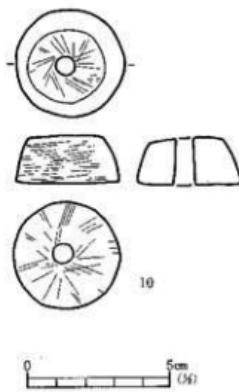
新しいもの(カマド1)は南側にある。燃焼部の幅は90cm、長さ40cmであり、カマド袖は褐色シルトで構築されている。中央部には45×45cmの範囲で、深さ10cmの不整形の掘り込みがある。煙道は幅20cm、長さ113cmあり、底面は燃焼部との結合部が傾斜するが、その先は平坦で、深さ14cmである。カマド2前面の下層に長さ110cm、幅50cm以上の範囲で深さ15cmの掘り込みがある。

以上に他に3箇所の焼け面がある。カマド南脇は、長さ40cm、幅25cmの範囲で、焼けの程度は弱く炭化物の集中した状況である。P1・6間は径50cmで、良く焼けている。P6脇は径40cmで良く焼けている。

(出土遺物) 堆積土出土遺物 ロクロ土師器壺(1・2)・壺、非ロクロ土師器壺、須恵器壺・高台壺(5)・壺(7・8)・壺・蓋、赤焼土器壺(3)が出土している。1は底部回転糸切り後無調整のものである。5は須恵器高台壺で、体部下端に回転ヘラケズリが施される。3は灰白色軟質のもので、須恵器とも赤焼土器ともつかないようであるが、一応赤焼土器とした。

ピット出土遺物 非ロクロ土師器壺(4)が出土している。体部外面に縁い段がつく。内外面にヘラミガキ、黒色処理が施される。床面出土遺物 非ロクロ土師器壺(9)が出土している。9は体部がややふくらみ口縁部が直立気味の器形である。体部外面の調整は縦方向のハケメである。掘り方出土遺物 須恵器壺(6)が出土している。底部ヘラ切りである。周溝出土遺物 石製の紡錘車が出土している(10)。上下の面には放射状に、側面には横方向に擦痕が見られる。

(小結) 床面出土土器は土師器壺のみであり明確な時期決定はできないが、その特徴から古墳時代後期頃の住居跡と考えられる。



第48図 SI 112出土遺物(2)

S I 13住居跡（第49・50図）

〔位置・確認面〕 I 北区 A・B-25・26グリッド 6層上面

〔重複〕 SK15土坑より古い。

〔平面形・規模〕 撫乱よりかろうじて残った部分で確認された住居で、カマドと、床面と思われるものの一部が4m×2mの範囲で検出された。

〔堆積土〕 上面が削平されており、堆積土はほとんど残っていない。

〔床面〕 基本層6層をそのまま床面としている。

〔壁〕 調査区内では認められなかった。

〔柱穴〕 調査区内では認められなかった。

〔カマド〕 燃焼部のみ検出された。残存する大きさは、幅112cm、長さ70cmである。カマド袖は向かって左は明黄褐色シルトで構築されるが、右は基本層もそのまま利用しているようである。また、袖部には10点の螺が散在しており、構築材かもしれない。煙道との接合部は、幅30cmである。

カマドの下層には2個のピットがある。北側は一辺45cmの方形で、深さ5cm、南側は50×40cmの梢円形で、深さ4cmである。

〔その他〕 カマド北東部のSK15に切られた形で、溝状の遺構が検出された。大きさは幅20～30cm、長さ20cm、堆積土は焼土を含むものである。カマドの煙道の可能性がある。SI13に伴うものか、撫乱で破壊された別の住居に伴うものか、不明である。

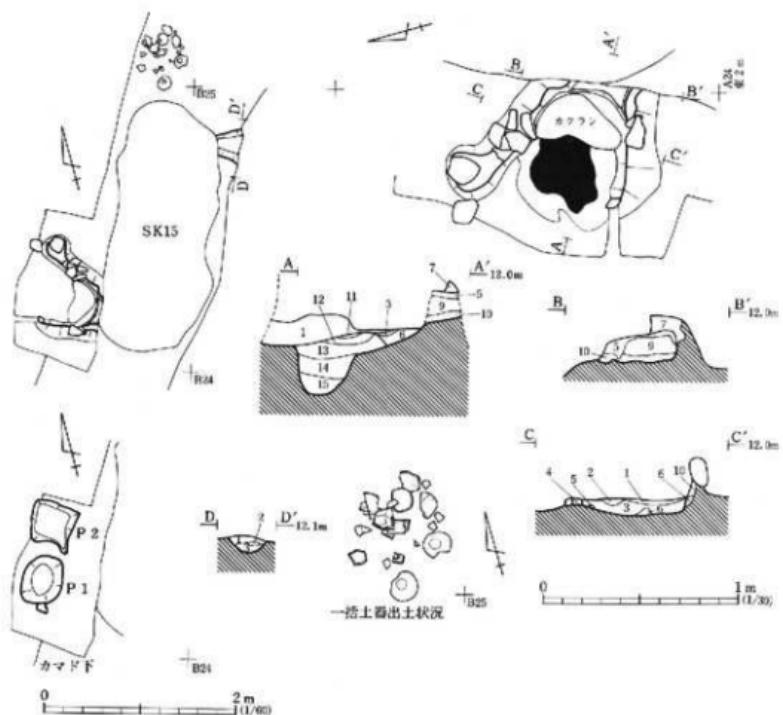
〔出土遺物〕 カマド堆積土出土遺物 ロクロ土師器壺・甕(8・10)、非ロクロ土師器甕、須恵器甕、灰釉陶器、鉄製器(棒状)が出土している。灰釉陶器は図示できないが、広口瓶の体部下端片である。猿投窯の製品で折戸53号窯式かそれ以後と考えられる(原色図版4・5)。 床面一括土器 カマド北側の70cm四方の範囲にロクロ土師器壺(1～4)・甕(6・7)、赤焼土器壺(5)が計7個体まとめて出土した。1～4の壺は、底部の切り離しが回転糸切り後無調整のものである。7は体部下半にヘラケズリが施される。5は灰白色軟質で、ゆがみが大きく須恵器とも赤焼土器ともつかないものであるが、一応赤焼としたものである。 カマド下ピット出土遺物 ロクロ土師器壺・甕が出土している。 撫乱出土遺物 9は住居上の撫乱出土の土師器甕である。

〔小結〕 床面出土土器の特徴から、平安時代の住居跡と考えられる。

S I 14住居跡（第51～54図）

〔位置・確認面〕 I 北区 B・C-28・29・30グリッド 6層上面

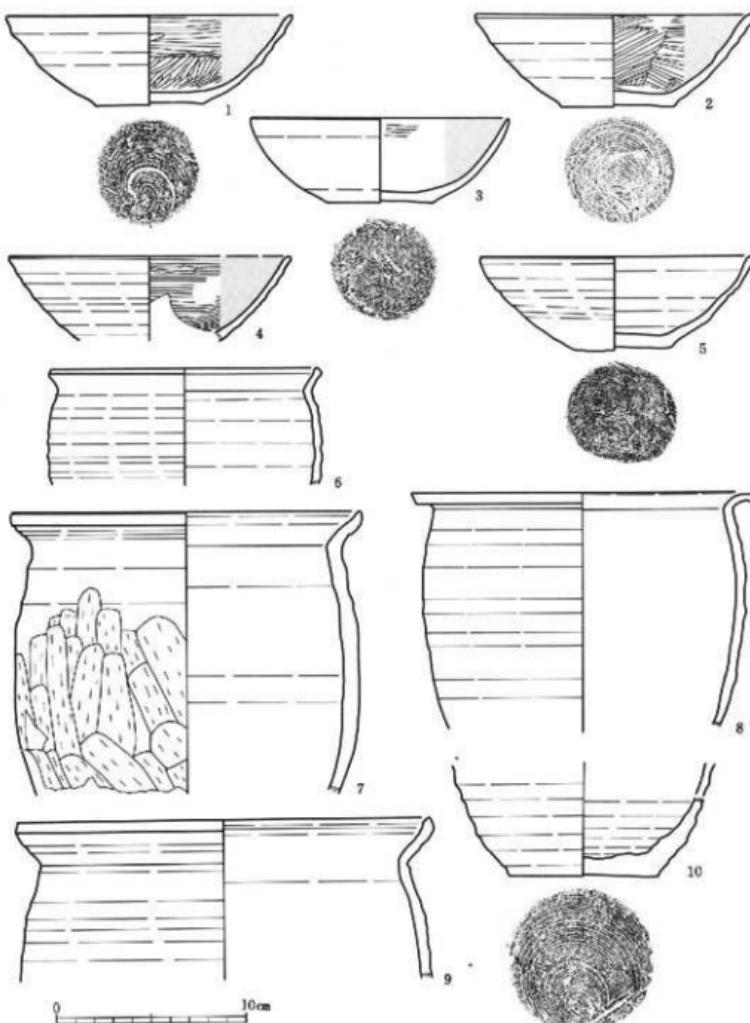
〔平面形・規模〕 西隅を欠くが、北東-南西3.3m、北西-南東3.65mの方形である。



層位	土色	土性	留	考
1	暗褐色 7.5YR 3/3	シルト	焼土・炭を含む	
2	オーラー褐色 7.5Y 4/1	粘土質シルト	粘性強い、焼土を含む	
3	褐色 7.5YR 3/4	粘土質シルト	焼土を含む	
4	明褐色 10YR 6/6	シルト		
5	明褐色 7.5YR 5/8	焼土	部分的に堅い	
6	褐色 10YR 4/6	シルト	焼土を少量含む	
7	にじく青褐色 10YR 4/3	シルト	灰を少量含む	
8	黒褐色 10YR 2/3	焼土		
9	褐色 7.5YR 4/3	シルト	表土・焦・マンゴン根をわずかに含む	
10	暗褐色 7.5YR 3/4	シルト	焼土を多量に含む	
11	明赤褐色 5YR 5/8	焼土	強く焼けている	
12	赤褐色 5YR 4/8	焼土	強く焼けている	
13	暗褐色 7.5YR 3/4	シルト	焼けている	
14	褐色 7.5YR 4/4	シルト	焼土・炭を含む	
P1	灰青褐色 10YR 5/7	粘土質シルト	炭を含む	
P2	褐色 7.5YR 4/3	シルト	焼土・瓦をブロック状に多量に含む	
D D'	暗赤褐色 5YR 3/3	シルト	焼土・黄褐色砂を含む	
2	褐色 7.5YR 4/3	シルト	焼土・炭を含む	
3	褐褐色 7.5YR 2/3	焼土		

第49図 SI 13住居跡

1 古墳時代以降の造像と遺物



番号	種類	分類	層位	容積	口径	底径	保存率	登録
1	土師塗灰	B	灰面	底: 回転点切り 内: ヘラミガキ→黒色鉄漿	15.2	5.6	4.7	1/3 D136
2	土師塗灰	B	灰面	底: 回転点切り 内: ヘラミガキ→黒色鉄漿	14.7	6.0	5.0	3/4 D135
3	土師塗灰	B	灰面	底: 回転点切り 内: ヘラミガキ (マツツ)→黒色鉄漿	13.6	5.4	4.5	1/4 D137
4	土師塗灰		灰面	内: ヘラミガキ→黒色鉄漿	14.8			1/4 D138
5	赤陶土塗灰	B	灰面	底: 回転点切り	14.1	6.1	5.1	約1 E16
6	土師器蓋	A	灰面	両面: ロクロナデ	14.6			1/4 D140
7	土師器蓋	B	灰面	外: ロクロナデ→ヘラケズリ 内: ロクロナデ	18.5			1/4 D139
8	土師器蓋	B	カマド #1	両面: ロクロナデ	18.1			1/4 D145
9	土師器蓋	B	カクラン	両面: ロクロナデ	22.2			1/4> D143
10	土師器蓋	A	カマド	底: 回転点切り 両面: ロクロナデ	7.8			約1 D141

第50図 S113出土遺物

〔堆積土〕4層に大別される。4層は壁際にのみ分布し、1~3層は全体に分布する。3・4層が床面を覆う。

〔床面〕基本層6層を床面とする。ほぼ平坦で比較的堅い。床面上に薄く炭化物層があり、また、炭化材も検出された。

〔壁〕基本層6層を壁とする。平均25cmの高さで、傾斜は急である。

〔柱穴〕床面から9個のピットが検出されている。P1は40×30cm、深さ26cm、P2は径20cm、深さ8cm、P3は径24cm、深さ7cm、P4は径70cm、深さ20cm、P5は径40cm、深さ18cm、P7は45×30cm、深さ28cm、P8は炉を切っており、径18cm、深さ10cm、P9・10は壁にあり、径30cmで深さ24cmである。P5・9・10は壁柱穴として機能していたものであろう。他のピットのうちいずれかが主柱穴と考えられるが、確定できない。

住居北側にも3個のピットがある。P11は20×10cm、深さ10cm、P12は径30cm、深さ40cmで柱痕跡があり、P13は径20cm、深さ16cmである。P12は柱痕跡があることから、住居と関係するものかも知れない。P34は住居より古い。

〔炉〕床面中央に炉がある。長さ180cm、幅135cmの範囲が不整形に焼けている。その構造は、床面から5cm程度掘り下げられ、下層に黄褐色粘土質シルト、上層に焼土の層があり、焼土の最上面は強く焼けている。中央部は明赤褐色、その周囲は極暗赤褐色に焼けている。北端には大型の炭も残存していた。焼け面を切っていくつかの小ピットがある。

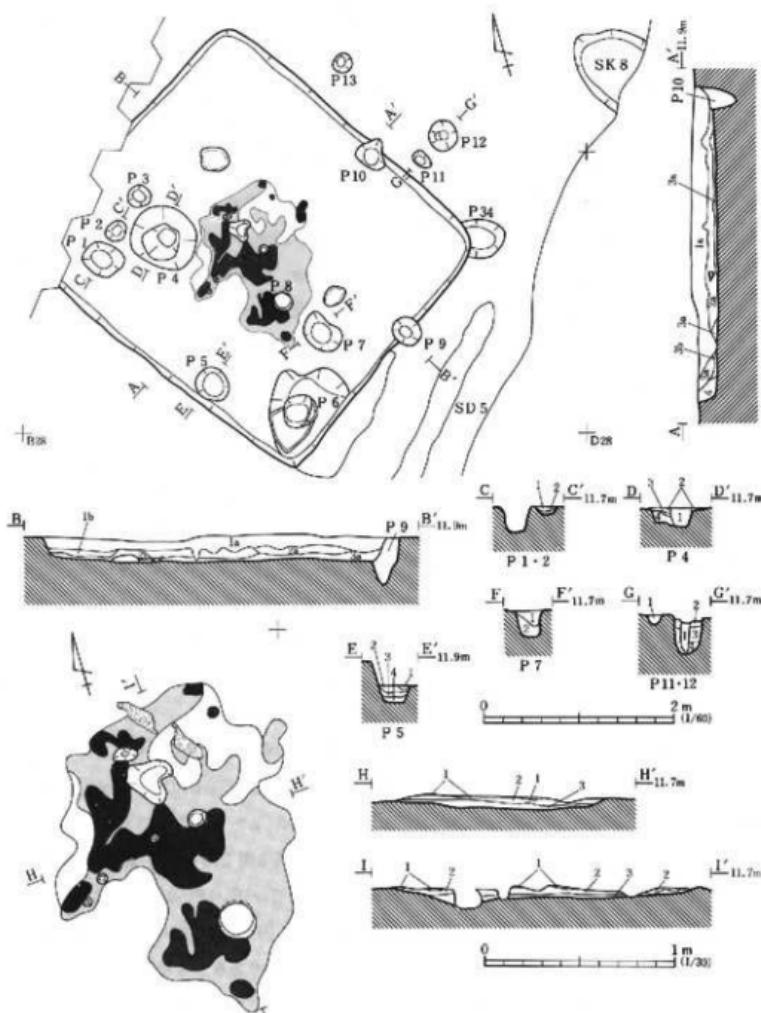
〔貯蔵用ピット〕住居南隅にP6がある。二段構造で、100×70cmの大きさで6cm程掘り下げられた中に、38×28cm、深さ22cmのピットがある。ピットの位置と大きさから貯蔵用ピットと考えられる。

〔出土遺物〕遺物は堆積土と、床面及び床面直上より多くの遺物が出土している。床面及び床面直上のものは炉を中心に北・東・南に分布しており、炉の上からも出土している(第52図)。

堆積土出土遺物 非ロクロ土師器壺他の破片が出土している(2~4・7・13・16・17)。2は器台である。円窓が3個ある。3・4は脚部である。13・16は壺である。17は確認面出土の器種不明の口縁部である。床面及び床面直上出土遺物(1・5・6・8~12・14・15) 1は土師器高杯である。脚部は直線的に広がり端部が短く広がり、円窓が3個ある。外面は赤彩される。5・6は壺である。6は内外面に赤彩される。8~11は壺である。9は頸部に隆線が巡り、その上に刺突が施される。11は体部が非常に張る。12・14は壺で、12は外面ヘラケズリの小形壺である。

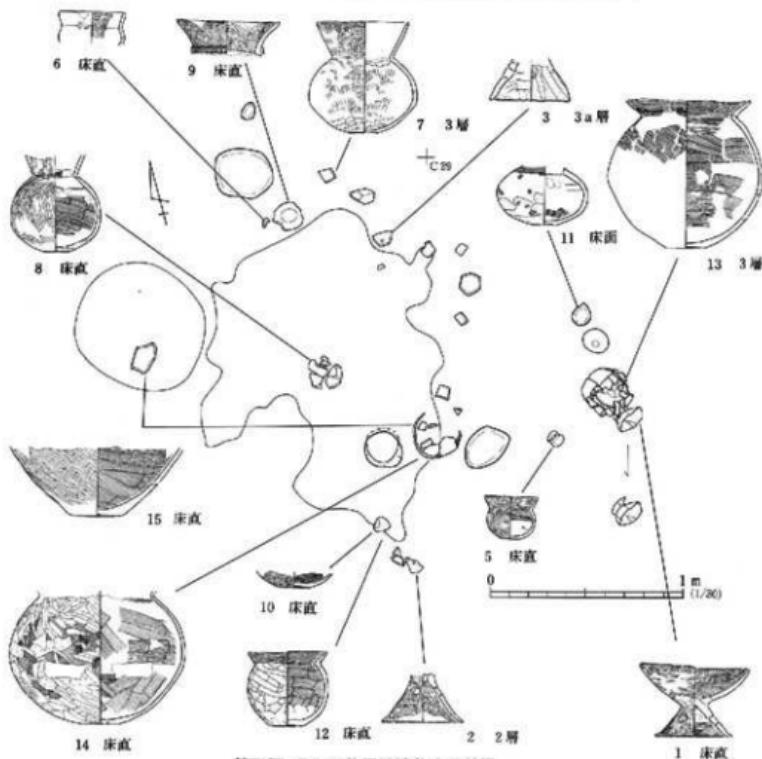
〔SK8土坑との関係〕床面直上出土の12と3層出土の7は、S I 14から北東部に1m離れたSK8の1層出土土器と接合している。

〔小結〕床面出土土器の特徴と住居の構造から、古墳時代前期の住居跡と考えられる。

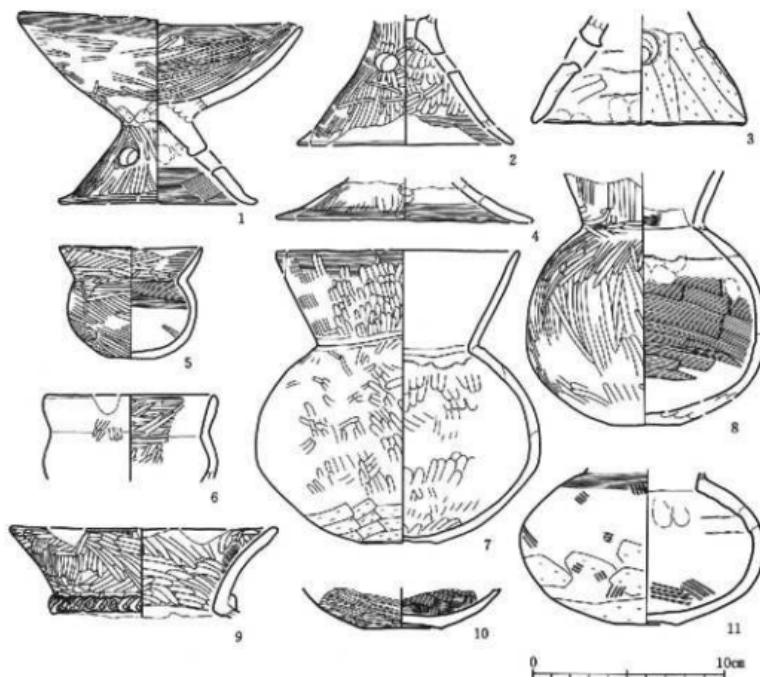


(土層鉄査表つづき)

層位	土色	土性	備考
P2	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	焼土・炭・灰を多量に含む
	灰青褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	炭をわずかに含む
P4	灰青褐色 10YR 6/2	粘土	酸化鉄・炭をわずかに含む
	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	炭・灰を多量に含む、焼土を含む
	明赤褐色 5YR 5/8	焼土	
	褐色 7.5YR 4/3	シルト	焼土・炭・マンガン鉱をわずかに含む
P5	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	炭・灰を多量に、鐵を少しが含む
	灰青褐色 10YR 5/2	粘土質シルト	炭をわずかに含む
	灰青褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	炭を含む
P7	暗褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	粘性強い、黒灰色粘土を含む
	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	炭を多量に含む
P11	褐色 10YR 4/4	シルト	炭をわずかに含む
P12	灰青褐色 10YR 4/3	シルト	焼土・炭を含む
	暗褐色 10YR 3/3	シルト	マンガン鉱を含む
	褐色 10YR 4/4	シルト	マンガン鉱を含む
	暗褐色 10YR 3/4	シルト	マンガン鉱を含む
P7	明赤褐色 5YR 5/8	焼土	非常に強く焼けている
	強赤褐色 2.5YR 3/2	焼土	
P7	黄褐色 10YR 5/8	粘土質シルト	

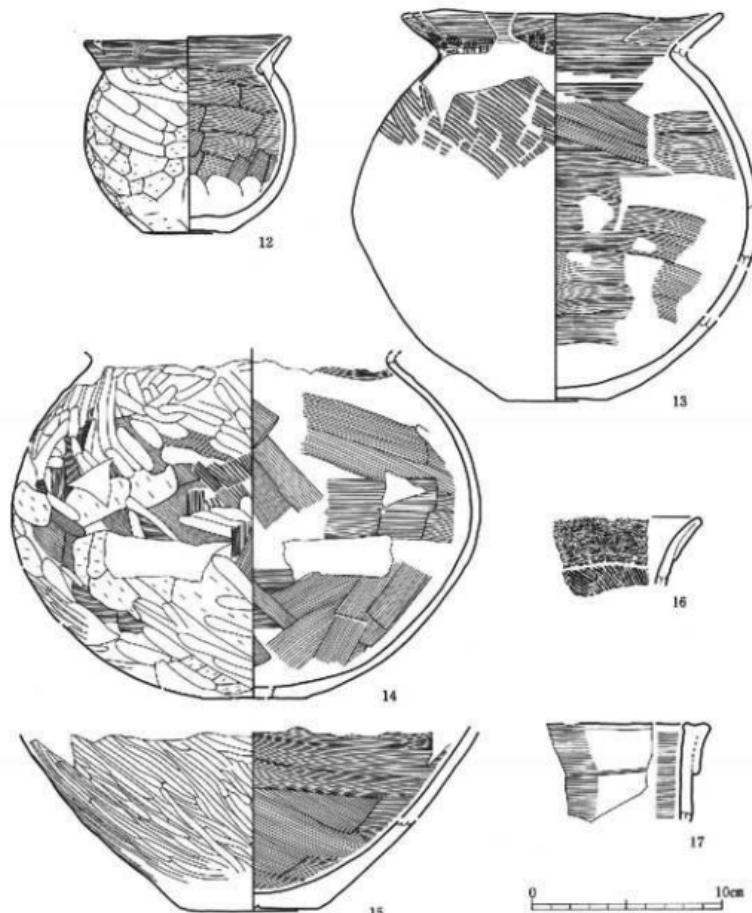


第52図 SII 14住居跡遺物出土状況



番号	種類	層位	特徴		口径	底径	高さ	残存率	空缺
			外	内					
1	土器器高环	床塗	体外：ヘラケズリ・ココナデ→ヘラミガキ 体内：ココナデ→ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	すかし穴3孔 外面漆添	15.1	10.6	20.3	約1	C18
2	土器器蓋台	2層	外：ヘラミガキ 内：ナデ→ヘラミガキ	すかし穴3孔(?)	11.4		1/3	C26	
3	土器器蓋台?	3b層	外：ヘラケズリ 内：ナデ	すかし穴3孔(?)	11.0		1/4	C30	
4	土器器高环	2b層	外：ココナデ→ヘラミガキ 内：ココナデ	すかし穴あり	13.6		1/4	C34	
5	土器器高环	床塗	外：ヘラミガキ 口内：ヘラミガキ 体内：ヘラナデ→ヘラミガキ		7.6	2.3	6.6	約1	C19
6	土器器高环	床塗	内面：ヘラミガキ 四面とも素形		9.3		1/2	C21	
7	土器器蓋	3層	上外：ココナデ→ヘラミガキ 体外：ヘラミガキ 下端：ヘラケズリ 口内：マメ付 体内：アーチクラミガキとSKBと接合		12.8	4.0	15.6	約1	C25
8	土器器蓋	床塗	外供：ハケメ→ヘラミガキ 底内上：ハケメ 下：ヘラナデ、オサエ		3.5			約1	C23
9	土器器蓋	床塗	外：ヘラミガキ 施錆→剥落 内：ヘラミガキ		14.2			約1	C24
10	土器器蓋	床塗	外：ヘラケズリ→ヘラミガキ 内：ヘラナデ		4.2		1/4	C33	
11	土器器蓋	灰塗	外：ココナデ、ヘラケズリ→ハラス、ヘラミガキ 内：ハラス(?)、オサエ		3.1			約1	C29

第53図 ST14出土遺物(1)



番号	種類	層位	特徴	口径	施設	壁高	保存率	兼続
12	土筋壁	灰窓	外:ヨコナデ 内:ヘラケズリ	10.8	4.3	10.5	約1	C20
13	土筋壁	2層	外:ヨコナデ 施外:ハケメ 内:ヨコナデ 施内:ハケメ、ヘラナデ	16.0	5.5	20.7	2/3	C22
14	土筋壁	灰窓	外:ハケメナデ、ミガキ、ヘラケズリ 内:ヘラナデ	5.6			2/5	C28
15	土筋壁	灰窓	外:ヘラミガキ 内:ヘラナデ	7.8			1/3	C27
16	土筋壁	1a層	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ハケメ				1/4>	C37
17	土筋壁	1層	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ				1/4>	C71

第54図 SII 14出土遺物(2)

S I 16住居跡（第55図）

〔位置・確認面〕 II区北部 2層

〔平面形・規模〕 南東部のみ残り、平面形は不明だが、東壁で3m、南壁で1.1mある。

〔堆積土〕 4層に大別され、各層が細分される。

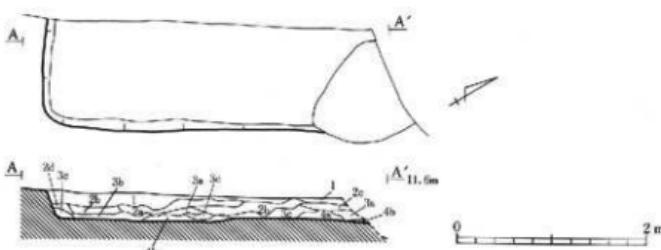
〔床面〕 基本層をそのまま床面とする。南側がやや下がる。

〔壁〕 基本層を壁とする。北端で22cm、南隅で31cmある。

〔柱穴・カマド〕 検出されなかった。

〔出土遺物〕 堆積土および床面から土師器壊・甕、須恵器壊の破片が出土しているが、いずれも小片である。床面より、底部回転糸切りの須恵器片が出土している。

〔小結〕 住居跡の所属時期は不明である。



層位	土色	土性	備考
1	褐色 7.5YR 4/3	シルト	炭を含む
2a	灰褐色 10YR 4/2	砂質シルト	炭・燒土を含む
2b	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	マンガン粒を含む
2c	暗褐色 10YR 3/4	シルト	炭を含む
2d	褐色 10YR 4/4	シルト	
3a	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	炭を含む
3b	灰褐色 10YR 5/3	砂質シルト	
3c	暗褐色 10YR 3/4	シルト	炭・マンガンを含む
4a	灰褐色 10YR 5/3	シルト	炭を含む
4b	暗褐色 10YR 3/3	シルト	炭を含む

第55図 S I 16住居跡

S I 17住居跡（第56～58図）

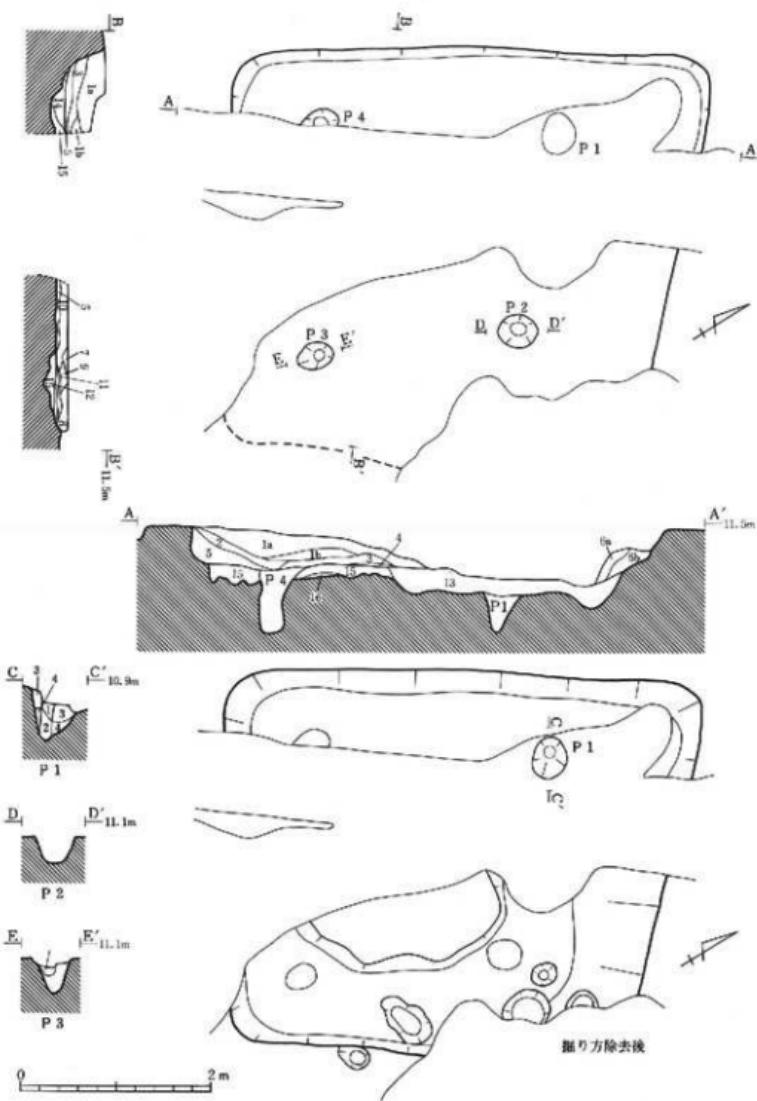
〔位置・確認面〕 II区南部 2層

〔重複〕 SK26土坑より古い。

〔平面形・規模〕 中央部と北東隅を攪乱で欠くが、南北5m、東西4.4mの方形と考えられる。

〔堆積土〕 12層に分けられる。5・6層は壁際に堆積する。

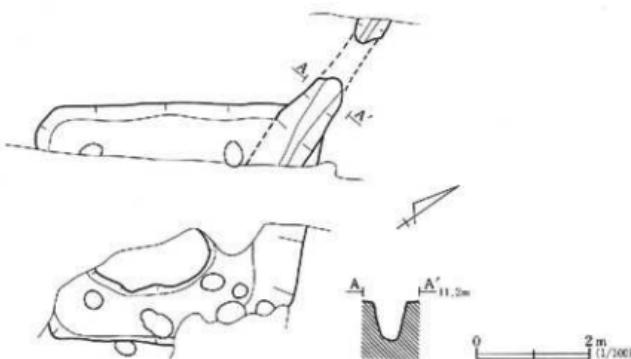
〔床面〕 掘り方埋土を床面としている。掘り方は10～25cmの深さで、底面は中央部よりも壁際



第56図 SII 17住居跡 (1)

SI17 土層鉱索表

層位	土色	土性	備考
la	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	黄褐色土を含む
lb	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	黄褐色土を含む
2	黒褐色 10YR 3/2	シルト質粘土	炭を多量に含む
3	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	
4	褐色 10YR 1/1	粘土	炭を多量に含む
5	褐色 10YR 4/4	シルト質粘土	黄褐色土を含む
6a	暗褐色 10YR 3/4	シルト質粘土	炭を少量化
6b	暗褐色 10YR 3/4	シルト質粘土	マンガン粒を多く含む
7	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	炭を含む
8	こいも赤褐色 10YR 4/7	粘土質シルト	炭をわずかに含む
9	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	炭を多量に含む
10	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	
11	暗褐色 10YR 5/6	粘土質シルト	
12	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	炭をわずかに含む
13	褐色 10YR 4/4	シルト質粘土	にぼい黄褐色の熟土を含む
14	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	黄褐色土のブロックを含む
15	褐色 10YR 4/4	シルト質粘土	
16	暗褐色 10YR 3/3	粘土	
P1	1 にぼい黄褐色 10YR 4/7	粘土質シルト	
	2 褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	べとつく
	3 にぼい黄褐色 10YR 4/3	シルト	
	4 褐色 10YR 4/4	シルト	
P2	1 褐色 7.5YR 4/4	シルト	
	2 にぼい黄褐色 10YR 4/4	粘土	炭を含む
P4	暗褐色 10YR 3/4	シルト質粘土	



第57図 SI17住居跡 (2)

を深く掘り下げている。埋土は主に褐色土である。

〔壁〕 基本層を壁としている。高さは平均40cmである。

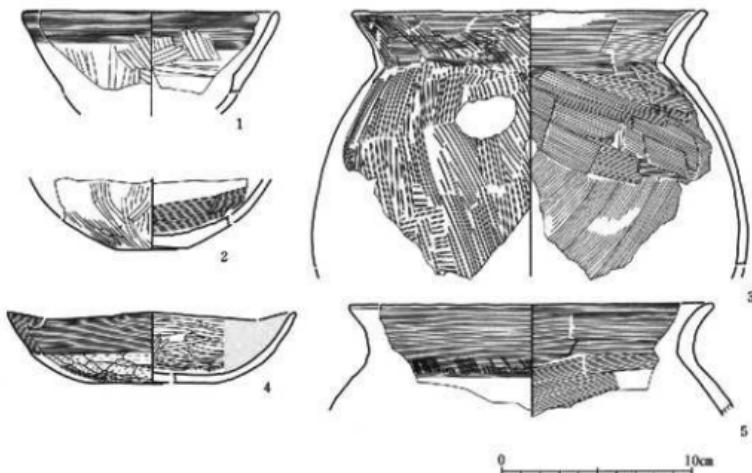
〔柱穴〕 P 2～4は床面で、P 1は掘り方の下より検出されている。P 2は径40cm、深さ28cm、P 3は40×28cm、深さ40cm、P 4は径40cm、深さ68cm、P 1は44×34cm、深さ54cmで柱痕跡がある。P 2～4はその位置から見て柱穴と考えられる。P 1も柱穴と考えられるが、検出面に問題がある。

〔カマド〕検出されなかった。

〔その他〕掘り方を調査中、暗渠状の遺構が検出された。住居から北西方向にのびており、長さ3.1m、幅50~90cm、深さ70cmである。中間の80cm程がトンネルとなっている。

〔出土遺物〕堆積土出土遺物 ロクロ土師器坏・非ロクロ土師器坏(1)・壺(2)・甕(3)、須恵器坏・壺・甕、赤焼土器坏が出土している。 喰渠状遺構出土遺物 非ロクロ土師器坏(4)・甕(5)が出土している。4は体部外面に軽い段を持つ。

〔小結〕最下部の暗渠状遺構から古墳時代後期の土師器が出土していることから、住居跡の時期は古墳時代後期以降と考えられる。



番号	種類	場所	特徴	口径	底径	高さ	残存率	登録
1	土師器坏	堆積土	口外:ヨコナデ、内:ヘラミガキ 口内:ヨコナデ、内:ヘラミガキ	13.4			1/4 >	C45
2	土師器壺	堆積土	外:ヘラミガキ 内:ヘラナデ		3.7		2/3	C46
3	土師器甕	堆積土	口外:ハケメーヨコナデ 体外:ハケメ 口内:ハケメ→ヨコナデ 体内:ヘラナデ	18.8			1/4	C47
4	土師器坏	暗渠	外:ヨコナデ、ヘラケズリ 内:ヘラミガキ、黒色処理	15.2		3.8	1/4	C61
5	土師器甕	暗渠	外:ハケメーヨコナデ 口内:ヨコナデ 体内:ヘラナデ	19.2			1/8	C62

第58図 SII17出土遺物

S I 18住居跡（第59・60図）

〔位置・確認面〕 III区 F・G-40グリッド 3層上面

〔平面形・規模〕 調査区の端に位置し、ごく一部の検出であるため平面形は不明である。南壁で1.1mである。

〔堆積土〕 5層に分けられる。5層は周溝堆積土である。

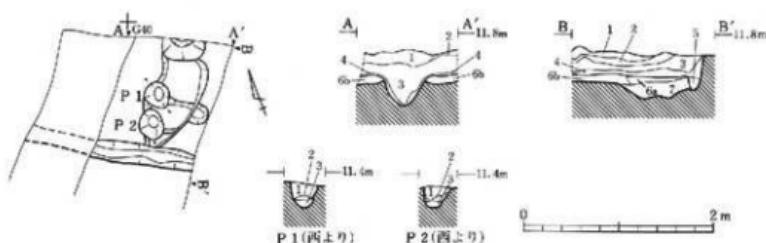
〔床面〕 掘り方埋土を床面とする。掘り方は北側が10cm、壁際が深く20cmある。埋土は2層ある。

〔周溝〕 幅20cm、深さ13cmである。

〔柱穴〕 P 1は径28cm、深さ28cm、P 2は径30cm、深さ20cm、P 3は径45cm、深さ32cmである。P 3が最も大きく、柱穴と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器壺・壺(1)が出土している。1の壺は、小形で、体部から口縁部にかけて直線的な器形である。

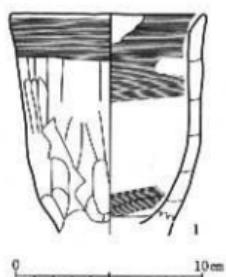
〔小結〕 床面出土の遺物がなく、住居跡の時期は不明である。



層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 10YR 3/4	シルト	灰・焼土を少量含む
2	暗褐色 10YR 3/4	シルト	黄褐色土を含む
3	褐色 10YR 4/4	シルト	灰・焼土を含む
4	にじみ青褐色 10YR 4/5	粘土質シルト	灰・焼土を含む
5	にじみ淡褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	
6a	暗褐色 10YR 3/4	シルト	炭を含む
6b	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	暗褐色土・炭を含む
7	褐色 10YR 4/4	シルト	
P1	褐色 10YR 4/4	シルト	
1	褐色 10YR 4/4	シルト	灰・焼土を含む
2	にじみ青褐色 10YR 4/5	粘土質シルト	
3	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	焼土を多量に含む
P2	褐色 10YR 4/4	シルト	
1	褐色 10YR 4/4	シルト	黄褐色の砂をブロック状に含む
2	褐色 10YR 4/4	シルト	
3	灰褐色 10YR 4/2	粘土	灰を含む

第59図 S I 18住居跡

番号	種類	層位	特徴	口径	底径	高さ	残存率	登録
1	土器器跡	3層	口外: ヨコナメ 体外: ナメ 口内: ヨコナメ 体内: ヘラナメ	10.5			2/3	C60



第60図 SI 18出土遺物

SI 19住居跡 (第61図)

〔位置・確認面〕 III区 B-32グリッド 3層上面

〔平面形・規模〕 2.5m×1.5m の範囲に床面と焼土が検出されており、平面形は不明である。

〔堆積土〕 上面が削平されており、堆積土は残っていない。

〔床面〕 北側がわずかに下がる。

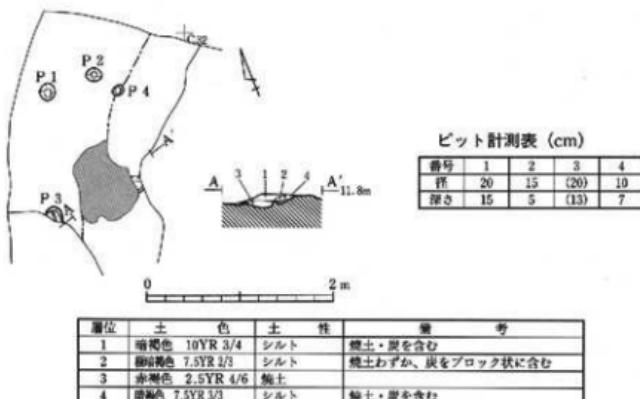
〔柱穴〕 ピットが4個検出された。P 1は径20cm、深さ15cm、

P 2は径15cm、深さ5cm、P 3は径20cm、深さ13cm、P 4は径10cm、深さ7cmである。いずれも小規模なものである。

〔焼け面〕 南東部に焼け面が認められた。90×70cmの範囲に焼土を含む層が広がっている。

〔出土遺物〕 焼土堆積土、ピット堆積土からロクロ土器器壺・甕、非ロクロ土器器壺、須恵器壺、赤焼土器壺が出土しているが、いずれも小破片である。

(小結) 住居跡の時期は不明である。



第61図 SI 19住居跡

(2) 堀立柱建物跡

S B 1 建物跡（第62図）

〔位置・確認面〕 I 北区 C・D-20・21・22グリッド 6層上面

〔重複〕 S I 4 住居跡より古い。

〔平面形・規模〕 梁行2間、桁行3間の東西棟である。寸法は、P 1～P 3が365cm(2間)、P 3～P 6が471cm(2.6間)、P 6～P 8が360cm(2間)、P 8～P 1が459cm(2.5間)である。方向はN11°Eである。

〔柱穴〕 柱穴は大きさがそろっており、一辺40cmの方形である。深さは25～40cmで、いずれも径10～15cmの柱痕跡を持つ。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔小結〕 S I 4との関係から、平安時代かそれ以前の遺構である。

E 24グリッド柱穴（第62図）

〔位置・確認面〕 I 北区 E 24グリッド 6層上面 S I 2 住居跡の東脇に位置する。

〔平面形・規模〕 一辺70cmの方形で、深さ34cmである。径20cmの柱痕跡がある。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

〔小結〕 1個のみ検出されたが、形態から見て堀立柱建物跡の柱穴の一部と考えられる。壊乱により他の柱穴は破壊されたものと考えられる。所属時期は不明である。

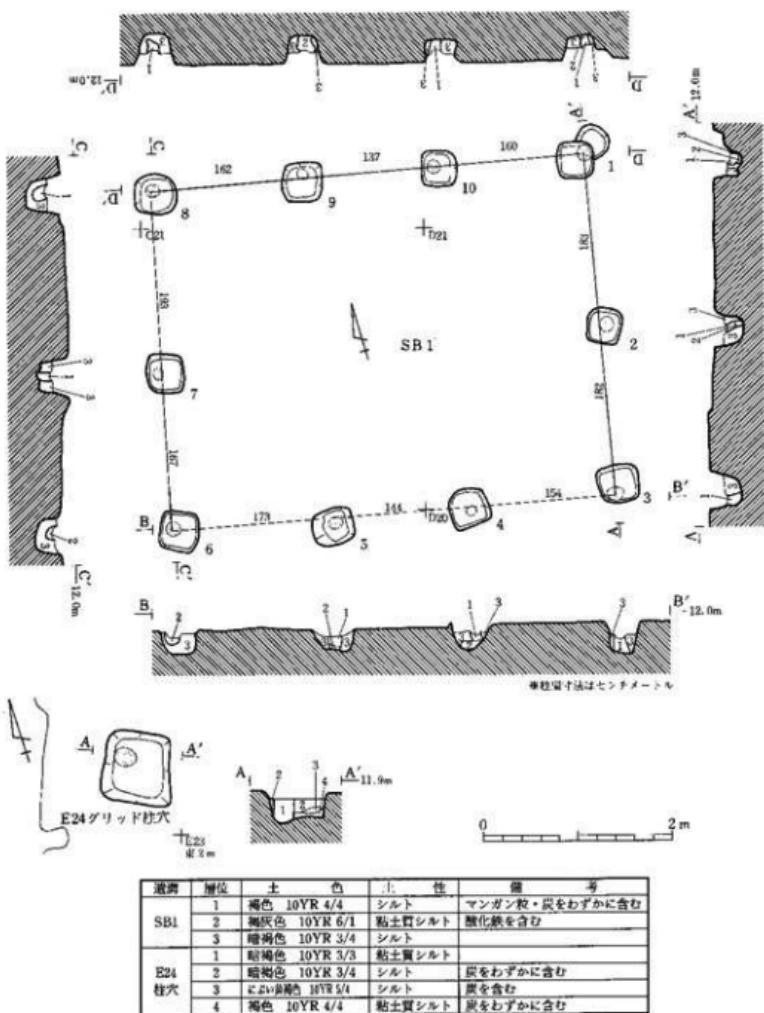
(3) 土坑

S K 1 土坑（第63図）

I 北区B・C-18グリッドに位置し、S I 6 住居跡より新しい。150×110cmの楕円形で、深さ74cm、底面は平坦である。堆積土は2層に分かれるが、いずれもブロック状に混在した土である。遺物は出土していない。

S K 2 土坑（第63図）

I 北区B-17グリッドに位置し、S K 1 の北にある。径80cmの円形で、深さ20cm、底面は平坦である。堆積土は1層でS K 1 同様にブロック状に混在している。東にのびる溝状の遺構は土坑より古く、S I 6 との関係は不明である。幅30cm、長さ130cm、深さ12cmである。遺物は出土していない。



第62図 挖立柱建物跡

S K 3 土坑（第63図）

I 北区F-19グリッドに位置し、S I 5住居跡より新しい。調査区外にのびるが、長軸80cm以上短軸90cmの楕円形と考えられる。深さ32cm、底面は平坦である。堆積土は1層で、ブロック状に混在している。遺物は出土していない。

S K 4 土坑（第63・67・68図）

I 北区E-20・21グリッドに位置する。径135cmの円形で、深さ40cm、底面は平坦である。堆積土は6層に分けられる。遺物は1～4層より出土しているが、特に2層から多くの遺物が出土した。ロクロ土師器壺(第67図2・3)・高台壺(4・5)・椀(1)・甕(10)・非ロクロ土師器甕・須恵器壺・壺・甕(第68図1・2)、赤焼土器壺(第67図7～9)・高台壺(6)、鉄製品が出土している。6は大形の高台壺で、内外面に黒色の付着物がある。第71図4は板状の鉄片である。

S K 5 土坑（第63・68図）

I 北区A-18グリッドに位置する。65×52cmの楕円形で、深さ8cm、底面は平坦である。堆積土は不明である。堆積土から、ロクロ土師器壺(3)、須恵器甕(4)、赤焼土器壺が出土している。3は摩滅しているため、切り離し技法は不明である。

S K 6 土坑（第63図）

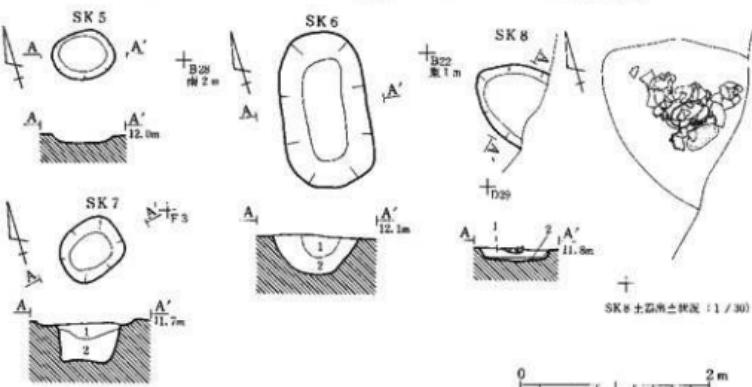
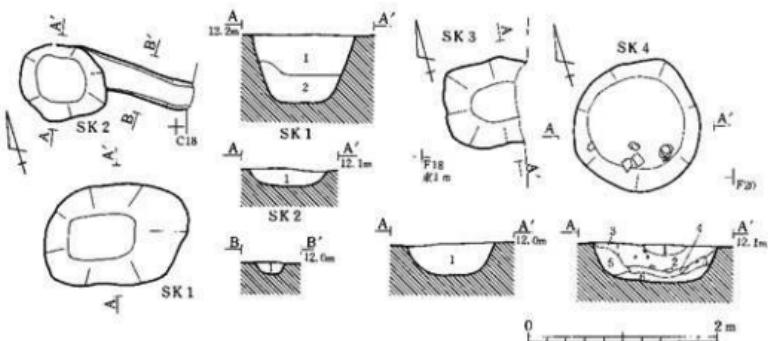
I 北区A・B-22・23グリッドに位置する。165×90cmの楕円形で、深さ40cm、底面は皿状である。堆積土は2層に分けられるが、いずれもブロック状に混在した土である。遺物は出土していない。

S K 7 土坑（第63図）

I 南区E-3グリッドに位置し、S I 10住居跡より新しい。68×58cmの楕円形で、深さ40cm、底面は平坦である。堆積土は2層に分けられる。堆積土から、ロクロ土師器壺・甕・非ロクロ土師器甕、赤焼土器壺が出土している。

S K 8 土坑（第63・68・69図）

I 北区C・D-30グリッドに位置する。調査区外にのびており、長軸70cm以上、短軸70cmの楕円形と考えられる。深さ10cm、底面は平坦である。堆積土は2層に分けられ、1層の上部から非ロクロ土師器がまとまって出土している。出土遺物はS I 14と接合関係にある。第68図5



第63図 SK 1～8 土坑

1 古墳時代以降の遺構と遺物

は内外面ヘラナデの壺、6は外面ヘラケズリの壺、第69図2は小形の壺、3・4は脚部で円窓が3個あり、調整は粗い。

S K 9 土坑（第64図）

I南区C・D-3グリッドに位置する。南端が擴されるが、135×96cmの楕円形である。深さ20cm、底面は平坦である。堆積土は2層に分けられる。堆積土より、ロクロ土師器壺、須恵器壺、赤焼土器壺が出土している。

(S K10~14は欠番)

S K 15 土坑（第64図）

I北区A・B-25グリッドに位置し、S I 13住居跡より新しい。262×122cmの楕円形で、深さ108cm、壁の傾斜は急である。底面は平坦で、南寄りに32×20cm、深さ15cmのピットがある。堆積土は9層に分けられる。堆積土より、ロクロ土師器壺・壺、須恵器壺、赤焼土器壺が出土している。

S K 16 土坑（第64・69・70図）

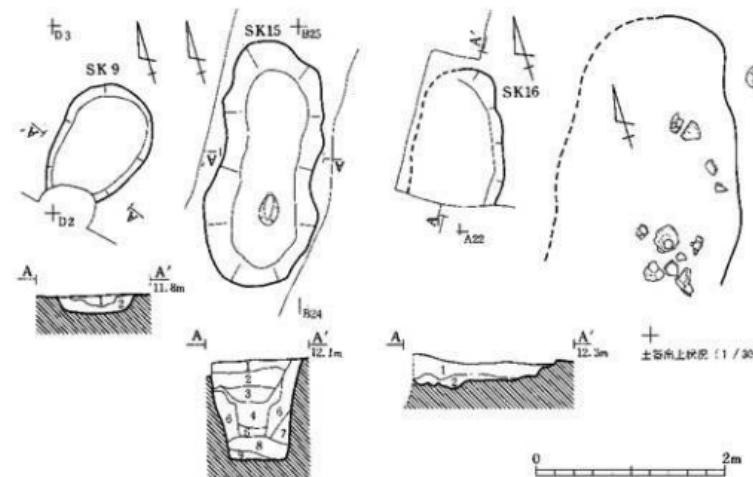
I北区A-23グリッドに位置し、S I 9住居跡より新しい。南が調査区外にのびるが、長軸150cm以上、短軸100cmの楕円形である。深さは38cm、底面は凹凸があり、南に向かい深くなる。堆積土は2層に分けられる。堆積土よりロクロ土師器壺(第69図5~10)・壺、非ロクロ土師器壺、須恵器壺(第70図3)・壺、赤焼土器壺(第69図11~13・第70図1・2)が出土している。

S K 17 土坑（第64・70図）

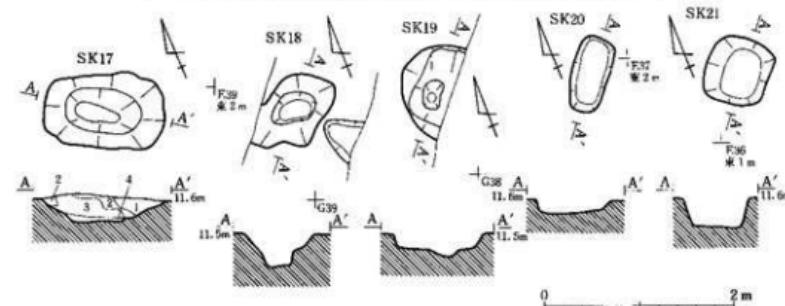
III区E-39・40グリッドに位置する。125×84cmの楕円形で、深さ30cm、底面は皿状にくぼむ。堆積土は4層に分けられ、1層には灰と焼土を多量に含む。堆積土から、ロクロ土師器壺(4・5)・壺(6)、赤焼土器壺が出土している。

S K 18 土坑（第64図）

III区F・G-39グリッドに位置する。108×74cmの不整楕円形で、深さ36cm、底面は二段に下がる。遺物は出土しなかった。



遺構	層位	土 色	土 性	備 考
SK9	1	黒褐色 10YR 3/3	砂質シルト	黒褐色粘土。炭・焼土を含む
	2	にごり青褐色 10YR 5/4	砂質シルト	炭をわずかに含む
SK15	1	褐色 10YR 4/4	シルト	灰褐色土をわずかに含む
	2	灰褐色 10YR 5/2	シルト	褐色土をわずかに含む
	3	にごり青褐色 10YR 4/3	シルト	炭を含む
	4	にごり青褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	
	5	にごり青褐色 10YR 5/2	シルト	
	6	にごり青褐色 10YR 5/2	粘土質シルト	
	7	にごり青褐色 10YR 4/3	シルト	黒褐色砂を含む
	8	褐色 10YR 4/4	シルト	砂を含む
	9	にごり青褐色 10YR 5/2	砂質シルト	
SK16	1	黒褐色 10YR 2/3	シルト	炭・焼土をブロック状に含む
	2	にごり青褐色 10YR 5/2	シルト	焼土をブロック状に、炭をわずかに含む



1 古墳時代以降の遺構と遺物

S K 19土坑（第64図）

III区F-37グリッドに位置する。東側を欠くが、長軸100cm、短軸55cm以上の橢円形と考えられる。深さ22cm、底面中央に小ピットがある。遺物は出土しなかった。

S K 20土坑（第64図）

III区E-37・38グリッドに位置する。83×40cmの橢円形で、深さ16cm、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 21土坑（第21図）

III区E-37グリッドに位置する。一辺70cmの方形で、深さ30cm、底面は平坦だが南にやや下がる。遺物は出土しなかった。

S K 22土坑（第65図）

II区南部に位置する。96×75cmの橢円形で、深さ17cm、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 23土坑（第65・70図）

II区南部に位置する。径55cmの円形で、深さ24cm、底面は平坦である。堆積土は3層に分けられる。非クロの土師器壺(7)が出土している。体部は長胴である。

S K 24土坑（第65図）

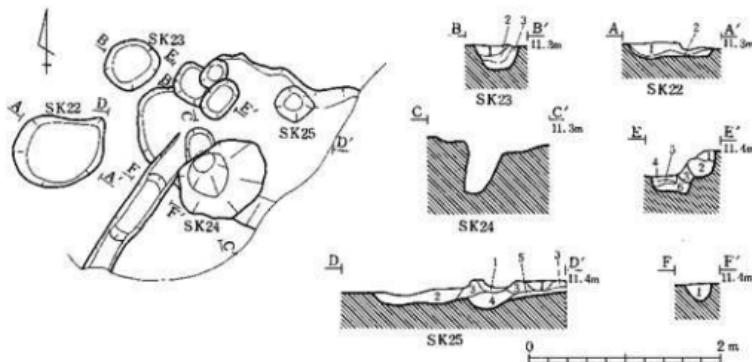
II区南部に位置する。100×72cmの橢円形で、深さ10cm程である。底面の中央に径45cm、深さ55cmのピットがある。遺物は出土しなかった。

S K 25土坑（第65・70・71図）

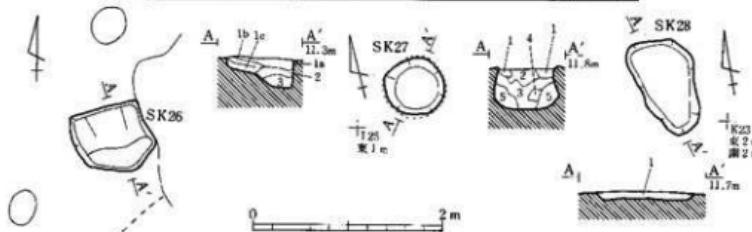
II区南部に位置する。東側を欠くが、長軸200cm以上、短軸180cm、深さ30cmである。S K 24土坑より古い。北西部にピットが3個切り合っている。南西方向には幅30cm、長さ180cm、深さ18cmの溝がのびている。堆積土中から、ロクロ土師器壺、非クロ土師器壺・壺(第70図8)・壺(第70図9・第71図3)、須恵器壺(第71図1・2)・壺、赤焼土器壺が出土している。

S K 26土坑（第65図）

II区南部に位置し、S I 17住居跡より新しい。80×70cmの大きさの五角形である。底面は南



遺構	層位	土色	土性	備考
SK22	1	赤褐色 10YR 4/3	粘土質シルト	焼土をブロック状に含む、炭を含む
	2	黄褐色 10YR 5/6	シルト	
SK23	1	赤褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	焼土・炭を含む
	2	褐色 10YR 4/6	粘土質シルト	
SK24	3	褐色 10YR 4/5	粘土質シルト	焼土・炭を含む
	4	褐色 7.5YR 4/4	粘土質シルト	焼土を多量に含む
SK25	2	暗褐色 10YR 3/4	粘土質シルト	
	3	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	
E-E'	4	褐色 10YR 4/6	粘土質シルト	焼土を多量に含む
	5	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	
F-F'	1	赤褐色 10YR 4/3	粘土質シルト	焼土・炭を少量含む
	2	赤褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	焼土をわずかに含む
	3	赤褐色 10YR 5/3	粘土質シルト	炭をわずかに含む
	4	赤褐色 10YR 5/3	粘土質シルト	焼土・炭を含む
	5	赤褐色 10YR 4/4	シルト	
	6	赤褐色 10YR 5/6	シルト	
F-F'	1	褐色 10YR 4/6	粘土質シルト	炭をわずかに含む



遺構	層位	土色	土性	備考
SK26	1a	暗褐色 2.5Y 5/2	砂質シルト	酸化鉄を含む
	1b	暗褐色 2.5Y 5/2	砂質シルト	酸化鉄・褐色土を含む
	1c	褐色 2.5Y 5/2	砂質シルト	酸化鉄を含む
	2	赤褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	マンガン鉱を含む
SK27	3	紫オリーブ色 5Y 5/2	シルト	酸化鉄・マンガン鉱を含む
	1	褐褐色 10YR 3/4	シルト	
	2	褐褐色 10YR 2/3	シルト	褐色土・ブロックを含む
	3	黒褐色 10YR 2/2	粘土質シルト	褐色土ブロックを含む
	4	褐褐色 10YR 2/3	粘土質シルト	
SK28	5	赤褐色 10YR 5/6	粘土質シルト	褐色土鉱石ブロックを含む
	1	褐褐色 10YR 3/4	シルト質砂	炭・マンガン鉱を含む

第65図 SK 22~28土坑

1 古墳時代以降の遺構と遺物

に下がり、深さ30cmである。堆積土は5層に分けられる。遺物は出土しなかった。

S K 27土坑（第65図）

IV区I-26グリッドに位置する。径60cmの円形で、深さ46cm、壁はオーバーハングする。堆積土は5層に分けられる。堆積土より、ロクロ土師器壺、非ロクロ土師器甕・高壺（？）脚部（写真74）、赤焼土器壺が出土している。

S K 28土坑（第65図）

IV区K-23グリッドに位置する。110×62cmの楕円形で、深さ6cm、底面は平坦である。堆積土は1層で、堆積土よりロクロ土師器壺、非ロクロ土師器甕、赤焼土器壺が出土している。

S K 29土坑（第66図）

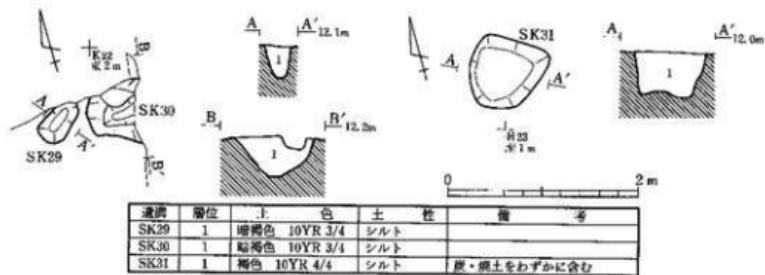
IV区K-22グリッドに位置し、4層上面で検出された。50×30cmの楕円形で、深さ33cmである。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

S K 30土坑（第66図）

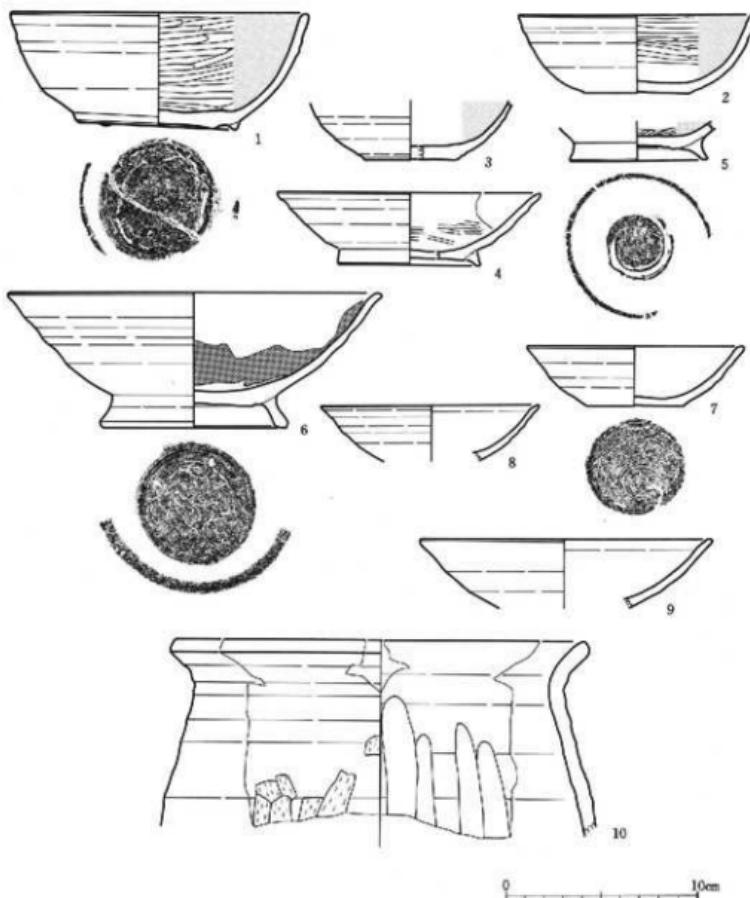
IV区K-22グリッドに位置し、SK29の隣である。4層上面で検出された。形態不明で、70×55cmの範囲にある。深さ43cmで、底面はすり鉢状にくぼむ。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

S K 31土坑（第66図）

I北区G・H-23グリッドに位置し、S I 8住居跡より新しい。90×75cmの不整円形で、底面は壁際が深くなり、48cmの深さである。堆積土は1層である。堆積土より、ロクロ土師器甕が出土している。



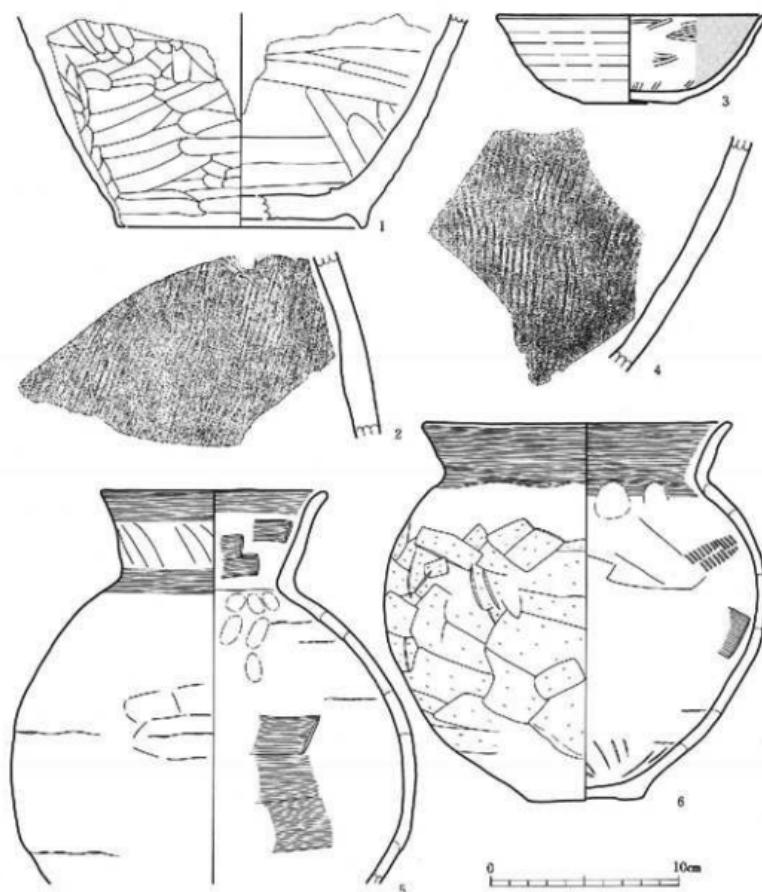
第66図 SK 29-31土坑



番号	種類	分類	層位	特徴	口径	底径	高さ	残存率	登録
1	土器鉢		2 + 3層	底: 回転余切り・高台接合 内: ヘラミガキ、黒色鉄斑	15.9	8.3	6.2	1/3	D184
2	土器鉢		2層	底: マメヅで切り・難し不明 内: ヘラミガキ、黒色鉄斑	12.6	5.4	4.2	1/3	D193
3	土器鉢	B	2層	底: 回転余切り	4.8			1/3	D186
4	土器鉢高台坪		1 + 2 + 4層	底: 回転余切り・高台接合 内: ヘラミガキ、黒色鉄斑	14.6	9.8	3.6	1/4	D189
5	土器鉢高台坪		2層	底: 回転余切り・高台接合・ロクロナデ 内: ヘラミガキ、黒色鉄斑			7.2		D192
6	赤縁土器高台坪		1 + 2層	底: 回転余切り → 高台接合 → ロクロナデ 内外: ロクロナデ 内外に黒色鉄斑付着	19.8	10.0	7.2	3/5	D185
7	赤縁土器坪	A	2 + 4層	底: 回転余切り	11.4	5.0	3.2	2/3	D188
8	赤縁土器坪	A (?)	1 + 2 + 4層	底: 回転余切り	11.6			1/4	D190
9	赤縁土器坪	B (?)	1 + 2層		15.5			1/4	D187
10	土器鉢	B	2層	外: ロクロナデ → ヘラケズリ 内: ロクロナデ → ナデ	22.2			1/4 >	D191

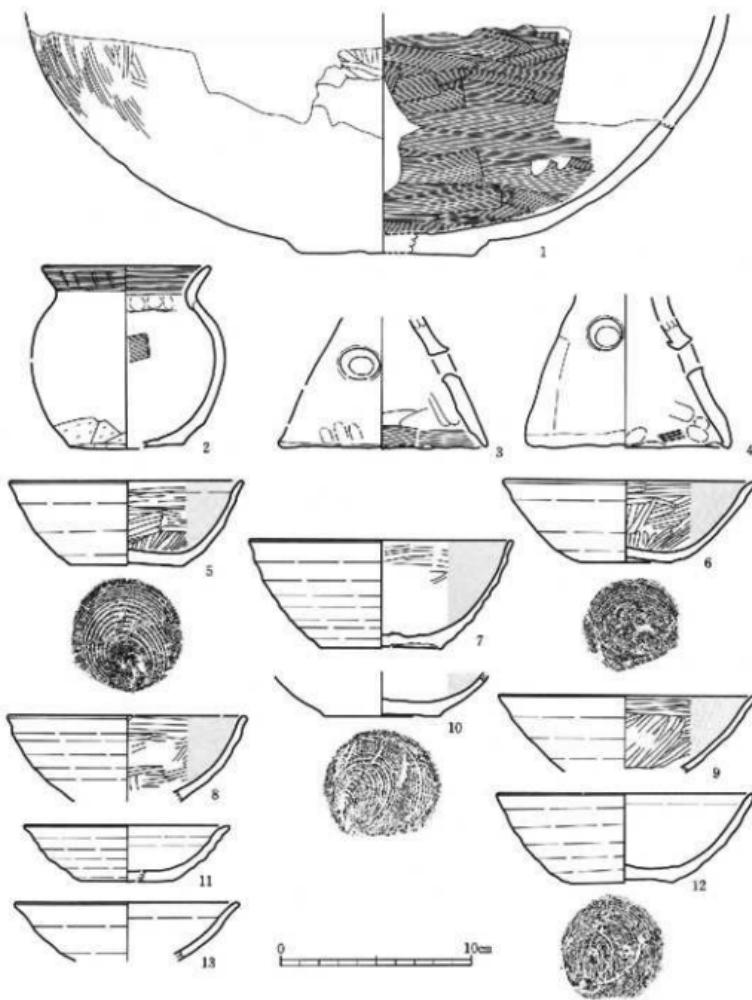
第67図 土坑出土遺物(1) SK 4

1 古墳時代以降の造構と遺物



番号	直 縦	種 類	分類	留 位	特 徴	口 横	底 横	底 高	残存率	登録
1 SK4	箱形格子			2層	底: 切り離し不明→白台→ロクロナダ 外: ロクロナダ→ヘラナダ 内: ロクロナダ→ナダ	13.0		1/2	E30	
2	直走格子			2層	外: 平行印字 内: 当て目				E31	
3 SK5	土崩格子			1層	底: 切り離し不明 (メタリ) 内: ヘラミガキ、黒色粘土	14.2	5.0	4.8	1/4 E219	
4	直走格子			2層	外: 平行印字 内: 同心円状凹凸目				E32	
5 SK8	土崩格子			1層	口外: ロコナダ 線外: ナダ (?) ロコナダ 体外: ヘラナダ (?) 口内: ロコナダ 底内: ヘラナダ 体内: ハシマダ、オサフ	12.1			1/2 C42	
6	上崩格子			1層	口外: ロコナダ 体外: ヘラズシリ 口内: ロコナダ 体外上: ハケヌ。ナダ (?) 体内下: ヘラナダ	16.4	6.0	20.1	2/3 C43	

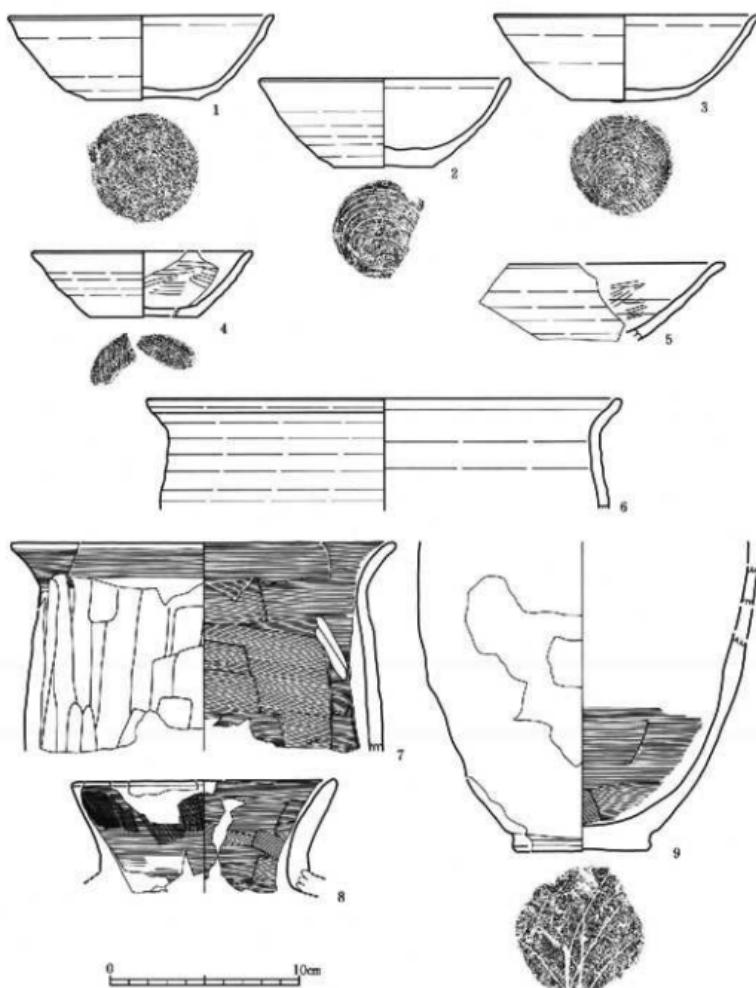
第68図 土坑出土遺物 (2)



番号	遺構	種類	分類	層位	特徴	口径	底径	高さ	残存率	登録
1	SK8	土師陶器		1層	外：ヘラナデ 内：ヘラナデ	9.4			約1	C41
2		土師陶器		1層	外：ヨコナデ 壁下：ヘラナデ 中：ヨコナデ 底内：ヘラナデ、ギョエ	9.6		9.8	3/4	C40
3		土師陶器?		1層	外：ヘラナデ(?) オヤエ 内：ナゲ、ココナデ ギョエ	11.1			約1	C39
4		土師陶器?		1層	外：ヘラナデ(?) 内：ナゲ、オヤエ、ヘタメ(?)、ナシ穴3ヶ	10.8			約1	C38
5	土師陶器	B		2層	底：回転糸切り 内：ヘラミガキ、黒色ぬ理	12.4	5.9	6.6	約1	D194
6	土師陶器	B		1層	底：回転糸切り 内：ヘラミガキ、黒色ぬ理	13.2	4.7	4.4	1/2	D198
7	土師陶器	B		1層	底：回転糸切り 内：ヘラミガキ、黒色ぬ理	13.9	6.3	5.8	1/3	D199
8	土師陶器			1層	内：ヘラミガキ、黒色ぬ理	12.6			1/5	D201
9	SK16	土師陶器		1層	内：ヘラミガキ、黒色ぬ理	13.6			1/6	D197
10		土師陶器	B	1層	底：回転糸切り 内：黒色ぬ理	9.9			6/5	D222
11		赤燒土陶器	A	1層	底：回転糸切り	11.0	4.7	3.0	1/4	D200
12		赤燒土陶器	B	1層	底：回転糸切り	13.5	4.5	4.9	3/5	D195
13	赤燒土陶器	B(?)		1層		12.6			1/4	D221

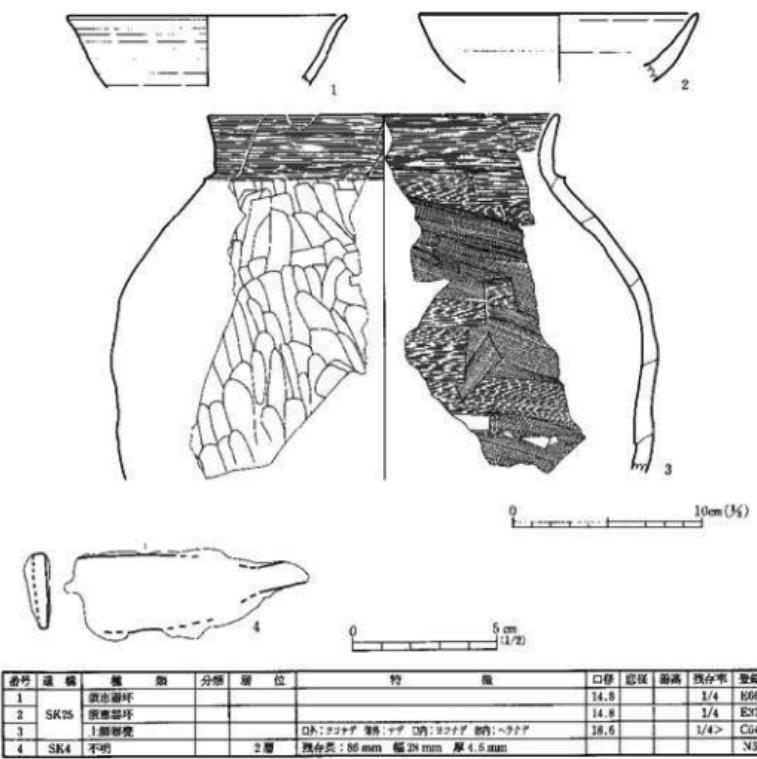
第69図 土坑出土遺物(3)

1 古墳時代以降の遺構と遺物



番号	遺 墓	科 目	分類	層 位	特 徴	口径	直径	深 底	残存率	記載
1		漆輪上漆環	B	1層	底：回転条切り	14.0	6.0	4.8	1/2	D106
2	SK16	漆輪上漆環	B	1層	底：回転条切り	13.0	5.2	4.8	2/5	E35
3		漆輪漆環		1層	底：回転条切り	13.9	5.6	4.7	1/3	E34
4		土器漆環	B	4層	底：回転条切り 内：ペラミガキ、再酸化	11.6	5.7	3.5	1/4	D103
5	SK37	土器漆環			内：ロクウナヂ→ヘラヌガキ				1/4>	D222
6		土器漆環	B	4層	内：ロクウナヂ	25.2			1/4	D102
7	SK23	土器漆環			内：ロクウナヂ 外：ナヂ (内：タコナヂ 容内：ヘタナヂ、ナヂ)	20.4			1/4	C32
8	SK25	土器漆環			外：ハケメヨコナヂ 内：ヘラナヂ	14.2			1/2	C35
9		土器漆環			外:不明 内：ヘラナヂ 底：木製底			7.6	約1	C33

第70図 土坑出土遺物 (4)



第71図 土坑出土遺物(5)

(4) 溝跡

SD 1溝跡(第72図)

I北区D・E-20~23グリッドに位置し、S I 2住居跡より新しい。6層上面で検出された。長さ9.4m、幅40~60cm、深さ8~18cmである。底面はほぼ平坦で、両端のレベル差はほとんどない。堆積土は3層に分けられる。遺物は出土しなかった。

(SD 2~4は欠番)

1 古墳時代以降の遺構と遺物

S D 3 溝跡（第72図）

I南区D-2・3グリッドに位置し、S I 10南端から南にのびる。7層上面で検出された。S I 10との関係は不明である。幅20~26cm、長さ2.9m、深さ8cmである。両端のレベル差はほとんどなく、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐色シルト1層である。遺物は出土しなかった。

S D 5 溝跡（第72図）

I北区B・C-26~29グリッドに位置する。6層上面で検出された。長さ9.8m、幅平均28cmである。底面の状況については記載なく不明である。堆積土は、ぶい黄褐色シルト1層である。遺物は出土しなかった。

S D 6 溝跡（第72・73図）

III区B・C・D-30~37グリッドに位置し、北東-南西方向である。小溝状遺構より新しい。長さ22.5mである。北端が細く、幅80cmで、南に向かい広がるが、東壁が明瞭でなく、最大2.6m程度あるようである。深さは北端で8cm、南端で30cmであり、南に向かい深くなる。堆積土は暗灰褐色シルト1層である。底面に礫が散在する。

堆積土より、ロクロ土師器壺(第73図1)・高台壺・甕、非ロクロ土師器壺・甕、須恵器壺(2)・甕(3~6)、陶器すり鉢(8・9)、磁器碗(7)、青磁、鉄滓が出土している。8・9は鉄軸がかかり、内面に筋目がある。8は瀬戸美濃窯の製品であり、16~17世紀のものである。9は产地不明だが、同様に17世紀頃のものと考えられる。7は肥前磁器の小碗で、17世紀頃のものである。他に志野の小片が出土している。青磁は龍泉窯のもので、12世紀後半~13世紀代に位置づけられる。鉄滓は製錬滓と考えられるものが1点(144.2g)出土している。

(5) 焼土遺構（第74図）

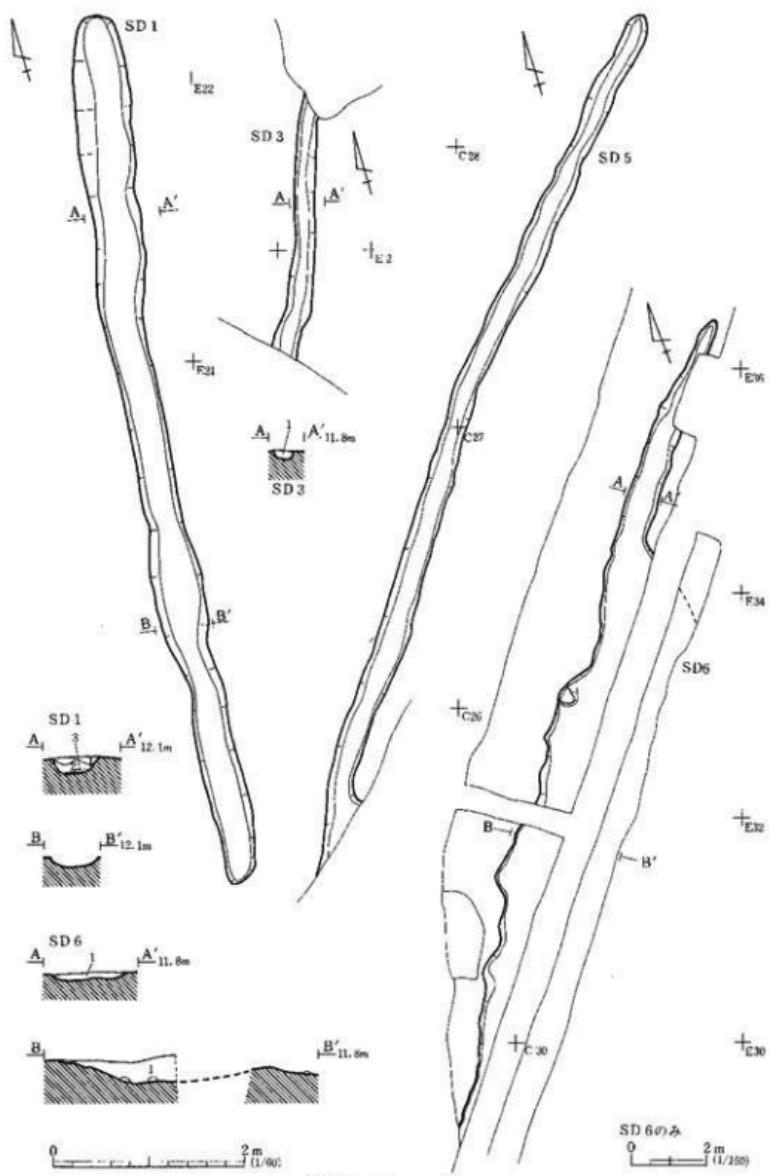
II区で3箇所の焼土遺構が検出された。

1号焼土 105×60cmの範囲に不整形の焼け面が検出された。5cm程焼けており、12cm程焼土が堆積している。

2号焼土 78×50cmの範囲に不整楕円形の焼け面が検出された。焼けの程度は弱い。

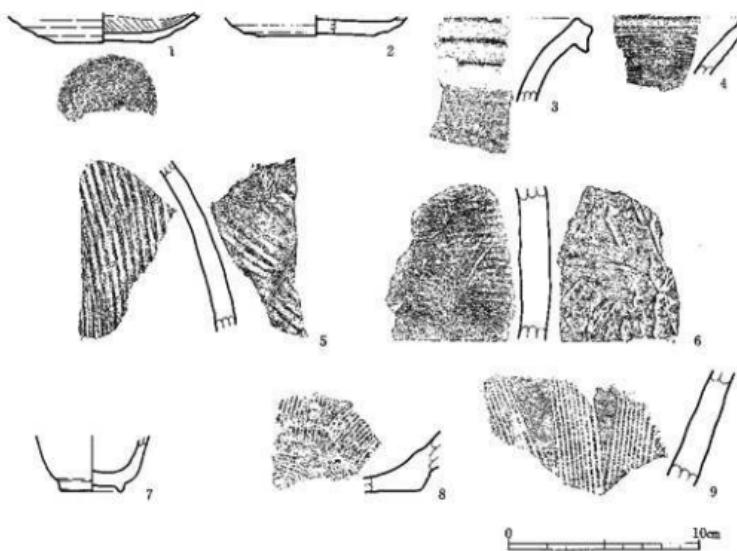
(溝跡土層観察表)

溝跡	層位	土色	土性	備考
SD1	1	暗褐色 10YR 3/4	砂質シルト	黒褐色土を含む
	2	暗褐色 10YR 3/4	砂質シルト	
	3	褐色 10YR 4/4	砂質シルト	
SD3	1	褐色 10YR 4/4	シルト	灰褐色土をブロック状に含む
SD6	1	暗灰褐色 2.5Y 4/2	シルト	酸化鉄を斑状に含む



第72図 溝

1 古墳時代以降の遺構と遺物



番号	種 物	分類	特 製	II区	地盤	深高	保存率	文號
1	子脚附耳	日	直: 直脚切付 内: ヘタリガリ、浅色絞刷	5.0		1/2	D157	
2	直脚盛付	度: 四軒条切り		6.2		1/4	E21	
3	直脚茎裏	另: 平脚きのこ型ナギ	内: 2箇ロナナ				E27	
4	直脚直腹	外: 直脚きのこ型ナギ	内: ロナナナギ				E28	
5	直脚直腹	外: 平脚切付	内: 直脚浅切付・平脚				E19	
6	直脚盛付	外: 平行切付	内: 当て口、ナギ				E26	
7	細縁小鉢	内: 縦縫合筋に直脚切付、成形不均整、直脚 異面		3.4	1		J3	
8	陶器すり鉢	先: 異質、にせい、火除色(?)H: 4.0cm 後: 陶器すり鉢、縫合筋				1/4>	I5	
9	陶器すり鉢	先: ログナギ型、縫合筋(?)H: 2.8cm 後: 陶器すり鉢、縫合筋(?)H: 2.5cm P: 陶器すり鉢、縫合筋(?)H: 2.5cm 後: 陶器すり鉢、縫合筋(?)H: 2.5cm					J4	

第73図 SD 6 出土遺物

3号焼土 73×62cmの範囲に不整筋円形の焼け面が検出された。3cm程焼けており、13cm程焼土が堆積している。

いずれの焼土遺構も、伴う遺物はない。

柱穴状の遺構（第74図） 同じくII区で柱穴状の遺構が2個検出された。南側は径50cm、深さ33cmである。北側は径60cmで、深さ26cmである。いずれも中央が一段下がっており、柱穴のような形状である。但し、堆積土の記載なく柱痕跡が検出されたかどうか不明である。遺物は出土しなかった。

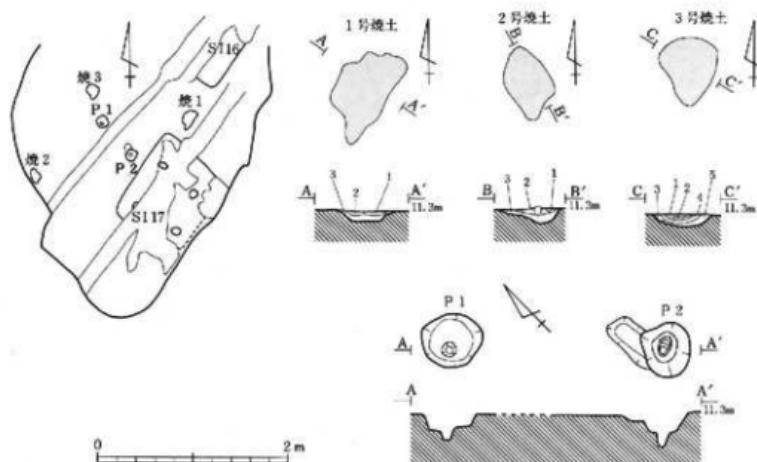
(6) 小溝状遺構 (第75図)

III区C～F-34～40グリッドで小溝状遺構が検出された。南北方向の群（A群）と東西方向の群（B群）が直交しており、1箇所を除き東西方向が新しい。A群は平均幅28cm、平均深さ7cm、B群は平均幅23cm、平均深さ6cmである。A群の方向はN21°E前後であり、B群はA群に直交する。堆積土は記載なく不明である。

小溝状遺構群から遺物は出土しておらず、所属時期は不明である。

(7) ピット (第75・76図・第2表)

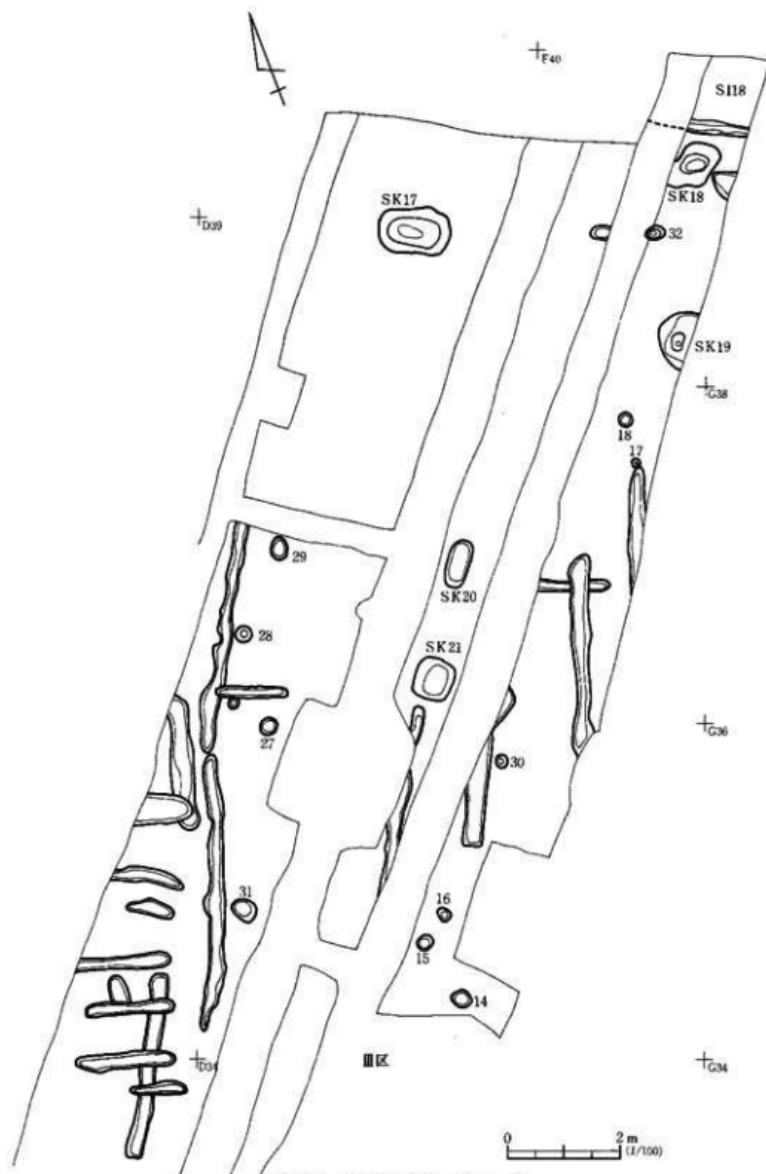
III区、I北区6層、IV区3a層よりピットが検出された。規模・堆積土については集計表にまとめた。各ピットから遺物は出土していない。



遺構	層位	上色	土性	備考
1号焼土	1	褐色 10YR 4/4	焼土	
	2	赤褐色 7.5YR 4/8	焼土	
	3	こぶし赤褐色 5Y 4/1	焼土	
2号焼土	1	こぶし赤褐色 10YR 4/3	粘土質シルト	
	2	こぶし赤褐色 5YR 4/1	シルト	施土を多量に含む
	3	褐色 10YR 4/4	粘土質シルト	焼土をわずかに含む
3号焼土	1	黒褐色 10YR 3/2	砂質シルト	炭を含む
	2	明褐色 7.5YR 5/6	焼土	
	3	黒褐色 10YR 3/2	シルト	炭・焼土を含む
	4	赤褐色 5YR 4/6	焼土	
	5	褐色 10YR 4/6	砂質シルト	炭・焼土を含む

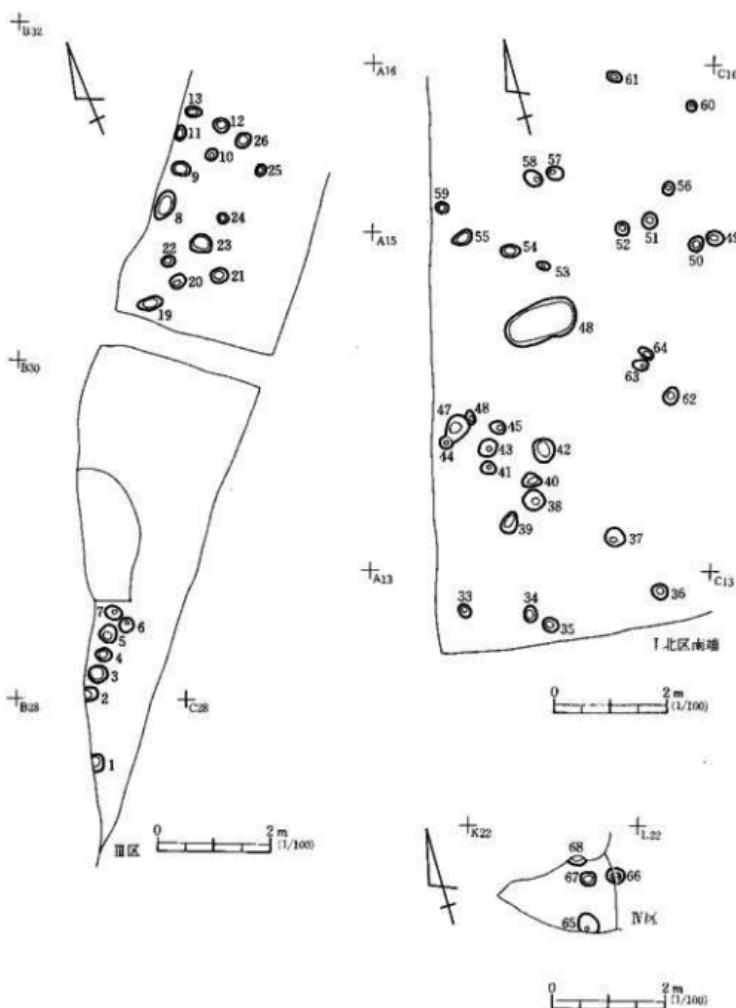
第74図 II区の焼土と柱穴状遺構

1 古墳時代以降の遺構と遺物



第75図 小溝状遺構群・ピット(1)

V 検出された遺構と遺物



第76図 ピット (2)

1 古墳時代以降の遺構と遺物

第2表 ピット集計表 (単位:cm)

番号	長径	短さ	土色	・	土性	番号	長径	短さ	土色	・	土性	
1 (30) (22)	26	暗褐色	10YR 2/3	粘土質シルト	35	26	10	褐色	10YR 4/4	砂質シルト		
2 (22) (22)	(8)	暗褐色	10YR 3/3	粘土質シルト	36	26	18	褐色	10YR 4/4	砂質シルト		
3 32	14	暗褐色	10YR 3/3	粘土質シルト	37	34	36	褐色	10YR 4/4	砂質シルト		
4 26	16	灰黄褐色	10YR 4/2	粘土質シルト	38	38	29	褐色	10YR 4/4	砂質シルト		
5 30	43	灰黄褐色	10YR 4/2	粘土質シルト	39	38	26	20	にじい黄褐色	10YR 5/4	砂質シルト	
6 26	25	暗褐色	10YR 4/2	粘土質シルト	40	32	24	17	褐色	10YR 4/4	砂質シルト	
7 26 24	40	にじい黄褐色	10YR 4/3	粘土質シルト	41	26	20	26	褐色	10YR 4/4	砂質シルト	
8 52 30	25	灰褐色	10YR 4/2	粘土質シルト	42	40	34	17	にじい黄褐色	10YR 5/4	砂質シルト	
9 32 24	24	にじい黄褐色	10YR 4/3	シルト	43	32	48	褐色	10YR 4/4	砂質シルト		
10 20	18	灰褐色	10YR 4/2	粘土質シルト	44	(22)	14	褐色	10YR 4/4	砂質シルト		
11 24	18	灰褐色	10YR 4/2	粘土質シルト	45	26	12	暗褐色	10YR 3/4	シルト		
12 26	31	暗褐色	10YR 3/3	シルト	46	26	(12)	10	暗褐色	10YR 3/4	シルト	
13 26	18	44	灰褐色	10YR 4/2	粘土質シルト	47	(44)	34	38	にじい黄褐色	10YR 5/4	砂質シルト
14 34	28	10	褐色	10YR 4/4	シルト	48	126	82	10	褐色	10YR 4/4	砂質シルト
15 26	14	青褐色	10YR 5/6	砂質シルト	49	28	22	27	にじい黄褐色	10YR 5/4	砂質シルト	
16 24	18	19	暗褐色	10YR 3/3	粘土質シルト	50	24	18	にじい黄褐色	10YR 5/4	砂質シルト	
17 14			暗褐色	10YR 3/3	粘土質シルト	51	28	22	23	褐色	10YR 4/4	砂質シルト
18 22	21	暗褐色	10YR 3/3	粘土質シルト	52	24	11	褐色	10YR 4/4	砂質シルト		
19 42	22	12	暗褐色	10YR 3/3	粘土質シルト	53	20	14	8	褐色	10YR 4/4	砂質シルト
20 26	20	19	暗褐色	10YR 3/3	粘土質シルト	54	28	20	8	にじい黄褐色	10YR 5/4	砂質シルト
21 28	24	6	暗褐色	10YR 3/3	粘土質シルト	55	34	20	7	褐色	10YR 4/4	砂質シルト
22 24	12	暗褐色	10YR 3/3	粘土質シルト	56	22	15	褐色	10YR 4/4	砂質シルト		
23 38	4	暗褐色	10YR 3/3	粘土質シルト	57	30	22	27	褐色	10YR 4/4	砂質シルト	
24 18	5	断面	10YR 3/3	粘土質シルト	58	32	24	25	褐色	10YR 4/4	砂質シルト	
25 16	6	暗褐色	10YR 3/3	シルト	59	18	16	10	褐色	10YR 4/4	砂質シルト	
26 26	20	5	にじい黄褐色	10YR 4/3	シルト	60	18	10				
27 34	28	5	黒褐色	10YR 2/3	シルト	61	24	18	9	褐色	10YR 4/4	砂質シルト
28 28	20	暗褐色	10YR 4/3	粘土質シルト	62	30	11	褐色	10YR 4/4	砂質シルト		
29 38	28	4	褐色	7.5YR 4/3	粘土質シルト	63	26	29	15	褐色	10YR 4/4	砂質シルト
30 29	12	褐色	7.5YR 4/3	砂質シルト	64	26	18	11	褐色	10YR 4/4	砂質シルト	
31 44	34	19	暗褐色	10YR 3/3	シルト	65	(34)	(32)	17	黒褐色	7.5YR 2/2	シルト
32 34	24	15	暗褐色	10YR 4/4	粘土質シルト	66	27	33	黑褐色	7.5YR 2/2	シルト	
33 24	18	16	褐色	10YR 4/4	砂質シルト	67	23	8	黑褐色	7.5YR 2/2	シルト	
34 28	23	15	褐色	10YR 4/4	砂質シルト	68	(28)	(14)	27	黑褐色	7.5YR 2/2	シルト

(8) 河川跡

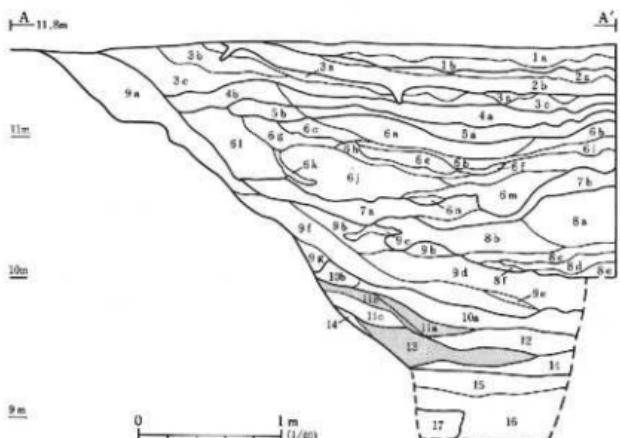
S R 4 河川跡 (第18・77~79図)

I南区西部に位置し、7層上面で検出された。東岸の一部のみ検出され、長さ18m、最大幅4mである(第18図)。壁は中段より傾斜が急になる。堆積土は17層に大別され、1~11層はさらに細別される。5層以上はシルトが主で、それ以下はシルトと砂の互層となる。2b層はI南区の基本層3層と同一である。11a・11b・13層には灰白色火山灰をブロック状に含む(第77図)。

出土遺物 (第78・79図) 堆積土出土遺物 ロクロ土師器壺(1~5)・高台壺(6)・椀(16)・甕(14)、非ロクロ土師器甕、須恵器壺(12)、赤焼土器壺(7~10)・高台壺(11)、綠釉陶器段皿(15)、灰釉陶器長頸瓶(13)、鉄滓が出土している。16は8b層と11層以下が接合しており、低い高台のつく椀である。体部に判読不明の縦書きの墨書、底部には「一」の墨書がある。15は堆積土4層から出土した綠釉陶器段皿である。1/4以下の小片であるが一応口径15.7cm、底径7cmと復元した。胎土は灰白色で緻密であり、全面に淡緑色の釉がある。高台ははがれています。

13は灰釉陶器長頸瓶の底部で、他に体部下端片が出土している。体部片には、灰釉が刷毛塗りされている。出土層位の4層は河川が機能を停止し、かなり埋まり切った段階の堆積土である。

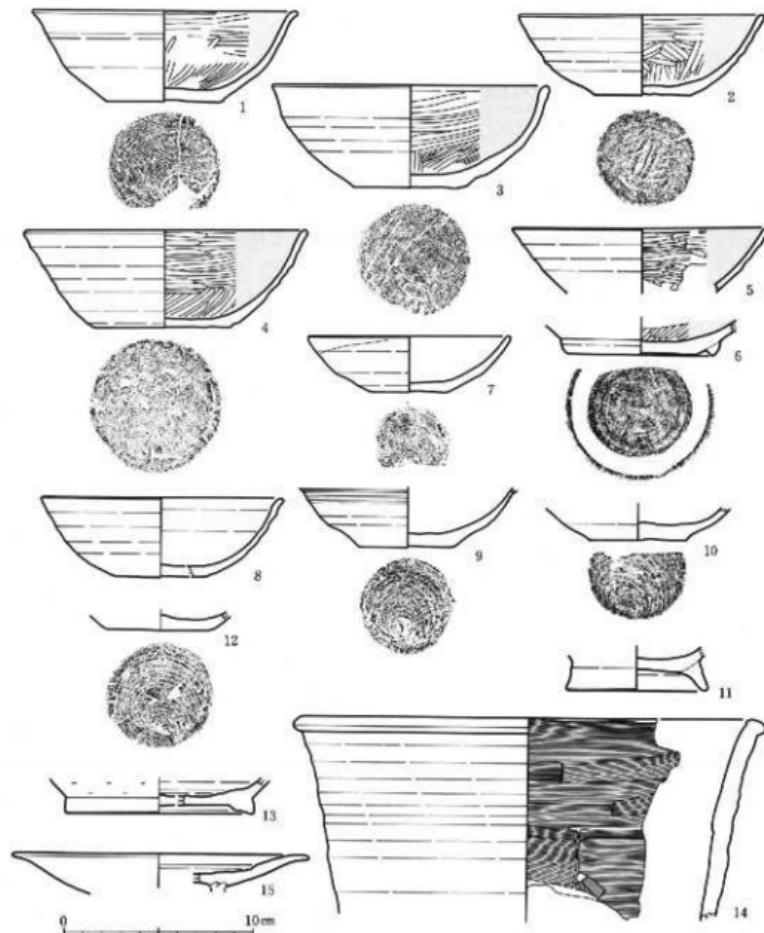
底面出土遺物 ロクロ土師器壺(18)・甕(23)、非ロクロ土師器甕、須恵器壺・甕、赤焼土器壺(19~21)、羽口(26)、鉄滓が出土している。18は外面に「西」の墨書がある。鉄滓 堆積土4層から鍛冶滓37.5g(6点)、8b層から鍛冶滓(椀形滓)290.7g(2点)、底面直上砂利層から鍛冶滓31.9g(2点)、炉壁に付着した鍛冶滓15.8g(1点)、炉壁20.7g(1点)が出土した。



層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1a	灰黄褐色 10YR 5/2	粘土質シルト	炭を少含む	7b	灰黄色 2.5Y 6/2	砂質シルト	
1b	にぼい黄褐色 10YR 5/3	粘土質シルト	炭を少含む	8a	にぼい黄褐色 10YR 5/4	細砂	
2a	灰黄褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	炭・灰焼成土を含む	8b	にぼい黄褐色 10YR 5/4	粗砂	7b層上を含む
2b	黒色 10YR 2/1	粘土質シルト	炭・灰焼成土を含む	8c	にぼい黄褐色 10YR 5/4	砂	
3a	にぼい黄褐色 10YR 4/3	粘土質シルト	炭を多量に含む	8d	にぼい黄褐色 10YR 5/4	砂	
3b	褐色 10YR 4/4	シルト		8e	にぼい黄褐色 10YR 5/4	砂	
3c	にぼい黄褐色 10YR 5/3	粘土質シルト		9f	灰褐色 2.5Y 6/2	砂質シルト	
4a	灰黄褐色 10YR 5/2	粘土質シルト		9a	にぼい黄褐色 10YR 5/4	砂質シルト	褐色土を含む
4b	褐色 10YR 4/4	シルト	灰黒褐色土を含む	9b	にぼい黄褐色 10YR 5/3	粘土	灰褐色粘土を含む
5a	灰黄褐色 10YR 5/3	シルト	砂を含む	9c	にぼい黄褐色 10YR 5/3	砂質シルト	灰褐色土を含む
5b	褐色 10YR 4/4	シルト	灰黒褐色土を含む	9d	K-にぼい黄褐色 10YR 5/3	粘土	灰褐色粘土を含む
6a	にぼい黄褐色 10YR 5/4	粗砂		9e	灰褐色 2.5Y 6/2	粘土質シルト	
6b	にぼい黄褐色 10YR 5/3	粗砂	3~5mm砂を含む	9f	にぼい黄褐色 10YR 5/3	粗砂	灰褐色土を含む
6c	にぼい黄褐色 10YR 5/3	粘土質シルト	薄褐色砂を含む	9g	にぼい黄褐色 10YR 5/3	粗砂	
6d	にぼい黄褐色 10YR 5/4	シルト	灰黒褐色土を含む	10a	灰褐色 2.5Y 6/2	粘土	灰黄色土を含む
6e	にぼい黄褐色 10YR 5/4	粗砂		10b	灰褐色 10YR 5/2	砂質シルト	灰褐色土を含む
6f	にぼい黄褐色 2.5Y 6/2	粘土質シルト		11a	K-にぼい黄褐色 10YR 5/4	砂質シルト	灰白色火山灰含む
6g	にぼい黄褐色 10YR 5/3	粘土質シルト	灰褐色土を含む	11b	にぼい黄褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	灰白色火山灰含む
6h	にぼい黄褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	砂を含む	11c	にぼい黄褐色 10YR 4/3	粘土質シルト	
6i	にぼい黄褐色 10YR 5/3	砂	淡黄色土を含む	12	にぼい黄褐色 10YR 5/4	砂	
6j	にぼい黄褐色 10YR 5/4	粗砂	3~5mm砂を含む	13	にぼい黄褐色 10YR 5/3	砂質シルト	灰白色火山灰含む
6k	にぼい黄褐色 10YR 5/3	粘土質シルト	灰褐色土を含む	14	にぼい黄褐色 10YR 5/3	砂	
6l	にぼい黄褐色 10YR 5/3	砂質シルト		15	にぼい黄褐色 10YR 5/3	細砂	
6m	にぼい黄褐色 10YR 5/3	粗砂		16	にぼい黄褐色 10YR 5/4	粗砂	
6n	にぼい黄褐色 10YR 6/2	粗砂	灰白色土を含む	17	にぼい黄褐色 10YR 5/4	細砂	
7a	灰黄色 2.5Y 6/2	粘土質シルト	砂を含む				

第77図 SR 4 河川跡断面図

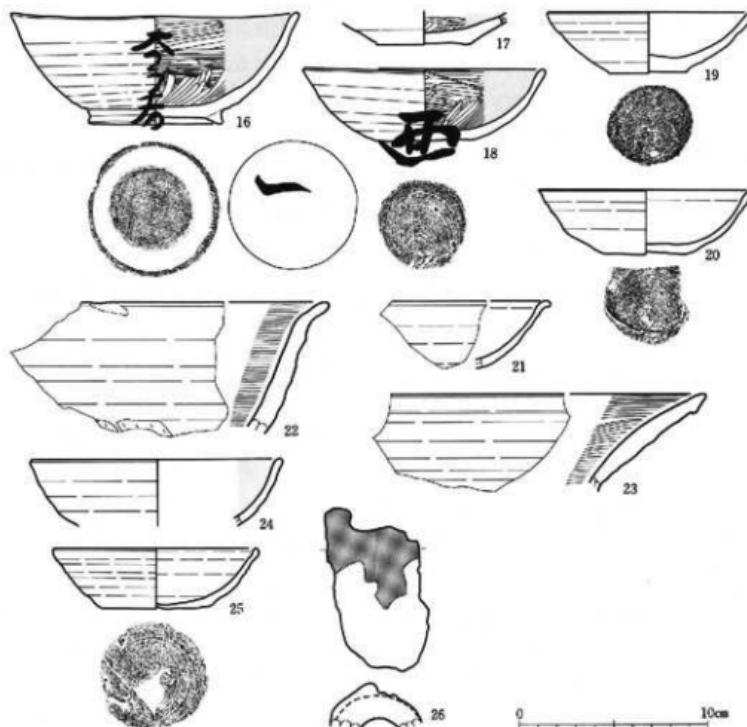
I 古墳時代以降の遺構と遺物



番号	種類	分類	層位	性 質	口徑	底径	壁高	厚さ	説明
1	土器碗	B	6層	泥：泥質的 内：ヘタリあり、白色地 表：圓滑な面 内：ヘタリあり、白色地	13.8	6.0	4.9	1/2	D125
2	土器碗	B	7層	泥：圓滑な面 内：ヘタリあり、白色地 表：圓滑な面 内：ヘタリあり、白色地	13.0	5.1	4.3	3/4	D140
3	土器碗	B	8b層	泥：圓滑な面 内：ヘタリあり、白色地 表：圓滑な面 内：ヘタリあり、白色地	14.4	5.0	5.3	1/2	D151
4	土器碗		10層	泥：圓滑な面 内：ヘタリあり、白色地 表：圓滑な面 内：ヘタリあり、白色地	15.0	7.3	5.3	1/2	D162
5	土器碗		4層以下	四：ヘタリあり、黑色地底 表：圓滑な面	13.6			1/4	D171
6	土器高台杯		3層	四：圓滑な面 内：ヘタリあり、白色地底 表：圓滑な面 内：ヘタリあり、白色地底	7.8			2/3	D169
7	土器土器片	A	5層	泥：圓滑な面 底：圓滑な面	10.9	4.6	3.6	1/4	D224
8	水炊土器片	B	7層	泥：圓滑な面 底：圓滑な面	12.6	4.9	4.3	1/4	D167
9	水炊土器片	D27	5層	泥：圓滑な面 底：圓滑な面	5.0			1	D226
10	水炊土器片		2層	泥：圓滑な面 底：圓滑な面	5.1			1/2	D176
11	漆成土器片		4層	泥：4 → 灰色 壁面→グロテナガ	7.5			3/4	D170
12	漆成土器片	B	5層	泥：圓滑な面 底：圓滑な面	5.9			1	E98
13	灰陶瓦器骨頭		4層	骨：円錐形の骨頭 底：圓滑な面	20.0			1/4	F58
14	土器器底		3層	外：ロクロナギ 内：ヘタリテ	25.0			1/4	D172
15	輪軸脚器底		4層	外：白色地 2.0F 1.0H、内：2.0H 底：輪軸脚	15.7	7.0		1/4	H1

第78図 S R 4 河川跡出土遺物 (1)

遺物の所属時期 13層より上位は灰白色火山灰降下以降に堆積したものであり、火山灰の年代より（白鳥：1980）、10世紀前半かそれ以降の遺物と考えられる。「11層以下」で取り上げられた遺物は火山灰より古いとも新しいとも解釈できることから、これらも一応火山灰より新しく考えておきたい。底面直上の層については火山灰降下以前の可能性が大きく、出土遺物は10世紀前半以前のものと考えられる。



番号	種類	分類	第位	特徴	口径	底径	高さ	厚さ	骨格
16	土器破片		11層以下	素：四角を切り一端舟型リムナリ、ヘラリガキ、無地	15.3	7.2	5.9	3/4	D63
17	土器破片	B	11層以下	素：底丸形 背へりなし、無地	5.9			1/2	D44
18	土器破片	B	民窯	素：底丸形 切口：舟型・ヘラリガキ、無地	12.8	4.6	4.0	1	D36
19	赤陶土器片	A	民窯	素：底丸形 切口：舟型	10.9	5.3	3.3	3/5	D35
20	赤陶土器片	A	民窯	素：底丸形 切口：舟型	11.4	4.2	3.5	1/2	D36
21	赤陶土器片		民窯					1/4	D22
22	土器破片		11層以下	素：ロブリカーブリム？ 背：ナゲ					D36
23	土器破片		民窯	素：ロブリカーブリム？ 背：ナゲ					D25
24	土器破片			舟：へりなし（底丸形）、無地	13.5			1/4	D28
25	赤陶土器片	A		底丸形 切口：舟型	10.7	5.8	3.2	#13	D64
26	羽目1		民窯	骨質羽目（舟型）裏面有孔					P2

第79図 SR 4 河川跡出土遺物 (2)

(9) 遺構以外の出土遺物

II区出土遺物（第80図1～5） 基本層出土遺物 各層からロクロ土師器壺(1)・甕、非ロクロ土師器壺、須恵器壺、土師質土器皿(4)が出土している。4は有孔の土師質土器で、近世以前のものと考えられる。 表土および層位不明遺物 ロクロ土師器壺、非ロクロ土師器壺(3)、須恵器壺・壺・甕、赤焼土器壺(2)、陶器皿(美濃・18世紀頃)が出土している。

III区出土遺物（第80図6～15） 古墳時代以降の遺構検査面は3層だが、下層からも土師器が出土しており矛盾しているが、一応取り上げ層位ごとに説明する。 4層出土遺物 ロクロ土師器壺・高台壺(7)・甕・壺、非ロクロ土師器壺、須恵器壺、赤焼土器壺(8)が出土している。

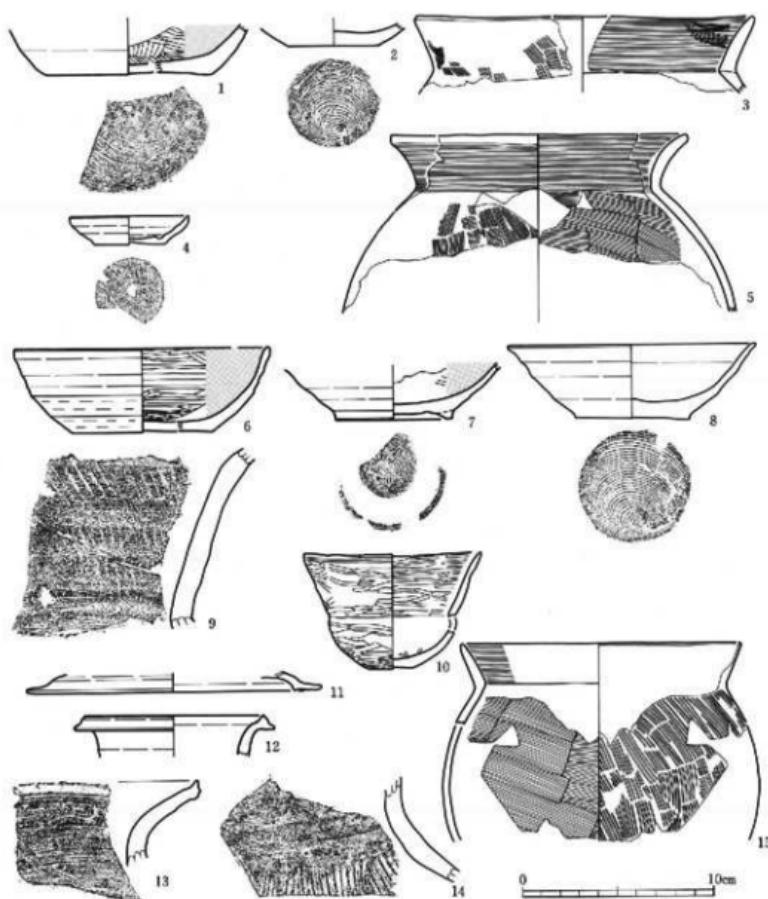
5層出土遺物 ロクロ土師器壺(6)・甕、非ロクロ土師器壺、須恵器壺・甕が出土している。6は底部切り離し後、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。 6層出土遺物 繩文時代の遺物包含層であるため、攪乱により混入したものと考えられる。ロクロ土師器壺・甕、非ロクロ土師器壺、須恵器壺・甕(9)が出土している。 攪乱および層位不明遺物 ロクロ土師器壺、非ロクロ土師器壺(15)、須恵器壺・壺(12)・蓋(11)、甕(13・14)、中世陶器(常滑窯)、陶器すり鉢(产地不明、SD6と同質)、ほうろく(堤・19世紀頃)が出土している。

I北区出土遺物（第81図1～7） 3・4層出土遺物 ロクロ土師器壺(1・2)、非ロクロ土師器壺(3)、須恵器壺(4)、緑釉陶器、石製品(7)がある。7は須恵器壺の体部破片を利用した砥石で、内面と縁辺に磨面がある。F-19グリッド3層より緑釉陶器が出土している(原色図版4・5)。細片だが碗と考えられる。胎土は淡黄色、軟質で、濃緑色の釉であり、SR4出土のものと異なる。これは近江産と考えられ、11世紀代の可能性がある。

層位不明 非ロクロ土師器壺(5)・甕(6)が出土している。

I南区出土遺物（第81図8） 基本層出土遺物 ロクロ土師器壺(8)・高台壺・甕、非ロクロ土師器壺、須恵器壺・壺、赤焼土器壺、羽口が出土している。8は7層出土遺物で、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。

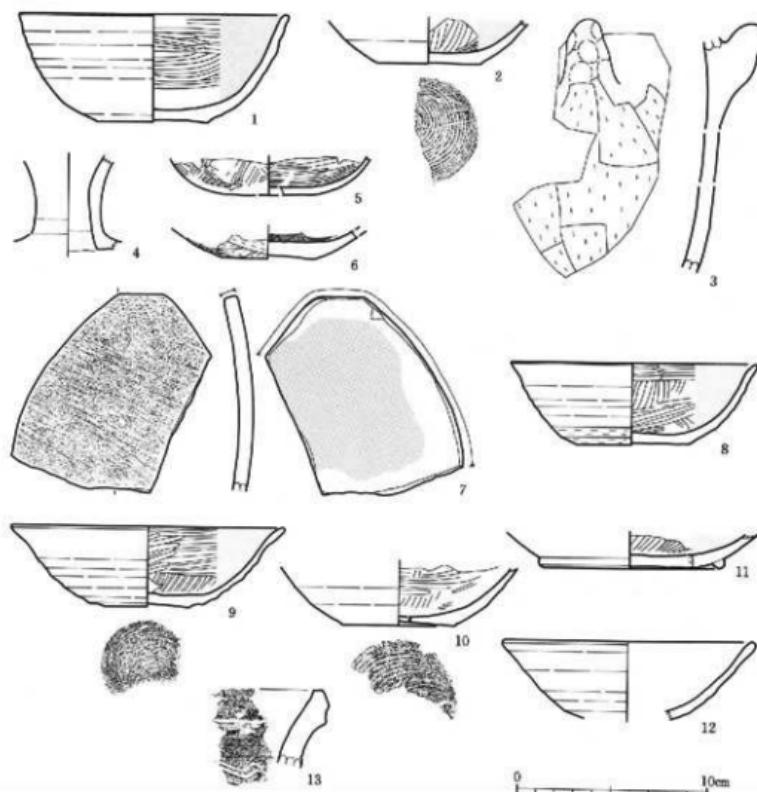
出土地不明の遺物（第81図9～13） ロクロ土師器壺(9・10)・高台壺(11)・甕、非ロクロ土師器壺・甕、須恵器壺・壺・甕(13)、赤焼土器(12)、陶器(美濃・堤・相馬・18世紀以降)が出土している。



番号	地区	種類	分類	層位	特徴	口径	底径	高さ	残存	登録
1	B区	土師器	B	6層	底：四隅余切り 内：ヘラミガキ、黑色底面	8.9			1/4	D212
2		赤陶土器			底：四隅余切り	4.7			1	D218
3		上絆器		測十	外：ハケメ 内：ハケメ→コロナデ	18.0			1/4	C83
4		土師質土器		5層	底：四隅余切り 中央に穴あり	6.4	3.8	1.5	3/4	D206
5		土師器			底：コロナデ 体外：ハナメ 体内：コロナデ 体内：ヘラナデ	15.6			1/4	C64
6	B区	土師器	A	5層	体下～底：同前～ラケズリ 内：ヘラミガキ、黑色底面	13.6	7.4	4.5	1/6	D209
7		土師器合		4層	底：四隅余切り～高台→ロコナデ 内：ヘラミガキ、黑色底面	6.2			1/2	D211
8		赤陶上絆器	B	4層	底：四隅余切り	13.1	6.0	4.1	4/5	D208
9		頭也器		6層	外：平行叩き→クロナデ 内：コロナデ					E38
10	C区	土師器		不明	外：二ツノコギ 体外：ヘラミガキ 体内：ヘラミガキ	9.5	2.2	6.2	2/3	C63
11		頭也器				15.7			1/4>	E51
12		頭也器				10.7			1/4>	E55
13		頭也器								E53
14		頭也器			外：ナデ→平行叩き 内：ナデ					E52
15	土器	土器		不明	外：ナデ 体外：ハケメ 体内：コロナデ 体内：ヘラナデ	14.8			1/3	C68

第80図 遺構以外の出土遺物 (1)

1 古墳時代以降の遺構と遺物



番号	地 区	種 類	期	分類	位 置	特 徴	D 径	高 さ	残 存 率	立 場
1		A28	土器環状	B	3期	表:斜面地内へテラコモ、裏色 裏:斜面地内へテラコモ、裏色	16.3	5.6	5.8	E91 D206
2		A23	土器環状	B	4期	表:斜面地内へテラコモ、裏色 裏:斜面地内へテラコモ、裏色	5.4	—	1/2	E914
3		A23	土器環状	4期	テラコ、ハクナツ内にテラ					C73
4	I北沢	A23	楕円形	4期	テラコ					E30
5		土器環状?	不明		テラコ:ヘラミガモ				1/4	C80
6		土器環状	不明		表:ヘラミガモヘラミガモ 内:ヘラ ミガモ		4.8	—	1	C82
7		和田石	2期		表面粗面地内へテラコモ					E73
8	I西沢	土器環状	A	2期	表:斜面地内へテラコモ、裏色 裏:斜面地内へテラコモ、裏色	13.0	6.0	4.4	3/4	D207
9		土器環状	B	不明	表:斜面地内へテラコモ、裏色 裏:斜面地内へテラコモ、裏色	14.6	4.5	4.3	1/4	E915
10		土器環状	B		表:斜面地内へテラコモ、裏色 裏:斜面地内へテラコモ、裏色	6.0	—	1/4	E916	
11		土器環状	4期		表:テラコモヘラミガモ 裏:テラコモヘラミガモ	9.7	—	1/4>	E913	
12		赤陶土器环	B(?)		外:波状地内	13.4	—	1/4>	E912	
13		楕円形			外:波状地内					E56

第81図 遺構以外の出土遺物(2)

2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺物包含層

概要 I 北区からIII区にかけて遺物包含層が検出された(第82図)。擾乱により削られた部分も多いが、南北40m、東西8mの範囲に広がっており、面積は約224.5m²である。構成する層は(I 北区とIII区で名称が異なるがIII区の6層で統一したい)、黒褐色シルトで黄褐色砂と焼土を含んでいる。厚さは平均20cmで、北東方向にわずかに下がっており、層の上・下面ともかなり乱れた状態である(第12・13図)。

1年次の調査では、大形でまとまる土器や土製品は平面図を作成しレベルを記録し、その他の遺物はグリッドごとに取り上げた。調査後半にはグリッドを9分割し取り上げた(第84図)。

2年次はIII区に延びる部分を調査し、遺物は1点ずつ地点とレベルを記録した。III区は基準杭に誤りがあるが、そのまま記載する。

遺物の出土状況 (第83図) 出土遺物の総量は把握をしていないが、2年次の記録遺物が5626点であることから、全体では1万点以上にのぼるであろう。位置の記録された土器の点数をグリッドごとに示したのが第83図である。カッコ書きは1年次のもので、数点がまとめてあり土器総数を示していないが、量的傾向性は表れていると考えられる。このデータで見る限り、北部のD・E-35~37グリッドと、南部のB・C-27~30グリッドの2箇所に集中地点がある。包含層下の地形を見ると(第85図)、B・C-27~31グリッドにかけて溝状の落ち込みがある。また、遺物のレベル記録によると、E36グリッドを中心として、30~40cm落ち込んでいる。すなわち、北と南の凹地に遺物が集中していることになる。出土遺物には、縄文土器、剣片石器、礫石器、石製品、土製品がある。土製品のみ後段で扱う。

縄文土器 (第86~141図)

縄文土器は観察に耐え得るとして登録した点数が約1430点あり、うち約760点を図示した。

器種の分類

深鉢 器高が口径より大きいもの。器形から以下に細分したが、実際にはあいまいなものもあり明瞭には分けきれなかった。

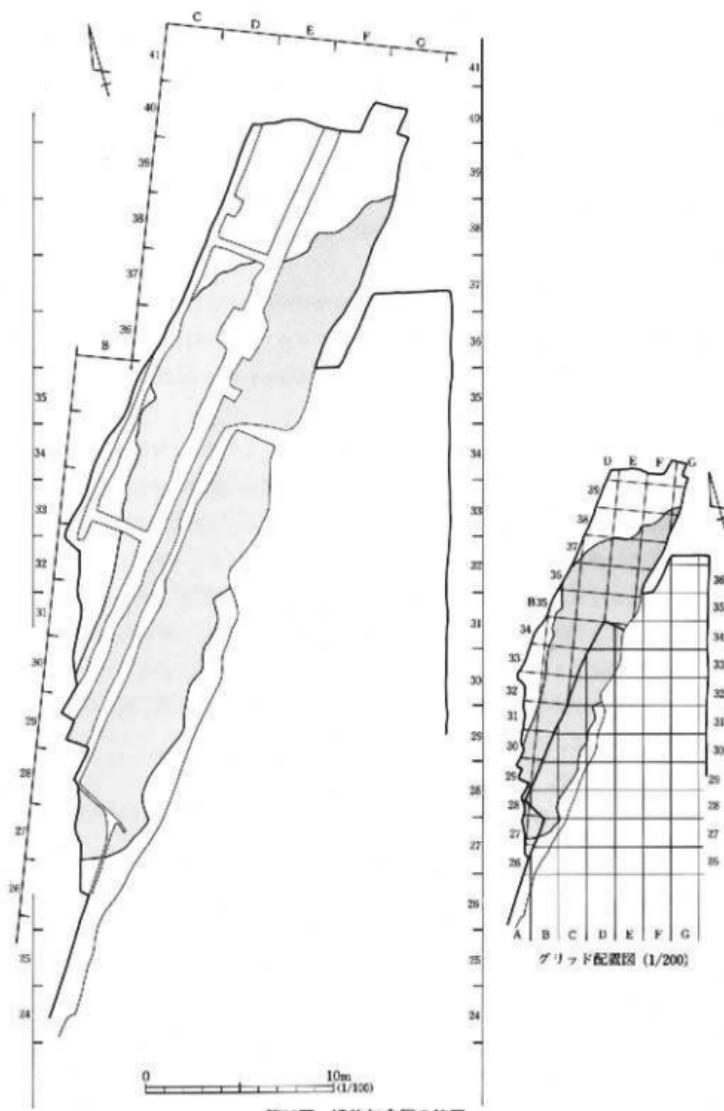
A類 体部がややふくらみ、頸部がくびれ、口縁部が外反するもの。

B類 頸部がくびれ、口縁部がやや内彫するもの。

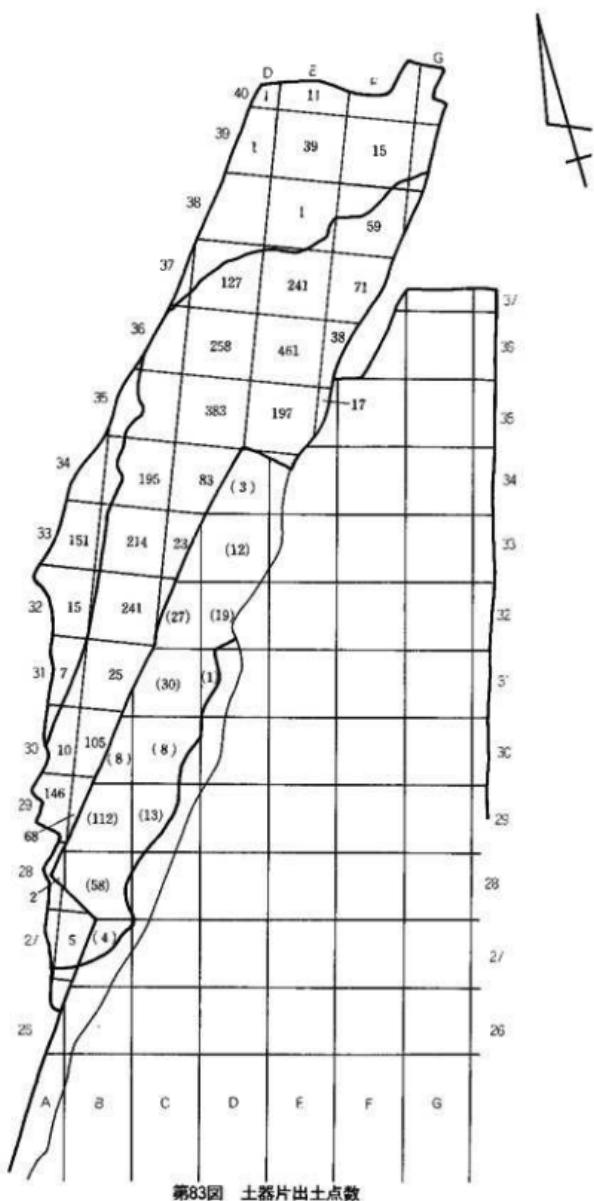
C類 体部から口縁部にかけ直線的に外傾するもの。

D類 体部が直線的に外傾し、口縁部が外反するもの。

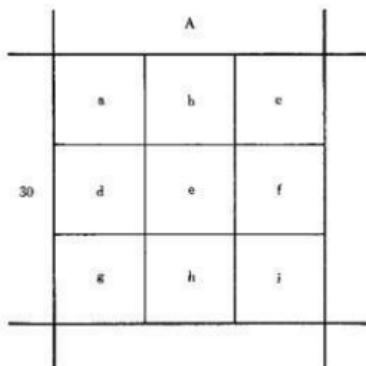
E類 体部が丸みを持ち、口縁部がほぼ直立するもの。



第82図 遺物包含層の範囲



第83図 土器片出土点数



第84図 グリッドの分割

F類 体部上半から口縁部にかけ内凹するもの。

鉢 器高が口径と同じか、口径より小さいもの。

底部からの立上がりが直線的なものと、丸みを持つものがある。

浅鉢 口径が器高の2.5倍以上のもの。外面は無文で、内面に文様がある。

壺 体部に最大径があり、頸部がくびれるもの。

丸底碗 口径10~16cm、器高4~6cmの小形で、底部の丸い楕円形のもの。

台 深鉢・鉢につく台と考えられるもの。

高环 柱状の脚部で、上部に受け皿のつくもの。

小形土器 特に小形のもの。

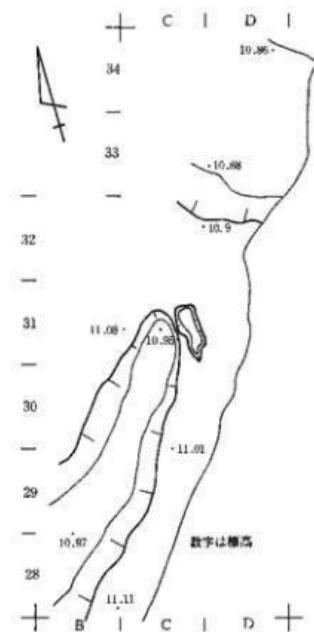
文様の分類

1類 沈線や磨消繩文による曲線的な文様。

2類 沈線や磨消繩文による方形や三角形を基調とする文様。

3類 横位に展開する平行線状の磨消繩文による文様。

4類 繩文が口縁部に及び、さらに幾何学的な文様を描くもの。



第85図 遺物包含層下の地形 (1/100)

- 5類 隆線を加える文様。
- 6類 刺突文を加える文様。
- 7類 楠葉状の沈線によるもの。
- 8類 頸部に沈線文を持つもの。
- 9類 頸部に無文帶を持つもの。
- 10類 頸部に撫糸の圧痕、体部に繩文が施されるもの。
- 11類 繩文のみのもの。
- 12類 撫糸文のもの。
- 13類 無文のもの。

有文深鉢 (1~10・12~14・43) 1・2・4はA 1類である。1は口縁部と体部上半の繩文帯の間をつなぐように曲線状の文様が施される。6・7はA 2類で、上下の繩文帯の間を、6は斜位に、7は「コ」状につなぐ。9はB 3類で、横位の平行沈線を縦に短い沈線が切る。口縁内面はくぼむ。13・43はC 1類で、13は蛇行沈線により樹枝状の文様が、43は連弧文が描かれる。14はC 3類で、底部に向かいしばまる器形である。波状口縁で、体部には平行する繩文帯が配置される。

鉢 (15~42、363~383) 鉢に加えられる平行沈線と繩文による直線的な文様は、沈線の引き方によって2種類に分けられる。1つは横位の平行沈線の端を折り曲げるもので、15・16・18・19・28・35がそれにあたる。もう1つは横位の平行沈線に縦の短沈線や蛇行沈線を加えるもので、20・21がそれにあたる。22は波状口縁で、口縁に沿う繩文帯がある。23は底部を欠くが一応鉢としたもので、口縁部が外反する。17は底部の割合が比較的大きなもので、上下2本の繩文帯の間に縦の繩文帯が配置されるが、規則的でない。363は繩文のみの鉢で、底部から直線的に外傾し、底部が大きめであり、プロポーションが17に似る。364~383は無文の鉢で、底部から直線的に外傾する器形のものが多く、やや丸みを持つものもある。

深鉢および鉢(44~256) 破片資料で、器種が深鉢か鉢のいずれかになるものを集めた。44~69は曲線的な文様のもの(1類)である。70~91は直線状・三角形状の文様のもの(2類)である。92~95は刺突のある隆線が加えられる(5類)。97~119は波状口縁のもので、98・102は口縁部に平行するものとそこから斜めに垂下する磨消繩文の組合せ文様(2類)である。99~101、103~108・111は口縁部に平行する磨消繩文がある(3類か)。112・113・116は口縁全体に繩文が施され、曲線的な文様が描かれる(4類)。117~121は数本の平行沈線による幾何学文様が描かれる(2類)。122~131は2本の平行沈線による磨消繩文、132~239は数本の平行沈線による磨消繩文が施される(3類)。238・249~254は刺突文が加えられる(6類)。249~253は円形の刺突文、254は横長の刺突文である。255・256は櫛描き状の曲線文が描かれる(7類)。

頸部に撚糸圧痕を持つ深鉢 (257~295) 器形から A10類(257~262)、D10類(264・265・273)、E10類(295)に分けられる。264は非常に大形の土器である。

縄文のみの深鉢 (296~317・322~349) 器形から A11類(296~299)、C11類(301~307・310・329~333)、D11類(300)、E11類(308・309・311~313)、F11類(314~317)に分けられる。325は口縁部に撚糸圧痕を持つ。

撚糸文の深鉢 (311・318~321) 320はE12類で、撚糸文L(左巻き)が口縁部は横位に体部は斜位に施される。319は撚糸文L(右巻き)が斜位に施される。

無文の深鉢 (350~361) 器形の分るものはC13類である。三単位の波状口縁である。

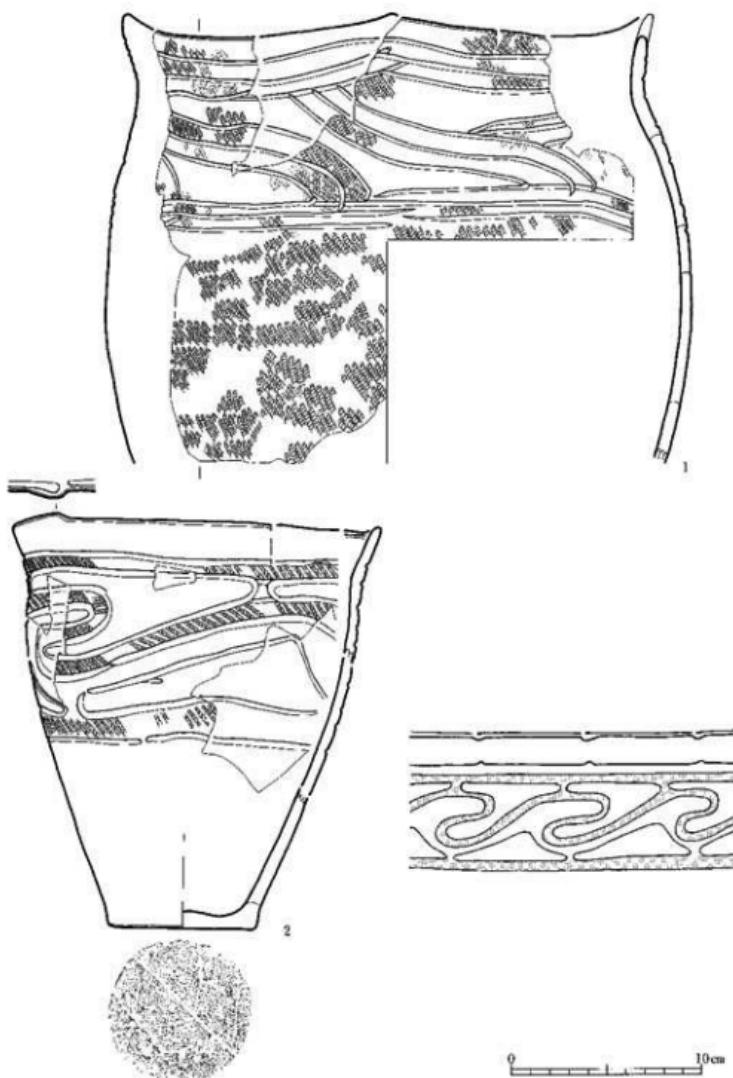
浅鉢 (384~391) 384は上面観四角形になると推定される。底部から直線的に外傾し、口縁部が立ち上がる。口縁は4単位のゆるやかな波状である。文様は内面に限られ、口唇部にキザミ、その下は順に円形の刺突、隆線、横位平行沈線+縦位短沈線と縄文が施される。386は逆「の」字状沈線が加わる。389は上面観「S」字状の突起がつく。

壺 (392~445) 392は大形のもので、頸部と体部中央の平行沈線間に入組み文が描かれる。393~395はほぼ同じ大きさで、いずれも曲線状の文様が描かれる。396は体部のふくらみが少なく徳利形で、弧状沈線文が描かれる。397は逆「の」字状の文様が描かれる。この土器は割れ口が摩滅しており、破損した後も使用されていた可能性がある。399・400は口縁部が大きく広がり、幅広の縄文帯を持つものである。398・406~416は体部に平行する縄文帯が巡るものである。398は完形品で、頸部から体部上半に3本の縄文帯が巡る。417・418は頸部に沈線が巡る。422~428は頸部に撚糸圧痕をもつ。429~445は縄文が施される体部破片である。

丸底碗 (446~459) 口径10~16cm、器高4~6cmと小形のものである。底部は丸底が主だが、平底風のもの(448・451)もある。449は口縁部が小波状である。調整は内外面にミガキが施されている。一見土師器の坏風であるが、黒色処理は認められない。

台 (460~462) 深鉢、鉢等につく台と考えられる。462は器高の高いものである。

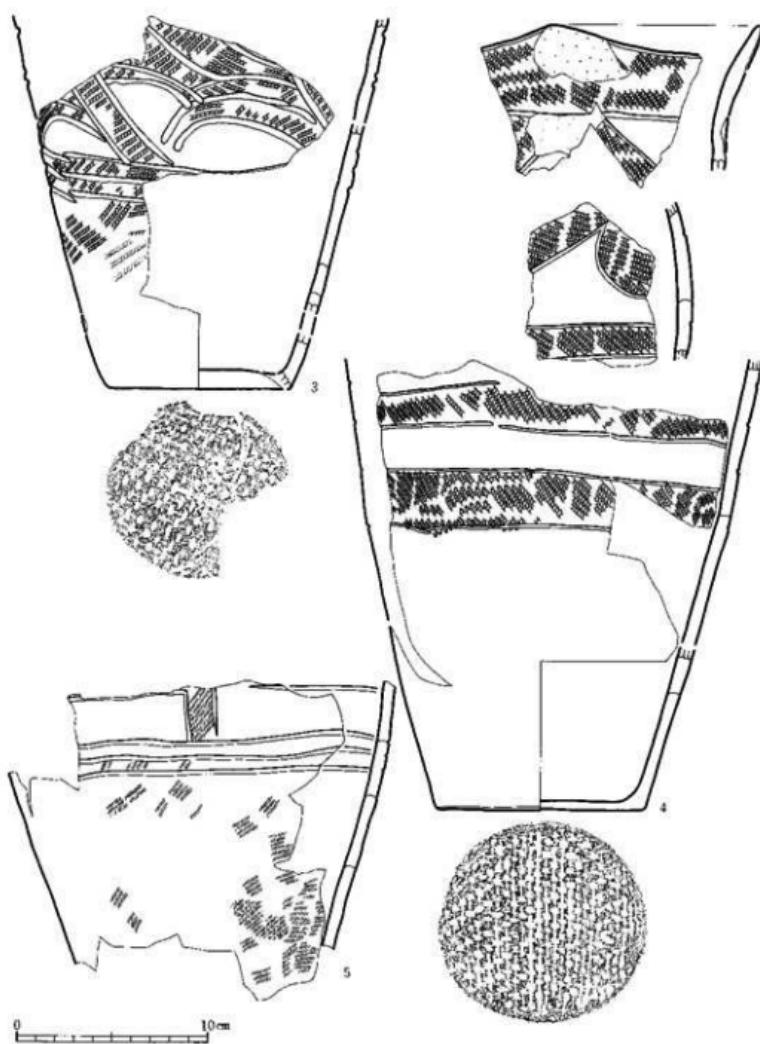
高坏 (463・464) 中実の柱状部の下に脚、上に受け皿がつく。脚は463が内側に、464は外反する。465・466は脚部か、蓋いすれかの可能性がある。



番号	地名	分類	口径	高さ	残存率	文様の特徴		直径
						幅	形	
1	D36	深井 A1	27.6		1/3	波状口縁 4 単位、網文 R1、沈線 (3 本単位)		A48
2	B296	深井 A1	19.5	7.8	22.1	3/4 網文 RL、沈線 (2 本単位) 小尖端 口縁内面に沈線		A14

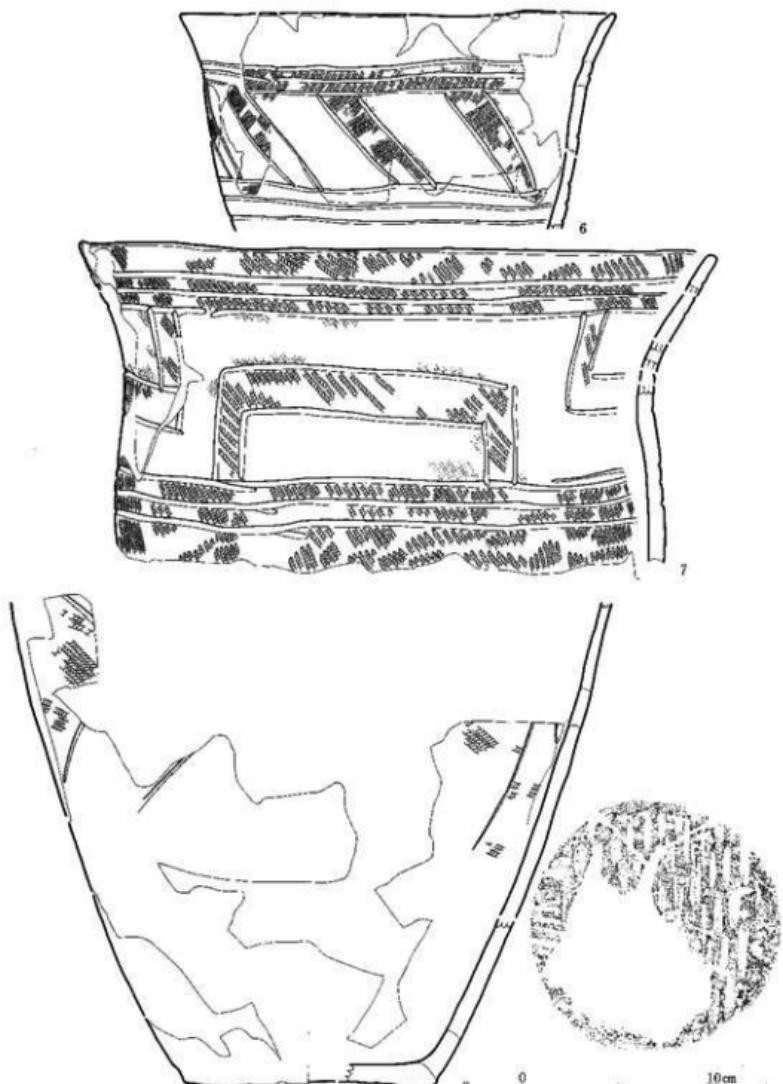
第86図 遺物包含層出土土器 (1)

(単位cm)



第87図 遺物包含層出土土器（2）

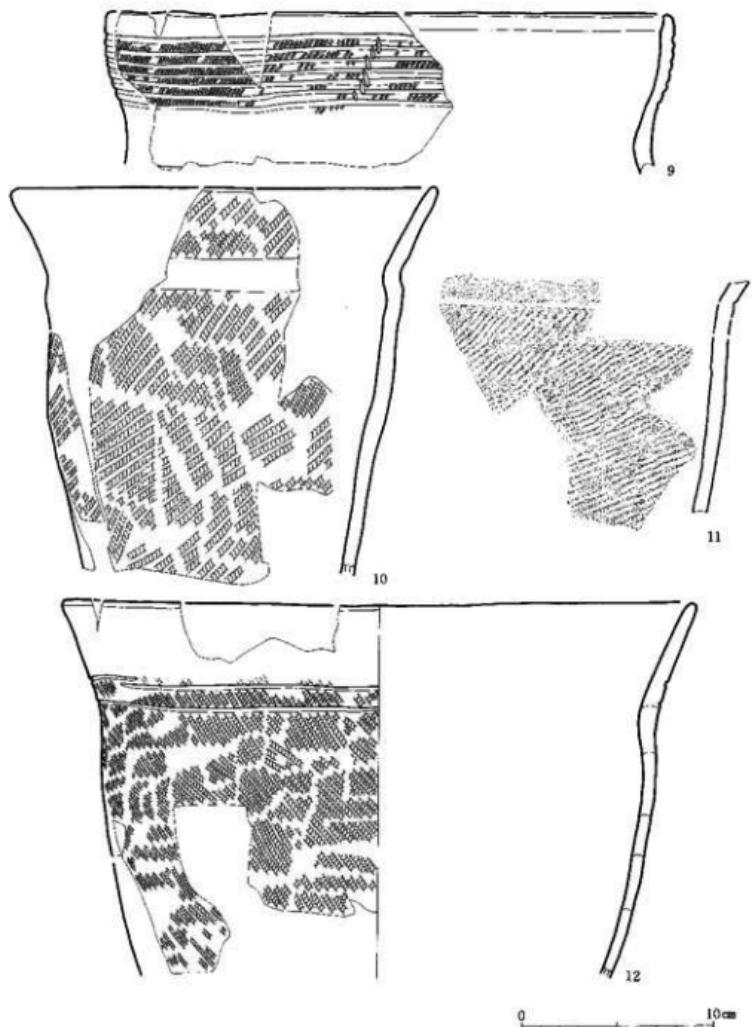
名号	地区	分 類	測定	推定率	文 様 の 特 徴		竪跡
					縄文LR	縄文RL	
3	F3d	測位1	9.5	1/3	縄文LR 沈縫（2本・3本半位）	直：縄代板A	A138
4	C3b	測位A1	11.0		縄文RL 沈縫（2本半位）	底：縄代板A	A187
5	B2B	測位2			縄文L 改縫（縫位3本・縫位2本）		A52



番号	地区	分類	口径	底径	残高	文様の特徴	参考
6	B29	深井 A2	23.0	—	1/3	縹文 LR、沈鉢（横径 3 本、斜径 2 本）	A145
7	C31	深井 A2	33.4	—	1/2	縹文 NL、沈鉢（横径 3 本、内部 2 本）	A57
8	E20	深井	19.6	3/4	—	縹文 LR、沈鉢 底：時代痕 B	A24

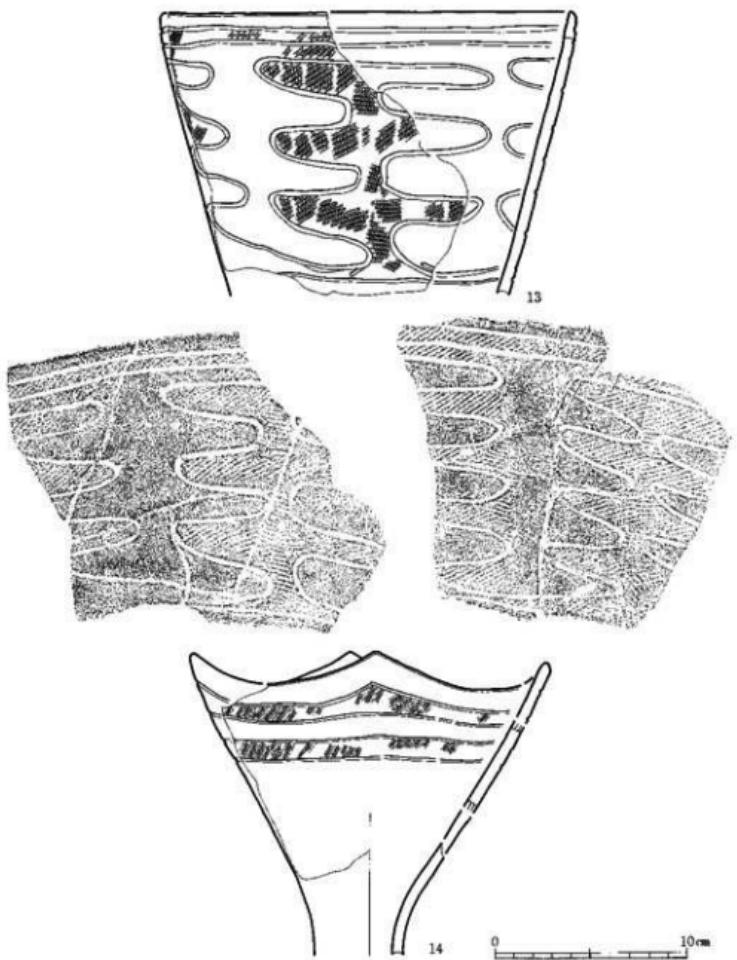
第88図 遺物包含層出土土器（3）

2. 織文時代の遺構と遺物



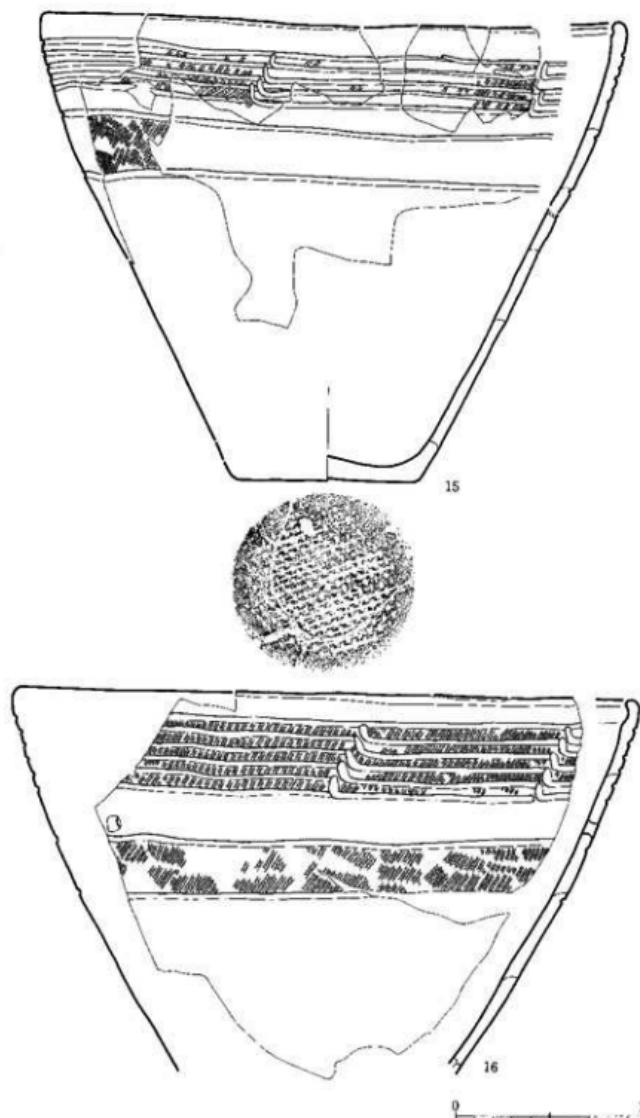
番号	地区	分類	口径	残存率	文様の特徴	登録
9	C29	深鉢 E3	29.9	1/4	縞文LR、横位沈綱(1本)→縦位沈綱(知)	A116
10	E35b	深鉢 D6	22.0	1/4	縞文LR、頭部ナゲ	A31
11	F39	深鉢 D10	14.0	1/4	縞文LR、横系圧痕 LR	A256
12	C29	深鉢 A8	33.5	1/2	縞文RL、沈綱(横位2本単位)	A38

第89図 遺物包含層出土土器(4)



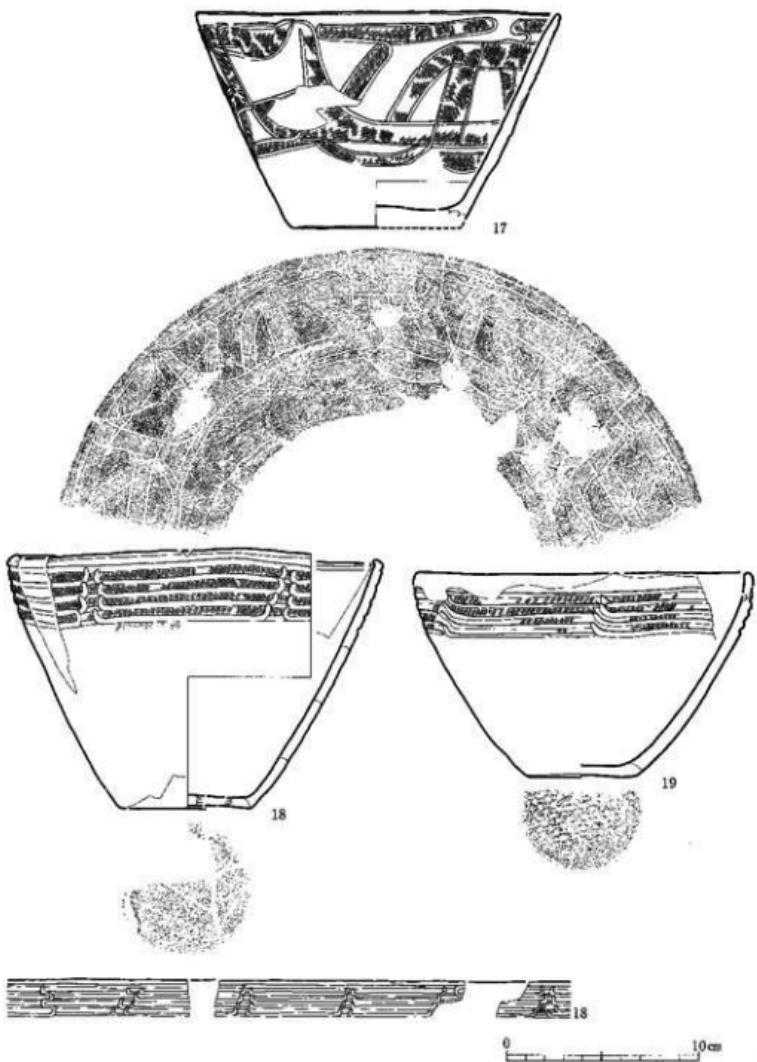
番号	地区	分類	口径	残存率	文様の特徴		基線
					縹文	沈線	
13	C29	深鉢 C1	22.6	1/3	縹文 LR、沈線 (横位 2 本単位、断位並行)		A144
14	C32	深鉢 C3	19.1	2/3	波状 4 単位 縹文 L (S)、沈線 (横位 2 本単位)		A85

第90図 遺物包含層出土土器 (5)



番号	地区	分 類	口径	底径	高さ	残存率	文 横 の 特 徴		登録
							縄文LR	縄部折れ沈縄(5本)、沈縫(2本) 底: 刷毛底A-1(縄内面に沈縫)	
15	C29	鉢3	30.8	9.6	24.8	1/3			A22
16	H30	鉢3	32.6			1/4	縄文LR、縄部折れ沈縫(6本)、沈縫(2本)	特徴孔1	A103

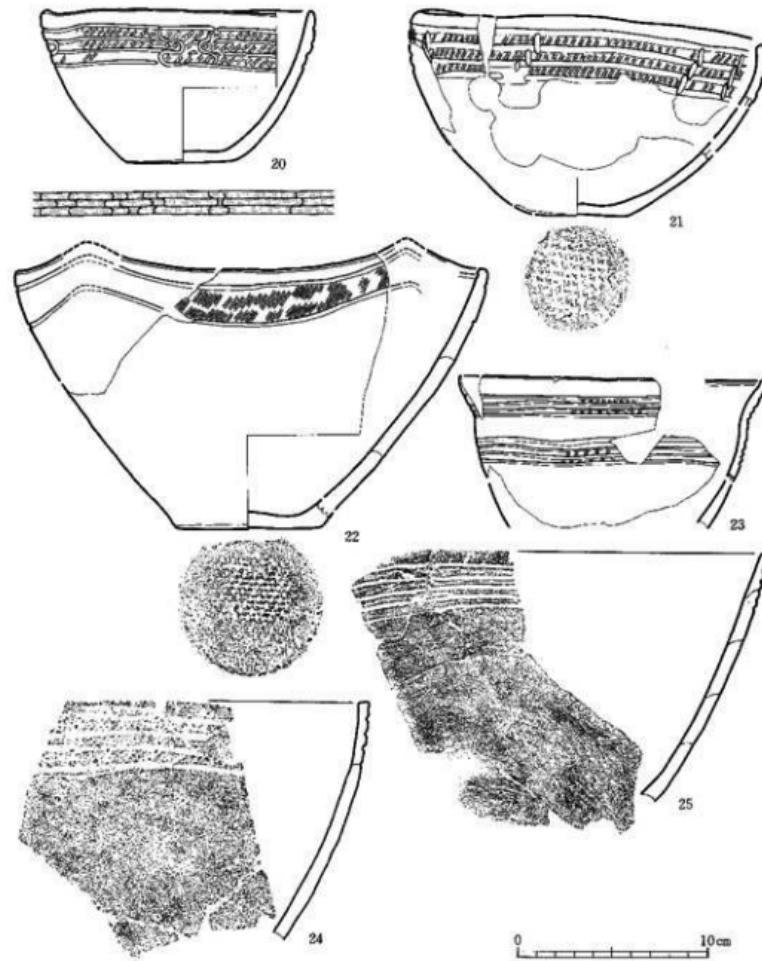
第91図 遺物包含層出土土器 (6)



番号	場所	分類	I径	底径	高さ	残存率	文様の特徴	登録
17	C30	鉢2	19.2	9.0	11.6	1	縞文 LR、弦線（2本単位）	A107
18	C31	鉢3	25.2	6.8	13.8	1	縞文 LR、腹部折れ沈継（5本単位） I II腰内側に沈継 底：木葉底 体部下半マツ	A6
19	C32	鉢3	17.8	6.9	10.9	1/2	縞文 LR、底部折れ沈継（5本単位） 底：網代窓 A	A42

第92図 遺物包含層出土土器（7）

2 繩文時代の遺構と遺物



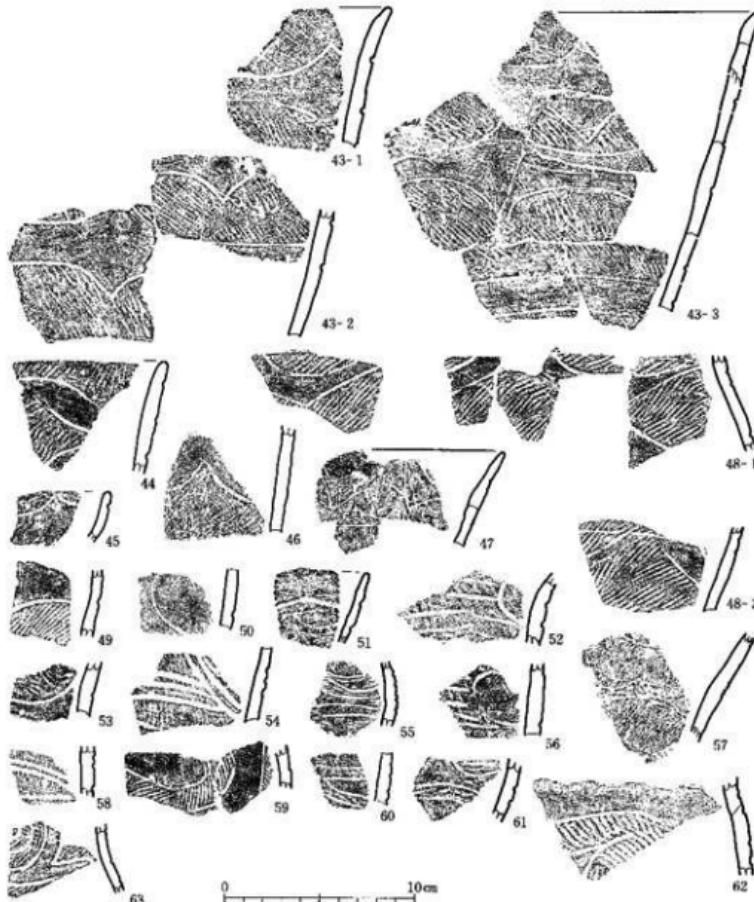
番号	地区	分 帯	口径	底径	厚高	残存率	文 様 の 特 徴		登録
							縄文	沈継	
20	I355	第3	14.3	5.9	8.1	1	縄文 LR、	沈継(横位4本・縦位斜行)	A16
21	D30	第3	18.2	5.8	10.9	3/4	縄文 LR、	改継(横位4本・縦位沈継) 底:新代灰 A 表面ハジケ	A140
22	F28	第3	24.9	7.7		1/4>	波状口縁	縄文 LR、改継(2本単位) I I槽内面に改継、底:新代灰 A	A105
23	H29	第3	16.2			1/4	縄文 LR、	沈継(4本単位2段) 口縁内面に改継	A145
24	B29	第3					沈継	(4本単位)	A169
25	B29	第3					沈継	(5本単位)	A139

第93図 遺物包含層出土土器 (8)



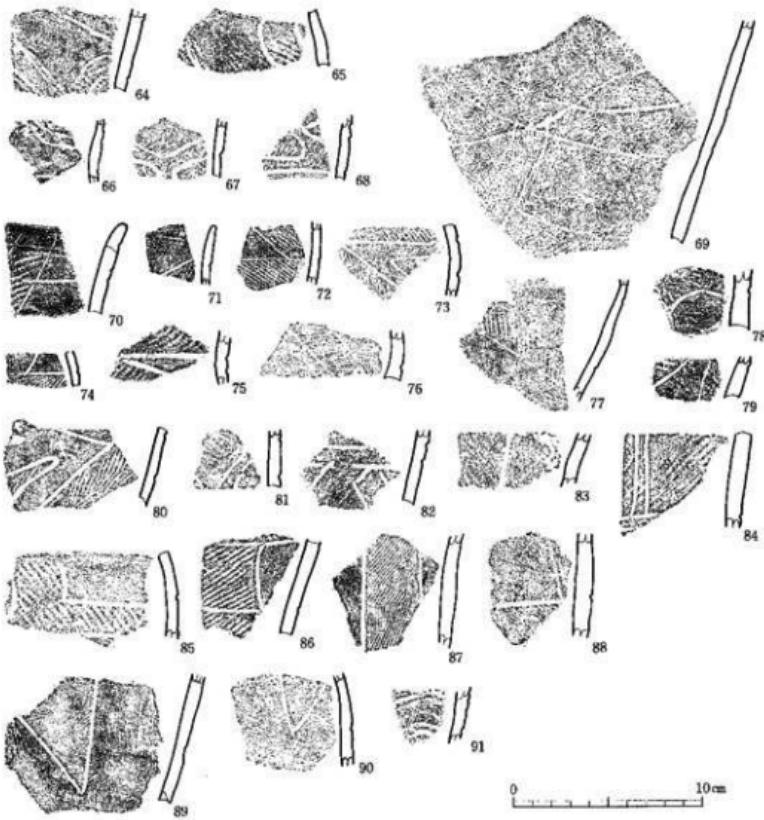
番号	地区	分類	文様の特徴	登録	番号	地区	分類	文様の特徴	登録
26	E36e	鉢3	網文 LR, 沈縫(4本単位)	A175	35	盤丸	鉢	網文 LR, 帯折れ沈縫(5本), 内沈縫	A496
27	E36f	鉢3	網文 LR, 沈縫(4本~)	A286	36	E35b	鉢	網文 L, 沈縫 6本, 口縁内沈縫, 補修孔	A335
28	D35	鉢3	網文 LR, 帯折れ沈縫(7本単位)	A486	37	C38	鉢	沈縫(6本・底基部直線), I(縁内凹状)	A503
29	D39	鉢3	網文 LR, 沈縫(7本単位)	A491	38	B31~33	鉢	波状? 沈縫	A550
30	H28	鉢3	網文 LR, 沈縫(6本~)	A495	39	B28H	鉢	網文?, 沈縫(5本~)	A1924
31	E27	鉢3	網文 LR, 沈縫(5本~)	A511	40	B29	鉢	網文?, 沈縫(2本~)	A1381
32	C31	鉢3	網文 LR, 沈縫(5本単位) 内面沈縫	A287	41	B29	鉢	網文 LR, 沈縫(2本~)	A1945
33	B28	鉢3	網文 LR, 沈縫(7本~) 帯切沈縫	A493	42	H27	鉢	網文 LR, 沈縫(4本単位)	A1746
34	D36g	鉢3	網文 LR, 沈縫(4本単位)	A1339					

第94図 遺物包含層出土土器 (9)



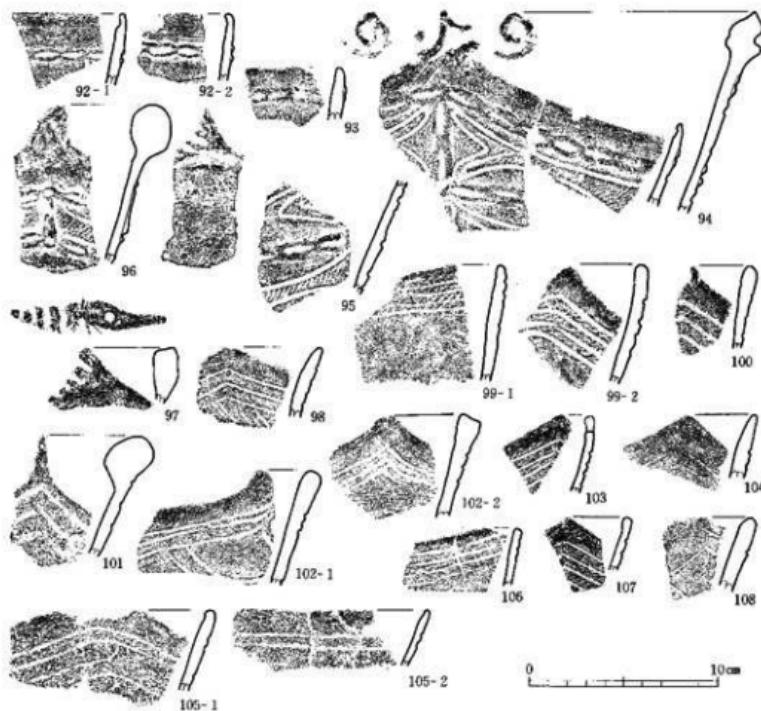
番号	地 区	分類	文 標 の 特 徴	草 頁	番 号	地 区	分類	文 標 の 特 徴	登録
43	C31	I	義文 RL 帯部斜交、沈縫	A222	54	D35	I	義文 RL2、沈縫	A1914
44	不明	I	義文 LR、沈縫	A1305	55	D37e	I	沈縫	A1543
45	E32g	I	沈縫	A1533	56	D35	I	義文 RL、沈縫	A1922
46	B28a	I	義文 LR、沈縫	A2264	57	H27	I	義文 ?、沈縫 47と同一個体	A543
47	C27	I	板状口縁?、義文?、沈縫	A345	58	B33	I	沈縫	A1832
48	C31	I	義文 LR、沈縫	A1841	59	D32g	I	義文 LR、沈縫	A1479
49	不明	I	義文 LR、沈縫	A2927	60	B31	I	沈縫	A3526
50	E37f	I	沈縫	A1786	61	D34	I	義文 LR2、沈縫	A1968
51	B27	I	沈縫	A1527	62	C33	I	義文 RL、沈縫	A1857
52	D36g	I	義文 RL2、沈縫	A1779	63	D31	I	義文 LR、沈縫	A1918
53	C35	I	義文 RL、沈縫	A1861					

第95図 遺物包含層出土土器 (10)



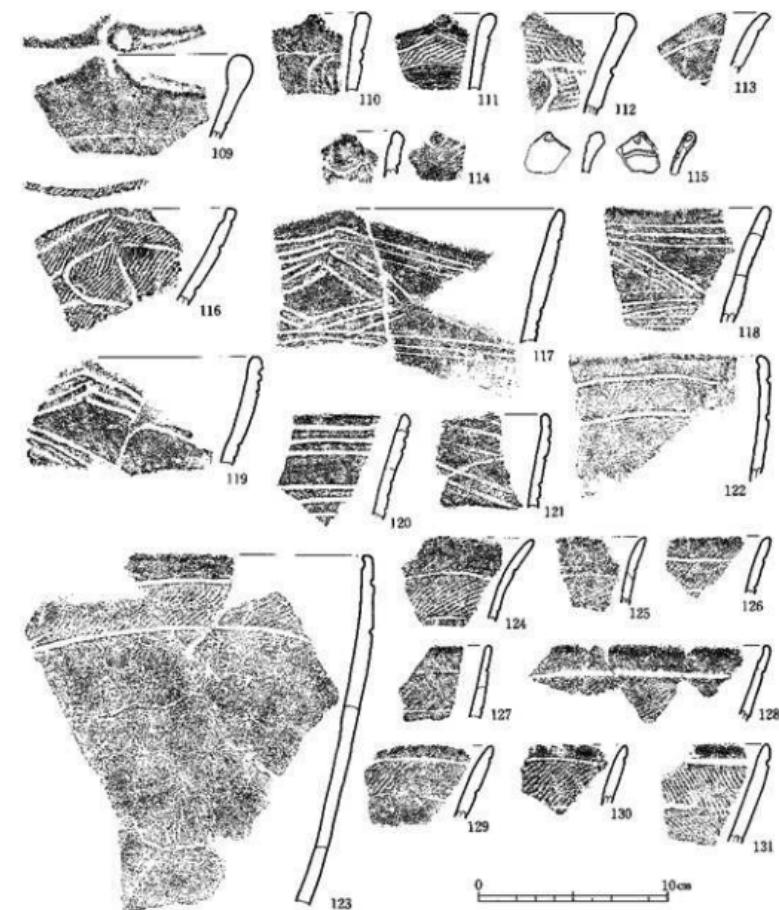
番号	地 区	分類	文様の特徴	登録	番号	地 区	分類	文様の特徴	登録
64	C39	1	沈縫	A1826	78	B27	1	沈縫	A1736
66	B29	1	縹文？、沈縫	A1440	79	B37g	2	縹文？、沈縫	A1863
66	B28	1	縹文？、沈縫、網突	A1522	80	D36	2	縹文LR、沈縫	A1952
67	C33	2	縹文？、沈縫	A1977	81	C35	2	沈縫	A1981
68	B31～34	1	縹文LR、沈縫	A1886	82	C33	2	縹文？、沈縫	A17490
69	C31g	1	縹文LR2、沈縫	A1731	83	C-D32	2	縹文RL、沈縫	A1919
70	D34h	2	波状口縫？、縹文RL、沈縫	A308	84	C31	2	縹文LR、沈縫	A1916
71	C32	2	縹文？、沈縫	A692	85	D31	2	縹文RH、沈縫	A1911
72	D33	2	縹文RL、沈縫	A1739	86	D37c	2	縹文LR、沈縫	A1758
73	B28～34	2	縹文RL、沈縫	A1866	87	B28	2	縹文LR、沈縫	A1969
74	D36d	2	縹文LR、沈縫	A1811	88	B28	2	沈縫	A1734
75	D36d	2	縹文LR、沈縫	A1782	89	B28	2	縹文LR2、沈縫	A219
76	D32	2	縹文？、沈縫	A1448	90	C33～35	2	縹文？、沈縫	A1432
77	B29	2	縹文？、沈縫	A1884	91	C39	2	沈縫	A1882

第96図 遺物包含層出土土器(11)



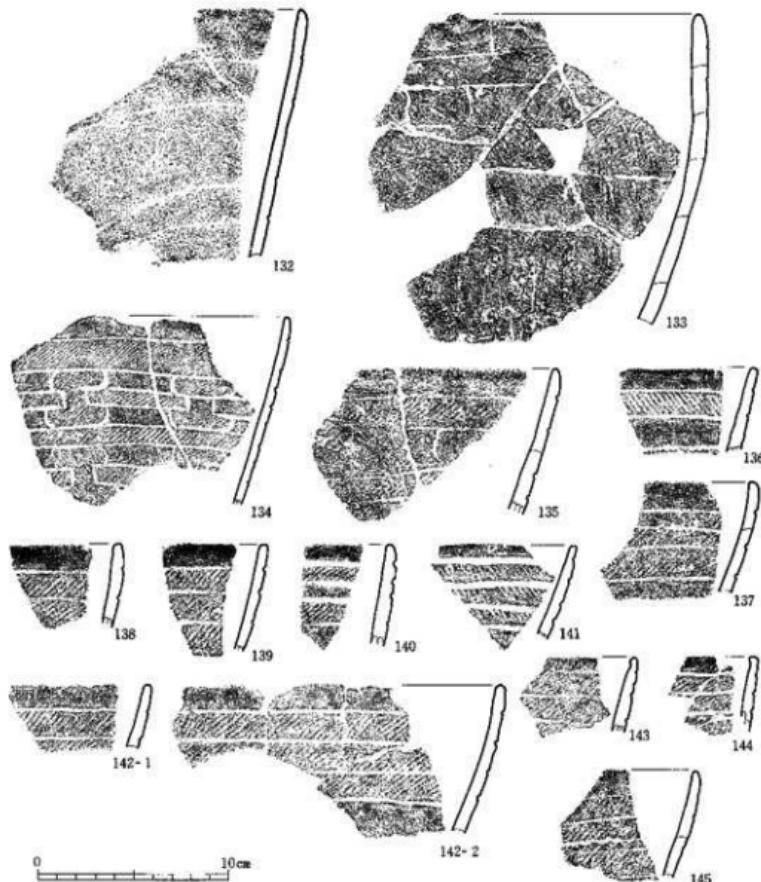
番号	地 区	分類	文 様 の 特 徴	登録	番号	地 区	分類	文 様 の 特 徴	登録
92	B32	5	縫隙・剥片、口縁内側に波	A2258	101	C25	3	波状・突起・沈線	A569
93	C29	5	縫隙・剥片	A534	102	C29	2	波状	A288
94	I31 - 22	5	波状口縁、縫隙・剥片、縄文LR、沈線	A91	103	D - E35	3	波状	A525
95	SI 12	5	(94と同一個体か)	A94	104	F37	3	波状	A506
96	F38	5	突起・縫隙・剥片、縄文LR、沈線	A2275	105	E27・28	3	波状・縄文?、沈線	A546
97	B27	突起	沈線、剥片	A566	106	D31	3	波状	A502
98	F38e	2	波状口縁	A1516	107	F36b	3	波状	A346
99	D - E35	3	縄文?、沈線	A490	108	D31a	3	波状	A549
100	B27	3	波状	A490					

第97図 遺物包含層出土土器 (12)



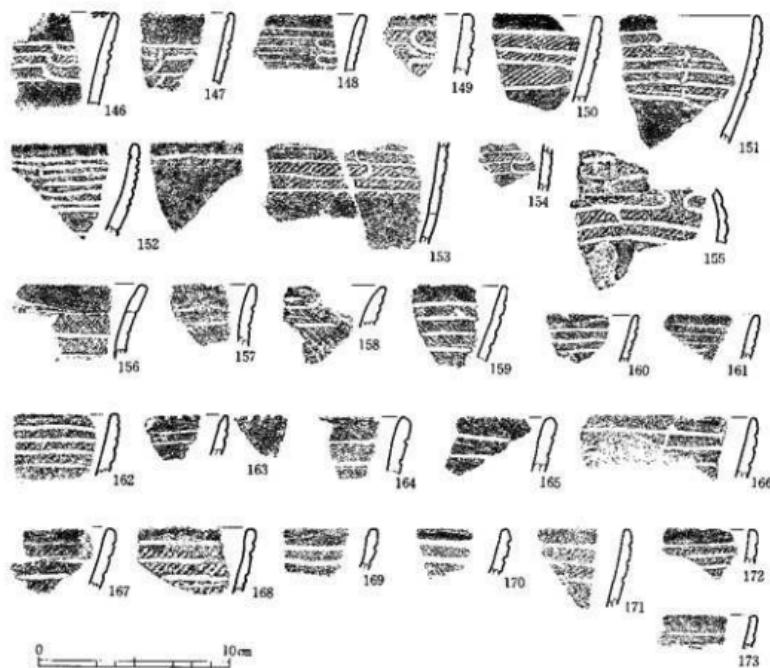
番号	地 区	分類	文 紋 の 特 徴	登録	番号	地 区	分類	文 紋 の 特 徴	登録
109	B29	3?	突起 沈締	A688	121	C31	2	沈締	A526
110	B30b	1	突起 沈締	A563	122	B29	3	網文 LR. 沈締 内面沈締	A2264
111	A・B30	3	波状、底部に熱合性窓 織文LR. 沈締	A1388	123	E25	3	網文LR. 沈締 内面沈締	A173
112	D35	4	突起 織文 LR. 沈締	A290	124	F27b	3	網文 LR. 沈締	A353
113	C40	4	波状 織文 LR. 沈締	A720	125	C33~35	3	波状	A681
114	C30	波状 沈締 内面にも沈締	A572	126	C30	3	網文?、沈締	A289	
115	D34	波状 沈締、網文 内面沈締	A1520	127	B27	3	網文 LR. 沈締	A524	
116	B30	6	波状 1面～外側文 LR. 沈締 内面沈締	A548	128	H25g	3	網文 LR. 沈締	A418
117	F36	2	波状 沈締 (3本単位)	A374	129	C31	3	網文 LR. 沈締	A505
118	E36b	2	波状? 沈締 (3本)	A1543	130	C31	3	網文 LR. 沈締	A480
119	F39	2	波状 沈締 (3本)	A515	131	D28a	3	網文 LR. 沈締	A312
120	F38h	2	沈締 (3本)	A339					

第98図 遺物包含層出土土器 (13)



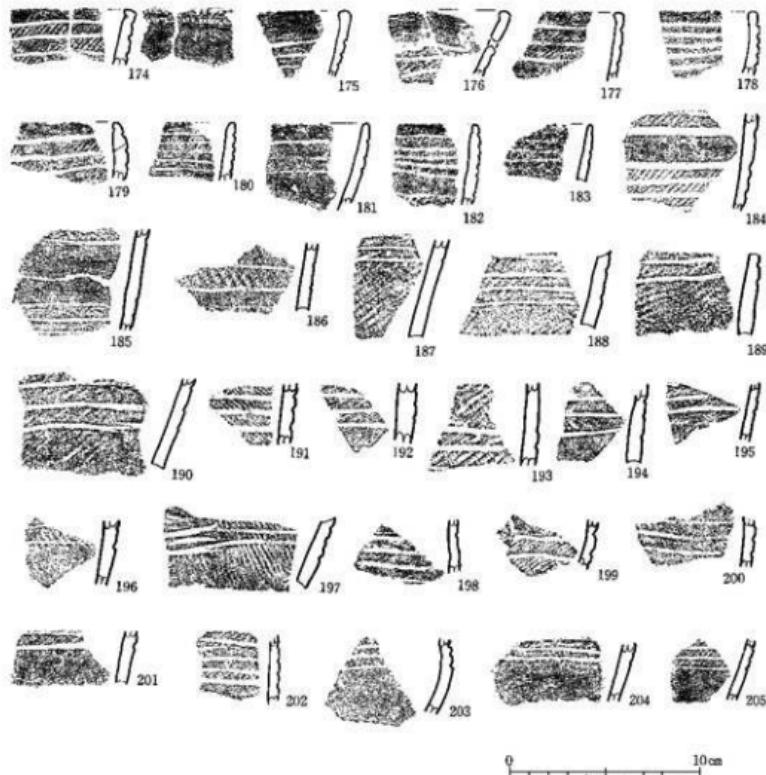
番号	地 区	分類	文 横 の 特 徴	登録	番号	地 区	分類	文 横 の 特 徴	登録
132	E28	3	沈縫	A156	139	E28a	3	縄文 LR、沈縫	A496
133	C33	3	小穴起、沈縫	A143	140	C39	3	縄文 LR、沈縫	A309
134	C31	3	縄文 I.R.、沈縫(横平行+縱蛇行)	A67	141	E26e	3	縄文 RL、沈縫	A343
135	C29f	3	縄文 L、沈縫	A336	142	D25	3	縄文 LR、沈縫	A172
136	D37h	3	縄文 RL、沈縫	A341	143	H27	3	縄文不明、沈縫	A504
137	E28a	3	縄文 I.R.、沈縫	A367	144	C29	3	縄文 I.R.、沈縫	A506
138	E26	3	縄文 LR、沈縫	A513	145	E25a	3	縄文 RL、沈縫	A349

第99図 遺物包含層出土土器 (14)



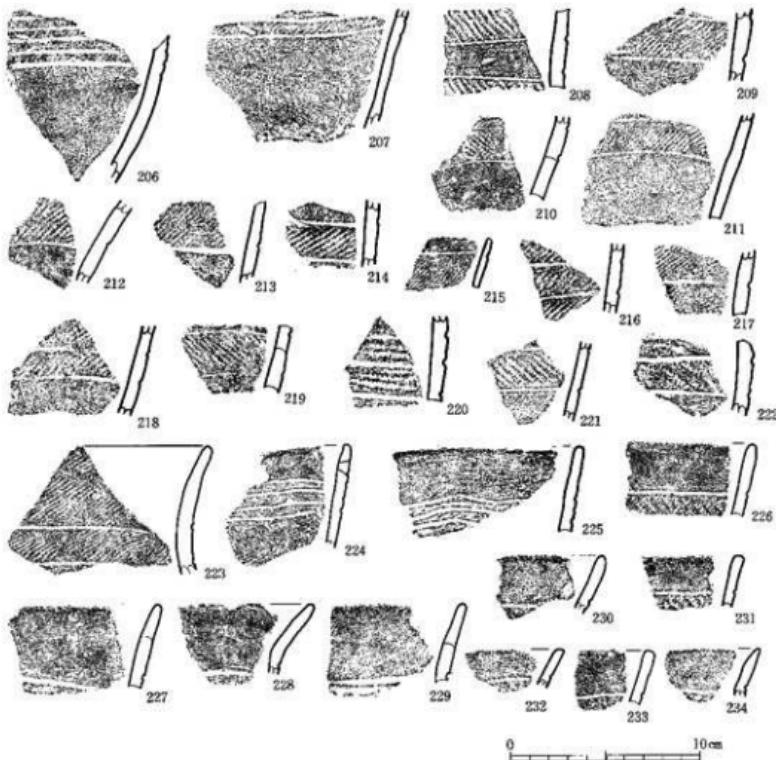
番号	地区	分類	文様の特徴	登録	番号	地区	分類	文様の特徴	登録
146	E27c	3	縦文 LR、横折れ波線、口縁内面に凹み	A344	150	B31+32	3	縦文 RL、波線	A529
147	D+E5	3	縦文不明、沈縫(横平行・斜向斜)	A352	161	D+E5	3	沈縫	A537
148	C28	3	沈縫(横平行)、端部膨大	A515	162	B33	3	縦文 LR、沈縫	A311
149	C-123-36	3	縦文 LR、沈縫(横平行、端部膨大?)	A351	163	C33-35	3	沈縫、口縁内面に凹み	A958
150	A26	3	縦文 LR、沈縫(横平行、端部膨大?)	A499	164	H28	3	縦文 RL、沈縫	A528
151	B39	3	縦文 LR、沈縫(横平行→深窓状変形)	A394	165	D+E5	3	沈縫	A1230
152	C11	3	沈縫(横平行、端部膨大) 内底沈縫	A498	166	C29	3	沈縫、植物紋	A500
153	D34	3	縦文 LR、沈縫(横平行→深窓状変形)	A1840	167	C38	3	縦文 LR、沈縫	A349
154	D96	3	縦文 LR、沈縫(横平行→深窓状変形)	A1620	168	C32c	3	縦文 LR、沈縫	A309
155	C31	3	縦文 LR、沈縫(横平行→深窓状変形)	A1913	169	不明	3	沈縫	A1310
156	B27	3	縦文 LR、沈縫	A544	170	B27+28	3	縦文 RL、沈縫	A535
157	B27	3	沈縫	A536	171	C30a	3	縦文不明、沈縫	A519
158	B26e	3	縦文 RL、沈縫	A256	172	D29a	3	縦文 LR、沈縫	A516
159	E16c	3	縦文 RL、沈縫	A345	173	C29	3	沈縫	A538

第100図 遺物包含層出土土器 (15)



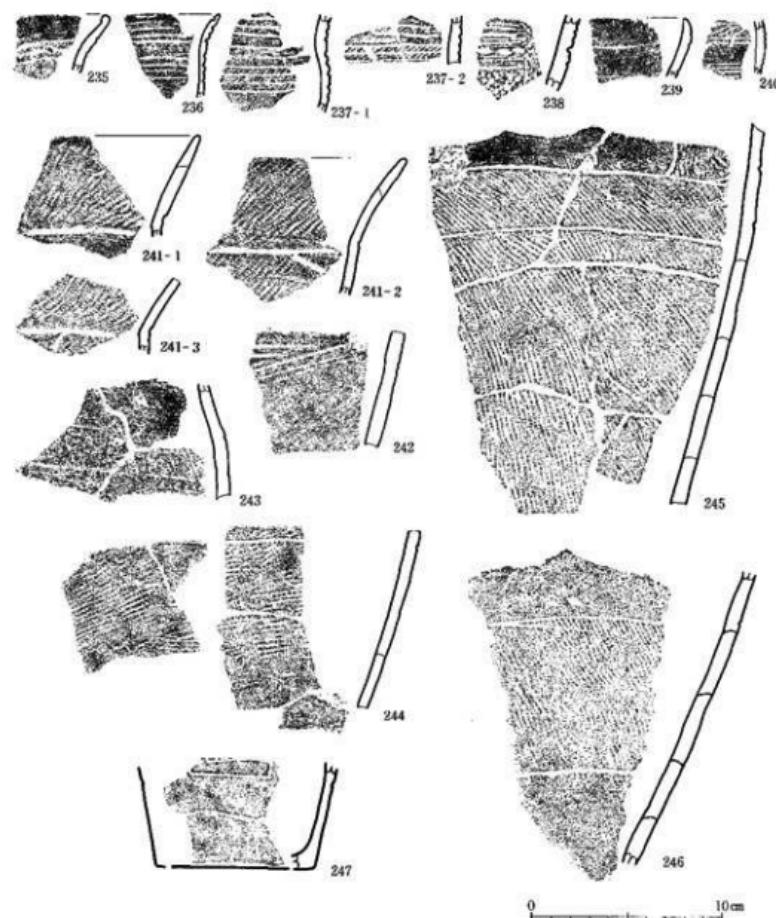
番号	地 区	分類	文 様 の 特徴	登録	番号	地 区	分類	文 様 の 特徴	登録
174	D35-36	3	縄文 LR、沈縫、I型内所に刻み・斜実	A510	180	不明	3	縄文不明、沈縫	A1828
175	I47-78	3	縄文不明、沈縫	A517	191	E26c	3	縄文 LR、沈縫	A1771
176	B29c	3	縄文 I.R.、沈縫、堆積孔	A543	192	E28	3	縄文 LR、沈縫	A1940
177	不明	3	縄文不明、沈縫	A1207	193	F28d	3	縄文 LR、沈縫	A1763
178	C29	3	縄文?、沈縫	A518	194	E27g	3	縄文 RL、沈縫	A1764
179	C29	3	縄文 I.R.、沈縫	A514	195	E27f	3	縄文?、沈縫	A1795
180	B27	3	沈縫	A527	196	C30	3	縄文 NL、沈縫	A1866
181	B35	3	沈縫	A512	197	B33	3	縄文 RL、沈縫	A1825
182	C29	3	沈縫	A522	198	B30	3	沈縫	A1754
183	D36	3	沈縫	A1227	199	E28	3	縄文 LR、沈縫	A1917
184	C34b	3	縄文 RL、沈縫	A1831	200	B28d	3	沈縫	A1926
185	D33	3	縄文 RL、沈縫	A1844	201	D34c	3	縄文 NL	A1833
186	C29	3	縄文 RL、沈縫	A1845	202	小明	3	縄文 LR、沈縫	A2025
187	C35i	3	縄文 LR、沈縫	A1753	203	C30a	3	沈縫	A1665
188	C30h	3	縄文 LR?、沈縫	A1912	204	C33	3	沈縫	A1517
189	C33	3	縄文 I.R.、沈縫	A1767	205	E28b	3	縄文 LR、沈縫	A1807

第101図 遺物包含層出土土器 (16)



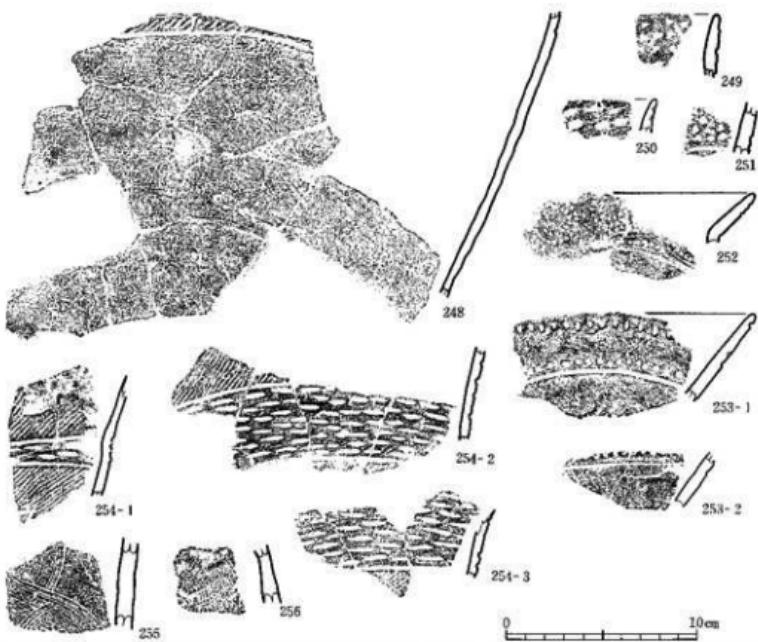
番号	地区	分類	文様の特徴	登録	番号	地区	分類	文様の特徴	登録
206	D35a	3	縞文 LR、沈縫	A1757	221	E35	3	縞文 RL、沈縫	A1973
207	D33	3	縞文 LR、沈縫	A1747	222	E37f	3	縞文 RL、沈縫	A1781
208	D39b	3	縞文 RL、沈縫	A1772	223	I2(化東)	3	縞文 LR、沈縫	A1244
209	C28	3	縞文 LR、沈縫	A1921	224	D35c	3	波状口縁?、沈縫、漸形化	A342
210	E36	3	縞文 RL、沈縫	A1948	225	B29	3	縞文 LR、沈縫	A443
211	C36f	3	縞文 LR、沈縫	A1756	226	E23	3	縞文 RL、沈縫	A679
212	B29	3	縞文 LR、沈縫	A1921	227	C39	3?	沈縫	A707
213	D24	3	縞文 LR、沈縫	A1982	228	F37	3?	沈縫	A1362
214	E37b	3	縞文 LR、沈縫	A1784	229	D33	3?	沈縫	A704
215	C31	3	縞文 LR、沈縫	A1916	230	E28	3?	沈縫	A726
216	K35d	3	縞文 I.R.、沈縫	A1778	231	E22	3?	縞文 RL、沈縫	A711
217	E36a	3	縞文 LR、沈縫	A1765	232	C33	3?	沈縫	A696
218	C36	3	縞文 RL、沈縫	A1953	233	小羽	3?	沈縫	A738
219	C30a	3	縞文 RL、沈縫	A1925	234	D29	3?	沈縫	A686
220	D37f	3	縞文 LR、沈縫	A1776					

第102図 遺物包含層出土土器 (17)



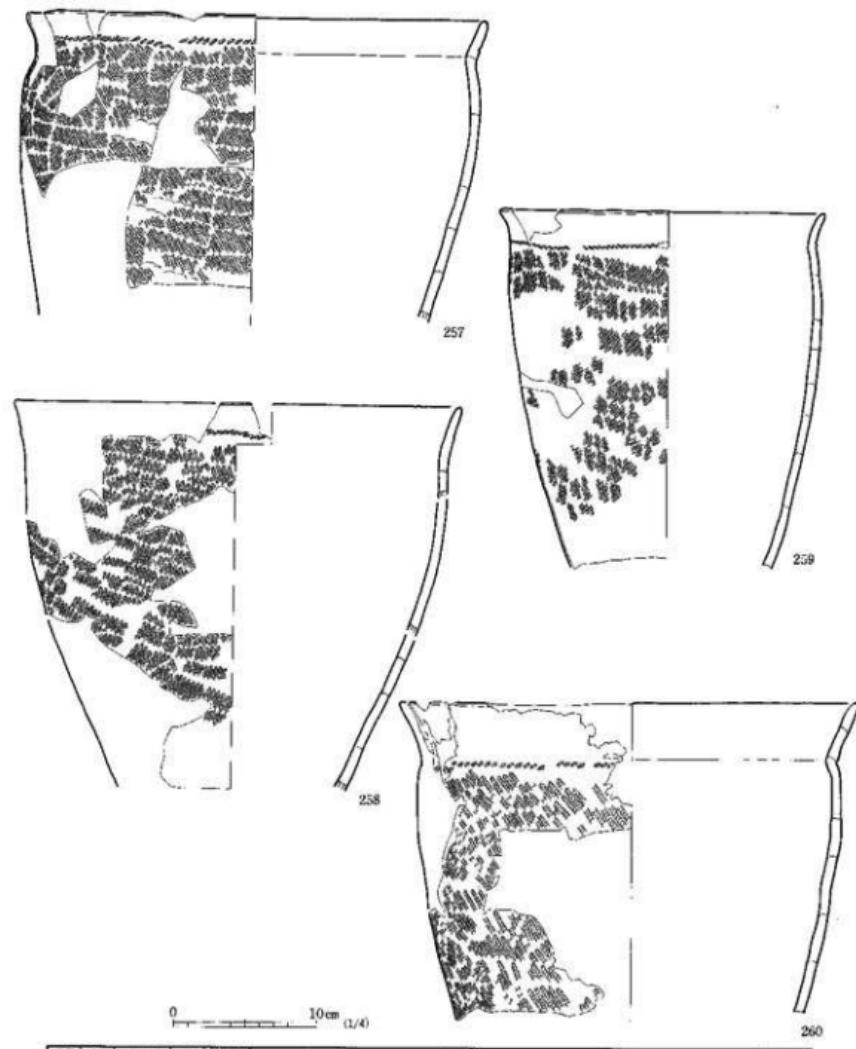
番号	地 区	分類	文 様 の 特 徴	登録	番号	地 区	分類	文 様 の 特 徴	登録
235	不明	3	縄文 LR、沈線	A1314	242	E36g	2	縄文?、沈線	A1760
236	C30	3	沈線、口縁内に沈線	A487	243	A26	3	縄文 RL?、沈線	A1422
237	C29d	3	縄文 LR、沈線	A220	244	D37	3	縄文 LR、沈線	A1854
238	C37	3	縄文 LR、沈線、側突	A1956	245	C34	3	縄文 RL、沈線	A168
239	F37	3	縄文 RL、沈線	A523	246	E35	3	縄文 RL、沈線	A1781
240	E35a	3	沈線	A1665	247	D28	2?	沈線、底径 8.4 cm	A2273
241	D36g	4	縄文 LR、沈線	A417					

第103図 遺物包含層出土土器 (18)



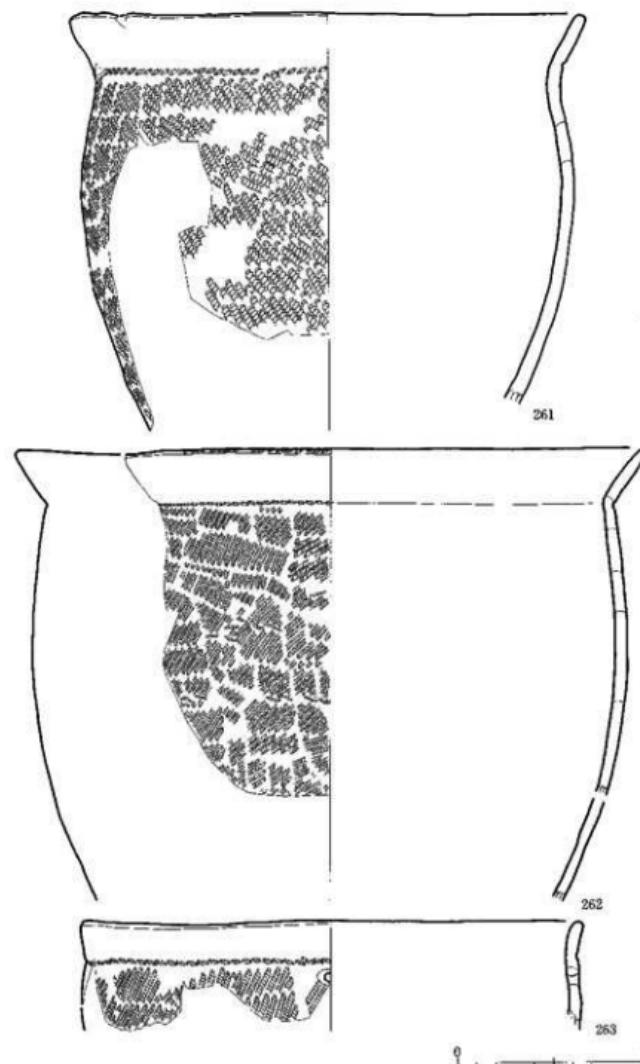
番号	地 区	分類	文様の特徴	登録	番号	地 区	分類	文様の特徴	登録
248	E35	3	縞文 LR、沈線(端部弧状)	A101	253	B38	6	縞文 LR、刺突、沈線	A547
249	B28	6	刺突	A1867	254	D36	6	縞文 LR、刺突、沈線	A217
250	C31	6	刺突	A556	255	B33	7	縞文	A1756
251	D32	6	刺突、沈線	A1843	256	B28a	7	縞文	A1457
252	B29	6	刺突	A221					

第104図 遺物包含層出土土器 (19)



番号	地区	分類	口径	残存率	文様の特徴	登錄
257	E34	縄繩 AII	32.5	4/5	撚糸 RL 壓痕、施文 RL、末端結束	A18
258	E37	縄繩 AII	31.6	1/3	撚糸 RL 壓痕、施文 RL (0段半条)	A106
259	B29	縄繩 AII	22.9	2/3	撚糸 LR 开底、施文 LR	A20
260	B29	縄繩 AII	32.4	2/3	撚糸 RL 壓痕、施文 RL	A115

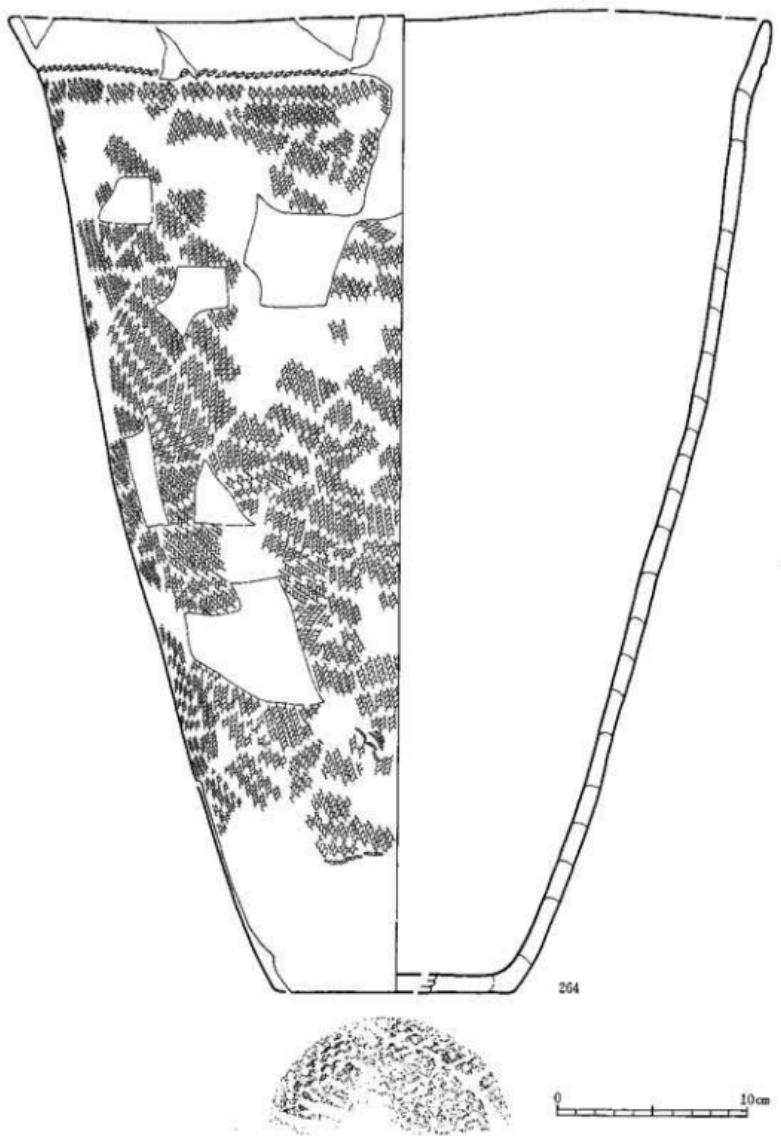
第105図 遺物包含層出土土器 (20)



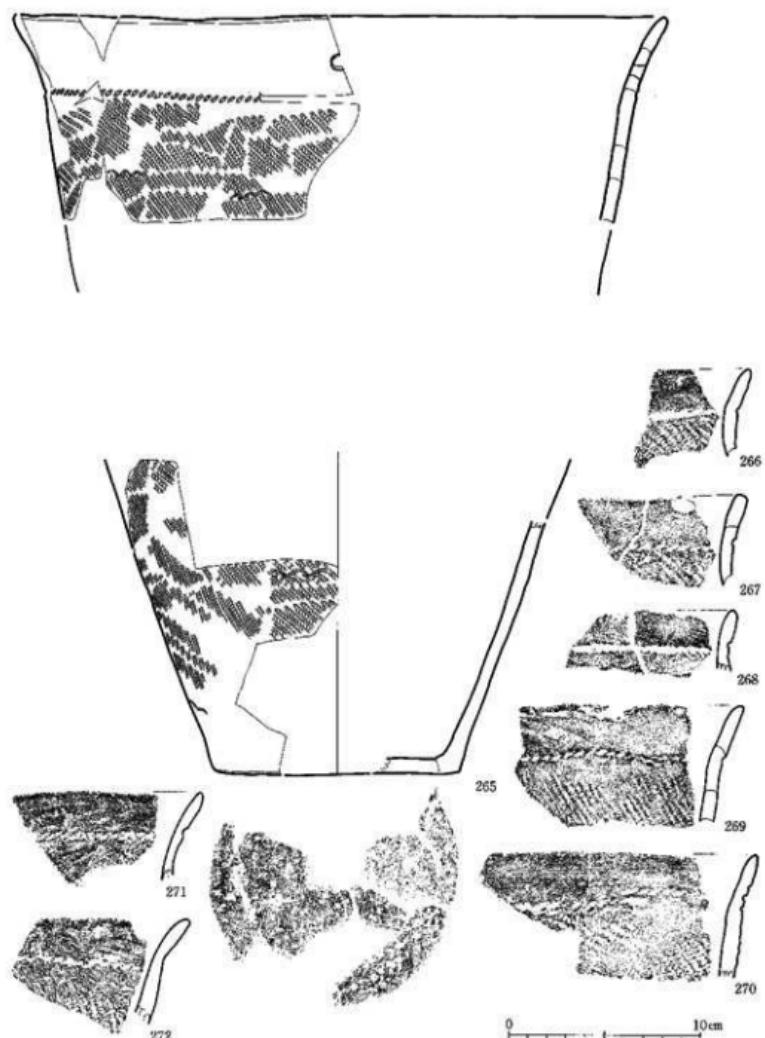
番号	地区	分類	口径	残存率	文様の特徴		器種
					直径	縦横	
261	C32	漆器 AII	27.2	1/2	網目 RL、直線、圓文 RL		A43
262	D36	漆器 AII	33.4	1/5	網目 LR、直線、圓文 LR（0段多条）、末端結束、口縁部網文 LR		A49
263	D55	漆器 II	25.4	1/4	網目 LR、直線、圓文 LR、補修孔		A189

第106図 遺物包含層出土土器 (21)

2 縄文時代の遺構と遺物



第107図 遺物包含層出土土器 (22)



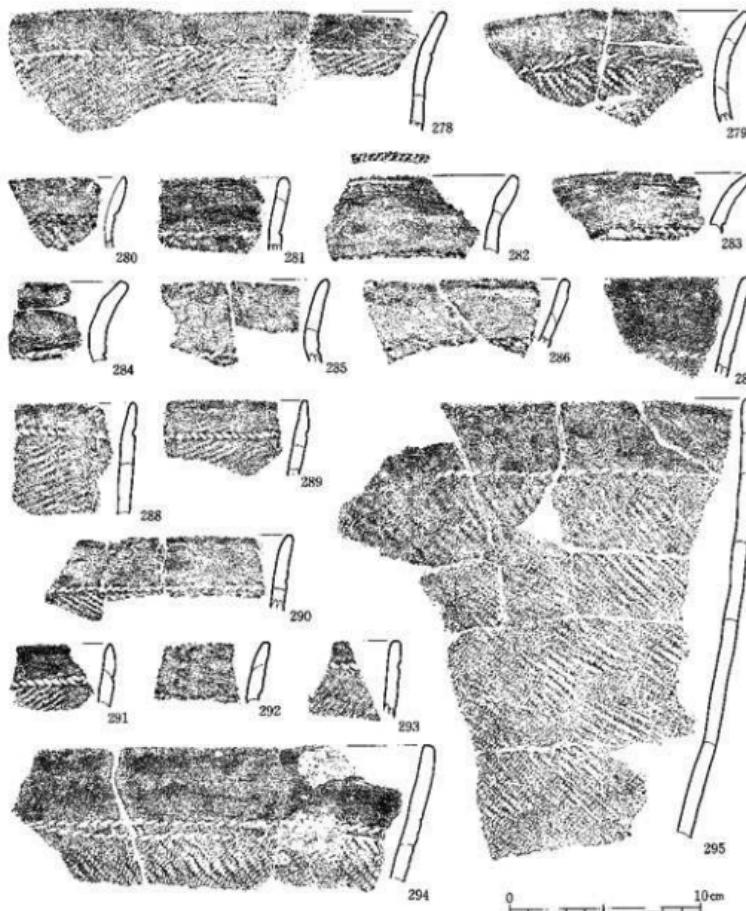
番号	地 区	分類	門種	式別	割合	既存率	文様の特徴			量級
							文様の特徴	置換	番号	
264 B29	御陵 D10	49.8	12.8	53.0	約1	既存 RL 追痕、縞文 RL、米輪結束 L、高尾織て模 A			A65	
265 C31	御陵 D10	34.6	12.8	1/4	既存 RL 追痕、縞文 RL、米輪結束、備前孔				A39	
266 C31										
267 C29										
268 F35g										
269 C33										

第108図 遺物包含層出土土器 (23)



番号	地区	分	類	1/2			柱高	残存率	文様の特徴			登録
				横幅	厚さ	幅			横幅	厚さ	幅	
273	B28	新潟 D10	32.4	11.8	33.7	1/2	筒系 RL上痕、縄文 RL、口唇部に筒文 RL、底部端面底 A					A25
274	D35	10	筒系 RL上痕、縄文 RL、修理孔(未通)	A193	276	C30g	10	筒系 RL上痕、縄文 RL				A401
276	C3c	A10	筒系 LR上痕、縄文 LR、本端軸束	A1421	277	K37e	10	筒系 RL上痕、縄文 RL、ハゲメ縫ナガ				A425

第109図 遺物包含層出土土器 (24)



番号	地 区	分類	文 種 の 特 徴	登録	番号	地 区	分類	文 種 の 特 徴	登録
278	B30	10	磨合 RL 凸直、圓文 LR	A214	287	D32	10	磨合 RL 凸直、圓文 RL	A963
279	I33	10	磨合 RL 凸直、圓文 RL	A700	288	H27	10	磨合 RL 凸直、圓文 LR	A717
280	D65	10	磨合 RL 凸直、圓文 RL	A719	289	D34	10	磨合 RL 凸直、圓文 LR	A718
281	C35c	10	磨合 RL 凸直、圓文 RL	A407	290	C28	10	磨合 RL 凸直、圓文 RL	A713
282	F39f	10	磨合 LR 正直、圓文 LR、I 型部圓文 LR	A403	291	E37e	10	磨合 LR 正直、圓文 LR	A411
283	A23	10	磨合 LR 正直	A710	292	F27e	10	磨合正直	A413
284	D33g	10	磨合 RL 正直	A408	293	不明	10	磨合 RL 正直、圓文 LR	A1398
285	C31	10	磨合 RL 正直	A714	294	C32	10	磨合 RL 正直(二段)、圓文 RL	A180
286	C28	10	磨合 RL 正直	A705	295	C32	10	磨合 RL 正直、圓文 RL	A206

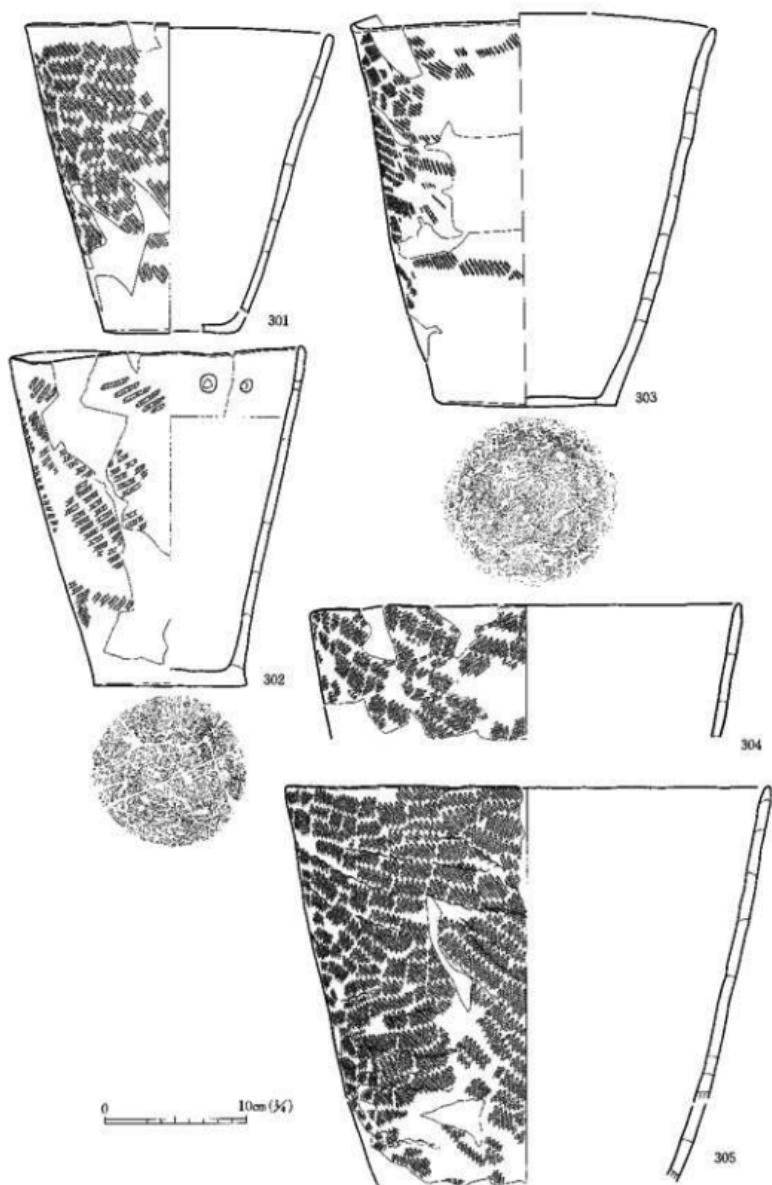
第110図 遺物包含層出土土器 (25)

2. 繩文時代の遺構と遺物

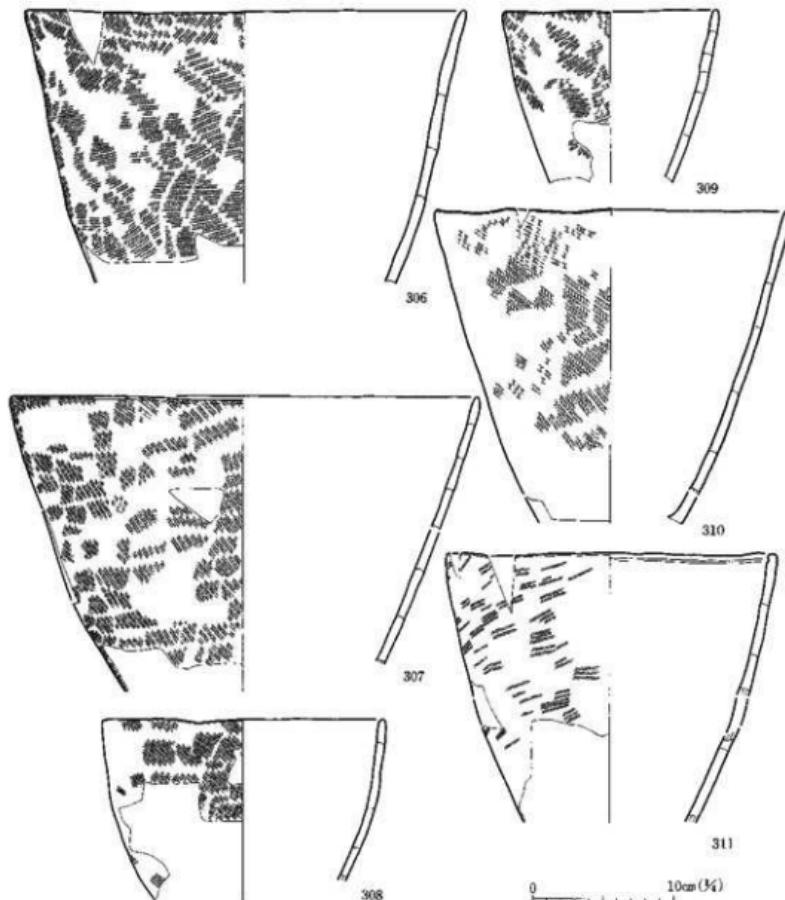


番号	地区	分類	口径	残存	文様の特徴		追跡
					縦	横	
296	D35	縄縫 AII	48.4	1/4	縄文 LR、	口縫部内面に波線	A59
297	C10	縄縫 AII	34.0	1/4	縄文 RL		A210
298	D35	縄縫 AII	27.4	1/3	縄文 LR		A119
299	D35	縄縫 AII	28.3	1/4	波状口縫 (4 単位か?)、	縄文 RL	A95
300	B29	縄縫 DII	19.6	1/3	波状口縫 (4 単位か?)、	縄文 RL	A61

第111図 遺物包含層出土土器 (26)

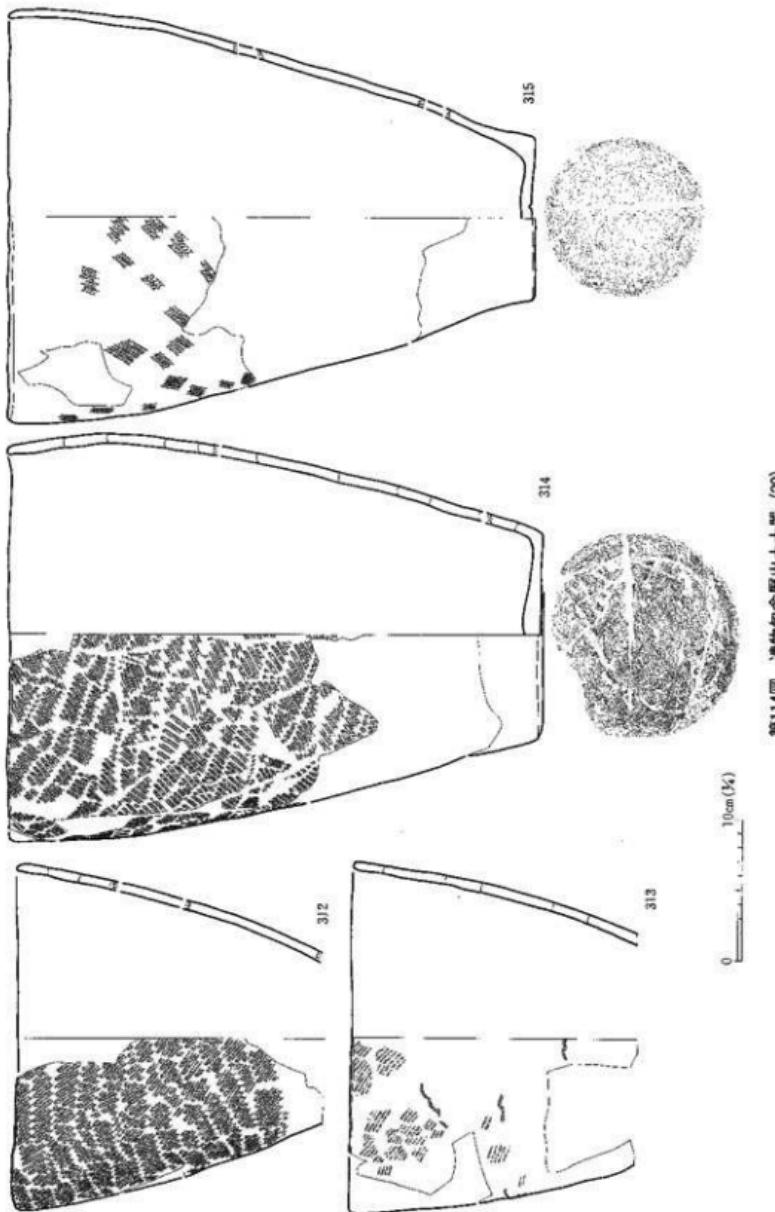


第112図 遺物包含層出土土器 (27)

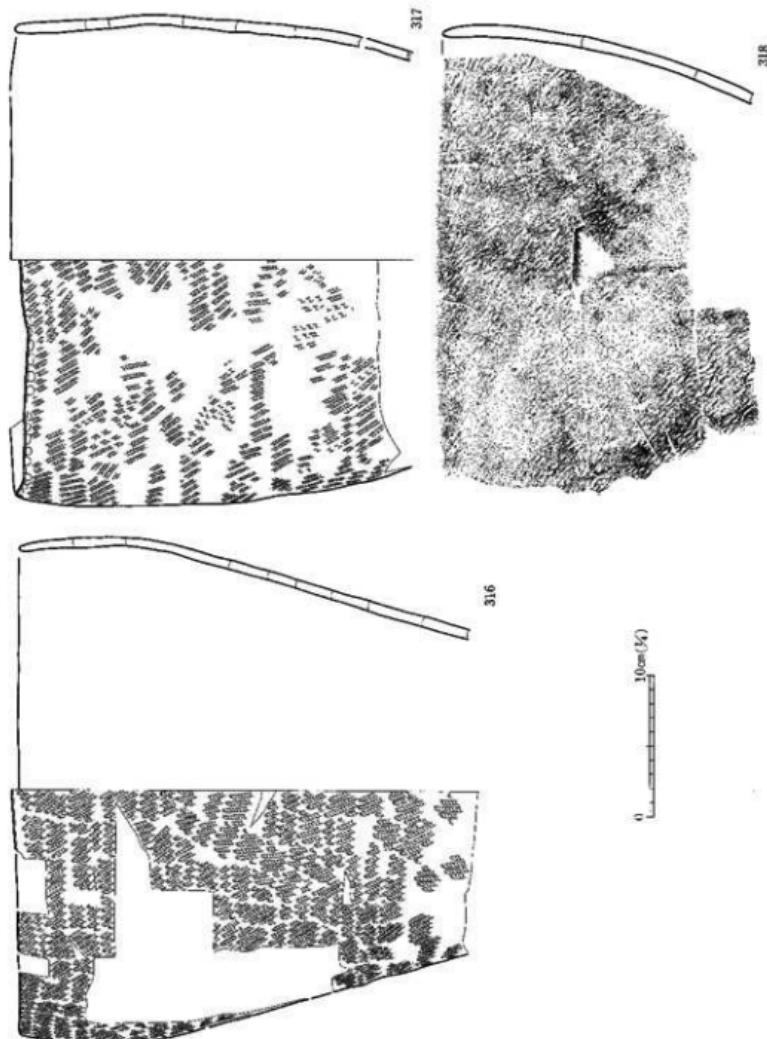


番号	地区	分類	口径	底径	高さ	保存率	文様の特徴	寸法
301	B29	深鉢 C11	21.7	9.6	22.1	3/4	縄文 H1。底部木型痕？	A1
302	B29	深鉢 C11	20.5	8.9	24.2	3/4	縄文 LR。底部木型痕	A11
303	B29	深鉢 C11	25.6	12.7	28.1	3/4	縄文 RL。底部木型痕→ナゲ	A3
304	B29	深鉢 C11	30.3			1/3	縄文 LK	A124
305	F36	斜鉢 C11	34.0			3/3	縄文 RL。木綿納入	A58
306	C29	深鉢 C11	31.0			1/4	縄文 LK	A56
307	B29	深鉢 C11	33.0			1/2	縄文 RL	A31
308	L31	深鉢 E11	20.0			1/4	縄文 RL	A201
309	B27	深鉢 E11	15.2			1/4	縄文 LR	A109
310	C30	深鉢 C11	25.0			1/3	縄文 RL	A28
311	C32	深鉢 E12	23.2			1/3	縄文 R（左巻き）口縁部内面に沈線	A108

第113図 遺物包含層出土土器 (28)



第114図 遺物包含層出土土器 (2)



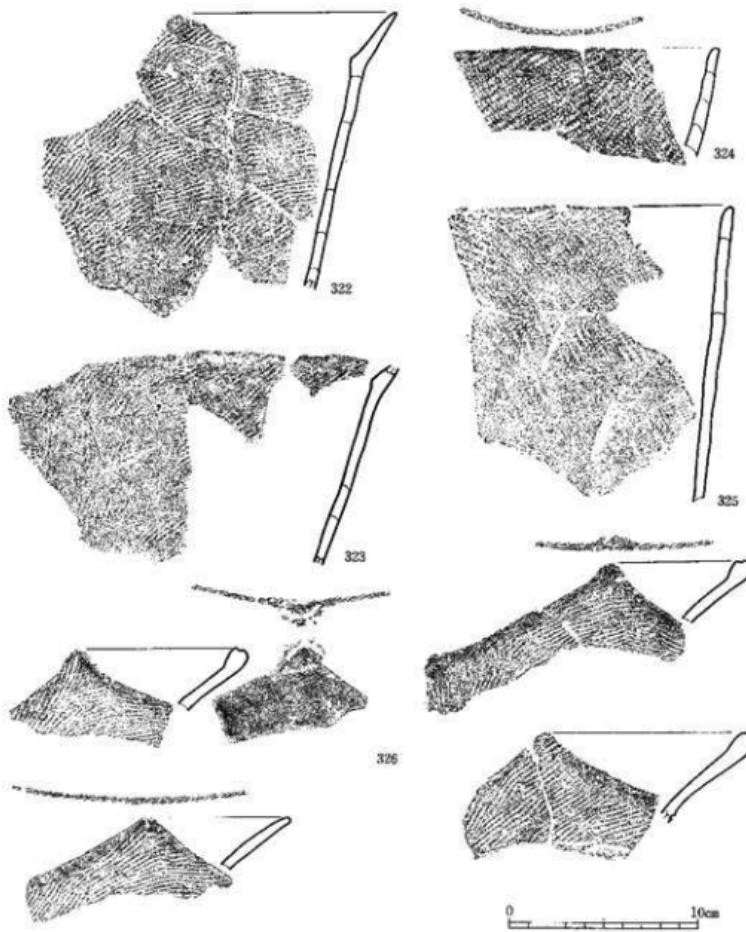
第1115図 遺物包含層出土土器 (30)

番号	地区	分類	口径	底径	器高	残存率	文様の特徴		登録
							小波状1種 (?)、縄文 RL	縄文 R.、米輪粒底	
312	C29	深鉢 E11	24.4			1/3			A117
313	C35	深鉢 E11	25.0			1/4			A44
314	D31	深鉢 F11	27.8	14.4	37.9	3/4	縄文 LR.、底部木製底		A9
315	H27	深鉢 F11	28.5	11.3	37.0	1/3	縄文 LR.、底部木製底		A36
316	B27	深鉢 F11	34.6			1/2	縄文 RL		A64
317	B29	深鉢 F11	33.1			3/4	縄文 RL、口縁部の一部に指痕状の圧痕あり		A13
318	H29	深鉢 E12					縄文 L		A27



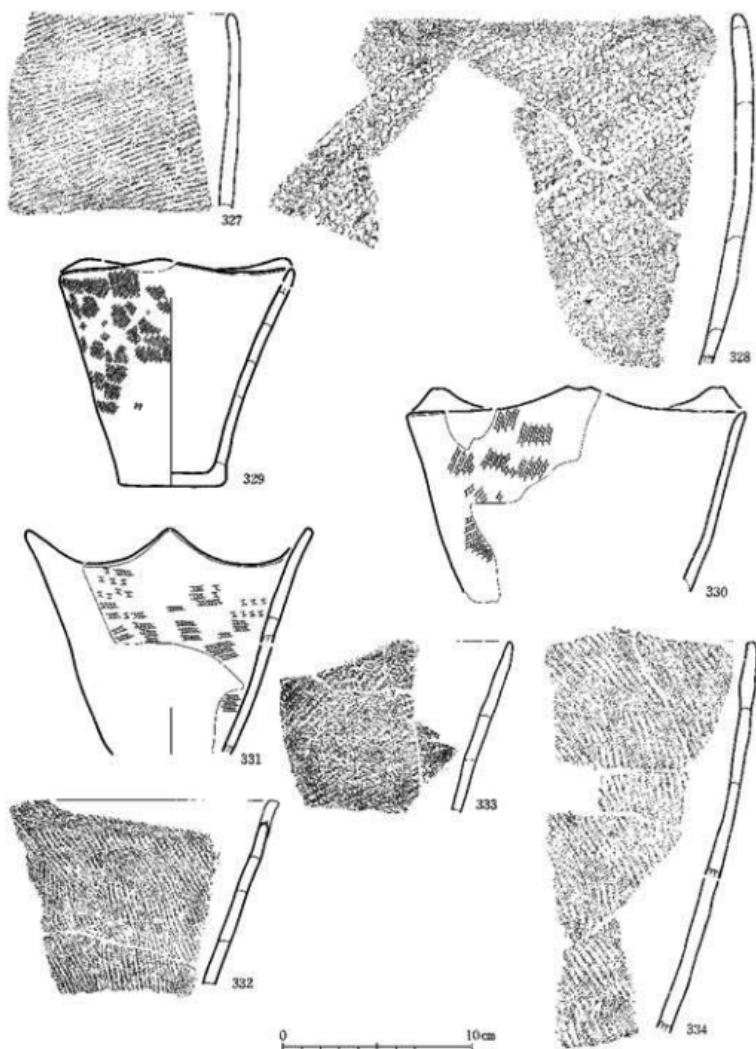
番号	地区	分 級	口径	底径	高さ	残存率	大 様 の 特 徴		写真
							文様	文様	
319	D36	深鉢 E12	26.8	10.0	29.8	1	縦条文 L		A21
320	D35	深鉢 E12	27.5	9.8	30.2	1/2	横条文 I,		A30
321	E26	深鉢 K12	11.2				縦条文 R (底上復元)		A47

第116図 遺物包含層出土土器 (31)



番号	地区	分類	文様の特徴	登録
322	IK3	脚跡 D11	縄文 LR	A147
323	E27	脚跡 D11	縄文 RL	A2270
324	H29	脚跡 H11	口唇部～外圍に縄文 LR	A822
325	不明	脚跡 C11	口唇部に横条 RL 印痕、全体に縄文 RL	A160
326	C35	H11	波状口縁（6年目か？）、口唇部～外圍に縄文 LR、全体に沈鉛、裏面部に沈鉛	A422

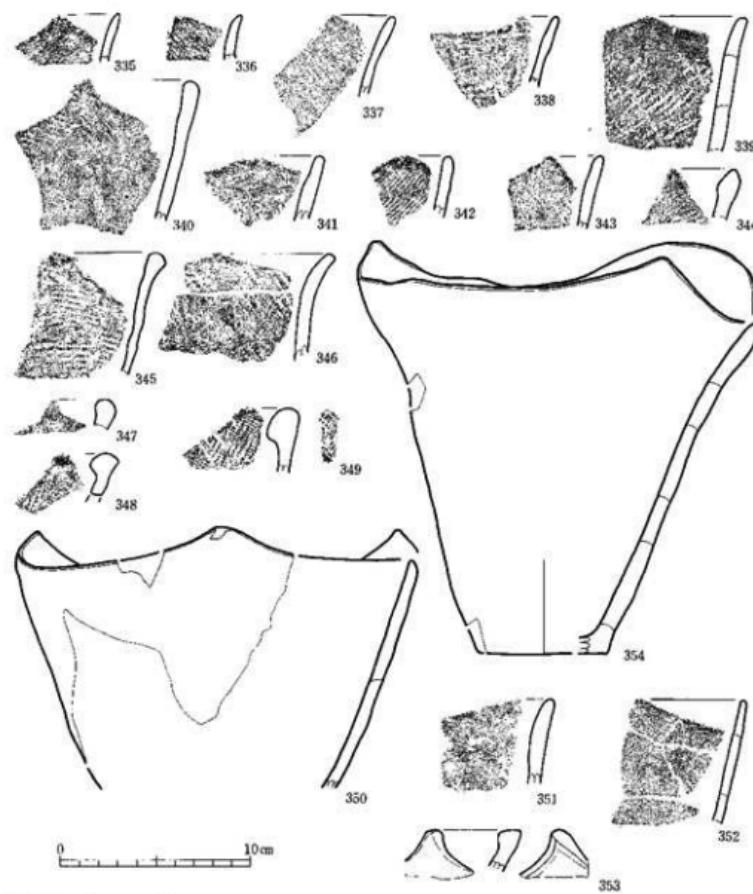
第117図 遺物包含層出土土器 (32)



番号	地 区	分類	文様の特徴		形狀	基号	地 区	分類	文様の特徴		形狀
			文様	特徴					文様	特徴	
327	C35	II	縹文 LR		A311	329	F36c	C11	波状口縁、縹文 RL		A197
328	H35	F11	縸文 LR		A192	333	B27	C11	波状口縁、縸文 LR		A923
329	B27	C11	口幅 17.4cm (1/4), 波状口縁, 縹文 LR		A96	334	C33	E11	波状口縁, 縹文 RL		A208
331	B28	C11	口幅 13.3cm (1/4), 波状口縁, 縹文 RL		A93						
番号	地 区	分類	施 装	都 合	形 狀	基 号	地 区	分類	施 装	都 合	形 狀
329	C31	縸文 C11	12.4	4.5	12.0	約1	波状C1縁 (3単位), 縹文 LR				

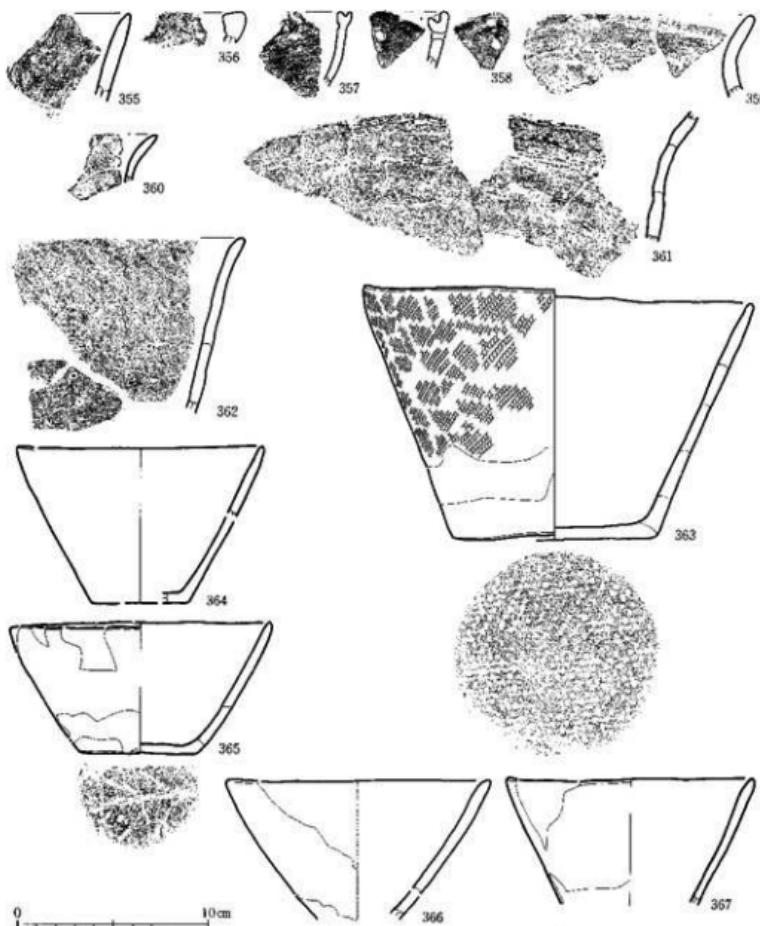
第118図 遺物包含層出土土器 (33)

2 繩文時代の遺構と遺物



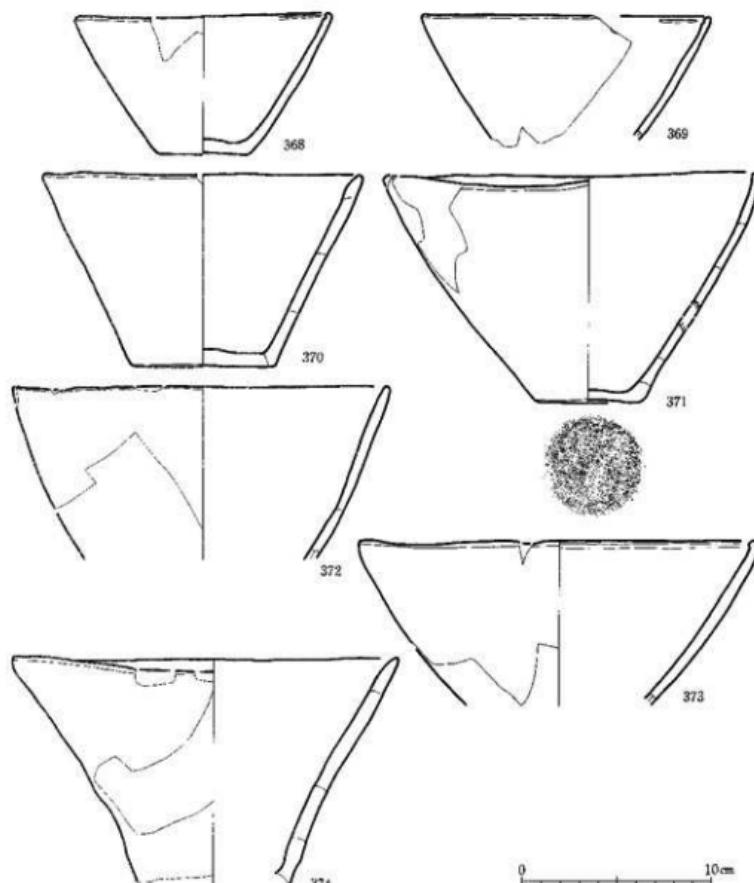
番号	地 区	分類	文 標 の 特 徴		文 標 の 特 徴	分類	地 区	分類	文 標 の 特 徴		分類
			文 標	特 徴					文 標	特 徴	
335	四 7c	II	波状口縁		A567	345	E35g	II	波状口縁、縄文 LR		A449
336	不 明	II	波状口縁、縄文 RL		A479	346	B30	II	波状口縁、縄文 RL		A561
337	B28	II	波状口縁、縄文不明		A579	347	D34	II	波状口縁、縄文不明		A574
338	F36d	II	波状口縁、縄文 LR		A356	348	C15	II	波状口縁、波状部下に孔あり、縄文 LR		A571
339	F36e	II	波状口縁、縄文 LR		A354	349	D25d	II	波状口縁、波状部内扁記印跡あり、縄文 LR		A357
340	B27	II	波状口縁、縄文 RL		A559	350	D35	C13	波状口縁 (3単位)、口径 21.4 cm		A121
341	B29	II	波状口縁		A752	351	B27	II	波状口縁		A349
342	D22	II	波状口縁、縄文 LR		A566	352	H28	C13	波状口縁		A603
343	D23	II	波状口縁		A564	353	C30f	II	波状口縫		A360
344	D20	II	波状口縫、縄文 LR、波状部側面に比較		A573						
通号	地区	分類	I	性	底厚	器高	残存率	文 標 の 特 徴			型
354	C29	圓錐 C13	柱	6.9	22.0	約	波状口縫 (3単位)、歩みやすい、内火焼うけたものか?				A74

第119図 遺物包含層出土土器 (34)



番号	地区	分類	文様の特徴				登録	番号	地区	分類	文様の特徴				登録
			11種	波紋	格子	既存					1	文文 LR	既存側面 A	1	
355	C32	13	波状口縁				A2274	355	D35	13	頭部: 横余 LR 口縁				A100
356	B28	13	波状口縁				A570	360	B27	13					A1535
357	D35	13	波状口縁、波頭部に内面に波紋				A568	361	C31	13					A239
358	C30	13	波状口縁、波頭部に刺突、波頭部下に孔				A569	362	C29	13	縞文 RL				A269
363	C29	鉢	11	20.7	13.0	13.6	1	文文 LR	既存側面 A						A4
364	C31	鉢	13	13.0	5.2	8.3	1/4								A1654
365	D35	鉢	13	13.8	6.2	7.1	2/3	底部木葉痕							A73
366	C32	鉢	13	14.0			1/3								A141
367	C30	鉢	13	13.0			1/3								A88

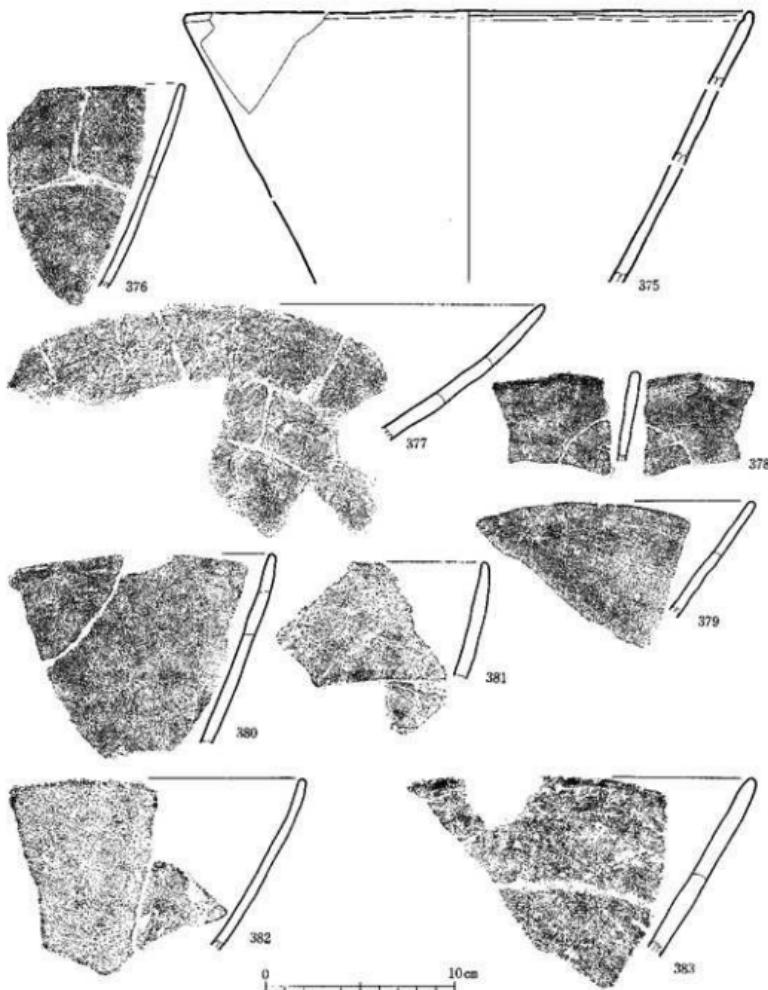
第120図 遺物包含層出土土器 (35)



0 10cm

番号	地区	分類	口径	底径	高さ	保存率	文様の特徴	登録
368	C30	鉢	13	13.5	4.8	7.6	約1/4 口縁部内面に浅い沈線	A17
369	D32	鉢	13	15.3	..	1/4	口縁部内面に沈線、浦修孔	A126
370	C30	鉢	13	16.9	7.6	10.2	1/2 底部：網代模不明・ナゲ消す。	A148
371	C30	鉢	13	19.7	5.7	12.4	3/4 底部：木葉模	A2
372	D36	鉢	13	20.0	A76
373	E29	鉢	13	21.2	..	2/5	口縁部内面が沈線状	A142
374	E29	鉢	13	20.4	(8.0)	1/2	..	A75

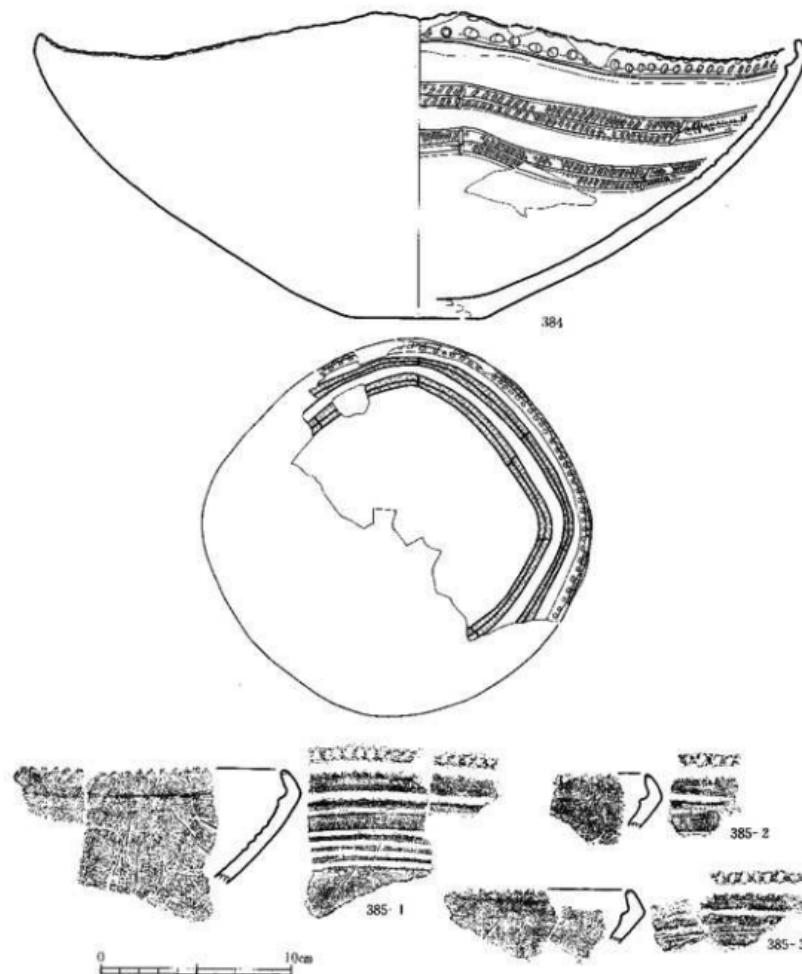
第121図 遺物包含層出土土器 (36)



番号	地区	分類	文様の特徴	登録	番号	地区	分類	文様の特徴	登録
375	D36	鉢 13	口径30.2cm、T縁内面に沈線	A128	380	C34	鉢 13		A188
376	D36	鉢 13		A579	381	B29	鉢 13		A199
377	B29	鉢 13		A196	382	B29	鉢 13		A97
378	D31	鉢 ?13	小突起内面が「ノ」状に凸十凹	A582	383	C35	鉢 13		A576
379	D31	鉢 13		A377					

第122図 遺物包含層出土土器 (37)

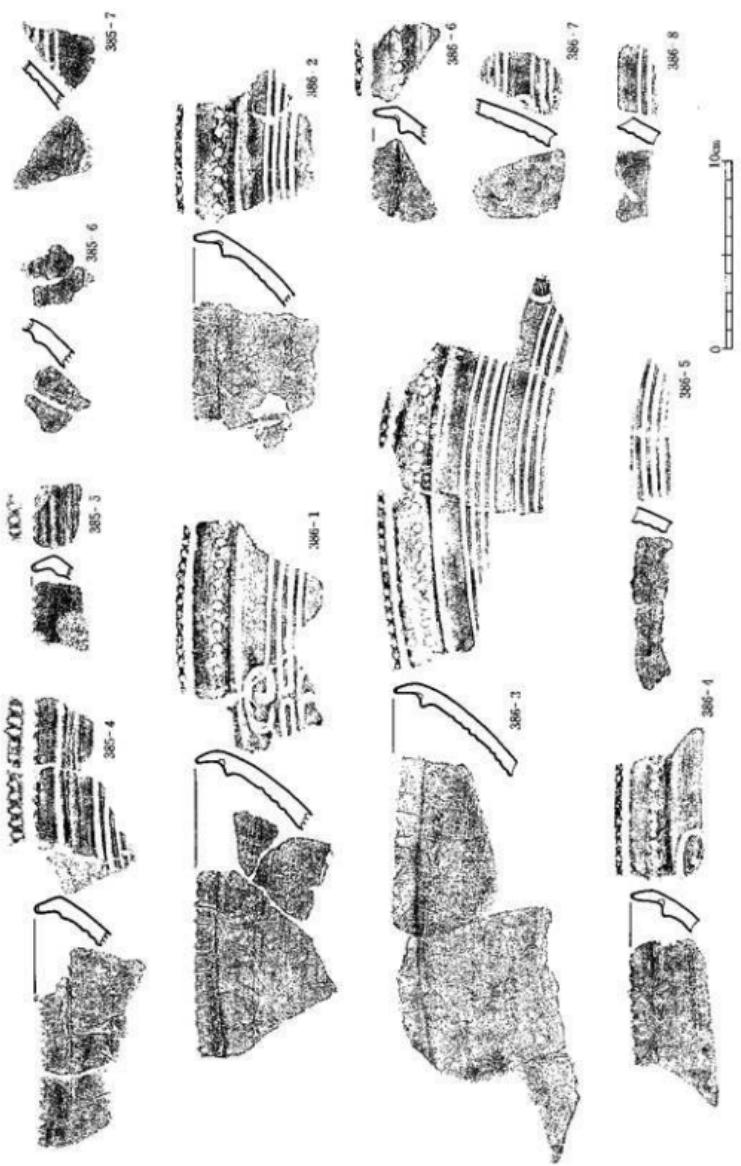
2 縄文時代の遺構と遺物



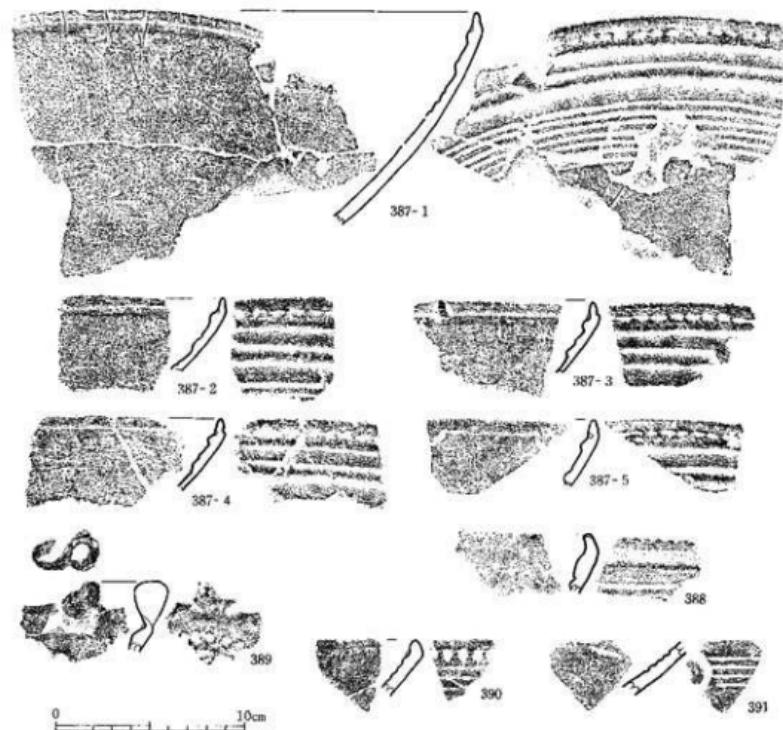
番号	地区	分類	口径	底径	體高	残存	文様の特徴	登録
384	B30	洗鉢	10.6	7.0	16.3	1/3	口唇：刷み 口縁：刺突、角線 体：西文 LR、沈線（横平行→縱延線）	A68
385	C30	洗鉢					口唇：刷み 11縁：龍鱗、体：沈線（4条平行）	A171
386	B29	洗鉢					口唇：刷み 口縁：刺突、垂線 体：平行沈線、逆のJ状沈線・縄文 LR	A98

第123図 遺物包含層出土土器 (38)

V 検出された遺構と遺物

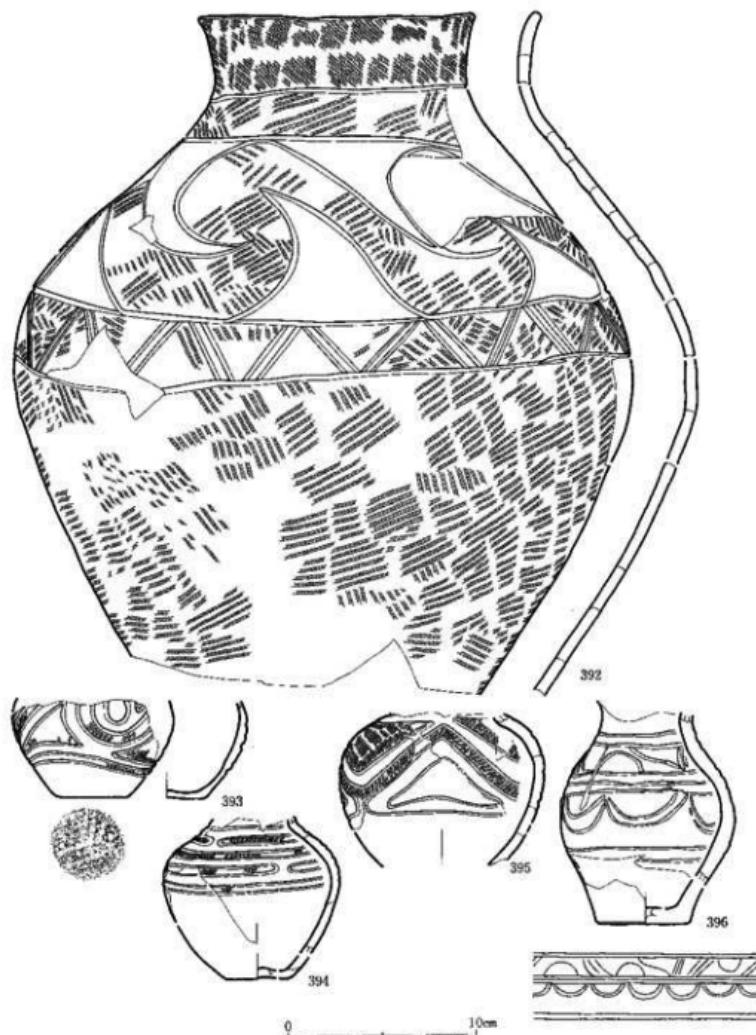


第124図 遺物包含層出土土器 (39)



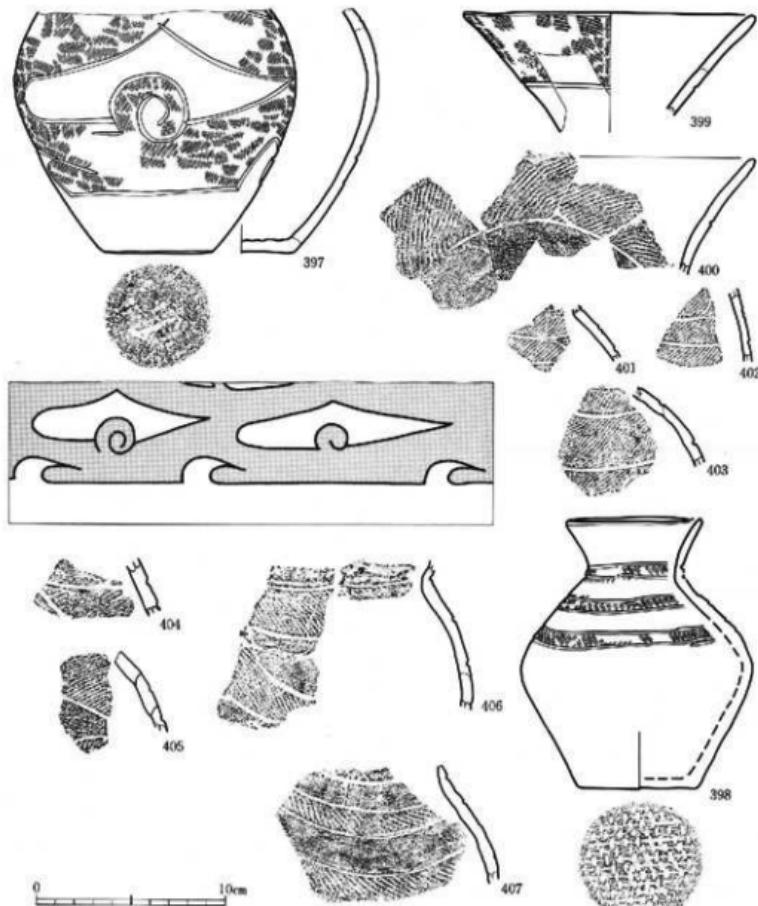
番号	地区	分類	文様の特徴		登録	番号	地区	分類	文様の特徴		登録
			口部: 剣み	口縁: 刺突、斜線+肩み					刺突	斜線	
387	C29	浅鉢			A133	389	C31	浅鉢	刺突、斜線+肩み		A562
388	不明	浅鉢	口部: 剣み	体: 斜線	A2199	390	C35e	浅鉢	刺突、斜線		A2262
						391	F38d	浅鉢	斜線		A2255

第125図 遺物包含層出土土器 (40)



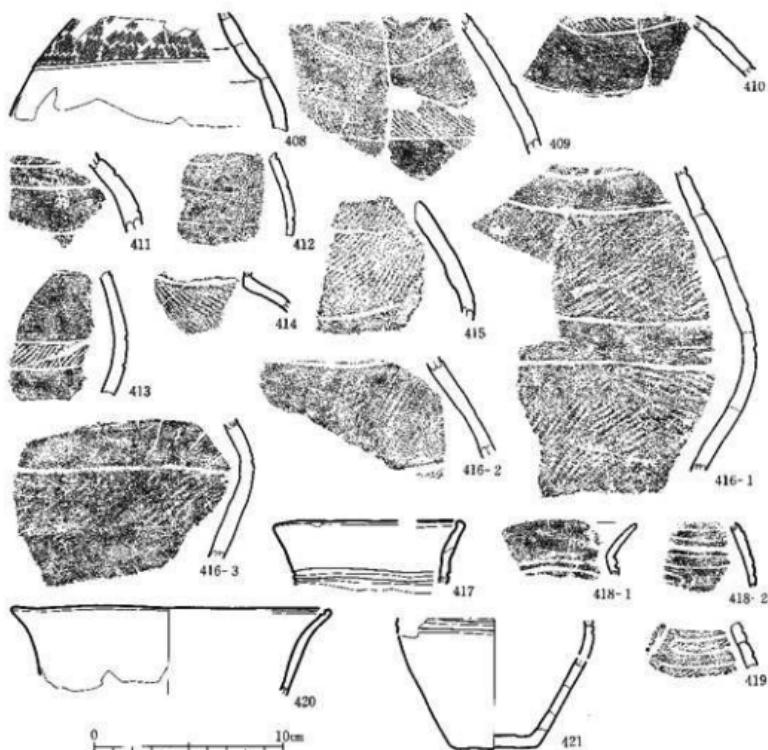
番号	地区	分類	口径	底径	高さ	文様の特徴		登錄
						上部	下部	
392	E29	甕	1	14.8	1/2	圓文 R.L.	圓文以下: 圓文 R. 沈線	A29
393	C30	甕	1	3.8	1	圓文 L.R.	底: 時代痕不明	A69
394	E35	甕	3	3.4	2/3	圓文 L.R.	沈線	A89
395	T32	甕	2			圓文 L.R.	沈線	A72
396	C32	甕	1	4.9	1/2	沈線	底: 時代痕不明	A102

第126図 遺物包含層出土土器 (41)



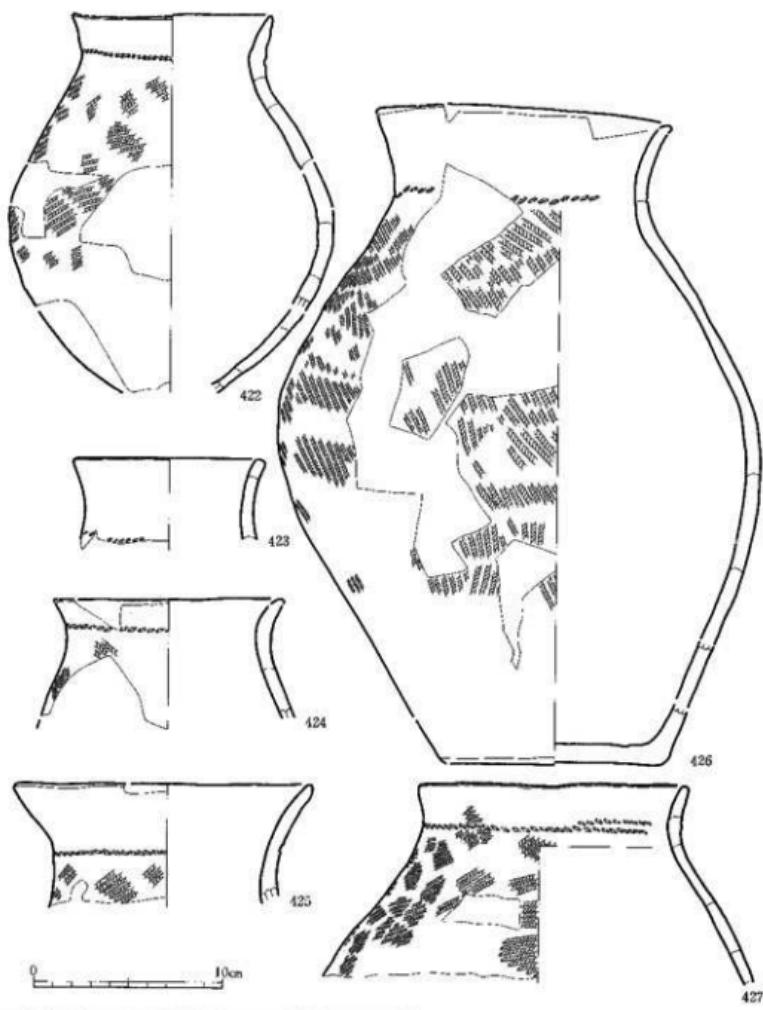
番号	地区	分類	口径	底径	高さ	現在寸	文様の特徴				登録
							文様	基盤	番号	地区	
397	C29	縦 1	5.6		1	I	縄文 LR、沈縫、割れ口なめらか	底：磨代底不明	A12		
398	C29	縦 1	7.2	6.4	14.5	I	縄文 RL、沈縫	底：磨代底 A	A3		
399	B29	直 3					文様の特徴				登録
400	C30	縦 3					A77	404	C31	縦 2	縄文 LR、沈縫
401	不明	縦					A1423	405	E27	縦 2	縄文 LR、沈縫
402	B29f	縦					A2024	406	F37	縦 2	縄文 LR、沈縫
403	B28	直 3					A1459	407	F37	縦 3	縄文 RL、沈縫
							A1396				A1371

第127図 遺物包含層出土土器 (42)



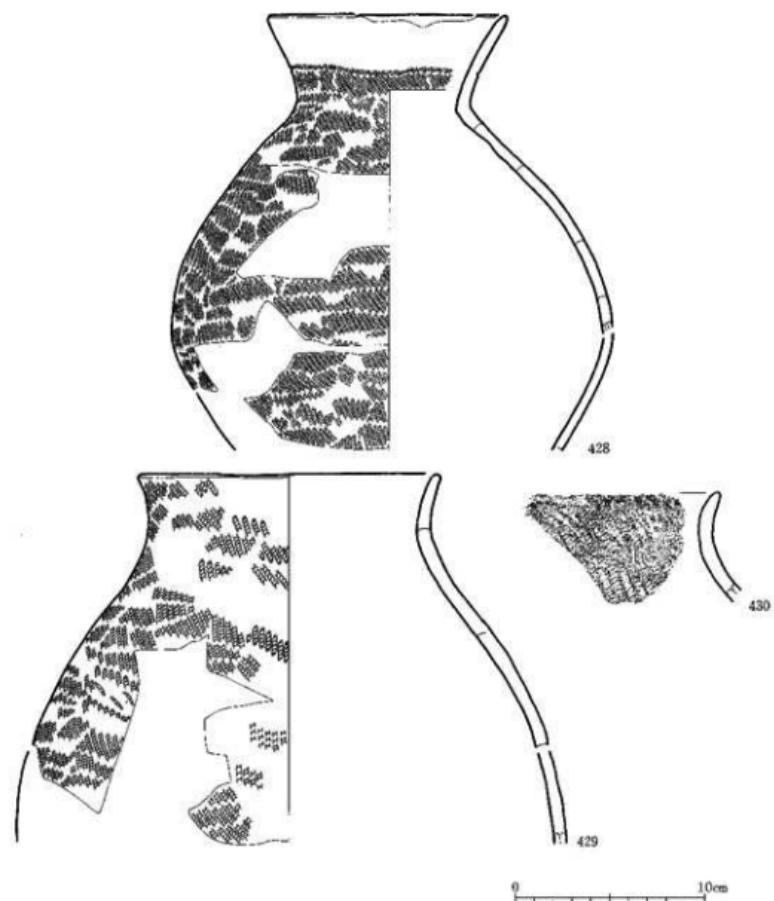
番号	地区	分類	文様の特徴	登錄	番号	地区	分類	文様の特徴	登錄
408	B33	東 3	圓文 LR、沈縫	A104	415	不明	東 3	圓文不明、沈縫	A2119
409	C31	東?	圓文 RL、沈縫	A1367	416	B33	東 3	圓文 LR、沈縫	A2118
410	C31	東	圓文 RL、沈縫	A1478	417	C32	東 3	口徑10.0 cm (3/5)、沈縫	A80
411	C31	東 3	圓文 RL、沈縫	A1431	418	B34	東 3	沈縫	A1367
412	B27	東 3	沈縫	A1392	419	C31	東 3	圓文 LR、沈縫	A1913
413	C32	東 3	圓文 LR、沈縫	A1379	420	B29	東 3	口徑17.0 cm (1/2)、1側内面に沈縫	A81
414	B29b	東	圓文 RL、沈縫	A1385	421	C29	東 3	底径4.5 cm (1)、沈縫	A90

第128図 遺物包含層出土土器 (43)



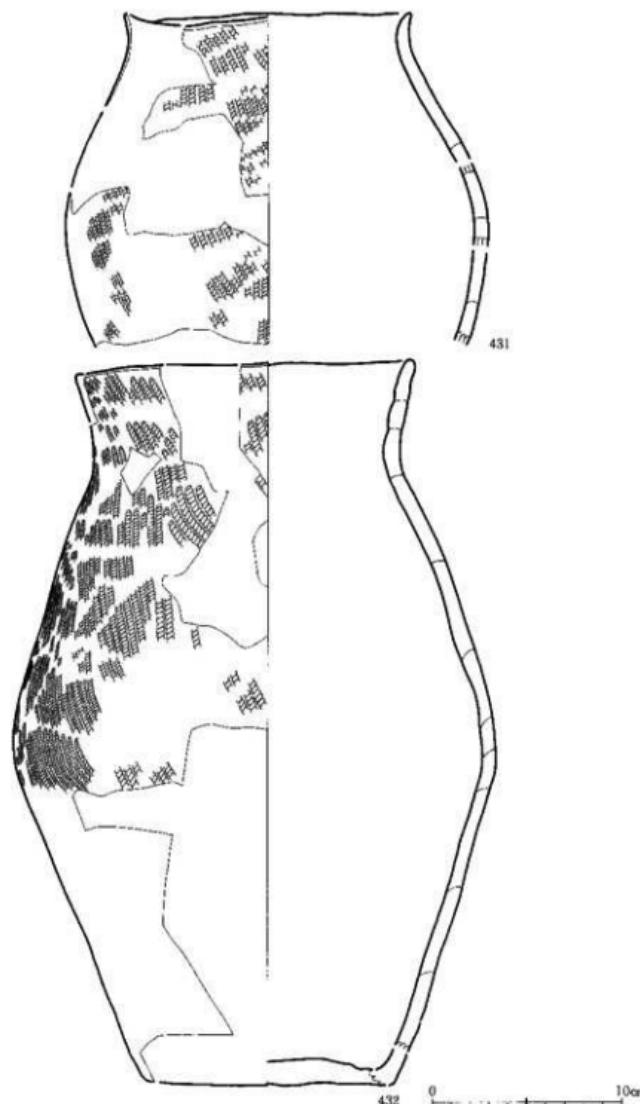
番号	地名	分類	口径	底径	高さ	既存名	文様の特徴		登錄
							頭部	体部	
422	C31	壺10	10.6				1 頭部: 横糸 LR 壱底 体部: 縄文 LR		A37
423	C30	壺10	10.2				1/2 頭部: 横糸 RL I 底 体部: 縄文 RL		A1357
424	D33	壺10	12.2				1/1 頭部: 横糸 RL 壱底 体部: 縄文 RL		A1354
425	C31	壺10	15.9				1/2 頭部: 横糸 LR 壱底 体部: 縄文 LR		A91
426	B28	壺10	15.7	12.0	35.2	1	頭部: 横糸 RL II 底 体部: 縄文 RL		A10
427	B29	壺10	14.3				2/3 頭部: 横糸 LR 壱底 体部: 縄文 LR		A26

第129図 遺物包含層出土器 (44)



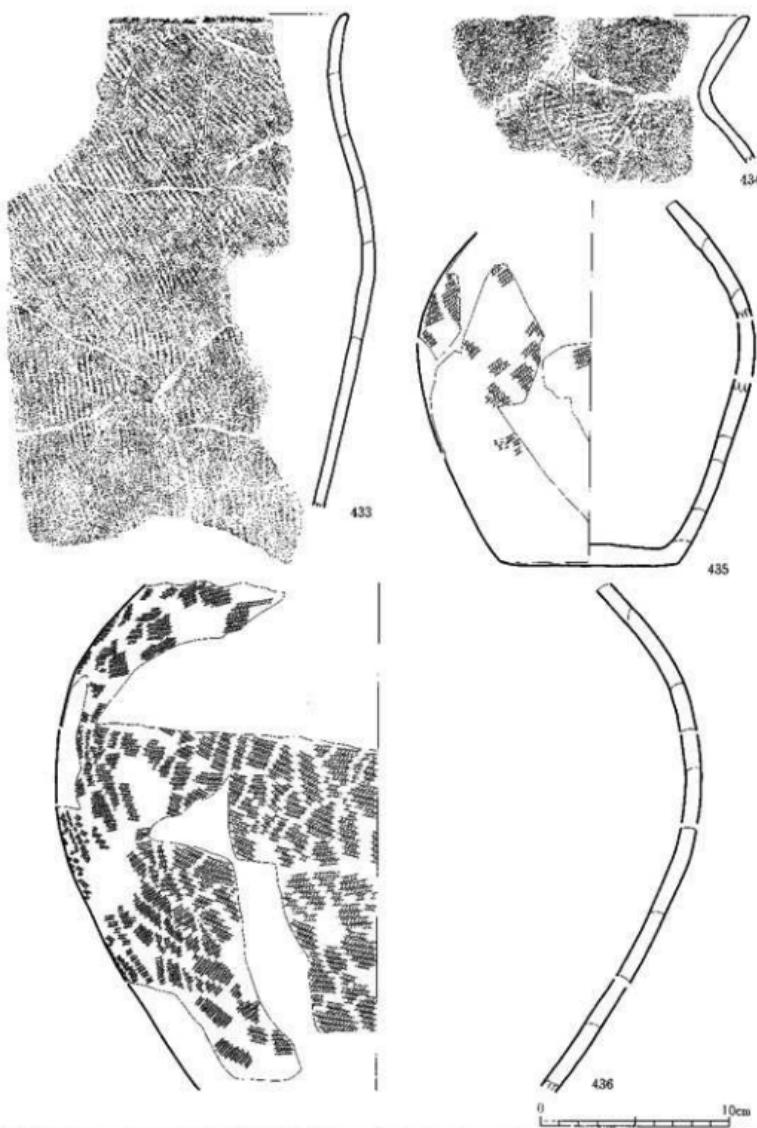
番号	地区	分類	口径	高さ	文様の特徴	登錄
428	E36	壺10	12.5	1	頸部：撚糸 RL、肩部：縦波	A35
429	C39	壺11	13.9	1/2	縦波 RL	A32
430	B27	壺11			縦波 RL	A1360

第130図 遺物包含層出土土器 (45)



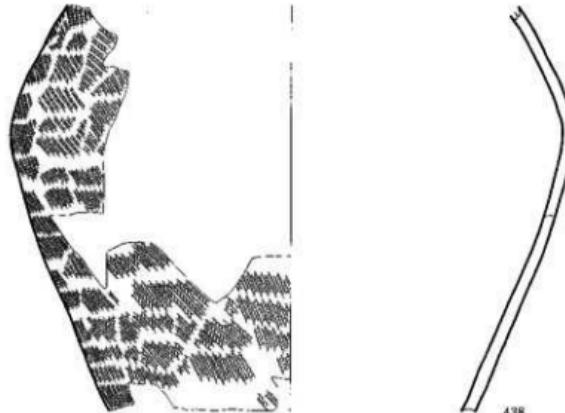
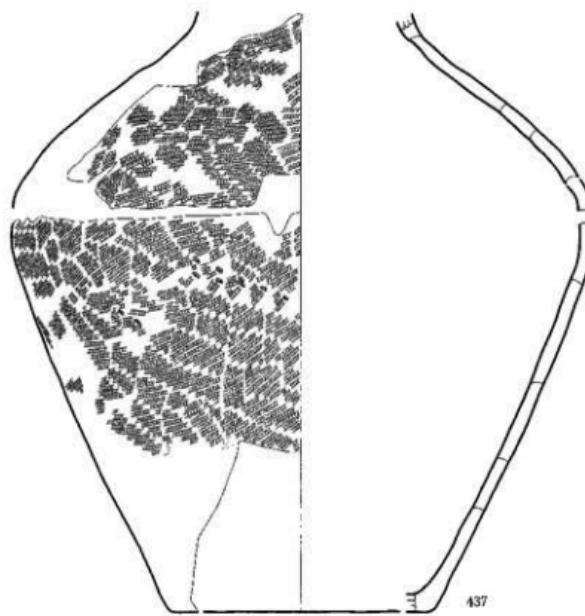
番号	地区	分類	口径	底径	器高	底径率	文様の特徴	登録
431	R28	壺II	15.1			1/2	縄文 RL	A33
432	C32	壺II	17.9	12.8	38.8	1/2	縄文 RL	A62

第131図 遺物包含層出土土器 (46)



番号	地区	分類	文様の特徴		筆跡	番号	地区	分類	文様の特徴		筆跡
			縞文 RL	縞文 LR					縞文 RL	縞文 LR	
433	B29	縞11	縞文 RL		A265	435	C30	縞11	底径9.6cm、縞文 LR		A46
434	B29	縞11	縞文 LR		A267	436	C34	縞11	縞文 LR		A51

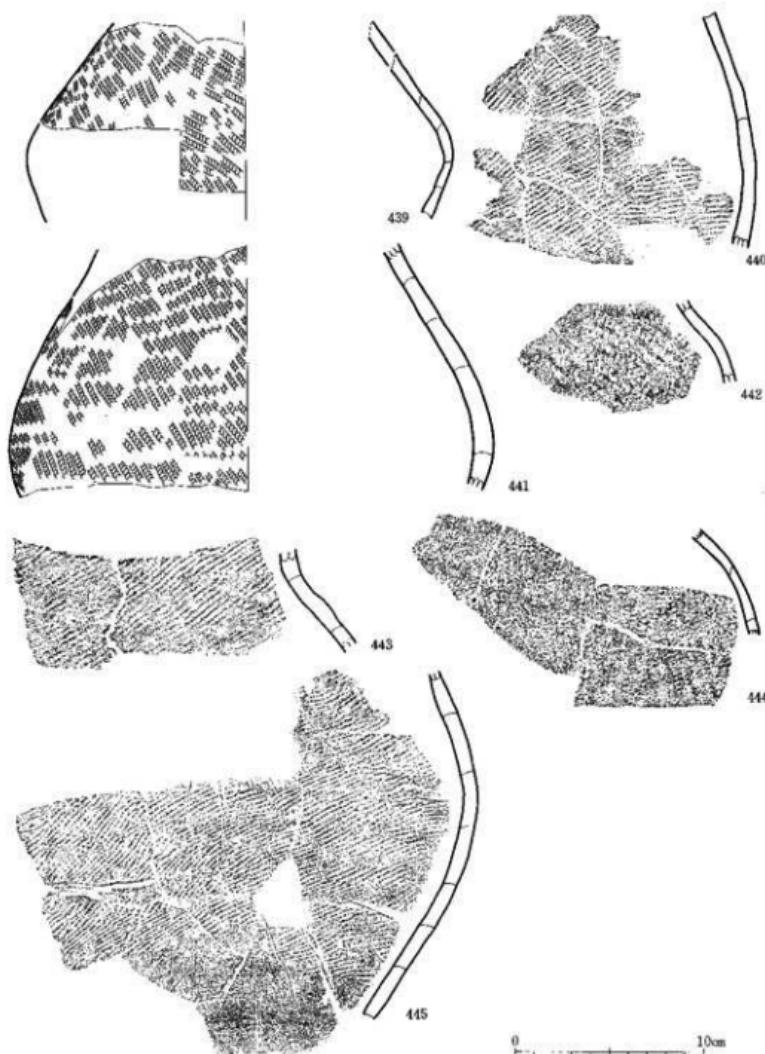
第132図 遺物包含層出土土器 (47)



0 10cm

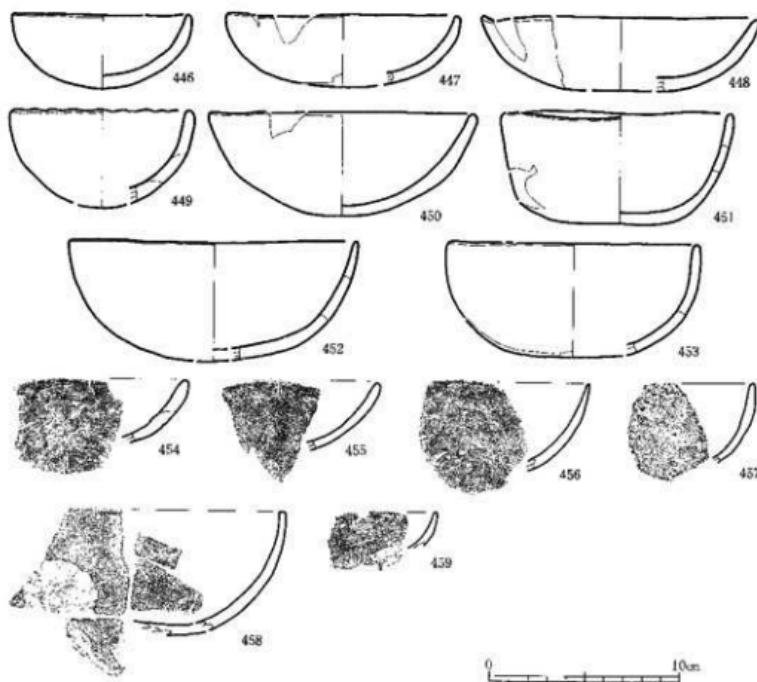
番号	地区	分類	文様の特徴	登録	番号	地区	分類	文様の特徴	登録
437	D36	帝II	縄文 LR	A56	438	D36	金II	縄文 RL	A129

第133図 遺物包含層出土土器 (48)



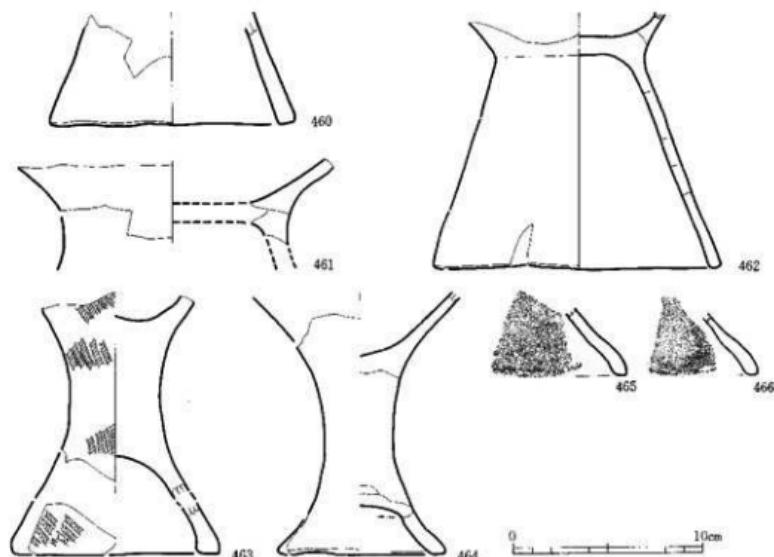
番号	地区	分類	文様の特徴	登録	番号	地区	分類	文様の特徴	登録
439	D33	壹11	縄文 RL	A131	443	D36	壹11	縄文 LR	A1499
440	D36	壹11	縄文 LR	A232	444	A28	壹11	縄文 RL	A255
441	B28	壹11	縄文 RL	A118	445	C36	壹11	縄文 LR	A127
442	B28	壹11	縄文 RL	A1451					

第134図 遺物包含層出土土器 (49)



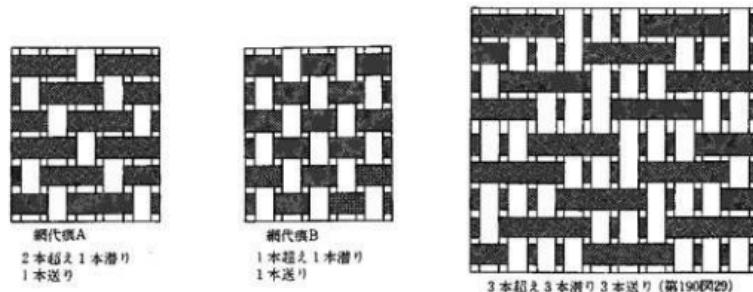
番号	地区	器種	口径	機高	残存	文様の特徴	発現	番号	地区	器種	口径	機高	残存	文様の特徴	発現
446	R29	碗	9.4	4.0	3/4		A71	453	C30	碗	13.5	5.9	1/3		A111
447	D36	碗	12.5	3.8	1/2		A149	454	F37	碗					A1337
448	E27	碗	14.8	3.9	1/2		A150	455	B29	碗					A1338
449	E27	碗	9.5	5.0	1/4	小波状口縁	A110	456	D32	碗					A1349
450	C35	碗	14.2	5.5	1/3		A66	457	C29	碗					A1524
451	C29	碗	12.2	6.0	3/4		A83	458	D36	碗					A151
452	D35	碗	15.3	6.5	1/3		A78	459	C31	碗					A1537

第135図 遺物包含層出土土器 (50)

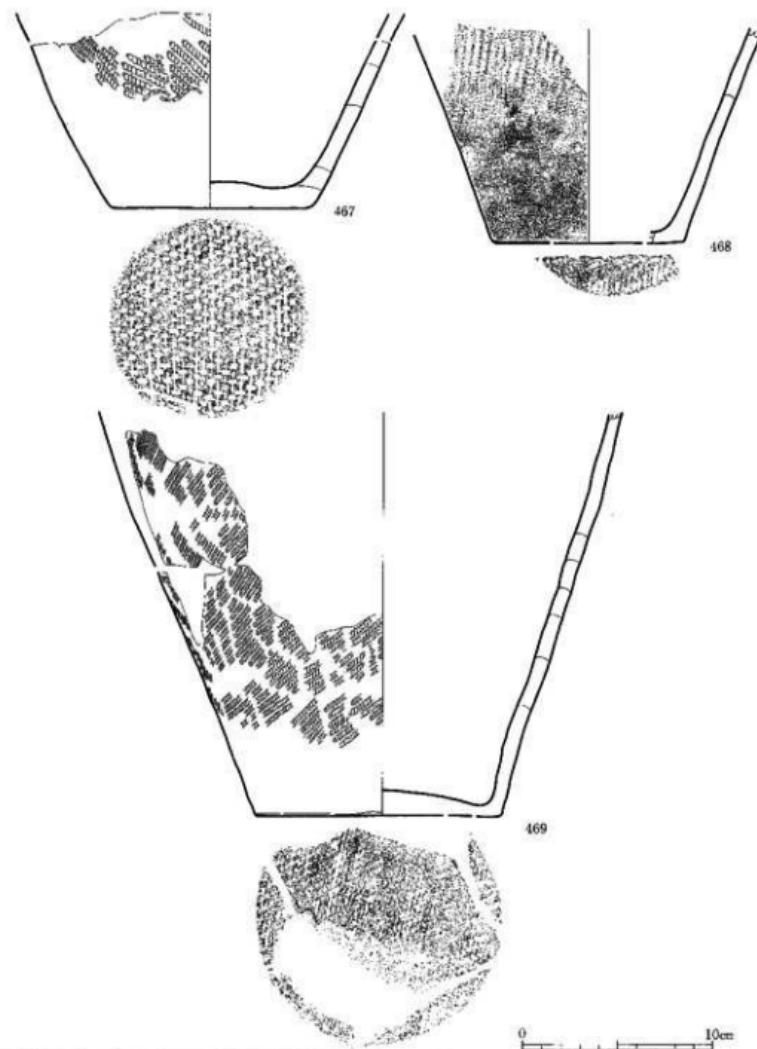


番号	地区	鉢種	直径	文様の特徴	基号	地火	鉢種	直径	文様の特徴	基号
460	C31	台	12.8		A99	464	D35	高杯	9.0	
461	C31	台			A132	465	D35			A378
462	C29	台	15.2		A87	466	T35			A375
463	C33	高杯	10.8	縞文 RL	A112					

第136図 遺物包含層出土土器 (51)

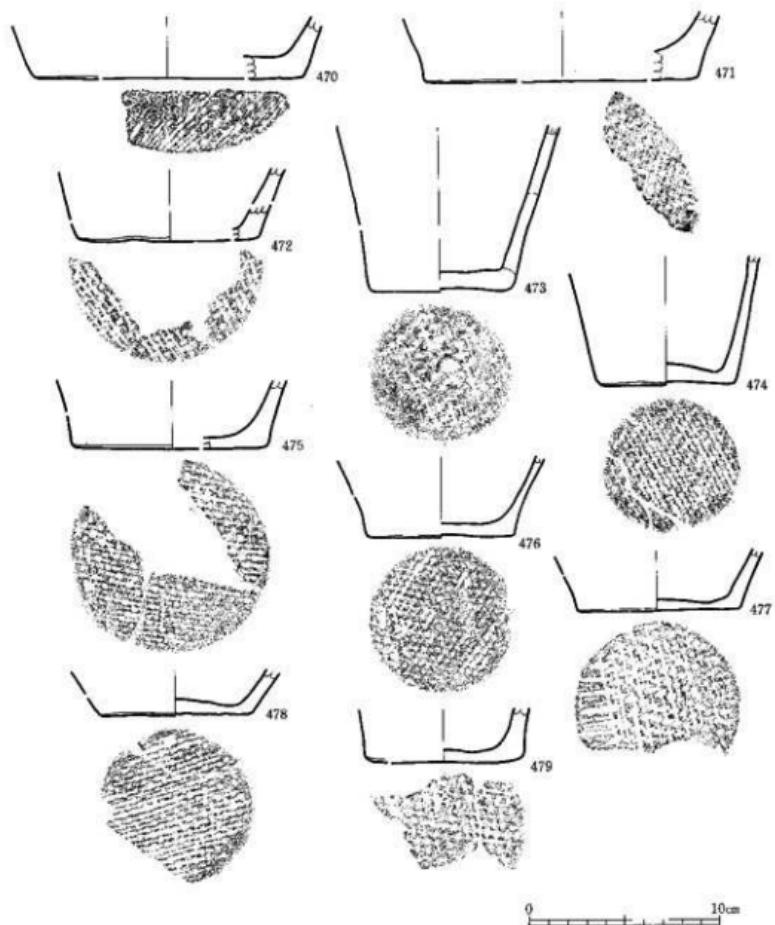


第137図 網代模模式図



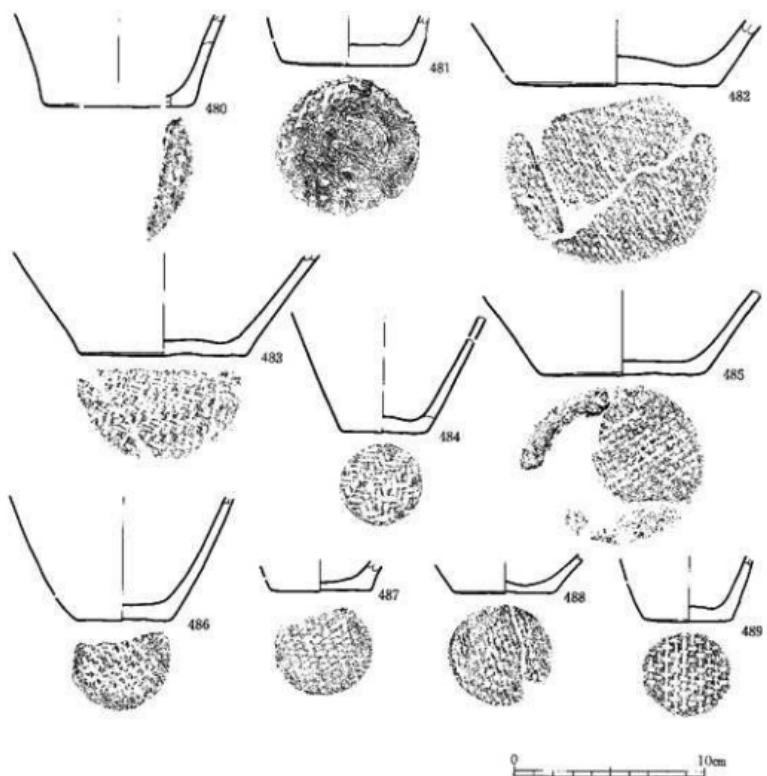
第138図 遺物包含層出土土器 (52)

番号	地区	直径	残存	文様の特徴	登錄	番号	地区	直径	残存	文様の特徴	登錄
467	B29	10.6	1	縄文RL、末端結束、網代底△	A60	469	D31	13.0	3/4	縄文LR、網代底△	A23
468	P28	10.2	1/4	縄文RL、網代底不明	A167						



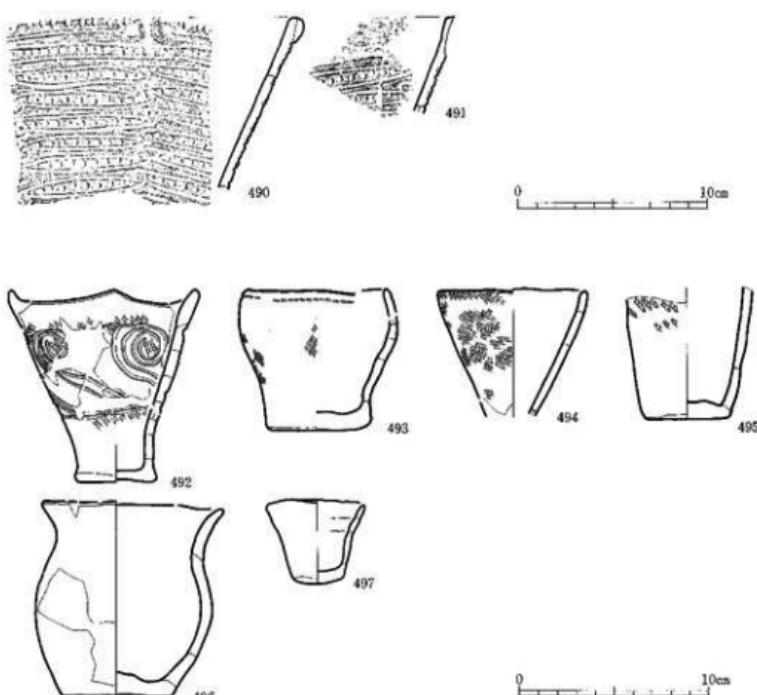
番号	地区	底径	残高	文様の特徴	基盤	番号	地区	底径	残高	文様の特徴	基盤
470	C33	14.2	1/5	網代板→ミガキ	A1610	475	C32	10.2	3/4	網代板 A	A1661
471	B29	14.0	1/5	網代板不明	A1580	476	F37	6.8	1	網代板 A	A1656
472	不明	9.6	1/2	網代板 A	A1612	477	D34	8.7	3/4	網代板 A	A1665
473	B28	7.6	1	網代板 A?	A1574	478	D34	8.1	3/4	網代板 A	A1636
474	C36	7.3	1	網代板 A	A1635	479	B28	8.4	1/6	網代板 A	A1661

第139図 遺物包含層出土土器 (53)



番号	地区	底径	残存	文様の特徴	登録	番号	地区	底径	残存	文様の特徴	登録
480	B27	8.8	1/5	網代板不明	A1659	485	B30	8.6	2/4	網代板A	A1696
481	B27	7.3	1	網代板→ミガキ	A1586	486	B29	5.0	1/2	網代板B	A92
482	B29	11.0	1/2	網代板不明	A1611	487	D35	5.2	約1	網代板B	A1589
483	D32	8.6	1/2	網代板(4本超え?)	A1670	488	C29	5.4	1	網代板A	A1620
484	D32	4.4	1	網代板不明	A79	489	不明	5.0	1	網代板A	A1590

第140図 遺物包含層出土土器 (54)



番号	地区	文様の特徴				登録	番号	地区	文様の特徴				登録
490	B31	I	縫：刻み、貼付	体：沈線(入組文)	間に刻文	A170	491	P31	沈線(入組文)	間に刻文			A170
492	C30	小形	10.0	4.2	10.3	1/4			波状口縁、鰐文 RL、沈線				A122
493	C30	小形	7.5	5.6	7.5	約1			横糸 LR、庄痕、鰐文 LR				A130
494	B29	小形	7.9			1			鰐文 RL				A70
495	C30	小形		4.6		1			鰐文 RL、面：ミガキ				A152
496	C32	小形	9.5	5.7	10.5	3/4							A84
497	B29	小形	5.1	3.1	4.5	1							A131

第141図 遺物包含層出土土器 (55)

底部資料 (467~489) 底部資料のみ集成した。底面に製作時の痕跡を残すものがあり、調査区全体の資料を含め考えると、a 網代痕、b 木葉痕、c 無文、d 不明の4種に分けられる。網代痕の種類は(第137図)、「網代痕A」2本超え1本潜り1本送り、「網代痕B」1本超え1本送り1本潜り、とその他のものであり、「網代痕A」が圧倒的に多い。他のものは、3本超え3本送り3本潜り(II区第190図29)、4本超え(?) (483)と編み方不明のものである。また、網代痕をそのまま残すものと、その後ミガキやナデ調整されるものとがある。無文のもの多くは丁寧なミガキ調整である。

小形土器 (492~497) 492は、渦巻状の沈線が描かれる。493は口縁部に燃糸圧痕が施される。

時期の異なる土器 (490・491) 外反する深鉢口縁部で、沈線により入り組み文が描かれる。

所属時期は繩文時代後期後葉、金剛寺式にあたる。

剝片石器 (第142~153図)

加工痕、使用痕の認められるものは473点、フレイク、チップは936点ある。そのうち、114点を図示した。

定形石器

石錐 (1~16) 尖端の作り出しが明瞭で、基部整形がなされており、かつ両刃が完全に整形され、平面形が三角形状のもの。基部は無茎(I類)と有茎(II類)があり、無茎のものは凹基(A)・平基(B)に分けられる。有茎のものは16のみである。1~6は凹基で7~15は平基である。平面形には二等辺三角形状のものと正三角形状のものがある。5は焼けている。

尖頭器 (17) 石錐と同様に整形されるが、石錐より厚みがあるもの。17は小形のもので、両面加工により尖端部を作り出すが、基部は片面に自然面を残している。

石錐 (18~39) 主に丁寧な両面加工により尖端部が作り出されたもの。形状により、棒状のもの(I類)、尖端部が長く伸び、基部整形がなされるもの(II類)と、素材の端部を利用し尖端部を作り出し、基部が不明瞭なもの(III類)がある。18~24はI類である。25~29はII類で、25、26のみ完形である。I、II類とも丁寧に加工されている。30~39はIII類である。

石匙 (40~52) 両側刃から作出される凹部により、つまみ部が作られるもの。形状が縦長のもの(I類)と横長のもの(II類)と三角形のもの(III類)がある。40~43、45、47~51はI類である。刃部は主に片側からの平坦剥離により作り出されている。47、51は特に細長く、両面加工が施されている。42、44、52はII類である。46はIII類で、片側全面に平坦剥離が施され、全体に薄手のつくりである。

不定形石器 主に長さ2mm以上の二次加工が連続して施されるもの。

I類 スクレイパー・エッジ(バルブの発達しない平坦で奥まで入る幅の狭い剥離が縁辺に重なって連続するもの)を有する石器。加工の部位により細分される。

I A類 (53~57) 尖端部を形成するもの。53~55は剝片端部に、56、57は側刃部に尖端部が作り出される。

I B類 (58~62) 1~2側刃を加工するもの。58~60は背面側に、61、62は腹面側に加工が施される。

I C類 (63~66) 素材の末端の腹面側に加工されるもの。

I D類 その他。

II類 (67~72) 素材の一端に尖端部を形成するもの。

III類 (73~79) 鋸齒縁石器。平面形が鋸齒状の刃部が作られるもの。74~76は自然面を大きく残すものである。74、79は比較的大きな剝離による。

IV類 (80、85) 切断調整石器。剝片を切断した後、その切断面から二次加工がされるもの。80は下半部が折り取られ、わずかな剝離が見られる。85は本来は I B類と考えられるものの上下が折り取られている。

V類 (81) 二次加工が交互剝離状のもの。81は右上辺部に加工が施される。

VI類 (82、84~91) 細かな連続する二次加工を有するもの。

VII類 (92、113、114) その他。92は腹面の剝離が辺縁をめぐる。113、114は部分的に磨滅している。113は厚手で、石斧となる可能性がある。

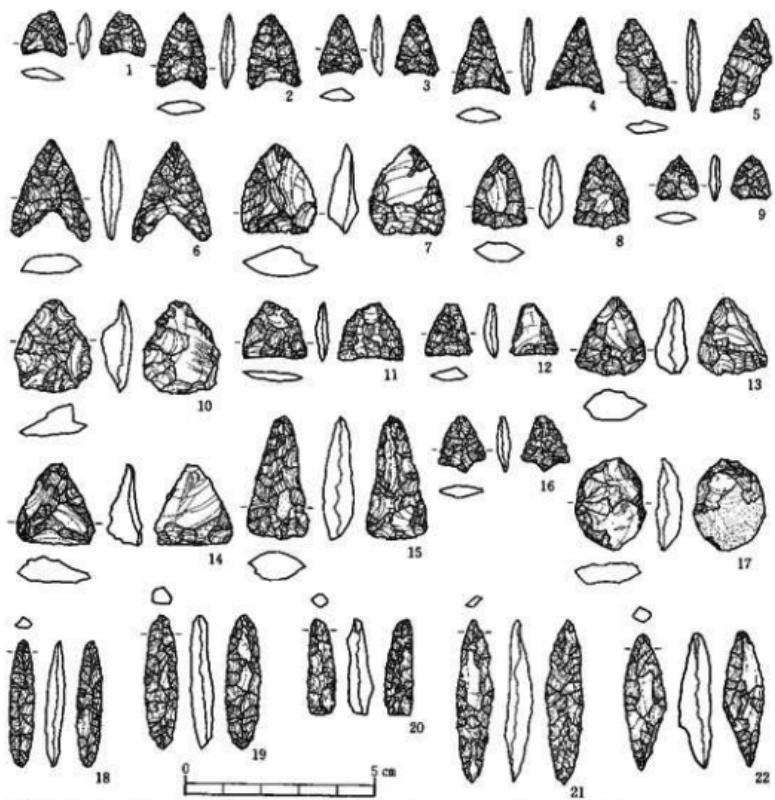
両極剝離痕を持つ石器 (93~102) 93~97は1対の、98~102は直交する2対の刃部を有する。

異形石器 (112) 両面加工により、「入」字状の形をしている。抉りの部分にはアスファルトが付着している。

石核 (103~111) 108は表裏に求心的な剝片剝離が行なわれている。109、110は自然面を大きく残すものである。111は四角錐状の形で、打面の転移が頻繁に行なわれたものである。

計測方法 定形石器は中軸線方向での最大長を「長さ」、それに直交する最大長を「幅」、最も厚い部分を「厚さ」として計測した。不定形石器は、最大長・最大幅か、中軸最大長（左右対称のもの）か、剝片の大きさを計測し、備考欄にそれぞれ(大)(中)(剝)と記載した。また、最も厚い部分を「厚さ」とした。

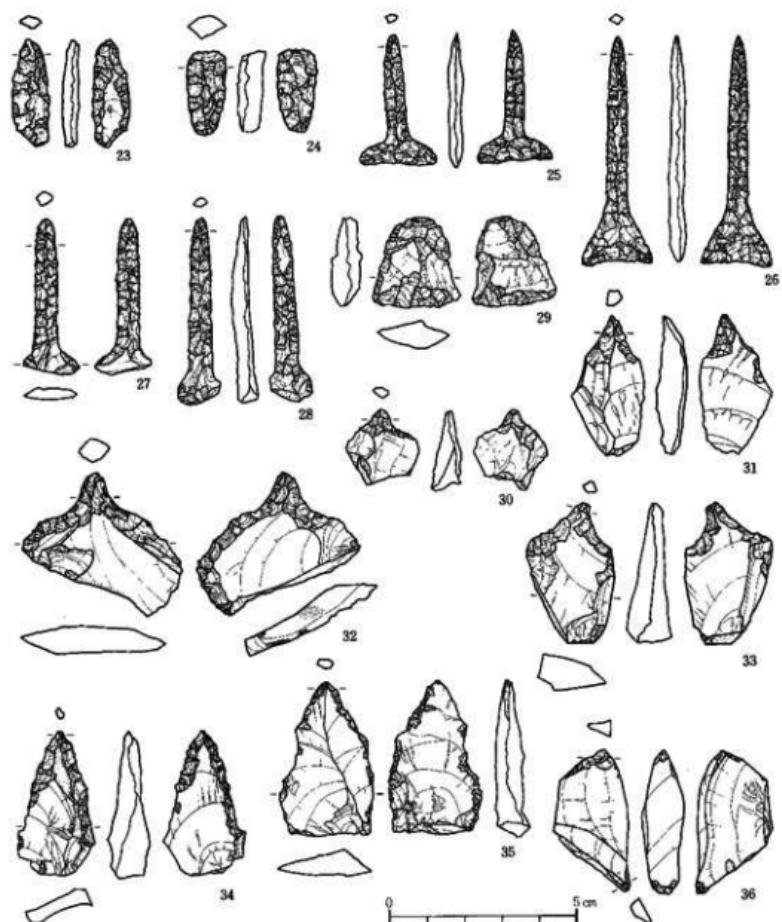
2 繩文時代の遺構と遺物



番号	地区	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石 刃	備 考	登録
1	C29	石鏃 I A	11.5	11.8	3.2	0.3	玉髓		Ka18
2	B29c	石鏃 I A	20.0	13.2	3.7	0.6	透明白岩		Ka8
3	D35c	石鏃 I A	16.1	11.0	2.9	0.3	透明白岩		Ka5
4	B29c	石鏃 I A	20.5	15.0	3.3	0.5	透明白岩	複数	Ka7
5	B27	石鏃 I A	26.5	10.0	3.2	0.7	透明白岩		Ka11
6	F36h	石鏃 I A	22.1	20.9	5.0	1.6	透明白岩		Ka5
7	C35f	石鏃 I B	23.5	19.4	7.6	2.4	玉髓		Ka3
8	C36g	石鏃 I B	19.2	14.2	5.5	1.4	透明白岩		Ka9
9	B29f	石鏃 I B	11.3	10.3	2.5	0.3	玉髓		Ka21
10	E36g	石鏃 I B	24.5	20.3	7.2	2.5	頁岩		Ka58
11	C31	石鏃 I B	14.5	16.5	2.9	0.7	頁岩		Ka12
12	不明	石鏃 I B	13.3	12.3	3.1	0.5	透明白岩	丸端破損	Ka20
13	B29	石鏃 I B	20.7	18.3	7.8	2.2	頁岩		Ka1
14	B27	石鏃 I B	21.2	20.2	7.9	2.5	玉髓		Ka10
15	D35a	石鏃 I B	32.2	15.8	7.5	3.0	透明白岩		Ka2
16	F29	石鏃 II	14.9	12.5	3.3	0.5	玉髓		Ka19
17	C28	尖頭器	24.1	18.2	6.3	2.8	玉髓		Ka168
18	B29d	石鏃 I	33.5	6.2	4.7	0.9	透明白岩		Ka23
19	F36d	石鏃 I	35.4	8.8	5.9	1.9	玉髓		Ka35
20	D35g	石鏃 I	25.5	7.5	6.5	1.3	透明白岩	一端破損	Ka34
21	B27	石鏃 I	43.0	9.4	6.3	2.2	透明白岩		Ka27
22	F28	石鏃 I	35.9	10.8	7.9	2.4	透明白岩		Ka26

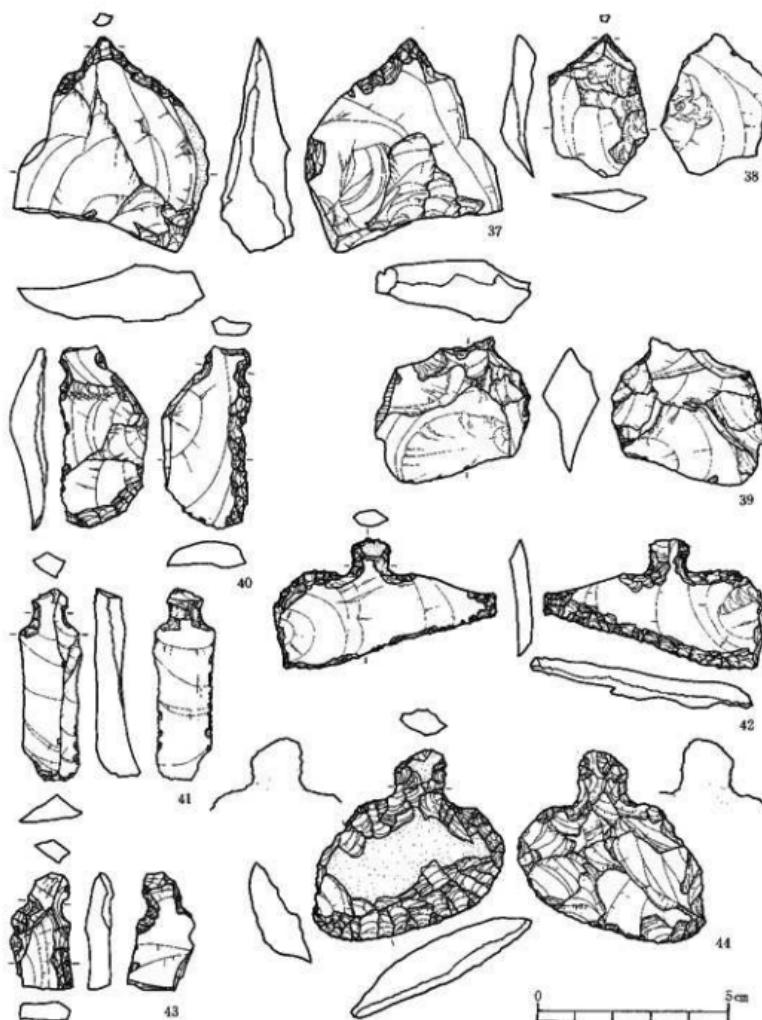
第142図 遺物包含層出土鶴片石器 (1)

V 検出された遺構と遺物



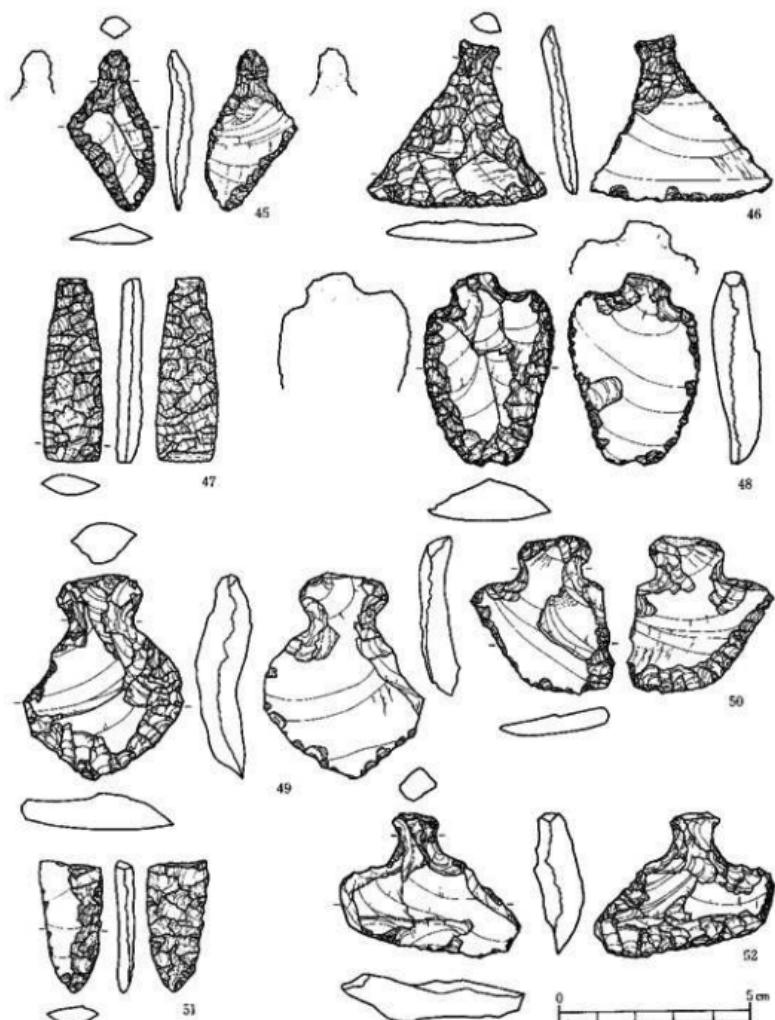
番号	地区	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	備考	登録
23	B28b	石核 I	28.3	9.8	4.1	1.1	珪質頁岩	端欠損	Ka24
24	C32h	石核 I	22.0	10.3	7.1	1.6	珪質頁岩	端欠損	Ka31
25	D35e	石核 II	35.3	20.5	3.7	1.1	珪質頁岩		Ka33
26	不明	石核 II	60.6	18.2	3.4	1.6	珪質頁岩		Ka65
27	B27	石核 II	41.5	15.0	4.5	1.4	珪質頁岩	基部欠損	Ka64
28	B29	石核 II	49.5	11.2	5.2	1.8	珪質頁岩	基部欠損	Ka29
29	C30	石核 II	23.9	22.7	7.1	3.2	鈍石英	先端部欠損	Ka30
30	B32b	石核 III	21.5	19.2	7.8	1.9	矽玉		Ka37
31	B35a	石核 III	37.0	19.4	7.6	4.4	珪質頁岩		Ka38
32	B27	石核 III	39.0	42.5	7.5	9.6	珪質頁岩	磨耗あり (トーン部)	Ka28
33	C29g	石核 III	37.3	24.7	11.2	6.5	珪質頁岩		Ka25
34	D35d	石核 III	38.5	21.4	6.5	4.6	珪質頁岩		Ka4
35	C31	石核 III	40.6	24.2	5.5	5.2	流紋岩		Ka69
36	B28a	石核 III	38.0	21.3	9.9	8.5	珪質頁岩		Ka62

第143図 遺物包含層出土石器 (2)



番号	地区	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石 材	備 考	登録
37	C36f	石鏃Ⅲ	57.0	50.8	16.1	37.3	珪質岩		Ka36
38	C31	石鏃Ⅱ	37.7	25.6	6.3	5.2	珪質岩		Ka61
39	B29f	石鏃Ⅳ	40.6	39.6	15.9	16.7	珪質岩		Ka29
40	D36d	石劍Ⅰ	46.1	25.4	8.1	8.9	珪質岩		Ka55
41	C36f	石劍Ⅱ	51.0	16.5	9.1	6.1	珪質岩		Ka54
42	B29	石劍Ⅲ	32.4	58.2	3.8	7.4	珪質岩		Ka66
43	C29a	石劍Ⅳ	31.3	18.1	6.2	3.5	霰石	下半部欠損	Ka48
44	E35d	石劍Ⅴ	49.1	52.0	10.2	23.4	玉物	つまみ部にアスファルト付着	Ka53

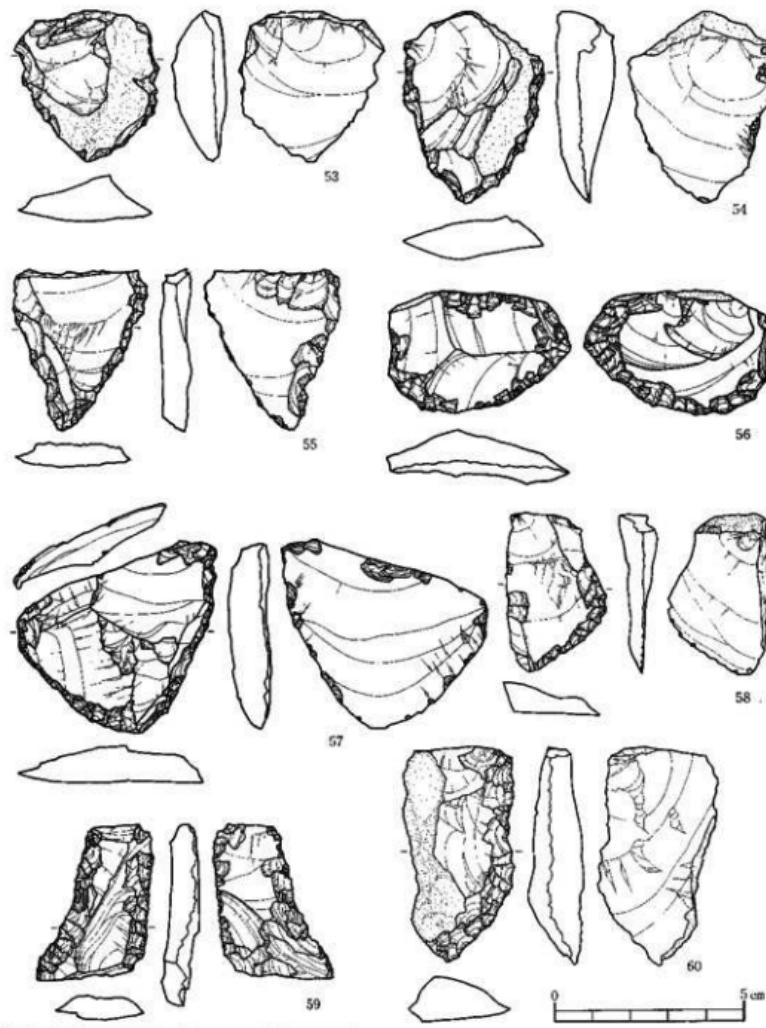
第144図 遺物包含層出土剥片石器（3）



番号	地区	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	備考	参考
45	B28	石器 I	43.1	23.2	5.4	4.0	珪質頁岩	つまみ部にアスファルト付着	Ka47
46	C30	石塊Ⅲ	45.3	47.1	5.2	7.7	珪質頁岩		Ka43
47	CJ1	石器 I	49.3	16.1	5.5	5.6	珪質頁岩	上下端欠損	Ka49
48	B29	石塊 I	50.8	33.9	11.2	18.0	珪質頁岩	つまみ部にアスファルト付着	Ka1582
49	D34d	石器 I	54.4	41.8	12.4	22.1	珪質頁岩		Ka52
50	B29	石塊 I	41.2	38.1	7.5	9.0	珪質頁岩		Ka56
51	B27	石塊 I	35.5	16.9	4.8	2.6	珪質頁岩	上半部欠損	Ka44
52	B28	石塊 II	39.0	48.6	9.8	15.0	珪質頁岩		Ka46

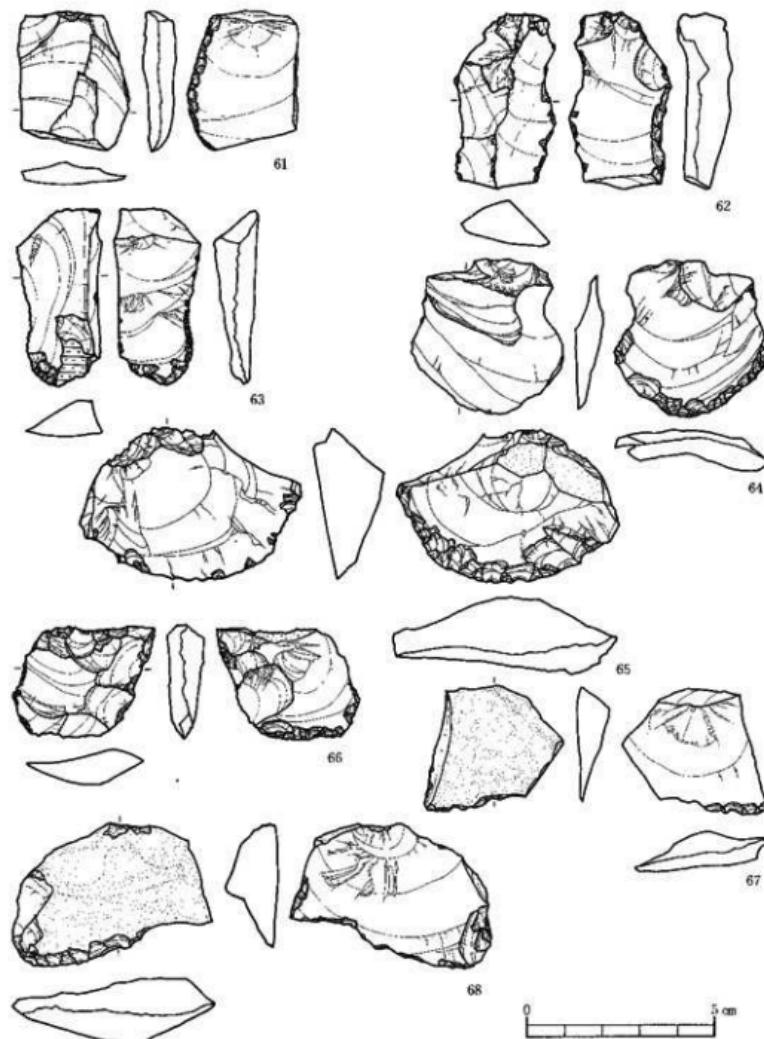
第145図 遺物包含層出土剣片石器 (4)

2 繩文時代の遺構と遺物



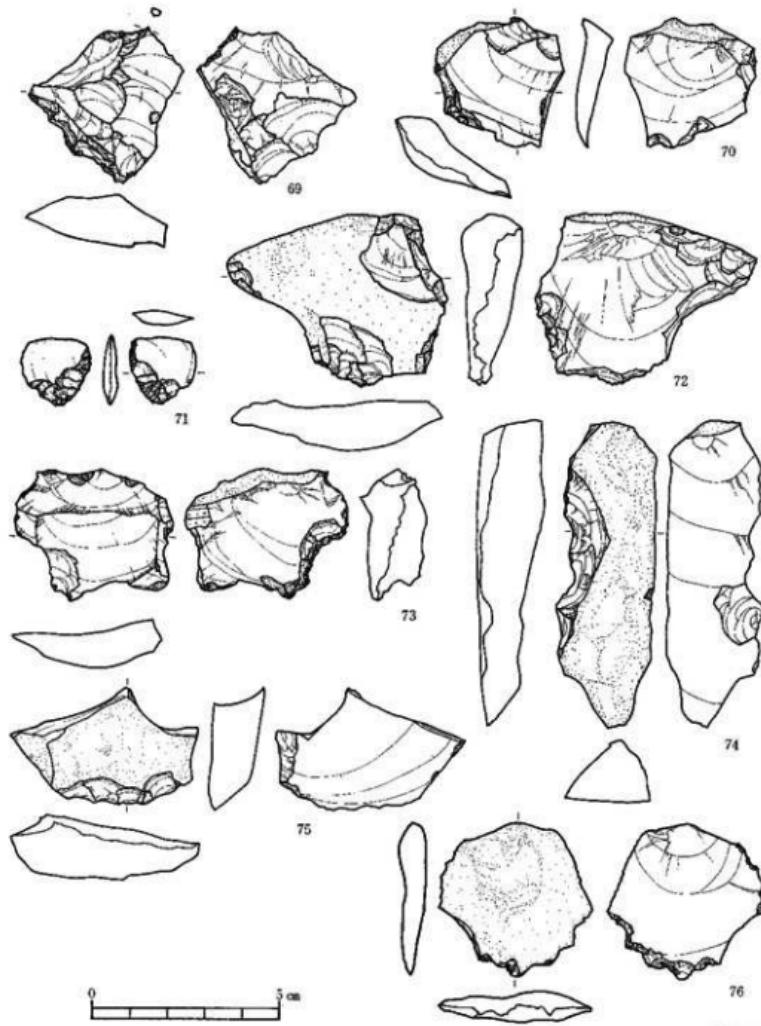
番号	地区	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	備考	登録
53	B28	不定形 I A	38.6	37.6	12.9	18.5	珪質頁岩	(4)	Ka81
54	D36	不定形 I A	51.4	37.2	1.0	20.9	珪質頁岩	(中) 43.8×38.4 (斜)	Ka111
55	D35	不定形 I A	47.2	33.9	6.1	9.8	頁岩	(大)	Ka109
56	D36	不定形 I A	48.8	32.4	11.6	18.3	珪質頁岩	(大)	Ka110
57	B27	不定形 I A	38.3	43.9	11.2	25.7	珪質頁岩	(大)	Ka99
58	B27	不定形 I B	42.9	29.4	7.8	6.9	珪質頁岩	(大) 38.2×27.4 (斜)	Ka131
59	B28	不定形 I B	49.6	29.1	8.0	10.1	珪質頁岩	(大)	Ka107
60	B30c	不定形 I B	58.0	33.2	12.2	19.9	泥質岩	(大) 56.2×33.2 (斜)	Ka139

第146図 遺物包含層出土剥片石器 (5) (斜) 剥片の大きさ



番号	地区	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	備考	歴段
61	B30i	不定形Ⅰ B	41.2	37.1	7.8	8.7	珪質頁岩 (大) 35.0×28.9 (38)		Ka83
62	D32	不定形Ⅰ B	45.4	26.8	11.2	13.3	頁岩 (中)		Ka84
63	D31	不定形Ⅰ C	48.2	24.9	10.8	9.9	珪質頁岩 (中) 39.9×24.9 (46)		Ka85
64	F22b	不定形Ⅰ C	49.9	40.0	8.2	10.2	珪質頁岩 (細)		Ka73
65	F36d	不定形Ⅰ C	59.0	42.6	18.2	30.6	流紋岩 (大) 32.5×39.6 (67)		Ka97
66	B28	不定形Ⅰ C	43.5	31.0	8.5	8.7	珪質頁岩 (大) 26.8×37.8 (46)		Ka103
67	C36i	不定形Ⅱ	41.0	34.4	8.7	8.0	珪質頁岩 (大) 30.2×37.8 (46)		Ka92
68	D35c	不定形Ⅱ	52.3	12.3	13.4	20.4	珪質頁岩 (大) 42.3×52.3 (46)		Ka95

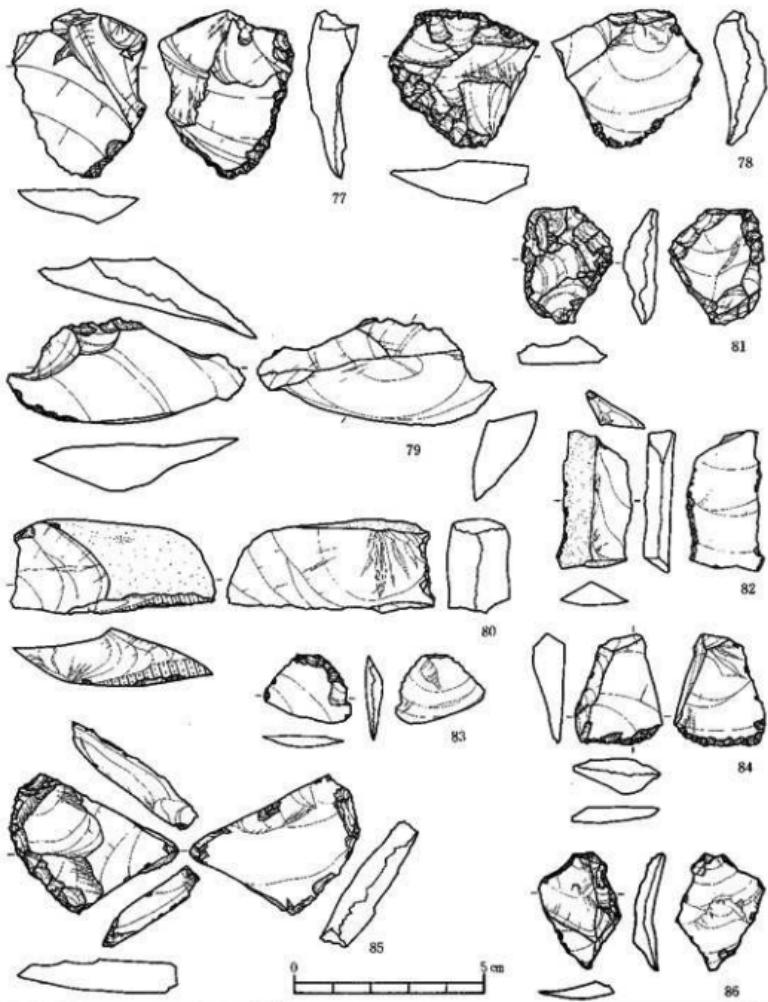
第147図 遺物包含層出土剝片石器 (6)



番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
69	C36a	不定形II	42.3	40.2	18.1	19.1	淡紋碧岩	(大)	Ka60
70	C30	不定形II	37.8	35.0	11.1	10.8	井筒碧岩	(大) 27.9×34.1(斜)	Ka129
71	C31?	不定形II	17.6	17.9	3.8	1.0	不詳	(中)	Ka142
72	B29?	不定形II	60.1	47.2	12.8	33.1	疊層質岩	(大) 44.1×57.1(斜)	Ka146
73	B36	不定形III	45.4	36.4	16.0	16.8	疊層質岩	(大) 32.3×44.1(斜)	Ka158
74	B27c	不定形III	81.8	25.6	18.2	26.6	頁岩	(中) 21.4×31.3(斜)	Ka155
75	C39	不定形III	49.7	33.5	14.4	20.1	頁岩	(大)	Ka152
76	B37	不定形III	41.4	41.0	7.7	9.4	頁岩	(大)(斜片の大きさ同じ)	Ka127

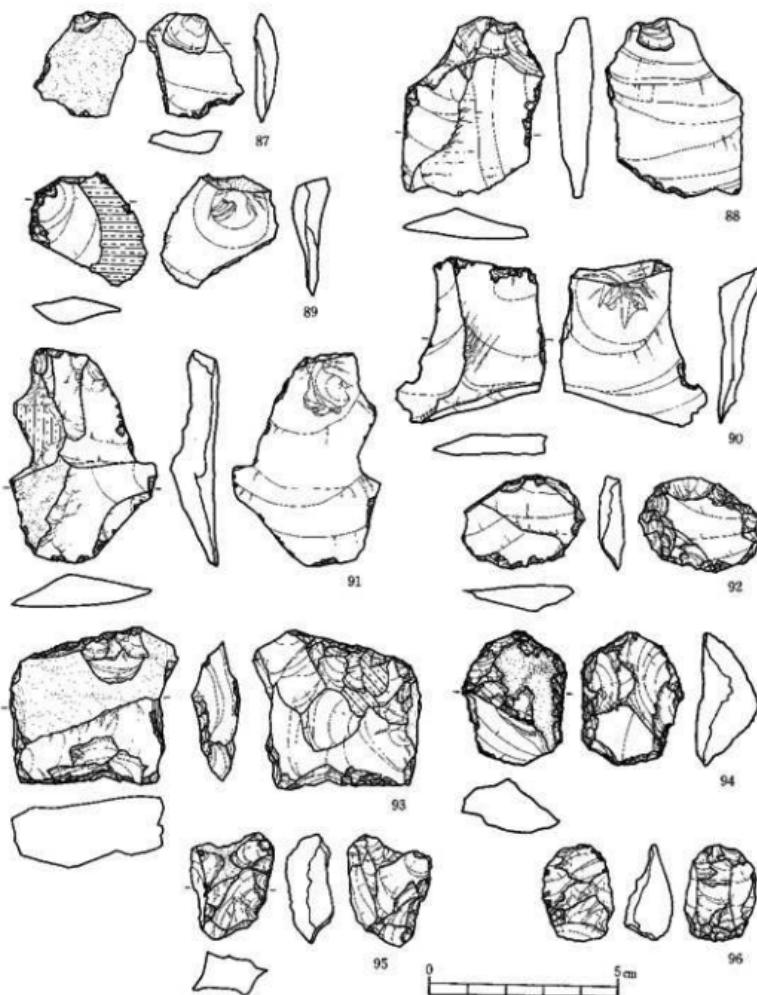
第148図 遺物包含層出土剥石器(7)

V 検出された遺物と遺物



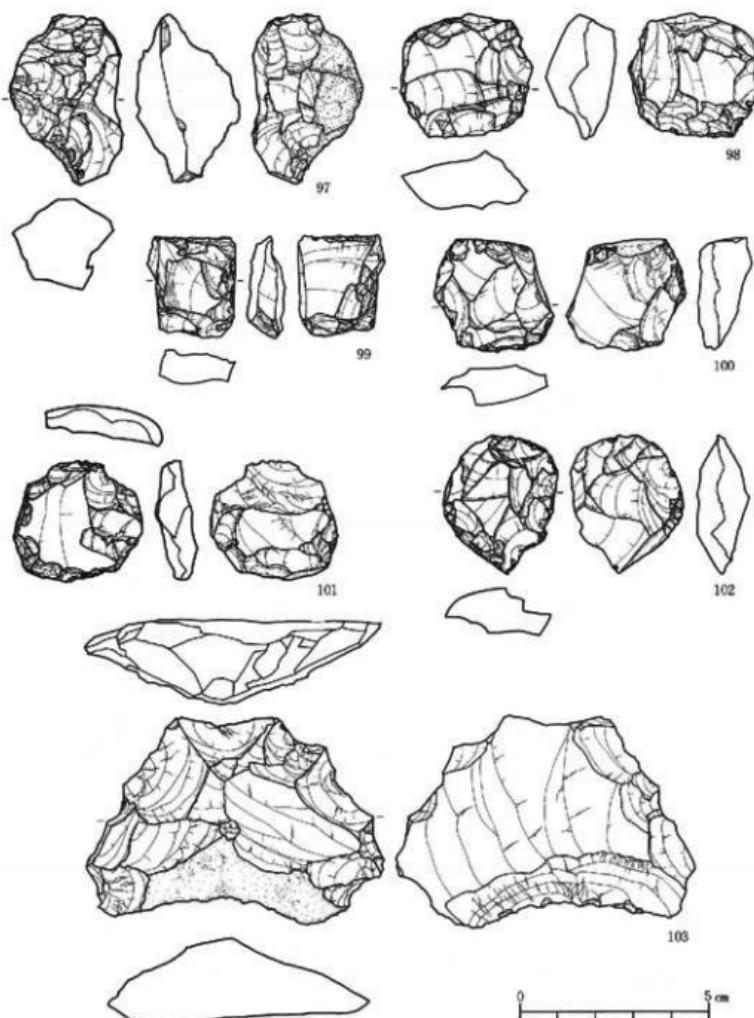
番号	地区	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	備考	登録	
77	B28	不定形Ⅳ	44.2	35.8	8.6	11.8	赤銅頁岩	(中)	Ka82	
78	C32	不定形Ⅳ	39.4	38.9	10.9	13.1	赤銅頁岩	(大)	34.3×39.5 (側)	Ka131
79	B27	不定形Ⅳ	62.8	30.5	11.8	14.8	赤銅頁岩	(大)	23.2×62.8 (側)	Ka118
80	C31b	不定形Ⅳ	55.4	34.0	16.4	23.5	夏岩	(大)	21.2×54.2 (側)	Ka70
81	B28a	不定形Ⅴ	31.8	24.4	6.6	6.9	赤銅頁岩	(大)	Ka71	
82	E36	不定形VI	37.5	20.3	6.5	5.6	赤銅頁岩	(小)	Ka112	
83	D35	不定形VI	23.7	17.2	3.3	1.4	赤銅頁岩	(大)	18.2×23.2 (側)	Ka116
84	D33d	不定形VI	32.2	23.3	8.6	4.7	赤銅頁岩	(大)	27.3×23.4 (側)	Ka123
85	不明	不定形IV	45.2	29.7	9.0	13.7	赤銅頁岩	(大)	Ka98	
86	E35	不定形VI	30.8	21.1	5.0	2.6	赤銅頁岩	(大)	29.9×21.8 (側)	Ka115

第149図 遺物包含層出土剝片石器 (8)



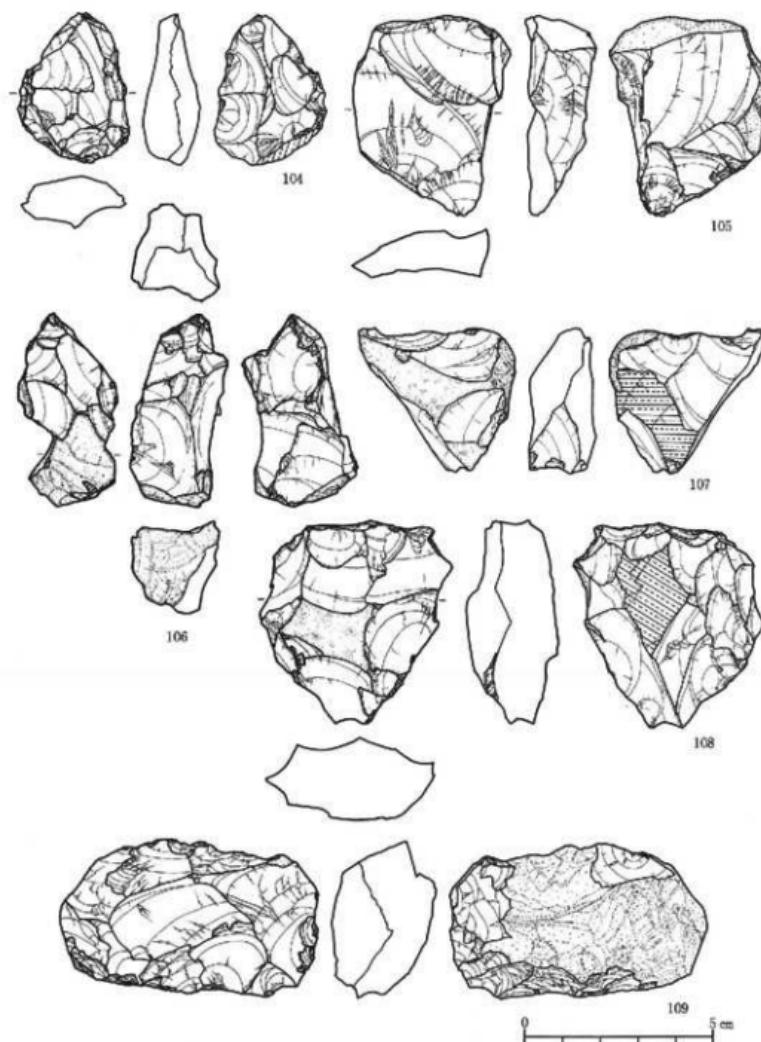
番号	地区	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	圖	参考	登錄
87	C25	不定形VI	29.6	26.8	3.1	3.5	珪質頁岩 (大)	91	Ka39	
88	C30b	不定形VI	52.8	36.4	9.0	13.6	珪質頁岩 (大)	92	Ka125	
89	C35	不定形VI	34.2	24.5	6.7	4.3	珪質頁岩 (大) 27.4×29.6 (削)	93	Ka100	
90	C35	不定形VI	50.6	42.8	7.4	9.8	珪質頁岩 (大) 41.4×38.2 (削)	94	Ka113	
91	B27	不定形VI	58.0	38.8	11.0	17.2	珪質頁岩 (大) 55.4×39.1 (削)	95	Ka28	
92	B29	不定形VII	32.0	23.7	5.9	5.0	珪質頁岩 (大)	96	Ka74	
93	B28e	兩極剝離	53.8	47.8	17.7	40.7	珪質頁岩 (大) 43.7×42.8 (削)		Ka288	
94	B25e	兩極剝離	33.5	27.6	15.4	11.4	珪質頁岩 (中)		Ka312	
95	B30	凹極剝離	30.9	24.6	10.9	7.2	矽石 (大)		Ka318	
96	B30	凹極剝離	24.6	18.2	11.2	5.0	珪質頁岩 (中)		Ka295	

第150図 遺物包含層出土剝片石器 (9)



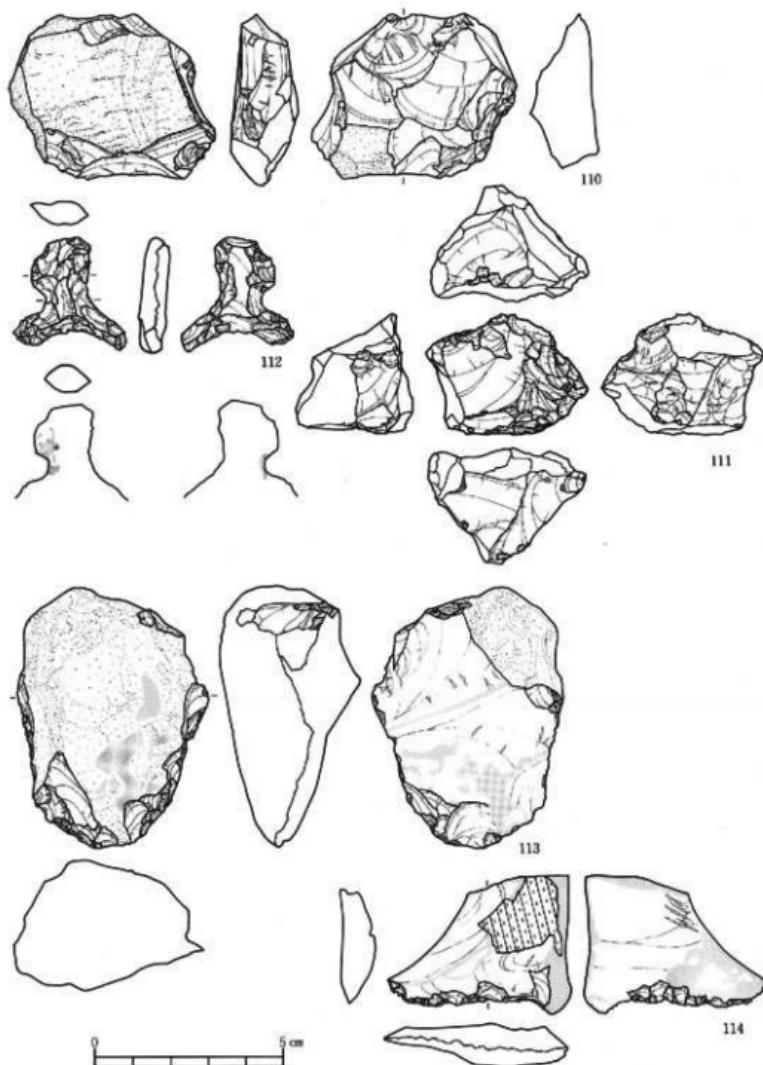
番号	地区	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	参考
97	C36b	両極削離	44.8	29.4	25.9	26.3	碧玉	Ka305
98	C36a	両極削離	35.5	36.7	16.3	19.2	碧質頁岩	Ka303
99	C36d	両極削離	31.8	28.4	8.4	7.0	硅質頁岩	Ka304
100	C28g	両極削離	34.3	30.0	12.2	12.5	碧質頁岩	Ka293
101	B29	両極削離	34.6	31.8	8.1	9.7	碧質頁岩	Ka316
102	C30	両極削離	36.4	29.8	13.2	11.2	碧質頁岩	Ka302
103	D34	石核	79.3	54.6	22.4	81.9	石英安山岩	Ka360

第151図 遺物包含層出土剥片石器 (10)



番号	地区	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	費合 (%)	石 材	備 考	参考
104	B28	石核	39.9	26.6	14.5	15.4	珪質頁岩	(大)	Ka347
105	C30	石核	54.9	46.9	13.2	30.5	珪質頁岩	(大)	Ka390
106	C31	石核	50.9	29.8	25.1	23.8	珪質頁岩	(大)	Ka388
107	D35c	石核	48.2	33.0	16.4	21.6	珪質頁岩	(大)	Ka369
108	D30	石核	57.1	46.8	23.1	49.5	頁岩	(大)	Ka374
109	B30	石核	57.9	40.4	25.5	77.0	珪質頁岩	(大)	Ka354

第152図 遺物包含層出土剥片石器 (11)



番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 特	備 考	晉級
110	E35	石核	55.5	45.7	16.6	43.6	球貫貫岩	(大)	Ka341
111	C27	石核	43.1	34.7	30.4	31.6	球貫貫岩	(大)	Ka349
112	DG7h	扁形	30.7	30.9	6.8	4.5	球貫貫岩	アスファルト付着	Ka63
113	C34	不定形器	69.2	51.2	35.9	121.8	球貫貫岩	(大) 開底あり	Ka394
114	D35	不定形器	56.0	39.4	9.0	14.8	球貫貫岩	(大) 開底あり	Ka114

第153図 遺物包含層出土石器 (12)

礪石器（第154～180図）

礪石器は274点出土しており、そのうち159点を図示している。その種類は、凹み石などの礪石器（I～XV類）、石皿、磨製石斧、石鎌、その他石製品がある。分類にあたっては、礪の表面に見られる「凹み」、「磨面」、「タタキ」（敲打により凹凸ある面が形成される、剝離痕も含む）、「ザラ」（敲打等によりザラついた平坦な面が形成される）の組み合わせ、および全体の形態から以下のように分類した。実測図では、「磨面」は薄いスクリーントーン、「ザラ」は濃いスクリーントーンで示している。

I類 凹みを持つもの（1・3～10・12～27）。凹みは、比較的深いもの（A・1・3～10・12・13）と浅いもの（B、14～27）がある。

II類 凹み+磨面（28～31） 28～30は凹みの面に、31は凹みの面と側面に磨面がある。

III類 凹み+磨面+タタキ（32） 磨面は側面に、タタキは端部寄りの表裏にある。

IV類 凹み+磨面+タタキ+ザラ（33・34）

V類 凹み+磨面+ザラ（35～37） IV、V類は大きさが近い。37以外は磨面が凹みの面にある。ザラは側面にある。

VI類 凹み+タタキ+ザラ

VII類 凹み+タタキ（2・11・38～41） 41はソロバン玉状のタタキ石である。

VIII類 凹み+ザラ（42） 側面にザラ面がある。

IX類 磨面（43～53） 49、51～53は磨面が溝状にくぼんでいる。

X類 磨面+タタキ（54～58）

XI類 磨面+タタキ+ザラ（59～61）

XII類 磨面+ザラ（62～63）

XIII類 タタキ（64～99） 長軸端部に敲打痕があるものが主である。80、81、93は側面に敲打痕がある。

XIV類 タタキ+ザラ（100・101）

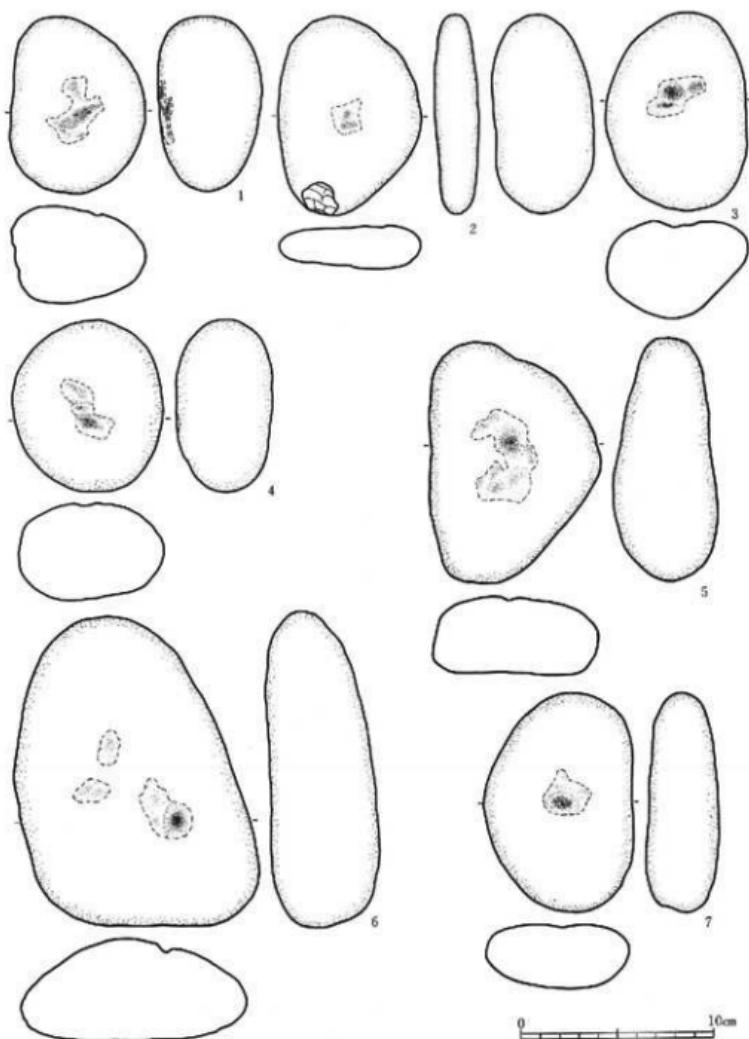
XV類 ザラ（102～107） 側面及び端部にザラ面がある。

石皿（108・109） いずれも破損品である。109は裏面に凹みが集中している。

磨製石斧（110～113） 110は基部がすぼまり、111はやや広い。113は小形品である。

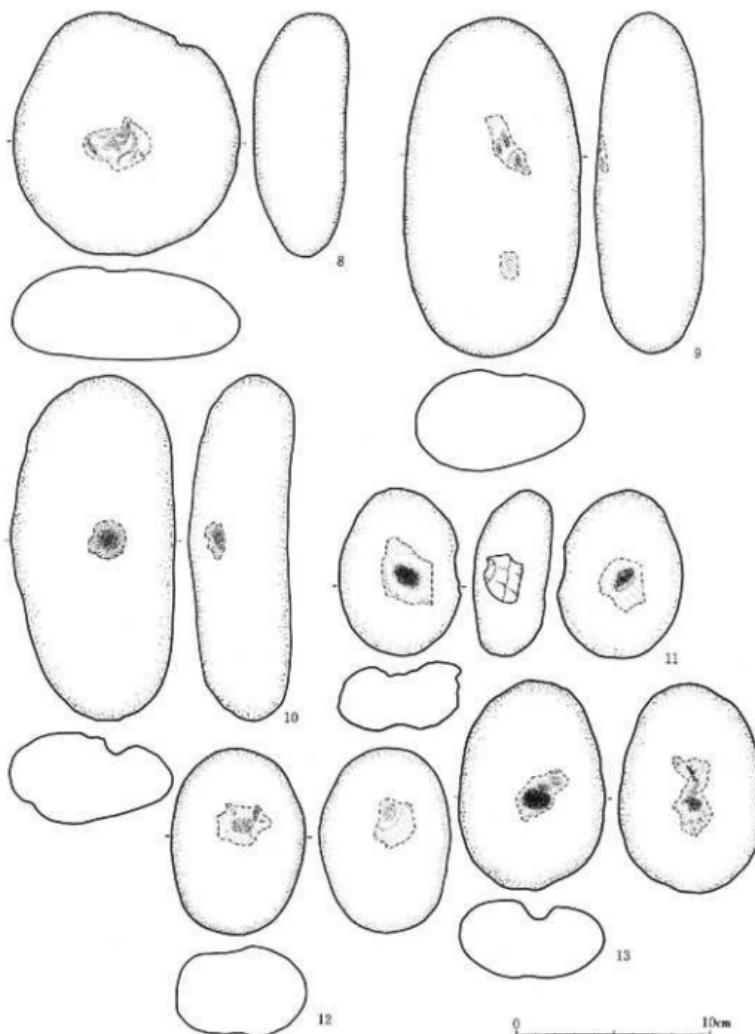
石製品（114～118） 白色軟質の礪に加工が施されるもの。114・115は線刻されている。116はフレイクである。117・118は椀状にくぼむ。（118は包含層出土ではない）

計測方法 長軸方向の最大長を「長さ」、それに直交する最大長を「幅」としている。「厚さ」は断面作成位置での厚さである。



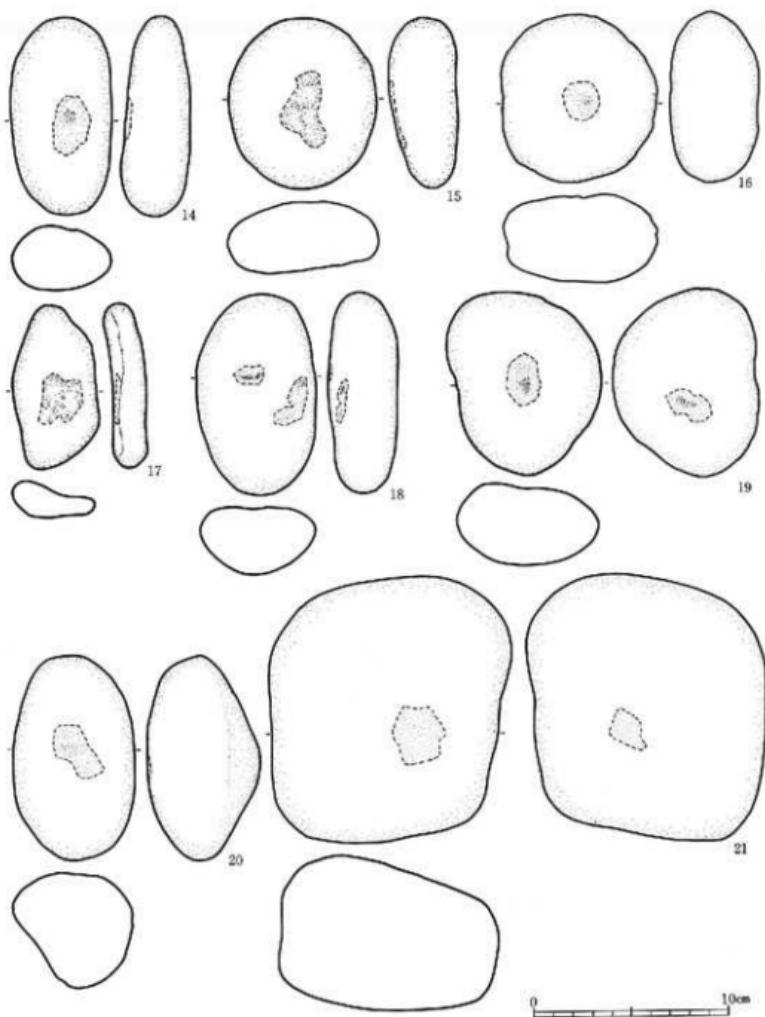
番号	地区	分類型	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	圖考	登錄
1	C29b	I A 凹み 深	9.5	7.1	5.2	455	安山岩		Kc56
2	C36b	VII 圓+壓	10.7	7.6	2.5	235	安山岩		Kc75
3	D36b	I A 凹み 深	10.7	7.6	5.3	590	花崗岩		Kc80
4	B28	I A 凹み 深	9.2	7.9	5.2	440	花崗岩		Kc261
5	C34	I A 凹み 深	12.9	9.1	4.3	780	安山岩		Kc76
6	C33g	I A 凹み 深	16.5	13.0	5.6	1300	砂岩		Kc67
7	E36d	I A 凹み 深	12.8	7.9	3.4	440	安山岩		Kc92

第154図 遺物包含層出土石器（1）



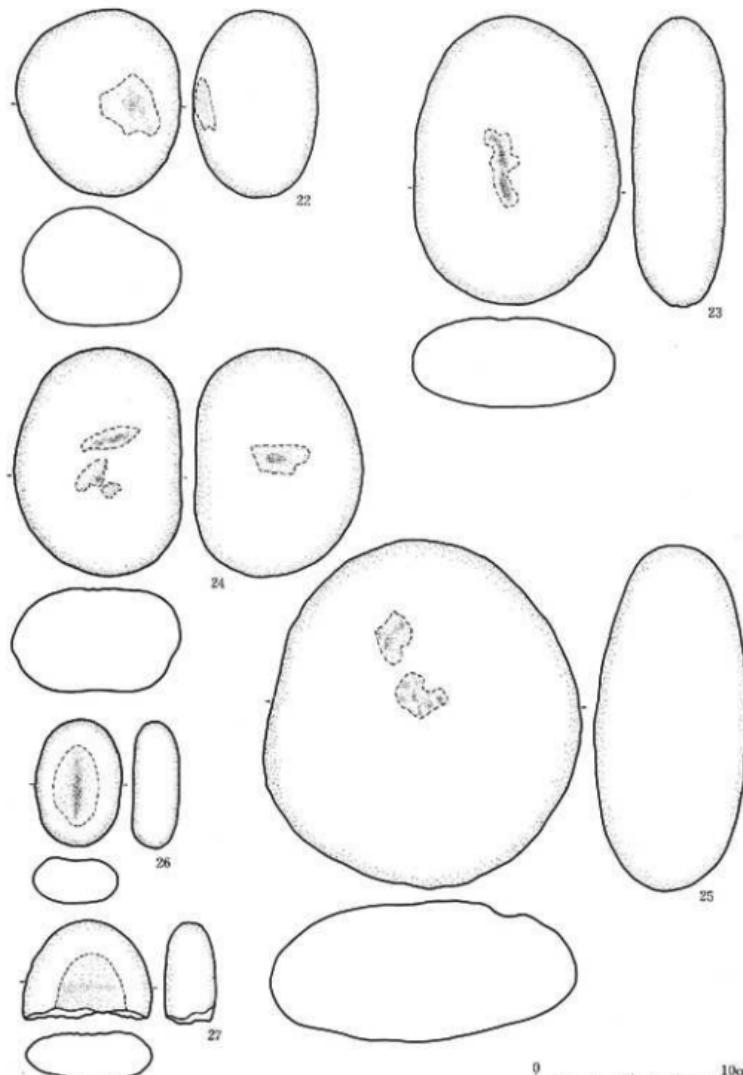
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
8	D33	I A 凹み 深	12.9	11.9	5.0	1150	安山岩		Ke53
9	C27	I A 凹み 深	18.2	9.3	5.4	1400	安山岩		Ke51
10	D37f	I A 凹み 深	18.4	8.7	5.0	760	安山岩		Ke83
11	C31	Ⅲ 四+裁	9.6	6.5	3.9	210	安山岩		Ke65
12	E29	I A 凹み 深	10.0	7.0	4.9	440	安山岩		Ke64
13	B30	I A 凹み 深	11.2	7.7	4.1	460	安山岩		Ke55

第155図 遺物包含層出土石器（2）



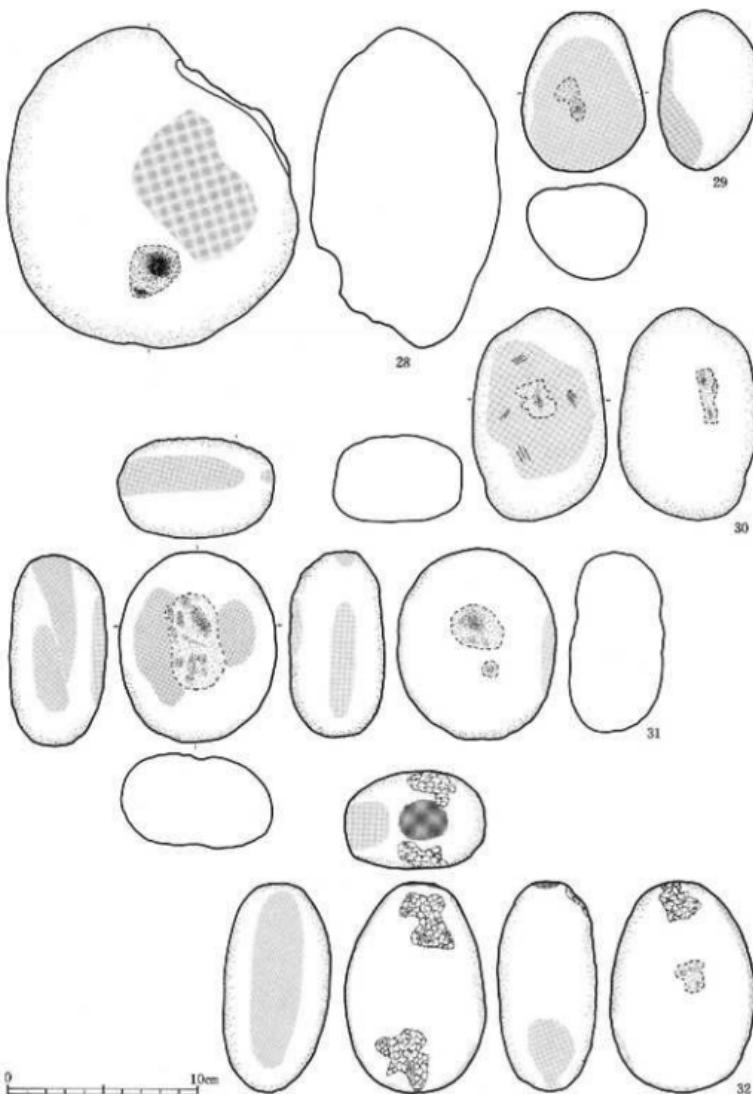
番号	地区	分類	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
14	E37h	I B 凹み 浅	10.6	5.4	3.5	250	石灰岩		Kc86
15	E38e	I B 凹み 浅	9.1	7.9	3.8	350	安山岩		Kc87
16	B29	I B 凹み 浅	9.0	8.2	4.7	500	安山岩		Kc260
17	D38e	I B 凹み 浅	8.8	4.7	3.0	60	砂岩		Kc85
18	D37e	I B 凹み 浅	10.7	6.3	3.6	270	石灰岩		Kc84
19	D37h	I B 凹み 浅	9.8	7.2	4.5	370	石灰岩		Kc78
20	C32c	I B 凹み 浅	10.9	6.5	6.1	500	石灰岩		Kc96
21	E36e	I B 凹み 浅	14.2	12.9	8.3	2320	安山岩		Kc79

第156図 遺物包含層出土疊石器（3）



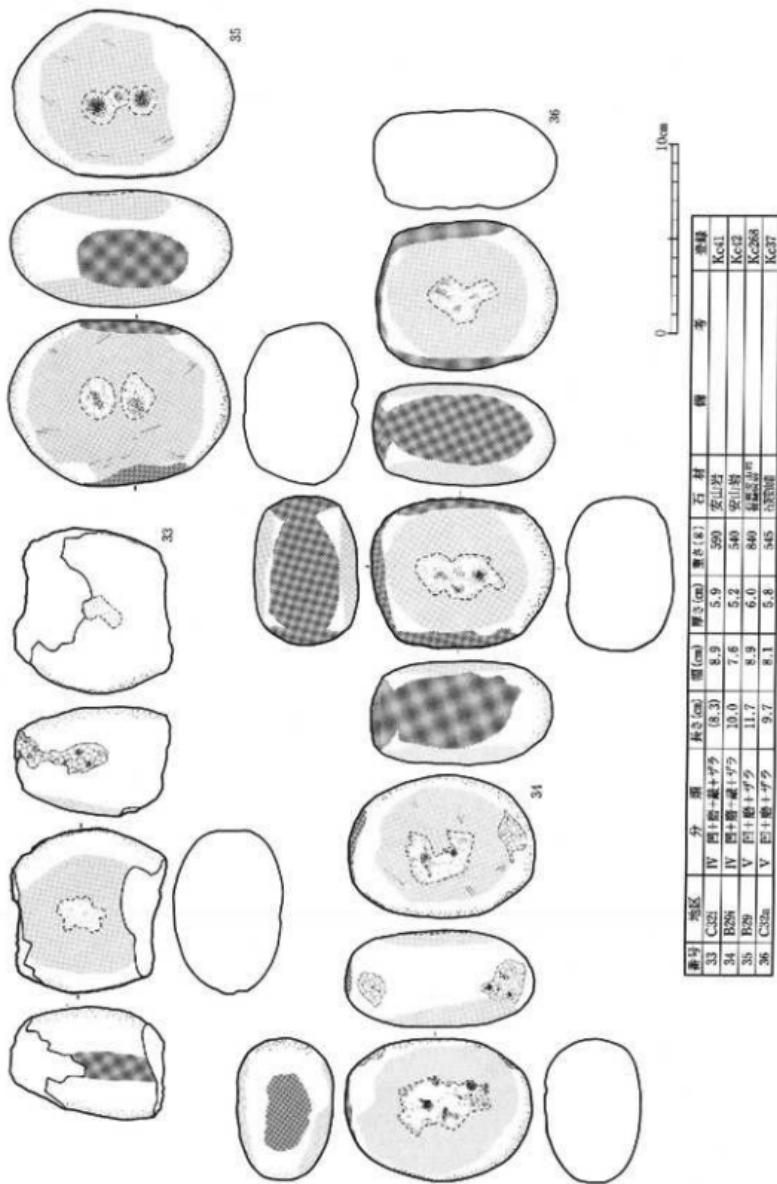
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	石材	備考
22	E35adg	I B 四み 浅	10.0	8.8	6.3	690	安山岩	Kc72
23	E36g	I B 四み 浅	15.4	10.9	5.8	1125	安山岩	Kc73
24	B27	I B 四み 浅	12.1	9.0	5.6	860	安山岩	Kc60
25	C33i	I B 四み 浅	18.5	16.9	7.6	3225	安山岩	Kc59
26	C35f	I B 四み 浅	6.8	4.7	2.5	70	安山岩	Kc74
27	E37c	I B 四み 浅	(5.5)	6.9	2.7	115	安山岩	Kc69

第157図 遺物包含層出土石器 (4)

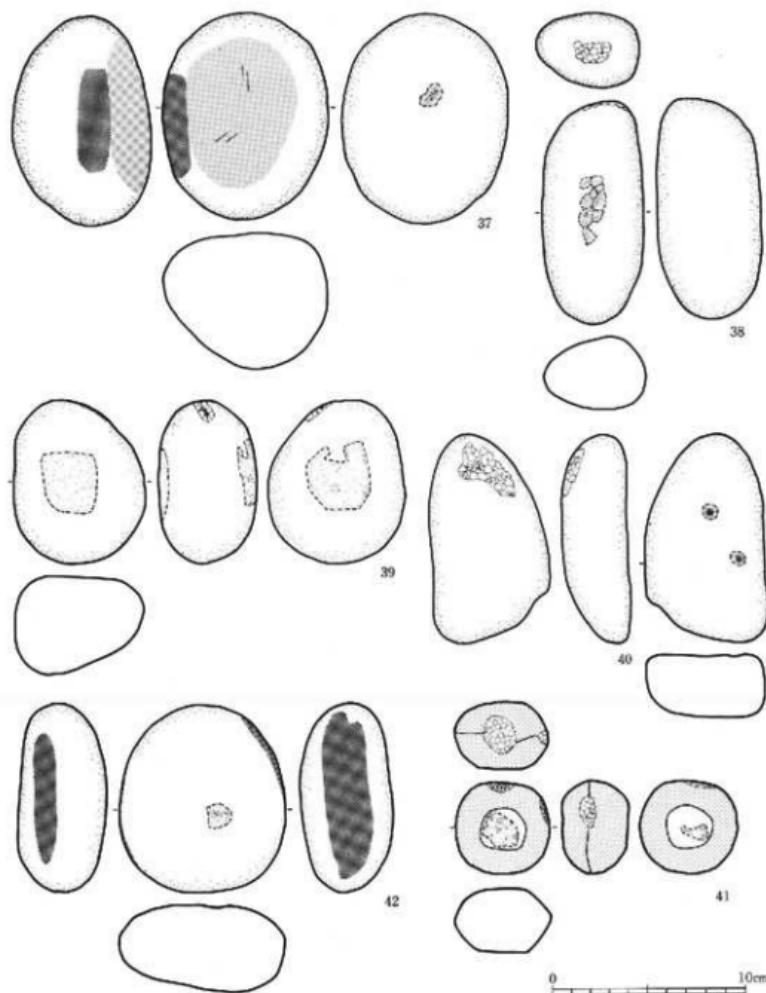


番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
28	B33e	II 四+磨	17.1	15.4	10.0	3550	安山岩		Kc12
29	C39	II 四+磨	8.6	6.7	5.6	360	安山岩		Kc57
30	D37e	II 四+磨	11.4	7.2	4.6	550	毛細研磨		Kc82
31	C35e	II 四+磨	10.2	8.4	5.0	630	安山岩		Kc39
32	E35adg	III 四+磨+破	11.0	7.5	5.3	690	安山岩		Kc40

第158図 遺物包含層出土標石器(5)

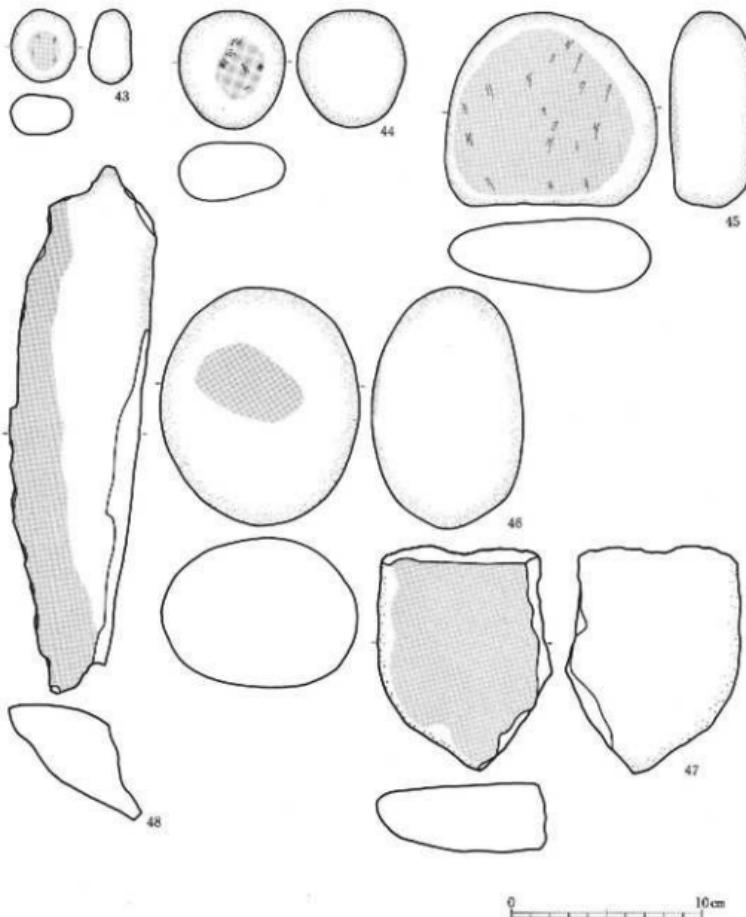


第159図 遺物包含層出土様石器 (6)



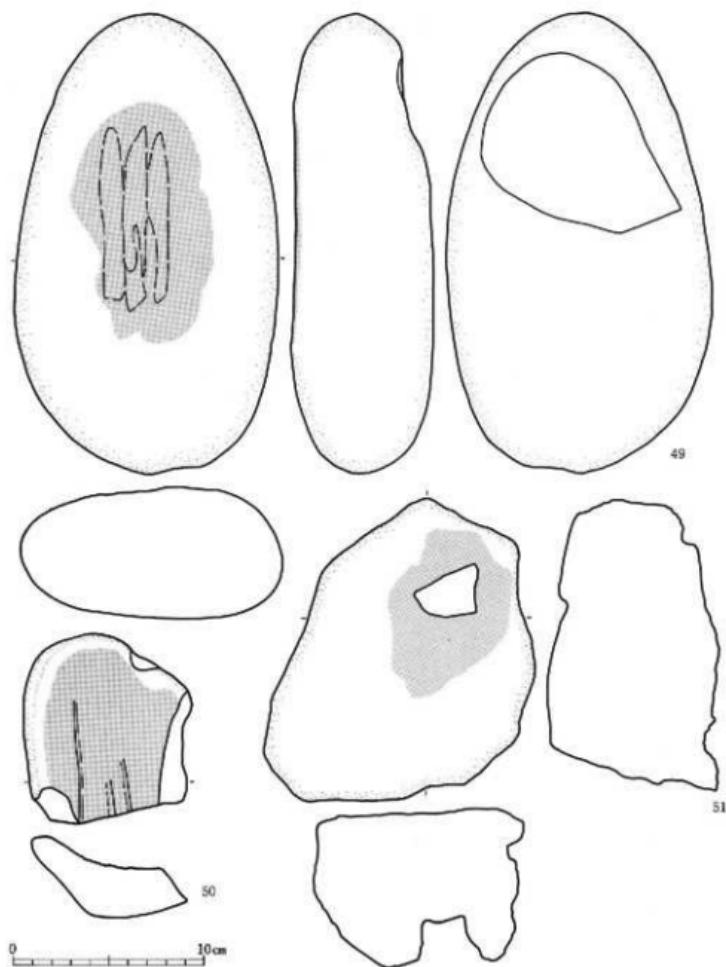
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考	標記
37	C34b	V 四+削+ザラ	11.0	8.0	7.3	1025	安山岩		Kc38
38	C34	VII 四+鋸	11.9	5.5	3.9	310	安山岩		Kc35
39	D36a	VII 四+鋸	8.7	7.0	5.3	430	安山岩		Kc77
40	C33a	VII 四+鋸	11.2	6.5	3.4	380	砂岩		Kc121
41	B36c	VII 四+鋸	4.9	5.0	3.4	150	安山岩	トーン部がタタキ	Kc8
42	E35	VIII 四+ザラ	10.0	8.9	4.7	570	安山岩		Kc93

第160図 遺物包含層出土礫石器 (7)



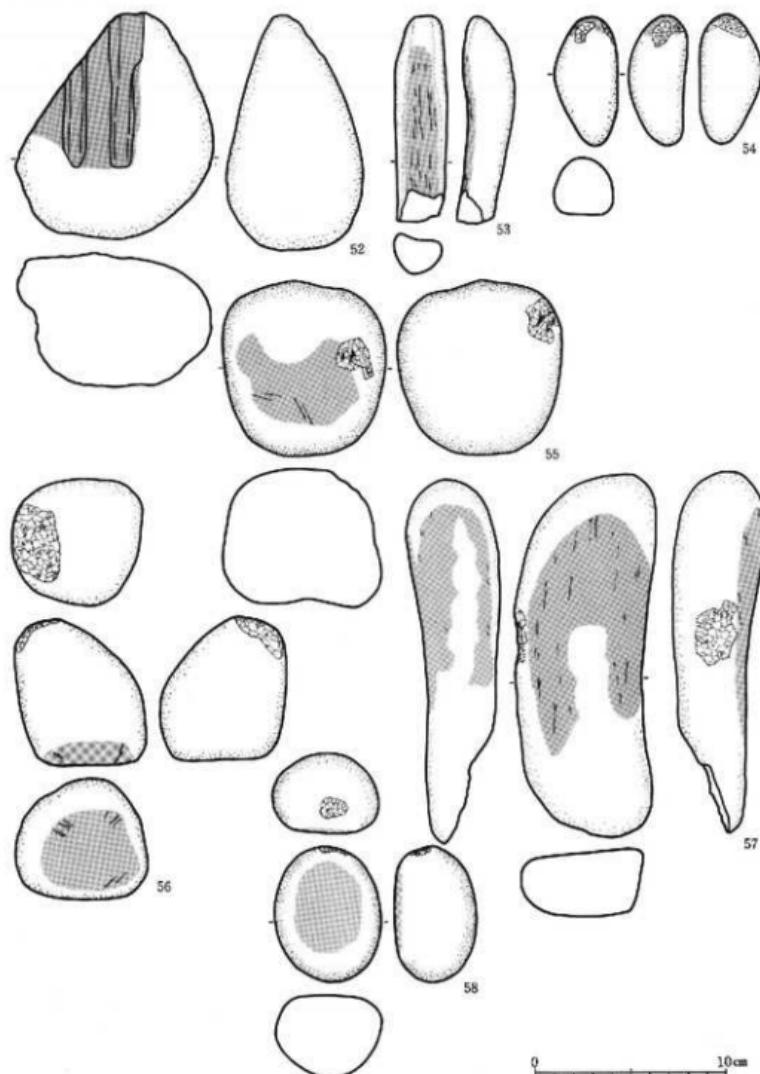
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
43	C14	IX 扇	3.9	3.6	2.1	45	砂岩		Kc20
44	F36	IX 扇	6.3	5.7	3.1	145	和田石		Kc7
45	D34a	IX 扇	10.4	11.3	3.9	800	安山岩		Kc13
46	C33c	IX 扇	12.7	10.6	8.0	1310	安山岩		Kc34
47	D34	IX 扇	(12.1)	(9.3)	(3.8)	430	砂岩		Kc176
48	B29	IX 扇	(28.0)	(8.0)	(6.5)	1320	安山岩		Kc15

第161図 遺物包含層出土石器(8)



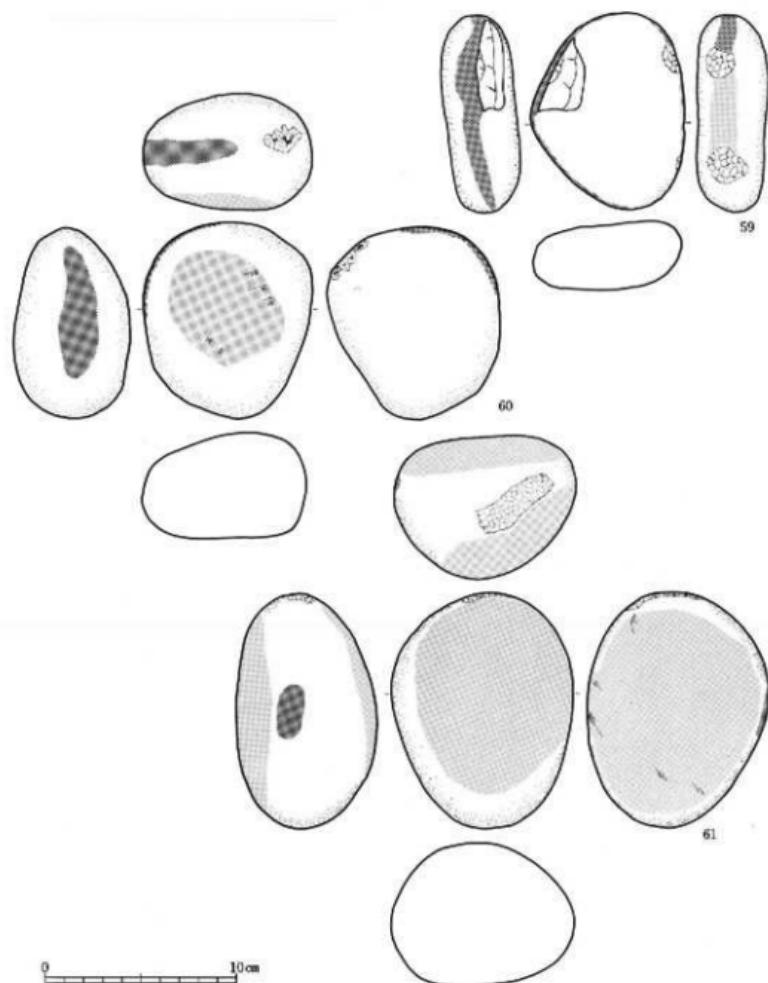
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	機 号	備 考
49	B29	IX 磨	24.5	14.0	7.0	2390	碧玉質岩	Kc187	
50	C33-35	IX 磨	(10.2)	(9.0)	(4.5)	230	碧玉質岩	Kc185	
51	C30	IX 磨	(16.1)	(14.3)	(8.5)	2400	石英岩	Kc259	

第162図 遺物包含層出土石器(9)



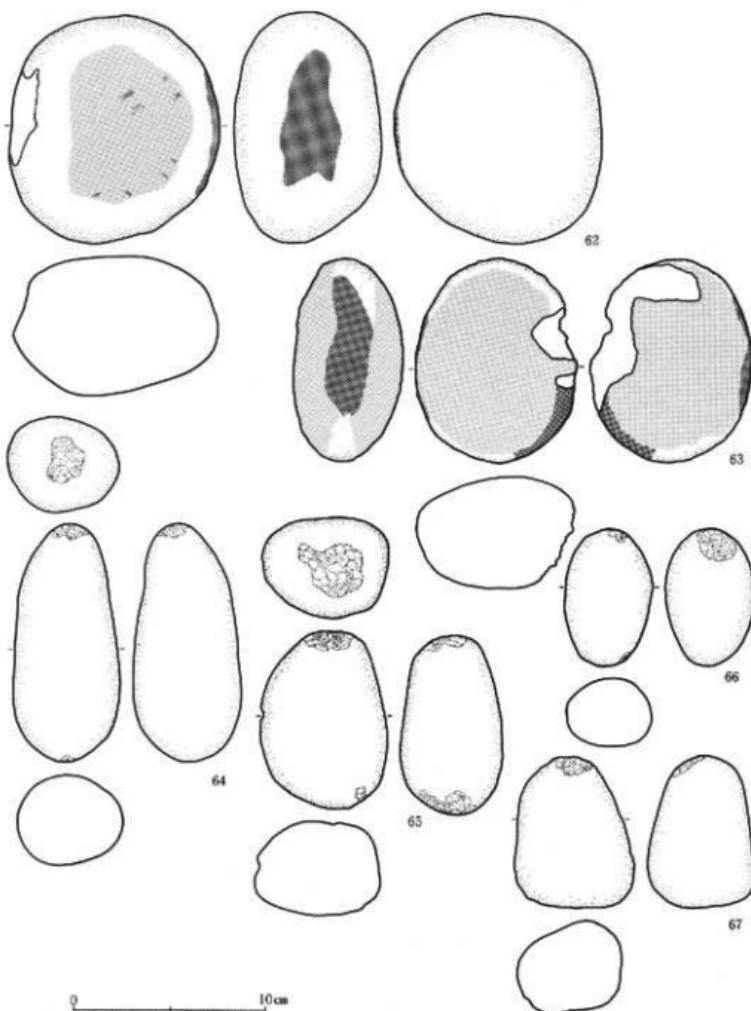
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
52	C36f	IX 斧	(12.0)	(10.5)	(7.2)	970	砂岩	Kc188	
53	B31c	IX 斧	(11.0)	2.8	2.2	55	砂岩	Kc241	
54	D34g	X 斧+敲	7.0	3.3	3.1	90	安山岩	Kc124	
55	B28e	X 斧+敲	9.3	8.7	7.3	860	安山岩	Kc43	
56	B30	X 斧+敲	7.8	6.9	6.4	440	安山岩	Kc103	
57	A23	X 斧+敲	19.3	7.6	3.6	550	安山岩	Kc186	
58	D36d	X 斧+敲	7.2	5.7	4.4	225	安山岩	Kc47	

第163図 遺物包含層出土石器 (10)



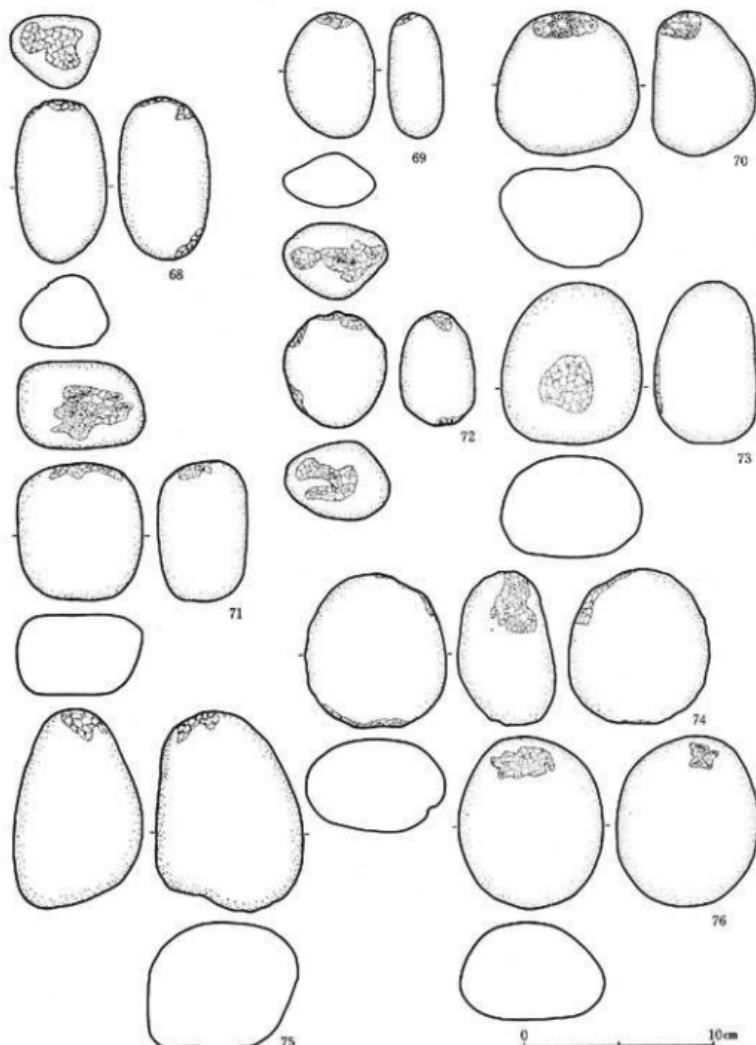
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	巻数
59	B28	II 磨+縫+ザラ	10.6	8.2	3.6	390	硅質岩		Kc164
60	E35g	II 磨+縫+ザラ	10.4	9.0	5.6	275	安山岩		Kc22
61	G39g	II 磨+縫+ザラ	12.5	9.6	7.7	1200	安山岩		Kc30

第164図 遺物包含層出土砾石器 (11)



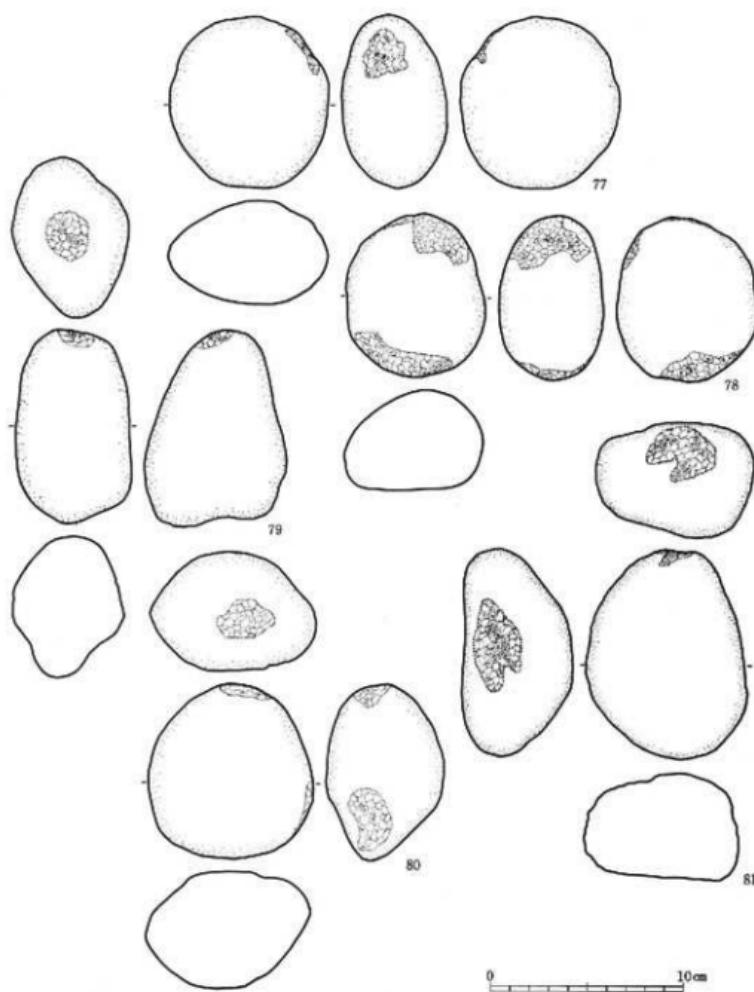
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考	登録
62	F37d	■ 扇-ザラ	12.2	11.0	7.4	1490	安山岩		Kc27
63	C34	■ 扇-ザラ	10.8	8.3	5.9	665	安山岩		Kc49
64	C33	■ 扇	12.6	5.6	4.8	410	石英閃		Kc123
65	H29f	■ 扇	9.5	6.8	5.0	490	安山岩		Kc115
66	F38e	■ 扇	7.4	4.7	3.6	190	安山岩		Kc151
67	D37e	■ 扇	8.1	6.3	4.9	365	安山岩		Kc145

第165図 遺物包含層出土石器 (12)



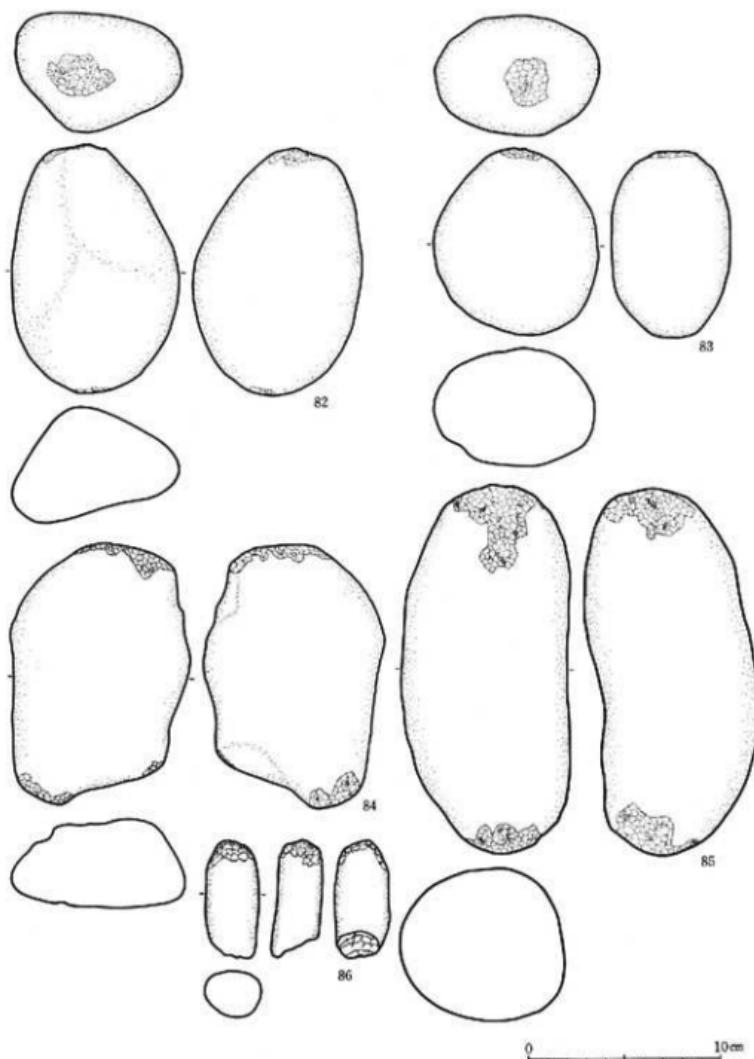
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
68	E35g	豆 磚	6.7	4.8	3.9	210	花崗岩		Kc141
69	B29	豆 磚	6.7	4.8	2.9	120	安山岩		Kc263
70	C31	豆 磚	7.6	7.5	5.4	440	安山岩		Kc156
71	F38g	豆 磚	7.4	6.6	4.3	370	安山岩		Kc150
72	C31b	豆 砖	6.2	5.5	4.2	155	安山岩		Kc119
73	E37h	豆 磚	8.6	7.4	5.5	475	花崗岩		Kc147
74	C34f	豆 磚	8.2	7.5	4.9	390	安山岩		Kc128
75	E36a	豆 磚	10.6	7.8	6.8	830	安山岩		Kc132
76	B28c	豆 磚	9.2	7.6	5.2	490	花崗岩		Kc100

第166図 遺物包含層出土礫石 (13)



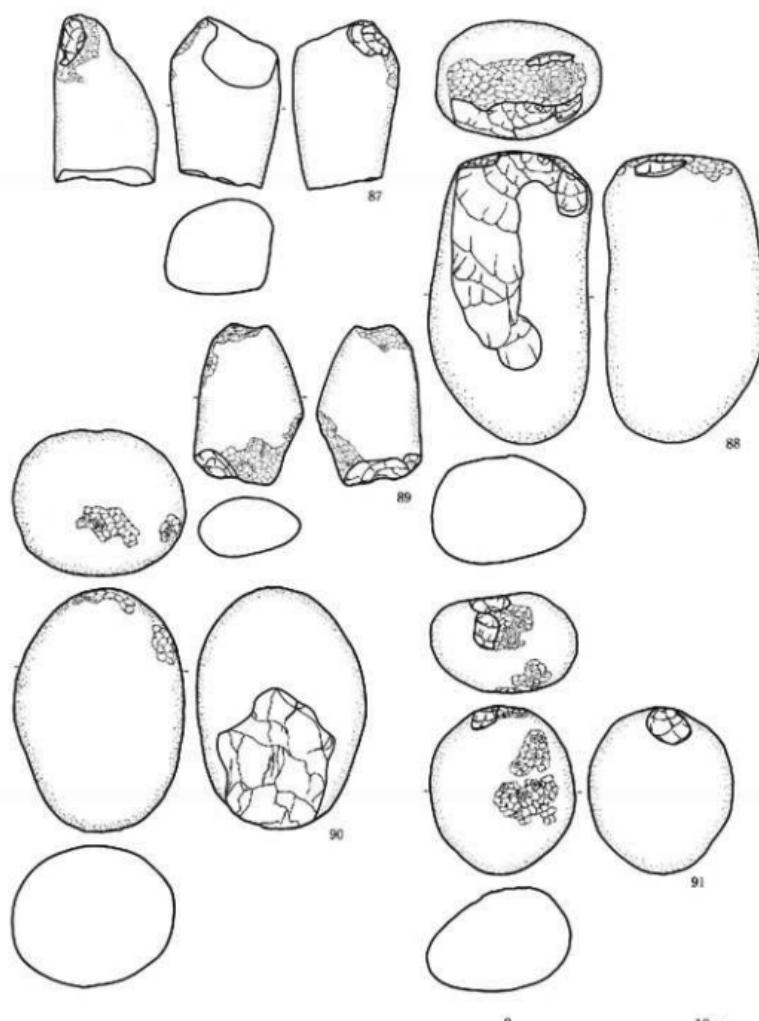
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
77	D37d	石鎚	9.2	8.4	5.5	450	田淵塚		Kc144
78	C35g	石鎚	8.7	7.4	5.3	480	安山岩		Kc130
79	F38e	石鎚	10.5	7.5	5.9	690	安山岩		Kc152
80	B29f	石鎚	9.3	8.7	6.3	565	安山岩		Kc116
81	B29	石鎚	11.1	8.7	5.5	650	石割山岩		Kc96

第167図 遺物包含層出土石器 (14)



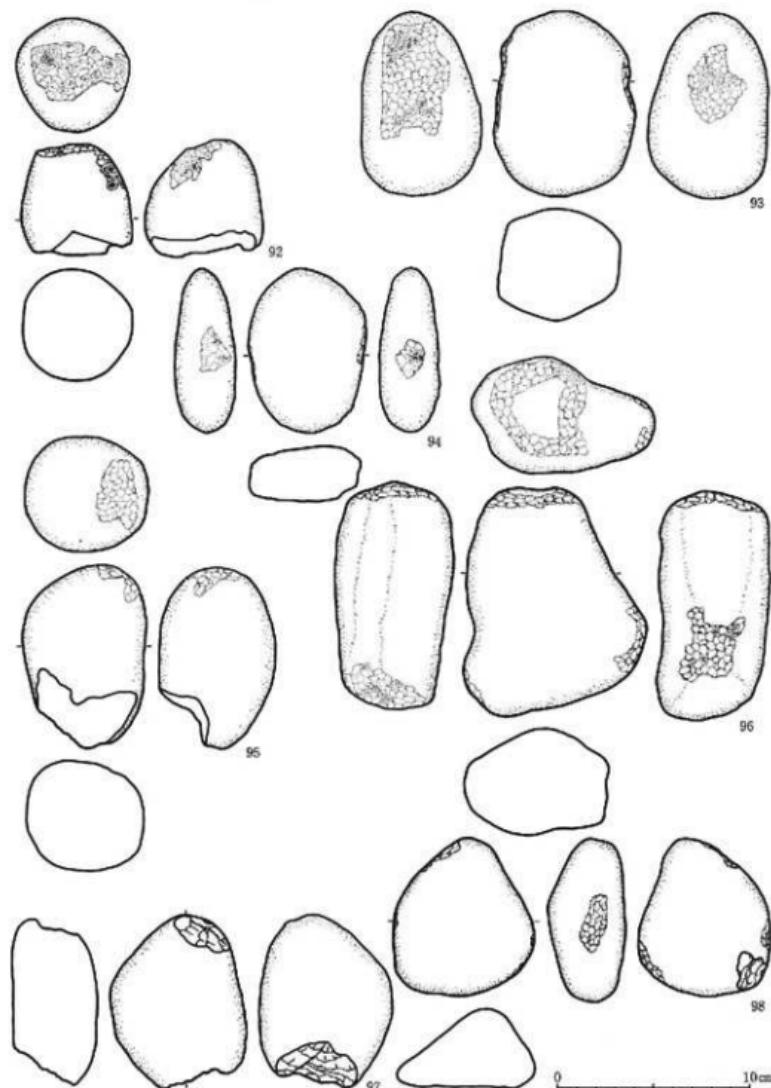
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登錄
82	E36b	刃 鋸	13.3	8.8	6.1	830	安山岩		Kc146
83	B29	刃 鋸	10.0	8.8	6.3	660	安山岩		Kc267
84	D22	刃 鋸	13.9	10.0	4.7	850	輝光岩?		Kc104
85	C36i	刃 鋸	19.6	8.7	8.2	2030	安山岩		Kc46
86	不明	刃 鋸	(6.3)	2.8	2.5	60	安山岩		Kc111

第168図 遺物包含層出土石器 (15)



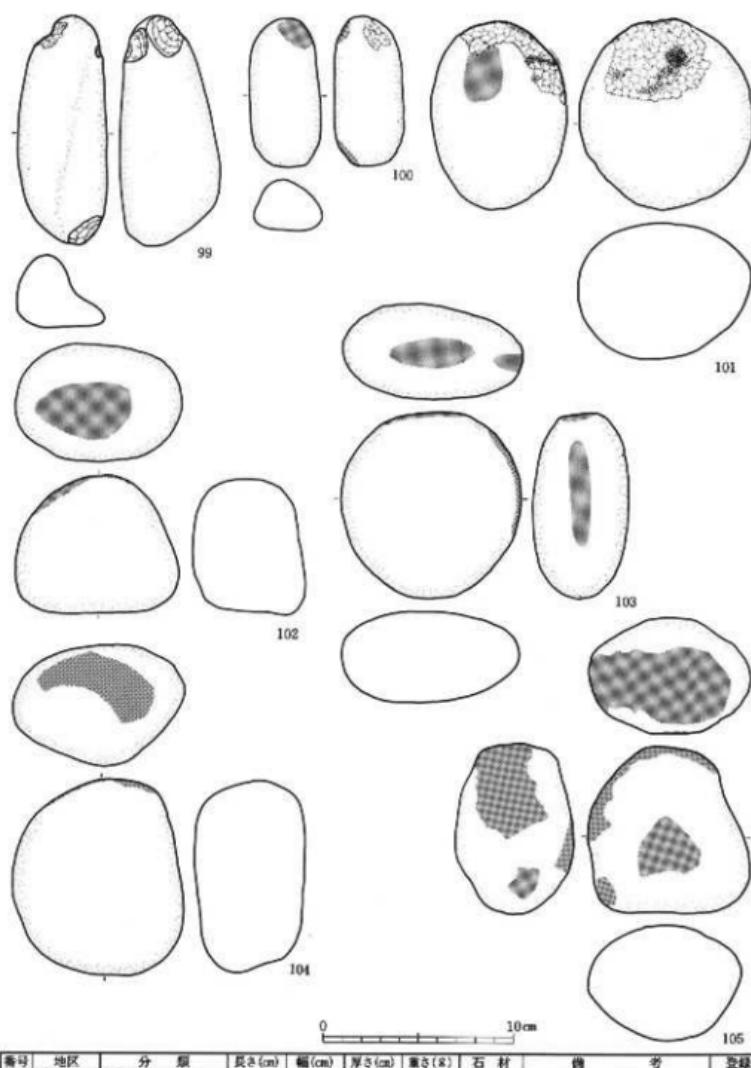
第169図 遺物包含層出土石器 (16)

番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
87	E38i	圓盤	(9.0)	5.7	5.1	310	石英岩		Kc149
88	F38e	圓盤	15.4	8.8	5.7	1150	安山岩		Kc153
89	D35d	圓盤	(8.6)	5.8	3.2	205	安山岩		Kc138
90	C30g	圓盤	12.9	9.0	7.5	1240	安山岩		Kc114
91	D37h	圓盤	8.9	7.7	5.5	450	石英岩		Kc137



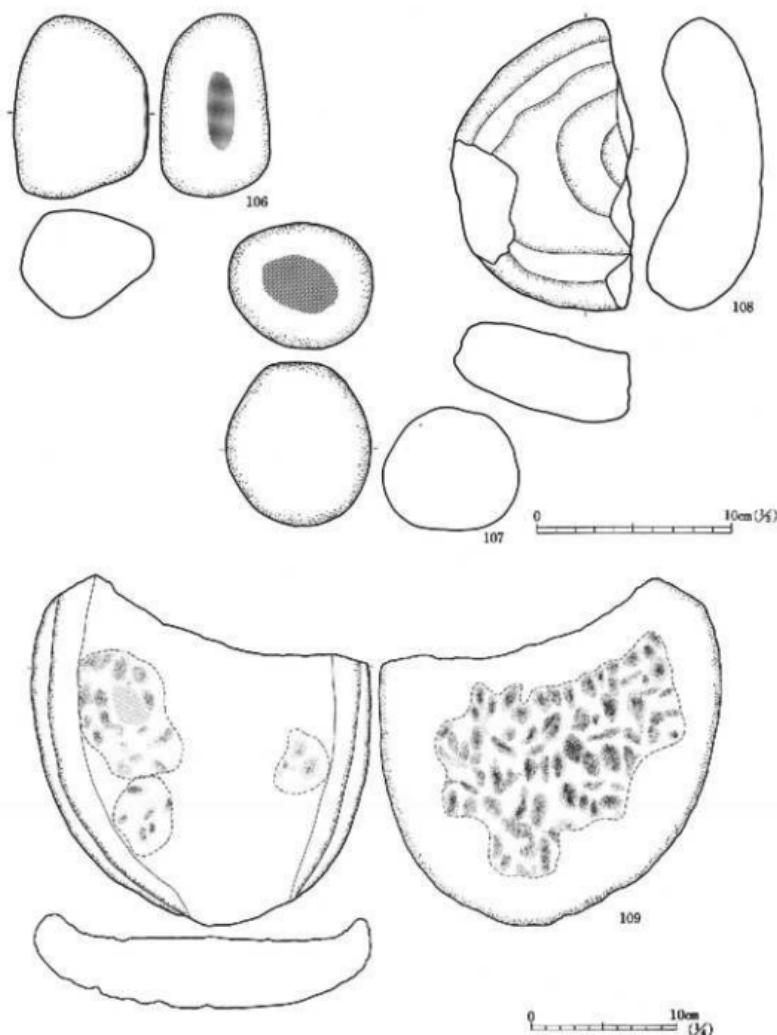
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石種	備考	世紀
92	H28	刃先	(6.0)	5.9	6.0	270	安山岩		Kc110
93	F36a	刃先	9.8	7.4	5.8	565	安山岩		Kc148
94	C32e	刃先	5.8	6.2	3.0	205	石英斑岩		Kc165
95	E36b	刃先	9.8	6.5	5.9	500	石英斑岩		Kc145
96	C35i	刃先	12.2	9.5	5.6	850	石英斑岩		Kc129
97	D35b	刃先	9.3	7.2	4.5	360	安山岩		Kc135
98	E35a	刃先	8.5	7.5	4.2	270	石英斑岩		Kc139

第170図 遺物包含層出土石器 (17)



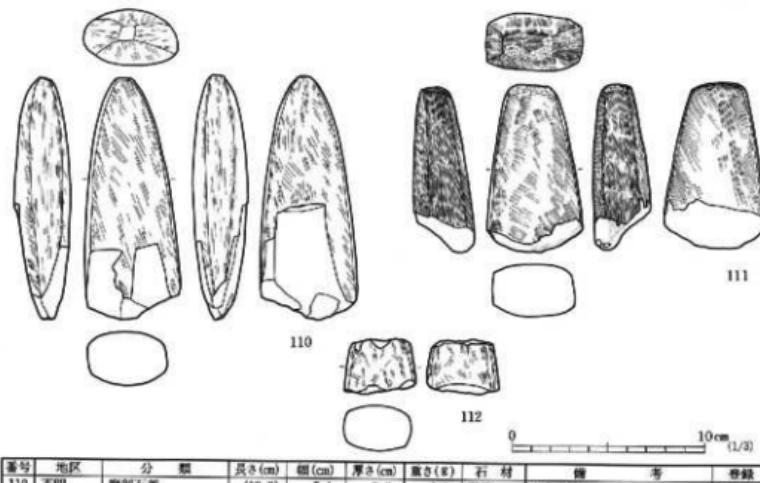
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
99	C28	遺 敷	12.2	4.7	3.8	270	砂岩		Kc99
100	B29	XV 鋸+ザラ	8.0	3.6	2.7	110	安山岩		Kc262
101	B29	XV 鋸+ザラ	10.0	9.1	7.1	750	安山岩		Kc158
102	D32g	XV ザラ	7.3	8.8	5.9	530	安山岩		Kc160
103	C28a	XV ザラ	9.9	9.6	4.9	640	安山岩		Kc161
104	E37f	XV ザラ	10.5	9.2	5.8	760	石英斑岩		Kc170
105	E36g	XV ザラ	8.9	8.5	6.1	535	砂岩		Kc167

第171図 遺物包含層出土石器 (18)



番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
106	D35i	IV ダラ	9.7	7.1	5.7	415	砂岩		Kc168
107	G39g	IV ダラ	8.8	7.5	6.6	625	安山岩		Kc188
108	E36e	石皿	(15.6)	(9.7)	5.9	940	安山岩		Kc179
109	C34	石皿	(24.9)	23.9	6.5	3000	安山岩	裏面に凹み	Kc178

第172図 遺物包含層出土石器 (19)



第173図 遺物包含層出土砾石器 (20)

石鎌 (119~160) 扁平で梢円形の小砾を素材とし、その側辺を加工したものである。加工した側辺の数により4大別し、さらにその位置関係より細分した。加工方法は表裏面の中心へ向かう剝離、側面での厚みの方向への両極剝離、敲打、の3種があり、それらが組み合わされる。

I類 1側辺に加工されるもの(119~125)。

A : 短軸の片端に加工されるもの(119、120、122、123、125)。122は最大のものである。

B : 長軸の片端に加工されるもの(121、124)。

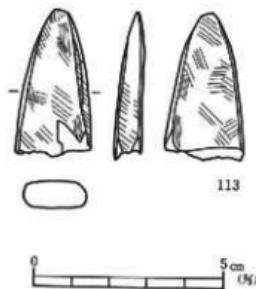
II類 2側辺に加工されるもの(126~138)。

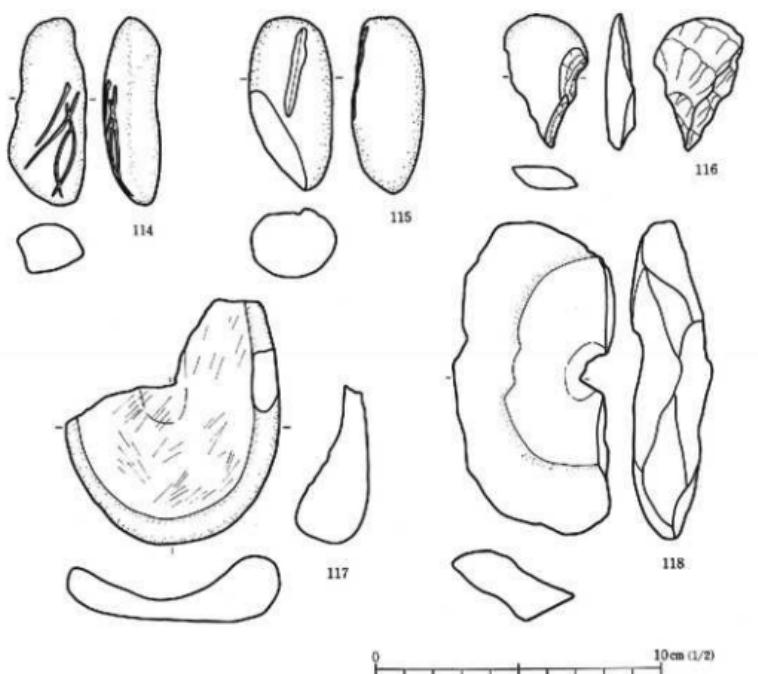
A : 短軸の両端に加工されるもの(128~138)。136は加工面の中央に溝状のくぼみがある。

B : 長軸の両端に加工されるもの(126、127)。

III類 3側辺に加工されるもの(139~152)。

A : 短軸の両端ともう一端に加工されるもの(139~149、151)。この類は大きさがそろってい





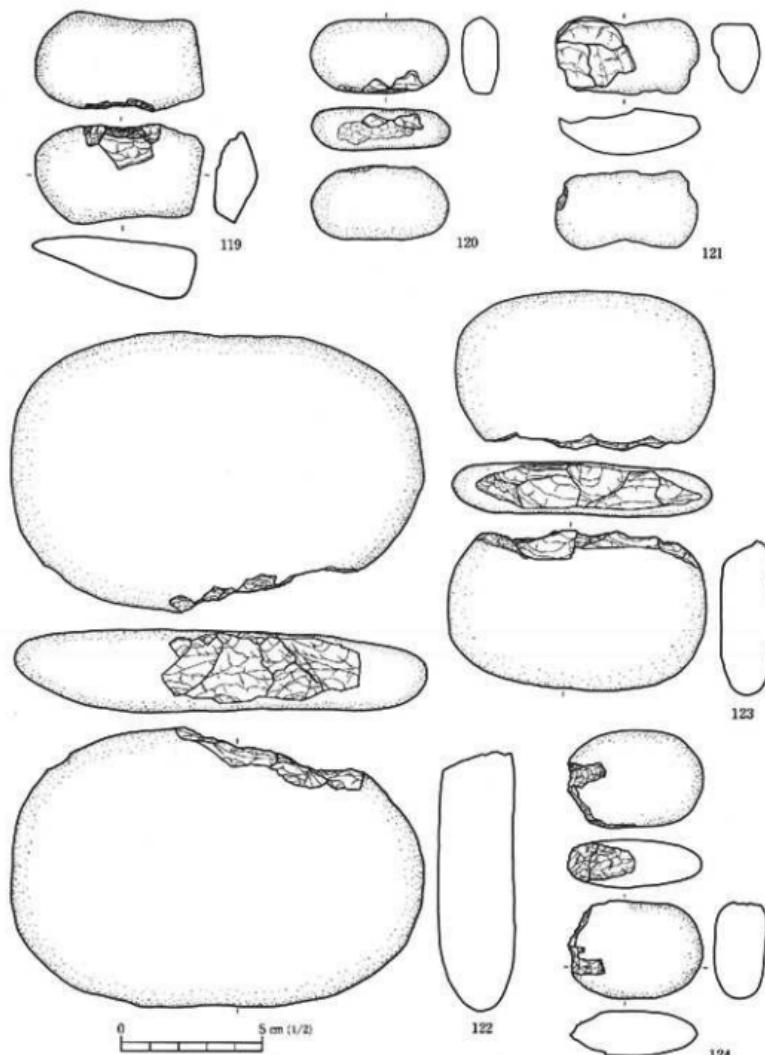
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	世紀
114	C31	縦削錐	6.7	2.7	1.7	20	碧玉質岩		Kc239
115	C35	縦削錐	(6.3)	2.9	2.4	20	碧玉質岩		Kc240
116	C31	剝片	(4.7)	(3.0)	0.8	10	碧玉質岩		Kc234
117	E37	石塊	(8.6)	(7.5)	2.3	60	碧玉質岩	破損	Kc242
118	不明	石塊	(11.2)	(5.8)	(2.5)	90	碧玉質岩	破損	Kc269

第174図 遺物包含層出土石器(21)

る。149は中央に溝状の加工が一周している。

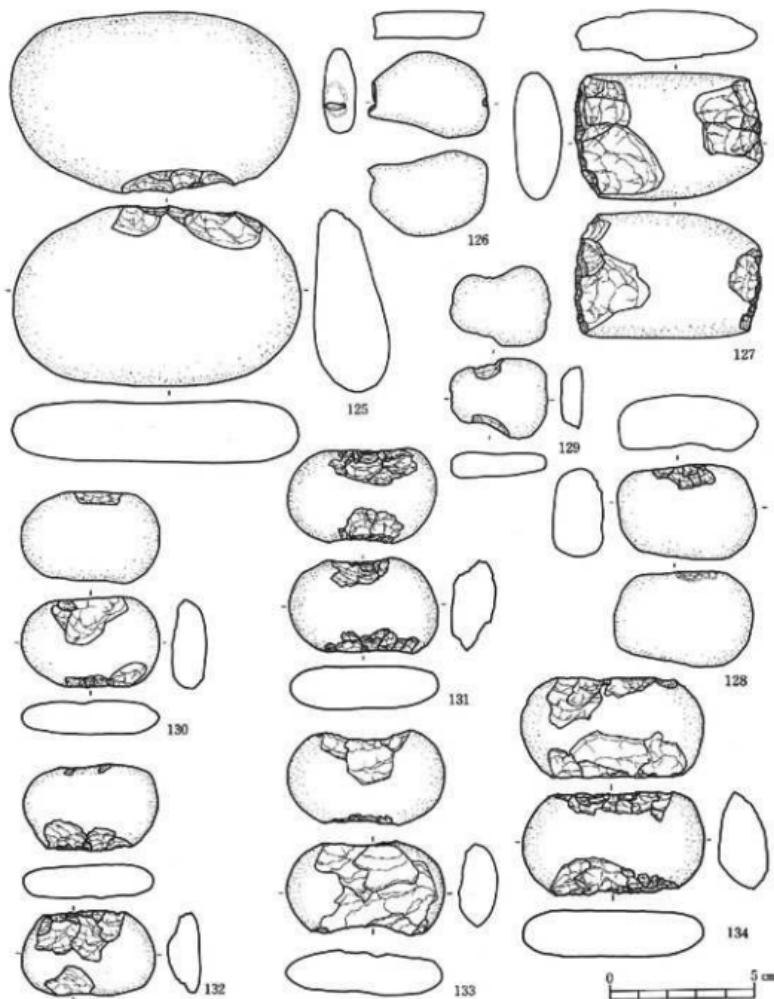
B：長軸の両端ともう一端に加工されるもの(150、152)。

IV類 4側辺に加工されるもの(153～160)。153～155は剝片を素材としている。



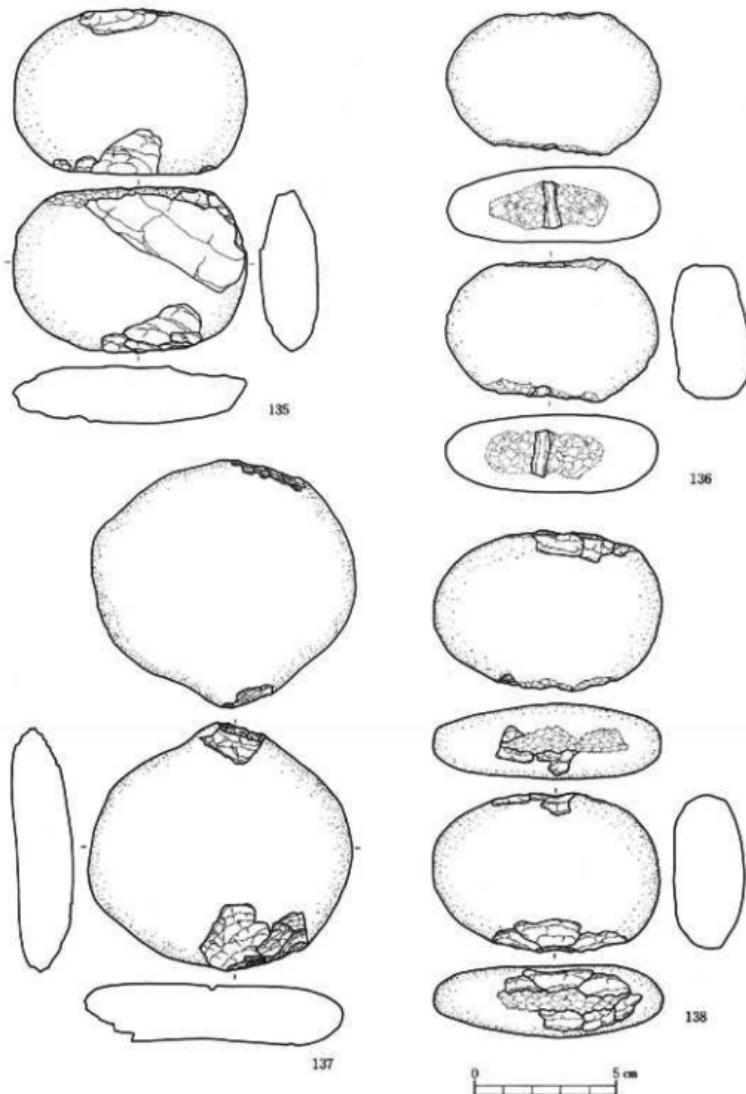
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	管號
119	D35	I A	6.0	3.5	1.9	27.8	青島灰岩		Kc199
120	D35c	I A	4.8	2.6	1.3	29.1	砂岩		Kc224
121	C29	I B	5.1	2.7	1.6	17.1	新島灰岩		Kc294
122	B29	I A	14.6	10.0	2.7	660.9	安山岩		Kc214
123	D33a	I A	9.2	5.7	1.8	150.6	石英岩		Kc216
124	C30d	I B	4.7	3.5	1.7	41.7	安山岩		

第175図 遺物包含層出土石器 (22) 石錐



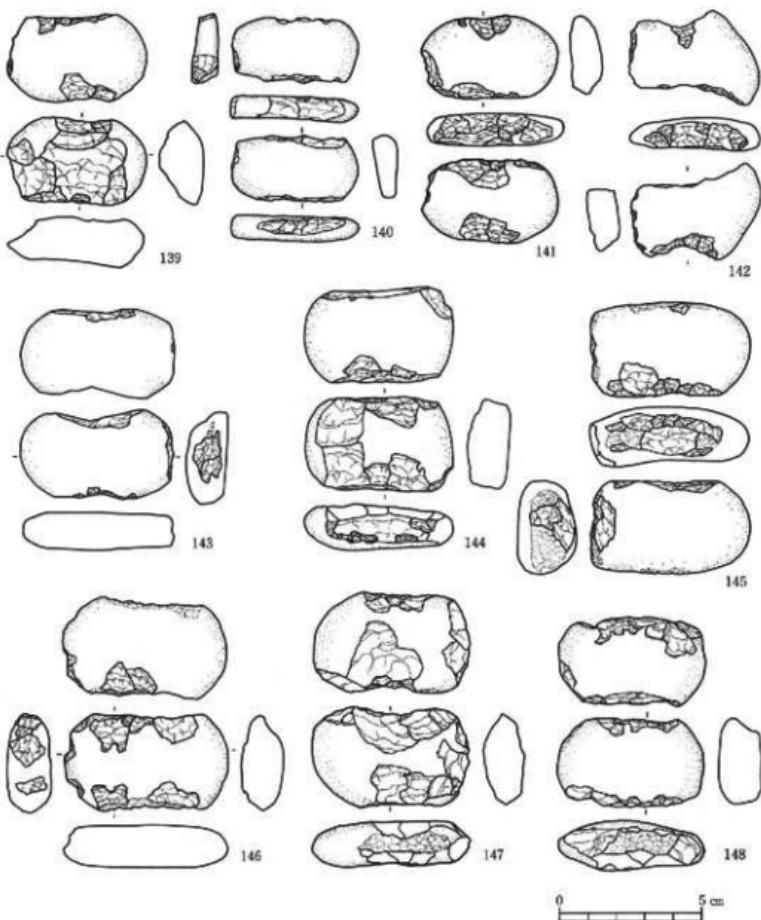
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
125	C32c	I A	10.2	6.4	2.2	247.9	宝山岩		Kc196
126	B29	II B	4.2	2.8	1.0	16.8	砂岩		Kc251
127	E36f	II B	6.6	4.5	1.8	75.7	砂岩		Kc234
128	B30h	II A	4.9	3.4	1.8	54.2	宝山岩		Kc193
129	不明	II A	3.4	2.8	0.9	8.3	鳥居岩		Kc252
130	D37e	II A	4.9	3.2	1.2	32.3	宝山岩		Kc229
131	C32f	II A	5.2	3.4	1.5	40.7	宝山岩		Kc217
132	F37a	II A	4.7	3.0	1.1	24.0	砂岩		Kc232
133	B30h	II A	5.6	1.9	1.6	37.1	石灰岩		Kc194
134	D36f	II A	6.5	3.6	1.7	61.1	五色山		Kc222

第176図 遺物包含層出土磨石器 (23) 石錘



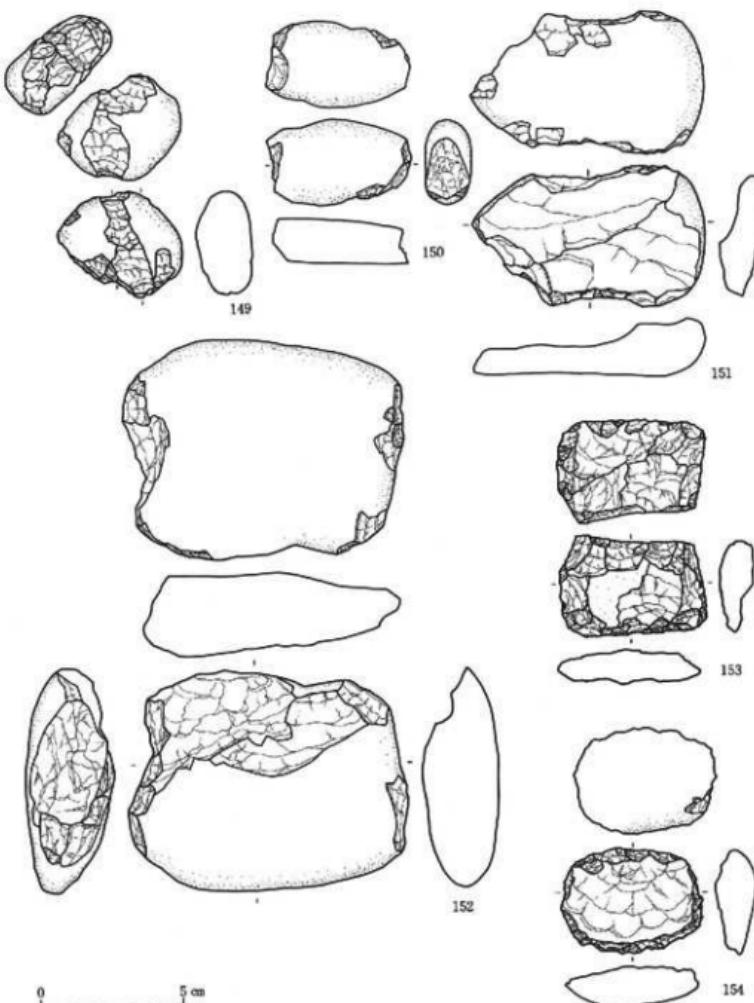
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
135	C29?	II A	8.2	5.9	2.1	133.2	安山岩		Kc237
136	B30g	II A	7.5	5.1	2.6	109.7	安山岩		Kc201
137	B30	II A	9.4	8.8	2.1	236.6	石英岩		Kc236
138	F38d	II A	8.1	5.6	2.5	166.4	安山岩		Kc231

第177図 遺物包含層出土石器(24) 石錘



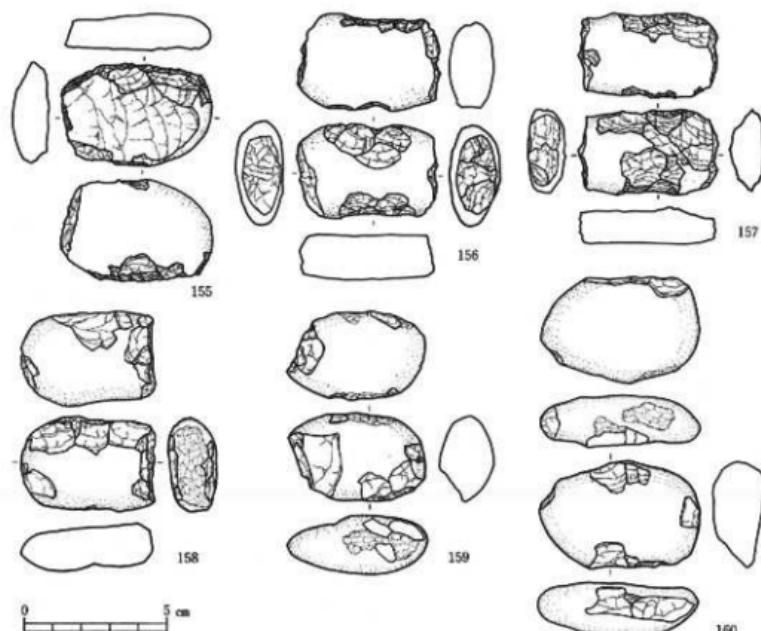
番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石種	備考	登録
139	D37d	III A	4.9	3.0	1.7	33.3	角礫岩		Kc230
140	D35	III A	4.5	2.3	0.9	33.5	砂岩		Kc200
141	D36	III A	4.8	2.9	1.1	19.8	石英安山岩		Kc198
142	D35f	III A	4.6	3.5	1.1	11.6	安山岩		Kc226
143	E36b	III A	5.4	3.2	1.3	36.8	砂岩		Kc225
144	B30	III A	5.2	3.3	1.5	46.1	石英安山岩		Kc203
145	E36h	III A	5.6	3.4	2.1	56.1	安山岩		Kc219
146	B29g	III A	5.9	3.5	1.5	49.8	安山岩		Kc207
147	D32	III A	5.5	3.5	1.5	41.5	石英安山岩		Kc235
148	E37g	III A	5.2	3.1	1.5	41.7	安山岩		Kc218

第178図 遺物包含層出土石器(25) 石鎚



番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石・材	備考
149	C35h	III A	4.1	3.4	2.2	46.3	石英閃石岩	Kc115
150	C32i	III B	5.1	3.1	1.6	36.7	砂岩	Kc195
151	C34	III A	8.3	5.0	2.1	50.0	安山岩	Kc212
152	B29	III B	9.9	7.9	2.7	294.3	安山岩	Kc238
153	B38e	IV	5.2	3.6	1.2	25.9	石英閃石岩	Kc213
154	D34a	IV	5.0	3.7	1.4	26.3	石英閃石岩	Kc220

第179図 遺物包含層出土石器 (26) 石錐



番号	地区	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
155	F35d	IV	5.3	3.6	1.3	31.5	石英閃石岩	Kc233	
156	D36g	IV	5.0	3.3	1.6	40.9	石英閃石岩	Kc223	
157	C28	IV	5.0	3.0	1.3	26.5	砂岩	Kc205	
158	E37g	IV	4.8	3.3	1.5	37.0	安山岩	Kc228	
159	E36b	IV	4.9	3.1	1.9	25.2	石英安山岩	Kc227	
160	D37e	IV	5.7	3.8	1.9	52.8	角閃安斜岩	Kc221	

第180図 遺物包含層出土繩器(27) 石錘

(2) II・III区出土遺物

III区出土遺物 (第181~187図)

土器 (第181~184図) 2層(1) 無文の口縁部片である。4層(2~5) 2は突起で、非対称形である。4は縄文が施される丸底碗である。5層(6~20) 6は突起で、側面に沈線と刺突を持つ。7は波状口縁に沿う平行沈線と斜位に下がる沈線がある。10は文様3類、12は内面に文様を持つ浅鉢、15は高环状の小形土器である。7~9層(21~30)層名はさまざままだが、包含層の下層である。23は浅鉢である。28は胴部が丸くふくらみ口縁部の開く壺で、口縁部に縄文帯、体部に「S」状の文様が描かれる。29は6層および9層から出土し、同一個

体と考えられる破片で、ラグビーボール状の器形と推定される。 層位不明(34～85) 主に搅乱出土の土器である。34～39は平行する磨消繩文帯が施される。40は深堀区の疊層直上出土の遺物で、突起がはがれている。外面には沈線文、内面は隆起している。41には逆「の」状沈線と集合沈線が描かれ、加曾利B1式の注口土器に用いられる文様に類似する。45は突起上面にキザミが加えられる。

剥片石器(第185図) 1は棒状の石錐である。3、4は石匙で、3は粗雑なつくりである。2、5は石核である。

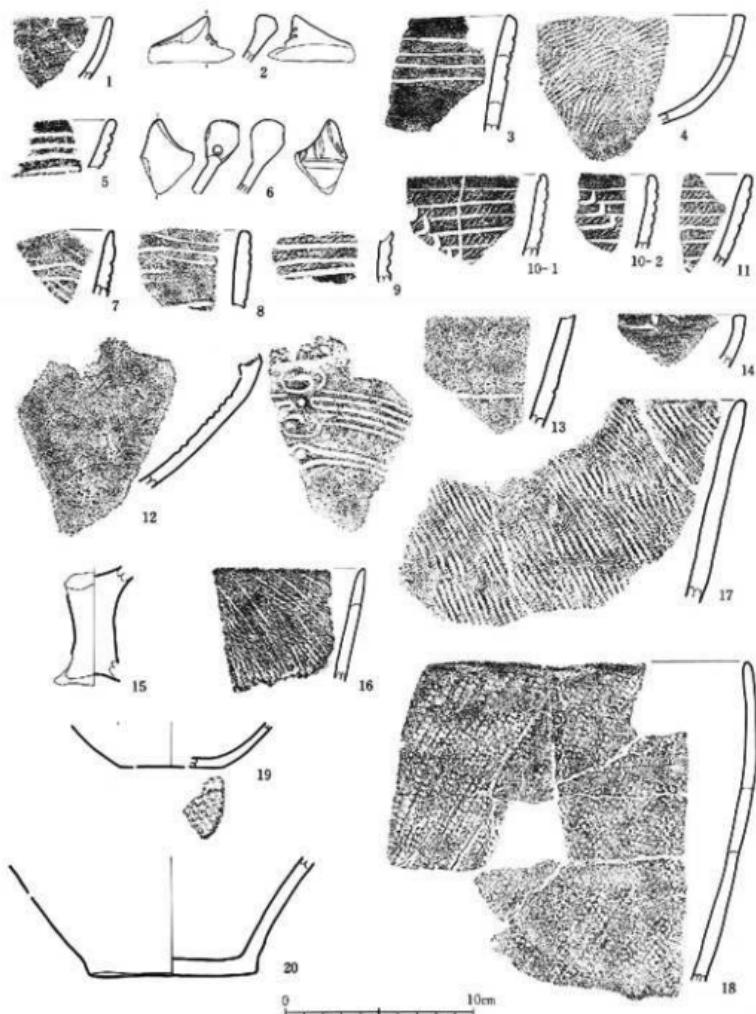
礫石器(第186・187図) タタキ石などの礫石器、磨製石斧、石鎌が出土している。石鎌はIII区包含層と同様のものである。

II区出土遺物(第188～192図)

土器(第188～192図) 2層(1) 繩文の施文された深鉢である。 3層(2～6) 2は口縁部に撻糸圧痕、4は沈線が引かれ、包含層出土土器12に似る。 5層(7～28・65) II区では最も出土量が多い層である。また、出土土器の文様はIII区包含層と同じである。7は包含層出土土器113・116に似る4類の文様である。10は包含層出土土器117～121に似る。 6層(29) 深鉢の体部下半で、底部網代痕は、3本超え3本潜り3本送りである。 遺構出土(30～51) 各遺構から出土しているものである。36～43は「SD2」と記名されるが対応する遺構は不明である。42は当調査唯一の注口部の破片である。体部との接合部近くの下部に「の」字状の沈線文が描かれる。 層位不明(52～64) 52・53は壺である。52は大きく広がる口縁である。53は体部上半に沈線による入り組み文が描かれる。54は10に似るものである。55は晩期(大洞BC式)のものである。63は体部下端に隆帯を持つ底部資料である。

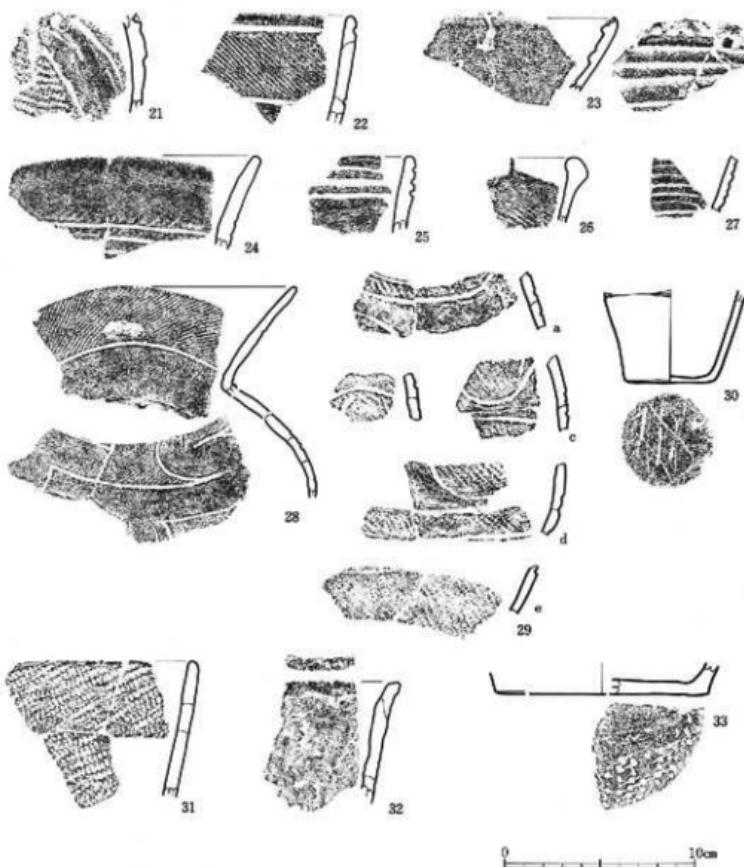
剥片石器(第193図) 2、3は石錐で、剥片の一端を利用し尖端部をしているものである。4は縦長の石匙である。1、5は不定形石器IB類にあたり、1は側刃に急角度の加工が施されている。

礫石器(第194～198図) 主に5層から出土している。3の凹み石は非常に大型の砾を使用している。11の石皿は、皿部の一部が一段くぼんでいる。石鎌は3点あり、III区包含層と同様のものである。



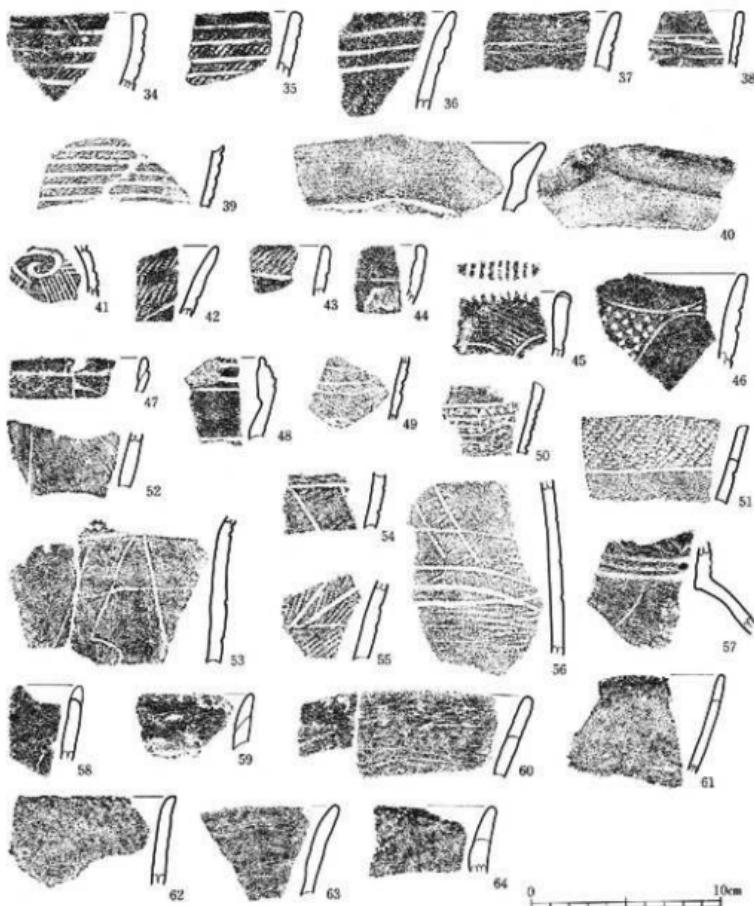
番号	地区	層位	文様の特徴	番號	地区	層位	文様の特徴	変種	
1	C28	2層		A1342	11	5層	網文LR、沈縫	A1830	
2	C36	4層	突起部分、沈縫	P121	12	F38	5層	網文、沈縫	A2253
3		4層	沈縫	A497	13	C32	5層	沈縫	A1858
4	F27	4層	網文LR	A1352	14	D37	5層		A607
5	D38	4層	沈縫	A520	15	D36	5層		A134
6	E36	5層	突起部分、沈縫、刺突	P122	16	C31	5層	網文R	A742
7	E36	5層	波状口縁、沈縫	A2179	17	F38	5層	網文RL	A1242
8	E36	5層	沈縫	A2160	18	E38	5層	網文LR	A177
9	D36	5層	網文LR、沈縫	A1950	19	F38	5層	底径5.4cm(1/4)>、網文A	A1666
10		5層	網文LR、沈縫(跡分析)	A1234	20	B29	5層	底径8.9cm、ミガキ	A1647

第181図 III区出土土器 (1)



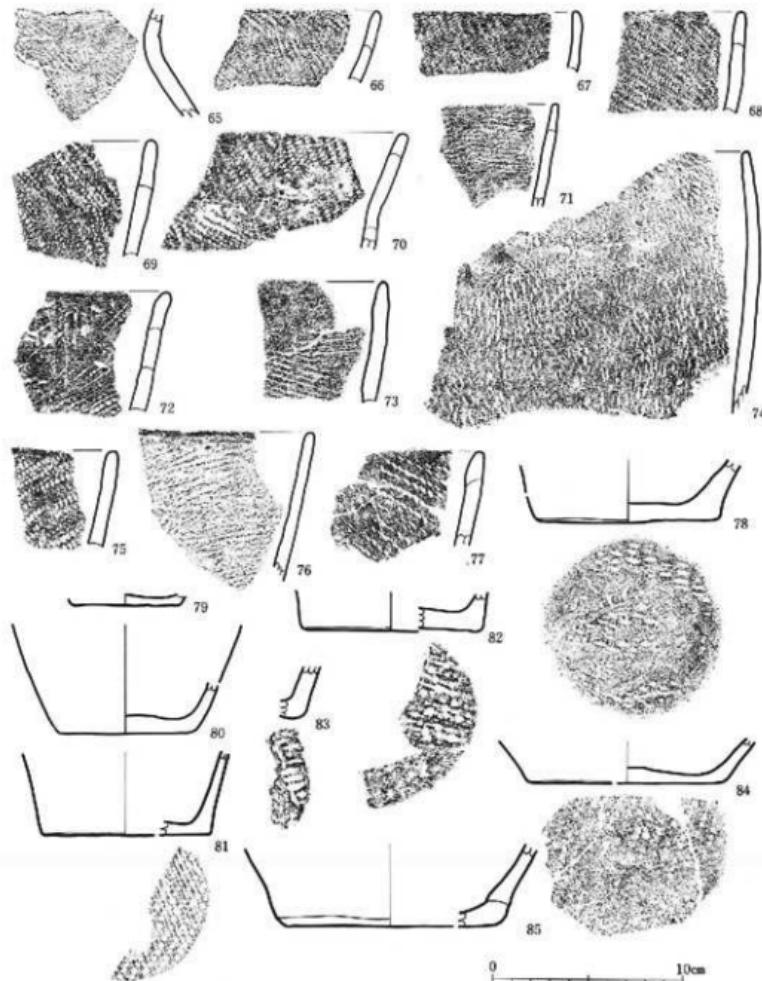
番号	地区	層位	文様の特徴	登録番号	番号	地区	層位	文様の特徴	登録番号
21	D34	7層	縄文LR、沈線、利突	A2091	28	D33	9層	縄文LR、沈線	A1369
22	D34	7層	縄文RL、沈線	A1232	29	D33	9層	縄文RL、沈線	A125
23	F38	8層	利突、沈線、沈線間に縦いキザミ	A133	30	D32	9層	沈線、底径4.6cm、木製底	A1683
24	D33	9層	縄文LR、沈線	A488	31	B27	1~6層	縄文LR	A213
25	D34	9層	縄文LR、沈線	A507	32	B27	1~6層	口部～全体に成形痕著しい	A1336
26	D33	9層	突起、縄文RL	A565	33	B27	1~6層	底径11.2cm、縄文底A	A1657
27	D34	9層	沈線	A1367					

第182図 Ⅲ区出土土器（2）



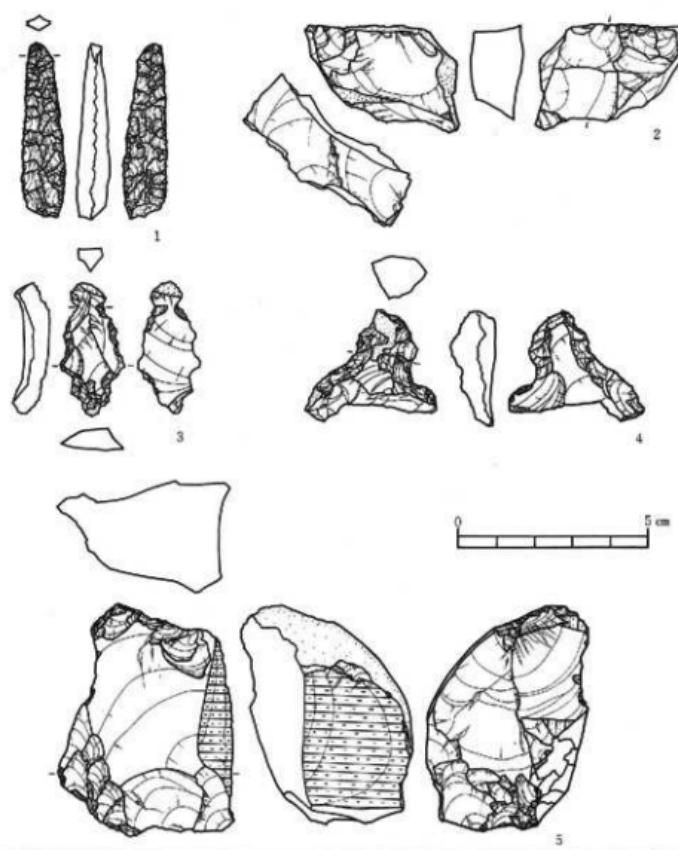
番号	地区	文様の特徴		地図	文様の特徴		番号
		登録	番号		登録	番号	
34	B27	縦文 LR、沈線	A501	50	沈線、刺突	A170	
35		縦文 LR、沈線	A1252	51	縦文 RL、沈線	A1954	
36		沈線	A1251	52	縦文 LR、沈線	A1908	
37		沈線	A1278	53	縦文 LR、沈線	A1908	
38	D33	沈線 (部位平行+部位短線)	A521	54	D33 9層出土、縦文不明、沈線	A1749	
39		縦文 LR、沈線	A1996	55	C30 縦文 LR、沈線	A1949	
40	鉢器	沈線、内面に段	A2155	56	縦文 LR、沈線	A1748	
41		沈線	A1455	57	目曲輪縦線状になりコブ付、縦文 RL、沈線	A1358	
42		波状口縁、縦文 LR、沈線	A1248	58	B27 完起	A942	
43		縦文 LR、沈線	A420	59	B31	A590	
44		縦文 LR?、沈線、口縁内面に沈線	A1326	60		A1255	
45		突起部分、頂部キズ、縦文不明、沈線	A1246	61	D33	A791	
46		波状口縁、沈線、病突	A1245	62		A1286	
47		沈線	A722	63		A1256	
48		沈線	A1249	64	D32	A591	
49		縦文 LR、沈線	A1446				

第183図 Ⅲ区出土土器（3）



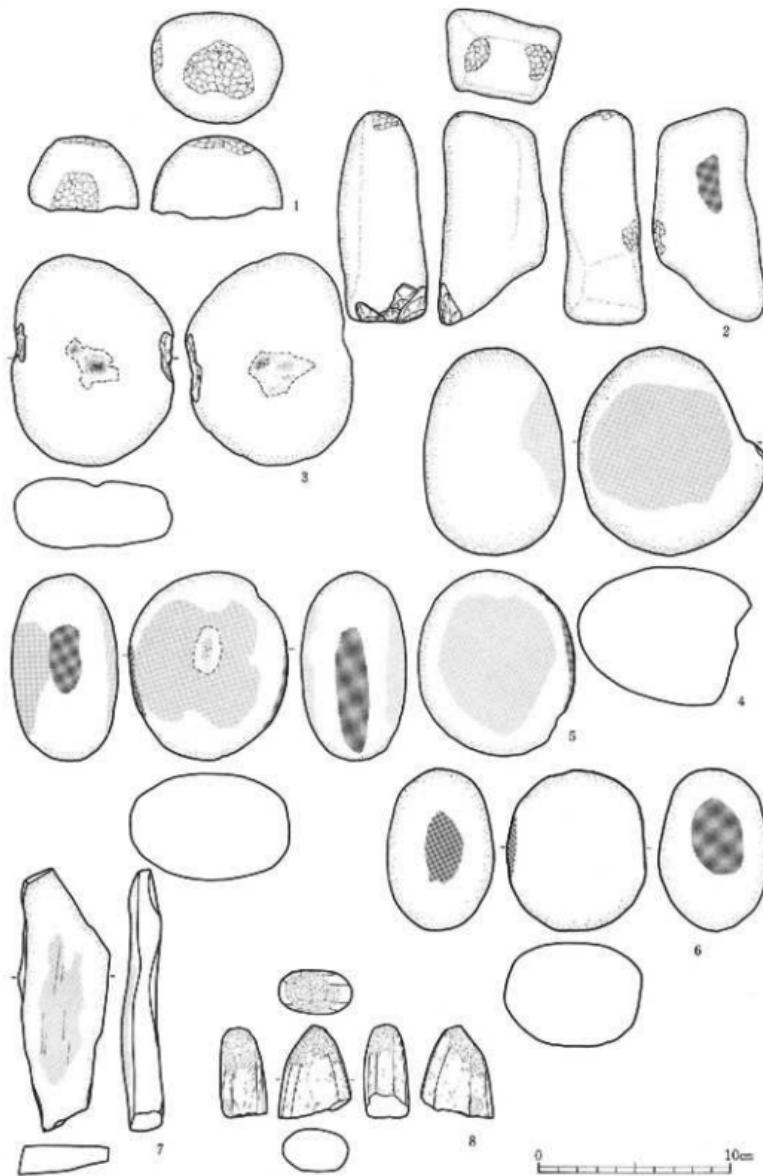
番号	地区	文様の特徴	登録	番号	地区	文様の特徴	登録
65	B27	撫糸 RL、压痕、縄文 RL	A1481	76	B28	撫糸文 R	A755
66	C31	縄文 RL	A807	77	B28	撫糸文 L	A1319
67		縄文 RL	A1281	78		底径9.4 cm、網代底→ミガキ	A1730
68		縄文 RL	A1280	79		底径5.6 cm、ミガキ	A1728
69		縄文 RL	A1277	80	B29	底径7.2 cm、マメツ	A1692
70	C31	縄文 RL	A925	81		底径9.0 cm、網代底 A	A1731
71		縄文 LR	A1272	82	C31	底径9.6 cm、網代底不明	A1675
72	B29	縄文 L (R. r)	A902	83		底径9.0 cm、網代底不明	A1726
73		縄文 LR	A1279	84		底径10.6 cm、網代底→マメツ	A1729
74		波状 LR ?撫糸文 L	A244	85		底径11.0 cm、マメツ	A1732
75		縄文 LR	A1284				

第184図 III区出土土器 (4)



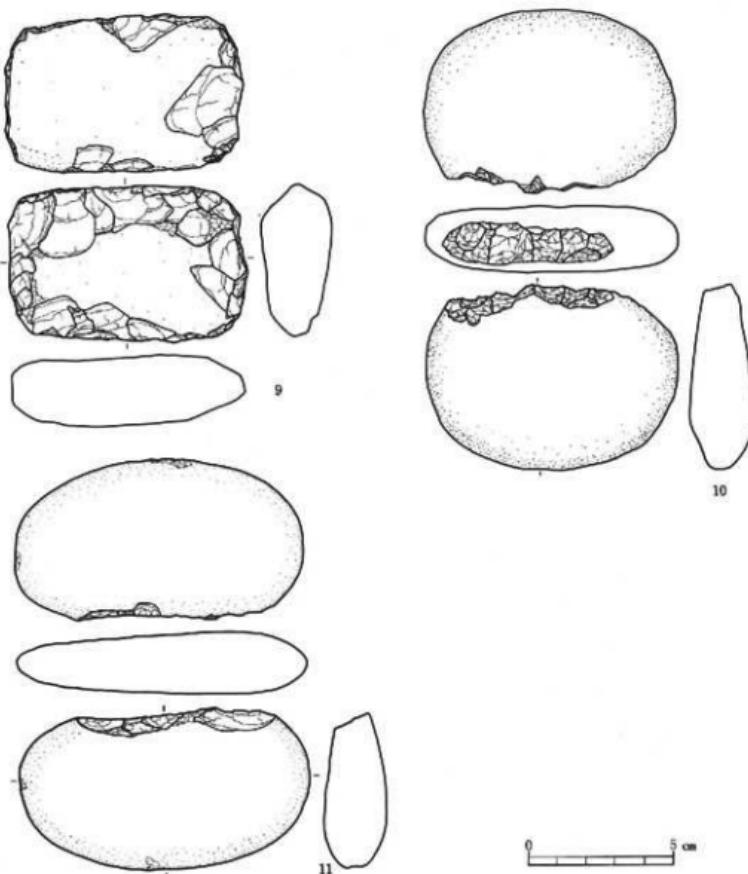
番号	地区・層位	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	重考	意跡
1	C35 5層	石核 I	46.9	11.2	8.6	4.3	珪質頁岩	一端欠損	Ka32
2	D35 5層	石核	47.9	26.9	16.4	21.2	珪質頁岩	(大)	Ka350
3	B27 1~6層	石核 I	35.3	16.8	6.0	3.8	鐵石英		Ka57
4	B28 1~6層	石核	33.8	35.5	11.3	6.5	珪質頁岩	刃部欠損	Ka45
5	複数	石核	65.7	50.7	34.9	93.7	珪質頁岩	(大)	Ka361

第185図 Ⅲ区出土剥片石器



第186図 III区出土縄石器 (1)

番号	地区・層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
1	E37 4層	圓 葵	(4.3)	6.9	5.9	190	安山岩		Kc157
2	F38 5層	W 截+ザラ	11.2	4.9	3.9	370	石炭安山岩		Kc10
3	D34 9層	IA 圓 葵	11.5	5.7	3.7	430	安山岩		Kc277
4	D33d 9層	IX 葵	11.1	10.2	7.3	990	安山岩		Kc9
5	D33a 9層	V 圓+扇+ザラ	10.0	8.4	5.7	630	安山岩		Kc285
6	B28 1～5層	W ザラ	8.5	7.3	5.5	445	安山岩		Kc162
7	B28 1～5層	IX 葵	14.0	4.9	1.6	150	安山岩		Kc184
8	B28 1～5層	削製石斧	(5.0)	3.9	2.3	50	安山岩	刀部欠損	Kc189



番号	地区・層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
9	F38 5層	石鍬IV	8.4	5.5	2.5	130.0	安山岩		Kc204
10	F38 5層	石鍬IA	8.9	6.5	2.1	180.4	安山岩		Kc206
11	B28 1～5層	石鍬IA	10.2	5.7	2.2	189.0	安山岩		Kc197

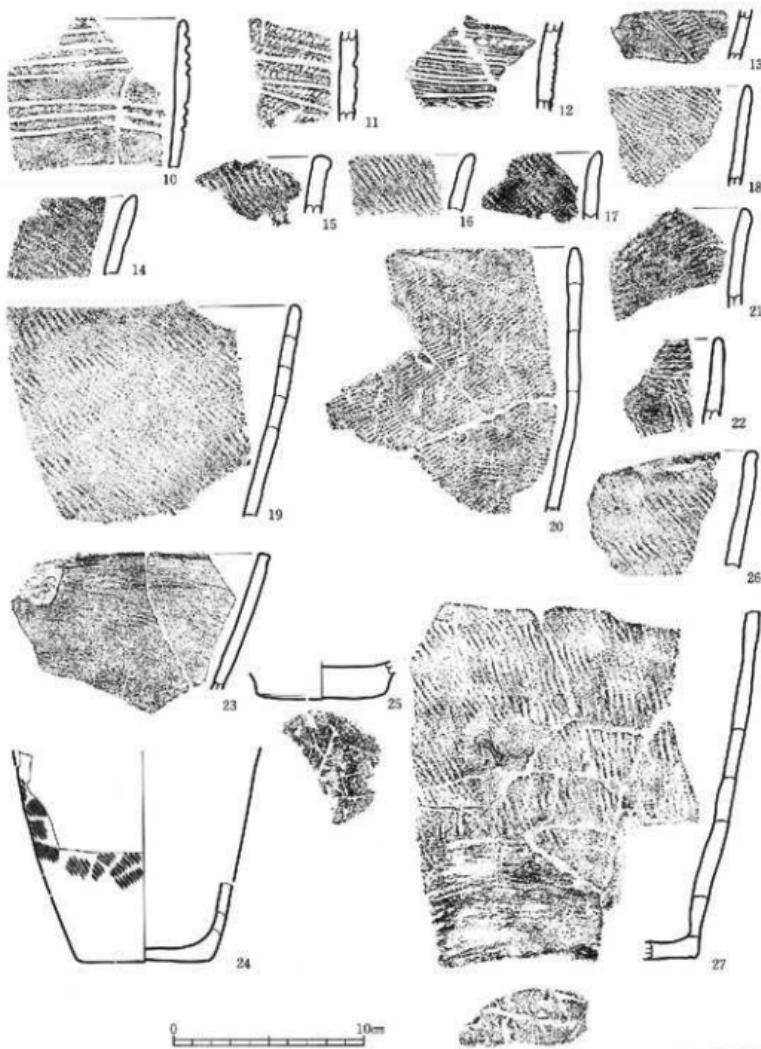
第187図 III区出土櫛石器(2)



文様の特徴		登録番号	層位	文様の特徴		登録番号
1	2層	A162	6	3層	A1733	
波状口縁、櫻文 LR				底径11.4cm、ナデ		
2	3層	A2216	7	5層	A2191	
櫻文 LR、圧痕、櫻文 LR、口縁内面に段				櫻文 RL、沈線		
3	3層	A2217	8	5層	A2180	
櫻文 LR、補修孔				波状口縁、櫻文 RL、沈線		
4	3層	A157	9	5層	A2171	
渦余文 L、沈線				櫻文 LR、沈線		
5	3層	A2248				
底径12.3cm(1/4)、木製底						

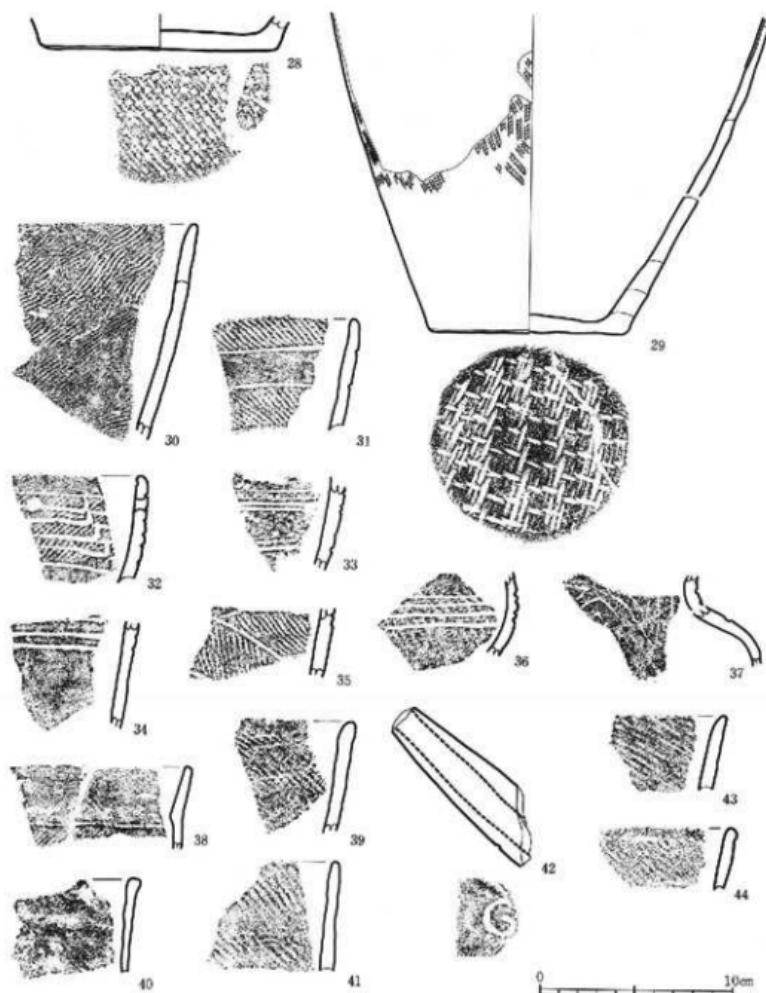
第188図 II区出土土器 (1)

V 検出された遺構と遺物



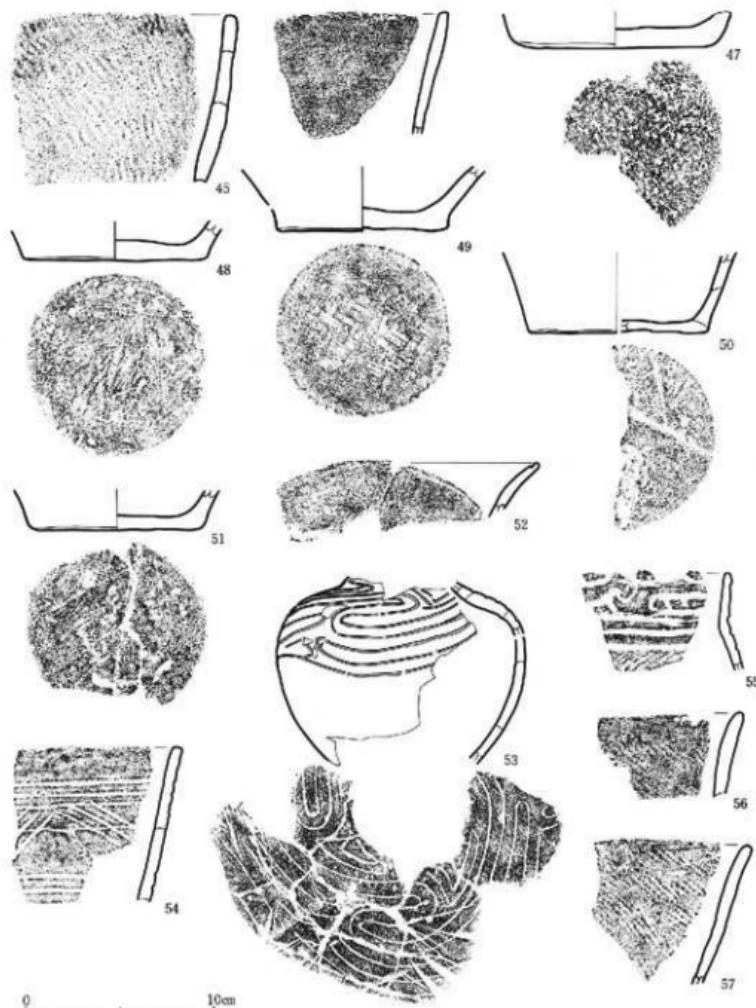
番号	層位	文様の特徴		番号	層位	文様の特徴		登録
		器種	基号			器種	基号	
10	5層	沈縫	A2243	19	5層	縞文 RL	A2165	
11	5層	縞文 LR、沈縫	A2229	20	5層	縞文 LR	A155	
12	5層	沈縫、刺突	A2230	21	5層	波状口縫、マメツ	A2182	
13	5層	縞文 LR、沈縫	A2234	22	5層	鰐条文 R	A2165	
14	5層	縞文 RL	A2166	23	5層	小突起	A2278	
15	5層	波状口縫、縞文 RL	A2172	24	5層	縞文 RL、底：ミガキ 底径7.2cm	A156	
16	5層	縞文 RL	A2161	25	5層	底径6.7cm (1/2)、木漆痕	A1638	
17	5層	縞文 RL、浦鉢孔	A2145	26	5層	波状口縫、縞文 RL	A161	
18	5層	縞文 RL	A2176	27	5層	縞文 RL、底：木漆板	A161	

第189図 II区出土土器 (2)



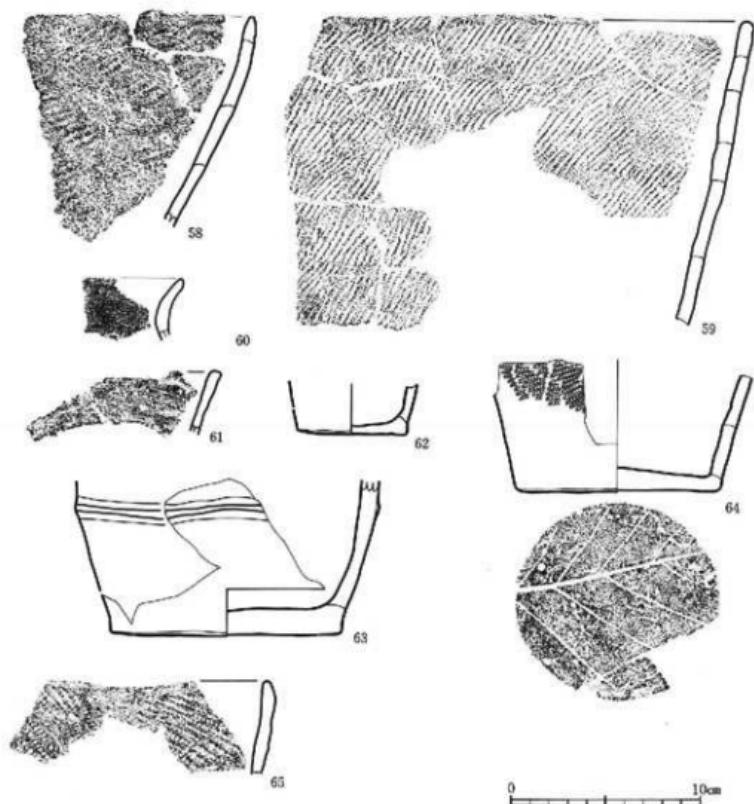
番号	遺構・部位	文様の特徴	登録	番号	遺構・部位	文様の特徴	登録
28	5層	底径12.4cm (1/4)、網代底A	A2245	37	SD2?	縄文?、沈縫	A1391
29	6層	縄文RL、底径10.4cm、網代底	A153	38	SD2?	網文LR丘底、縄文LR	A2220
30	SI16 # 4	縄文LR	A2259	39	SD2?	縄文RL	A2219
31	SI16 # 6	縄文RL、沈縫	A2174	40	SD2?	波状口縫	A2222
32	SI17 # 1	縄文LR、沈縫(内・外)、補修孔	A2178	41	SD2?	縄文RL	A2218
33	SI17 # 2	縄文LR?、沈縫	A2226	42	SD2?	底部下に沈縫「の」状	A1418
34	土机群	沈縫	A2224	43	SD2?	縄文RL	A2223
35	土机群	縄文RL、沈縫	A2228	44	土机群	縄文RL	A2197
36	SD2?	縄文RL、沈縫	A1395				

第190図 II区出土土器 (3)



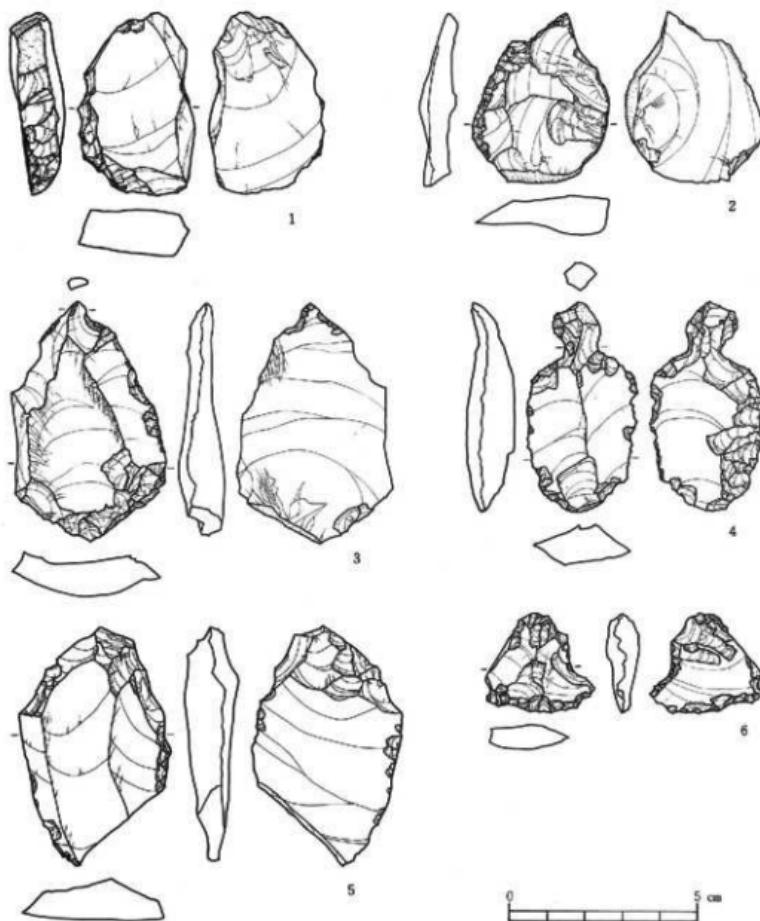
番号	遺構・層位	文様の特徴	番號	番号	層位	文様の特徴	番號
45	土坑群	縄文 RL	A2196	52	不明		A2280
46	ピット		A2277	53	不明	波線	A86
47	SI16 底面	直径10.5 cm (1/3), 縄代灰→マツフ	A2259	54	不明	波線	A2202
48	土坑群	底径9.8 cm, 木製灰→ミガキ	A2246	55	不明	突起, 波線, 縄文 LR	A2206
49	土坑群	底径9.1 cm, 縄代灰→ナデ	A1722	56	不明	縄文 RL	A1276
50	SI16 底面	直徑9.6 cm, 木製灰	A2249	57	不明	縄文 RL	A2203
51	SI16 € 4	直徑9.0 cm, 木製灰	A2244				

第191図 II区出土土器 (4)



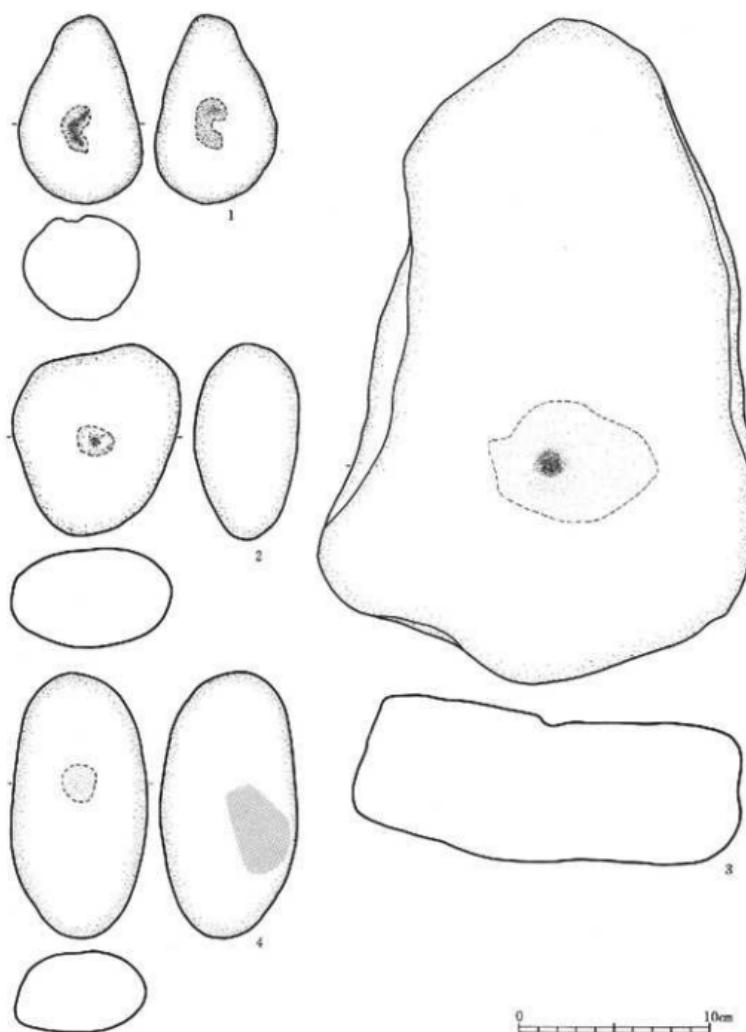
番号	層位	文様の特徴	登録	番号	層位	文様の特徴	登録
58	不明	縄文不明	A2204	62	不明	廣径5.7cm、ミガキ	A1725
59	不明	縄文 LR	A153	63	不明	縁線、底径12.3cm、ミガキ	A159
60	不明		A1306	64	不明	縄文 LR、底径10.5cm、木型壓	A158
61	不明		A2205	65	5層	縄文 RL	A2159

第192図 II区出土土器 (5)



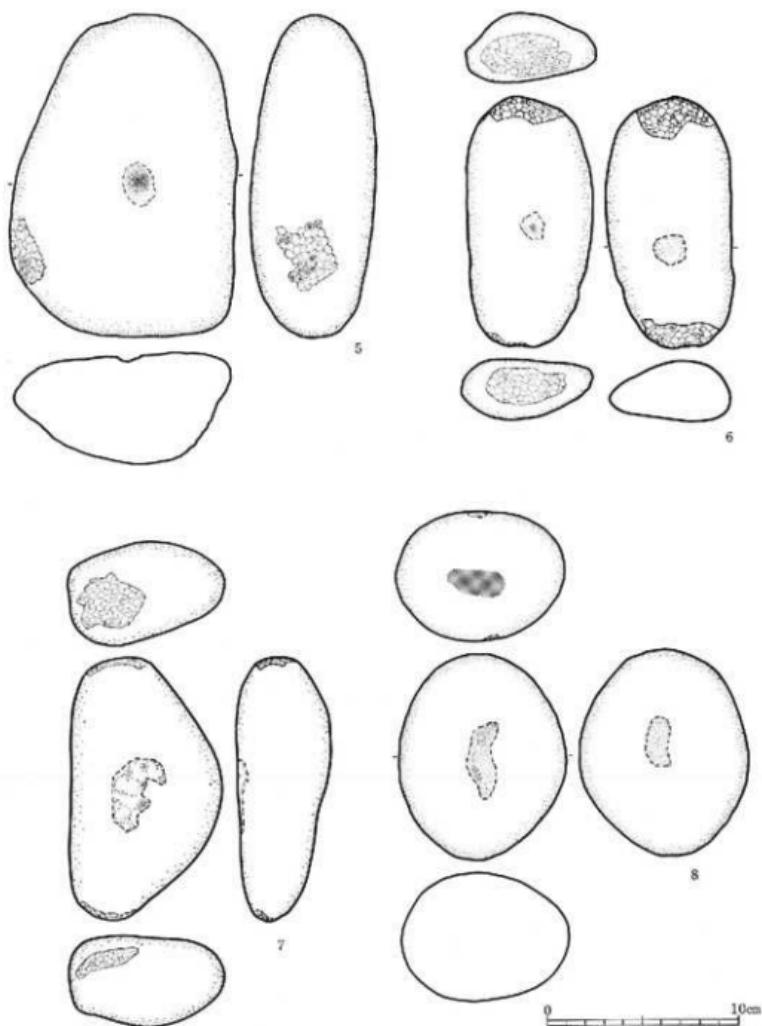
番号	層位	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石 材	圖 号	登録
1	5層	不定形 I B	47.2	31.2	1.1	20.8	珪質頁岩	(大) 42.9×33.1 (側)	Ka1585
2	複合	石核Ⅲ	44.0	29.2	9.6	11.7	玉髓		Ka79
3	複合	石核Ⅲ	64.2	42.1	10.3	22.7	透化樹木骨		Ka42
4	複合	石核Ⅰ	55.2	29.3	11.9	16.4	透化樹木骨		Ka51
5	複合	不定形 I B	62.1	40.3	12.9	23.7	頁岩	(中)	Ka80
6	複合	不定形 I D	29.1	26.9	8.8	4.6	珪質頁岩	(大)	Ka77

第193図 II区出土剝片石器



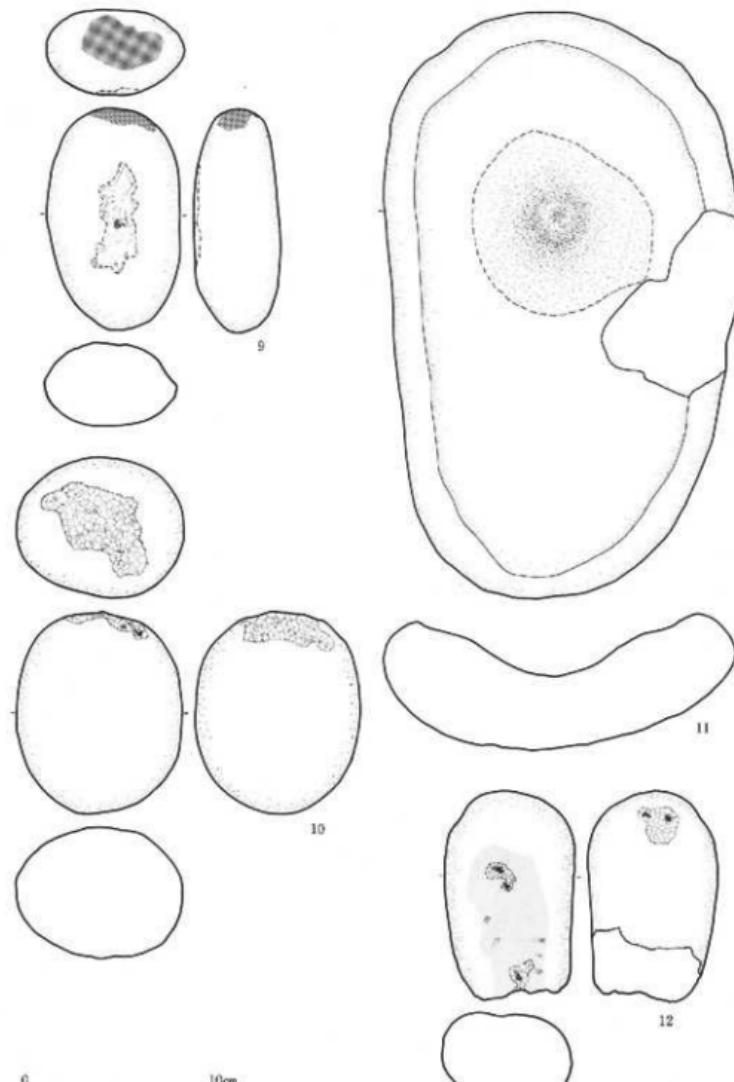
番号	層位	分類	大きさ(cm)	重さ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	圖 号	登録
1	5層	I A 凹み深	10.0	6.6	5.6	445	安山岩	Kc53	
2	5層	I A 凹み深	10.2	8.9	5.4	620	安山岩	Kc89	
3	5層	I A 凹み深	35.5	22.5	8.7	11000	安山岩	Kc171	
4	5層	I B 凹み浅	14.1	7.3	4.3	640	玉藻安山岩	Kc51	

第194図 II区出土石器 (1)



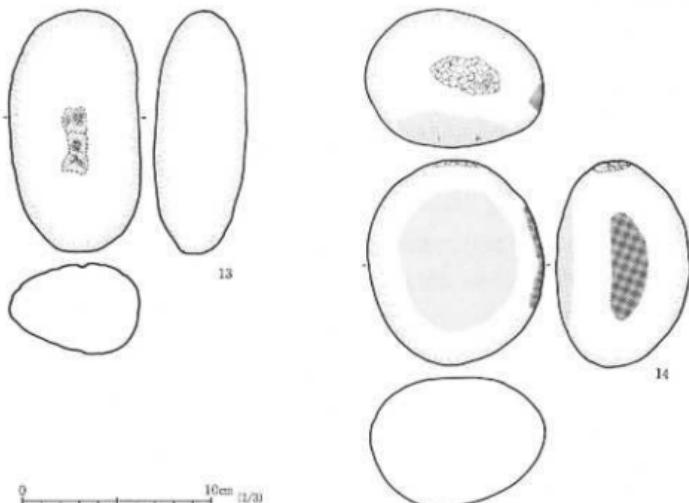
番号	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
5	5層	VII 四+五	17.2	12.3	6.0	1745	安山岩		Kc54
6	複数	VII 四+四	13.4	6.9	3.3	270	石英閃緑岩		Kc91
7	5層	VII 四+三	14.0	8.2	4.9	680	安山岩		Kc90
8	5層	VII 四+二	11.0	8.9	6.9	935	安山岩		Kc32

第195図 II区出土石器（2）

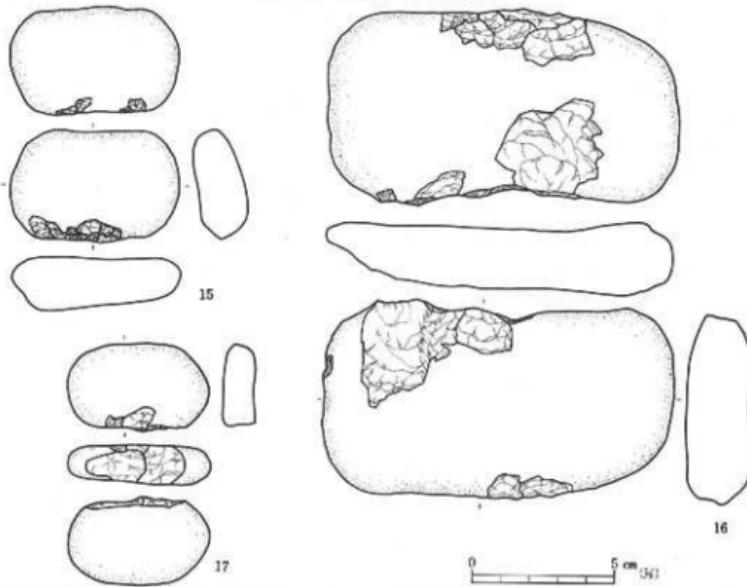


番号	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
9	5層	石器 四+ザラ	11.9	7.2	4.5	475	安山岩		Kc88
10	5層	石器 蔵	10.8	8.7	7.0	740	石英岩(?)		Kc94
11	5層	石器	31.2	19.1	7.0	5000	安山岩		Kc172
12	5層	石器 四+物:轟	11.2	7.1	4.5	525	安山岩		Kc32

第196図 II区出土礫石器 (3)



第197図 II区出土櫛石器 (4)



番号	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
15	2層	石鏟II A	6.1	4.0	2.0	71.4	安山岩		Kc209
16	5層	石鏟III A	12.5	7.0	2.3	314.9	石英安山岩		Kc210
17	不明	石鏟I A	5.1	3.1	1.2	36.7	安山岩		Kc211

第198図 II区出土櫛石器 (5)

(3) 河川跡とその出土遺物

I 北区・南区の下層調査の際に河川跡が発見された。ここでは、基本層出土遺物と合わせて河川跡出土遺物を提示する。

I 北区の出土遺物

下層の堆積状況 I 北区の古墳時代の遺構面の下位を深掘りした結果、疊層までに9～33層を確認した(第199・200図)。上半は主に粘土質シルト、下半は主に細砂である。標高10.5～11mに位置する17層の暗褐色粘土質シルトからは縄文土器が出土している。最下面の疊層は人頭大程度の礫により形成されており、標高8.8～10.3mの間に起伏が認められた(第199図)。この地形は、東北大学理学部 松本秀明氏のご教示によれば、底面に恒常的な水流による堆積土の状況が認められないことから、持続的な河川ではなく、一時的な激しい水流によって形成された可能性があるとのことである。

各層出土遺物

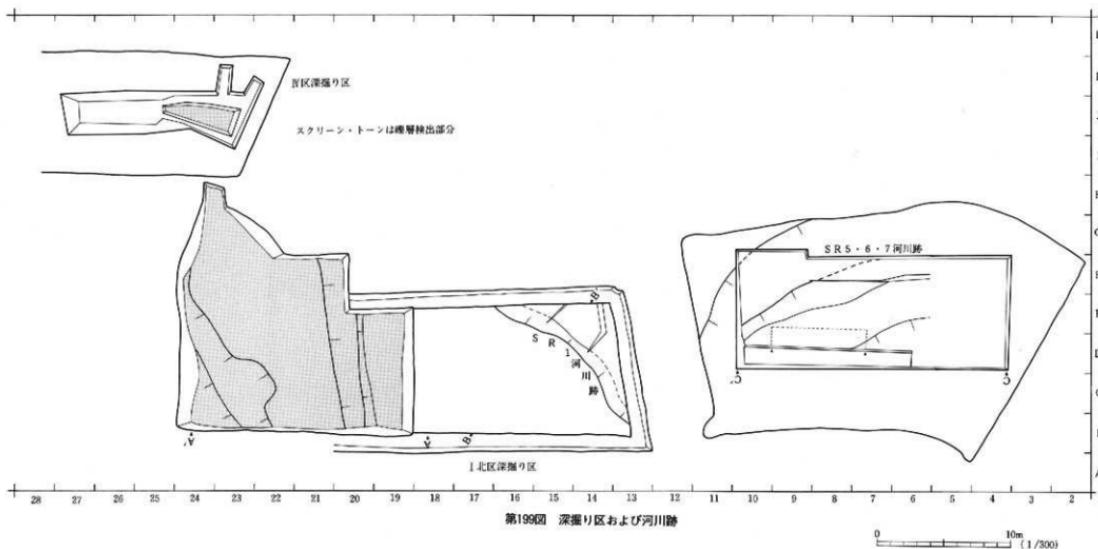
土器 (第201・202図) 5層(1) 深鉢体部下半である。17層(2～8) 2・6は撚糸圧痕を持つ。7は鉢で、口縁部に3本の平行沈線が引かれ縁の弧状沈線が4箇所に配置される。8は無文の鉢で口縁部内面に沈線が巡り、低い突起の内面に「ノ」字状隆線が付く。疊層直上(9～12) 9は深鉢体下半、10は体部片で、いずれも撚糸文が施される。層位不明(13～16) 15は内面に文様を持つ浅鉢である。

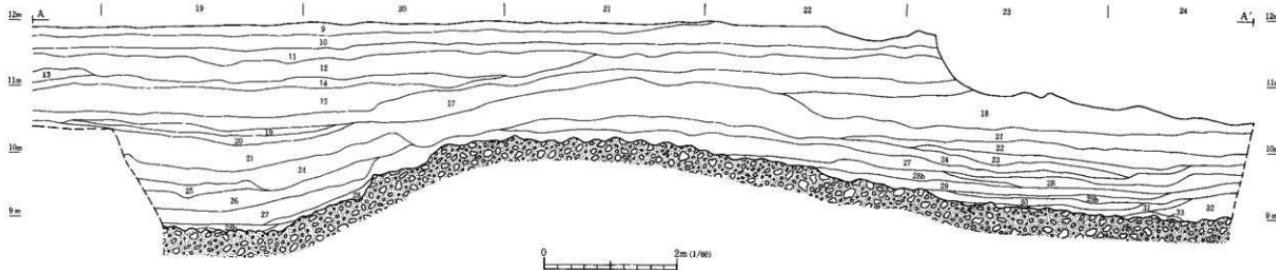
疊石器 (第203図) 1は層位不明の石皿、2は17層出土のタタキ石である。

S R 1 河川跡 (第199・204・205図)

B～E-13～16グリッドに位置する。検出層位は、9～17層の間である。北岸のみが認められ、長さ13m、幅4mの三角形状に検出された。流れの方向は不明である。堆積土は32層に細分され、上層がシルト、下層が砂と疊混じり砂の互層である。20層は基本層17層に対応し、壁際に堆積している。

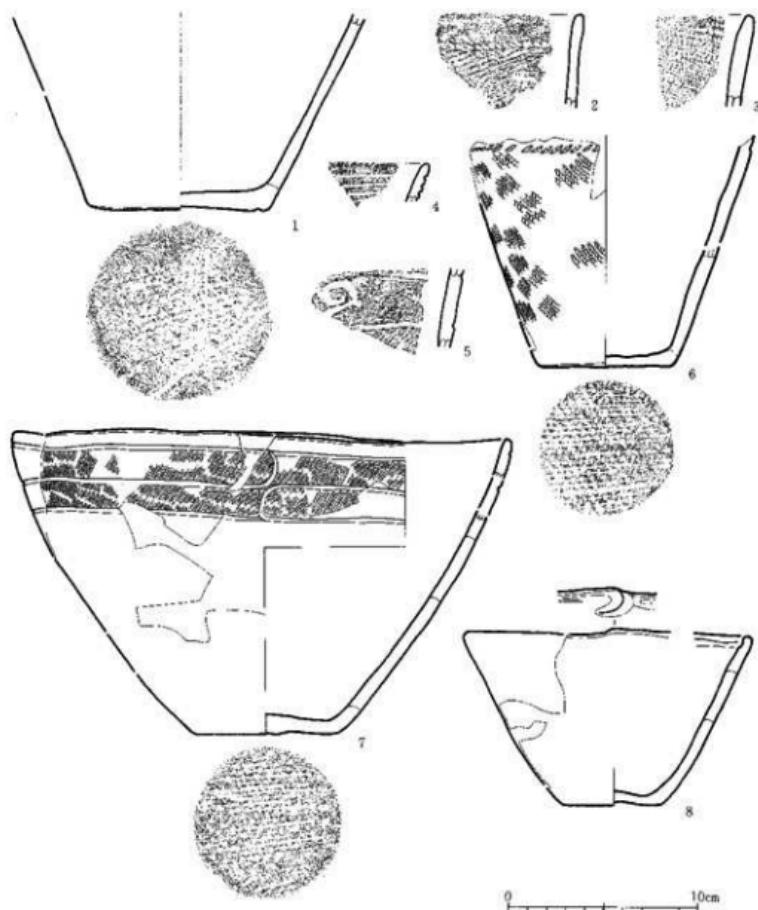
出土遺物 (第204図) 1は縄文施文の深鉢、3は勘目状沈線文が施される。





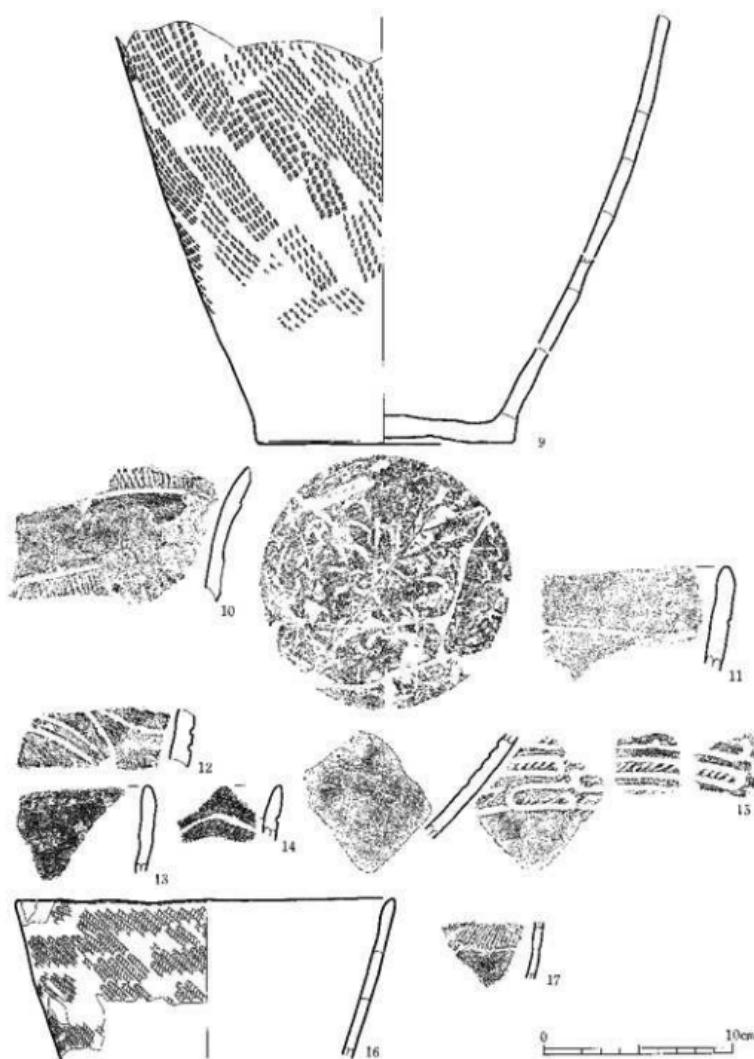
位 置	土 色	土 性	標 号	層序	土 色	土 性	標 号	
9	にじいろ黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	砂・炭を含む	23	にじいろ黄褐色	10YR5/4	砂砂 にじいろ黄褐色沙を少々、炭をわずかに含む
10	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	炭を含む	24	にじいろ黄褐色	10YR5/4	砂砂 炭をわずかに含む
11	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	砂を含む、赤灰土色を少量含む	25	にじいろ黄褐色	10YR5/4	砂砂 炭をわずかに含む
12	褐色	10YR4/4	砂質シルト	炭を含む	26	にじいろ黄褐色	10YR5/4	砂砂 にじいろ黄褐色沙を少々、炭をわずかに含む
13	暗褐色	10YR5/6	砂砂	炭を少々含む	27	にじいろ黄褐色	10YR5/4	砂質シルト にじいろ黄褐色土・炭を含む
14	褐色	10YR4/4	砂質シルト	炭を少々含む	28	にじいろ黄褐色	10YR5/4	砂砂 炭を含む
15	黃褐色	10YR5/5	砂質シルト	炭を含む	29	にじいろ黄褐色	10YR5/4	砂砂 炭を含む
16	褐色	10YR4/4	砂質シルト	炭を少々含む	30	砂質褐色	10YR6/6	砂質シルト 炭を含む
17	褐色	10YR3/4	粘土質シルト	炭を多量に含む、赤灰土色を含む	31	明褐色	10YR6/6	砂砂 炭化炭を含む
18	褐色	10YR4/6	砂砂	炭を多量に含む	32	にじいろ黄褐色	10YR5/4	砂砂 無化炭を含む
19	褐色	10YR4/4	砂土質シルト	炭を多量に含む	33	にじいろ黄褐色	10YR5/4	砂砂 無化炭を含む
20	にじいろ黄褐色	10YR5/4	砂土質シルト	炭を多量に含む				
21	にじいろ黄褐色	10YR5/4	砂砂	炭をわずかに含む				
22	にじいろ黄褐色	10YR5/4	砂砂	炭をわずかに含む				

第200図 I北区深掘り断面



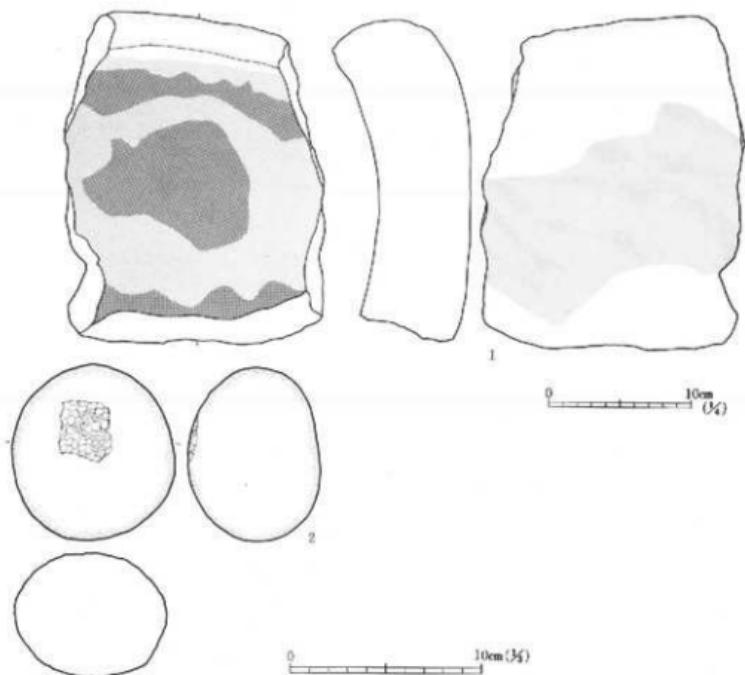
番号	地区	層位	文様の特徴				量跡	番号	地区	層位	文様の特徴				量跡
			口径	底径	高さ	質材					口径	底径	高さ	質材	
1	F23	5層	底径9.6cm		調代痕不明		A154	4	D19	17層	沈線				A534
2	B15	17層	縹文 LR	圧痕	縹文 LR		A2184	5	D16	17層	縹文 LR、沈線				A1944
3	B15	17層	縹文 RL				A2194	6	C14	17層	縹文 RL、沈線				A43
7	B15	17層	7.7	16.4	約1						縹文 LR、沈線、底:調代痕 A				A8
8	D16	17層	15.2	5.3	9.4	1/3	口縁部内面に沈線、尖削刃内面に「ノ」状彫線、底:アメツ								A7

第201図 I北区出土土器（1）



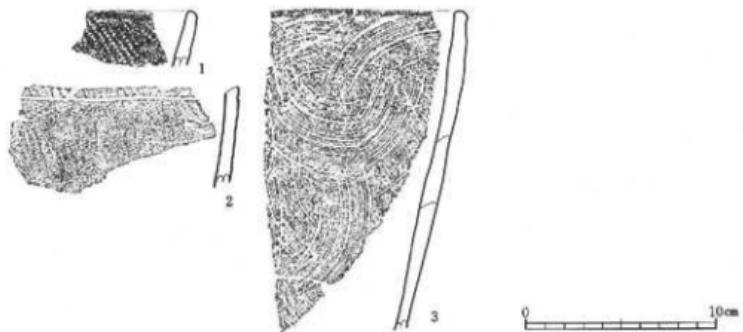
番号	地区	層位	文様の特徴	番號	番号	地区	層位	文様の特徴	番號
9	F23	縄溝直上	縄糸文 I.R.、底径13.4cm、本体底	A15	14			突起部分、沈縫	A1247
10	F23	縄溝直上	縄糸文 R	A2033	15			縄文不明、沈縫。ヰザミ	A2252
11		縄溝直上	沈縫	A2137	16			口径20.1cm、縄文 R.I.、補修孔	A135
12	F22	縄溝直上	縄文?、沈縫	A2034	17	C19		縄文 I.R.、沈縫	A1946
13				A1257					

第202図 I 北区出土土器 (2)



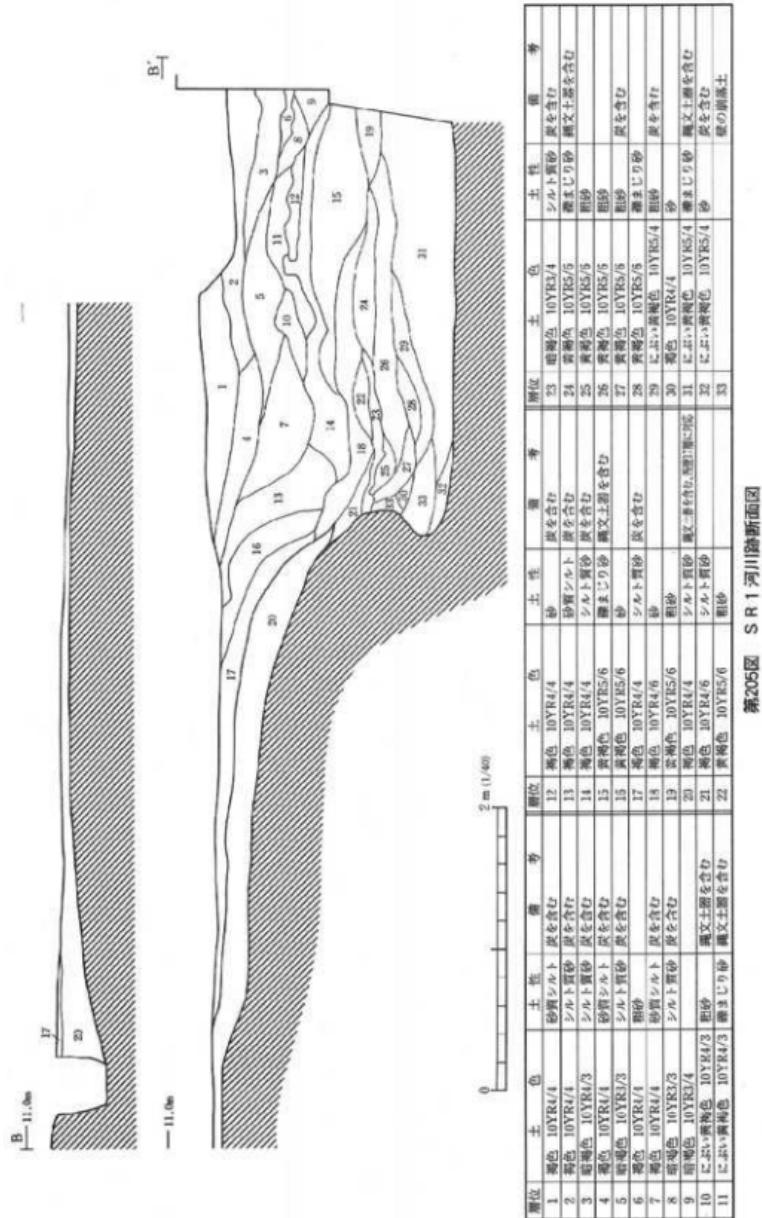
番号	地区・層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
1	D18	石皿	23.6	18.2	9.8	5000	安山岩		Kcl177
2	B16 17層	細鉢	9.9	8.6	6.7	540	安山岩		Kcl155

第203図 I 北区出土縁石器

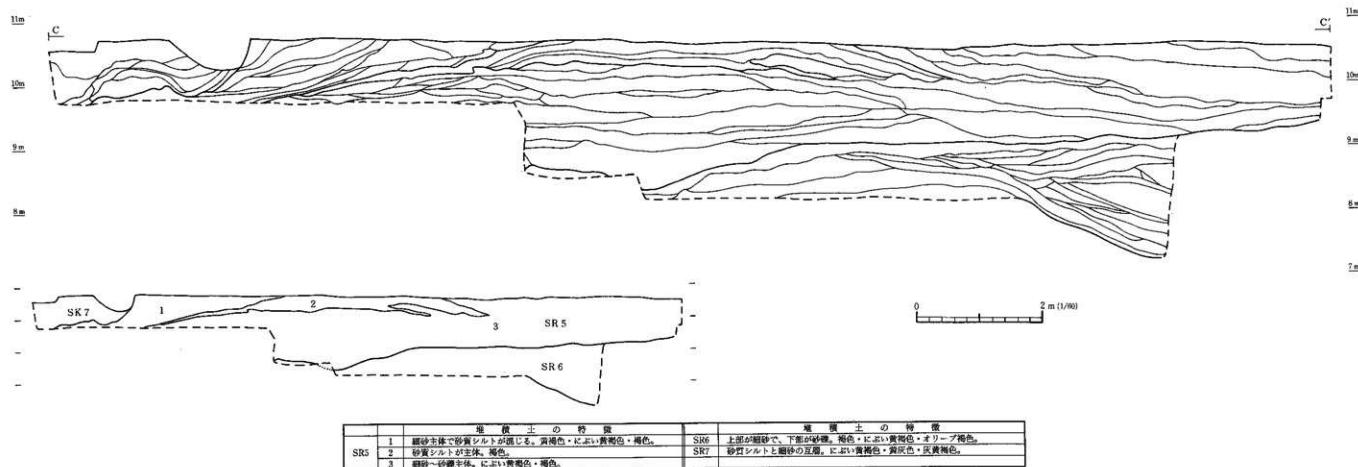


番号	文様の特徴	登録番号	番号	文様の特徴	登録
1	幾文RL	A1227	3	縦目状沈縞文	A1245
2	幾文RL、沈跡	A2056			

第204図 S R 1 河川跡出土土器



第205図 SR 1 河川断面図



I 南区の出土遺物

基本層7層を掘り下げたところ、下層から河川跡が検出された(第199図)。河川跡は3本あり、SR6が最下部で、その上にSR5、南端にSR7がある。SR5・6は南北方向に伸びるが、流れの方向は調査区が狭いため不明である。堆積土は非常に多くの層に細分されるので、全体の傾向のみ記述する(第206図)。SR7の堆積土は砂質シルトと細砂の互層である。SR5は細砂主体の層と、砂質シルト主体の層と、細砂～砂礫主体の層に大別される。SR6は上部が細砂で下部が砂礫層である。出土遺物は上層から順に記述する。土器の他に剝片石器もわずかに出土しているが、土器のみ図示した。

7層出土土器 (第207図1～23) 1・2は後期中葉の土器である。3～6は後期後葉の土器である。3・4は口縁部に連続する刺突文が施される。7～16は晩期前～中葉の土器である。

7層(砂利層)出土土器 (第207図・208図24～70) 24～30は後期中葉の土器である。24は内面に「ノ」字状隆線が付けられる。25は波状口縁で、クローバー状の文様と推定される。31～38は後期後葉の土器である。39～55は晩期前～中葉の土器である。39・40は羊齒状文が描かれる。49は皿である。53は注口部で瘤状隆起が付く。56～69は縄文施文の土器で、65～67は羽状縄文である。

7層下部出土土器 (第209・210図1～55) 2・3は後期中葉の土器である。1・4～9・12は後期後葉の土器である。10・11・13・14は後期の土器と考えられる。15～30は晩期前～中葉の土器である。19・20は雲形文が描かれる。

各層出土土器 (第210図56・57) 56は6層出土の深鉢底部、57は8層出土で、晩期前葉のものである。

砂利層(層位不明)出土土器 (第210図58～63) 58は後期後葉から晩期と考えられる。

河川跡出土土器 (第211～214図1～101) 1は隆線と縄文が施され、中期後葉から後期前葉にかけてのものと考えられる。2は後期前葉の土器である。3～8は口縁部に幅広の無文帯を持ち、後期中葉の土器と考えられる。9～20は刺突文や瘤状貼り付けをもつもので、後期後葉の土器である。21～41は後期中～後葉にあたると見られる。42・43は三叉文が描かれ、後期後葉～晩期前葉の土器である。44～66は晩期前～中葉の土器で、44～46は羊齒状文、47・48は雲形文が描かれる。

小結 河床疊層出土遺物が不明なので、河川が機能していた時期は不明である。堆積土および基層7層から出土した土器は縄文時代後晩期のものであることから、縄文後晩期には埋没過程にあり、7層の遺構の形成された平安時代には完全に埋まりきっていたことが分かる。

2 繩文時代の遺構と遺物



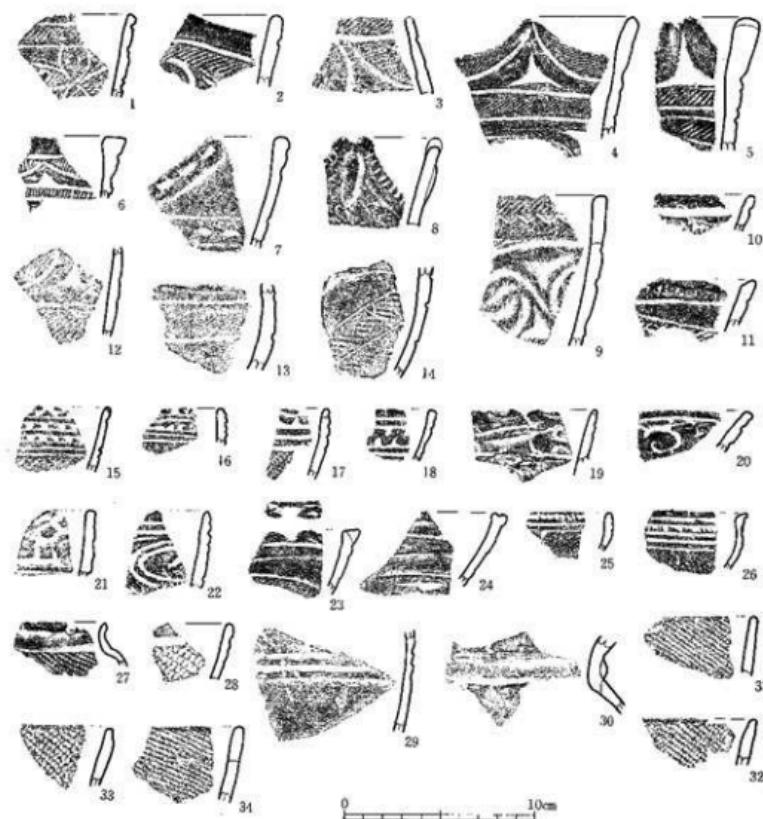
番号	層位	文様の特徴	登録	番号	層位	文様の特徴	登録
1	7層	縄文RL、沈線	A392	20	7層	縄文LR	A1116
2	7層	縄文RL、沈線	A395	21	7層	縄文RL	A1105
3	7層	キザミ、縄文LR、沈線	A396	22	7層	縄文LR	A1074
4	7層	キザミ、沈線	A1036	23	7層	底径5.2cm、縄代痕+ミガキ?	A1699
5	7層	沈線	A1009	24	7層(砂利)	沈線、内面:「ノ」状貼付	A1043
6	7層	縄文LR、沈線、刺突	A2103	25	7層(砂利)	波状口縫、沈線、刺突	A982
7	7層	刺突、沈線	A1023	26	7層(砂利)	沈線	A2065
8	7層	沈線	A1019	27	7層(砂利)	波状口縫、キザミ	A1047
9	7層	突起、沈線、網突	A395	28	7層(砂利)	キザミ、沈線、縄文(不明)	A971
10	7層	沈線、キザミ、縄文LR、内面:沈線、キザミ	A1051	29	7層(砂利)	沈線、キザミ	A2102
11	7層	沈線、キザミ、縄文LR	A1053	30	7層(砂利)	突起、沈線	A987
12	7層	口縫:沈線、外:キザミ、縄文LR	A391	31	7層(砂利)	縄文LR、沈線	A1013
13	7層	口縫:沈線、外:縄文LR、沈線	A394	32	7層(砂利)	突起、沈線	A1026
14	7層	沈線、キザミ、縄文RL	A2092	33	7層(砂利)	突起、沈線、刺突	A1012
15	7層	口縫:キザミ、外:沈線、縄文LR	A1027	34	7層(砂利)	刺突、沈線	A1002
16	7層	縄文小形、沈線、胞縫+キザミ	A2098	35	7層(砂利)	突起、沈線	A1020
17	7層		A1429	36	7層(砂利)	縄文LR、沈線、網突	A2095
18	7層	蓋か?縄文RL、沈線	A1038	37	7層(砂利)	沈線	A1007
19	7層	縄文RL	A1124	38	7層(砂利)	沈線、キザミ	A2039

第207図 I 南区 7層出土土器 (1)



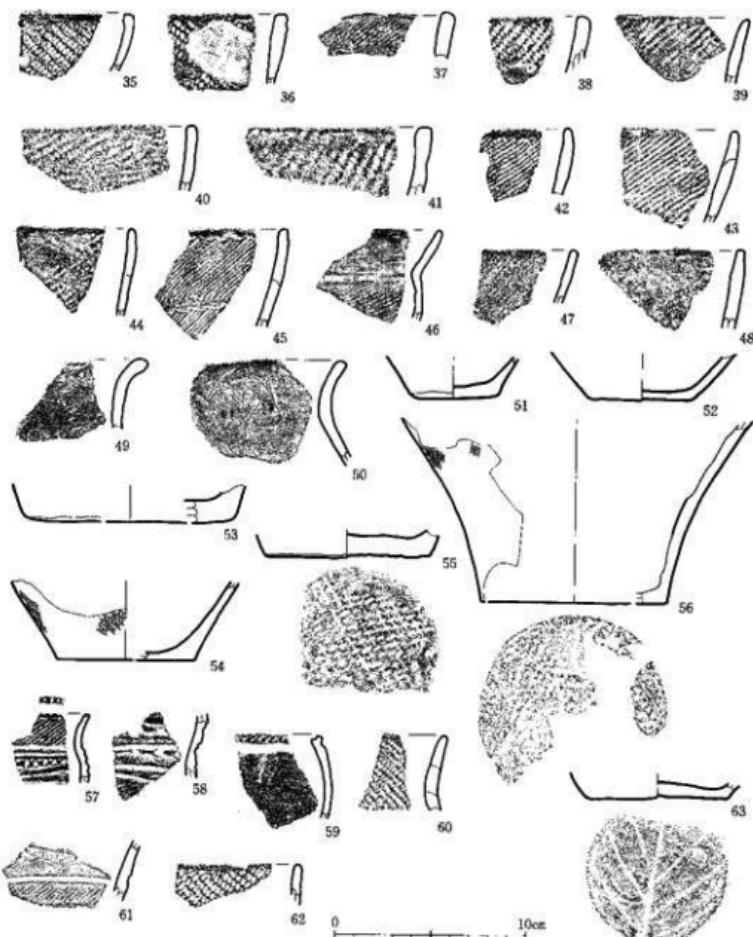
番号	附位	文様の特徴	直径	高さ	附位	文様の特徴	直径
39	7層(砂利)	沈縫			A1027	55	7層(砂利)
40	7層(砂利)	口唇:キザミ、体:沈縫、網突	A980	56	7層(砂利)	網文LR	A1057
41	7層(砂利)	口唇:キザミ、体:網文LR、沈縫	A1029	57	7層(砂利)	網文LR	A1081
42	7層(砂利)	突起、沈縫、キザミ、内面:沈縫、キザミ	A1061	58	7層(砂利)	網文LR	A1091
43	7層(砂利)	沈縫、キザミ、網文LR	A1041	59	7層(砂利)	網文LR	A1102
44	7層(砂利)	沈縫、キザミ	A1030	60	7層(砂利)	網文LR	A1136
45	7層(砂利)	沈縫、キザミ	A998	61	7層(砂利)	網文LR	A1077
46	7層(砂利)	火鉢、口唇:羽突、外:網文LR、沈縫	A1010	62	7層(砂利)	網文RL	A1110
47	7層(砂利)	突起、口唇:沈縫、外:沈縫、キザミ、RL	A983	63	7層(砂利)	網文RL	A1121
48	7層(砂利)	沈縫、網文LR、赤彩	A2100	64	7層(砂利)	網文RL	A1140
49	7層(砂利)	火起、沈縫	A970	65	7層(砂利)	網文RL+LR	A1094
50	7層(砂利)	沈縫	A2121	66	7層(砂利)	網文RL+LR	A1084
51	7層(砂利)	沈縫、コブ状貼付	A2120	67	7層(砂利)	網文RL+LR	A1086
52	7層(砂利)	沈縫、赤彩	A1394	68	7層(砂利)	網状口縫、波打部に刺突、網文RL	A988
53	7層(砂利)	沈縫、コブ状貼付	A1419	69	7層(砂利)	網文LR2	A1072
54	7層(砂利)	口唇:キザミ、沈縫、網文RL+LR	A965	70	7層(砂利)	直径6.6cm、網代底-ナゲ?	A1716

第208図 I 南区7層出土土器(2)



番号	文様の特徴	登錄番号	番号	文様の特徴	登錄
1	縄文LR、沈線、コブ状點付	A1093	18	沈線、刺突	A1059
2	波状口縫、縄文LRK、沈線	A986	19	沈線	A1018
3	縄文不明、沈線	A1409	20	沈線	A1033
4	波状口縫、縄文LR、沈線	A984	21	沈線	A2064
5	塊起部分、縄文LRK、沈線	A989	22	沈線	A1021
6	尖起、沈線、キザミ	A985	23	尖起、沈線、縄文不明	A1017
7	波状口縫、沈線、刺突	A1008	24	口縫：沈線、外：縄文RL、沈線	A1000
8	波状口縫、キザミ、棒状點付	A973	25	刺突、縄文LRK、沈線	A1049
9	縄文LR、筋節回転、沈線	A990	26	沈線、キザミ	A1004
10	縄文不明、沈線	A1064	27	縄文RL	A1071
11	沈線（横位一枚知能）	A1016	28	口縫：ケズリ、外：縄文RL、沈線	A2079
12	沈線、縄文RL	A2064	29	沈線	A2097
13	縄文LRK、沈線	A2061	30	筋線	A2117
14	縄文RL、沈線	A2042	31	縄文RL、	A1114
15	！縫：キザミ、外：沈線、キザミ	A2094	32	縄文RL	A1331
16	沈線、キザミ	A1062	33	縄文RL	A1146
17	沈線、キザミ、縄文LR	A1048	34	縄文RL	A1079

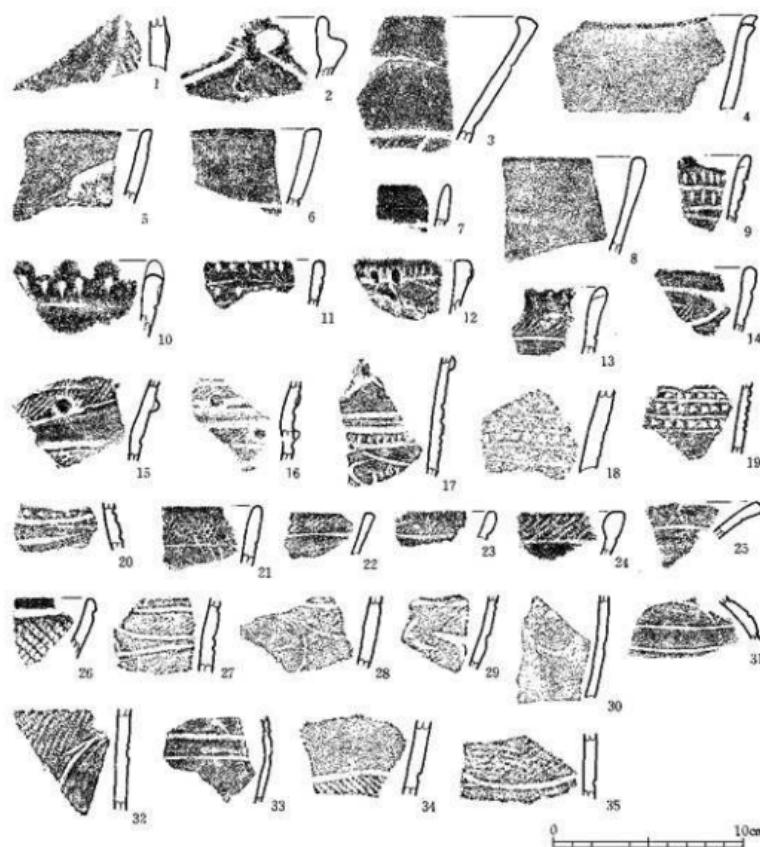
第209図 I 南区7層下部出土土器(1)



番号	層位	文様の特徴	登録
35	7層下部	縞文 LR	A1359
36	7層下部	縞文 RL	A1717
37	7層下部	縞文 LR	A1718
38	7層下部	縞文 LR	A1700
39	7層下部	縞文 LR	A1719
40	7層下部	縞文 LR	A1701
41	7層下部	縞文 LR	A1629
42	7層下部	縞文 LR	A1025
43	7層下部	縞文 LR	A1003
44	7層下部	縞文不明	A1014
45	7層下部	縞文 LR、端部斜め	A1145
46	7層下部	縞文 LR	A2075
47	7層下部	縞文 LR	A1120
48	7層下部	縞文 LR	A1698
49	7層下部		

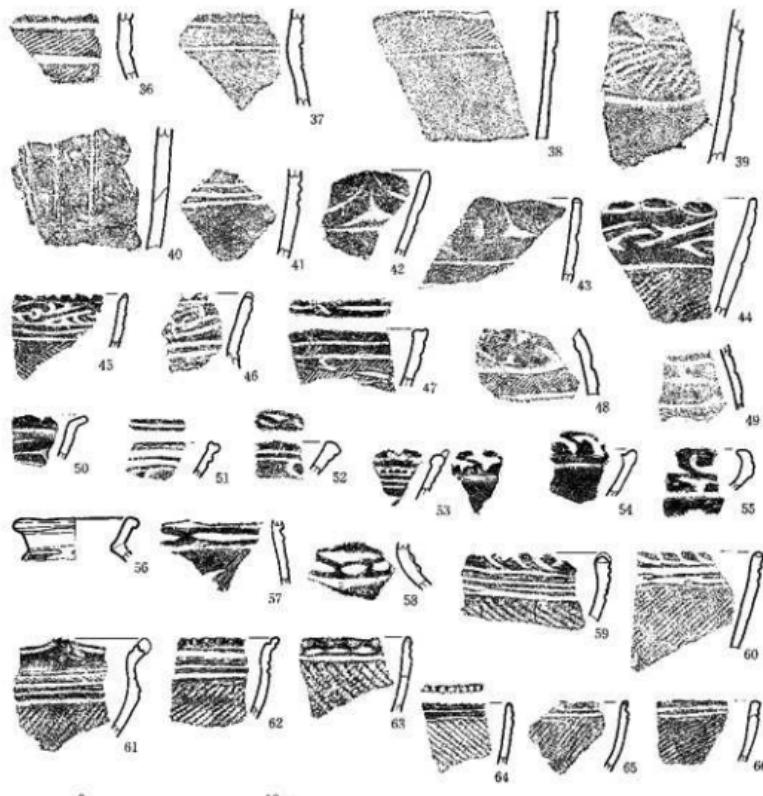
第210図 I南区 7層下部出土土器(2)他

2 繩文時代の遺構と遺物



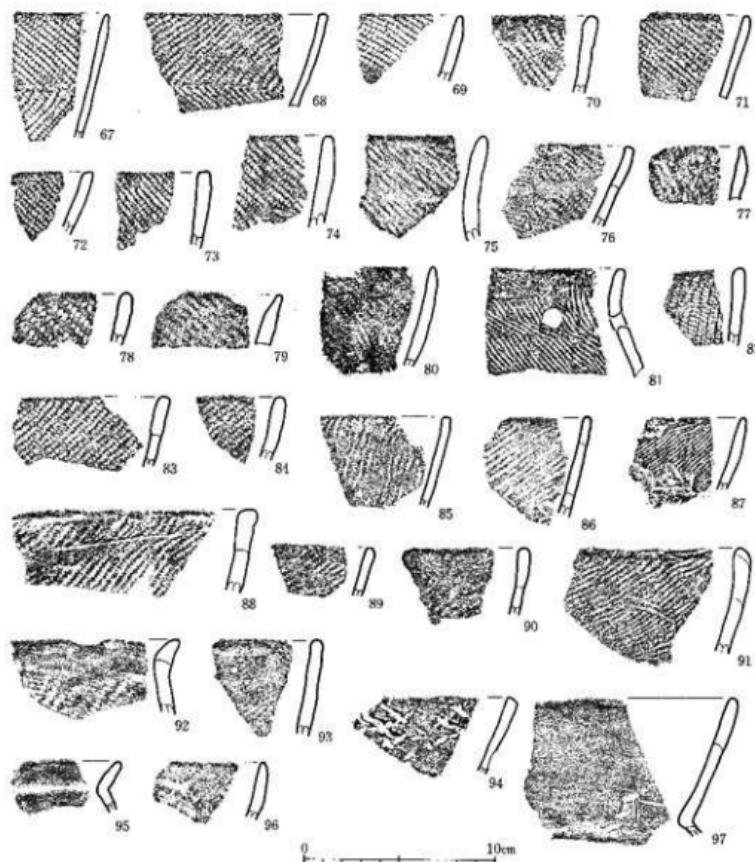
番号	文様の特徴	登録番号	文様の特徴	登録番号
1	陰線、縄文 RL	A2038	19 沈線、キザミ	A2090
2	突起、削突、沈線	A1028	20 沈線、キザミ、縄文 LR	A2106
3	縄文 LR2、沈線	A967	21 沈線	A969
4	波状口縁	A1164	22 縄文不明、沈線	A1058
5		A1168	23 縄文 LR、沈線	A1135
6	沈線	A1070	24 縄文 LR、比縫	A976
7	沈線	A1075	25 縄文不明、沈線	A1045
8		A1169	26 縄文 RL、沈線	A1033
9	突起、沈線、キザミ	A1090	27 縄文 LR、沈線	A2101
10	突起、沈線、キザミ	A972	28 沈線	A2057
11	比縫、キザミ	A1035	29 縄文不明、沈線	A2065
12	沈線、キザミ、コブ状貼付	A1039	30 縄文 LR、沈線	A2062
13	突起、縄文 LR、沈線	A1065	31 縄文 LR、沈線	A1397
14	縄文 LR、沈線	A981	32 縄文 LR、沈線	A2044
15	縄文 LR、沈線、コブ状貼付	A1511	33 縄文 LR、沈線	A2051
16	縄文不明、沈線、コブ状貼付	A2089	34 縄文 RL、沈線	A2046
17	沈線、キザミ、コブ状貼付	A2039	35 縄文 RL(羽状)、沈線	A2045
18	沈線、キザミ	A2069		

第211図 I 南区河川跡出土土器 (1)



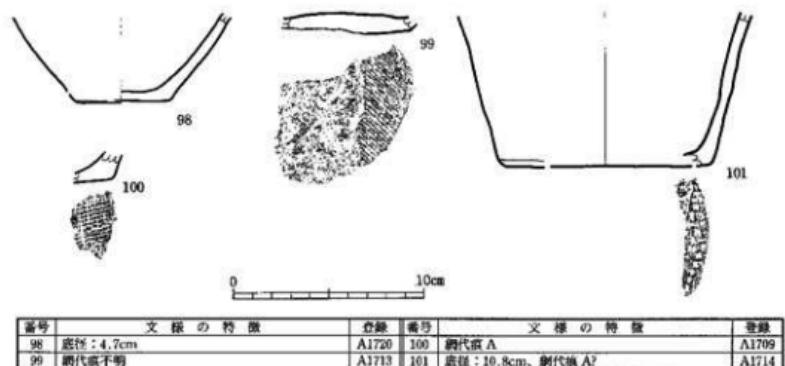
番号	文様の特徴	登録番号	文様の特徴	登録番号
36	圓文LR、沈縫	A2043	口唇：沈縫、外：沈縫	A1063
37	沈縫	A2041	突起、沈縫、キザミ	A1056
38	圓文LR、沈縫	A2047	口唇：沈縫	A1052
39	圓文LR、沈縫	A2048	沈縫	A1032
40	沈縫	A2040	沈縫、キザミ、口径6.6cm	A1417
41	沈縫	A2050	沈縫、圓文LR	A1011
42	波状口縁、沈縫	A1015	隆筋+側突	A1024
43	波状口縁、沈縫	A999	11号：キザミ、外：沈縫、圓文RL	A978
44	波状口縁、沈縫、圓文LR	A968	口唇：キザミ、外：沈縫、圓文LR	A966
45	波状口縁、沈縫、圓文不明	A995	突起、口唇：沈縫、外：沈縫、キザミ、圓文LR、内：沈縫	A974
46	波状口縁、沈縫	A2131	口唇：キザミ、外：沈縫、圓文LR	A1001
47	LH口：沈縫、火炎型、外：圓文LR、沈縫	A977	63 11号：キザミ、外：沈縫、圓文RL	A997 A1022
48	圓文LR、沈縫	A2086	沈縫、圓文LR	A1022
49	圓文LR、沈縫	A2087	沈縫、圓文LR	A2096
50	沈縫	A1060	沈縫、圓文LR	A1031
51	口唇：沈縫、外：沈縫	A1046		

第212図 I 南区河川跡出土土器（2）



番号	文様の特徴	番号	文様の特徴	番号
67	縦文 RL・LR	A1085	83	縦文 LR
68	縦文 LR・RL	A1109	84	縦文 LR
69	縦文 RL	A1096	85	縦文 LR
70	縦文 RL,R	A1097	86	縦文 LR
71	縦文 RL	A1103	87	縦文 r
72	縦文 RL	A1159	88	縦文 LR
73	縦文 RL	A1130	89	縦文 LR
74	縦文 RL	A1095	90	縦文 LR
75	縦文 RL	A1100	91	縦文 LR
76	縦文 RL	A1101	92	縦文 RL
77	縦文 RL	A1125	93	縦文小明
78	縦文 RL	A1127	94	刷目状撚糸文 RL
79	縦文 RL	A1132	95	
80	縦文 RL	A1088	96	
81	縦文 RL、補修孔	A1082	97	
82	縦文 LR	A1118		

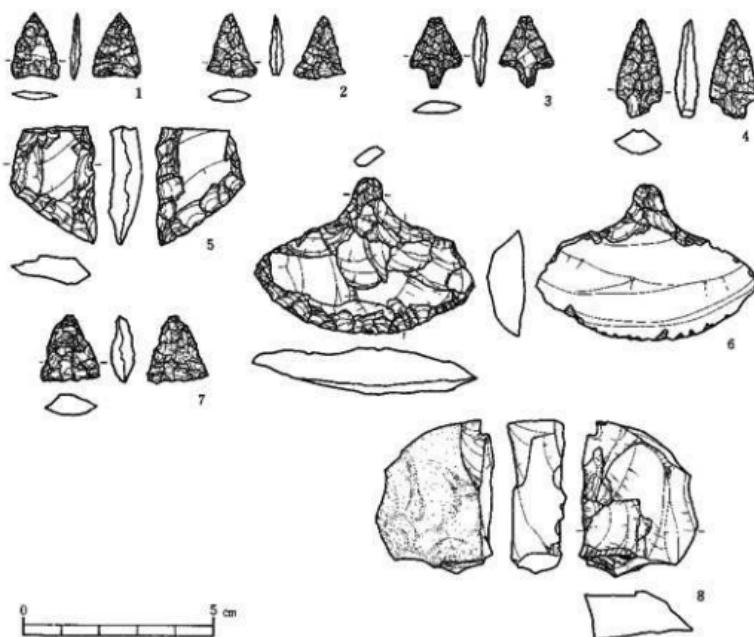
第213図 I 南区河川跡出土土器 (3)



第214図 I 南区河川跡出土土器 (4)

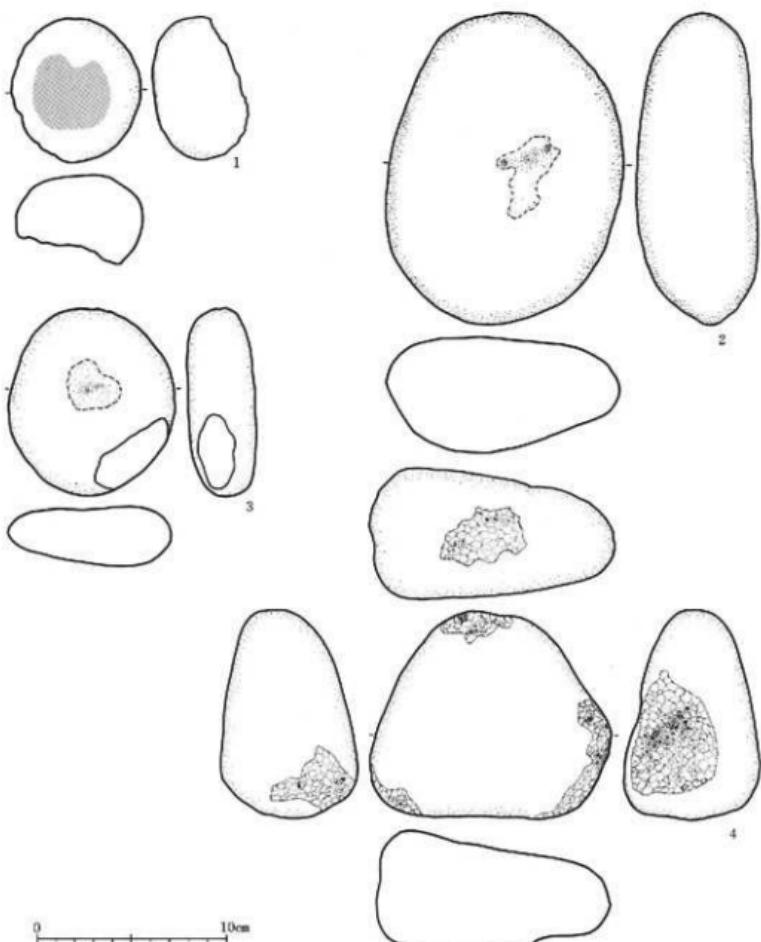


第215図 遺構出土の縄文土器



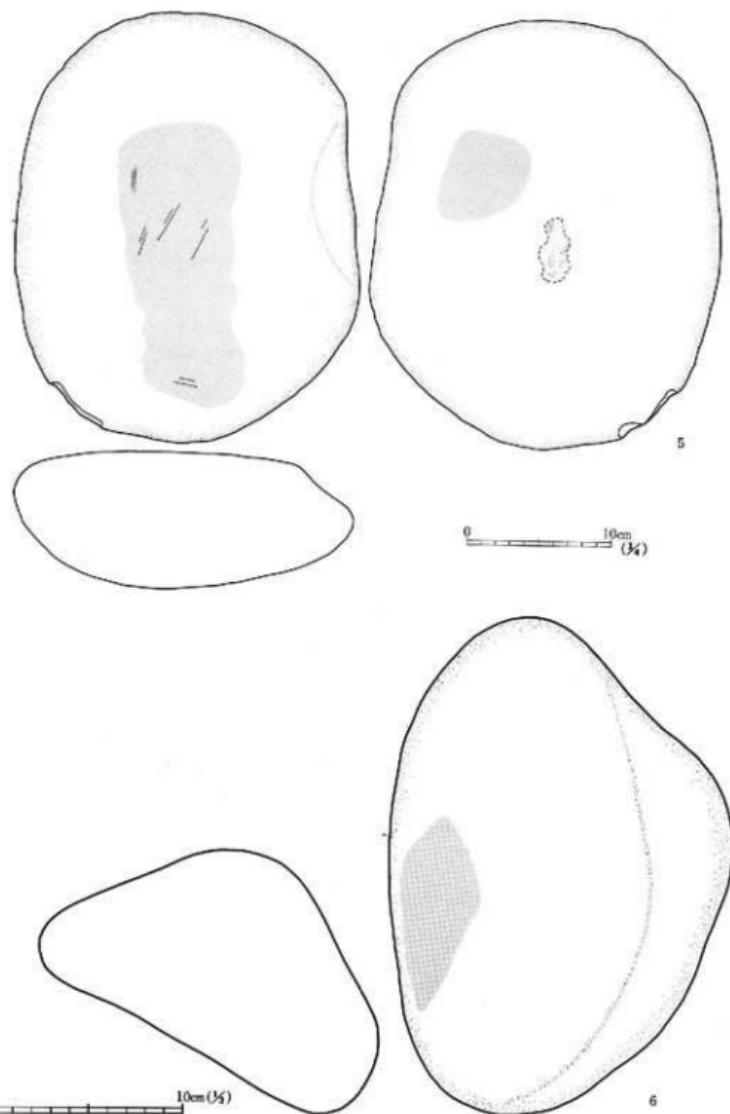
番号	遺構・附位	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	備考	帶緯
1	SH12 ピット	石鏃 I A	17.4	12.1	2.4	0.4	鐵石英		Ka13
2	II区不明	石鏃 I B	16.2	12.7	3.0	0.4	玉髓		Ka14
3	SH12 床下	石鏃 II	18.5	13.5	2.9	0.5	珪質頁岩	先端欠損	Ka17
4	SH12 床面	石鏃 II	25.8	12.1	5.8	1.3	頁岩	先端欠損	Ka16
5	SH12 床面	不定形 I A	34.6	23.4	7.2	5.6	頁岩	(火)	Ka87
6	SI6 床面	石鏃 II	41.2	38.6	10.8	20.2	珪質頁岩		Ka50
7	SD6	石鏃 I B	17.2	15.6	5.7	1.1	玉髓		Ka13
8	SD6	石核	43.2	34.9	14.1	20.3	珪質頁岩	(大)	Ka362

第216図 遺構出土の制片石器



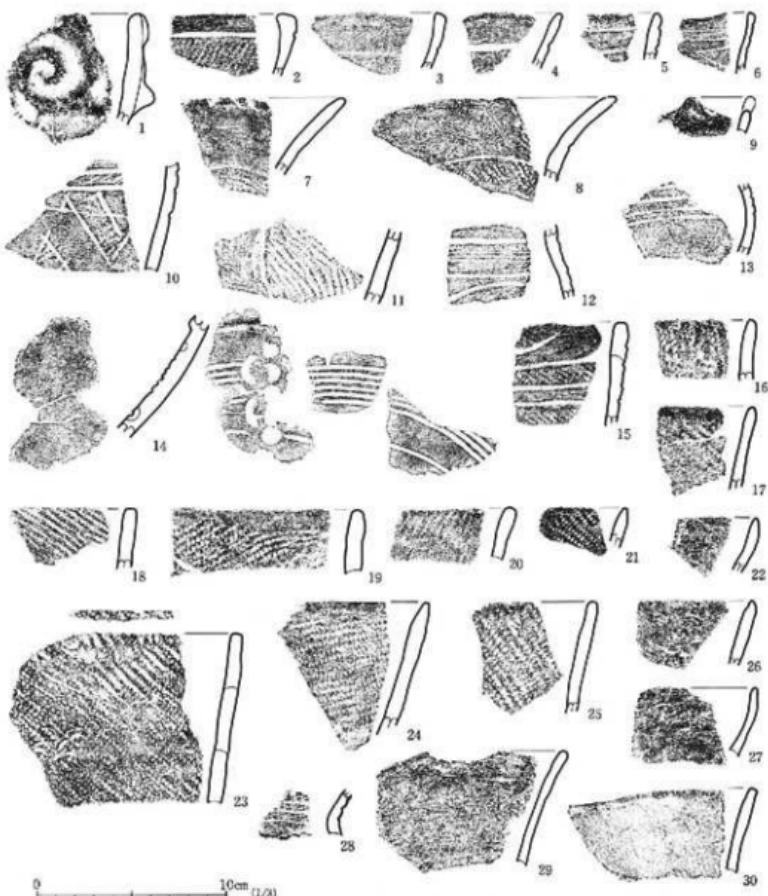
第217図 遺構出土の石器 (1)

番号	遺構・層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
1	SIH # 1	IX 潟	7.7	6.9	4.8	240	石英安山岩		Kc273
2	SIH3	I B 凹み 滝	16.7	12.5	6.2	1770	安山岩		Kc62
3	SIH	I B 凹み 滝	10.0	8.9	3.2	180			Kc272
4	SD6	III 裂	11.0	12.7	6.0	1160	輝石		Kc95



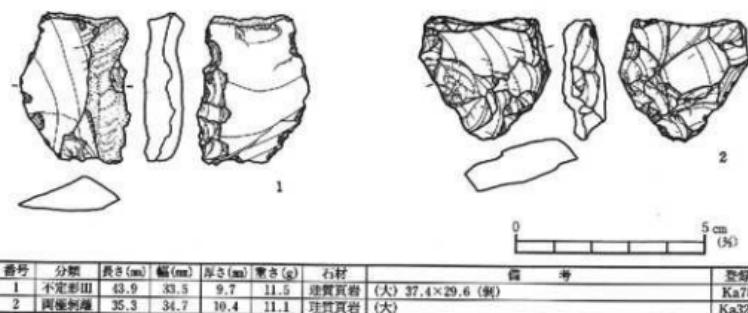
第218図 遺構出土の磨石器（2）

番号	遺構・附位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録
5	Sil14 床	IX 磨	30.6	24.3	9.8	11050	安山岩		Kc31
6	Sil14 床	IX 磨	26.6	18.1	13.9	7500	安山岩		Kc1

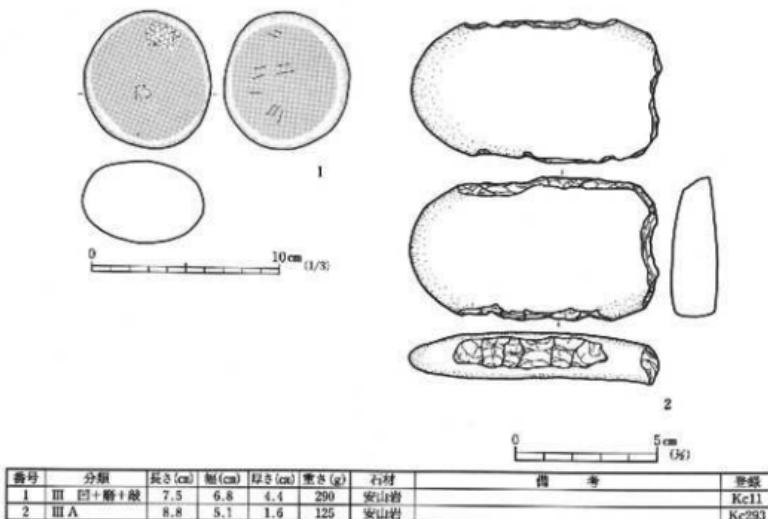


文様の特徴		登録	文様の特徴	登録	
1	縞模	A1066	18	縞文 RL	A1283
2	縞文 LR、沈線	A1064	17	縞文 RL	A1282
3	沈線	A1321	18	縞文 LR	A2149
4	沈線	A1329	19	縞文 LR	A1317
5	沈線	A1250	20	縞文 LR	A1324
6	波状口縫、縞文不明、沈線	A1323	21	縞文 RL	A1225
7	縞文 RL、沈線	A1065	22		A1344
8	縞文 RL、沈線	A2130	23	縞文 RL (口唇～体)	A1098
9	波状口縫	A1253	24	縞文 LR	A1331
10	縞文不明、沈線	A1749	25	縞文 RL	A928
11	縞文 RL、沈線	A2111	26		A1259
12	沈線 (太+細)	A2112	27		A1340
13	沈線	A2115	28	縞文不明、沈線	A1544
14	内部に沈線、剥痕	A2261	29	波状口縫	A1254
15	縞文 RL、沈線	A1318	30		A1166

第219図 地区・層位不明の土器



第220図 地区・層位不明の剥片石器



第221図 地区・層位不明の礫石器

(4) 土製品

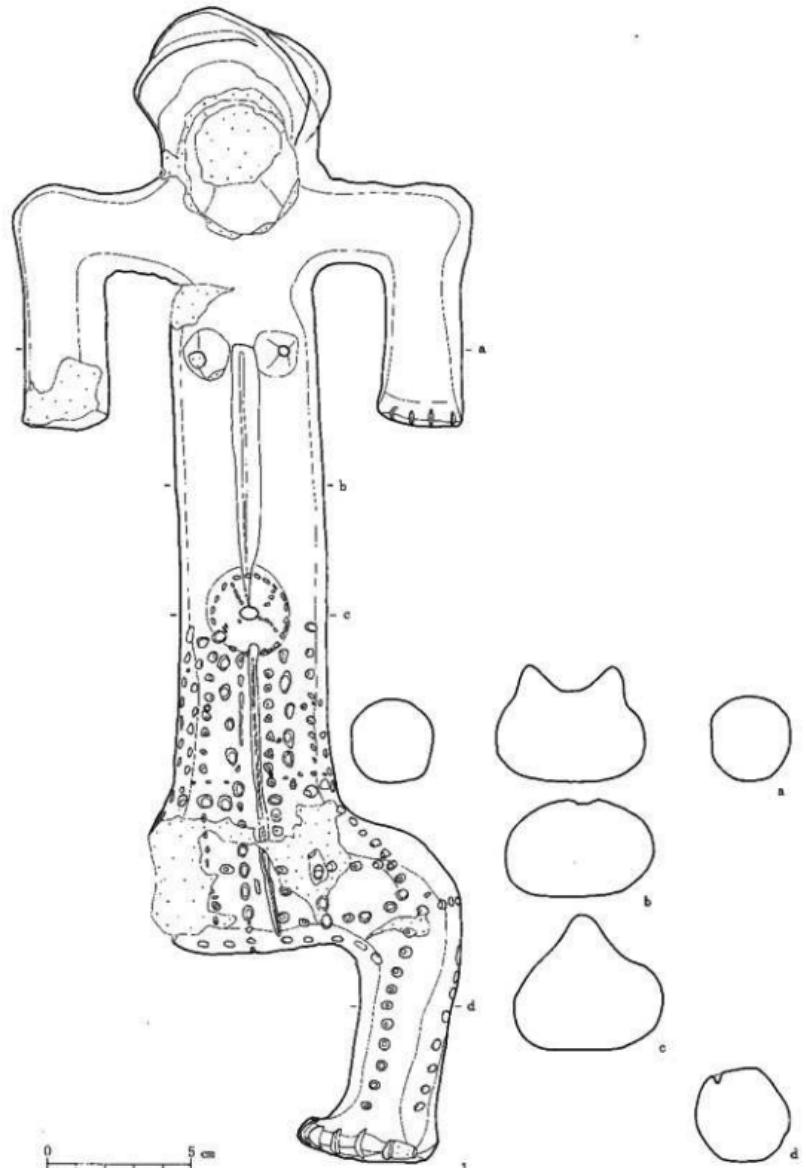
主に遺物包含層より土製品が出土している。

土偶（第222～228図） 1はB30グリッドの70×40cmの範囲に、体部上半、体部下半、右腕の3つに分かれて出土した。腰から脚にかけては細かな割れが入っている。立像で顔面と右脚を欠く。腕と脚は直角に曲げられ、胴が長く伸びる。乳房と腹は隆起しており、腹から下半身には刺突文、表面の中央には沈線が施される。頭部は粘土紐が貼り付けられる。手足の指はザミで表現される。破損面の一部には小さな黒斑が見られ（写真113）、成形時に芯を入れていた可能性がある。2は、頭部がC32グリッド、体部がD34グリッドから出土しており、直線距離で約8m離れている。また、左脚の付け根で割れている。立像で右脚を欠く。腕は直角に曲がるが端部が外に開く。顔面は前に突き出し、目と鼻が表現される。乳房と腹は隆起し、体部中央に隆線が施される。脚はゆるやかに内弯する。ところどころに指ナデ痕が残る。3も包含層のものだが、出土地点は不明である。立像で右腕と右脚を欠く。顔面は前に突き出し、目と鼻が表現され、沈線が施される。腕は直角に曲がる。乳房と腹は隆起し、胸部以下に刺突文が施される。刺突は腹部に2列に横長に施され、その上下のものは縦長である。脚は短く、足が広がる。4は、F37グリッドの50×50cmの範囲に体部が2つ、両脚、腕部に分かれて出土した。座像で、頭部と左腕を欠く。立て膝をし、腕を組むポーズをとる。背面には縫文が施され、沈線が交差する。背面下部中央が背骨状に隆起する。右腕には約1.2cmの穴があく。5・6は顔面である。6はその形状から人面付土板とすべきかもしれない。7～9は体部である。8は1～4に類似する長脚のものである。10～17・20は腕部、18・19・21～23は脚部と考えられる破片である。

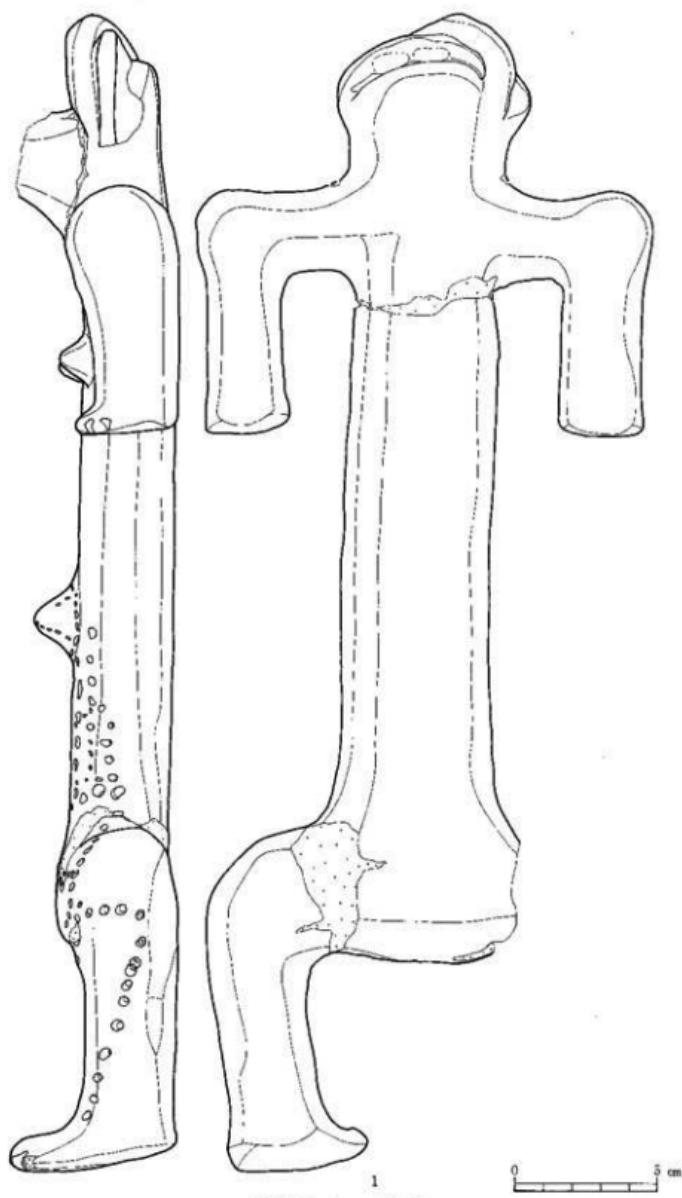
その他土製品（第229・230図） 第229図1は縦長、環状の土製品で、上下を欠く。上部には残存面がある。脚付の香炉形土器かと推測している。第230図1・2は棒状で表面の剥落が著しい。屈折像土偶の腕部かと推測している。4・5は突起の先端部と考えられ、5は包含層出土土器94の突起に似る。10は土鍤である。側縁と中央に溝がめぐる。

土製円盤（第231図） 調査区全体で100点出土しており、そのうち33点を図示した。1～28は遺物包含層から、29～33はIII区の各層から出土している。直径は2cm～6cmである。

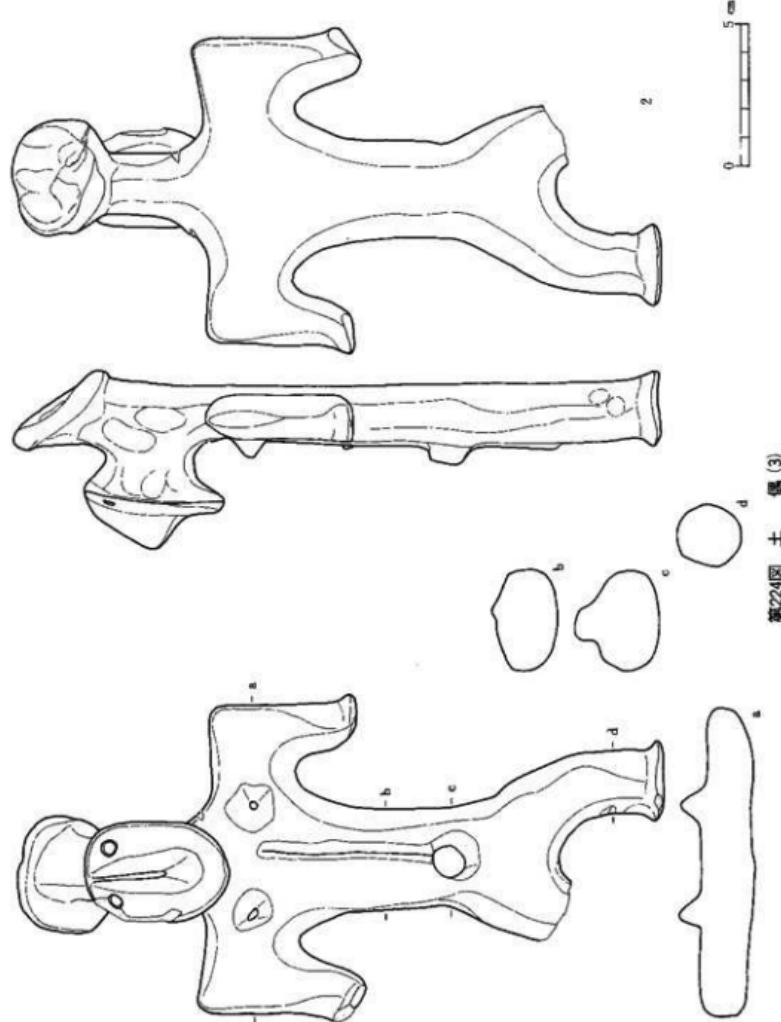
ミニチュア土器（第232図） 非常に小形の土器である。21はてづくね痕がよく残る。



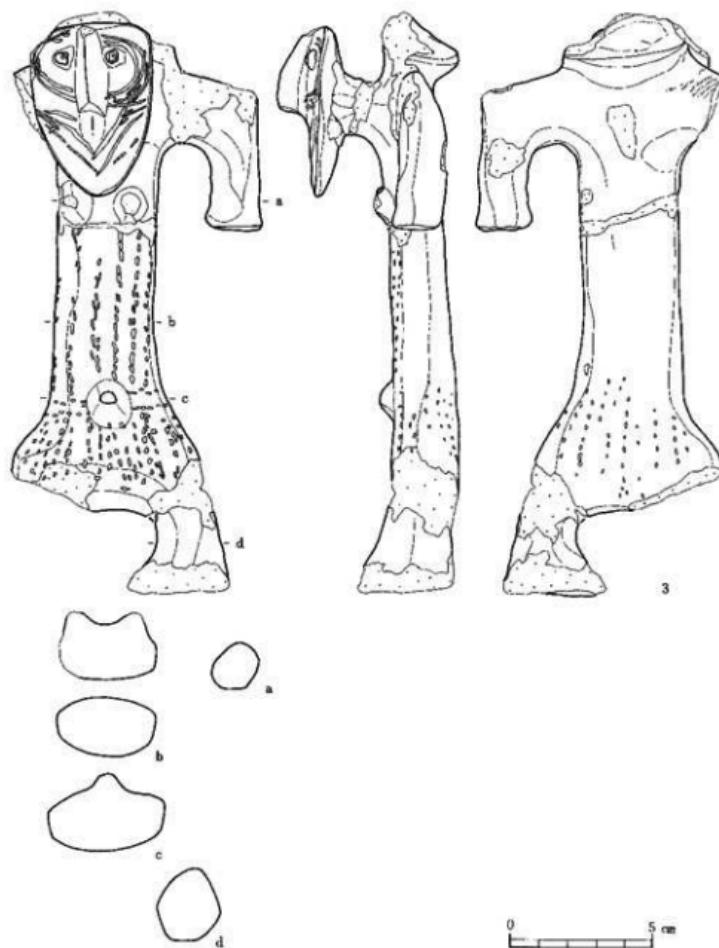
第222図 土偶(1)



第223図 土偶(2)



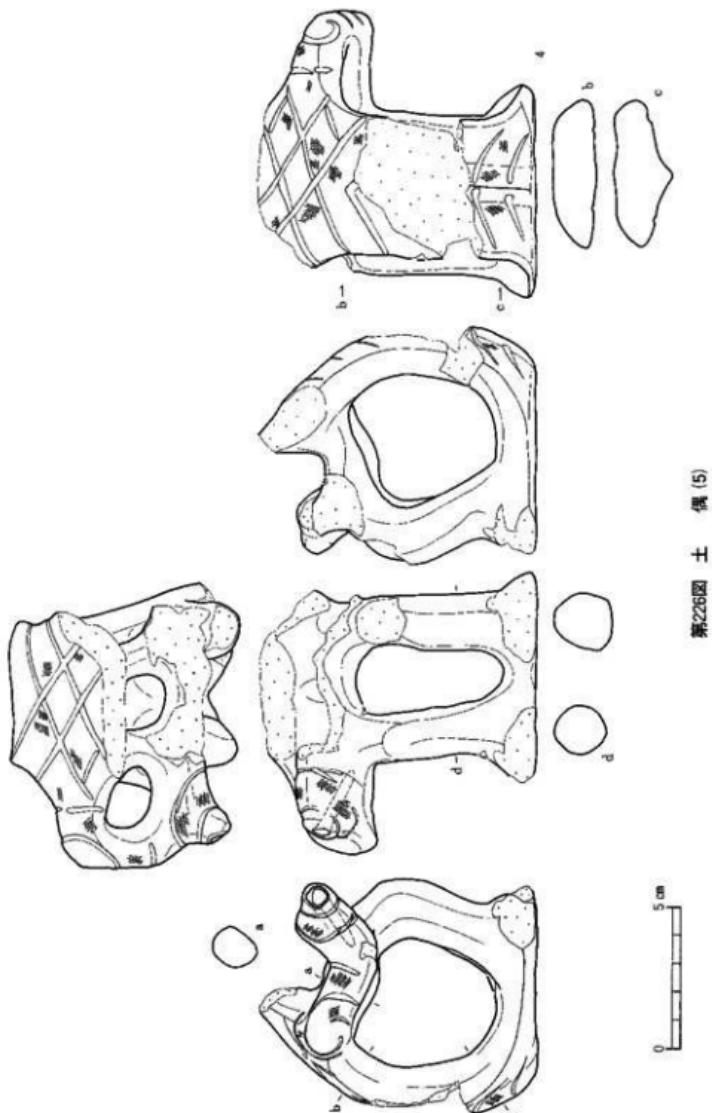
第224図 土器(3)



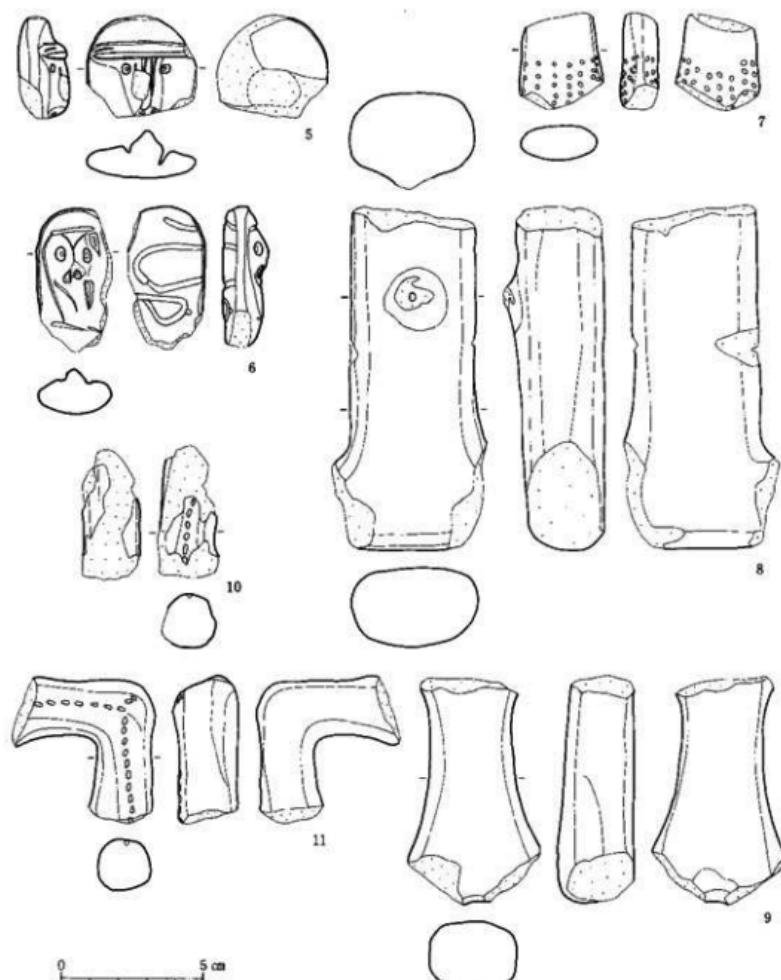
番号	地区	層位	長さ	幅	断面	厚	微厚	特徴		目録
								頭	尾	
1	B30f	6層	41.4	16.2	5.2	3.5	4.8	頭と右腕を欠く、下半身正面に刺文文、体側正面に梵線、手・足にキザミ		P137
2	D34e	6層	22.8	11.6	3.6	2.3	2.9	右腕を欠く、体側正面に陳跡		P138
3		6層	20.7	8.8	3.5	2.1	2.7	右腕と左腕を欠く、断面に梵線、体側正面と下肢部背面に刺文文、骨質部に梵文 L.		P139
4	F37c	6層	9.9	10.1	3.3	1.5	2.1	頭部と左腕を欠く、頭文 LR、梵線、背面中央陳跡、右側に孔(深2.4cm)		P140

(単位 cm)

第225図 土偶(4)



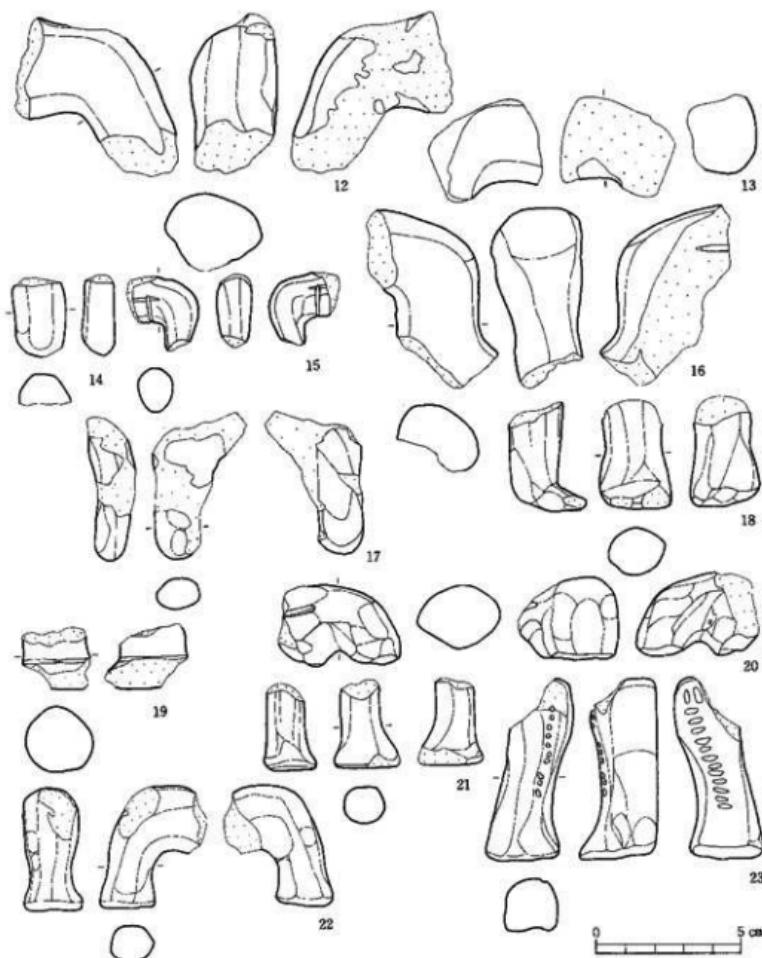
第226図 土 壁(5)



番号	地区	層位	残存部位	特　徴	登録
5	C31	6層	頭部	脣・鼻隆起、腹・鼻孔刻穴、脣・鼻に網状線、背部に刺繡痕	P128
6	B29h	6層	頭部	鼻孔起、脣・鼻孔刻突、表面に次縫	P105
7	D34e	9層	頭下半部	表面に刺繡文	P107
8	山区	表七	脚下半部	脚部隆起、脚幅4.3cm、厚2.6cm、脚厚3.4cm	P131
9	E35	6層	脚部		P110
10	C34h	6層	右腕か脚	表面に刺繡文	P108
11	D36	6層	左脚	表面に刺繡文	P101

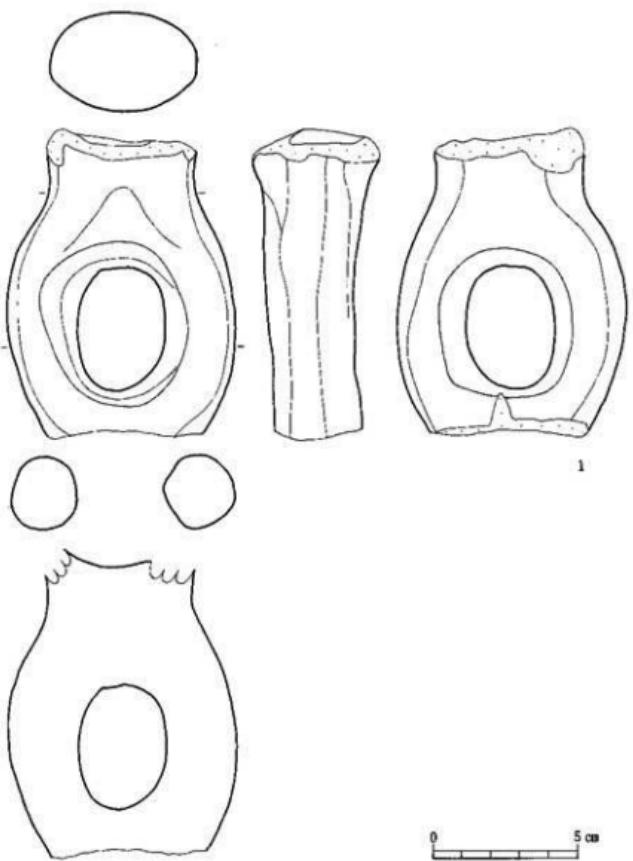
第227図 土　偶(6)

2. 織文時代の遺構と遺物



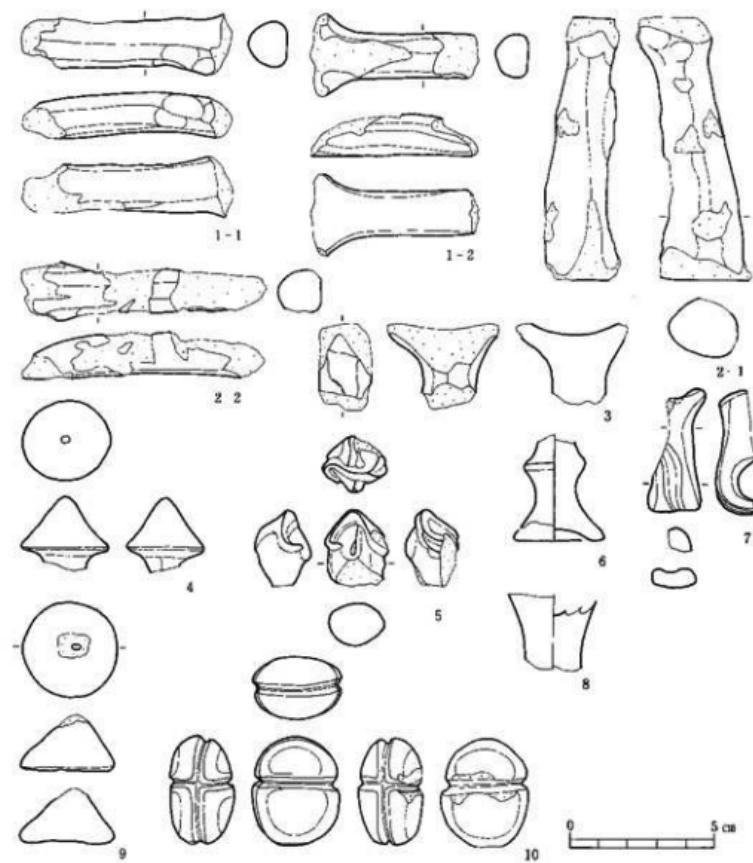
番号	地名	層位	残存部位	特　徴	登録
12	E35	6層	左腕？		P106
13	E35	6層	腕部		P123
14	E35	6層	腕部		P124
15	D35b	6層	左腕	沈縫	P125
16	E35c	6層	左腕	裏面剝離部分に刺突あり	P109
17	F35		右腕		P135
18	F35g	6層	右腕		P127
19	C36i	6層	腕？	沈縫	P116
20	E35	5層	左腕？	沈縫	P134
21	D36g	6層	右腕		P126
22	H34c		右腕	端部凹む	P103
23	S 1-12	粘床	左腕	表：刺突、裏：平坦面に細長い刺突	P104

第228図 土偶(7)



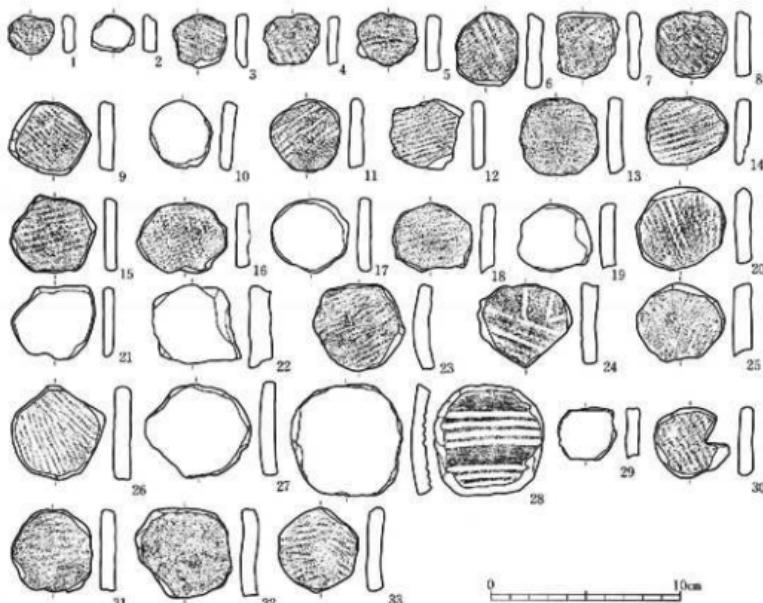
番号	地区	層位	残存高	残存幅	厚	底部共	底部幅	特	登録
1	E26	6層	11.0cm	8.0cm	3.5cm	4.9cm	3.1cm	上下多欠く	P130

第229図 土 製 品 (1)



番号	地区	層位	特徴	通號
1	D35a	6層		P133
2	D35a	6層	一面に炭化物付着	P132
3	C35f	6層		P119
4	C35h	6層	先起頭部か？径約3.0cm	P118
5	III区	6層	突起D部か？紐状貼合が交叉	P102
6	G30g	6層	脚？火起頭部か？	P129
7	B27	6層		P113
8	C29	6層		P120
9	II区	5層	長3.4cm、高さ2.0cm	P112
10	B30	6層	土罐、長3.8cm、幅3.0cm、厚2.3cm、重さ26.4g、縁部と中央に沈線	P136

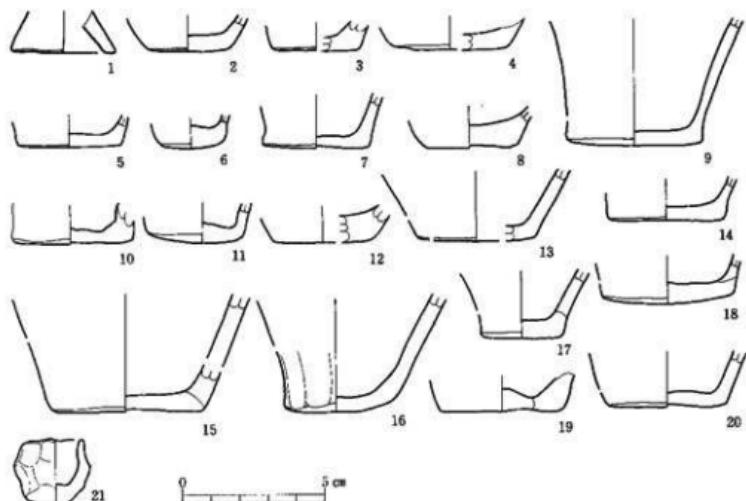
第230図 土製品(2)



番号	地区・層位	大きさ×幅×厚さ mm	重さ g	特徴	番号	地区・層位	大きさ×幅×厚さ mm	重さ g	特徴	登録
1	B27 6層	21×24.5×5.5	4.0	縞文 RL	P30	I36 6層	37×42.5×6.5	14.8	縞文 LR	P14
2	B28 6層	20×23×7	4.2		P32	I19 D24 6層	36.5×39×7.5	13.7		P13
3	B30e 6層	29×28×5.5	6.2	縞文 LR?	P33	20 D35 6層	45×48×8	19.2	燃余文 R	P7
4	B28 6層	28×29×4.5	5.8	縞文 LR?	P31	21 D35 6層	39×44.2×5.5	13		P8
5	D36 6層	28.5×33×7.5	9.4	縞文 RL	P17	22 IIIE 6層	42.5×41×12.5	31.3		P11
6	B29 6層	39.7×32.6×7.9	15.5	縞文 RLR	P21	23 B30 6層	46.4×48.5×8.4	22.9	縞文 LR	P4
7	C30 6層	35.5×32.5×6	11	縞文 RL	P29	24 A20F 6層	56×45×7	20.6	縞文 LR, 沈縞	P19
8	I29b 6層	36×38.5×7.9	15.4	縞文 RL	P9	25 D34 6層	42×46.5×10	24.9	燃余文 R	P20
9	E36f 6層	39.5×43×8	15.5	縞文 LR	P5	26 C33b 6層	50.5×49×8.5	26.1	燃余文 R	P24
10	D30 6層	36.5×33×6	8.7		P18	27 E36b 6層	47.5×55×8	27.9		P25
11	E36e 6層	39×37×7.6	14.5	縞文 RL	P28	28 6層	60×59×7.9	40.7	沈縞	P1
12	III区 6層	38×39×6	11.2	縞文 LR	P27	29 B31 4層	28×31×6	6.3		P28
13	C32 6層	41.5×42×7	17.2	縞文 LR	P16	30 C35 5層	37.3×40×7	12.1	縞文 RL	P22
14	E35c 6層	36×44×8.2	16.5	縞文 LR	P10	31 F38 5層	44×42×7.9	21.1	縞文不明	P23
15	I33f 6層	41×45×6.2	15.4	縞文 LR	P3	32 D24 9層	48×51×8	24.6		P2
16	C36 6層	37×48.5×7	13.7	縞文 RLR	P8	33 III区 断面	46×43×7	19.5	縞文 LR	P15
17	B29 6層	39×40×7.5	14.6		P12					

第231図 土製円盤

1 古墳～平安時代の遺構と遺物について



番号	地区	層位	直径	特徴	番号	地区	層位	直径	特徴	番号	
1	C34	6層	3.7	断面に墨色付青物	A1519	12	D06	6層	3.6	A1564	
2	C28	6層	2.9		A1547	13	C30	6層	4.2	A1559	
3	C33	6層	3.2		A1549	14	SK15		4.2	A1569	
4	C35	6層	4.2		A1548	15	B29	6層	5.1	A1561	
5	C35e	6層	3.6		A1551	16	D05	6層	3.6	A1567	
6	C28	6層	2.5		A1558	17	B28		2.9	A1568	
7		6層	3.8		A1552	18	D39		4.6	A1555	
8		6層	3.5		A1556	19	D33d		4.4	A1566	
9	B29	6層	4.8		A1550	20			4.1	A1553	
10	C30g	6層	4.3		A1557	21			1.3	高2.2cm、手づくね	A1560
11	C35b	6層	2.6		A1562						

第232図 ミニチュア土器

(単位 cm)

VI 考 察

1 古墳～平安時代の遺構と遺物について

(1) 土器について

古墳～平安時代の土器は、出土状況とその特徴から3つの群に分けることができた。I群土器は古墳時代前期塙釜式にあたるもの、II群土器は古墳時代後期から奈良時代に位置付けられるもの、III群土器は平安時代に位置付けられるものである。以下順に説明する。

I 群土器 (第233・234図)

主に S I 5・14住居跡、S K 8 土坑から出土した土器である。これらは器種構成と調整技法の特徴から、古墳時代前期の塙釜式（氏家：1957）に位置付けられるものである。

S I 14住居跡からは、堆積土、床面直上、床面から遺物が出土しており、床面直上と床面の遺物は住居廃絶後の短期間に廃棄されたものと見られ、一括りの高いものである。第233図1～10は床面直上・床面出土のもの、11～15は堆積土出土のものである。前者には高坏、坏、壺、甕があり、後者には器台、壺、甕がある。なお、器種分類と名称については、從来からの用法にならっていいる。

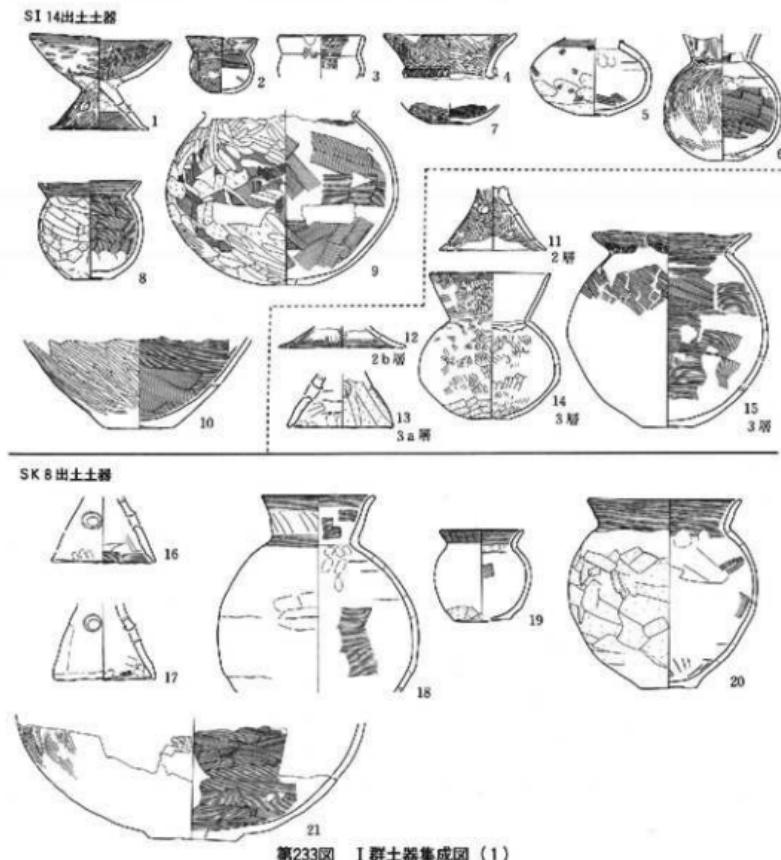
S I 14床面直上・床面出土遺物 (第233図) 高坏(1)は、坏部は無段丸底で、脚部は円錐台状に開き、中央部に3孔の円窓がある。外面と坏部内面はヘラミガキされ、丁寧なつくりであり、赤彩されている。坏(鉢)は2点ある(2・3)。2は口縁部が短く外傾し、外面と口縁部内面にヘラミガキが施されており、丁寧なつくりのものである。3は全形が不明だが、口縁部の傾きは緩く、内外ともヘラミガキが施され、赤彩される。壺は4点ある(4～7)。4は口縁部が短く外反し、頸部にキザミを持つ隆帯が巡る。5は胴部が玉葱形にふくらみ、6は球形の胴部で口縁部が高く伸びる。4・6は外面ヘラミガキ、5はハケメとヘラケズリである。7は底部資料である。甕には大形と小形がある。8は小形甕で、口縁部が外傾している。体部外面はヘラケズリである。9は胴部のみで、外面はハケメの後ヘラミガキが施される。10も甕と考えられるもので、外面はヘラミガキである。

S I 14堆積土出土遺物 (第233図) 11、12が2層、13～15が3層出土のものである。器台(11)は脚部のみ残る。脚部は円錐台状で、上部に貫通孔があり、やや上気味に3孔の円窓がある。内外面ヘラミガキされる。12は器台もしくは高坏の脚部で、孔の位置が低い。13は粗雑なつくりであるが有孔であることから器台と考えた。外面はヘラケズリ、内面には成形痕が残る。円窓は3孔と考えられる。壺(14)は、胴部が球形にふくらみ、口縁部が高く伸びる。外面はヘラミガキで、下端部にヘラケズリが見られる。甕(15)は胴部が丸くふくらみ、口縁部が外傾する。外面はハケメである。

S K 8 土坑出土土器 (第233図) S I 14の床面直上の8と3層出土の14はS K 8 出土土器と接合していることから、S I 14の3層以下出土土器とS K 8 の遺物は同時期の廃棄と考えられる。16・17は13に類似しており、器台の可能性がある。外面の調整は不明で、内面は成形痕がよく残る。3孔の円窓を持つと考えられる。甕(18)は上半のみだが、やや縱長の胴部に口縁部が長く伸びる。外面は不明瞭だが、ヘラナデカと考えられる。甕は小形(19)と大形(20・21)がある。19は8と異なり、体部と口縁部の境がゆるやかである。体部下端にヘラケズリがある。20は胴部の最大径がやや上部にあり、口縁部が直立気味に外反する。外面はヘラケズリである。21は

外面へラミガキである。

以上の土器については、住居床面および床面直上出土土器がまとまりある土器群として取り扱われるものである。しかし、住居床面および床面直上の土器と堆積土3層出土の土器はいずれもSK8出土土器と接合関係にあることから、これら3者は廃棄にあたり近接した時期であったと考えられ、まとめて扱うことも可能と考えられる。そうした場合、器種としては高壺、器台、壺(鉢)、壺、甕が認められる。高壺は1種類である(1)。器台(?)は粗雑なもの(13・16・17)がある。壺(鉢)は2種類あるが(2・3)、いわゆる小形丸底鉢の器形とは異なる。壺はいずれも單口縁で、器形には4と5・6・14と18の3種がある。甕は小形と大形がある。堆積土2層の器台(11)を加えると、一般的な器種がそろうことになる。



土器群の位置付け 塩釜式については氏家和典氏による型式設定(氏家: 1957)以来、出土資料の増加に伴いその変遷について考察されてきた。丹羽茂氏は宮前遺跡の成果(丹羽: 1983)を踏まえて4段階の変遷案を示している(丹羽: 1985)。変遷の視点として、高坏・器台の円窓が多いものからやがて消失、器面調整の精緻なものから粗略へ、甕の腹部が球形のものからや長胴のものへ、甕のハケメ主体から他の調整へ、などと整理されている。S I 14住出土土器に当てはめ最も特徴を示す高坏(1)で見ると、脚部の開き具合や円窓が3孔であることからII段階にあたる。他の器種についてみてもおおむねII段階にあたり、甕の頸部にキザミ付の隆帯が巡るという装飾的要素の残存から、II A段階に置かれるものと考えられる。

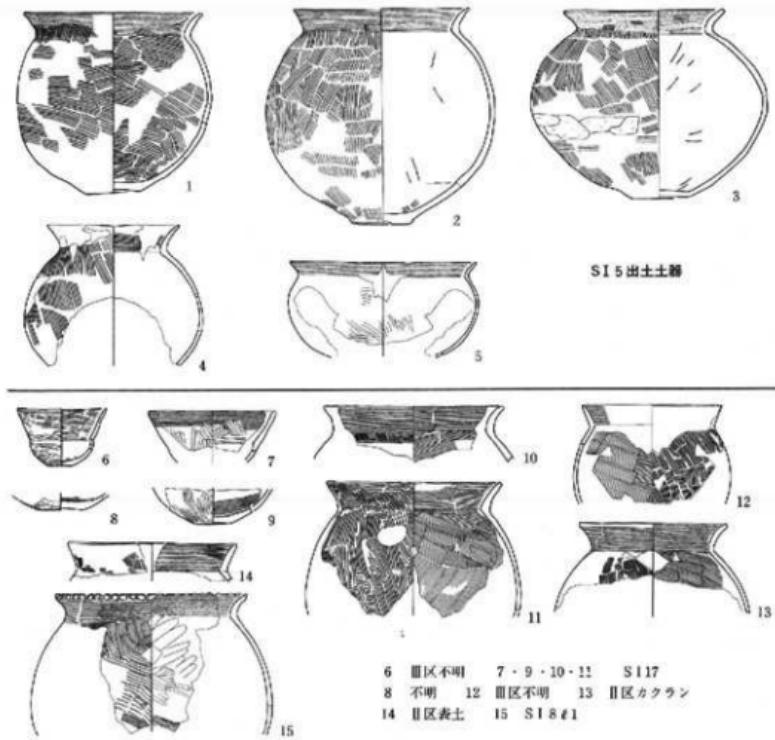
次山淳氏は、塩釜式土器の変遷について、他地域との関係や系統性などの外的要因を考慮にいれた視点から考える必要性を説き、6段階の変遷過程を明らかにしている(次山: 1992)。その指標として高坏・小形丸底鉢・甕をとりあげている。高坏は主に脚部の形態に着目しており、それによるとS I 14住の1は楕状の坏部に円錐状の脚部のつくC類に分類される。また、小形丸底鉢については変遷の2段階のなかで出現するとされる。甕については、口縁部の断面形態と体部外面調整の変遷をたどっている。この論文中ではS I 14住出土土器は2段階に位置づけられている。2段階は、東日本諸地域における共通の指標のうち「定型化した小形丸底鉢の出現」とされ、畿内編年に対応させると、寺沢薫氏による布留1式の段階におおむね対応するとしている。

辻秀人氏は日本考古学協会シンポジウムの東北南部の古墳出現期についての発表のなかで、塩釜式の土器編年を明らかにしている(辻: 1993)。そこでは、畿内の庄内新段階、漆5、6群に併行するI期と從来の塩釜式に相当するII、III期に大別し、各期をさらに細分している。II期は多様な小形鉢が大量に存在し、小形器台と緩やかな対応関係を持ち、III期は小形器台と定型化した小形丸底鉢が明確な対応関係にある段階としている。そのなかで伊古田遺跡S I 14住出土土器については、II-1期に位置付けている。II-1期は器種ごとの器形が減少し、東海系とされるS I 14住1のような高坏が主流とされる。隆帯を持つ甕も残存する。指標として、野田山10・11・19号住居跡出土資料(須田・吾妻: 1993)をあげている。

丹羽氏、次山氏、辻氏の編年のいずれにおいても、S I 14住出土土器については大橋遺跡出土資料(太田: 1980)などに代表される仙台平野における初期段階の土器群の次段階に位置付けられている。市内の資料を概観すると、戸ノ内遺跡方形周溝墓、3・4号住居跡出土資料(渡部・主浜: 1984)は高坏・器台に古い様相が見られ、S I 14住資料より古い段階と考えられる。安久東遺跡方形周溝墓出土資料(土岐山: 1980)は甕が主体を占めるが、高坏の特徴からS I 14住資料とほぼ同時期と見られる(辻: 前掲)。中田焼中遺跡1次S I 3号住居跡出土資料(青沼・長島: 1983)は、頸部にキザミを持つ隆帯を巡らす甕が存在していることから、これもS I 14住とほぼ

同時期におけるものであろう。今泉遺跡昭和54年度19号土坑出土資料(篠原・工藤:1980)、遠見塚古墳第12トレンチ第I群土器(結城・工藤:1979他)、下ノ内遺跡13住(篠原:1990)はやや新しい位置に、大反田遺跡昭和59年度4号住出土資料(佐藤:1987)はその後に位置付けられるよう。

S I 5 出土土器 (第234図) S I 5 堆積土からは5個体の甕が出土している。1は胴部のふくらみは弱く体内外面ともハケメである。2は1に比べ球形の胴部で、体外面はハケメ、内面はヘラナデである。3は胴中央部が張り出す潰れた形状で、体外面はハケメと中央部にヘラケズリ、内面はヘラナデである。4はややしもぶくれ気味で、体外面はハケメである。5は潰れた形状で、体外面はヘラミガキである。口縁部は1と2は下半部が肥厚しており、調整はいずれもヨコナデである。甕のみで他の器種がないため時期決定は困難だが、胴部が長胴気味にはなっておらず、体外面の調整はハケメ主体で、口縁部のヨコナデは頸部まで及んでいる点など総合して、丹羽氏のII段階、次山氏の2～5段階、辻氏のII-2～III-3段階あたりに入るべき



第234図 I群土器集成図 (2)

である。おむね、S I 14住資料と同じかやや新しい時期と見ることができよう。

その他の資料（第234図） 6・7は壺（鉢）である。6は定型化した小形丸底鉢（次山：1992）といえるもので、口縁部は長く外傾して、内外面ともヘラミガキである。7も同様のものであろう。8・9は壺の底部と推定される。10～14の壺は上半部のみの資料で全体の形は不明である。体外面はハケメである。15は波状口縁の壺である。近隣の類例として、六反田遺跡昭和51～53年度B南区第2号溝4層上面（田中：1981）、今泉遺跡昭和54年度19号土坑（篠原・工藤：1980）、今熊野遺跡K S第15号住居跡（丹羽：1985）、下飯田遺跡（平成3・4年調査）などから出土している。今熊野遺跡のみ器形が分り、台付壺である。

II 群土器（第235図）

製作にあたりロクロを使用していないもののうち、I群土器以外のものを集めた。良好な一括出土の例はない。

壺 1はS I 17住床下の暗渠状造構出土のもので、外面に段を持ち口縁部は内青気味に立ち上がる。外面調整は口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、内面はヘラミガキ、黒色処理である。2はS I 12住ピット1出土のもので、口縁部のみであるが、内外面に段を持つ。調整は内外面ヘラミガキ、黒色処理である。

所属時期については、単品では決められないもの一應検討しておく。1は外面に段を持ち、口縁部が内青気味に立ち上がる特徴から7世紀末から8世紀前半の土器として検討されているもの（加藤：1989、注）にあたる。近隣の類似資料としては、郡山遺跡S D35堆積土1層出土土器（木村他：1985）、六反田遺跡昭和59年度6号住出土土器（佐藤：1987）などがある。2是有段だが、内外面ヘラミガキ・黒色処理であり、1より後出とみられる。8世紀代のものであろう。（注：脱稿は1982年である）

壺 A類：口径より器高が大きいわゆる長胴のもの（5・7）。5は最大径が口縁部にあり、底部がすぼまる器形である。7は小形品である。3・4・8・11・12も同様の器形であろう。体外面の調整は、3がナデとヘラケズリ、4・7・12がナデ、5がハケメ後ナデである。

B類：胴部が大きくふくらむもの（6・10）。体外面の調整は、6がハケメ、10がナデである。9は壺になるものかもしれない。13は壺の把手部である。出土状況は、S I 8住床面より3～5（A）、それを切るS I 7住床面より6（B）、S K25より9～11（A・B）が出土している。

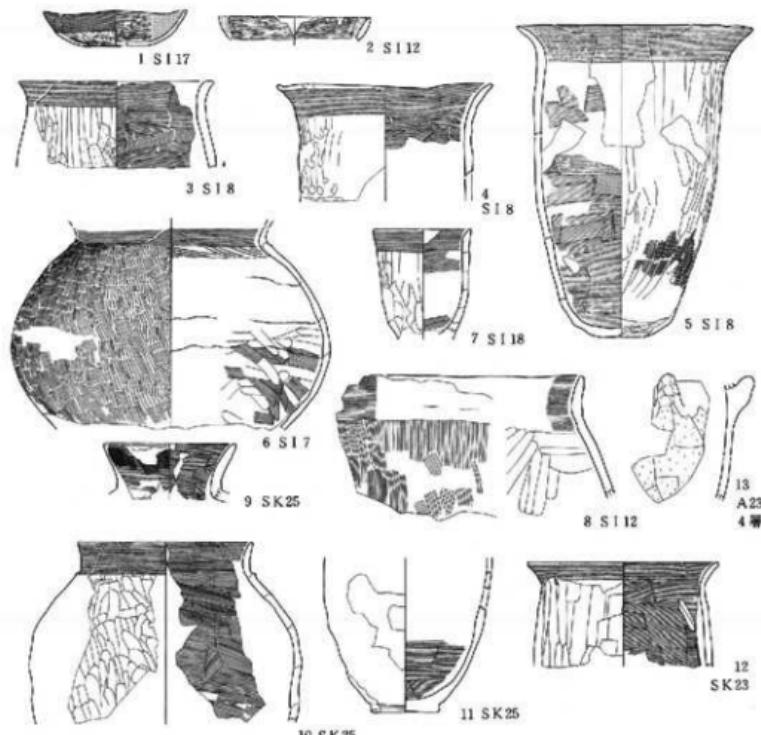
所属時期については、壺のみでは明確に決められないので、大まかな位置付けだけ行ないたい。A類は長胴で、かつ体外面にハケメ以外の調整がされるという特徴から、栗田式かそれ以前にあたる可能性が高い。出土状況からB類のうち6も同じく考えたい。10は頸部に段を持つ特徴より、やはり同じ頃と考えられよう。これらの類似資料として、栗遺跡（工藤・成瀬：1982）、

郡山遺跡15次S E 157(木村他:1982)、24次S I 289(同:1983)、35次S E 429(同:1984)、中田畠中遺跡1次S I 2住居跡(青沼・長島:1983)、清水遺跡IV・V群土器(丹羽他:1981)などがある。

以上のようにII群とした土師器は良好な共伴関係はないものの、古墳時代後期から奈良時代にかけてのものと考えられる。

III群土器

ロクロを使用している土師器を中心とした土器をIII群とした。まず、土師器、須恵器、赤焼土器などについて概括する(第237・238図)。



第235図 II群土器集成図

土師器

坏：外面はロクロナデ、内面はヘラミガキ後黒色処理されている。切り離し後の再調整の有無をもとに、A類：再調整あり、B類：再調整なしに細分される。大部分はB類である。A類には、回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリがある。器形は、口径に比べ底径が比較的小さく体部に丸みを持つものが主体を占め、他に器高と底径が大きく体部の丸みの少ないもの(11・63・77)、体部の直線的なもの(1・44・62)、体部の丸みの強いもの(50、76)などがある。

高台坏：体部は直線的である。高台の低いもの(52・53)と高いもの(33、38)がある。

椀：丸みを持ち深い体部に高台が付くものを椀とした。小振りなもの(96)と大振りのもの(54、80)がある。後者は底部の外側に低い三角高台がつく。

甕：A類：口径15cm程度で、器高が低く、胴部に丸みを持つもの。ロクロメが顯著である。

B類：口径15cmを超える大きなもので、器高が高く、胴部は緩やかな丸みを持つ。内外共にロクロナデで、外面下半部にヘラケズリが施されるものがある。88は口縁部下のくびれがなく、腹の可能性がある。

須恵器

須恵器は全体に出土量が少ない。坏には底部切り離しがヘラ切りのもの、底部切り離し後回転ヘラケズリを施すもの、回転糸切り後無調整のものがある。他の器種として、高台坏、壺、蓋、甕がある。

赤焼土器

ロクロ調整され、底部切り離し後ヘラミガキや黒色処理などの調整のない坏・皿である。色調は橙色、浅黄橙色、にぶい橙色などで、黒斑を持つものもあり、土師器の色に近いことから酸化焰焼成と考えられる。外面に輪積み痕跡を持つものもある。S I 12-3(E10)とS I 13-5(E16)の2点は、色調が灰白色だが黒斑らしきものがあり軟質なので、一応この類にいたれた。
(注1)

小皿：1点のみ(S I 7-1)である。器高が3cmより低く、体部が直線的に外傾する。

高台付小皿：1点のみ(99)である。低い高台がつく。

坏：法量から3つに分かれ。A：口径10.7~12cm、器高2.9~3.5cmの小型のもの。B：口径12.8~14.6cm、器高3.5~6.1cmの中型のもの。C：口径15.5cm~、器高4.3cm~の大型のもの。器形はA・Bは底部から丸みを持ち立ち上がるもので、Cは体部が直線的なもの(41)と、丸みを持つもの(25)とがある。

高台坏：器形は土師器高台坏と同じである。高台の低いもの(101・102)と高いもの(58、86)がある。

灰釉陶器

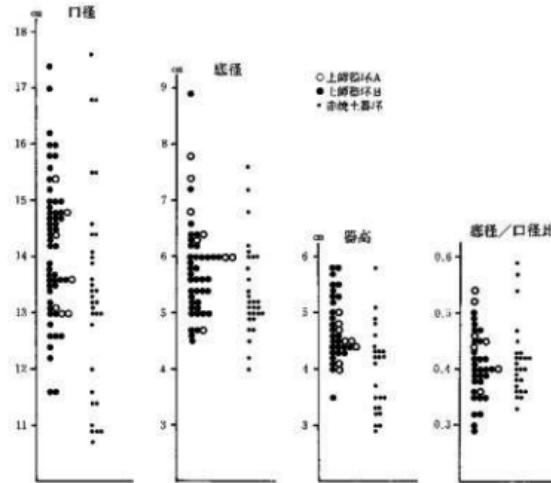
長頸瓶と広口瓶がある。長頸瓶は同一個体と考えられる体部片と底部片(90)がS R 4 河川跡4層下部から出土している。体部には灰釉が刷毛塗りされている。猿投窯産で井ヶ谷78号窯式か黒釜14号窯式頃と見られる。広口瓶はS I 13住カマド堆積土から出土している。下端部と見られ、釉はかかっていない。白生地で厚手であることから、折戸53号窯式かそれ以降と考えられる。

縄釉陶器

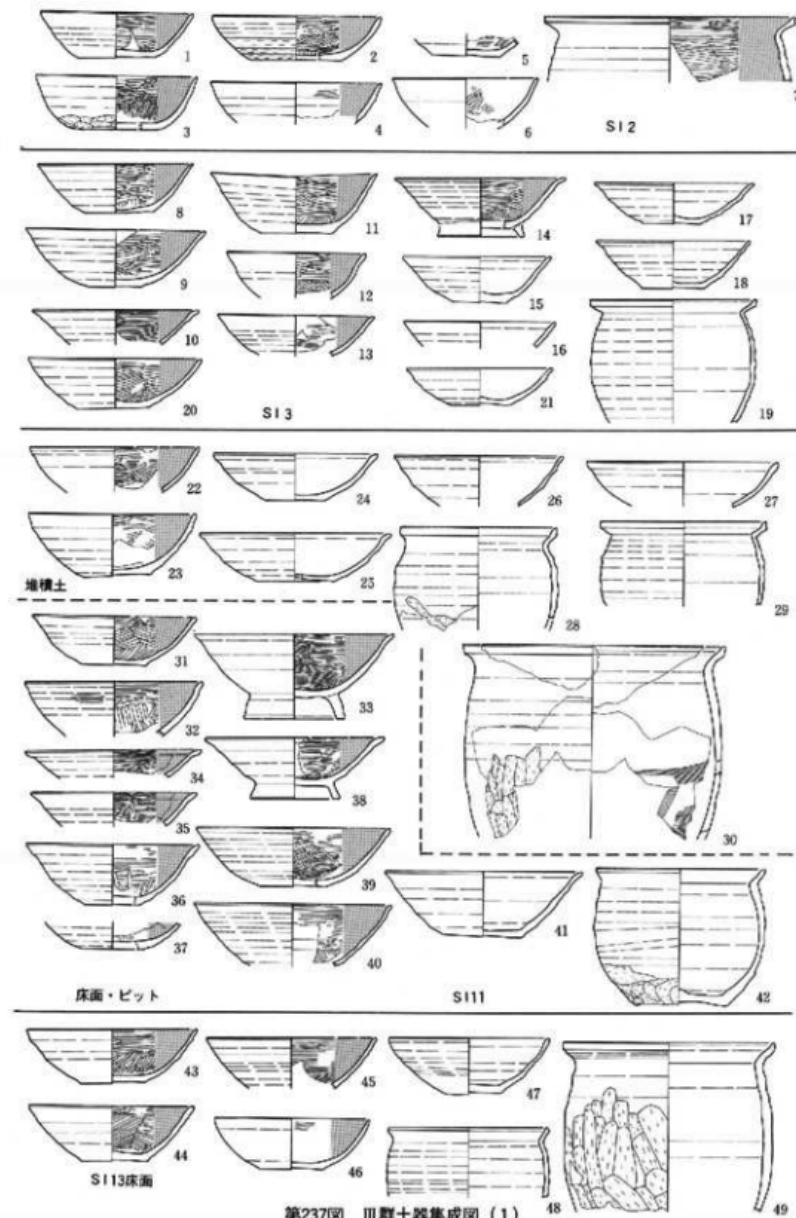
段皿と椀が出土している。段皿はS R 4 河川跡4層下部から出土している。猿投窯産で、黒釜90号窯式期と考えられる。椀はI北区3層より出土している。近江産と推定され、11世紀代かと考えられる。

遺物の出土状況 遺構に伴う遺物の出土状況を第3表に示した。全体的に遺物の量が少ないので充分な検討がしづらいが、その中でも比較的出土量の多いS I 2・3・11・13住居跡、S K 4・16土坑、S R 4 河川跡の遺物を中心に検討を進めたい。第237・238図には堆積土出土遺物も含めて集成している。

遺物の組合せを見てみると(第3表)、S I 2住のみ赤焼土器を含まない。土師器坏で見ると、A類とB類が共に出土するのはS I 2・3・4住で、他はB類のみである。法量はS I 2住の坏は底径が比較的大きく、口径に対する底径の割合(底径/口径比)も比較的大きい。また、切り離し後の再調整はS I 2住は回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリで他は手持ちヘラケズリである。以上のことからS I 2住の遺物とそれ以外の遺物では様相が異なるため、前者をIII a群、後者をIII b群と分けたい。

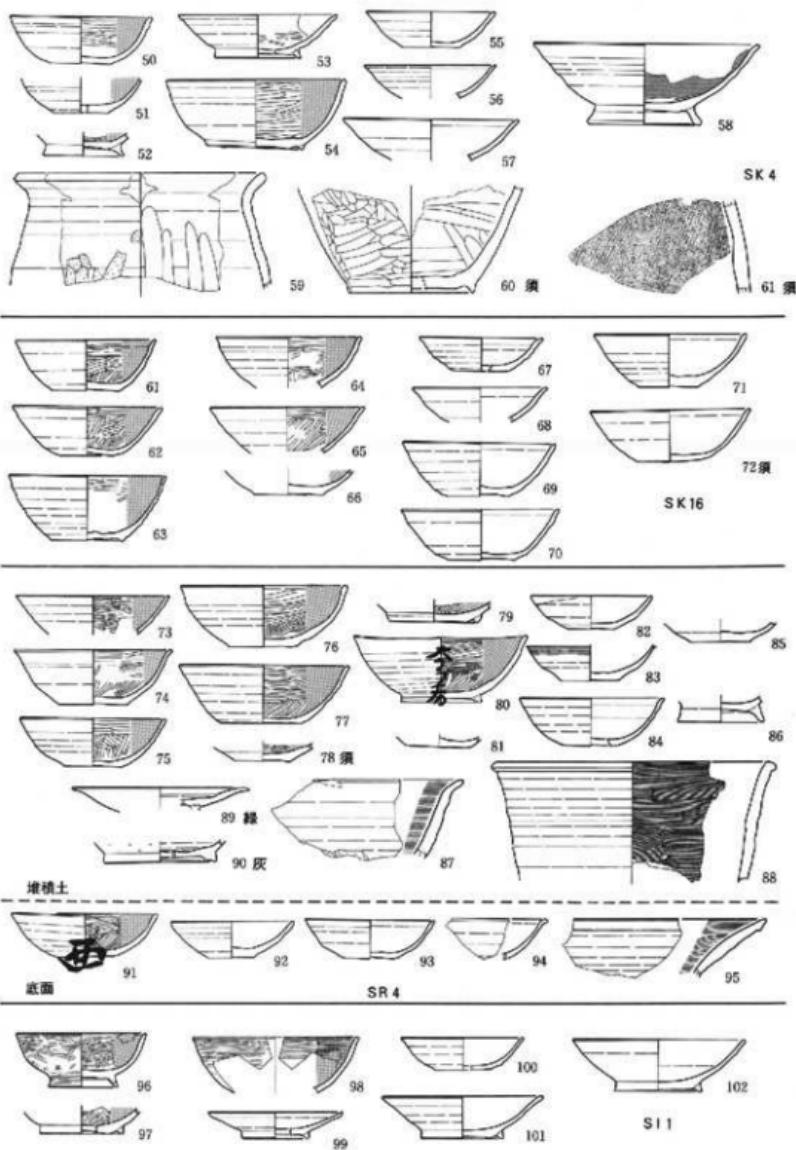


第236図 壩の法量分布図



第237図 III群土器集成図（1）

1 古墳～平安時代の遺構と遺物について



第238図 III群土器集成図(2)

第3表 III群土器の出土状況

■破片資料を含む

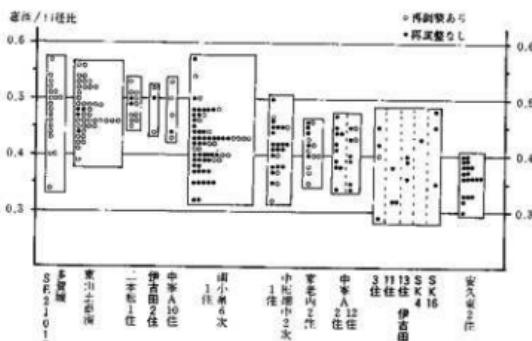
	土 器 群						須恵器 环	他	赤 焼 土 器				平均の数率			
	环			高台环	机	A B 不明	器形			A B C 不明	高台环	上 西 赤 赤鉄比				
	A	B	不明				A	B	不明							
SII 住			○						○			○		○	2	2
SI2 住カマF	○	○					○	○		○					8	
SI3 住P1・4	○	○				○	○			○					14	6 36%
SI4 住カマF	○	○													2	
SI5 住		○							○			○		○	1	1
SI6 住			○						○		○				3	1
SI11 住堆積土	○					○	○	○	○	○	○	○	○		3	1 5 56%
SI11 住灰・P	○		○		○		○			○	○				13	1 7%
SI13 住	○					○	○			○					4	2 33%
SI16 住							○								1	
SI18 住						○										
SI19 住		○					○				○				4 1 1	
SK4 土坑	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9 1 5 33%	
SK16 上坑	○						○	○		○	○				10 5 5 25%	
SR4 河川底	○						○	○		○	○				9 2 4 27%	

III b 群について見てみる。土師器環は S I 3 に底部手持ちヘラケズリのものがある他は全て無調整である。器形は底部より丸みを持ち立ち上がるものが主体である。内面は、底面が放射状、体部が横方向のヘラミガキで、黒色処理される。底径口徑比の分るもの少ないが、0.29～0.48で平均0.39である。

須恵器環は SK 4・16 土坑、 SR 4 河川底から出土しており、全て回転糸切りである。器形の分るものは SK16 の 1 点(72)で、体部に丸みを持つもので、底径口徑比は 0.4 である。

赤焼土器は A 類が SK 4・16 土坑、 SR 4 から、 C 類は SI 11 から、 B 類は SI 3・10・11・13、 SK 4・16、 SR 4 から出土している。

土器群の位置付け III群土器の土師器はその特徴から、表杉ノ入式にあたり、平安時代に位置付けられる(氏家: 1957)。表杉ノ入式の変遷については丹羽茂氏(丹羽: 1983)、田中則和氏(田中: 1984)、加藤道男氏(加藤: 1989)等により示されている。その成果によると時期が新しくなるにつれて、口徑に対する底径の割合が減少する、底部内面のヘラミガキが井桁状から放射状へ、底部切り離し後の再調整が少なくなる、などの傾向が指摘されている。赤焼土器については、その初頭段階に一定程度含まれる(上新田遺跡、宮前遺跡など)が一時減少し、再び増加する(安久東遺跡の頃)傾向にある。具体的には、宮城県南部では、宮前遺跡 2 号住居→青木遺跡 21 号住居→東山遺跡土器溜→家老内遺跡 2 号住居→安久東遺跡 2 号住居の変遷が考えられている(丹羽: 1983)。その後中峯 A 遺跡の分析により、県北部の成果と合わせて、西手取 4 住、東山土器溜→中峯 10 住、色麻 25・27 住→家老内 2 住→中峯 2・12 住、色麻 31 住→安久東 2 住、手取 3 住の変遷が考えられた(菊地・小川: 1985)。ここでは、中峯 A 遺跡の成果を参考に、県南



第239図 底径口径比の比較

と比較していく。

第239図で他の遺跡との比較をしてみた。S I 2住出土のIII a群土器の底径口径比は、0.44、0.5、0.52で東山土器溜(0.39～0.56)の幅に収まり家老内2住(0.35～0.46)より大きい。二本松1住(小山田：1985)、中峯A10住とほぼ一致している。切り離し後の再調整はIII a群、東山土器溜、二本松1住が回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリ、中峯A10住が手持ちヘラケズリである。器形は、東山土器溜には器高が高く体部が直線的なものが含まれるが、III a群、二本松1住、中峯A10住はそれを含まず、その他の坏は器形的に共通している。このことから、III a群は東山土器溜より後出的で二本松1住と同じ項と考えたい。

III b群は底径口径比が0.29～0.48(平均0.39)で、家老内2住(0.35～0.46)、中峯A 2・12住(0.35～0.50)に近く、それよりやや小さめのものも含んでいる。安久東2住(0.3～0.4)より大きめである。切り離し後の再調整は、家老内2住では14点中9点含まれるのに対し、中峯A 2・12住、III b群では非常に少なく、安久東2住には含まれない(注2)。器形は家老内、中峯A、III b群、安久東とも類似している。これらのことから、III b群は家老内2住より後出的で、中峯A 2・12住に近く、安久東2住より新しいと推定される。

次に土師器以外で見てみる。須恵器は中峯A 2・12住では少數ながら含まれ、赤焼土器坏は含まれない(同群とされる住居には含まれているので、本来は共伴すると考えたい)。III b群は須恵器坏が非常に少なく、赤焼土器の比率が大きく、坏全体の7～36%である。安久東2住では、土師器、須恵器、赤焼土器の比率が56%、11%、30%とされる(佐々木：1984)。ちなみに須恵器の底径口径比は中峯A 2・12住で0.37～0.43(平均0.4)、伊古田SK16土坑で0.4、安久東2住で0.34～0.39である。このことから、土器の組み合わせから考え、III b群は中峯A 2・

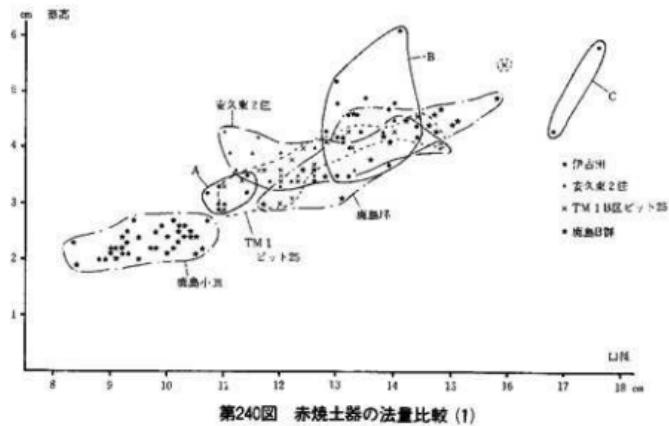
12住より後出的と考えたい。239図には参考として仙台市内2遺跡(南小泉6次1住、中田畠中2次2住)を加えているが、これらの位置付けについては法量を主とした仮のもので、検討の余地がある。他にIII b群に近いものとしては、元袋III遺跡19住、4号土坑出土土器(渡部:1987)、下ノ内遺跡14・15号住居出土土器(篠原:1990)がある。III b群土器は田中氏の区分ではIII a期、加藤氏の区分では第3段階にある。

実年代の検討 実年代の推定できる資料を順に挙げてみる。多賀城跡60次調査S E2101B第III層出土遺物は、共伴する漆紙文書の記載内容から、9世紀前半とされている(真山:1992)。東山土器窯は、黒笠90号窯式の灰釉陶器窯が共伴しており、9世紀中葉とされている。中峯A 10住は土器の検討から東山土器窯より新しいが、同グループの3住から黒笠14号窯式の灰釉陶器が出土しており年代が微妙に食い違うため9世紀中葉以降という位置付けにしている。中峯A 2・12住は堆積土に10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰を含んでおり、同グループの1住出土の黒笠90号窯式の灰釉陶器の年代と合わせて、900年に近い時期を推定している。安久東2住からは、堆積土の床面に近い位置より折戸53号窯式の灰釉陶器が出土していることから、10世紀後半と位置付けられている(注3)。折戸53号窯式の年代は1983年の楳崎氏の発表(楳崎:1983)によると10世紀の後半であるが、現在は全体に若て古く考えられているようであり(注4)、10世紀の第2~第3四半期頃を中心とする意見(斎藤:1992)、10世紀前半とする意見(前川:1989)がある。県内でも安久東2住の位置付けについて、10世紀前半とする意見がある(小川:1987、小井川・村田:1991、村田:1992)(注5)。ここでは10世紀中葉を含む前半代頃と考えておきたい。

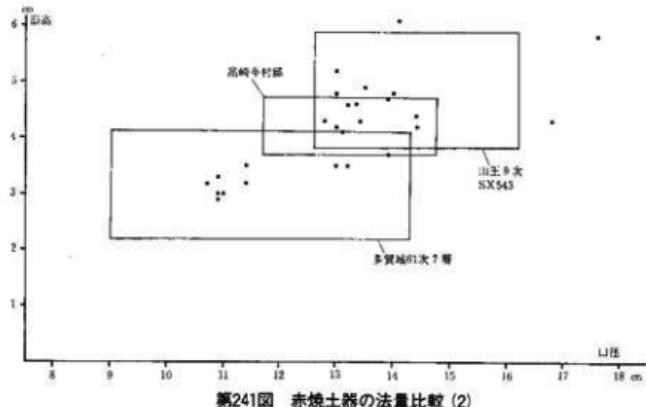
以上の成果とIII群土器との関係を整理すると、III a群は9世紀中葉の東山土器窯より新しく中峯A 2・12住より古いと見られることから、9世紀後半と想定される。III b群は中峯A 2・12住に類似し安久東2住より古いと見られることから、10世紀初頭頃と想定される。

赤焼土器 集落遺跡で赤焼土器が比較的多く出土している、安久東遺跡2住、芦の口遺跡TM-1B区ピット25(東北大:1991)、鹿島遺跡B群(佐々木:1984)と比較する。これらは各報告での検討から、安久東2住と芦の口ピット25は器形法量的に類似しており、鹿島B群は安久東以降と考えられている(注6)。口径と器高の分布を比較したのが第240図である(伊古田遺跡は全ての出土資料を扱っている)。安久東、芦の口、鹿島の窯はほぼ分布が重なり、伊古田B類はその中央部にありやや器高の高いものを含み、A類は分布の重なりの中で小さい端にある。C類は大きく外れる。鹿島の小皿は完全に別器種ということが分る。一応伊古田の赤焼土器窯A・B類は安久東、芦の口と同列に考えておく。

次に須恵系土器との比較を試みる。多賀城跡およびその周辺からは多量の須恵系土器が出土しており、検討が進められている。一般集落とは使用形態が異なると考えられ(注7)、全く同列



第240図 赤焼土器の法量比較(1)



第241図 赤焼土器の法量比較(2)

には扱えないだろうが、傾向性の比較のため取り上げたい。多賀城跡出土土器についてはA～F群が設定されており(白鳥：1980)、そのうちE・F群に須恵系土器が伴うとされる。E群に伴うものは大型の壺類(口径9.8～17.6cmで10.5～14cmに集中、器高3.4～6.6cmで4.3～5.5cmに集中)に限られ、F群に伴うものは大型の壺類と小形の壺類(口径10cm前後、壺部の器高2.5cm未満)の両者で構成される。年代はE群土器が灰白色火山灰をはさみ出土しており、10世紀前半、F群土器は10世紀中頃(注8)と考えられている(多賀城研：1982)。

多賀城跡61次調査鴻の池地区では、灰白色火山灰より上層の7層から須恵系土器が多量に出土している。壺には口径11~14cm(平均12.4)、器高3~4.5cm(平均3.5)の大型品と、口径9~11cm(平均10)、器高2~3cm(平均2.4)の小形品がある。これらはF群土器にあたり、10世紀中頃以降としている(柳沢:1992)。61次7層の小形壺は鹿島B群で小皿としたものと法量的に一致する。また、須恵系土器の初現は9世紀後半代のD群土器段階にさかのぼるとされた。

F群とされる多賀城跡61次7層と、E群土器とされる山王遺跡9次調査S X543出土土器(石川、相沢:1991)、高崎遺跡井戸尻地区出土土器(高野:1991)との比較をしたもののが第241図である。伊古田、安久東、芦の口の重なる部分はE群を中心に一部F群にかかっている。これらは法量の比較結果と、器種に口径10cm前後の小形壺を含まない点から見て多賀城跡のE群土器に対応するものであろう。

S R 4 河川跡出土土器について 灰白色火山灰を途中に含む堆積層から土師器、赤焼土器を中心多く出土しているが、火山灰の上下で大きな変化は認められない。そのため、6層以下の砂、シルトの互層以下は10世紀前半頃の比較的短い期間に堆積したものと考えられる。堆積土出土の土師器碗(80)とS K 4 土坑の椀(54)は、多賀城跡61次調査第7層出土碗(柳沢:1992)、鹿島遺跡B群土器高台付壺(佐々木:1984)に類似している。多賀城跡では灰釉陶器碗を模倣したとの指摘がされている(注9)。

河川跡埋没の終盤にあたる4層(シルト)下部からは、縄軸陶器と灰釉陶器が出土している。前者は黒窯90号窯式、後者は井ヶ谷78号窯式か黒窯14号窯式にあたる。灰釉陶器の年代のとらえかたにもよるが、火山灰の年代より古いようであり層位と矛盾するため、これらは混入したものと考えられる。

S I 1 住居跡出土遺物について S I 1 住から出土は堆積土から土師器壺(器形不明)・碗・甕、赤焼土器高台皿、床面より、土師器壺(器形不明)・甕、赤焼土器壺・高台壺が出土している。遺物量が少なく分析に耐えないが、気づいた点を述べたい。堆積土の土師器碗のうち、96は器形的特徴と、内外面ヘラミガキ・黒色処理という技法から灰釉陶器を模倣したものである可能性が高い(注10)。あえて対比させると、東山72号窯式の碗に類似する(注11)。同堆積土から赤焼土器高台皿という新しい要素を持つ器種(注12)が出土していることも合わせて考えると、S I 1 住の堆積時期は10世紀後半から11世紀代に入る可能性がある。床面の土器群もIII b群の中で最も新しくなる可能性があると考えたい。

(2) 遺構について (第242図)

住居跡 住居跡は18軒検出されている。その分布は、攪乱により破壊された部分が多いが、I 北区中央から北にかけてと I 南区の南端に分かれる。出土遺物により所属時期は以下のように分けられる。

I 群土器期 (古墳時代前期) : S I 5・14住

II 群土器期 (古墳時代後期から奈良時代) : S I 7・8・12・17・18住

III a 群土器期 (平安時代) : S I 2住

III b 群土器期 (平安時代) : S I 1・3・4・11・13住

III 群土器期 (平安時代) : S I 6・9・10住

不明 : S I 16・19住

また、近接する下ノ内遺跡III区で検出された、S I 14、15、17住もIII b 期と考えられる(篠原他: 1990)。

その他の遺構 所属時期の判明するものは以下のとおりである。

I 群土器期 : S K 8 土坑

III 群土器期 : S K 4・16 土坑、S R 4 河川跡

その他の遺構は、所属時期は不明である。

注1: 多賀城跡では「ロクロ調整され、切り離し後ヘラミガキや黒色処理などの調整を受けず、酸化焰焼成させたもので、器形的にも一定のまとまりを持つ土器群」を須恵系土器として取り扱っている(多賀城研: 1982)。酸化焰焼成の土器群については名称も含めてさまざまな検討がなされている(岡田・桑原: 1974、桑原: 1976、小笠原: 1976、小井川: 1984、結城: 1992など)。ここで扱う赤焼土器は、須恵系土器と同一のものとして記述を進めたい。

注2: 切り離し後の再調整については、時代が下がるにつれて少なくなる傾向があるが、完全に消滅するわけではなく、灰白色火山灰直下の遺物(元袋III遺跡19号住、渡部: 1987)や火山灰をはさむ遺物(郡山遺跡55次 S I 176、木村他: 1986)にも一定程度含まれている。また、「尚、土師器环の底部及び周辺の再調整の有無は、有→無への時間的推移は傾向としては理解されるが、すべてを対象とはしえないが、前後関係を示し得るものではなくフォームとしての技術的問題等の中で理解すべきものと考えられる」(渡部: 1987 P 53)との指摘もある。

注3: 安久東2住の年代については、報告書では11世紀頃(土岐山: 1980)とされていたが、その後の灰釉陶器実年代の推移にともない10世紀後半頃(佐々木: 1984)とされた。

注4: 灰釉陶器の実年代を若干上げて考えている点については、愛知県陶磁資料館の柴垣勇夫氏よりご教示いただいた。

注5: 安久東2住の灰釉陶器については、菅藤孝正氏により折^フ53号窯式2型式(10世紀第3四半期)、前川要氏

により東濃の大原2号窯式(折戸53号窯式2段階、10世紀後半期)とされている(小川:1987 P 147註27)。

注6:鹿島遺跡B群土器は、報告書の中で器種構成等の検討により安久東2住より新しく、植田前遺跡溝状遺構出土土器(加藤:1981)より古いとされ、実年代は11世紀前半頃とされている(佐々木:1984)。高野芳宏氏は多賀城E・F群に対応させている(高野:1990)。飯村均氏は10世紀後葉と位置付けている(飯村:1991)。

注7:多賀城跡の場合、正庁跡は供膳形態の土器が圧倒的に多いことから、多人数を対象とした要応の場でもあったと考えられている(多賀城研:1982)。また、高崎遺跡(井戸尻地区)出土の土器群は、灯明を多量に使う「万燈会」などに用いられた可能性を指摘している。いずれにしても、一般の集落遺跡とは全く違う使われかたをしていると考えられる。

注8:F群土器については現在のところ10世紀中頃を中心とした時期(高野:1990)として考えられているが、その下限については「やや幅があり、10世紀中葉に限定できない」との意見(飯村:1990)もある。

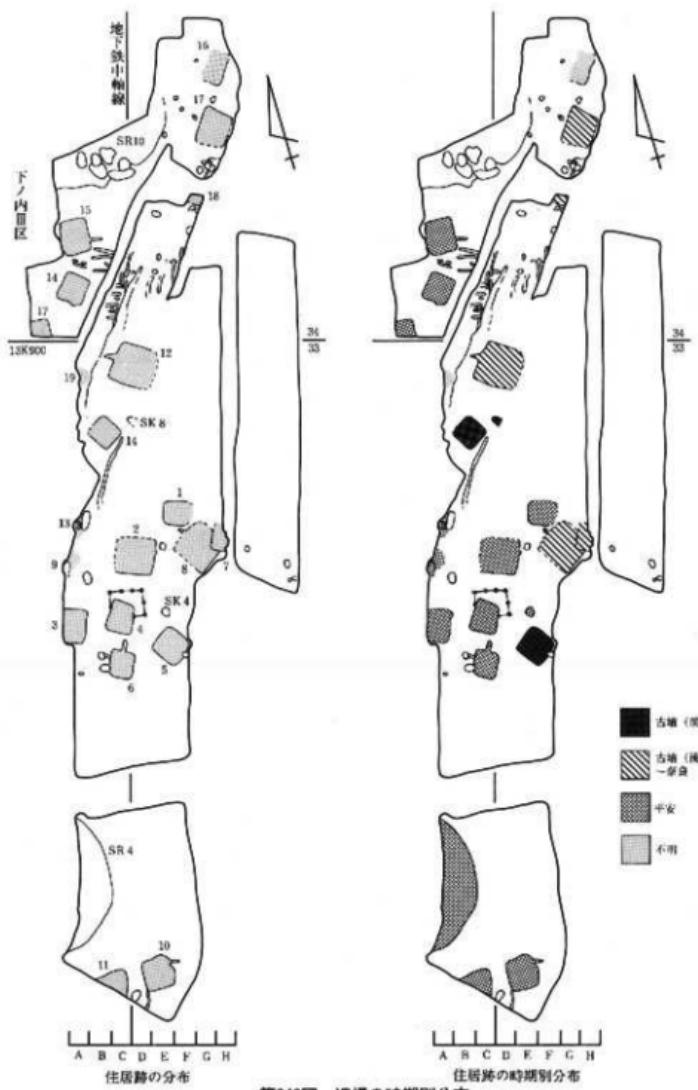
注9:木本元治氏は、内外面を磨き黒色処理した台付き椀は10世紀前葉から11世紀前葉に存在するとされた(大本:1991)。当遺跡の椀のうち96は木本氏の論中の土器にあたり、54・77は、器形はほぼ同じだが、高台が粗雑で、外面の磨きと黒色処理がない点が異なっており、同じものとして扱ってよいか迷うところである。

注10:灰釉陶器の影響を受けたと考えられる土器の存在については、南小泉遺跡9次調査(渡部:1983)や、五本松窯跡の検討(小川:1987)などの中で指摘されている。

注11:愛知県陶磁資料館の柴垣勇夫氏よりご教示をいただいた。

注12:多賀城跡61次7層、多賀城跡F群土器、鹿島遺跡B群などに見られる。また、山口遺跡2次調査(田中他:1984)の、灰白色火山灰よりも新しい時期の1号河川跡11~14層からも出土している。

2 繩文時代の遺物について



第242図 遺構の時期別分布

2 繩文時代の遺物について

(1) 包含層出土土器

包含層出土土器は、後期中葉の初頭に位置付けられる一括遺物と考えられる。以下、検討を進める。

出土状況について 遺物の出土状況は先に触れたとおり、北部と南部に集中地点がある。それぞれ、自然の落ち込みに対応しており、北部は下ノ内遺跡III区5層上面で検出されたSD17(猿原他:1990)の延長にあたる落ち込みと考えられる。出土土器は同一グリッド内や、隣接するグリッド間での接合関係があり、北集中区と南集中区との間でも接合している。間に6グリッド(18m)離れて接合するものもある。図示遺物を用いて文様器種別の出土状況を示したのが、第243図である。上図は深鉢・鉢で、文様別に地点を落したが偏りが見られない。下図の壺・浅鉢は南にやや多いようである。また、土側は北にやや多いようである。ここでは、深鉢・鉢の文様に偏りが無く、層も分層できなかったので全体を一括の包含層としてとらえておきたい。しかし、器種による出土量の差があることから何等かの差異を包含している可能性はある。摺痕跡の遺物包含層(阿部・柳沢他:1990)や貝塚の調査成果(里浜貝塚など、東北歴史資料館:1982)から、小窓窓ブロックの集積の結果遺物包含層が形成されたと想定されるが、今回の調査では包含層の形成過程を解明できなかった。

土器の特徴 分類の結果を第244~248図に抄録した。文様には大きく2つの傾向がある。1つは、文様1・2類とした主に磨消繩文による幾何学的モチーフを描くもので、これらをI類とする。もう1つは文様3類とした横位の平行線状の文様で、これらをII類とする。I類は深鉢・壺に多く見られ、II類は鉢・浅鉢に多く見られるという、器種と文様の間に対応関係がある。

I類について I類は、東北中部から北半に分布し後期前葉に位置付けられている十腰内I式にその系統が求められる。十腰内I式はその設定(今井・磯崎:1968)以来、その前段階を含めて細分の試みが進められている(葛西:1979、成田:1981・1989、本間:1985)。それらによると全体の傾向は、沈線文主体の文様から沈線と磨消繩文を主体とした文様に変遷するようである。伊古田包含層のI類に類似するものはその後半段階にあたり、成田滋彦氏による十腰内IB式とされた、「口頸部文様区画帯を構成し、区画帯内部に横位方向に展開する稚拙な入組状の文様」を持つ土器群(成田:1989)にその系統が求められよう。これらは蔦内遺跡(岩手埋文:1982)、貝塚II群(草間・金子:1971)、崎山弁天遺跡IV・V群(草間:1974)、立石遺跡III・IV群(中村:1979)、大湯環状列石周辺(秋元:1986)などに類例が見られる。ただし、後続する段階である十腰内II式(後期中葉)の良好な資料が現在のところ少ないので、伊古田包含層I類

と十腰内式との関係については、今後の研究の進展により再検討が必要となろう（注1）。

宮城県内の類例は、松島町西ノ浜貝塚昭和41年度調査第2層（後藤・斎藤：1967）、河北町南境貝塚第一・四次調査C群土器（後藤：1974）、川崎町西林山遺跡第II遺物集中地点（手塚他：1987）、白石市二屋敷遺跡第III群土器（加藤他：1984）、仙台市山口遺跡（佐藤：1981、田中：1984）、仙台市下ノ内浦遺跡第XIII層（兼田：1988）などにある。

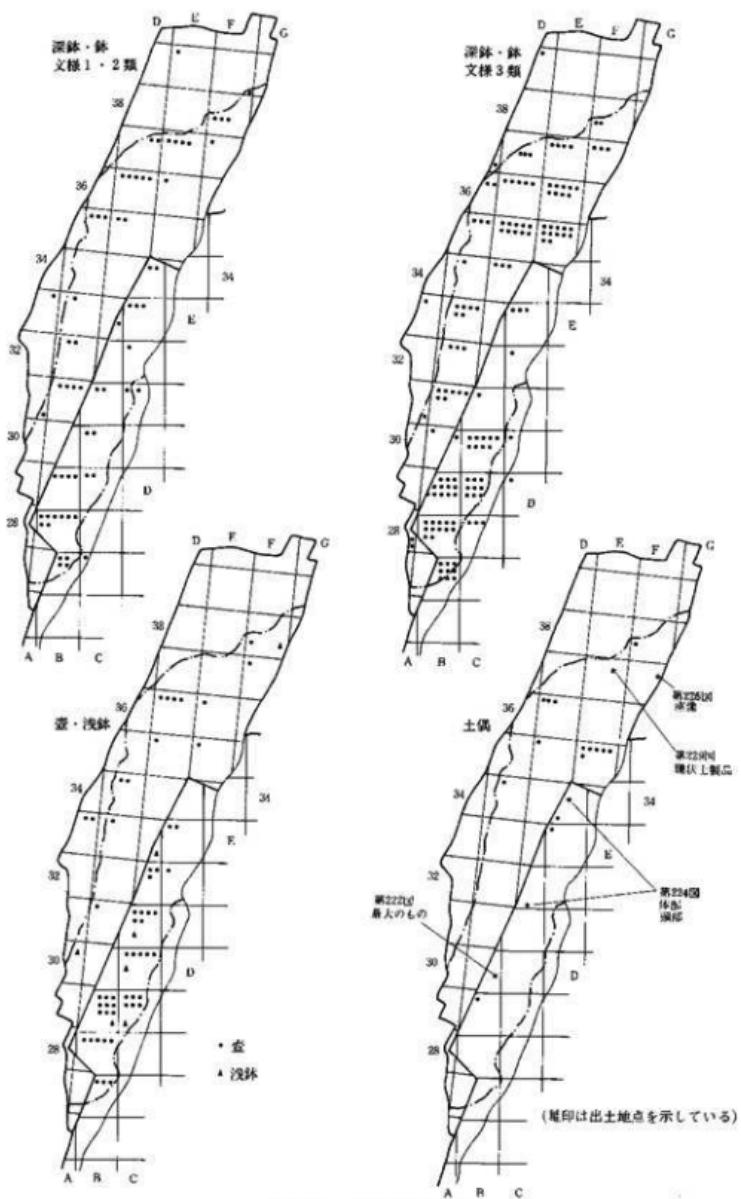
II類について II類は、関東地方の加曾利B1式（山内：1928）にその系統を求められる。鉢に施されている平行する横線を縦沈線で切る手法や、384の浅鉢の内面に文様が描かれる点が非常に特徴的である。240は小破片であるが、注口土器の文様に類似する。加曾利B1式の中で特徴的に見られる、底部から直線的に外傾し3単位の波状口縁の深鉢は存在していない。92～95の破片資料がそれに近いが、文様が異なるようである。

県内の類例として、松島町西ノ浜貝塚昭和41年度調査第2層（後藤・斎藤：1967）、白石市二屋敷遺跡（加藤他：1984）、角田市梁瀬浦遺跡（角田市教委：1976）、村田町東足立遺跡（黒川：1981）などがある。西ノ浜貝塚第2層からは384に類似する浅鉢が出土している。梁瀬浦遺跡からは3単位の波状口縁の深鉢が出土している。

その他の土器について 第4表に、登録した口縁、体部破片の比率を掲げた。個体数ではないものの、ある程度の傾向性は読み取れるであろう。深鉢・鉢の有文土器以外の比率を見ると、繩文を施すものが約6割を占め、次いで頸部に撫糸圧痕を持ち体部に繩文を施すもの、そして撫糸文と続く。残りは無文土器もしくは無文の口縁部である。繩文はほとんどが単節斜行繩文である。頸部に撫糸圧痕を持つ土器はI類に類似するとしてあげた十腰内I式の中に見られる。また、底部に見られる痕跡は（第5表）、網代痕がほぼ半数を占めている。

宮城県における編年的位置付け 伊古田包含層出土土器は、以上の検討から東北北半と関東地方の系統を引く土器により構成されており、後期中葉の初頭段階に位置付けられることが分った。これらは從来の宮城県の土器の変遷のなかでは内容が不明瞭だったものである。宮城県の後期編年については山内清男氏によって確立されず（山内：1937）、まず伊東信雄氏により南境・宝ヶ峯・金剛寺の3型式が提示された（伊東：1957）。その後、主に県北部の貝塚の資料を用いた細分も進められ、宮戸I～III式が提示された（後藤：1956他）。ここでは全県的な資料をもとに検討された宮城県史（伊東他：1981）に基づいた名称を用いた。それによると、伊古田包含層出土土器は、後期中葉の宝ヶ峯式の初頭段階に位置付けられよう。

前段階の南境式の変遷については、白石市二屋敷遺跡において検討されており（加藤他：1984）、向畠（菅生田）遺跡段階（二屋敷I群）→二屋敷遺跡第II群段階→二屋敷遺跡第III群段階という変遷が示されている。二屋敷第II群土器については、本間宏氏により網取2式の古相と新相に対応させた変遷案が示されており（本間：1990）、今後層位的資料の蓄積によりその検証が



第243図 遺物の出土状況

期待される。それに続く段階とされる二屋敷第III群土器はごく少量の土器があるだけで内容は不明であるが、堀之内2式に類似するものと十腰内I式の新しい部分に類似するものを含んでいる。仙台市山口遺跡の1次調査(佐藤:1981)の8・10層からは、二屋敷II群土器とともに十腰内I式の新しい部分に類似する土器と、堀之内2式・加曾利B1式に類似する土器が出土している。各土器の占める割合は、二屋敷II群が比較的多く、関東系統のものはごく少量である。これらの成果から、後期前葉の新しい段階には南境式の土器組成のなかに東北北半や関東の土器群が少量ずつ混じり始め、次の伊古田包含層のような組成へと移行するのではないかと考えられる。

後期中葉の宝ヶ峯式にあたるものは、河南町宝ヶ峯遺跡(志間:1991)の主なもの、丸森町入大遺跡4層出土土器(一條:1989)、田柄貝塚第III群土器(手塚他:1986)、川崎町向鹿遺跡2号住居跡(佐藤他:1987)、川崎町西林山遺跡第I遺物集中地点(手塚他:1987)などがあげられる。加曾利B2式段階とされる田柄III群では、器種では、底部が小さく体部上半で大きく広がる深鉢が特徴的であり、文様は、内面に文様を持つものはなくなり、平行線状の文様の他に弧状や入り組み状、「C」字状の文様が描かれるといった特徴があり、伊古田包含層と異なる様相を示している。

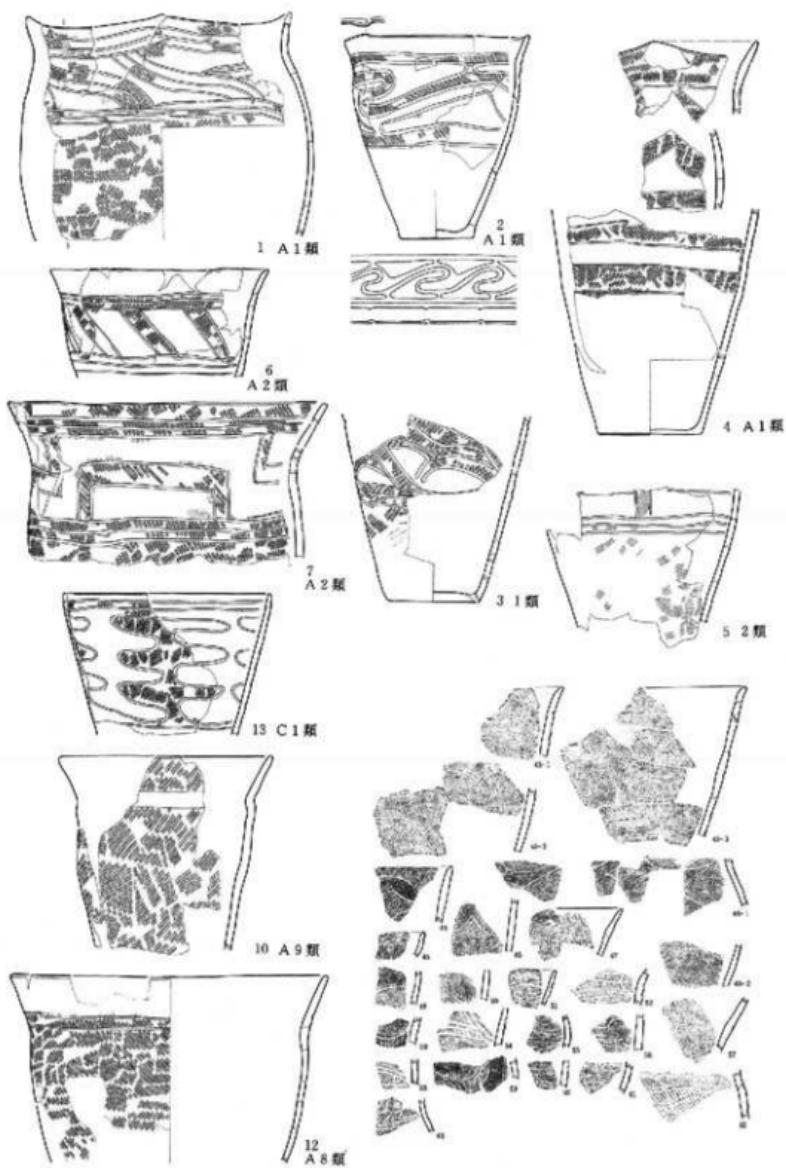
まとめ 伊古田包含層出土土器は東北北半に系統が求められるものと、関東地方に系統が求められるものとが共存している。その時期は後期中葉加曾利B1式に並行するものと考えられ、宮城県の編年では、宝ヶ峯式の初頭段階と呼ぶことができよう。

後期土器の変遷を概観すると以下のように想定できよう。後期前葉の南境式(網取式 注2)は東北地方南北を中心として分布している。中葉初頭の伊古田段階では、宮城県域では南境式の系統が薄くなり、東北北半と関東地方の系統が混在するようになる。次段階の田柄III群や宝ヶ峯遺跡の主な土器に代表される段階(加曾利B2・3式並行期)には、北海道南半から東北地方全体に共通性の強い土器群が現れるようになるとみられる。

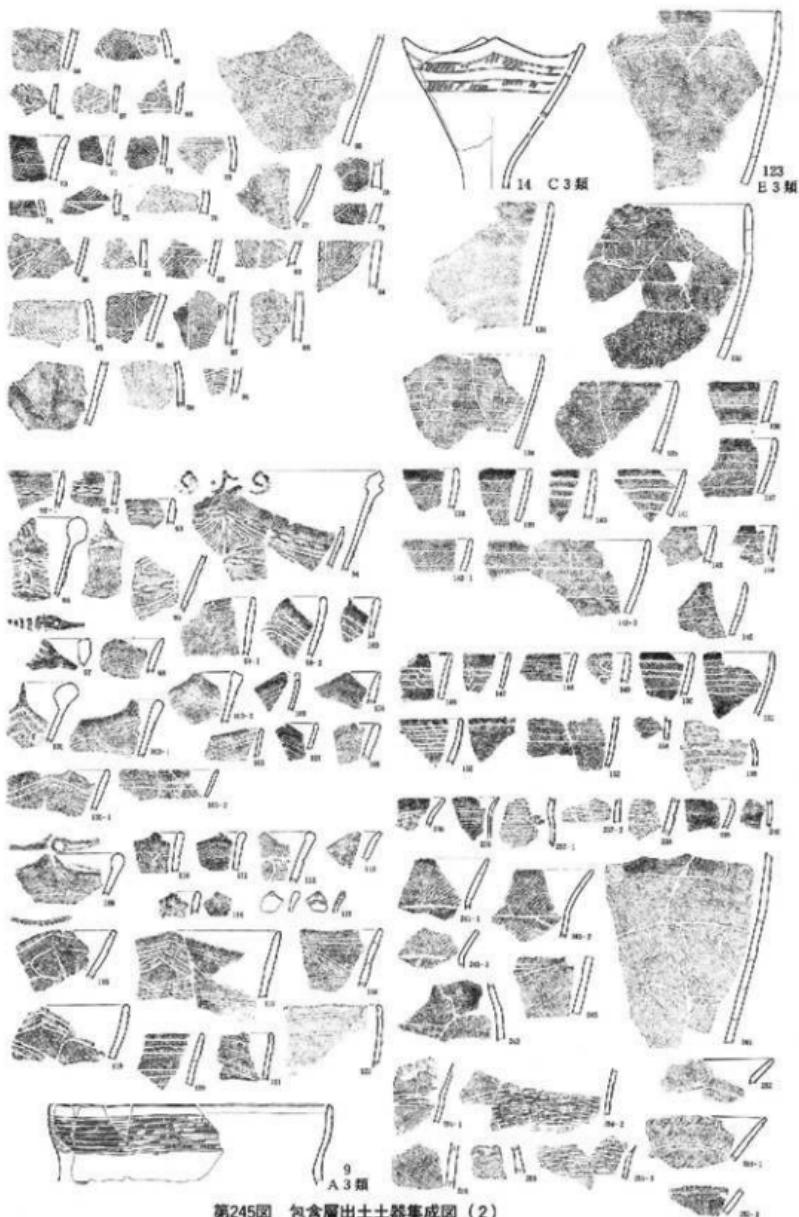
第4表 口縁・体部破片の割合(%) 第5表 底部圧痕の割合(%)

深鉢・鉢 92	28	有文	42	42	
	32	縞文	34	59	
	5	燃糸压痕	6	9	
	0.9	縞文	1	2	
	16	無文 or 不明	17	30	
	6	浅鉢			
その他 8	0.7	壺			
	0.6	台			
	1	楕			

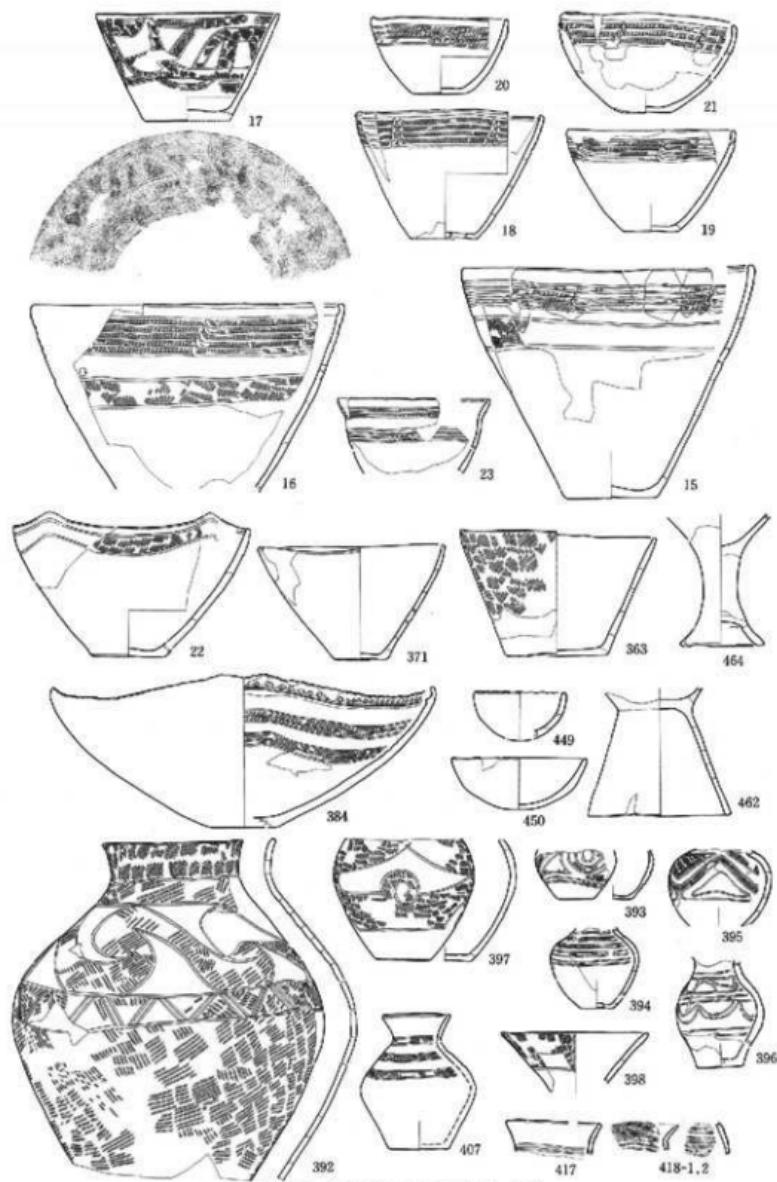
網代窓	49
木葉窓	28
ミガキ	7
不明	16



第244図 包含層出土土器集成図（1）



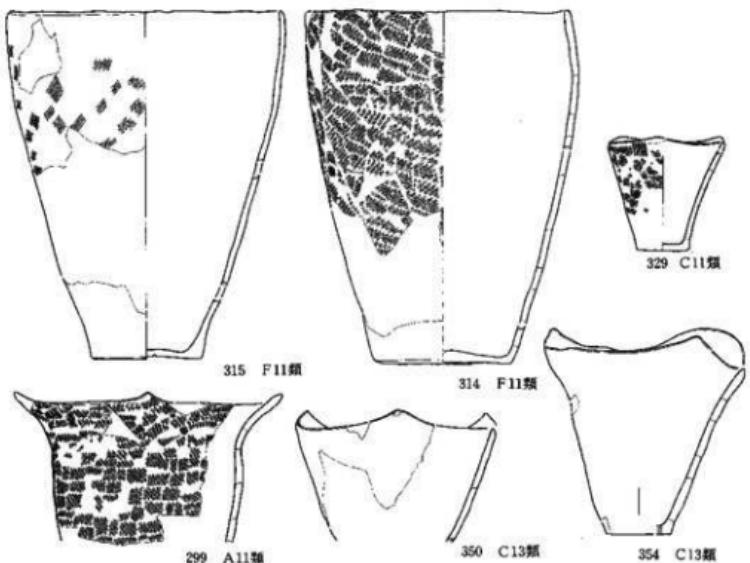
第245図 包含層出土土器集成図（2）



第246図 包含層出土土器集成図（3）



第247図 包含層出土土器集成図（4）



第248図 包含層出土土器集成図（5）

- (注1) 岩手県新山権現社遺跡より、十腰内I式を中心とした良好な包含層が検出され、土器変遷の層位的な検証が可能とのこと(岩手埋文:1992、金子:1994)であるが、実見することはできなかった。お互いの資料の提示を持ち、再検討の機会を持ちたい。
- (注2) 福島県の後期前葉の土器型式については、浜通り地方の資料をもとに網取I・II式が設定されており(馬目:1970他)、網取I式が称名寺式に、網取II式が堀之内I式に対応されている。南境式とは共通する内容と異なる点を持っている(加藤他:1984)。

(2) 石錘について

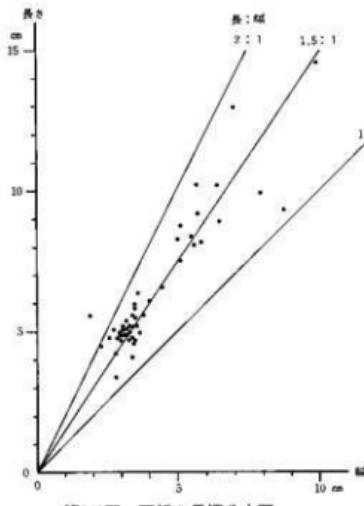
遺物包含層を中心に石錘が出土している。石錘の長軸を調べると(第249図)、長さ:幅が1.5:1のラインを中心に分布しており、長さ3~7cm、幅1.5~4.5cmの間にまとまるグループとそれ以外がある。重量の分布を調べると(第250図)、8.3~660.9gの幅があり、なかでも80g以下のものが大多数を占めている。これらのことから、石錘には小さめのグループとそれ以外があることが分る。

伊古田遺跡の石錘のうち小さめのグループについて他地域と比較してみる。重量は関東地方

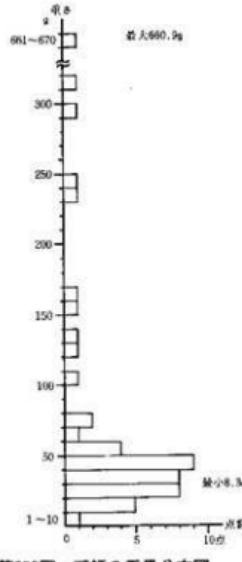
2. 繩文時代の遺物について

で多く出土する土器片錐に近く(渡辺:1973)、重量・大きさは西日本の切目石錐に近い(渡辺他:1975)ことが分る。土器片錐、切目石錐は網漁のおもりとして使われたと考えられており、伊古田のものについても網漁のおもりであった可能性は高いであろう。渡辺誠氏は、東関東地方の縄文中期に土器片錐を用いた内湾性の漁業が盛んになり、それらが東西へ伝播し内水面に向かって進出したとの考え(渡辺:1983、1986)を示している。名取川と荒川に近いという伊古田遺跡の立地から考えて、本来的に盛んに漁が行なわれていたと考えられるが、包含層出土の加曾利B式系統の土器の存在から、渡辺氏の言うような文化の伝播の可能性もありうるだろう。石錐の他の用途としては、釣漁のおもり(渡辺:1970)や編み物のおもり(渡辺:1975)などが想定されているので、今後は大きさの異なるものや周辺の類例を含めてさらに検討する必要がある。

このような石錐を近隣の縄文時代遺跡を探すと、山田上ノ台遺跡(中期末葉)、下ノ内遺跡(中前期葉)、六反田遺跡(後期初頭)、山口遺跡(後期前葉)などには存在しないが、同じく高速鉄道関連で調査した下ノ内浦遺跡(後期前葉)にはほぼ同じ形態のものが存在している。小躍のため現場で見落とす可能性が多いと思われる所以、伊古田遺跡のみに見られる遺物とは考えず、今後の注意深い調査により類例が増えるものと期待している。



第249図 石錐の長幅分布図



第250図 石錐の重量分布図
(10gごとの点数)

VII まとめ

- 伊古田遺跡は、笊川と名取川にはさまれた地域に立地する、縄文時代から古代にかけての遺跡である。
- 縄文時代後期中葉の初頭に位置付けられる遺物包含層が検出され、縄文土器、石器、土製品が多数出土した。
- 調査区南半の河川跡からは、縄文時代後期中葉から晩期にかけての土器が出土した。
- 古代の住居跡は18軒検出され、主に古墳時代前期、古墳時代後半から奈良時代、平安時代の3時期にわたる。また、掘立柱建物跡も1棟検出された。
- S I 14住居跡出土の土師器は、古墳時代前期塙釜式の良好な一括資料である。
- 溝跡、土坑、河川跡なども検出されたが、時期の判明したものは少ない。

引用・参考文献

- 青沼一民・長島栄一：1983 『中田畠中遺跡』 仙台市文化財調査報告書第53集
- 秋元信夫：1986 「周辺遺跡出土土器と大湯式土器」『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』 鹿角市文化財調査資料31
- 阿部博志・柳沢和明他：1990 『潛萩遺跡』 宮城県文化財調査報告書第132集
- 飯村均：1990 「80年代の研究成果と今後の展望 東北」『中近世土器の基礎研究 第VI号』 日本中世土器研究会 254～259
- 石川俊英・相沢清利：1991 「山王遺跡－第9次発掘調査報告書－」 多賀城市文化財調査報告書第26集
- 一條玄夫：1989 「入大遺跡」丸森町文化財調査報告書第8集
- 伊東信雄：1967 「古代史 縄文式文化時代」『宮城県史』1 古代史中世史
- 伊東信雄編：1981 『宮城県史』34 資料集V 考古資料
- 今井富士雄・磯崎正彦：1968 「トテ内遺跡」『岩木山 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』
- 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター：1992 「新山権現社遺跡(平泉町)」『岩手県埋蔵文化財発掘調査報告』
- 財団法人岩手県埋蔵文化財センター：1982 「御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 盛岡市蔵内遺跡」 岩手県埋蔵文化財調査報告書第32集
- 氏家和典：1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 氏家和典：1967 「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良・平安期土師器の諸問題－」『柏倉亮吉教授追贈記念論文集』 77～88
- 太田昭夫：1980 「大橋遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書IV』 宮城県文化財報告書第71集
- 太田昭夫他：1991 「宮沢遺跡－第30次調査報告書I－」 仙台市文化財調査報告書第149集

- 岡田茂弘・桑原滋郎：1974 「多賀城周辺における古代环形土器の変遷」『紀要1』 宮城県多賀城跡調査研究所
65～92
- 小川淳一：1987 「五本松窓跡」 仙台市文化財調査報告書第99集
- 小笠原好彦：1976 「東北における平安時代の土器について二、三の問題」「東北考古学の諸問題」
- 小山田正男：1985 「二本松遺跡 川原山遺跡—国営みちのく杜の湖畔公園関係遺跡発掘調査ー」 宮城県文化
財調査報告書第112集
- 角田市教育委員会：1976 「梁瀬浦遺跡」
- 葛西勲：1979 「十腰内I式の縦年分類」「北奥古代文化」第11号 北奥古代文化研究会 1～9
- 加藤道男：1989 「宮城県における土器研究の現状」「考古学論叢II」 277～329
- 加藤・阿部・古德：1984 「二層敷遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書IX」 宮城県文化財調査報告書第99集
- 金森安孝・渡辺誠：1985 「伊古田遺跡」「昭和59年度年報6」 仙台市文化財調査報告書第83集
- 兼田芳弘：1988 「宮城県仙台市下ノ内浦遺跡」 埋蔵文化財発掘調査研究所報告書第10集 下ノ内浦遺跡調査
同 埋蔵文化財発掘調査研究所
- 金子昭彦：1994 「後期後半の東北北半—その変遷と遼光器土偶の成立」「東北・北海道の土偶」 シンポジウム
発表要旨「土偶とその情報」研究会
- 菊地造夫・小川出：1985 「中峯遺跡発掘調査報告書」 宮城県文化財調査報告書第108集
- 木村・青沼他：1981 「郡山遺跡I」 仙台市文化財調査報告書第29集
- 木村・青沼他：1982 「郡山遺跡II」 仙台市文化財調査報告書第38集
- 木村・成瀬他：1983 「郡山遺跡III」 仙台市文化財調査報告書第46集
- 木村・長島他：1984 「郡山遺跡IV」 仙台市文化財調査報告書第64集
- 木村・金森他：1985 「郡山遺跡V」 仙台市文化財調査報告書第74集
- 木村・佐藤他：1986 「郡山遺跡VI」 仙台市文化財調査報告書第86集
- 木本元治：1991 「東北地方における黒色台付き輪形土器」「中近世土器の基礎研究VII」 日本中世土器研究会
67～79
- 工藤哲司・成瀬茂：1982 「栗遺跡」 仙台市文化財調査報告書第43集
- 黒川利司：1981 「東足立遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書V」 宮城県文化財調査報告書第81集
- 桑原滋郎：1976 「須恵系土器について」「東北考古学の諸問題」
- 小井川和夫：1981 「上新田遺跡」 宮城県文化財調査報告書第78集
- 小井川和夫：1984 「いわゆる赤焼土器について」「研究紀要 第10巻」 東北歴史資料館59～74
- 小井川和夫・村田晃一：1991 「古代における東北地方南部の集落と生業」「北からの視点」 日本考古学協会宮
城・仙台大会シンポジウム資料集 155～168
- 後藤勝彦：1956 「宮城県宮」「島里浜台団貝塚の研究」「宮城県の地理と歴史」1輯 地域社会研究会 191～202
- 後藤勝彦：1957 「陸前宮戸島里浜台団貝塚出土の土器縦年にについて」「塩竈市教育委員会教育論文」 第2集
- 後藤勝彦・斎藤良治：1967 「四ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」「新産業都市指定地区埋蔵文化財緊急発掘調査等報
告書」 宮城県文化財調査報告書第13集
- 後藤勝彦：「陸前宮戸島里浜台団貝塚出土の土器について—陸前地方後期縄文式文化の縦年的研究ー」「考古学雑
誌」 48巻1号 37～48

- 後藤勝彦：「縄文後期宮戸I b式周辺の吟味—南境貝塚出土の土器をもととして—」『東北の考古・歴史論集』 平重道先生追憶記念会 79~110
- 後藤勝彦：1981 「縄文後期の土器 東北地方」「縄文土器大成」3 後期 講談社 139~143
- 斎藤孝正：1992 「東海地方の須恵器窯—猪投窯・美濃須衛・瀬戸窯—」「東日本における古代・中世窯業の諸問題 大戸窯検討のため「会津シンポジウム」資料集」
- 佐々木和博：1984 「鹿島遺跡 竹之内遺跡」 宮城県文化財調査報告書第101集
- 佐藤甲二：1985 「中田畠中遺跡—第2次発掘調査報告書—」 仙台市文化財調査報告書第78集
- 佐藤洋他：1981 「山口遺跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第33集
- 佐藤 洋：1987 「六反田遺跡III」 仙台市文化財調査報告書第102集
- 佐藤広史・斎藤吉弘：1987 「向島遺跡」「中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他—東北横断自動車道遺跡調査報告書II—」 宮城県文化財調査報告書第121集
- 篠原信彦・工藤哲司：1980 「今泉城跡」 仙台市文化財調査報告書第24集
- 篠原信彦他：1982 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I」 仙台市文化財調査報告書第40集
- 篠原信彦他：1983 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II」 仙台市文化財調査報告書第56集
- 篠原信彦他：1984 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III」 仙台市文化財調査報告書第69集
- 篠原信彦他：1985 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報IV」 仙台市文化財調査報告書第82集
- 篠原信彦他：1986 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報V」 仙台市文化財調査報告書第89集
- 篠原信彦他：1987 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報VI」 仙台市文化財調査報告書第101集
- 篠原信彦・吉岡恭平：1989 「仙台市高速鉄道関連遺跡発掘調査報告書I 富沢遺跡」 仙台市文化財調査報告書第126集
- 篠原・吉岡：1990 「仙台市高速鉄道関連遺跡調査報告書II 下ノ内遺跡」 仙台市文化財調査報告書第136集
- 志間泰治・桑月鮮：1991 「宝ヶ峯」 財団法人斎藤報恩会
- 白鳥良一：1980 「多賀城跡出土土器の変遷」「紀要VII」 1~38 宮城県多賀城跡調査研究所
- 須田良平・吾妻俊典：1993 「野山山遺跡」 宮城県文化財調査報告書第145集
- 仙台市科学館：1985 「仙台市地形区分図」
- 仙台市教育委員会：1980 「仙台市地下鉄開通分布調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第19集
- 仙台市教育委員会：1987 「史跡遠見塚古墳保存修理事業報告書」
- 草間俊一・金子浩昌編：1971 「貝島貝塚—第4次調査報告—」 岩手県花巣町教育委員会
- 草間俊一：1974 「崎山弁天遺跡」 岩手県大槌町教育委員会
- 多賀城跡調査研究所：1982 「多賀城跡 正序跡本文編」
- 高野芳宏：1990 「宮城県における9~13世紀の土器」「シンポジウム 土器から見た中世社会の成立」 19~28
- 高野芳宏：1991 「高崎遺跡 井戸尻(今村氏)地区の調査」「多賀城市史 第4巻 考古資料」
- 田中則和：1981 「六反田遺跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第34集
- 田中則和：1984 「六反田遺跡II」 仙台市文化財調査報告書第72集
- 田中則和他：1984 「山口遺跡II—仙台市体育馆予定地—」 仙台市文化財調査報告書第61集
- 次山淳：1992 「埴生式土器の変遷とその位置づけ」「完班 埋蔵文化財研究会15周年記念論文集」 235~248
- 辻秀人：1993 「東北南部における古墳出現期の様相」「日本考古学協会1993年度新潟大会シンポジウム 2 東日本

- における古墳出現過程の再検討』 283~296 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 辻秀人：1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年—その1 会津盆地—」『東北学院大学論集』 歴史
学・地理学第26号 105~140
- 手塚均・阿部忠他：1986 「山柄貝塚」宮城県文化財調査報告書第111集
- 手塚均・相原淳一他：1987 「西林山遺跡」「中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他—東北横断自動車道遺跡調査報告書
II—」 宮城県文化財調査報告書第121集
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会：1990 「東北大学埋蔵文化財調査年報3」
- 東北歴史資料館編：1982 『里浜貝塚！』東北歴史資料館資料集5
- 土岐山武：1980 「安久東遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書IV」 宮城県文化財調査報告書第72集
「十個とその情報」研究会編：1994 「東北・北海道の土偶」「シンポジウム発表要旨」
- 中村良幸：1979 「立石遺跡—昭和52・53年度発掘調査報告書—」大迫町埋蔵文化財調査報告書第3集
- 橋崎彰一・斎藤孝正：1983 「猿投窯編年」の再検討について『愛知県陶磁資料館研究紀要2』 53~71
- 橋崎彰一：1983 「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告(III)』 愛知県教育委員会
- 成田滋彦：1981 「青森県の土器」「縄文文化の研究」 第4巻 縄文土器II 雄山閣
- 成田滋彦：1989 「入江・十腰内土器様式」「縄文土器大観」 第4巻 後期 晩期 縄文 小学館
- 西田泰民：1989 「堀之内・加曾利B式土器様式」「縄文土器大観」 第4巻 後期 晩期 縄文 小学館
- 丹羽茂：1983 「宮前遺跡」「朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡」 宮城県文化財調査報告書第96集
- 丹羽・小野寺・阿部：1981 「清水遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書V」 宮城県文化財調査報告書第77集
- 丹羽・阿部・小野寺：1982 「音生田遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書VII」 宮城県文化財調査報告書第92集
- 丹羽茂：1985 「今熊野遺跡」 宮城県文化財調査報告書第104集
- 古川一明：1984 「色麻古墳群」「宮城県曾根場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書(昭和58年度)」 宮城県文
化財調査報告書第100集
- 古川一明・白鳥良一：1991 「土師器の編年 東北」「古墳時代の研究6」 雄山閣 108~120
『封内風土記』 復刻版仙台叢書 1975 宝文堂
- 本間宏：1985 「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」「よねしろ考古」 第1号 よねしろ考古学
研究会 9~24
- 本間宏：1990 「東北地方南部における縄文時代後期前葉土器群の変遷過程」「第4回縄文セミナー 縄文後期の
諸問題」 縄文セミナーの会 215~266
- 前川利：1989 「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究(下)—様式の形成とその歴史的背景—」「古代文化
41~10」
- 松本秀明：1981 「仙台平野の沖積層と後水期における海岸線の変化」「地理学評論」 第52集第2号
- 松本秀明：1984 「沖積平野の形成過程からみた過去一万年間の海岸線変化」「宮城の研究」 1 清文堂
- 馬目順一：1970 「いわき市下片寄貝塚発見の後期縄文式土器について」「考古」第16号 福島県立磐城高等学校
史学部 43~48
- 馬目順一：1977 「いわゆる「網取貝塚C地区」の土器について」「考古」第19号 福島県立磐城高等学校史学部
35~46
- 馬目順一：1983 「各地の堀之内式土器とその変遷 南東北」「シンポジウム堀之内式土器」 市立市川考古博物

節

- 真山悟：1981 「家老内遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書V』 宮城県文化財調査報告書第81集
- 真山悟：1981 「東山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書V』 宮城県文化財調査報告書第81集
- 真山悟：1992 「第60次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』
- 村田晃一：1992 「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題 大』『空検討のための「会津シンポジウム」資料集』
- 山田一郎・庄子貞男：1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』 97～102 宮城県多賀城跡調査研究所
- 柳沢和明：1992 「第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』
- 山内清男：1928 「下總上本經貝塚」『人類学雑誌』43巻第10号雑報 463～464
- 山内清男：1937 「鰐紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1～1
- 山内清男：1940 「日本先史土器図譜」
- 山内清男編：1964 「日本原始美術1 繩文式土器」
- 結城慎一・工藤哲司：1979 「史跡達見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報」 仙台市文化財調査報告書第15集
- 結城慎一：1992 「赤燒土器についての覚書—宮城県とその近県…」『仙台市博物館調査研究報告書 第12号』 65～77
- 渡部弘美・主浜光明：1984 「戸ノ内遺跡」 仙台市文化財調査報告書第70集
- 渡部弘美：1983 「南小泉遺跡—青葉女子学園移転新都工事地内調査報告ー」 仙台市文化財調査報告書第55集
- 渡部弘美：1987 「元袋田遺跡—奈良・平安時代集落跡調査報告ー」 仙台市文化財調査報告書第103集
- 渡辺仁：1970 「所謂石越について。先史学に於ける用途の問題」『考古学雑誌』55巻2号
- 渡辺誠：1973 「縄文時代の漁業」 雄山閣
- 渡辺誠：1975 「スダレ状瓦抜の研究」『物質文化』26
- 渡辺誠：1983 「縄文時代の知識」考古学シリーズ4 東京美術
- 渡辺誠：1986 「列島の多様な環境と縄文文化」『週刊朝日百科 日本の歴史』36号 朝日新聞社
- 渡辺誠他：1975 「京都府舞鶴市桑原下遺跡発掘調査報告書」 平安博物館



写 真 図 版



1 遺跡周辺の空中写真 (1983年5月撮影)

2 通路周辺の空中写真（1965年撮影）中央左寄りに地下鉄開通跡跡





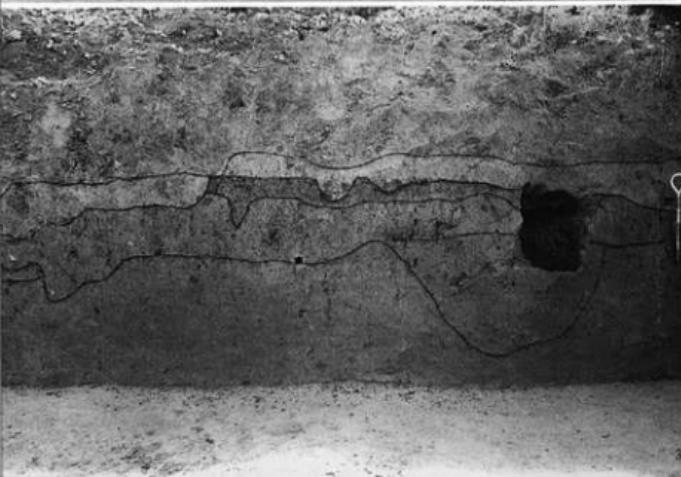
3 I 北区全景（北より）



4 III区全景（南より）

5 基本層序

- 1 C-C' ①
- 2 C-C' ②
- 3 E-E'





6 試掘トレンチ



7 SII 住居跡（東より）



8 S I 2 住居跡（南より）



9 S I 3 住居跡（東より）

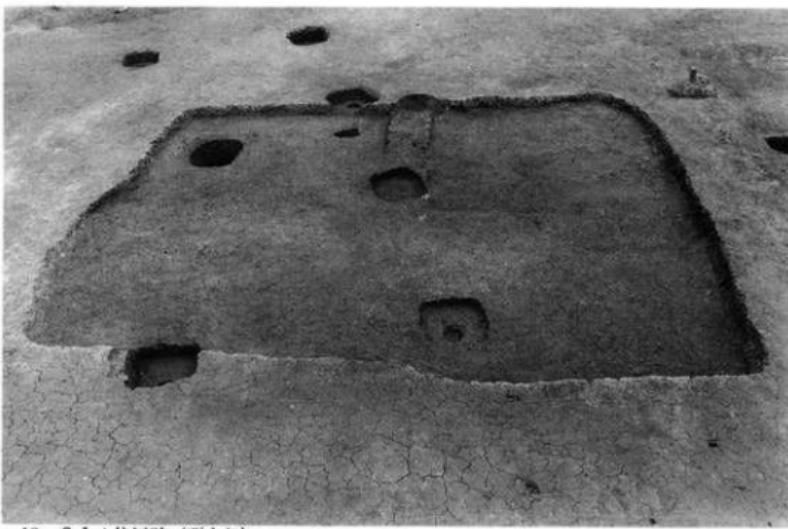


10 S I 2 ピット1断面



11 S I 3 細部

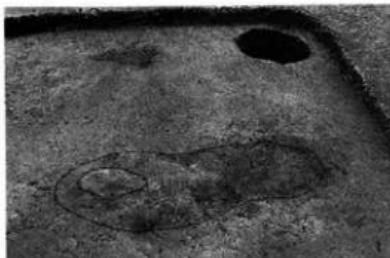
- 1 ピット1遺物出土状況（南より）
- 2 焼土断面（南より）



12 S I 4 住居跡（西より）



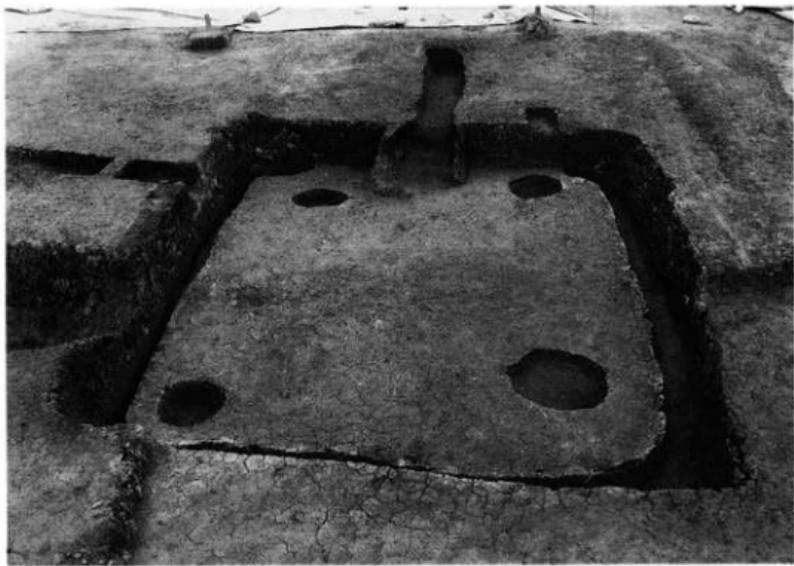
13 S I 5 住居跡（南西より）



2



14 S I 5 細部 1 焼土（北東より） 2 焼土下の状況（南東より）
3・4 遺物出土状況



15 S I 6 住居跡（南より）



16 S I 6 細部 1 カマド（南より）



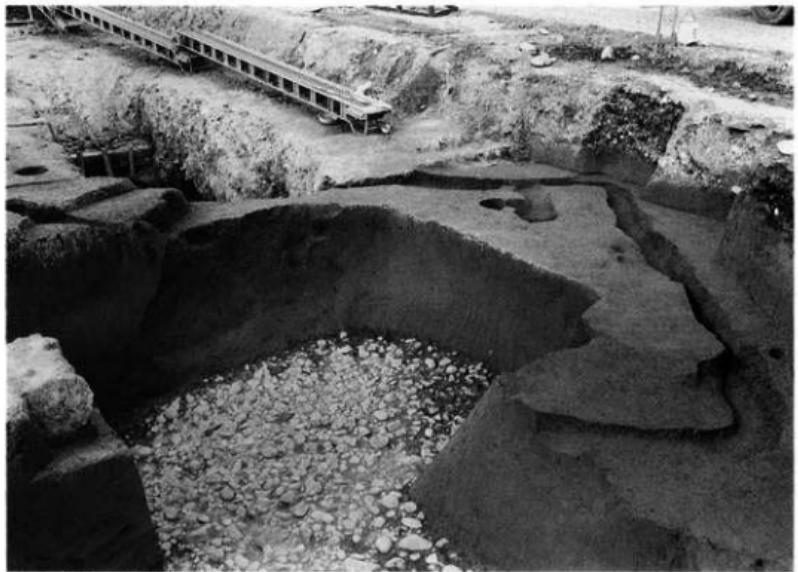
2 堆積状況（西より）
3 カマド下土坑（西より）



3



17 S I 7 住居跡 (南より)



18 S I 8 住居跡 (南西より)

19 S I 8 断面



20 S I 8 遺物
出土状況
(南より)



21 S I 9 住居跡
断面



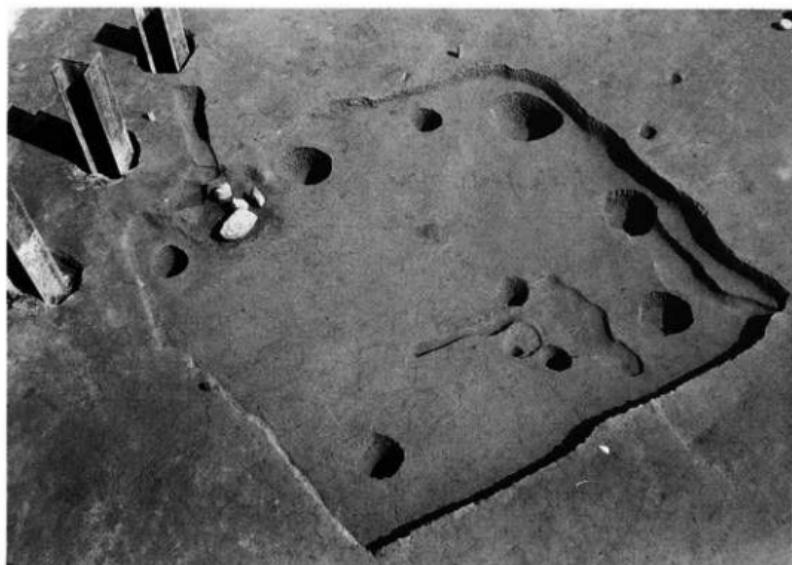
22 S I 9 住居跡
(西より)



23 S I 9 住居跡
(西より)



24 S I 9 細部 1 中央焼土断面 (東より) 2 ピット3断面 (東より)



25 S I 10住居跡（北西より）



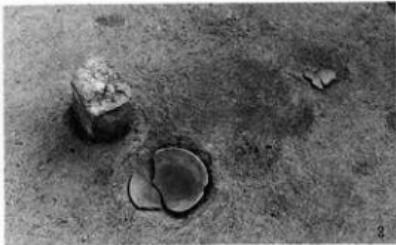
26 S I 10カマド（西より）



27 S I 11住居跡（北より）



1



2

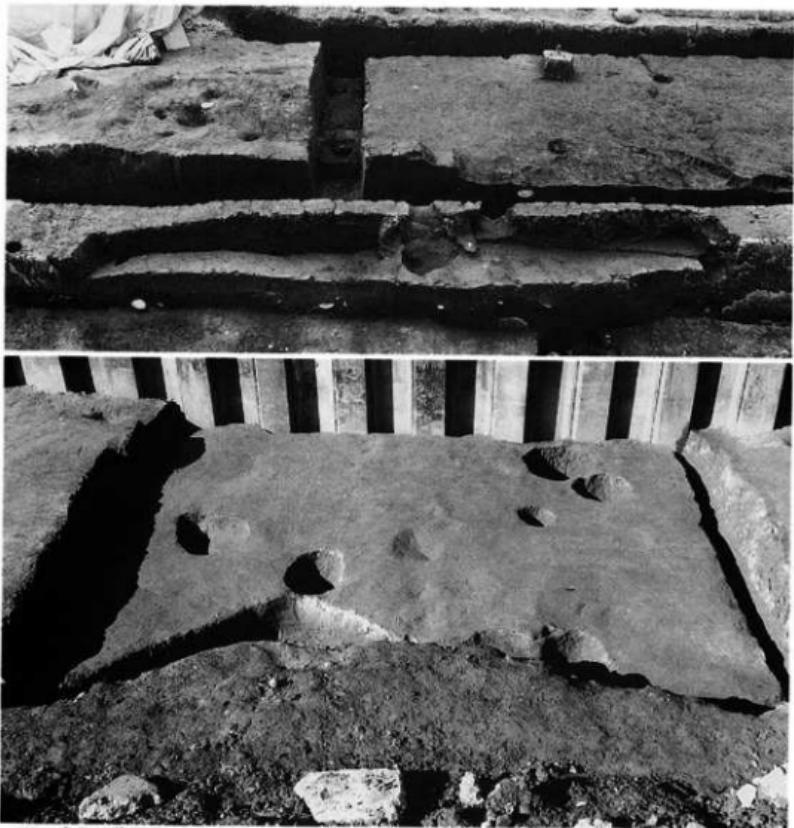
28 S I 11細部

1 ピット2・3

2 遺物出土状況



29 S I 10・11住居跡（北より）



30 S I 12住居跡（東より）



31 S I 12細部 1 カマド（東より）
2 床面の遺物出土状況

32 S I 13住跡 (北より)



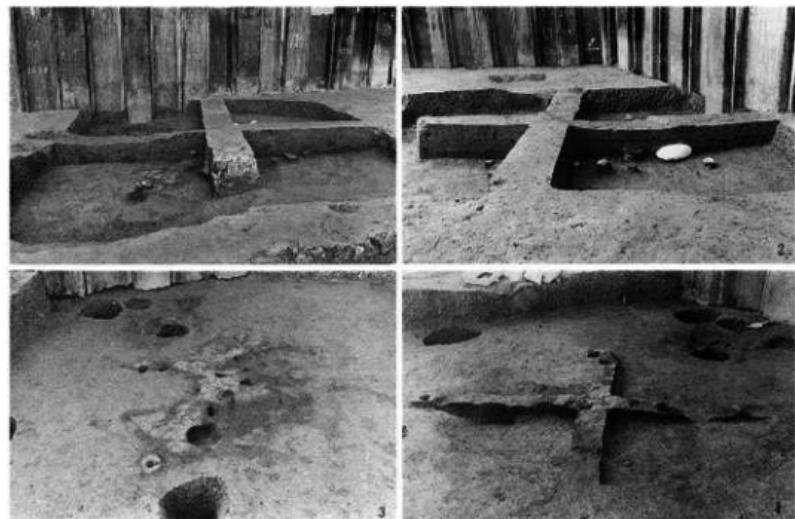
33 S I 13細部

- 1 カマド (東より)
- 2 カマド断面 (東より)
- 3 造物出土状況 (東より)

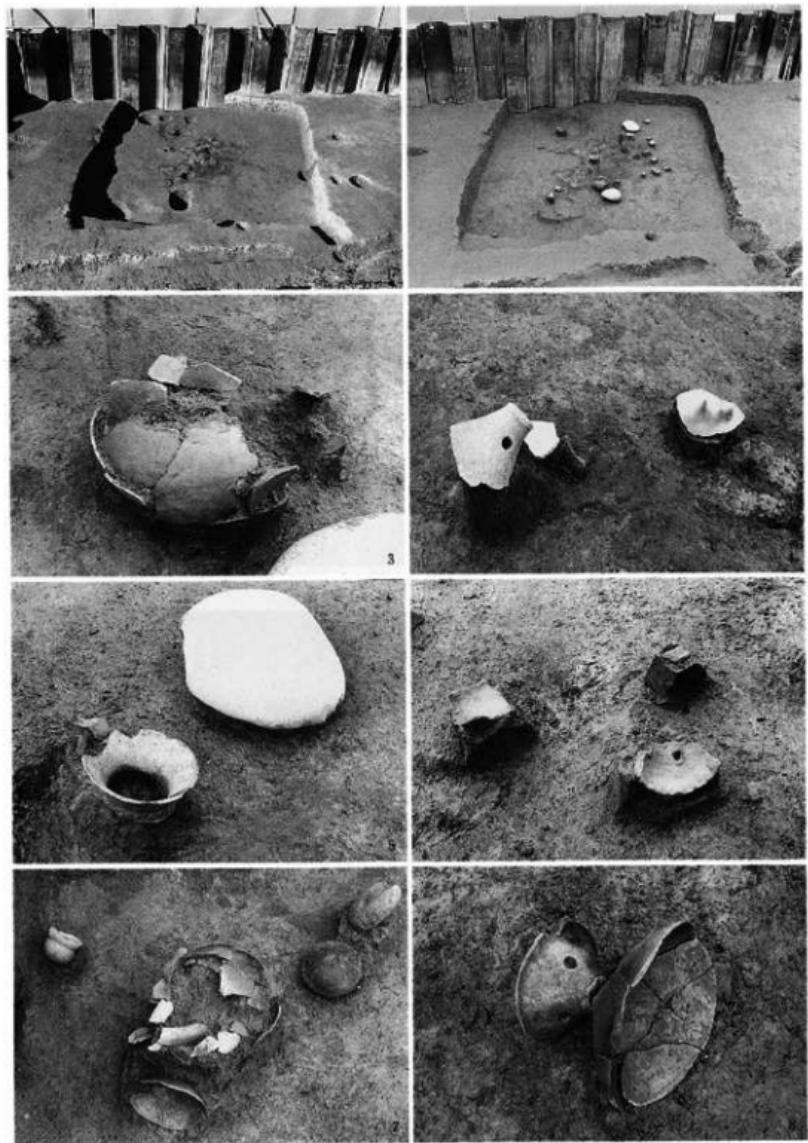




34 S I 14住居跡（南西より）



35 S I 14細部 1 断面（南東より） 2 断面（北東より）
3 が 4 がたら割り（東より）



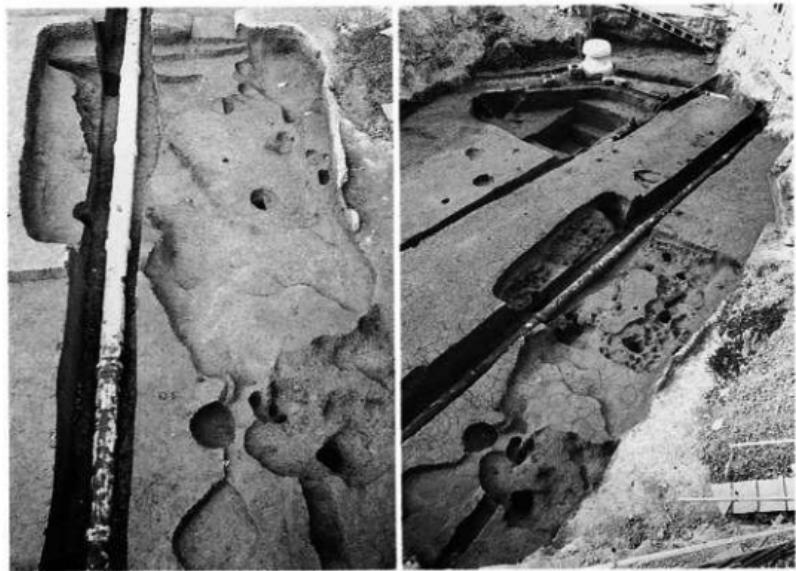
36 S I 14 1 完掘状況(南西より) 2 遺物出土状況(南東より)
3~8 遺物出土状況



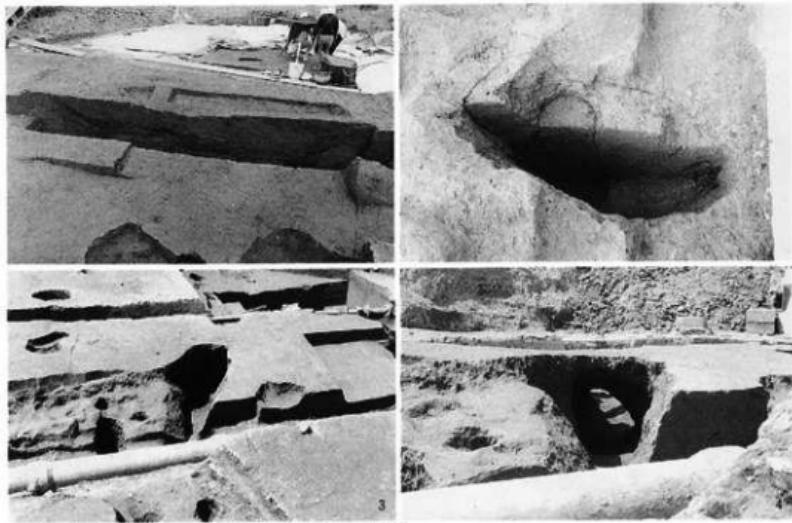
37 II区調査状況（南より）



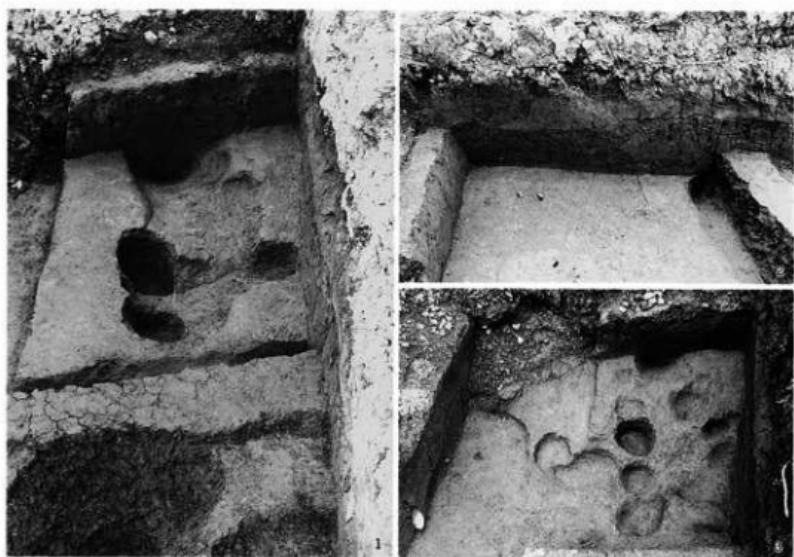
38 S I 16住居跡（西より）



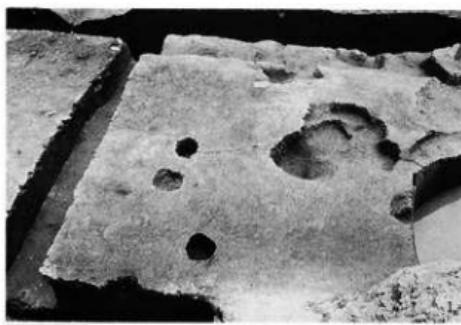
39 S I 15住居跡 1 南西より 2 南より(Ⅱ区全景)



40 S I 15細部 1 断面 2 ピット 4 断面
3・4 暗渠状通路

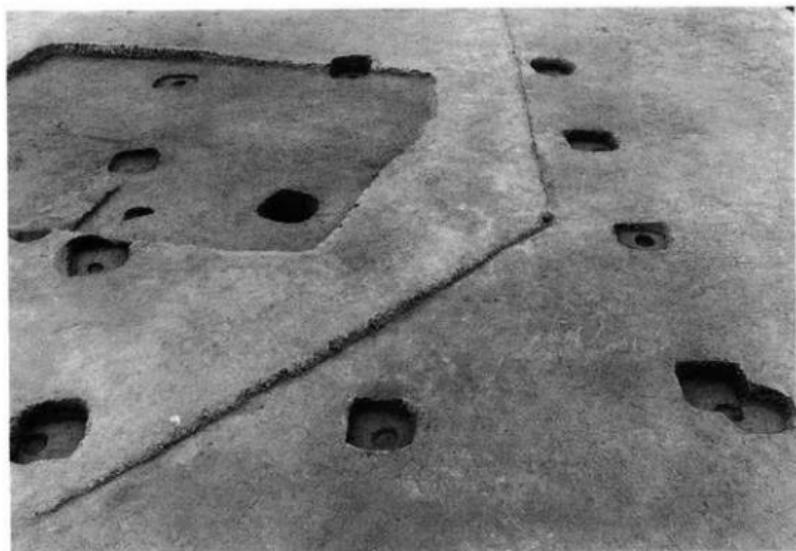


41 S I 18住居跡 1 南より 2 断面(西より) 3 掘り方(南より)

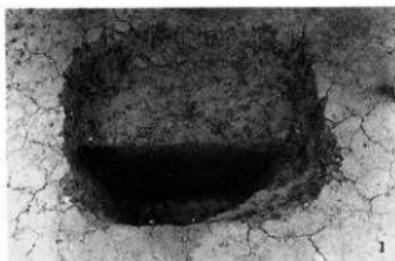


42 S I 19住居跡
1 西より
2 焼土断面(南東より)

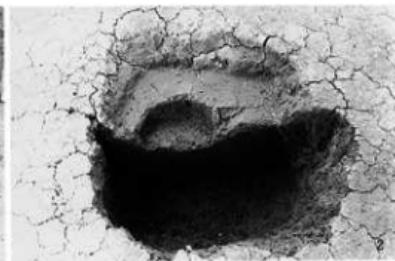




43 SB 1 建物跡



1

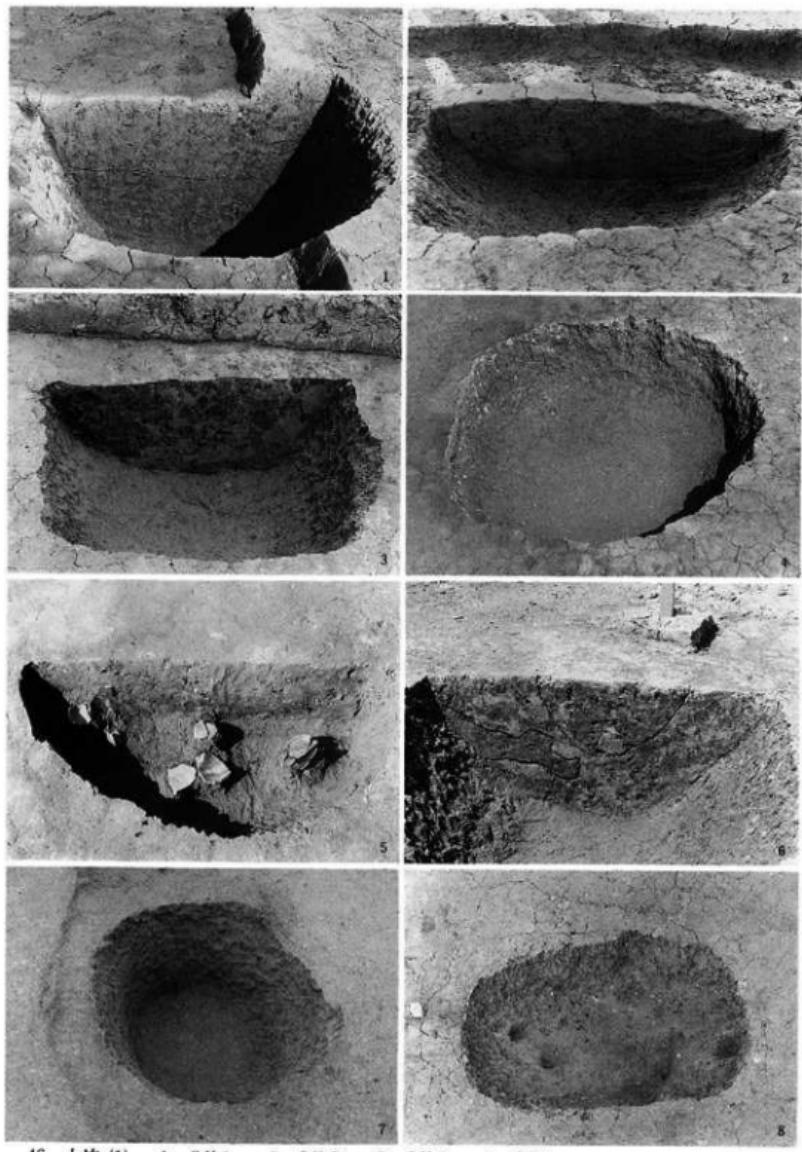


44 SB 1 柱穴

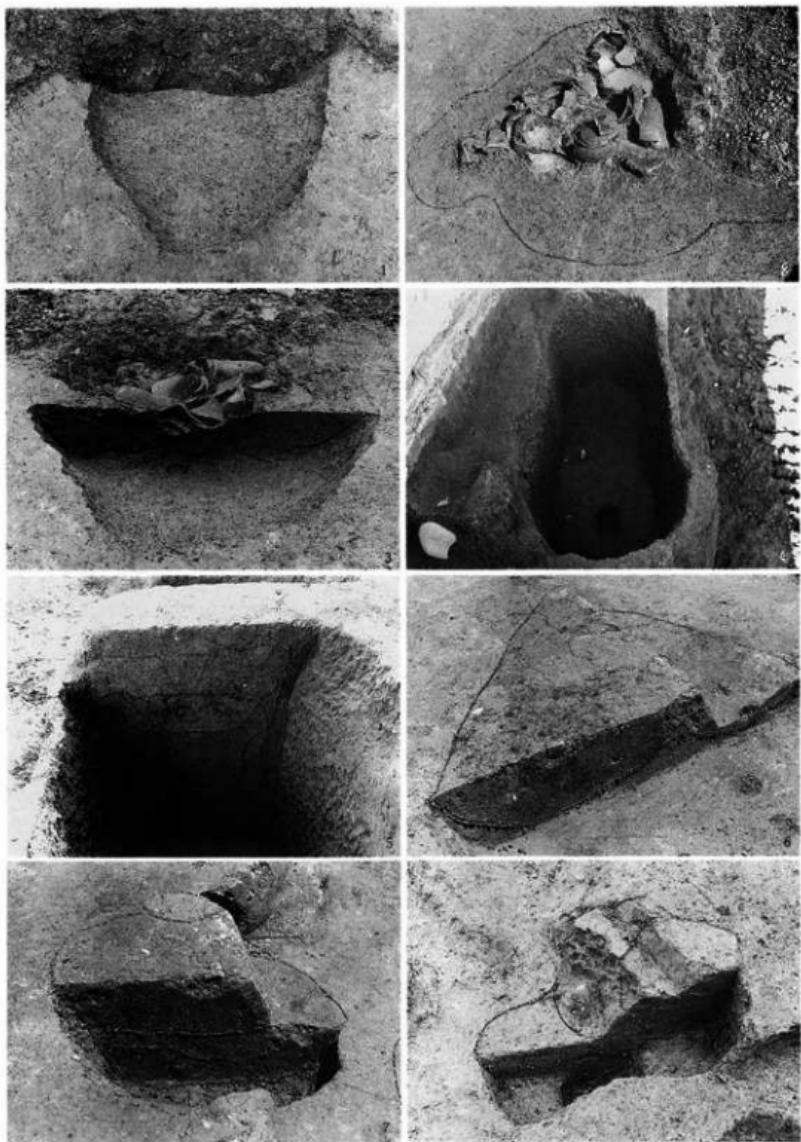
- 1 ピット5
- 2 ピット10



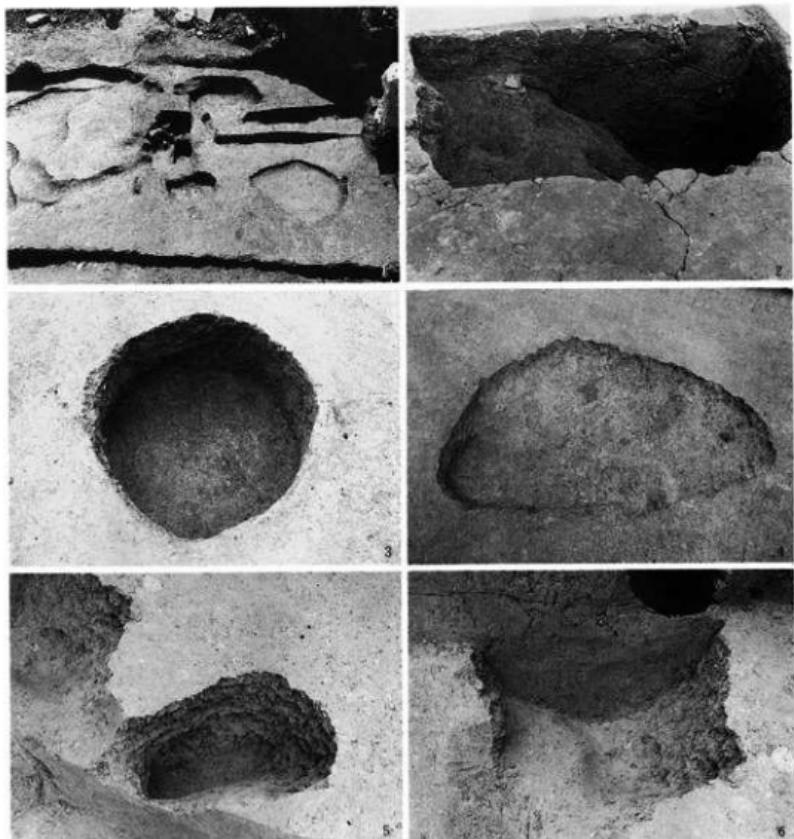
45 作業風景 (I南区)



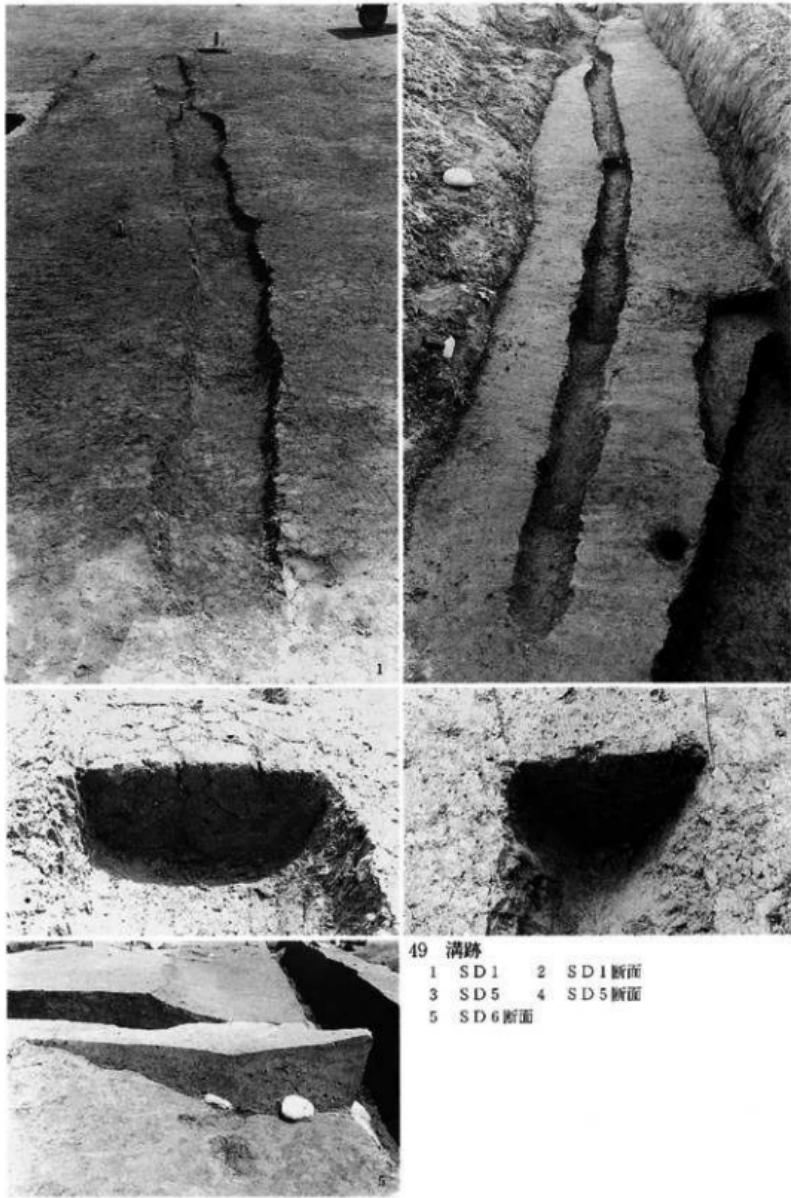
46 土坑 (1) 1 SK1 2 SK2 3 SK3 4 SK4
5 SK4 遗物出土状况 6 SK6 7 SK7
8 SK17



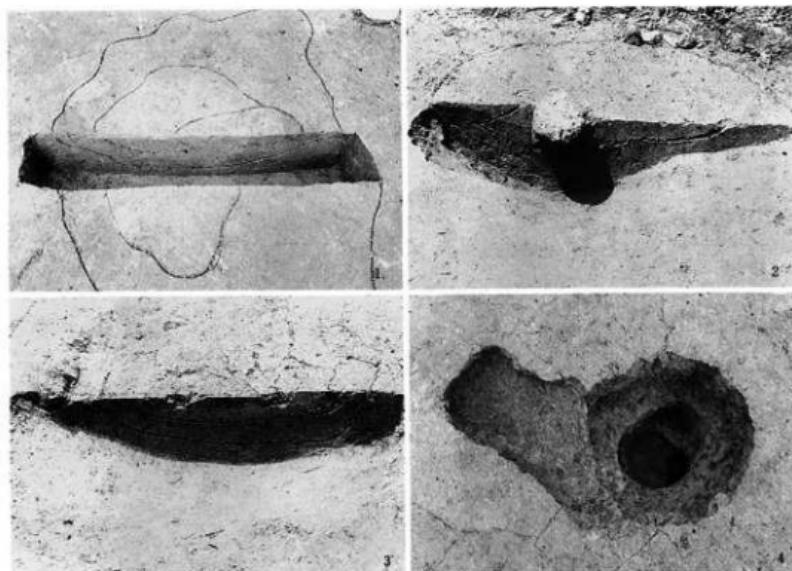
47 土坑 (2) 1 SK 8 2 SK 8 3 SK 8
 4 SK 15 5 SK 15断面 6 SK 22
 7 SK 23 8 SK 25内ピット



48 土坑 (3) 1 II区土坑群 (北西より) 2 SK26
 3 SK27 4 SK28 5 SK29
 6 SK30



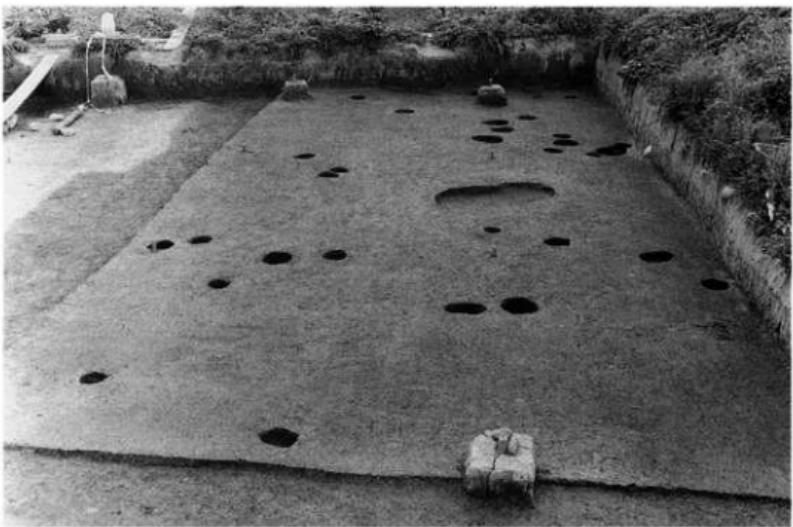
49 满跡
1 SD 1 2 SD 1断面
3 SD 5 4 SD 5断面
5 SD 6断面



50 焼土遺構 1 1号焼土 2 2号焼土 3 3号焼土
4 II区ピット2



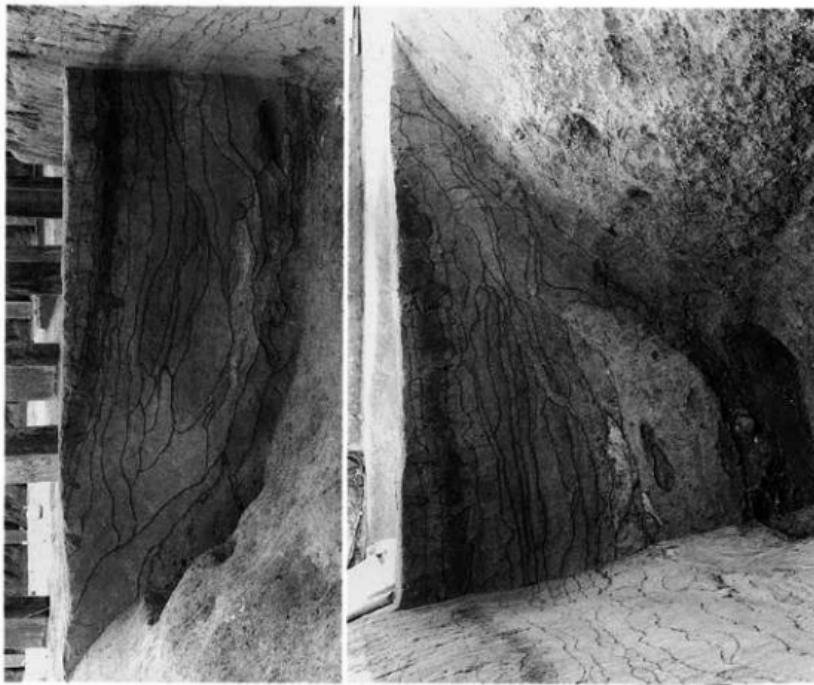
51 III区小溝状遺構群・ピット（北西より）



52 I 北区ピット群（北より）



53 IV 区ピット群（南より）

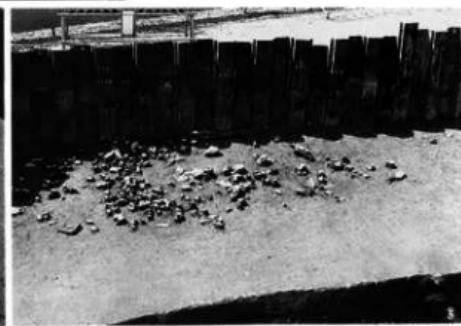
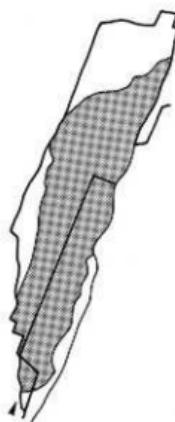


54 S R 4 河川跡 1 全景 (南より)
2 断面 (北より)
3 断面 (南より)



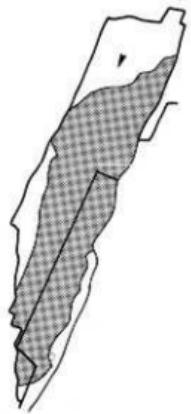
55 遺物包含層（I区）

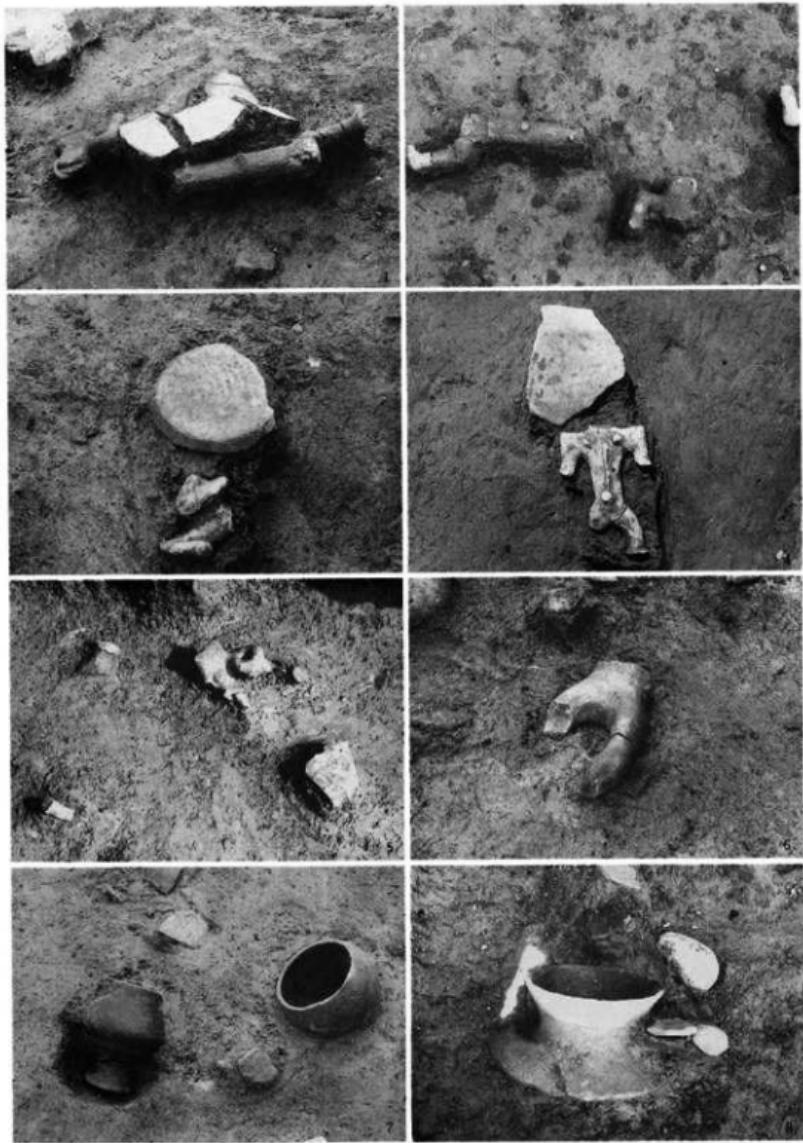
- 1 全景 (南西より)
- 2 全景 (南西より)
- 3 全景 (南東より)
- 4・5 遺物出土状況



56 遺物包含層(Ⅲ区)

- 1 全景(北東より)
- 2 調査状況(北西より)
- 3~5 遺物出土状況
(北西より)

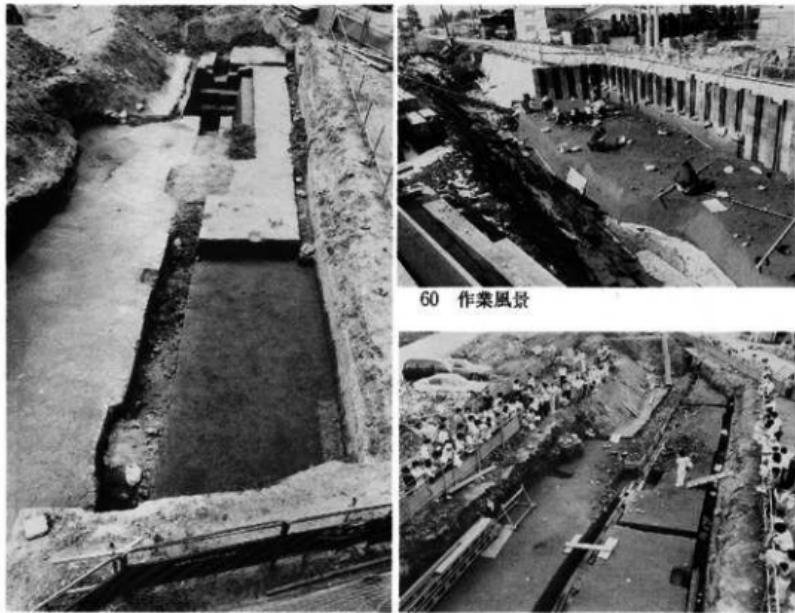




57 遺物出土状況 1・2 土偶 1 3・4 土偶 2
 5 土偶 4 6 土製品 7 土器 397・398
 8 土器 428



58 遺物出土状況 1 土器20 2 土器13
3 土器396 4 土器17

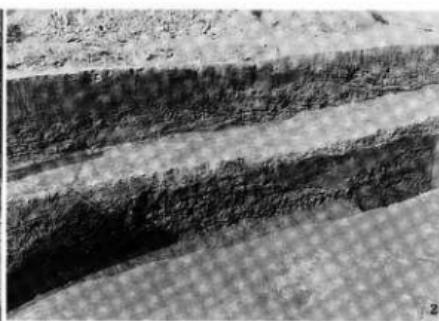


59 包含層下の状況（北東より）

61 現地説明会

62 河川跡 (1)
1 SR1 (南より)
2 SR1断面
3 SR5・6・7
(北より)

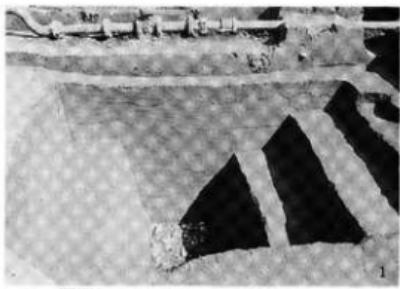




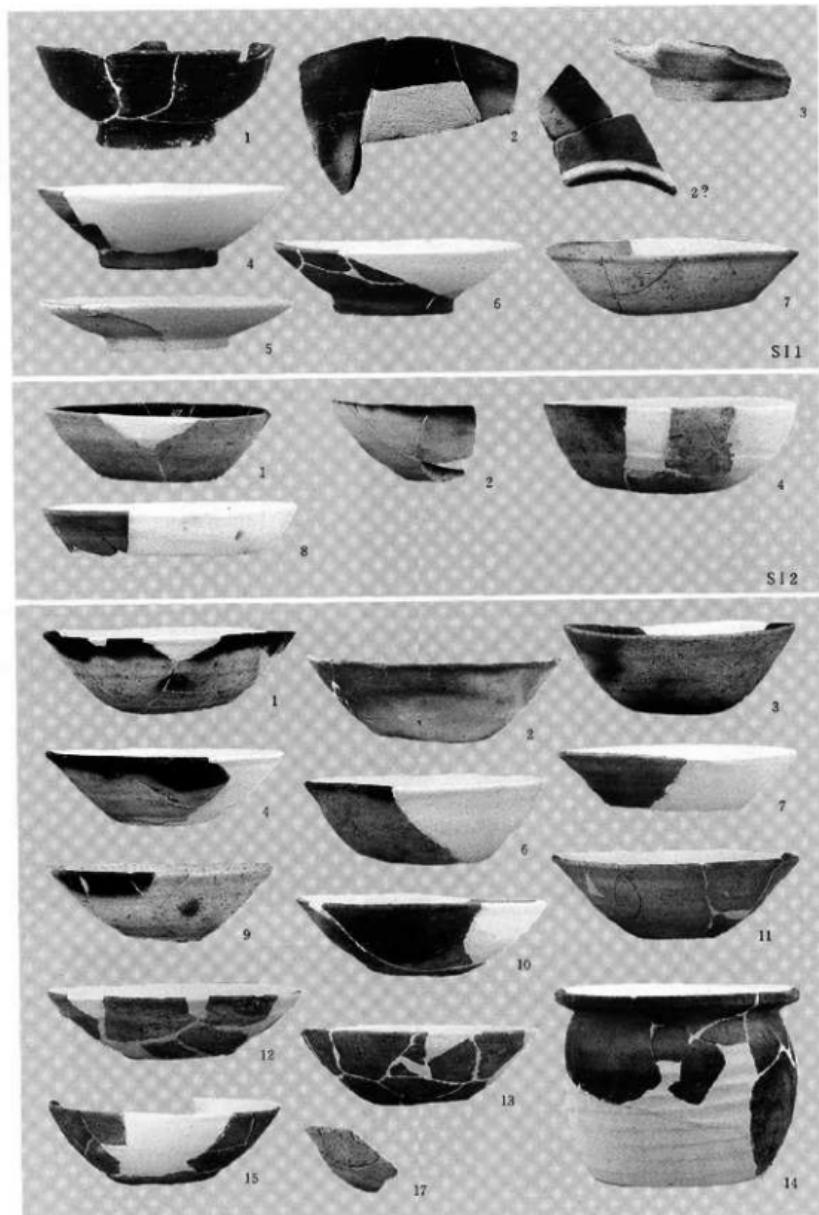
63 河川跡 (2)
1 SR 5・6・7 (北より)
2 断面 (西壁)



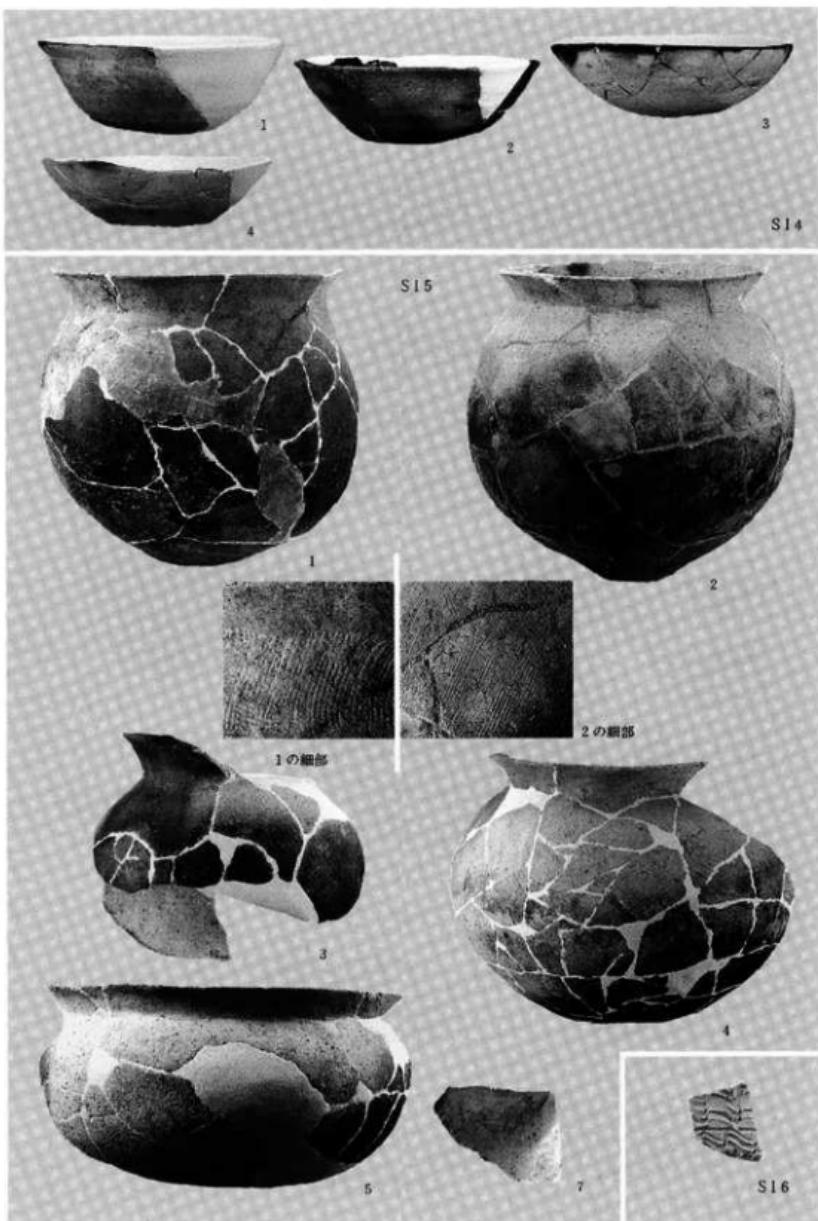
64 I 北区礫層 1 西より 2 西壁



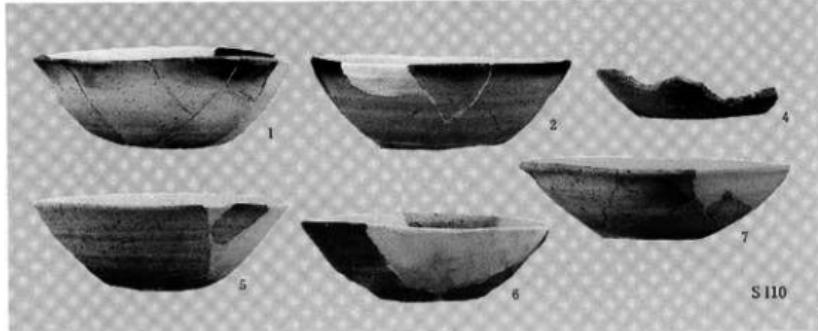
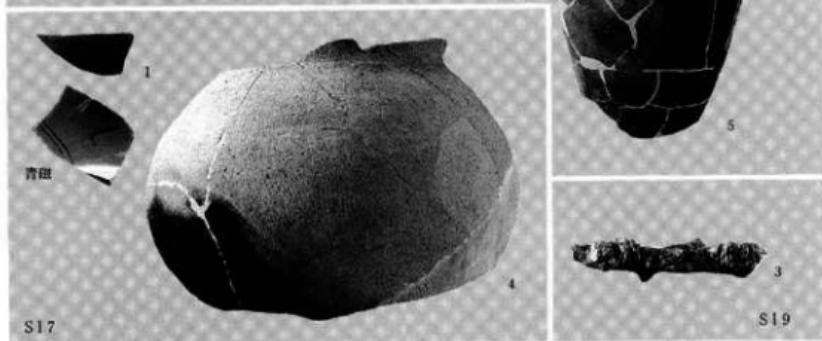
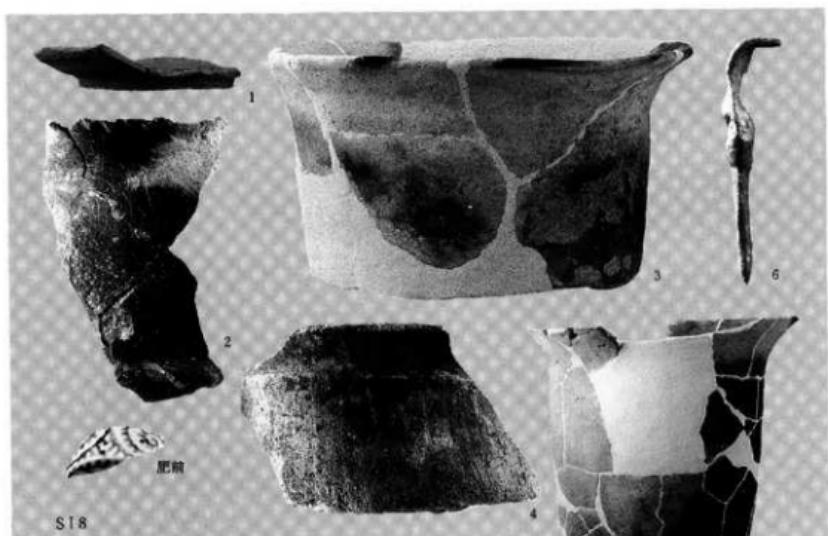
65 深堀りトレンチ
1 II区 2 IV区



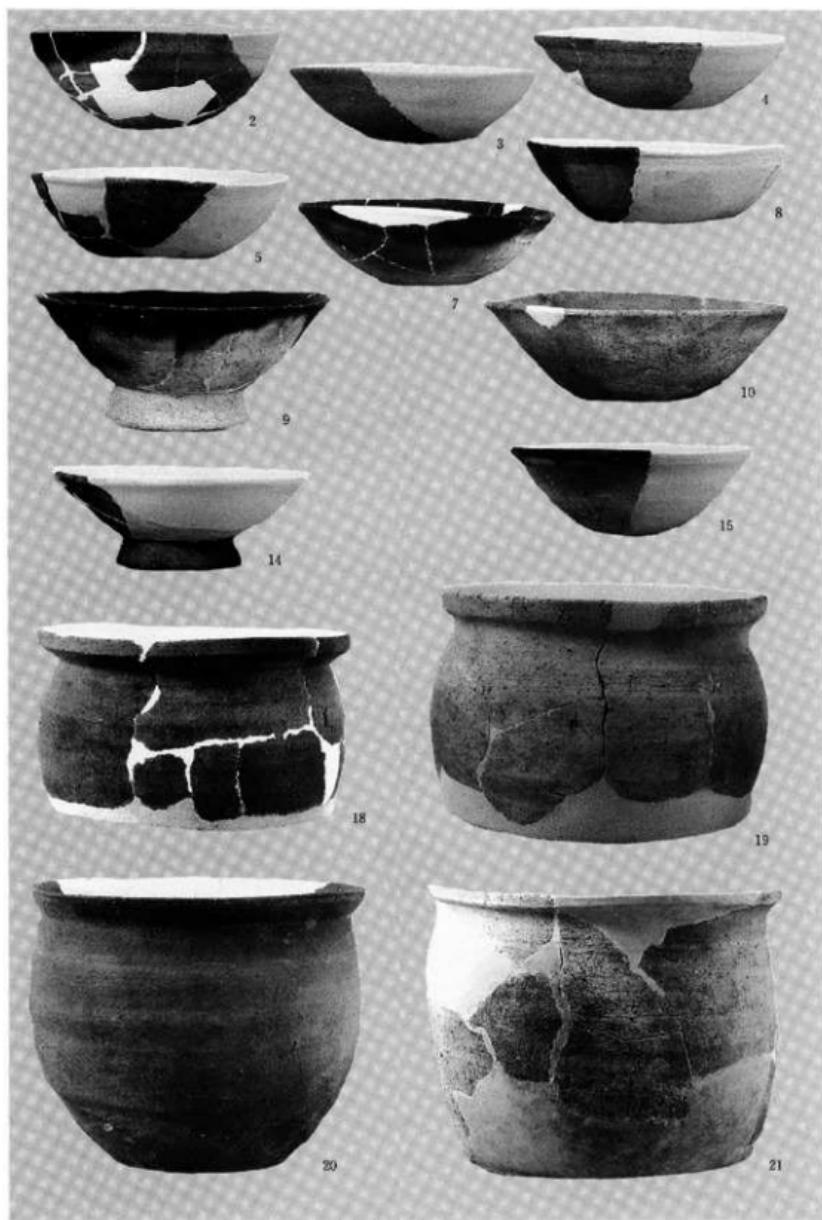
66 S I 1・2・3 住居跡出土遺物 (番号は図に対応する)



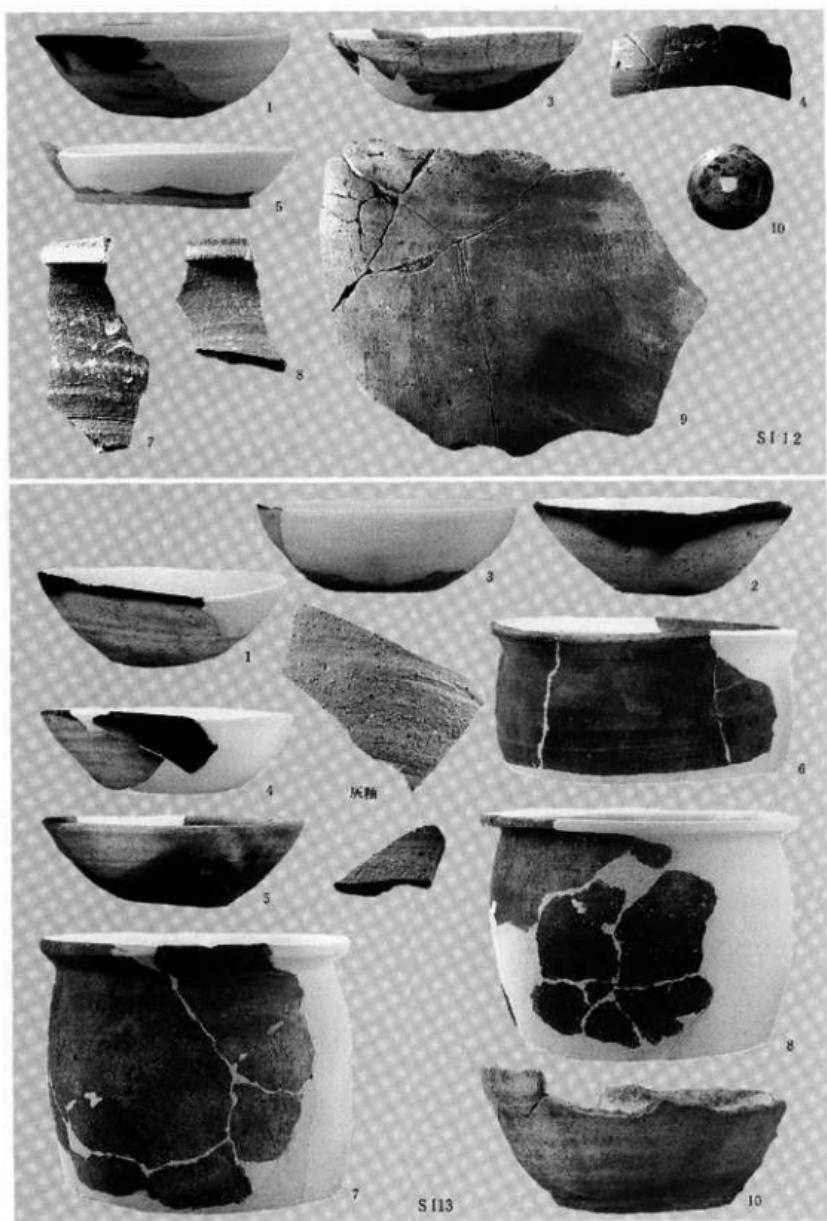
67 S14・5・6 住居跡出遺物 (番号は図に対応する)



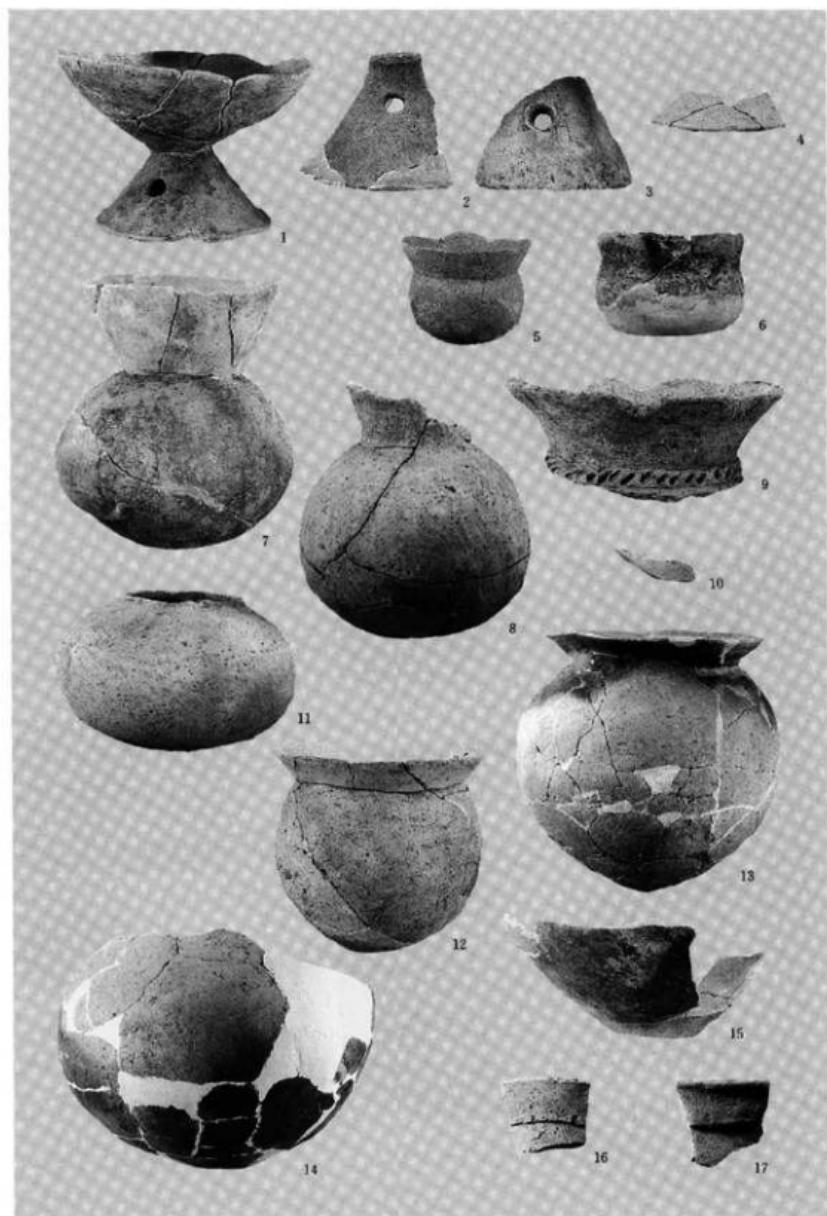
68 S 17・8・9・10住居跡出土遺物 (番号は図に対応する)



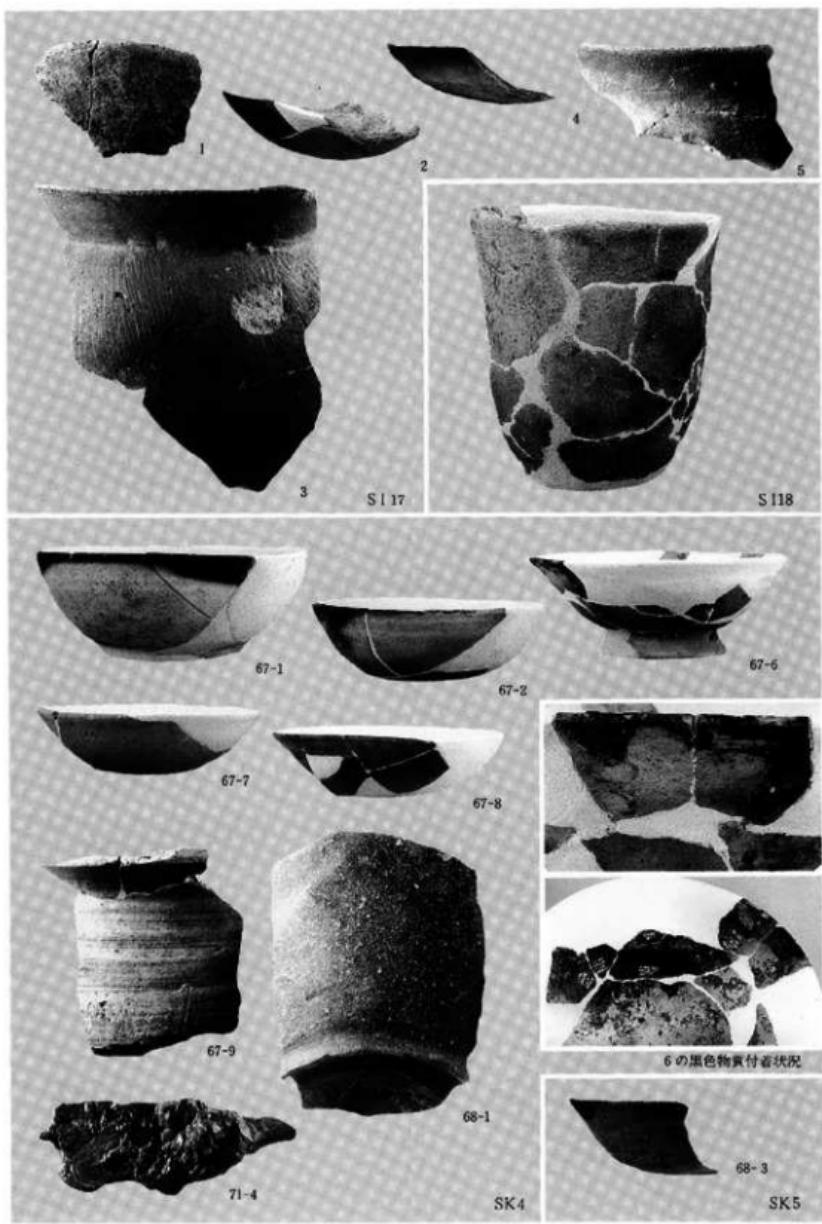
69 S 111住居跡出土遺物 (番号は図に対応する)



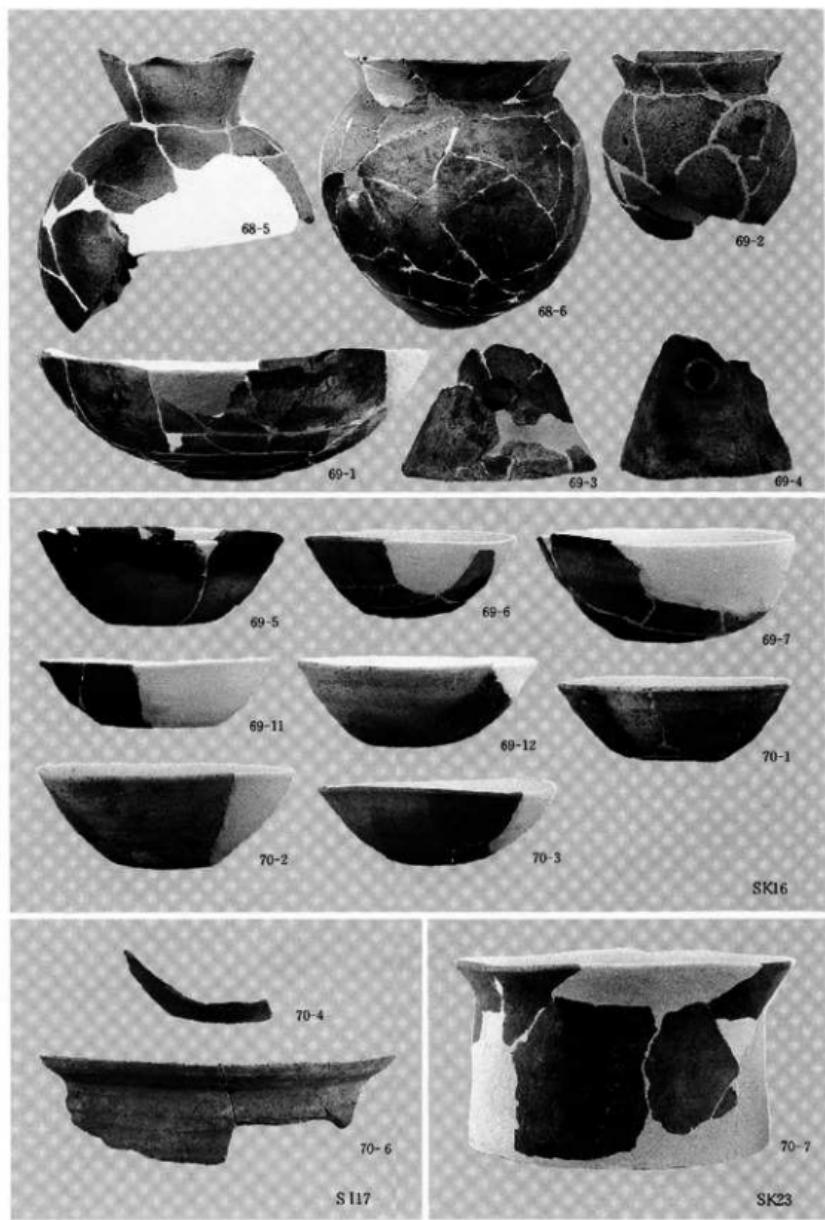
70 S II 12-13住居跡出土遺物 (番号は図に対応する)



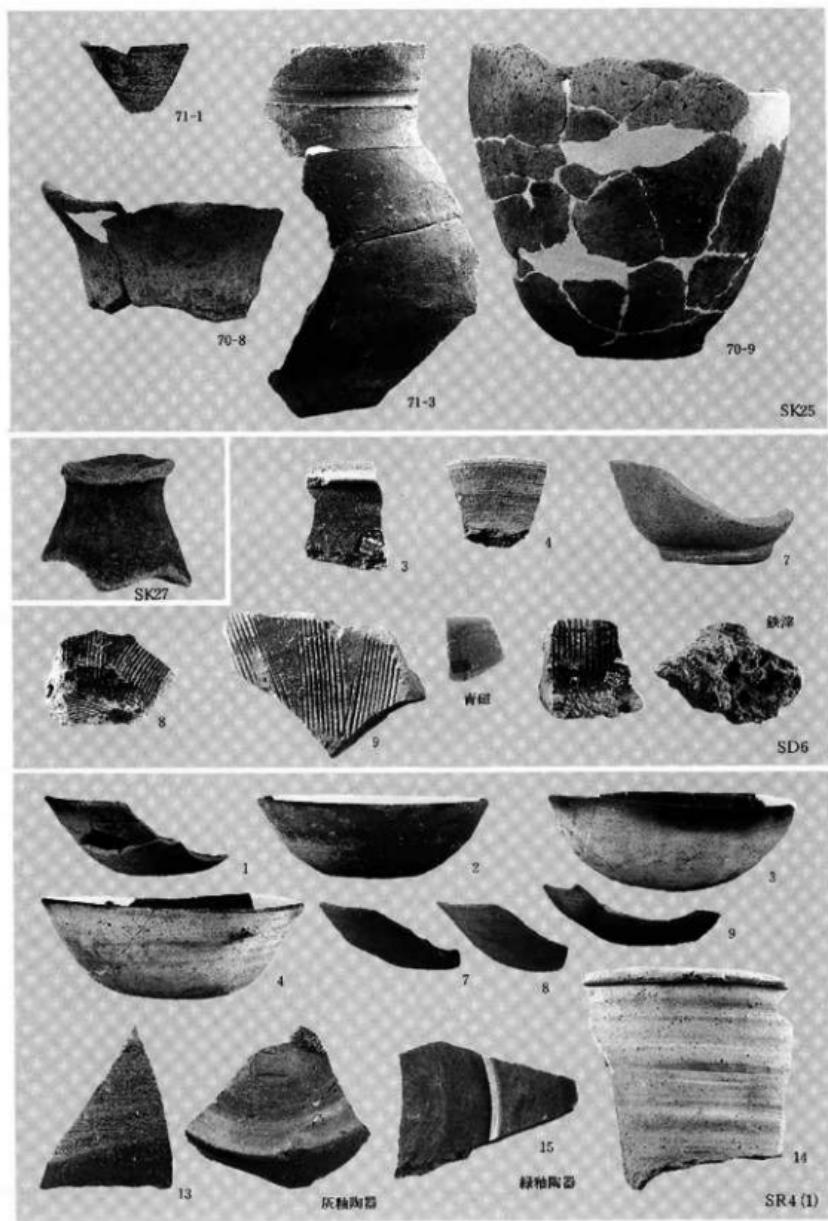
71 S I14住居跡出土遺物（番号は図に対応する）



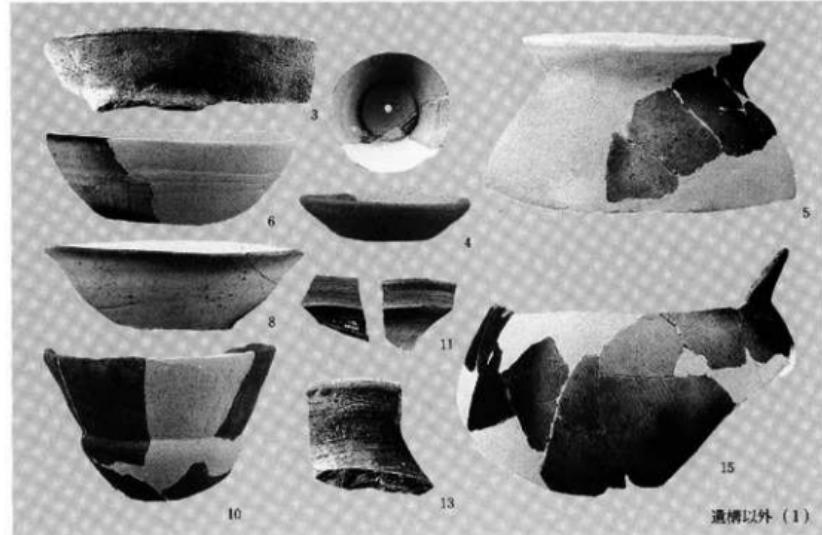
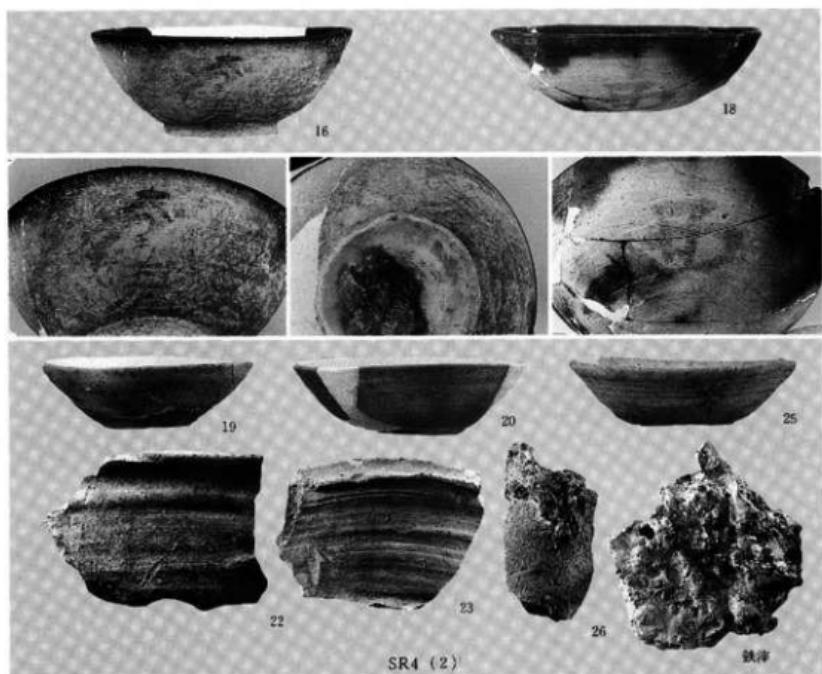
72 S I 17-18住居跡 SK4・5 土坑出土遺物 (番号は図に対応する)



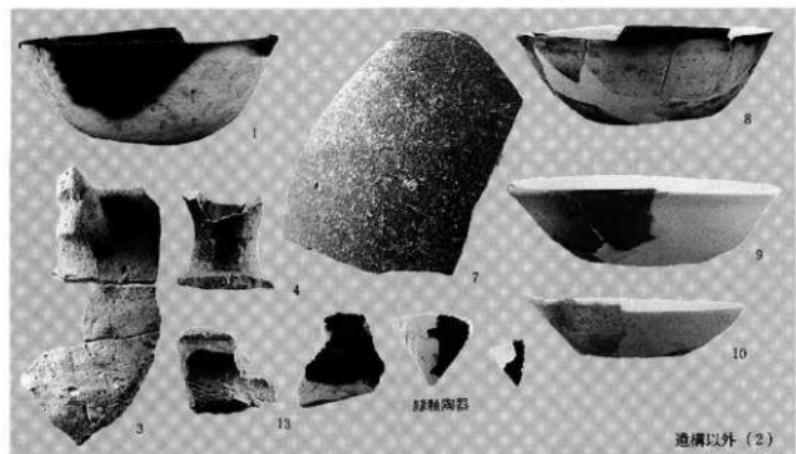
73 SK 8・16・17・23土坑出土遺物 (番号は図に対応する)



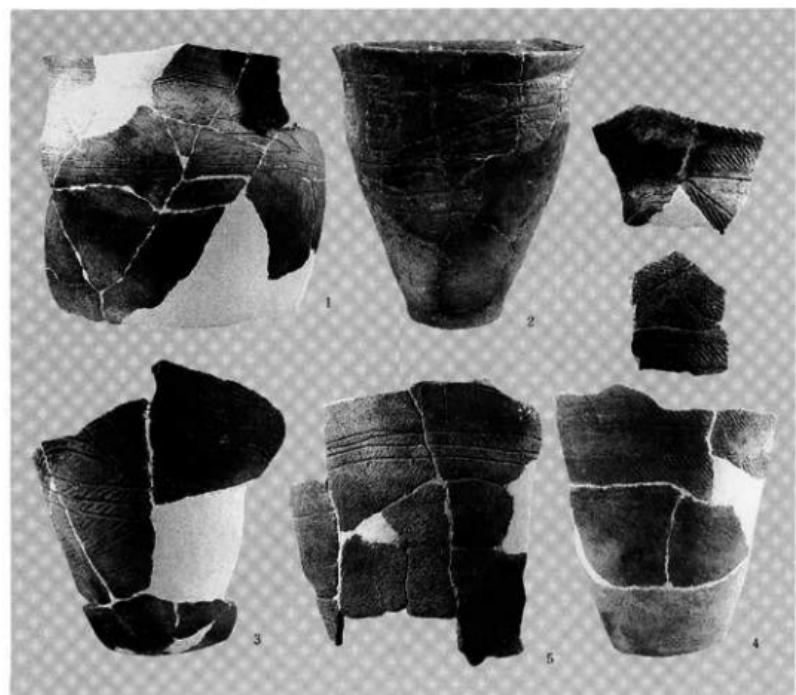
74 SK 25・27土坑 SD 6溝跡 SR 4 河川跡出土遺物（番号は図に対応する）



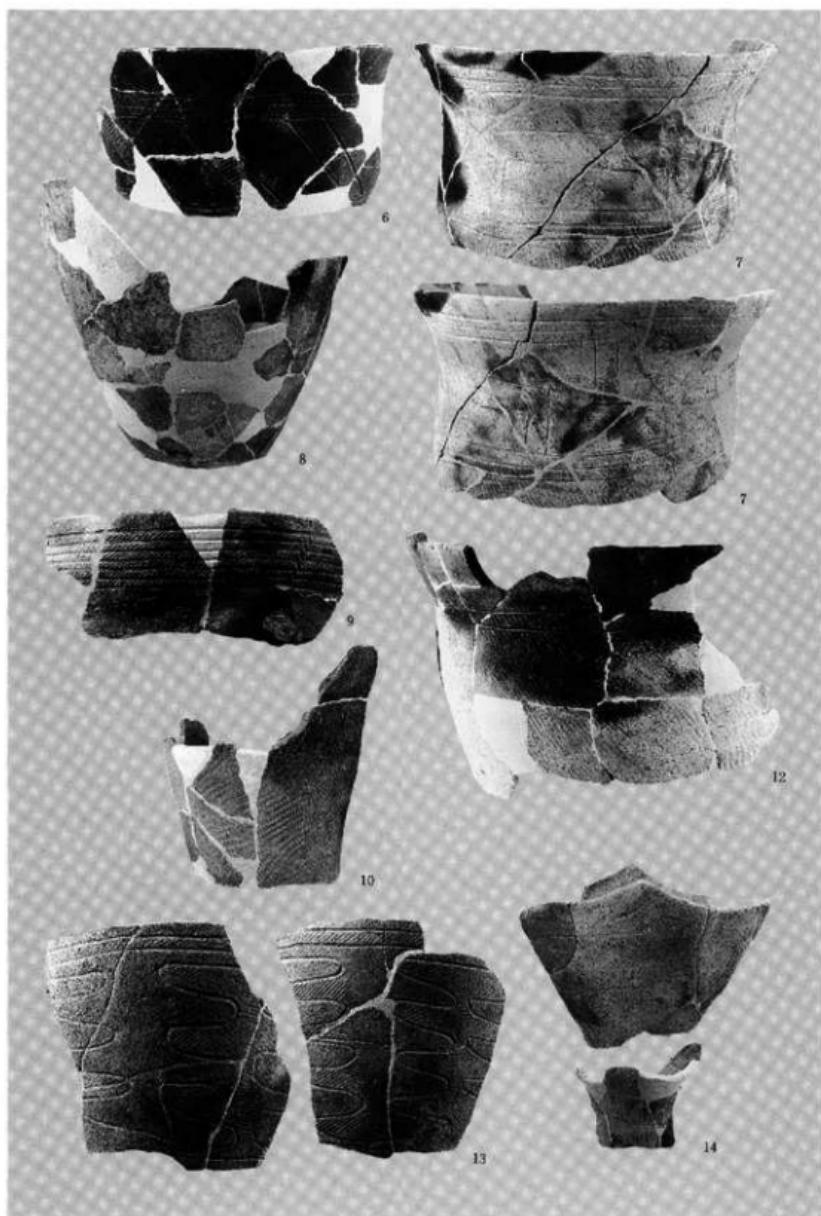
75 SR4 河川跡一遺構以外の出土遺物 (番号は図に対応する)



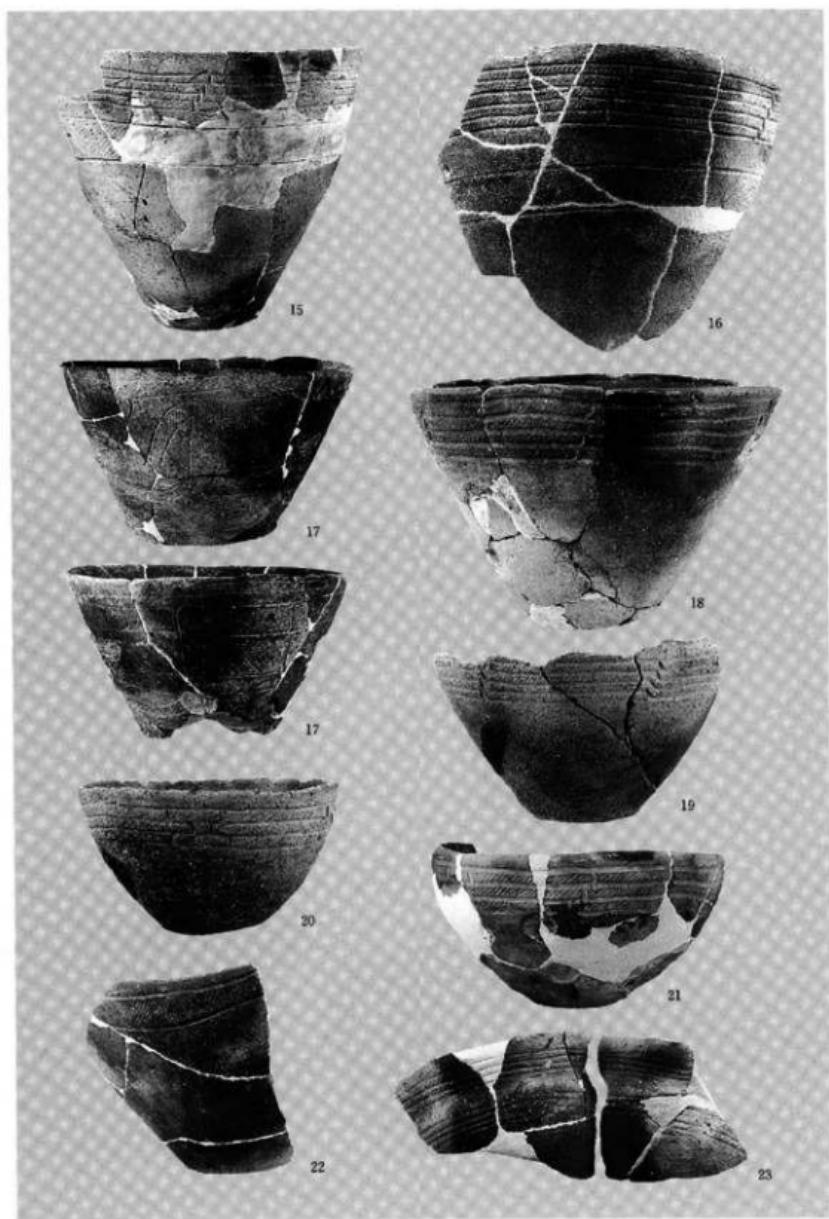
76 遺構以外の出土遺物 (番号は図に対応する)



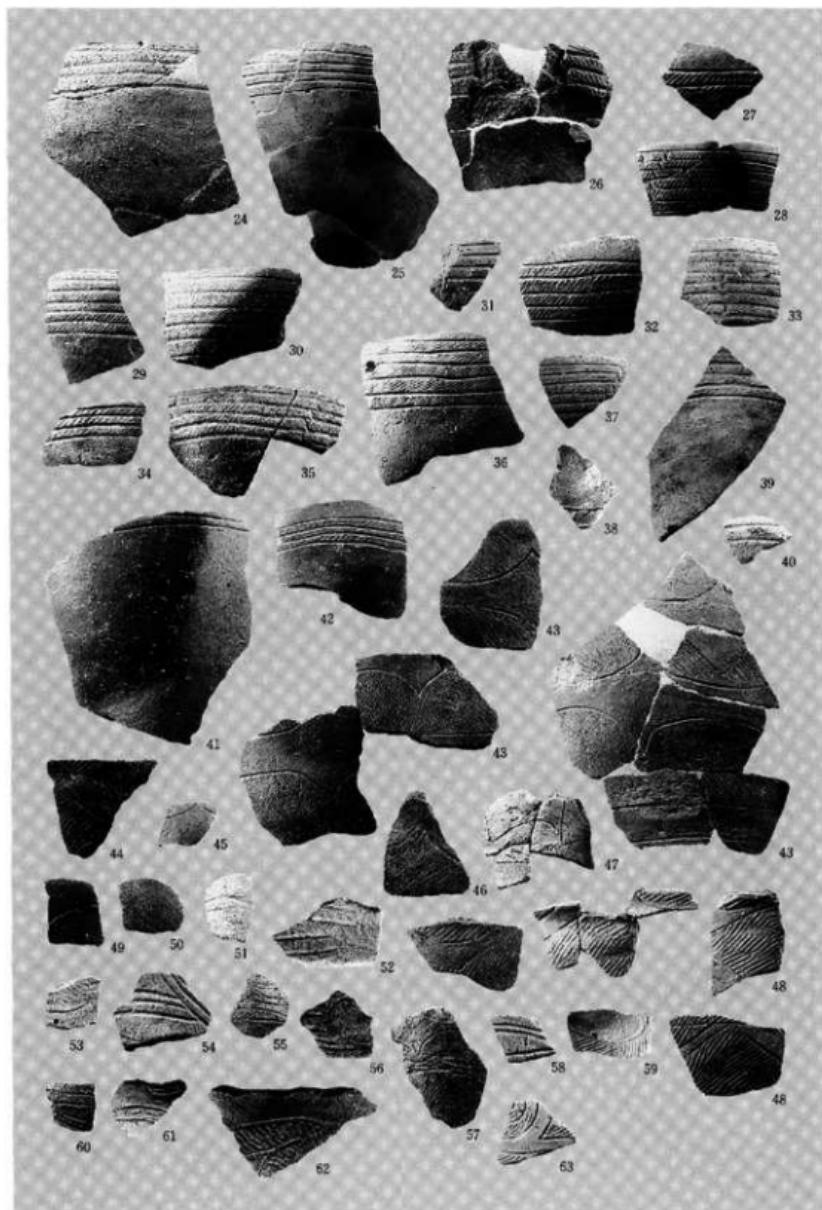
77 遺物包含層出土土器 (1) (番号は図に対応する)



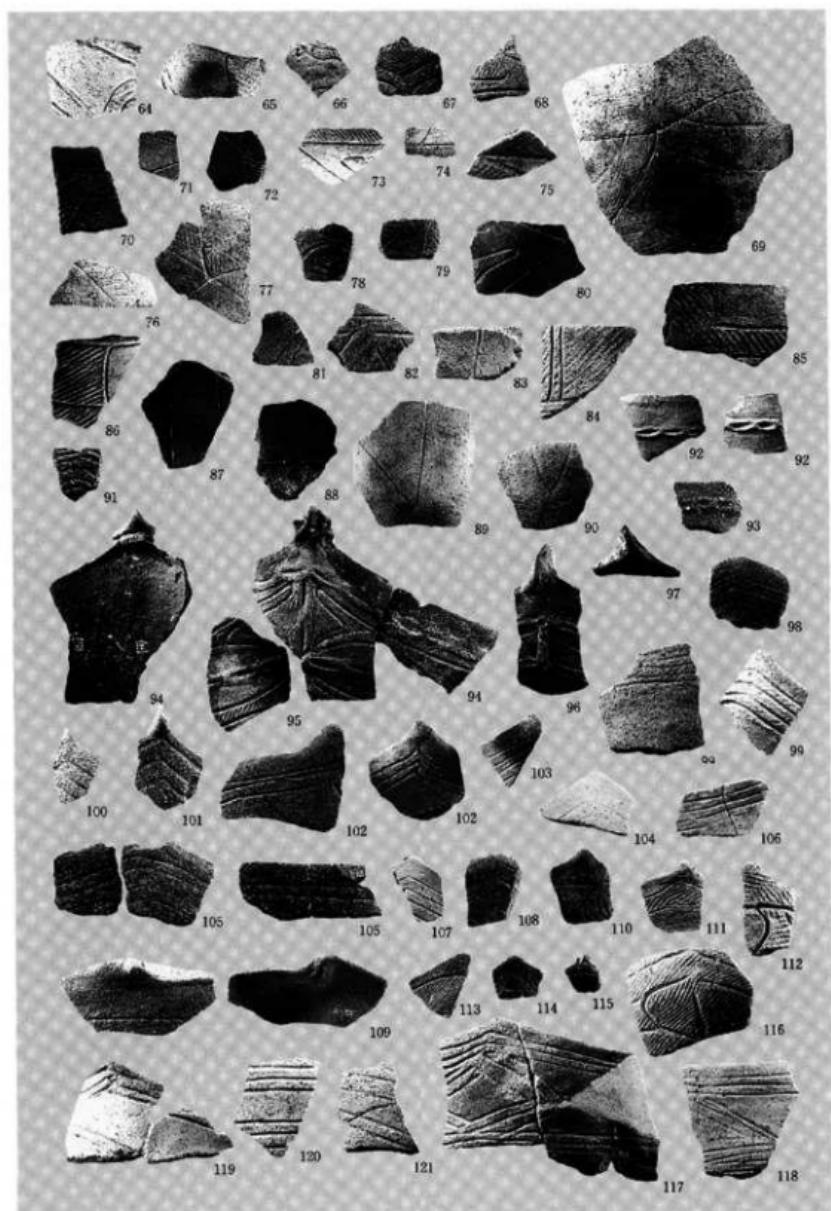
78 遺物包含層出土土器（2）（番号は図に対応する）



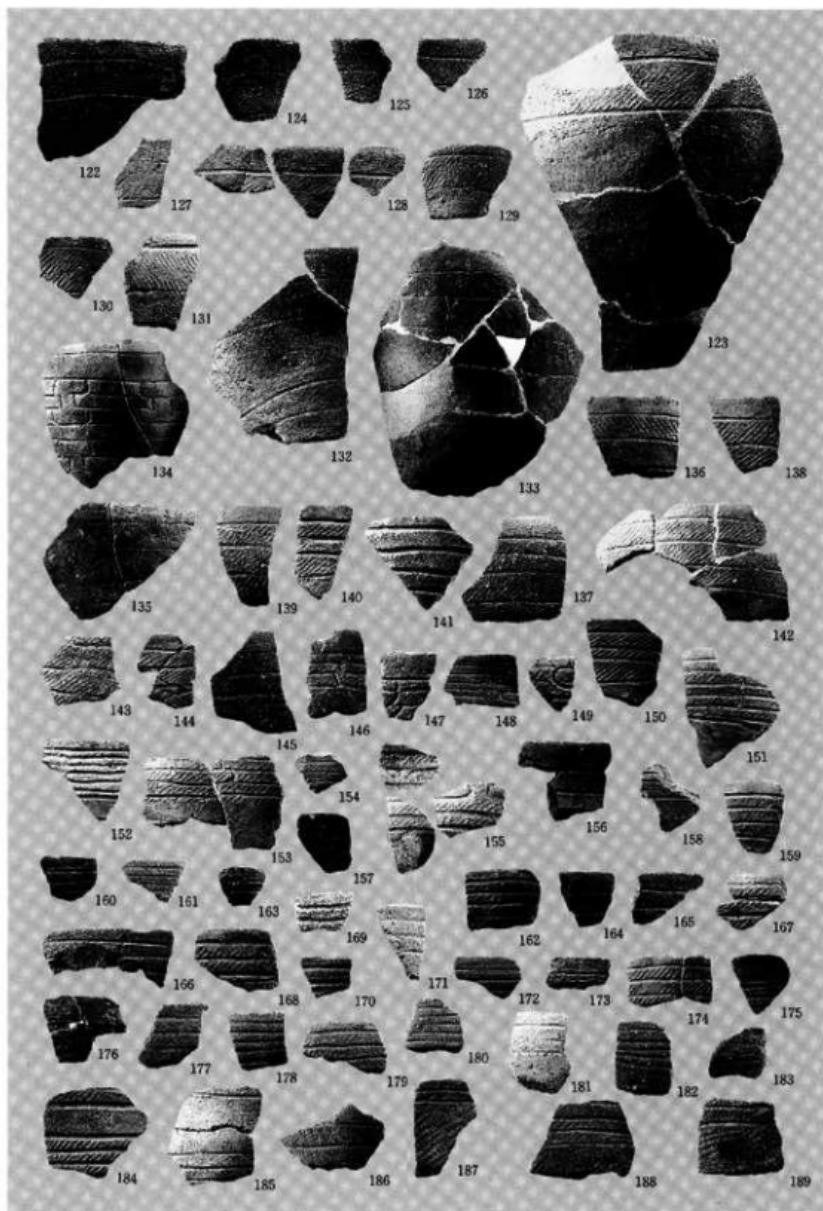
79 遺物包含層出土土器（3）（番号は図に対応する）



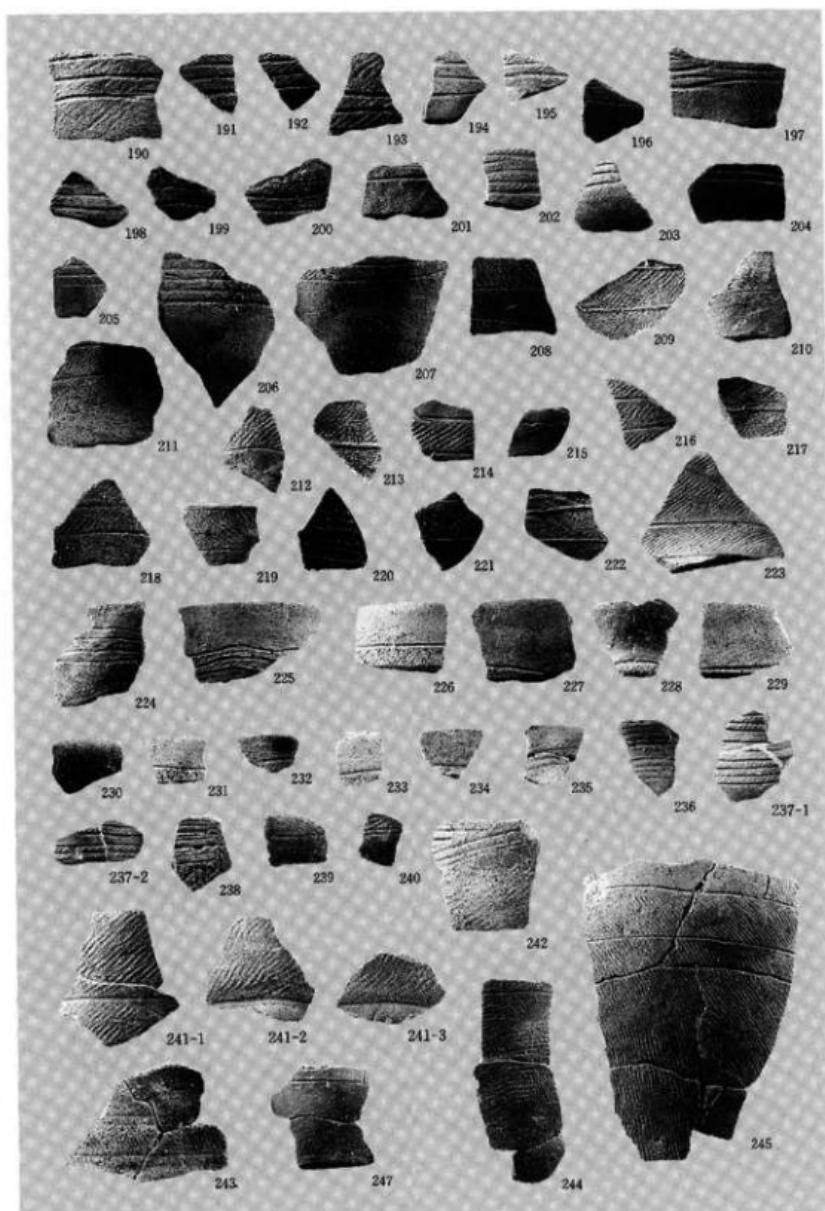
80 遺物包含層出土土器 (4) (番号は図に対応する)



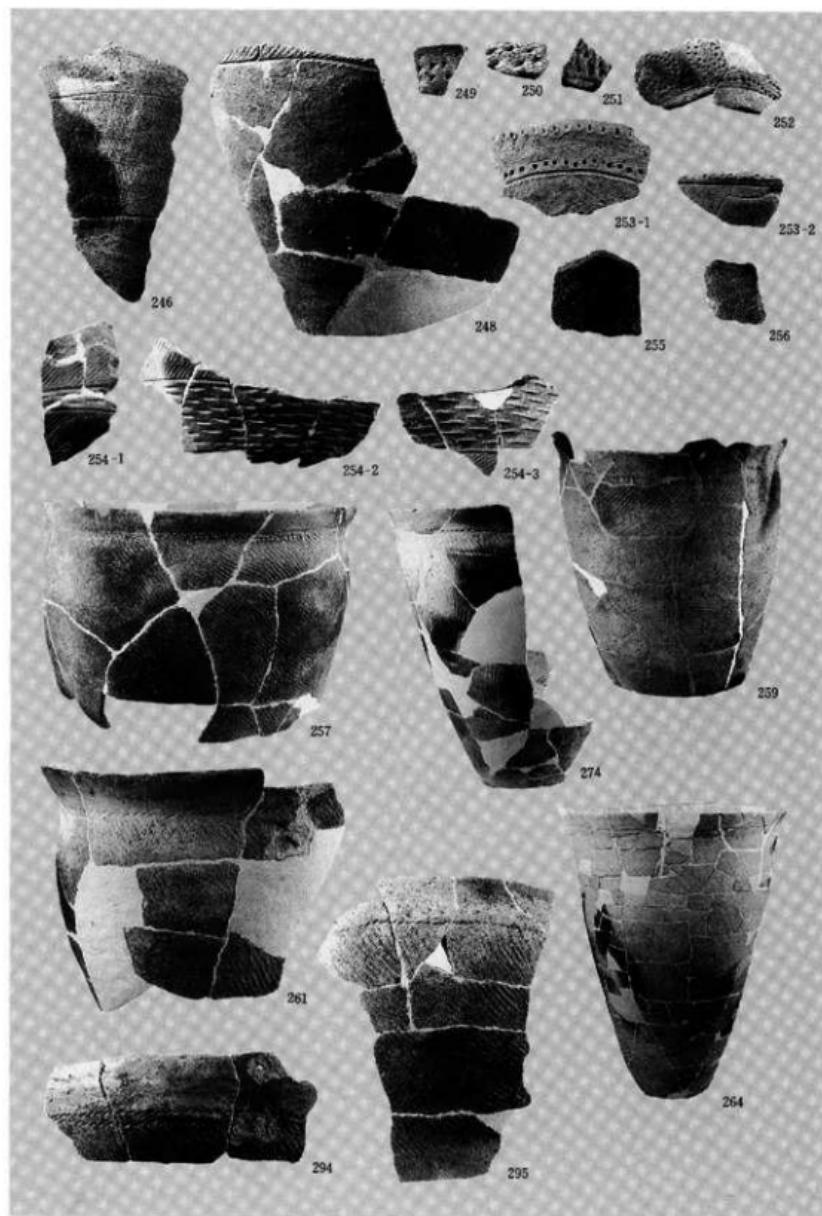
81 遺物包含層出土土器 (5) (番号は図に対応する)



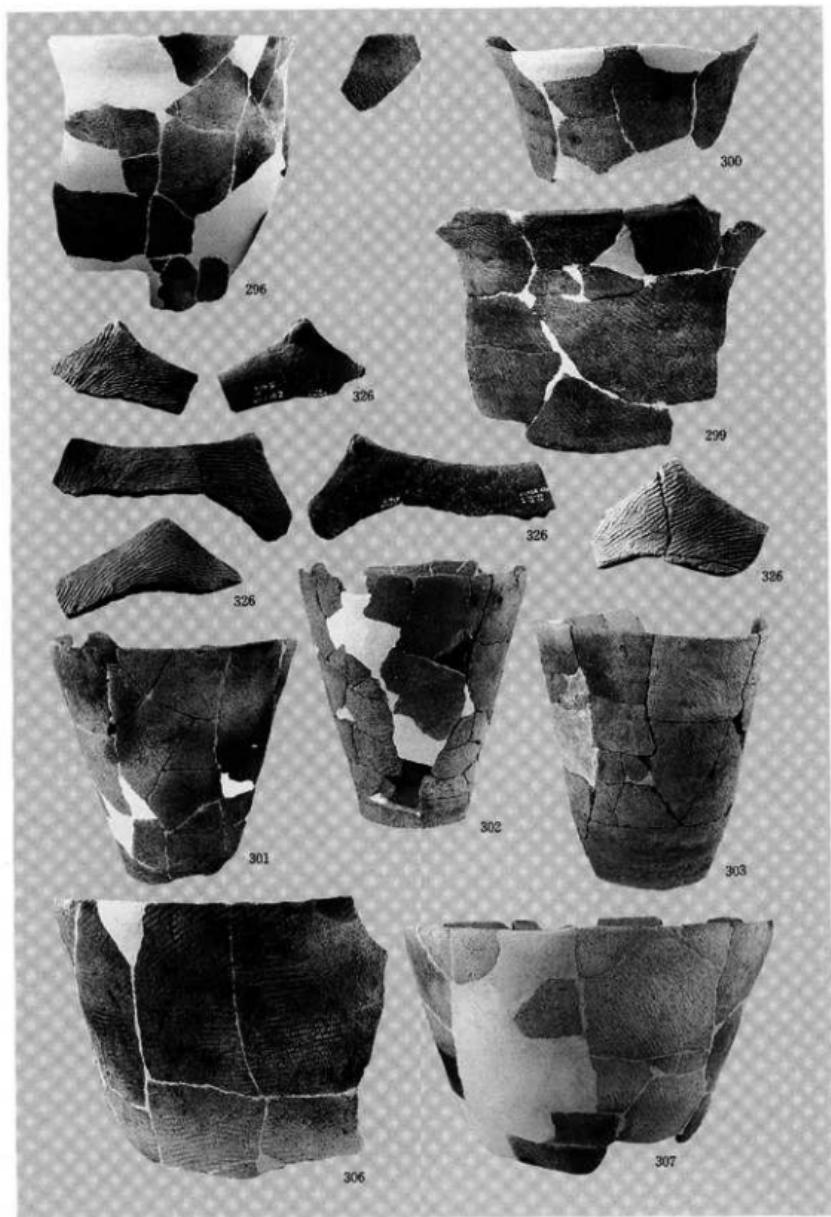
82 遺物包含層出土土器（6）（番号は図に対応する）



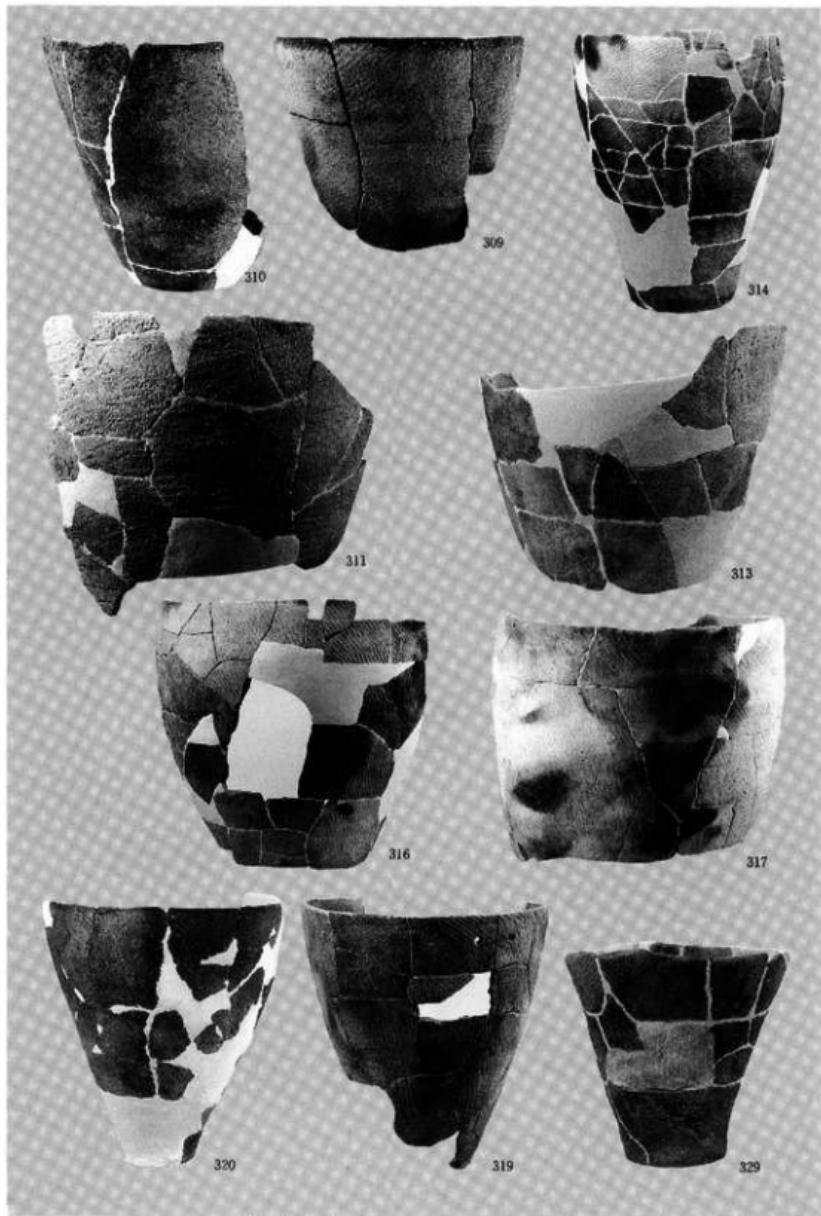
83 遺物包含層出土土器 (7) (番号は図に対応する)



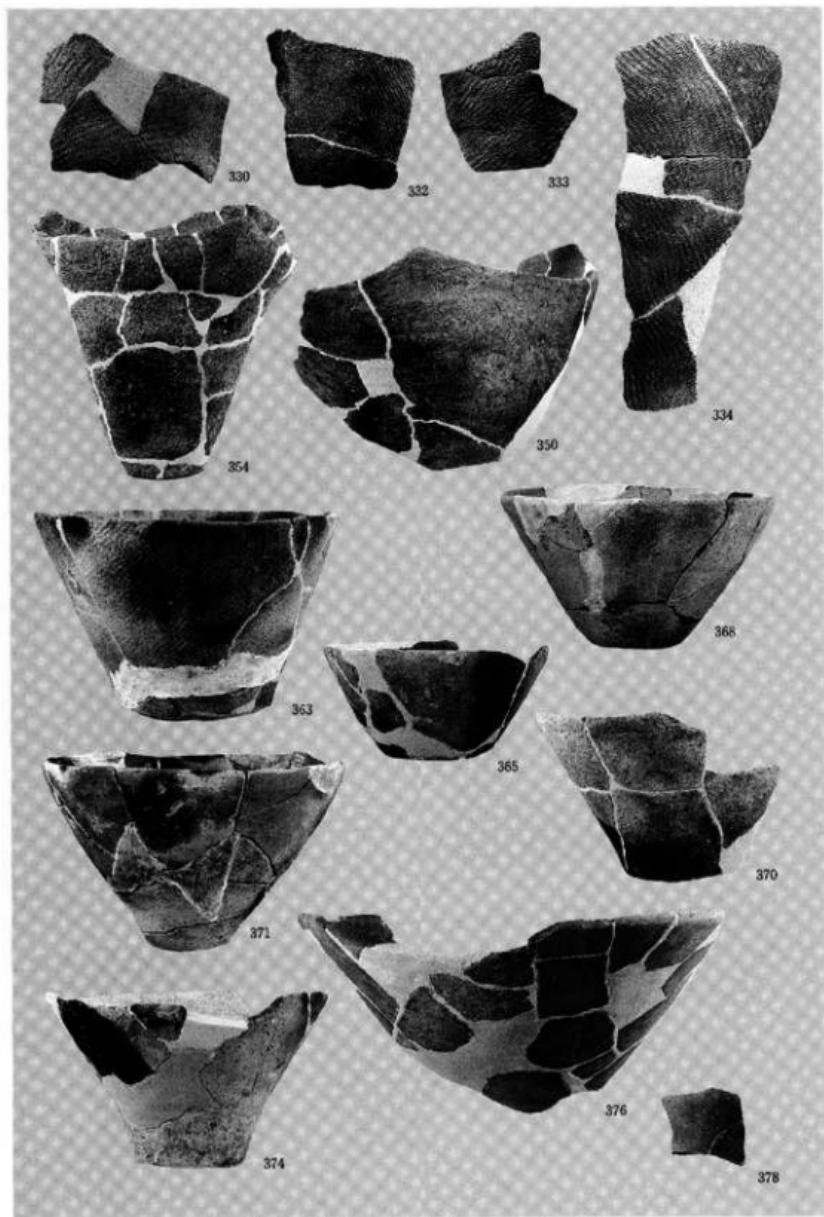
84 遺物包含層出土土器 (8) (番号は図に対応する)



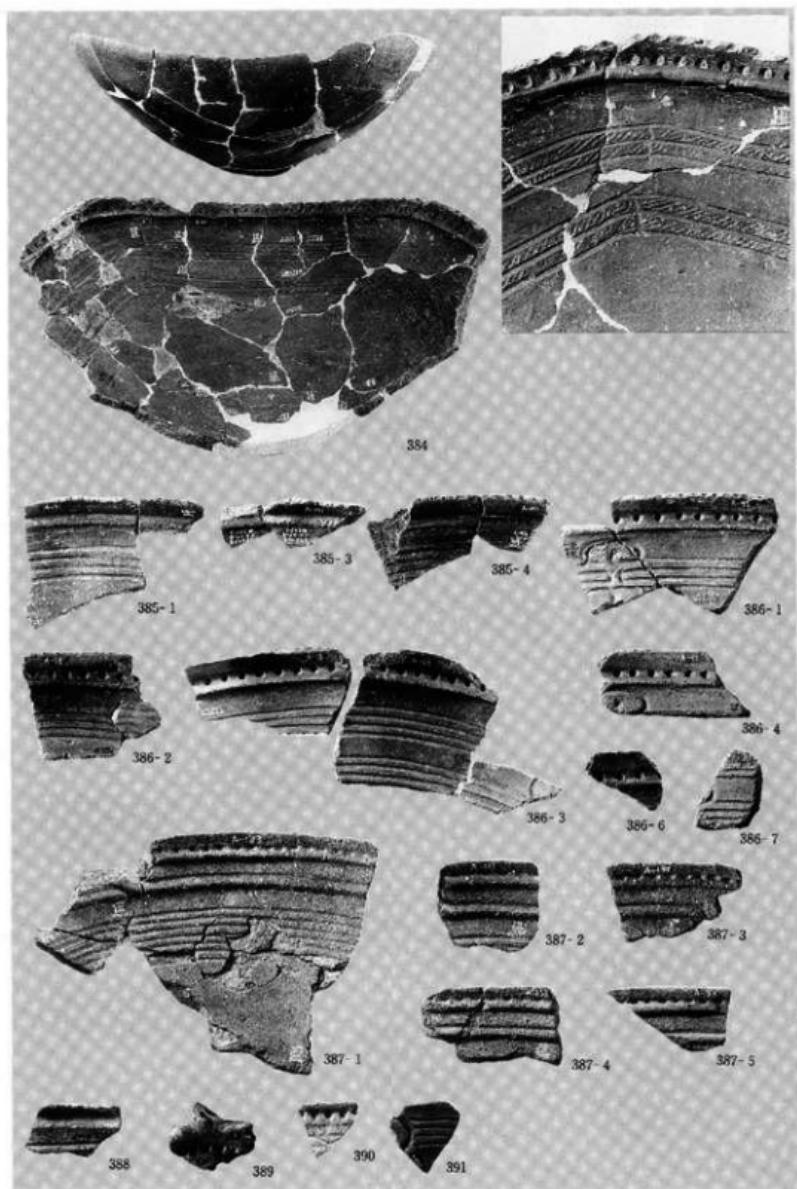
85 遺物包含層出土土器（9）（番号は図に対応する）



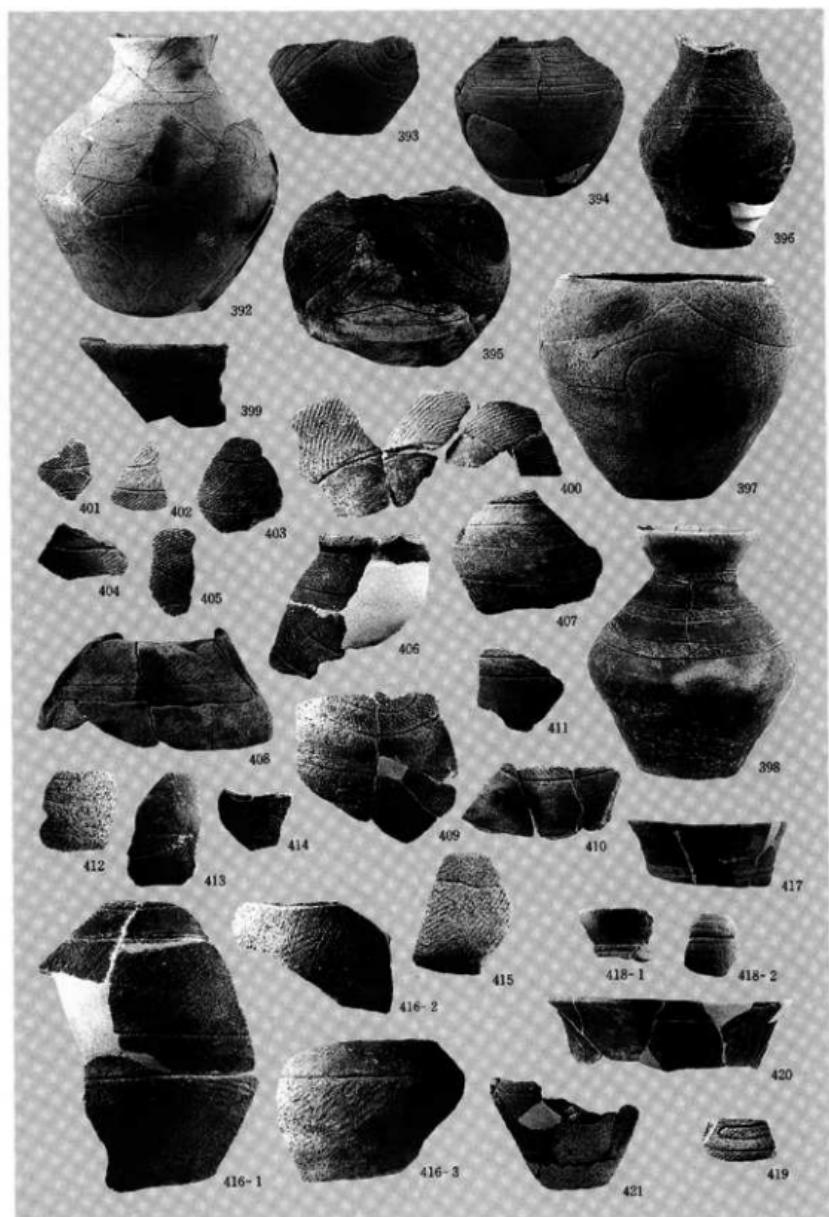
86 遺物包含層出土土器 (10) (番号は図に対応する)



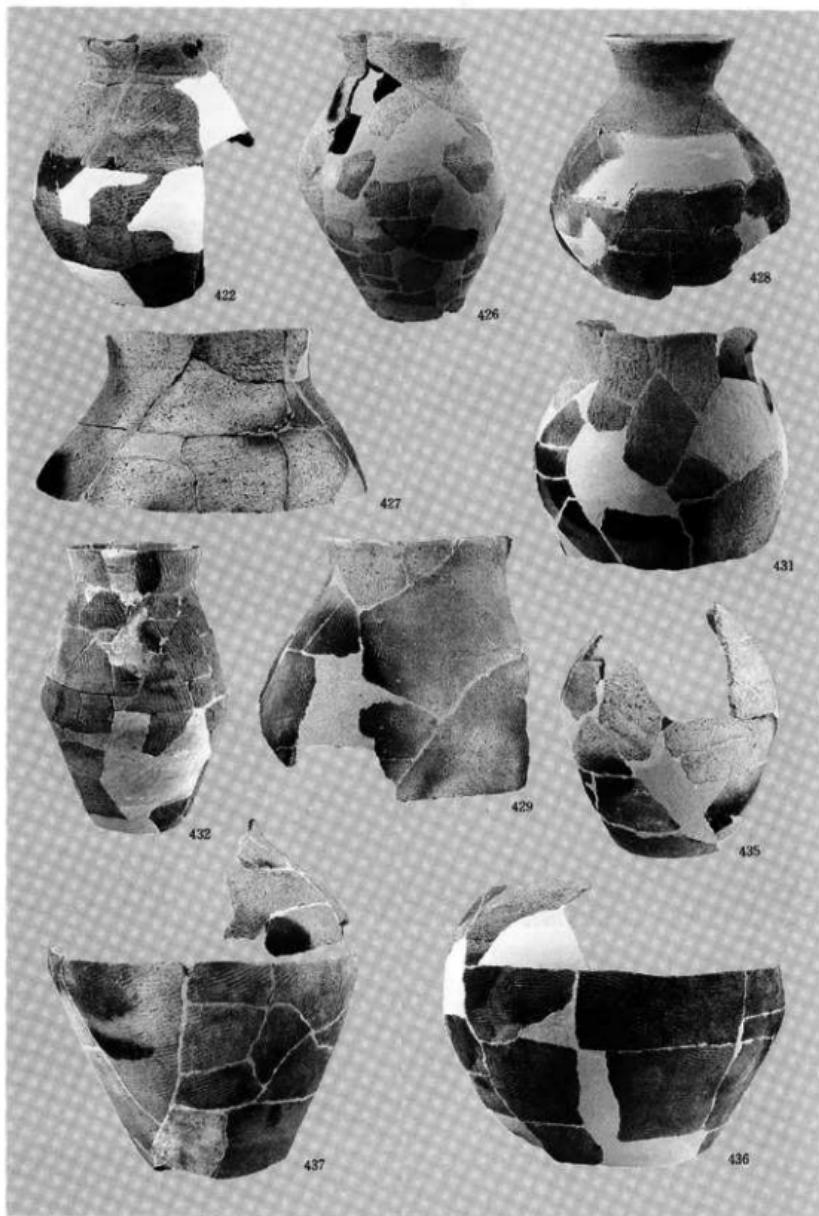
87 遺物包含層出土土器 (11) (番号は図に対応する)



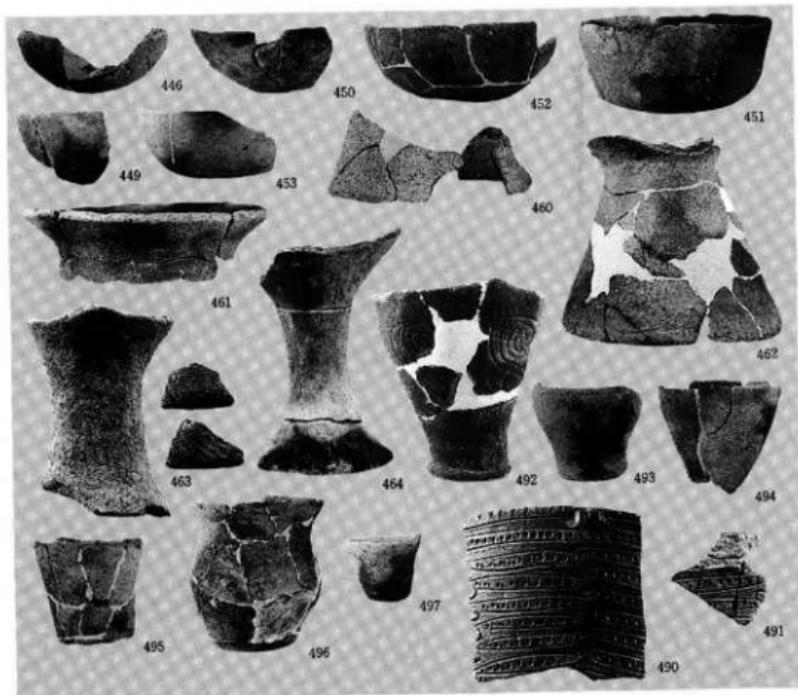
88 遺物包含層出土土器 (12) (番号は図に対応する)



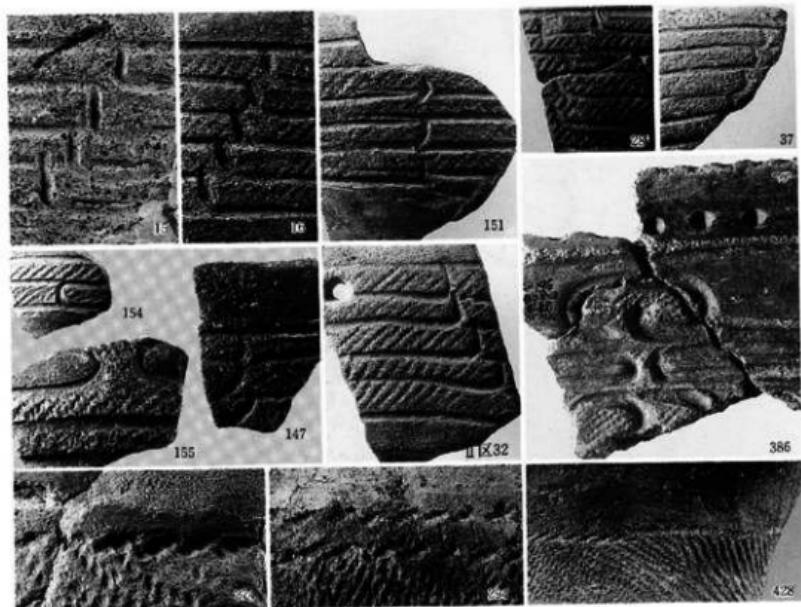
89 遺物包含層出土土器 (13) (番号は図に対応する)



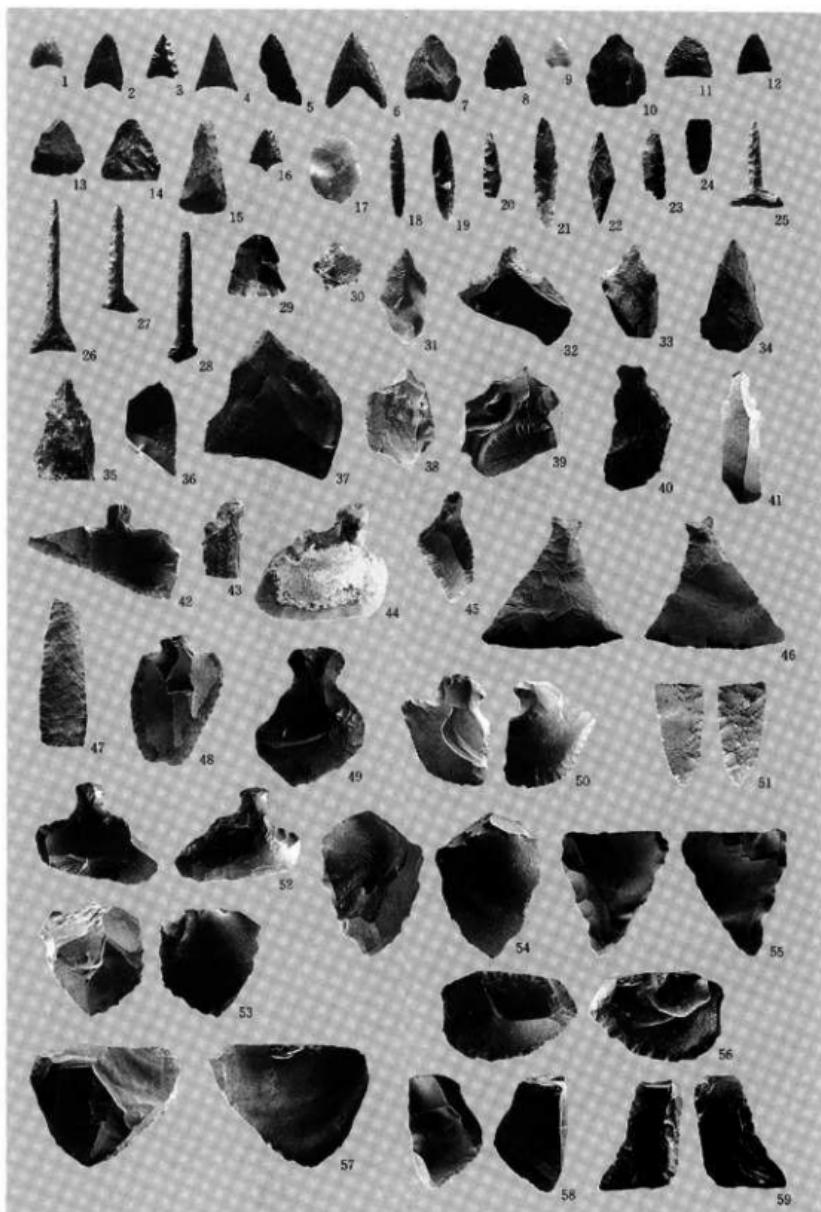
90 遺物包含層出土土器 (14) (番号は図に対応する)



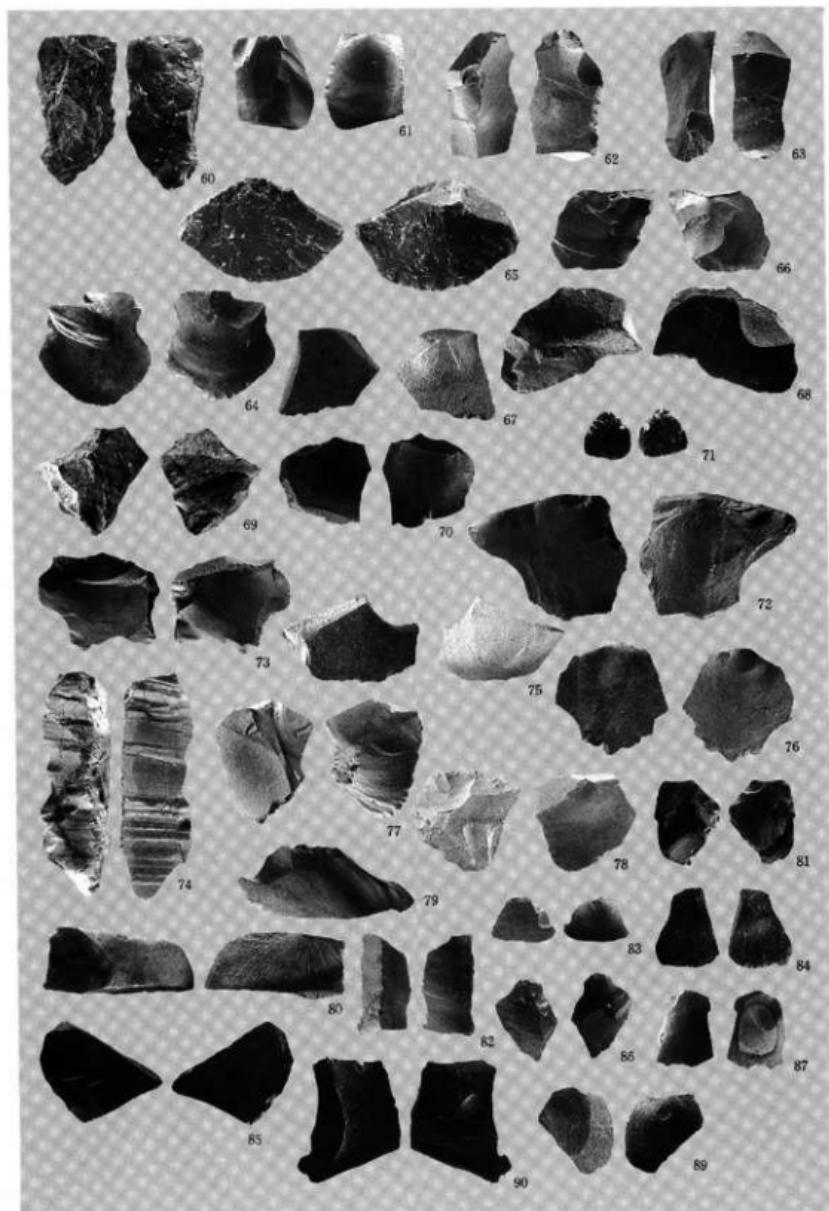
91 遺物包含層出土土器 (15) (番号は図に対応する)



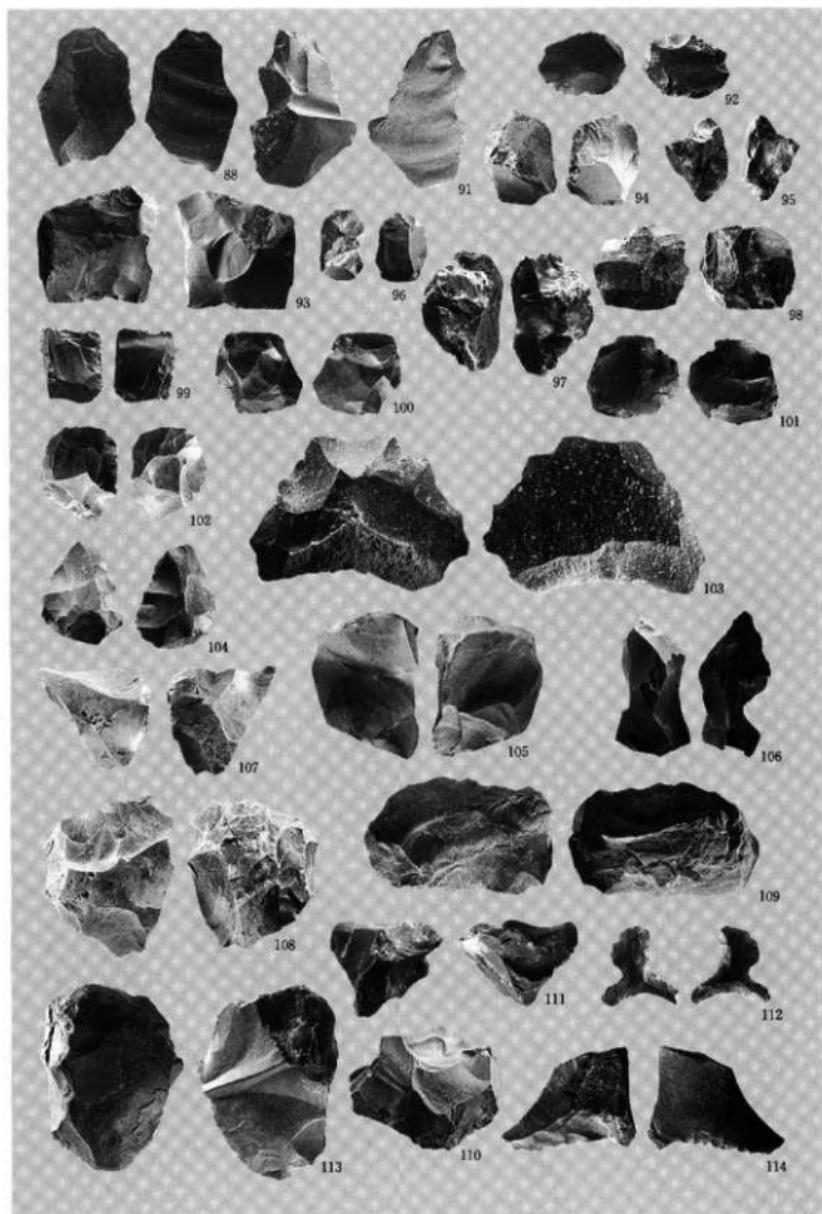
92 遺物包含層出土土器細部



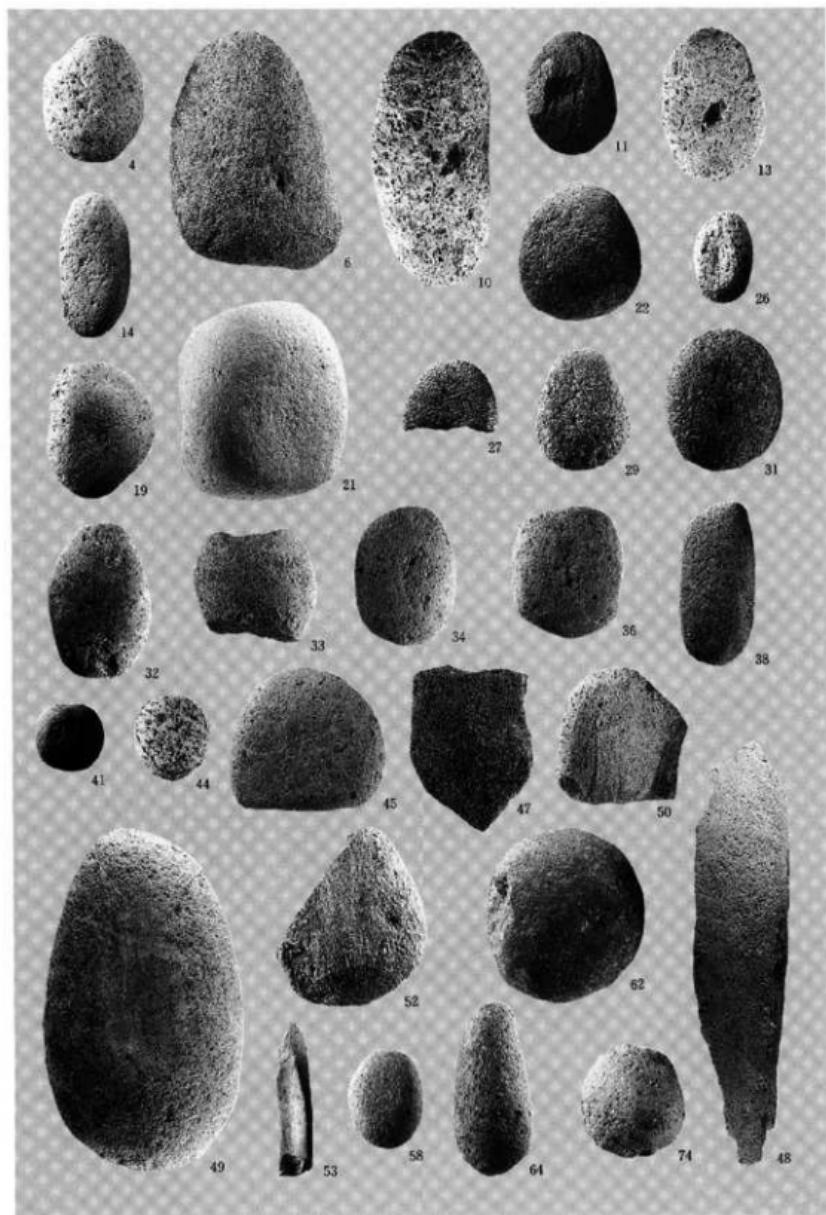
93 遺物包含層出土剥片石器（1）（番号は図に対応する）



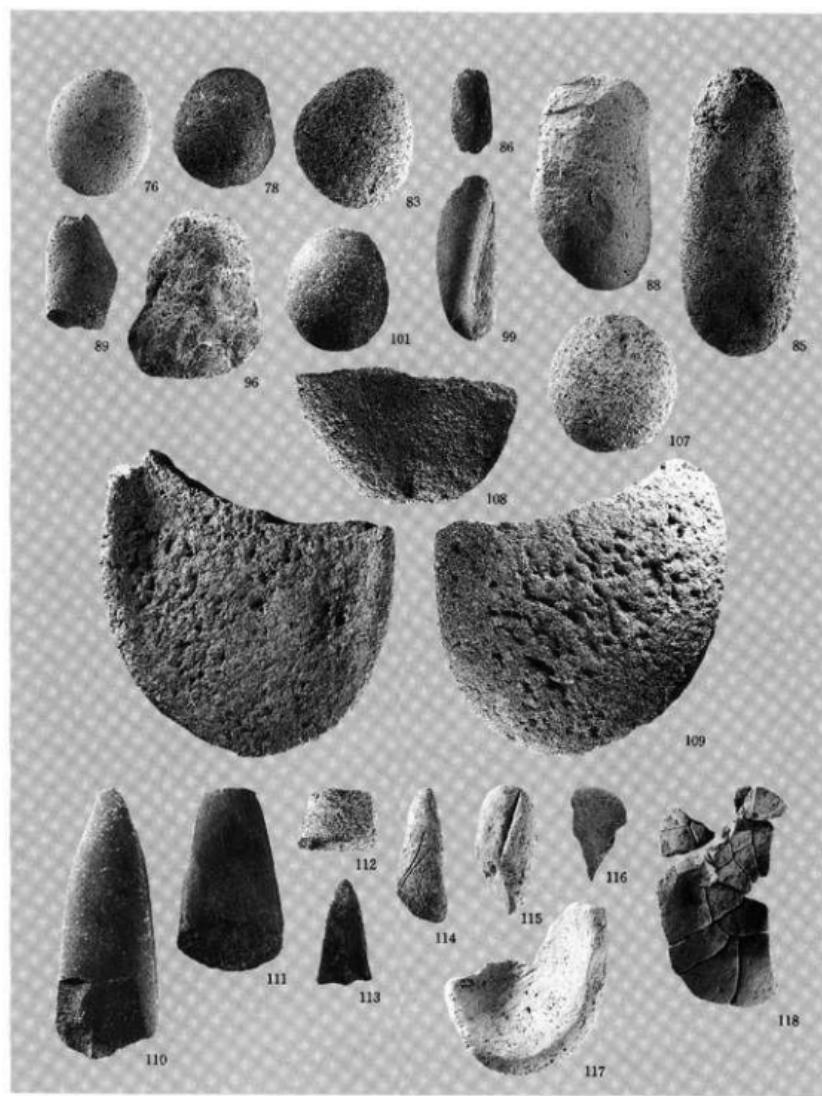
94 造物包含層出土剝片石器（2）（番号は図に対応する）



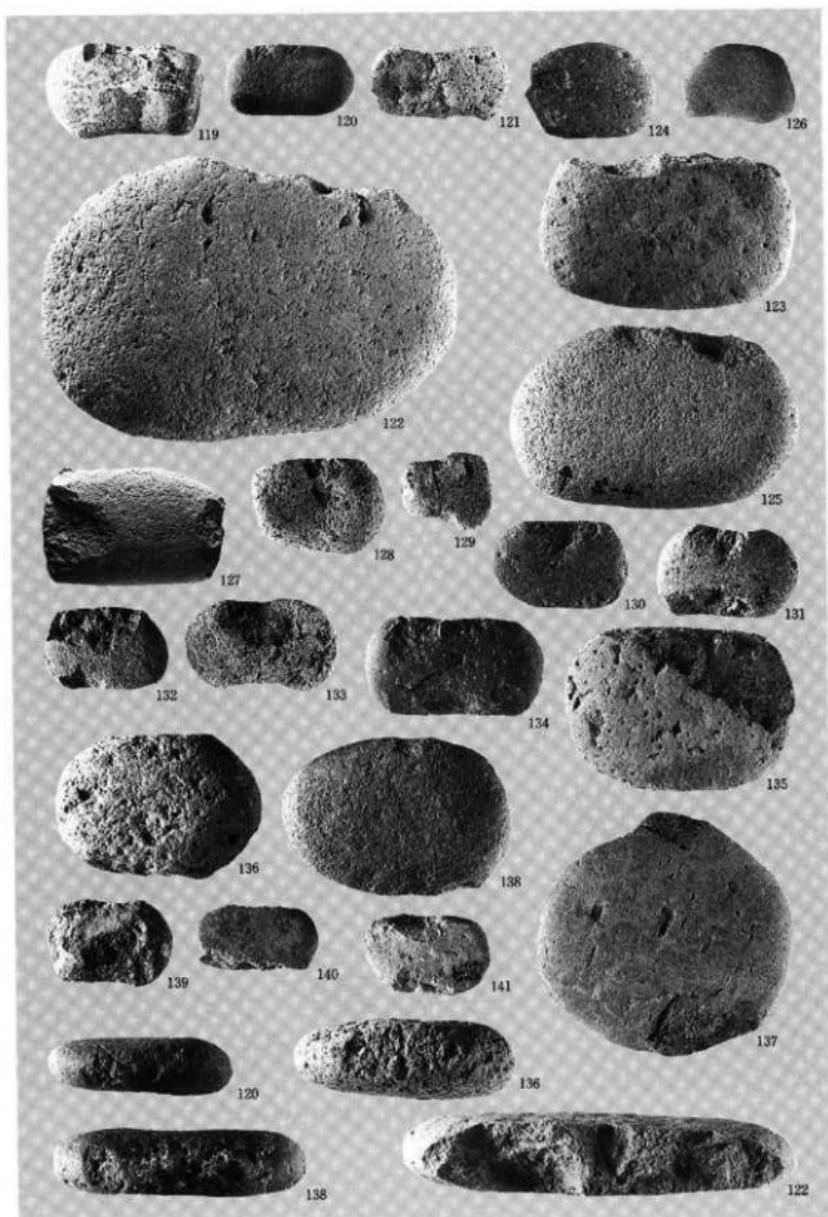
95 遺物包含層出土剥片石器（3）（番号は図に対応する）



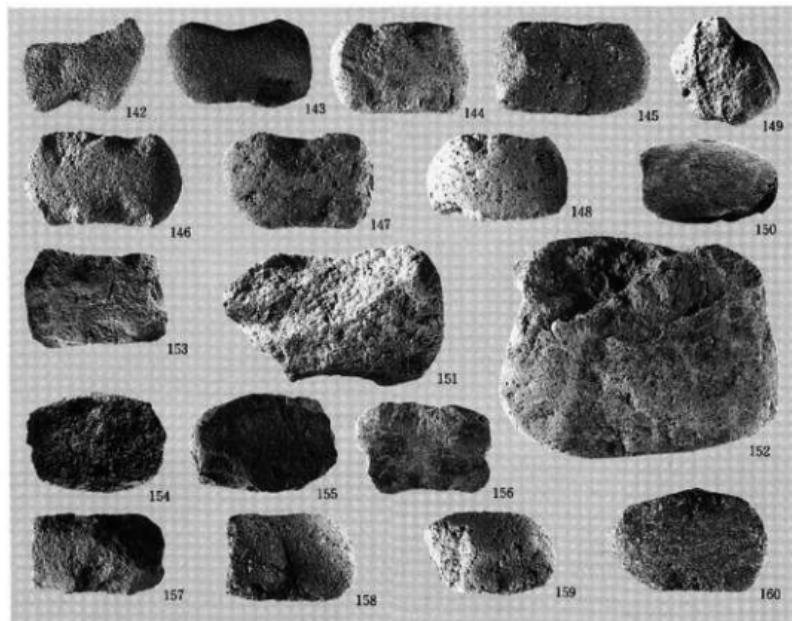
96 退物包含層出土礫石器（1）（番号は図に対応する）



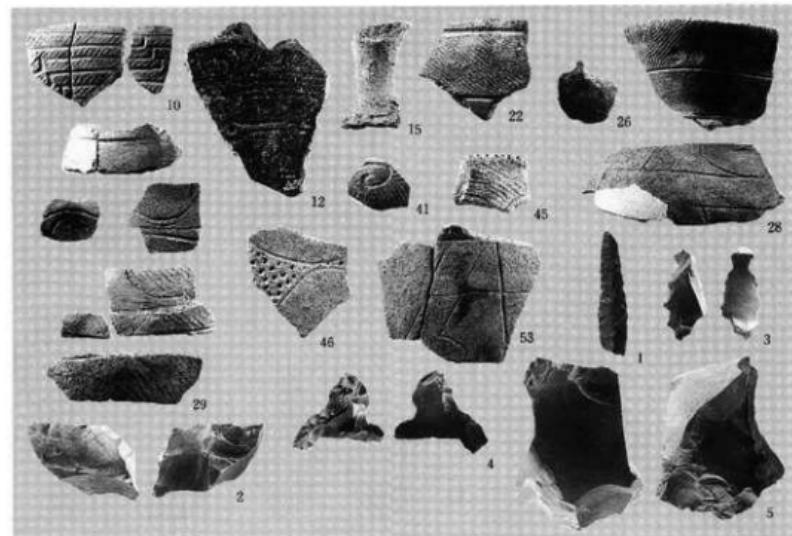
97 遺物包含層出土櫻石器（2）（番号は図に対応する）



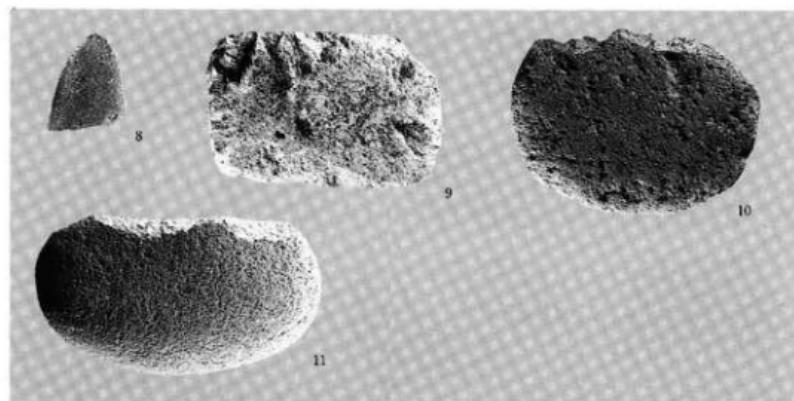
98 遺物包含層出土礫石器（3）（番号は図に対応する）



99 遺物包含層出土石器 (4) (番号は図に対応する)



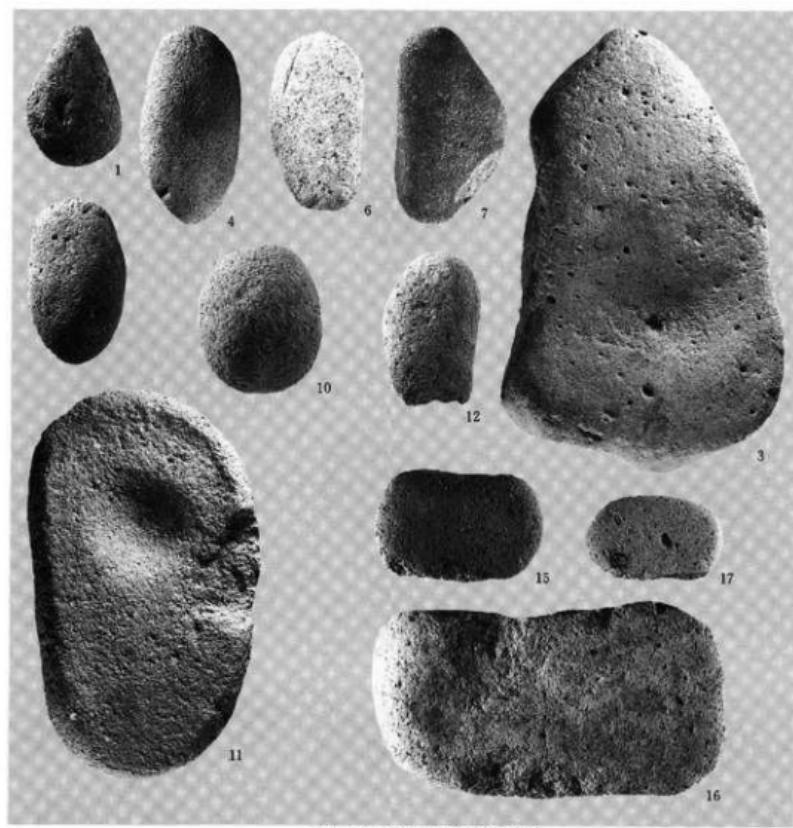
100 Ⅲ区各層出土遺物 (1)



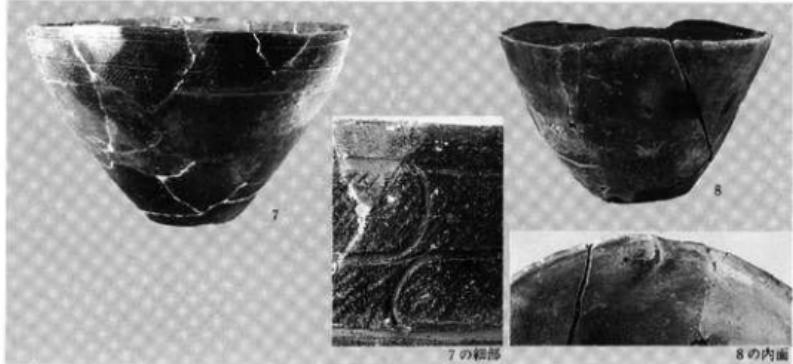
101 III区各層出土遺物（2）



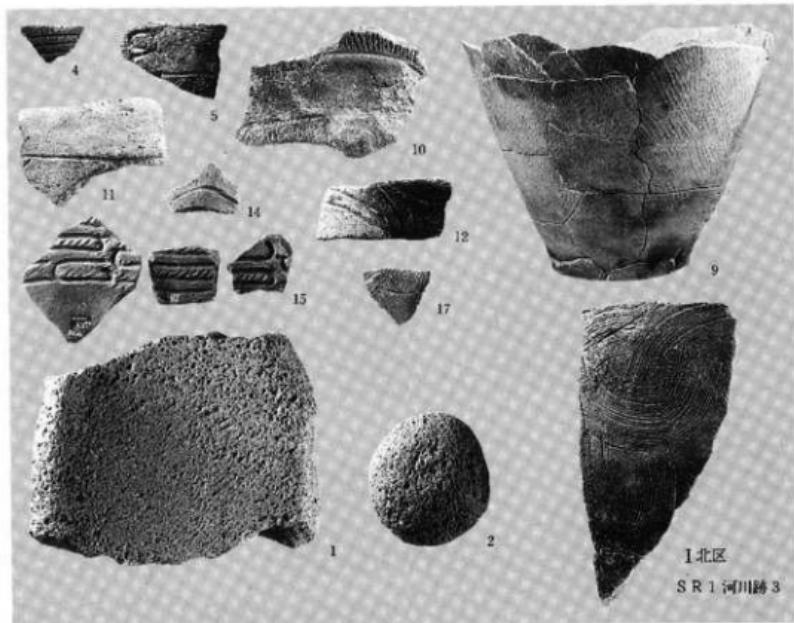
102 II区各層出土遺物（1）



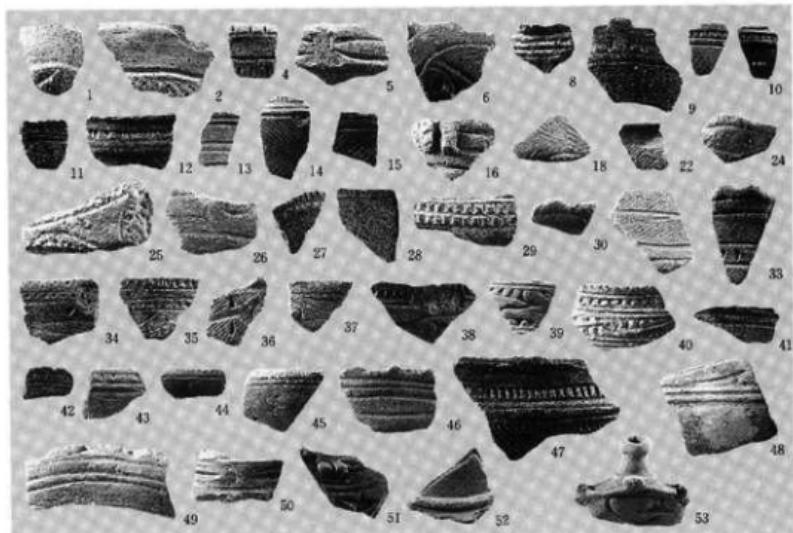
103 II区各層出土遺物 (2)



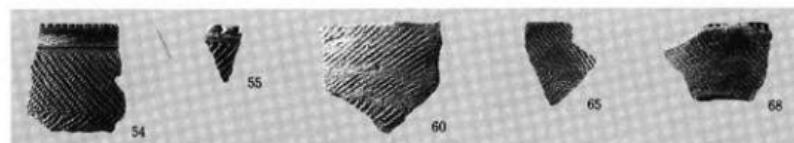
104 I北区各層出土遺物 (1)



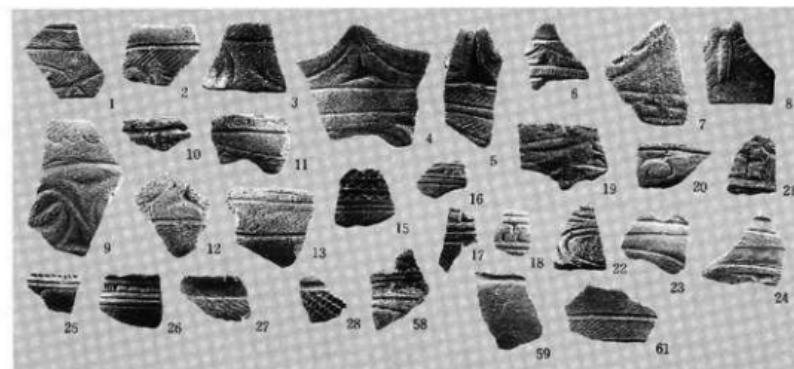
105 I 北区各层出土遗物 (2)



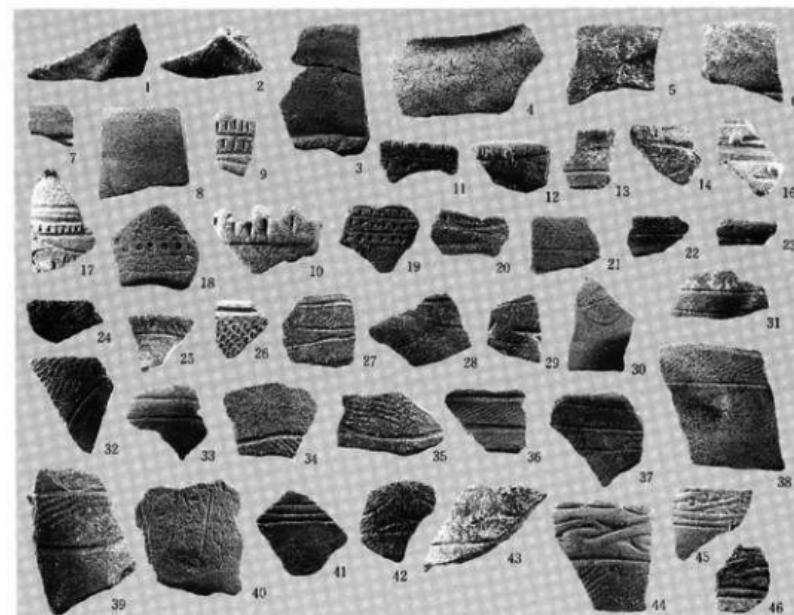
106 I 南区 7 层出土遗物 (1)



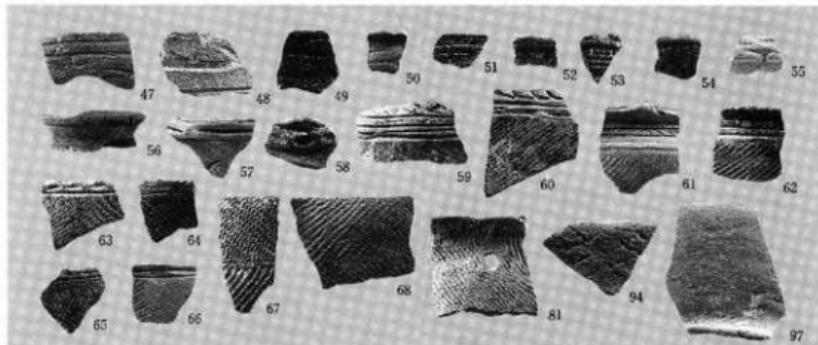
107 I 南区 7 层出土遗物 (2)



108 I 南区 7 层下部他出土遗物



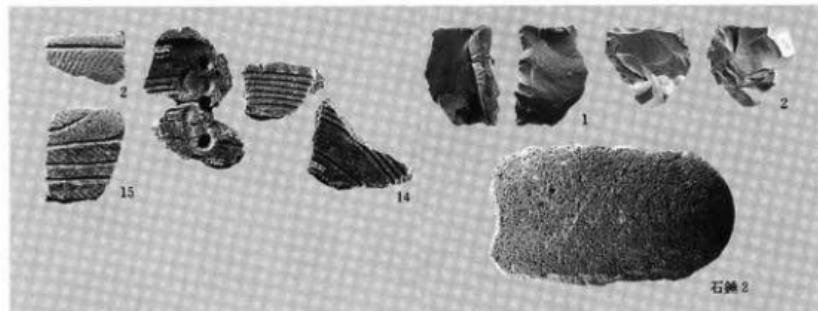
109 I 南区河川跡出土遗物 (1)



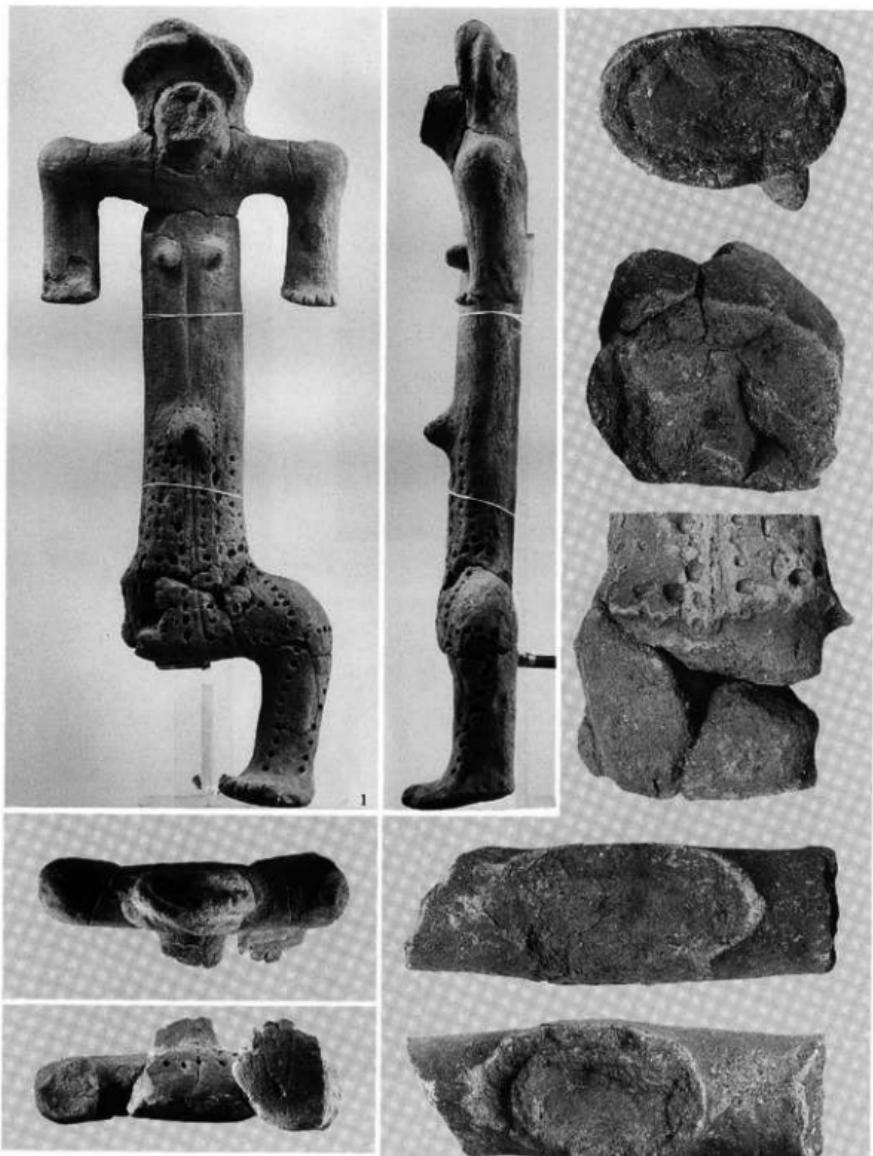
110 I 南区河川跡出土遺物（2）



111 遺構出土遺物



112 地区・層位不明の遺物



113 土偶(1)

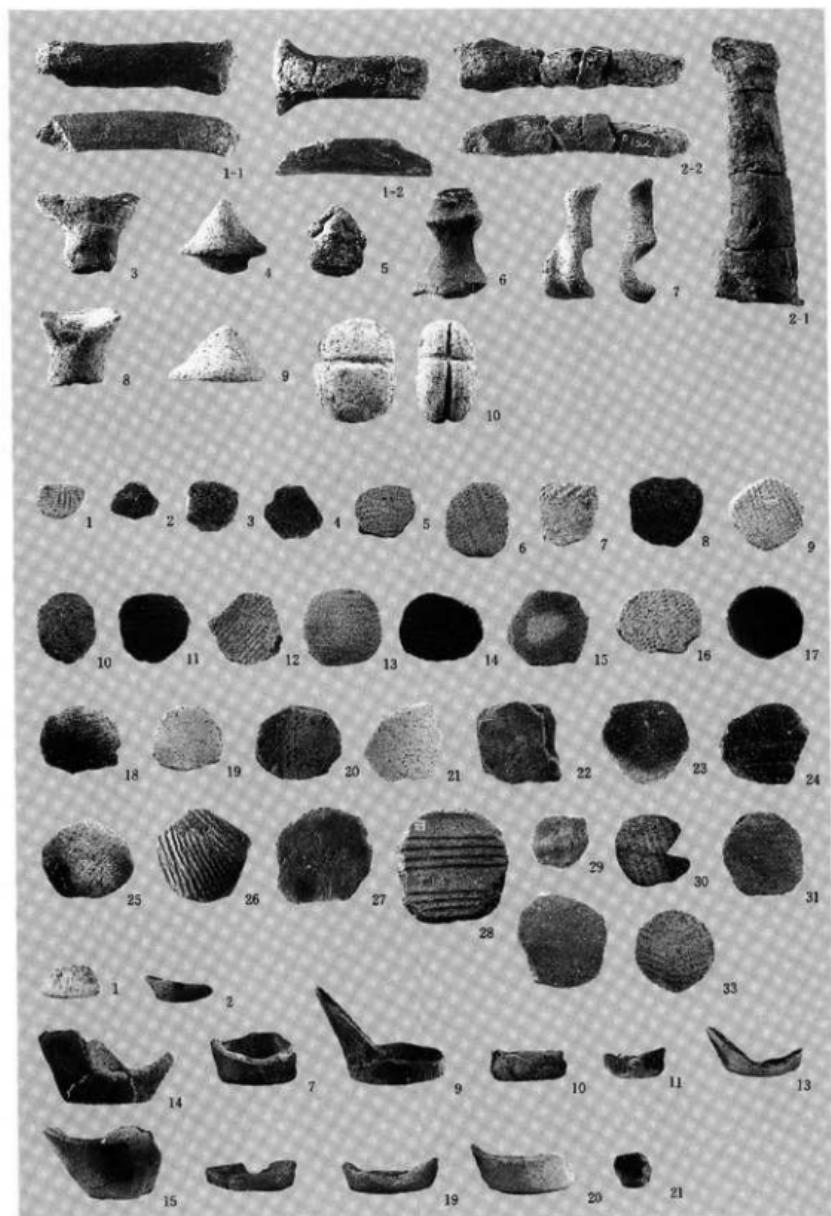
接合面の状況



114 土偶 (2)



115 土偶・土製品



116 土 製 品 (番号は各図に対応)

仙台市文化財調査報告書第193集

伊古田遺跡

—仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅲ—

1995年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

TEL 022-261-1111

印刷(株)東北プリント

仙台市青葉区立町24-24 TEL. 022-263-1166

